
いつかどこかの俺の世界

世空 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかの俺の世界

【Nコード】

N3137X

【作者名】

世空 心

【あらすじ】

物語の世界に憧れた、そんな俺は、自分自身が描いた物語の世界の中に入り込んでしまう。そこで出会ったのは、独りの少女だった。「もし、神様が居たらね？ 何を思って、この世界を創ったんだろうって、そう、思うんだ」 神様の立ち位置に居る一人の少年と、世界の中に住む一人の少女を中心に、主人大好きな使い魔やマツドな人や空気読めない子や不良っぽい子等がお送りする、シリアスだったりコメディが入ったりする物語。

プロローグ「全ての始まり」

物語の世界に憧れた。

それはいつからだったのか、もう俺は覚えていない。ただ、気づいた時には自分で考えた世界を書きだしていた。

剣を振るって戦う英雄だとか、未知の力を操る魔術師だとか、居るはずのない生き物たちだとか、そんなものに憧れていた俺は、その想像ができる限り、ノートに書き込んでいった。学校での生活や部活動に時間をとられながらも、いつの間にかそれらはノートの山になっていく。

「……I……ie……」

そして今、俺は最後のノートに文章を書き込んでいる。授業で使ってるようなものとは比べ物にならないぐらいに細かく書かれているそれは、買って間もないながらも一種の年季のようなものを漂わせていた。

ようやく、最後の一文が、ちょうど最後のページの隅っこにぴたりと収まる。

「いよっしゃ！　ようやく完成だぜ！」

書き上げた喜びの、その勢いのままに立ち上がって蛍光灯の光を弱めた俺は、同じようなノートが詰め込まれているバッグにソレを詰め込んで、抱きかかえるように持ち上げた。部屋の外に声が漏れないように声を上げていると、自分自身が描いた世界の、その産声を代わりにあげているような、そんな気分になる。その時だった。

「ん？」

声を、聴いたような気がした。自分が呼ばれたかのような、そんな感覚をつけた俺は、バッグを抱きかかえたまま振り返るが、周囲には人影などあるはずもない。

「空耳……か？」

そう、結論付けた。そして俺は、少々の倦怠感と共に、瞳を閉じてベッドに仰向けの姿勢で倒れこんだ。

その直後、目を閉じている筈の俺の目に、不鮮明な映像が飛び込んできた。赤く塗られた荒野に、旧式のテレビにありそうな砂嵐と共に吹く風、映像。地平の向こうまで見渡せそうなほどに遮蔽物のない情景の中に、一組の甲冑がオブジェのように鎮座していた。

剣を垂直に地面に突き刺し、それを寄る辺にするかのようにもたれかかるその鎧は、傷つきひび割れ、防具としての寿命はとうに迎えている。赤さびた汚れの漏れ出すその隙間からは、色の着いた靄が滲み出ていた。

そして、声が聞こえる。不鮮明だが、先ほどよりもはっきりと。

「神よ　その御身、真に　ならば　」

鎧の人物のこえだろうか、そう思われる砂嵐交じりの音声。優しげな深みのある低音の売れに、意思の強さが垣間見えるような、そんな印象を受ける声だった。砂嵐が、激しくなる。

「どうか　を　だろうか」

その言葉を最後に、映像はふと途切れてしまった。

いつまでたつても、ベッドは俺をとらえてはくれない。そんな、妙な浮遊感と瞼の裏の暗闇の中、俺はゆっくりと瞳を開けた。

そんな俺の目の前に広がっていたのは、心地よい陽気に満ちた青空だった。

「つて、何でさあああ!?!?」

そんな叫び声と共に、重力を思い出した俺の体は、地面に向かって落下していった。急な事態に混乱した俺は、ただただ身を固めて目を強く閉じ、迫る衝撃にそなえて身を丸める。

どこかの森の上だったのだろうか、背中に軽い衝撃を受けると枝が折れるような音が耳に入る。同時に枝に生えている数々の葉っぱが、俺の体を撫でる様に包み込んだ。そんな、枝の上に落ちて、折れて、落ちてを繰り返し、減速していった俺の体は、数十秒の間を経てようやく地面に落下した。

「いつてえ……くそ、一体何が……」

体の節々に痛みを感じながらも、衣服にまとわりついている葉っぱを払い落とす。混乱しつつも、俺は自分の置かれた状況を理解しようとして、頭についた葉をつまみつつ周囲を見渡そうとした。直後、人影が目に入る。

少女だった。

「え?」

それはどちらの声だったのだろうか、俺は目の前の少女の存在に驚いて、少女は突然落ちてきた俺に驚いて、そうして、俺たちは互いに視線を交わしていた。妙な感慨に塗りつぶされた時間だった。

少女の髪は長く腰まで伸びていて、その黒は木漏れ日を受けて艶

やかに輝いている。カソックにも似た濃紺の衣服を着ていて、そこから除く顔の肌色はその白さを以て、幼い顔つきながらも達観した何かを感じさせた。

だがそれよりも何よりも、俺は彼女の目　右目に惹きつけられる。深く濃い、人間が持ちえるとは思えない程に透き通った色彩の紅。よく見ると鈍く光っているようで、それは酷く俺の心を惹きつけた。

ああ、ここはそうなんだ　目の前のソレを最たる証拠として俺は、自分の身に起こった現実を理解できたような、そんな気がした。でも、やはり心は混乱していたのだろう。らしくない、臭い台詞が口からこぼれてしまっていた。

「綺麗な……………目だな……………」

それが、コトの全ての始まり。

第一小節「それは唐突なことだから」(前書き)

初版を見てた人は、何が違うか分かる……かも。

第一小節「それは唐突なことだから」

それは、唐突だった。

自分の知覚範囲よりも更に外に感じられる世界の歪み。その歪みから作られた波が、人ならざる存在の、その一部にのみ聞き取れる音となって広がっていた。

「!…今のは…」

その歪みの中心から、さほど遠くは無い場所、そこに居たある精霊が、その波を感知する。人ならざる存在

いくら中心から遠くは無いといっても、それは本来自分が知覚できる範囲の外。そのことにその精霊は首をかしげた。

「私の知覚範囲外からですか……ですが、この感覚は…」

その精霊は、懐かしいようなそうでないような、そんな感覚をその波動から感じていた。歪みが消えた後も、その感覚が残っている。

「何なのでしょう…」

気になる、という好奇心より、行かなくてはならないという使命感に似た何か感情として沸き起こる。自身が気づいた頃には、体はその中心に向かっていた。

この後、その精霊はその波動を感知出来たことを神に感謝することになった。

目の前の出来事に、思わず言葉を失ってしまう。

森の中を通る道。獣道と呼んで差し支えないような、そんな道を歩いていると、自分の目の前に叫び声と共に少年が落ちてきたのだ。枝が幾本も折れていく音と共に落下してきたその少年は。体中葉っぱまみれで、落下の衝撃のせいか顔を顰めている。

そんな急な登場に思考を停止させながらも、少女は僅かに動く一部分をもってその落下してきた少年を観察し始めた。自分と同じ黒い髪を短く刈りそろえ、やや逆立てている。？を基調としたその服装は見たことも無い様式をしていたが、それが動きやすさを求めたものであることは理解できた。その彼の傍らに転がっているバッグも、彼女の記憶には無い独特な形状をしている。

「いつてえ……つくそ、一体何が……」

苦しそうな面持ちのままですら呟いた彼は、体についた葉っぱを払い落とし始める。まだ彼は少女の存在に気づいてはいないようで、そこに視線をやるといふこともなかった。だが、彼が頭についた葉を取ろうとすると同時に周囲を見渡そうとすると、そこでようやく彼女の存在に気づいた。

「え？」

少年は大きく目を見開いて、頭の上の葉を掴んだままの恰好で固まった。そのままお互いが見つめあう妙な数秒間ができて

不意に、少年が小さく口を動かした。だがそれは非常に小さな声で、聞きとることが出来ない。

「
」

「え？」

少年のつぶやいた言葉に、少女は反応する。その疑問を表す声に、少年は意識を現実に戻したのか、呆けていたその表情を戻すと、気恥ずかしそうに頭を掻きながら立ち上がった。

「ああ、いや悪い悪い、何だか驚かせちゃったみたいだな、これが」

そんな、気の抜けるような台詞。今まで形成されていたやや張りつめた感のある空気が一気にほどけたようで、少女は体の力が緩むような、それでいて何故か呆れ返るような、そんな気分になった。本来持つべきだったのであろう警戒心も、少女はこの少年には働かない。

だがそれでも、少女は少年に訝しむ様な視線を送ると少年に質問をした。

「貴方……何者？」

少女の問に対して、少年は一瞬だけ首を傾げると、明るい調子でこう答えた。

「俺か？ ああ、俺は
　　ってい……………」

またもや、少年が凍りついた。少年の名乗りを聞き取ることができなかつた少女は、眉をひそめる。

「わ、わりい、えつと……あ……ラスティハルト」

そう、言い聞かせるように、軽く目をつぶってそういうと、視線を再度少女に合わせた。

「……ラスティハルト・ジーンっていうんだ。ちょっと長めなんで、ラスティって、呼んでくれ。それで、君はなんて言うんだ？」

聞きたいことはそれではなかったのだろう。その少年、ラスティの嬉々とした様子での自己紹介に完全に毒気を抜かされたのか、少女は小さく気づかれぬようにため息をついた。しばらく間があって、一言、自分の名前だけを彼女は告げる。

「……ティアマツト・マキナ」

「そっか……あのさ、いきなり申し訳ないんだが……」

少女、ティアマツトの名前を聞くと、ラスティは気恥ずかしそうに自分の後頭を掻くと、地面に落ちていたバッグを拾い上げてこういった。

「……最寄の町にさ……その、どうやって行けばいいか教えてくれないかなって思ってたが……」

「……何故貴方は、上から落ちてきたの？」

「う……いや、あのさ、俺道に迷っちゃまって、それで木の上から見渡せば町か何か見えるかなって思ってたさ、これが。んで、上まで登ったはいいんだが、さっきみたいに落ちちゃってな？ いやあ、

落ちた瞬間は焦った焦った」

今度こそ、ティアマツトは拍子抜けしたとばかりに大きくため息をついた。その横でラストイも安心したように深く息を吐いているのに、彼女は気づくことは無かったが、視線を彼の方に戻すと、その視線を逸らしたのちに言った。

「……着いてきて。途中でわかれる道があるから」

「おお、マジか！　ありがとう！」

無表情に歩みを進めていこうとするティアマツトに、非常に嬉しそうな様子で礼を告げたラストイは、バッグを背負うとその隣に並び立とうとするように、彼女の後ろを追いかけ始めた。

最低限の舗装がされた道の上。修道服にも似た意匠の紺色の衣に身を包み、腰まで伸びた黒髪を吹く風と共になびかせてティアマツトは歩いていった。

荒い土を蹴るブーツにつく砂埃が、彼女が歩いてきた道のりを物語っている。

「変な人」

森が拓けた所で、そう、何か思い返すように唐突に彼女は呟いた。歩く距離が積み重ねられていく内に、周囲に見えていた木々は少しずつその姿を消していき。代わりに舗装された石タイルと幾分かの人影が姿を現してくるようになる。

そうして目の前に、門が見え始めた。

その門を構成している光沢の無い灰色の石材は、見るものに年季を感じさせる。ただし、そこには古臭さが感じられず、それがまた荘厳さを演出していた。城の城門でも、これほどのものだろうかと一瞬思わせるそこには、門の上から垂れ幕がかかっている。それが、校門の持つ威厳とギャップを感じさせ、いささか滑稽に見える。

『私立ハルバルト学院』

そう、風に棚引く文字が、彼女たち

新入生を迎えていた。

門に近付いていくように歩いていく彼女の周囲の生徒たちは、これから待ち受けるであろう学院での生活に夢を膨らませ、友人たちと会話を交わしている。そんな喧騒には一切の関心を向けることなく、彼女は人ごみを通り抜けた。

校門を通るときに、その表情に変化が見られたが、それが何を意味するかはわからない。

ゴシック様式を思わせる石造りの外観の校内に入ると、受付を任されたと思しき上級生が少女を出迎えた。その人物に荷物を預け、自身の名を告げる。するとその生徒から、案内の冊子と学院生であることを証明するバッジが手渡された。左右非対称の幾何模様が描かれたその裏には、持ち主の名前が刻まれる。

T i a m a t t ・ M a x i n a

そう刻まれた文字を見て、

彼女はその表情をわずかに暗くした。

第二小節「式と箱舟」

ティアマツトがこの学院にたどり着いてから幾分か後、その正門の前には疲れ果てたラスティハルトの姿があった。彼が今まで乗っていた馬を引く係員の男性も、その後ろ姿を僅かばかりの同情の念を込めた視線で見つめている。

「あゝ、最悪だ。何でこんなことになるかな……」

乗り慣れない馬での移動で疲れ果てた様子の彼は、もう通る人数が僅かになっている校門を後にして、受付に向かう。もうそろそろ仕事も終わりだと気を抜きかけていた受付の先輩に向かって、ラスティは先ほどまでは持っていなかった紙を提出し、自分の名前を告げた。そして手渡されるバッジ。裏に書かれた文字は *Lastie halt・Xeen*。

「これが、生徒証明の物になるってことか。何かセキュリティでも組み込まさってるのか？」

そんなことを呟きながら、彼はこれから入学式が行われるという講堂に向かって、廊下に設置された標識通りに歩き始めた。

天井までが非常に高く、石造りの構造体が立ち並び廊下には、非常に高価そうな絵画や彫刻等の芸術作品の数々が陳列されていた。ここに来るまでに写真でしかお目にかかったことのないような価値のある物たちを前に、知らず知らずのうちに視線が泳いでしまう。小さな声で、語りかけるように呟いた。

「流石は『お金持ち学校』、沢山金かけてるなあ……」

教育機関の施設の規模だとは到底思えないこの学院をそのように評するラスティ。すると突然、彼は誰もいないはずの隣に向かって語り始めた。廊下には誰の人影も見ることにはできないのだ。

「ああ、ここはな……7年前に空城になった城を、この校長が異常なまでの安値で国から買い取って、それを学院にするために大規模な工事をしたそうだ」

そう語る彼の表情はどことなく嬉しそうで、こういったことが好きなのだろつということを思わせる。姿の見え無い何者かが彼の隣に居るのだという風に、彼は小さ目な声で説明を続ける。廊下に人影が無いことには、一応それを見計らって話しているのだろつ。

「何でもこの校長は国王と仲がいいようでさ、かなり協力してくれてたみたいだな。何でも次世代を担う新しい人材を育てるためだつてさ。貴族・平民を問わずね」

ヨールティアと称されている大陸の、西部に存在する中規模の王政国家オステレイ。その北部にこの学院は建っている。貴族、平民関わらず教育し、国を担っていく人材を育てるという目標を掲げているこの学院には、人口比で一对一の割合で貴族と平民の生徒が存在していた。

「時代の変化を感じて、貴族だけでの国家の運営に限界を見出したか……俺のいたところなら、さぞかし賢王とたたえられただろつな」

そんな皮肉げな言い方とは裏腹に、その表情には影が無い。言葉はともかくとして、感心しているのは本当のようだった。

そうこうしているうちに、彼は講堂にたどりついた。開かれた、

その分厚く異様に高い扉の向こうには、同世代の少年少女たちが、立食パーティーとしゃれ込んでいる。平民も混ざるといふ事からの配慮だろう。テーブルに並ぶ料理たちは、サンドイッチなどの手で持って食べられるものや、とにかく食べ方をあまり気にせずにいられそうなものばかりが並んでいた。

貴族と思われる人たちは準正装。平民と思われる人たちはそれなりに高そうな衣服を着込んでいる。お金持ち学校という異名はここでも発揮されていて、四桁の人間が軽く収容できるであろう床面積に、廊下よりも更に高い天井。光すら、シャンデリアに彩られているのではないかと錯覚させるような光景が、そこに広がっていた。

ジャージでいる自分が、不釣り合いだと思えて仕方がない。

そこに居る生徒たちにも、ラステイは興味を抱いている。彼らを見るその表情には、まるで動物園にきた少年と同じような光が宿っている。流石にはしゃぎはしないのだが。

「（おお！すげえ……………ブロンドだぜブロンド。俺初めて金髪碧眼なるものを見たぜ……………お、あれがシルバーブロンドか……………ん？なんか今生物学を完全無視した色が見えた気がしたんだが……………）」

興奮が抑えきれない様子であたりを見回しているそのしぐさから、こういう光景が日常ではない事がありと感じられる。そうして時折サンドイッチを食べつつ散策していると、視界に懐かしいと感じられる色が介入してきた。

「（お！俺以外の黒髪を発見……………）て、あれ？」

その人影は、先ほど出会ったティアマツトのものであった。やわらかい曲線が彫られたやや細めの白い柱に背を預け、広場をずっと

見つめている。その表情は、何処と無く険しい。

「あいつここに居たのか……って、そういやティアマツトが歩いていった道って学院方向だったもんな。むしろ新入生と予測しとくのが普通か」

そう一人で自己完結をしていると、ふとあることが気になった。周囲の人口密度が明らかに少ないのだ。円を描くとまではいかないが、彼女の周辺に人が全く居ない。まるで人避けの結界が張られているかのように、そこには空間と呼べるものが出来ていた。

「（避けられてるのか？ 確かにあのムスツとした雰囲気は近寄り難いと思うが、余りに不自然な気がする……）ま、とりあえず挨拶しとくか。一応世話になったんだし」

そう言いながら、ラスティは彼女に向かって、柱の後ろから回り込むように、近付いていった。

「はあ」

先ほど手渡されたバッジを手で弄びながら、ティアマツトは講堂の片隅、柱に寄りかかるようにして立っている。その眼前には、料理のつたテーブルが並び、新入生たちが思い思いにその交流を広

げている。乳白色の大理石を初めとした白を基調とした内装が、シヤンデリアの灯りを受けてうす赤く色づいている。

それを辟易した様子で、彼女は眺めている。周囲には誰も居ない………筈だった。

「わざわざ、入学式」にこんなに料理を用意しなくてもいいでしょうに」

「まあ、お金持ち学校だから仕方ないんじゃないか？」

「っ！？」

独り言に対して、突然死角????殆ど背後????からかけられた声に驚き、彼女は危うくバッジを落としかけてしまう。何とか手にバッジをおさめた彼女は、その表情をあからさまに険しくさせ、振り返る。

「おっと、わりい、驚かせちまったか？」

そこに立っていたのは、背の高い黒髪に、黒を貴重とした同意匠の上下の衣服???ここに来る道中で出会った……いや遭遇した少年、ラストイハルトだった。

背後から突然話しかけられ、謀らずとも恥ずかしい姿を見られてしまったことに若干顔を紅潮させながら、彼女は彼が発した‘驚かせたか’という質問に答えた。

「いきなり後ろから話しかけられたら、誰だって、驚く」

口調こそ意識して穏やかだが、そこには怒気が見え隠れする。だが彼は、そんな彼女の視線を受け流して、涼しい顔で答えた。

「いやあ、済まない。正直悪気はあったんだが、ここまで驚くとは思わなかった」

悪びれた風も無く、少年は苦笑いを浮かべながら弁明にもならないことを口走る。そんな様子にすっかり毒気を抜かれてしまったティアマツトは、肩を落として溜め息をついた。今日初めて会ったはずなのに、何故こつも調子が狂わされるような気がするのだろうか、そう、彼女は思案する。

「それで、なにか私に用事でもあるの？」

追求はすまいと、先ほどのことを無視することにしたティアマツトは、素っ気無い態度で少年に接する。ラスティの方は、そんな態度を気にした風は無いが、その反応には一言言わせて貰っていた。

「とうかさ、まずは俺がここにいることに驚こつぜ？」

確かに、ラスティとティアマツトは、ここに来る途中、近くの町への分かれ道の所で別れたのだった。だがこつして目の前に居ることを考えると、どうやら新入生としてここに来たようであった。

「確かに驚いたけど、特に気にすることでも無いもの」

向こつこの友好的な態度にも関わらず、ティアマツトは素っ気無い態度でラスティに対応している。だがそんなことをラスティのほうも相変わらず気にする様子は無い。ただただ、楽しそうな表情を浮かべたままである。

「まあ、俺にも色々あつてな、これが……」

学院への道のりを聞くために町に向かったのだろうか、そう、彼女は考えたが、すぐにその考えを振り払う。聞くならば初めから学院への道のりを聞いてくるはずなのだ。

「（……でも、私には関係ない……）」

こうして遅れずに間に合っているところを見ると、馬か何かを飛ばして来たのだろう。そう、彼女は考え　それで思考を終えることにした。

「……まあ、俺ここに知り合いなんて居ないし、暇だなぁって思ってたならティアマツトを見つけたんだよ。どうせなら挨拶しとこうかなってさ。ま、とりあえずよろしく、な」

気を取り直したかのように背筋を伸ばした彼は、ティアマツトに右手を差し出す。それが握手を求めていることに気付くのに一瞬間があり、また呆けた表情をしてしまったが、無事（？）彼女はそれに応じた。

その時彼女は、ラスティの背後に違和感を覚えた。何も無いはずのその空間を、彼女は凝視する。

その視線の先には、大理石の壁があるだけのはず……だった。

「?…?…?」

気を配らなくては気づかないような小さな歪み、風景が捻じ曲がっている。それはまるで、透明な何かがこの人物の背後に存在しているようだ、そうティアマツトは感じた。

そこに視線を向けたままで、彼女はラスティに疑問を投げかける。

「あなたの後ろ…何か居る？」

それは予想外の反応だったのだろう、一瞬目を見開いたラスティは、思い出したかのように呟いた。

「そつか……ティアマットには視えるんだな。……アーク、可視光線の透過率を維持したまま概念視へのステルスを解除してくれ」

そう言ったラスティの背後に現れたのは。人の上半身のシルエットを持つ半透明のナニカだった。周囲に何の反応も無い以上、他者には見えていないのだろう。

「コイツも紹介しとくよ、俺の使い魔のアークだ」

主人の紹介にあわせて、アークと呼ばれた存在がお辞儀をする。

その様子を、彼が現れた時とおなじように見つめるように見ていた。一般にいわれる”魔術師”という存在。彼らは使い魔として、何かしらこの世に存在する生命を従える事がある。狼や鳥といった動物や、サラマンダーやワイバーンといった魔獣。力量のあるものならアップサラスや精霊といった幻想種・世界種と呼ばれる超上生物を従える者さえいる。

ポリゴン体でかたどられたかのようなそれは、歪な輪郭をしている。ただ人の上半身を模しているただけは分かった。だがそれが、果たして何のカテゴリに属するのか彼女には検討がつかない。

「……………見たこと無い種ね」

「あ、意外と驚かないんだな」

「確かに驚いたけど、人の使い魔に…驚いているようじゃダメだ

もの。使い魔を持つ魔術師は少なくないから」

正直相当驚いていたのだが、ラスティの発言にこれ幸いと便乗する。苦笑いを浮かべるラスティは、気付いているのかそれとも気付いてないのか分からなかった。

「まあ何にせよ、正体は秘密だつてことで」

「別に構わない」

相変わらず、対応は素っ気無い。

結局そのまま、ラスティとティアマツトは話し続けた。ラスティが話して、ティアマツトが素っ気無い対応で返すそういう形が大半だったが、後半になってくると次第に、ティアマツトの方から話しを持ちかけることもでてきた。ただ、それは殆どラスティへの質問だったが。

そしてしばらくすると、式が始まる様子が見受けられた。どうやら入学予定者が全員到着したようである。その周囲の変化に、ラスティが反応した。どうやらこの会話もここまでのようだった。

「おっと、もう時間か……俺はもう行くわ。じゃあな」

「ええ」

会話を交わすようになって、結局ティアマツトの素っ気無い態度は変わらない。

（まあでも、いいんじゃないか？）

そんな心の呟きを、使い魔にすらこぼすことなく、彼はその場を

後にした。

第三小節「夢に見ていた」

式が始まり、講堂の前方中央に備え付けられた巨大な教卓とも形容すべきものの上で、ラスティにはさして興味のないお偉い三の話というものが始まった。暇になりそうだと思ったラスティは、自身の使い魔と会話をすることにした。

「（アーク）」

特殊な契約を結んだ二者間で可能となる思念のみにおける会話、念話を行い、彼は自身の使い魔の名を呼ぶ。空気を媒体としないために、周囲に居る生徒たちにはその声が聞こえることは無い。傍から見たなら、熱心に話に耳を傾けているように見えるだろう。

「（はい）」

アークと呼ばれた、透明になっている彼の使い魔がその呼びかけに答えた。電子音的な響きを持った中性的な声、男とも女とも取れそうな声が脳内に響いた。ラスティの感じる限りにおいて、アークと呼ばれたその存在の気配が強くなる。

「（なあ、気づいてたか？ あいつ……………ティアマツトさ、俺たちが来たとき、周りに誰も居なかったよな）」

「（確かにそうですね。ですがマスター、わざわざ後ろから気配を殺して話しかけるのはいかなものかと思うのですが……………）」

「（まあいいじゃないか。そんな細かい事は気にする必要はないん

だぜ、これが」

「（いえいえ、そうではなく、話しかけるのもう少しタイミングを見計らった方が驚いたのではないかと私は思うのです）」

そんなことを言うアークの口調は、かなり真剣なものである。どうやらアークは悪戯好きなんだろうなと、主であるラスティは認識した。

「（……………ともかくだ、俺には彼女がああやって孤立していたように見えたのが気になる。何か分かるか?）」

「（……………いえ）」

正直人のこういったことに関して聡いとは思っていなかった。その答えに不満を持つことはなかった。アークがひどく残念そうな気配を感じさせるので、気にするなと彼なりに励ますと、とりあえずこの話題は保留することにした。

「（まあ、いいさ。きっとその内分かるだろう）」

そうして念話を切ると、始まった学院の説明に耳を傾けることにした。

????????????????

式が終わり、皆が開放された気分していると、教師のほうから通達があった。どうやら、今日は入学式ということで、まだこのパーティ形式の食事が続くらしい。この場で交流でも作って欲しいとでもいうのだろうか。だがそれは自由参加のようので、部屋に戻りたくない。

った生徒は寮に向かってもいいそうだ。講堂から出たあたりに、自分たちに割り振られた寮の表が出ているらしい。

「そういえばさっき言ってたな……二人で一部屋か、どんな奴がルームメイトになるのか楽しみだぜ」

そう言ったラスティの言葉に反応して、同じテーブルでサンドイッチを食べていた少年が質問してきた。その服装から、恐らく平民の出だと思われる。

「え、ここの寮って二人一部屋なんですか？」

これはさっき話していた筈のだが……そんなことを口には出さず、この（恐らく）ボーっとしていた少年にこのことについて説明することにした。

「……ああ、ここの寮は一応ベッドルームは個別に与えられるが、ベッドとタンスがあるだけの小さいスペースしか確保されてないんだ。机やら工房スペースやらは二人で共同で使用させることになっている。要は寝る意外は共同生活ってことだ。（自前で作れるなら）飯食ったり宿題やったりするのも、自然二人ですることになるんだろっつな」

そう説明してやると、何故か急に不安げな表情になった。何故だろうかと思うと、直後に紡がれた言葉でその不安の理由が分かった。

「も、もし貴族と平民が同じ部屋になったら大丈夫なんでしょうか？ その可能性を思うと少し不安なんですけども……」

「ああ、それなら大丈夫だ。ルームメイトは必ず貴族と平民とで組

ませられるらしいぞ？それに人員比でも一対一なんだから例外はないだろうな」

さも涼しげにそう語るラスティに、その少年はもう一つ疑問を投げかけた。

「あの……その何処が、大丈夫、なんですか？」

「いやほら、貴族（または平民）と一緒になるかならないか分からないという不安が解消されただろう？この情報によって寮に行つたときの心構えが出来るってわけだな、これが」

そう言うラスティの顔は、妙に晴れやかだった。

生徒一人一人に与えられた寝室。

城の荘厳な外観とは裏腹に質素に落ち着いた色でまとめられているが、簡素でありながら丁寧に作りこまれた少数の家具が、この学院の資金の豊富さを物語っているように感じられた。その、自身に割り当てられたベッドの上。そこで仰向けになりラスティは天井を眺めている。

「……………夢じゃ、無いんだな」

真つ直ぐ突き上げられた拳、その甲を見つめながらそう言った。そこには薄く光を放つ刻印が刻まれており、それがアークとの契約の証であることを示している。しばらくすると、その刻印は光を失い、後には普通の皮膚の色だけが残っている。

「……………アーク」

「はい」

ラストイの呼びかけに答えるその声は、先ほどとは違って高いものだった。ラストイが不思議に思っただけ確認しようとするより先に、いきなり空色の髪の少女が顔を覗き込んできた。

「つておおわあ！?!? え!?!? はい!?!? 誰さお前!?!? つうか何でさ!?!?」

突然現れた少女に、飛び上がり勢いよく後ずさる。ベッドに隣接した壁に勢いよく頭をぶつけてしまい、その場につづくまる。そんな彼の様子に、少女は悪戯が成功したコドモのような表情で嬉々として口を開いた。

「フフフ、アークですよ、マスター。私に性別の概念は存在しません。ですから人型に化身するときは、このように外見を任意の性別に設定できるのです。もっとも、髪色と目の色は変えられないのですが……………」

そういいながら、彼女はその姿を一瞬靄のようなもので包ませ、次の瞬間にはそこに少年が現れていた。そしてまた、その姿を少女のものに戻す。服装はゴシッククロリータとでも言うべきものだが、

生物学的に無いだろう髪色をみて納得したラスティは、ある事に思い至った。

その考えに思い至った彼は、その少女を睨みつける。

「くっ…………アーク、お前黙ってたな？ このタイミングで俺を驚かせる為に黙ってたがったな」

「いえいえ、そんな事はありません。マスターでしたらこのことをご存知だと思いましたので」

それでも面白げな表情を浮かべているアークを見て、彼は咎めるようにさらに強く睨んだが、そんなことを気にしない風にアークは口を開いた。良くも悪くも似たもの同士の主従なのかもしれない。

「マスター、私を呼んだという事は何かあったのですか？」

「……………まあ、いいさ。アーク、俺のバックの中から、ノート一つ取ってくれ」

「……………どれでもよろしいのでしょうか？」

「あ、悪い。背負ったときに背中になる方にあるやつだ。一番端のやつだぞ？」

そう指示を出されたアークは、部屋の片隅にあるバッグ?????これは受付の係の生徒が運んでおいてくれたそうだ?????????の中から、一冊のノートを取り出す。

「えっと、コレでしょうか…マスターの持っているノートは不思議ですね。今までここまで綺麗なものは見たことが無いのですが……

……」

そう言いながらラスティにそれを手渡す。確かにそのノートは、使い込まれた形跡はあるものの、この世界で使われるどんな紙よりも白く、綺麗なものだった。そのことに、どこか自慢げに答えるラスティ。

「当たり前だ。俺が居たトコロは、こういう物を作り出すのが十八番だからな」

そのノートには、^{ニホンゴ}「公用語」で題が記されていた。

設定資料・舞台となる物語・世界観

「……………」自分で書いた、ノートを、こういうシチュエーションで見ることになると妙な気分になるな、これが」

そのノートを見つめる眼は、どこか郷愁を漂わせている。押し黙るアークに、ラスティは視線をやらずに語りかけた。

「『世界を創ったのが神だ』というなら、人の手で書かれた物語の神はその人になるのだろうか、か。懐かしいな。どこかでそんなことを聞いて、こうして少しずつ世界観を作りこんでいった物語が昨日のこのようだよ。実際は……………」どのくらいだったかな」

そうしてノートをめくっていく。そしてふと、あるページでその動きが止まった。ある部分を一心に見つめているその目の揺らぎに、傍らのアークは感情の動きを感じた。

「……………」そっか」

何かに納得したように呟くラスティ。

その視線の先には、
‘水晶眼’、
そうかかっていた。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」(前書き)

ちょっと短めかもしれないです。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」

講堂からの拘束が解除された時点で、すぐにティアマットは寮に足を進めていた。顔を俯かせているせいで、その表情は見えない。ただ、何かに追われるように廊下を案内に沿って歩いていった。

大分広い間隔で、講堂とは違って生活観を感じられる落ち着いた褐色の廊下に並んだ扉の、目当ての番号が書かれた扉の前に立ち止まり、部屋に入る。

学生の身分に与えられるにはいささか豪華すぎるのではないかと思われる家具の数々。それが彼女を出迎えた。

そこは二人一部屋で割り振られている寮室で、ここには彼女？？？ティアマットの他に、ルームメイトがもう一人来る事になっていた。

だがそのもう一人はまだ来ていない。

未だ見ぬルームメイトを待つ事も無く、部屋の明かりをつけることもなく、彼女は部屋の奥に二つ並んだ扉の左側を開き、入った。

その一人一つ与えられていたその部屋？？？寝室は、最小限のスペースが確保されているだけの小さなものだった。だが飾り気の無いその部屋は、本来の広さよりも少しだけ、広く感じられた。

後ろ手に摘みを掴み、ゆっくりと捻る。重苦しい金属音をたて、それは鍵がかかったことを示した。その音を聞き届けると、その場に力なく座り込む。扉の前から動くこと無く、膝を抱え、頭をうつめる。

その髪が砂埃に汚れた靴にかかり汚れてしまいそうであることに構わず、彼女はうずくまっていた。

備え付けられたベッドがすぐ側にあるにも関わらず、座ったままである。呼吸で僅かに上下する肩の動きが無ければ死んでいるのかと思えるほどに、今の彼女には生気が無かった。

一言、呟いた。

「……………紅い……………眼」

それは自身の右目のことなのだろう。その事に意識を向け、今日一日のことを、彼女は思い返す。寂しげに衣服の擦れる音が、暗い寝室に微かに響く。

「……………災厄……………」

すれ違う人々の様子を思い返す。自分の顔を見て、悲鳴をあげないまでも顔を強張らせ、近寄りたくないといわんばかりの生徒たち。その生徒たちは口々に似たような事を呟く。音は耳まで届かないものの、その唇の動きから、何と言っていたか読み取れてしまう。

‘災厄の目’、‘血塗られた目’、‘凶つ星の目’みな、このようなものだった。それを思って、懐かしむように呟く。かすれた声は、その部屋に響かせるには余りにも弱い。

「もう、慣れたと思ってたんだけど……………」

そう、そう思っていた。少なくともこれは今に始まった事ではなかったのだろう。世間において、紅い眼は不吉の象徴という意味合いを持っていた。

それを持つ人物は、場合によっては異端審問されかねないほど、紅い眼は大きな意味を持っていた。

それを、彼女は持っていた。

それに加え、彼女の眼は淡い光を放つように輝く。人に恐怖を抱

かせるように、淡く、暗く。魔術という神秘が存在するこの世界において、その光景は異様であった。いや、そういう神秘が存在するからこそ、その眼が光る光景に畏怖してしまうのだろう。

そんな彼女は、恐らく人々に忌避されるのは日常茶飯事ですらあった筈。だから尚の事、この十数年間で慣れてしまったと思っただのだ。

だがそれが、慣れではなかった事を思い知らされたのだ。

『ラステイハルト・ジーン』。今日出会った、不思議な少年。行き成り中空から現れたと思うと、彼女の顔を見るなり突然恥ずかしい事を言っただのだ。

『綺麗な眼だな』

今思うと、思わず赤面してしまうような台詞。彼自身は聞かれていないと思っっているようだが、彼女の読唇は容易にその唇の動きを読み取った。

綺麗などと、言われるのは初めてだった。汚らわしいや醜いなどの言葉を浴びせられることはあっても、この眼で賞賛を受けることは、生まれてからというものの初めてのことだった。

普通に接してくるその態度は、無知から来るものだと思っただのだ。見るからに異国の人。伝承が無くとも不思議では無い。だがそれは違うとも思えた。彼は目についての発言を避けていたのだ。それもかなり意図的に。それがこの眼のことを知っていることを証明することでは無いかも知れないが、それでもそう思えた。

「やっぱり……………」

どこかで期待していたのだろう、この眼を気にしないでいれる生活。ラステイという少年と出会ってから、それを期待する心が抑えきれなくなったのだろう。

でもだからこそ、周囲の人間が浴びせてくる言葉が辛かった。期待していたからこそ、今まで当然であった反応にショックを受けずにはいられなかった。

私は居てはいけないの？

私は生きてはいけないの？

私は……………

「……………悲しいな」

もうルームメイトと顔をあわせる勇氣も残っていない。もしその相手に拒絶されたら、避けられたら、怖がられたら……………それを確かめることは出来なかった。

逃げるように閉じこもった部屋の中で、弱弱しくすすり泣く声が聞こえていた

第五小節「朝の出来事」

私立ハルバルト学院の新生でもある、ゲルト・A・Fの朝は早い。領土持ちの貴族の長男として育った彼だが、いつも決まった時間になるとひとりで起きて歩き出す。

「……ふああ〜、おはよう……」

だがそれは、必ずしも目覚めが良い事とは一致しない。覚束無い足取りと、定まらない目の焦点は、彼が寝ぼけている事を如実にあらわしていた。そしてその事実を引き立てるように、癖の強そうな金髪は寝癖で氾濫を起こしている。

「……みず……ください」

そんな彼が毎日することは、起き抜けに水を一杯飲むこと。そうすることで毎日の目覚めを快適なものにしていた。

「はい、どうぞ」

手渡されたガラス質のコップから伝わる水の冷気は、起きたばかりの意識を刺激した。その水を、一気に飲み下す。喉を刺激する冷えた水は、一気に覚醒を促した。今日は良い一日になりそうだと思いつつ、コップを

(……あれ?)

ここに来てゲルトは、ようやくおかしい点に気付いた。

彼は今現在、学院の学生寮に居る。実家と違って侍従の居ないこの寮室には、このように水を持ってきて手渡してくれる人物など居るはずがないのだ。

では誰が、手渡してくれたのだろうか。

恐る恐る振り返ると。そこには淡いそらいろの少女が居た。だが、その体は半透明で、後ろの景色が透けて見えてはいたのだが

(ひー!!ゆ、ゆうれ……………)

そこで彼の目の前は暗くなった。

「ったく、お前という奴は……初日の朝から何やってやがる!!」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、二段アイスクリームが鎮座している。

「うう……………すいません」

ことの始まりはこうだった。マスターにあらかじめ言われていた起床時間が近付いたころ、何やら寝ぼけた様子のゲルトが出てきたのだ。そして水を催促している。これは面白そうだと、わざわざアークは半透明の状態でゲルトに水を渡したのだ。そのアークを幽霊と勘違いした彼は卒倒。そして今に至る。

「ま、まあまあラスティさん。そこまで怒らなくても……………」

そう言いながら彼を宥めようとする金髪碧眼の少年は、ラスティのルームメイトとなるゲルト・アルカシアス・フィニエンス。隣国

の武家貴族の出のようだが、そんなことを露にも感じさせない気性
をしている。白のシャツに、茶のベストというそれなりに地味ない
でたちも、彼の気性を表している。

「……そっぴや昨日、アークのこと教えるの忘れたまま寝ちまつた
からなあ……アークだけじゃなくてこっちにも落ち度はあつた（
つたくアーク。面白そうなことするなら映像記録化するか視覚共有
で俺にも見せるよ）」

「……！？……うう、すみません。（それならマスター、いくら
なんでも拳骨は無いじゃないですか！？）」

「まあとにかく、済まなかつた、ゲルト（体面だ、体面）」

「いえ、大丈夫ですよ。彼女の方も反省しているようですし」

裏で交わされている会話のことなど知らず、アルカスはにこやかにその謝罪を受け入れる。その無垢ともいえる清々しさに、思わず内心冷や汗をラストイはかいていた。そんな彼の心情を知らず、アルカスはアークを見て言う。

「それにしても……アークさんは精霊ですよ？　すごいなあ、僕
なんて一生かかっても契約する自信なんて無いのに、化身級の精霊
と契約できてるなんてすごいです！」

確かに、精霊と契約するには精霊からの何かしらの条件を満たして認めてもらわなくてはならない。しかもその条件は酷く厳しく、世界に存在する最下位級の精霊ですら人の高位の術者でも認めてもらわれない場合が殆どなのだ。精霊と契約していることはある種のステータスにもなる。

「けしんきゆう？ ……マスター、何ですかそれは」

聞きなれない‘人側での精霊の区分’に、首をかしげるアーク。その疑問に、ラスティは念話も交えて解説した。

「ああ、要は人基準での精霊の区分でな。人型に化身するまでの存在規模を持った精霊の事だ（お前から言う、第三階位あたりだ）」

そう言われたアークは、表情を強張らせる。途端に講義を返して来た。勿論、言っては拙いので念話でだが……

「（だ、第三階位！？ 私はそんな有象無象と一緒にされているのですか！？）」

「（落ち着けアーク。気持ちは分かるが頼むからせめて口には出さないでくれよ？ とりあえず愚痴なら聞いてやるから。） まあでも、そんな凄いことでもないよ。コイツと契約できたのも、ある種の偶然だったしな」

「そうなんですか……」

キラキラと目を輝かせアークを見つめるその表情に、小動物の印象を受けた。同い年の筈なのに、何故か年下のように見えてしまう。もっとも、向こうもラスティを年上のように接してはいたのだが。

「まあとりあえず、飯でも食いに行こうぜ。今日はクラスの発表もあるからな。とっとと済ませちまおうぜ」

「はい」

そう話題を切り上げたラスティは、着替えを済ませて朝食に行く事にした。

(これ以上話していると、なんか拙そうだったしな。)
そんなラスティの心情を、ゲルトは最後まで知る事は無かった。

「おお、ここが食堂か」

清潔さと高級さが感じられる白を基調とした内装に迎えられたその空間に、ラスティが感嘆の声をあげている。シンブルに直線で構成されたその施設、その見慣れないその光景に、彼は息を漏らしているのだが……隣のゲルトはそれでも無いようなところを見ると……やはり彼はブルジョワジーな生活をおくっていたと思われた。

皆の胃袋を預かるここ食堂。料理長を筆頭に、数人の部下(弟子)で構成された料理人団たちにより切り盛りされている。係りの人が動き易いように、置かれた円卓テーブルの間隔は広く、また数も多いため、その床面積はかなりのものであった。

今日は新入生たちが初めて朝食を食べにくるからだろうか、奥から忙しなく指示を出す声が出していた。いや、この学院の人数を考えるとそれは何時ものことなのかもしれない。

「総勢千五百人だっけ？ この学院の生徒数って」

(自分達の食事の食券(料理は係りの人が持ってきてくれる)を持って数ある円卓テーブルの内一つに座り、そう疑問を呈したラスティに、向かいに座ったゲルトが答えた。)

「はい、そうですね。全三学年、各学年十クラス、各学級五十人ですから。他の学園に比べると、まだまだ規模は小さいようですね」

そう軽く言っただけのけるゲルトに、苦笑いで返すラステイ。まあ確かにそうなんだろうなと答え、丁度来た食事につけようとしたそのとき、背後から声をかける者がいた。

「お！　ダレかと思ったたらゲルト坊じゃねえか！」

「あ、ハイスさん！　ハイスさんもこちらに入学してたんですか？」

どうやらゲルトと顔なじみの人物らしかった。振り返ってそのハイスと呼ばれた青年の方を振り返る。そこに立っていたその青年は、脱色され乱雑に切りそろえられた髪を無造作に下ろしていて、目に少し髪がかかっている。全体的に荒々しさを漂わせる雰囲気、ライダーズジャケットと思しき衣服に細身のパンツを履いているそのいでたちは、とてもゲルトの知り合いなどとは思えなかった。その意外な人物に、ラステイは思わず言葉を失う。

「おう。オレもどっか学院に行かなきゃなんねえ年ってんでどこにすっかなあって思ってたらよ。こっちに面白そうなところがあったんでオヤジに頼みこんだのさ。まさかお前さんもこっちに來てるとはなあ」

「でも本音は、親元から離れたかったというのもあるんじゃないんですか？」

そう切り返すゲルトは、相変わらず丁寧な言葉使いのままだ。恐らく誰に対してもそうなのだろう。そして、少々置いてけぼりであ

ったラストイに気付いたゲルトが、ハイスに彼を紹介する。

「あ、そうだ。こちらは僕と同じルームになったラストイハルト・ジーンさんです」

「ラストイって呼んでくれ」

そう言われてラストイはハイスに軽く会釈をする。こちらをみたハイスは、機嫌良さに答えた。

「おう！ オレはハイス・グイリテイ・シエーネスヴェッターつてんだ。オレのことも普通に呼び捨てで……あと堅っ苦しいのは嫌いなんで碎けた調子でよろしくな。コイツにもよく言ってたんだが、どうにも直んねんだよなあ。あ、隣いいか？」

そう碎けた調子を求めてくるハイスに、ラストイは好感を持つ。身なりはアレだが、恐らく優しい人柄なのだろうと思え、ラストイは彼が求めたように接した。

「ああ、いいよ。確かにゲルトの口調は少々気になってたんだが……なるほど……ゲルトは誰に対してもそうだったのか」

ラストイが碎けた調子で話してくれたことに好感を持ったらしく、そのことにハイスが反応を示す。彼とは仲良くなれそうだと、その時ラストイは内心で思った。

「お！ 話が分かるやつでよかったぜ！ オレの周りのヤツはよ、オレが碎けた調子で話そうぜって言ってもなかなかそうしてくんなくてよお……まあオレんちが、シエーネスヴェッター、だつてのはわかるんだが、オレみたいな放蕩息子にまでへこへこしやがるんだ。家族で付き合いもあつたゲルトの家で、フイエンスコイツにはどうにか碎

けさせようと思ったらす………」

今まで饒舌に話していたその口調がとまる。そして言葉を紡ぐようにして固まった表情が、少しずつ青ざめていった。その表情を維持したまま、ゆっくりとゲルトに向かい合い恐る恐る口を開いた。

「………な、なあゲルトよお………おまえさんが居るってこたあ………まさか、あの女^{クンアマ}も居やがるのk………」

その言葉は最後まで続かなかった。またもや背後からかけられた声でハイスがフリーズしてしまったからである。

「あら？ 私がどうかしましたか？」

その声から、女性であることが推測できた。だがその声は不気味なまでに感情を抑えられている。その裏に煮えたぎる怒りを感じた更にハイスが青ざめていき、隣にいるラスティには彼の顔に冷や汗が流れるのをはつきりと確認できた。部外者であるラスティですら、その圧力に屈しそうであるのだから、直接それを向けられたハイスは一体何を感じているのであろう。………少なくとも心地の良いものではないことは確かだ。

「それはともかく、兄さん、隣、失礼します」

そう言いながら、回り込んでゲルトの隣に座り込んだ少女を見て、ラスティは啞然とした。周囲に気を配ってみると、その場の大多数が彼女に視線を向けていたようであった。

確かに、彼女の容姿を見たら目を奪われずにはいられないだろう。……その彼女の容姿は、周囲の興味を引くのに十二分の理由があった。それがゲルトと血縁………しかも二親等だとは誰も思わない。

「クツ……………テメエ、まさかここに来てるとはな……………」

「あら？ 兄さんを見た時に悟りませんでしたの？ ‘双子の妹’である私が、兄と同じ学院に入学することは当然でありましょう？」

‘エメラルド’、そう形容すべきであった。生物学を完全に無視した宝石光沢を持つ明るい緑の髪を、恐らく昨日会ったティアマツトほどに長く伸ばし、それを髪留めでまとめている。その尋常とは思えない髪色は、しかし人工では無いと確信できる独特の光沢を放っていた。黒に濃緑色の入った男装風の上着は、彼女の引き立てるように存在していた。

金髪のゲルトと、エメラルドの彼女とは血縁だとは思えないという見解が周囲を占めていた。ただ、ラスティだけはそのことに納得をしていた。

「まさか、‘もう一人’居たなんてな」

そういったラスティの言葉が聞こえてか否か、その存在に気付くと、‘兄’と呼んだゲルトに向かって質問した。先ほどまでの口調はなりをひそめている。

「兄さん？ こちらのの方は何方？」

「あ、うん。彼は僕のルームメイトのラスティハルト・ジーンさん。いい人だよ」

「そうですか。……………初めまして、ラスティハルトさん。兄が世話になっていきます。私はゲルト・A・フィニエンスの双子の妹のポラリス・E・フィニエンスと申します」

非常に丁寧な物腰で会釈をするポラリスと名乗った少女。その容姿への驚きがまだ冷めていなかったが、ラスティは固まることなく対応した。

正直、ゲルトの数倍、武家としての雰囲気が出ている。威圧感と言っただけでもないが、独特な雰囲気を持っていた。

「今紹介してもらったがラスティハルト・ジーン。俺の名前はちょっと長いんでできればラスティって呼んでもらえると有難い」

ただそう呼んでくれと言っただけでは呼んでくれそうになかった。どこと無くフルネームで言われるのが好きではないというニユアンスにとれるように、ラスティは説明した。

「そうですか。わかりました。ところで初対面でいきなり失礼とは思いますが、ラスティさん。貴方、何か、連れていらっしやるのでしょうか？」

その発言に、別の意味で驚愕するラスティと「アーク」。事情の分かるゲルトは感心した様子で、ハイスの方は首を傾げている。

「うわあ、ポラリス、流石だなあ……………」

「あ？ おい、ちょっと待ってくれ、オレは事情が掴めないんだが」

「まさかとは思ったが……………」

三者三様の反応を示す彼らに首を傾げるポラリス。そんな彼女に、空気を読んだと思われるゲルトが答えた。

「その質問は、後で時間があつたら説明するよ。ほら、ポラリス、ルームメイトを待たせてるんだらう？」

質問に答えてくれなかったことに若干の不満の色を覗かせていたが、納得したように頷いて、席を立った。

「まあ、分かりましたわ。でしたら兄さん。今日の夕食の時にでもまた」

流石に兄妹には普通の口調で話すのだらう。それでも育ちの良さを感じさせる口調だが、彼女はそういつて待たせているルームメイトの元に帰って行った。それを見届けて、緊張が解けたようにハイスが崩れ落ちた。

「っはあゝ。やっと行つたぜ。……………ったく、苦手なんだよあの女……………」

そのことは直接彼の口から言われずとも察することができた。あえて指摘することは無かったが、それよりも今は優先すべきことが彼らにはあつた。

「って、こうしてる間にも、貴重な飯の時間が!？」

そんなラスティの深刻そうな発言を受けて、他二人は振り返って食堂に備え付けられた時計を見た。彼らにはもう殆ど時間が残されていない。

「マ、マズイぞ……………」

「これは急がないといけませんね。」

もうすでにラスティは食事を掻き込み始めていた。そんな彼に合わせるように、二人も食事を掻き込み始める。

喉に詰まりそうになった肉を水で流し込みながら、ゲルトはふと思った。

「（そういえば、きっとポラリスは食事をすませてから此処に来たんだろうな）」

それから彼らが食べ終わったのは、教室への移動完了と決められた時間の、約四分前のことだった。

第六小節「それは遅ればせの」

朝日の差し込む寝室に、けたたましい金属音が鳴り響く。思わず耳を塞ぎたくなってしまうような音量の中、ベッドの上で毛布に包まっていた少女は、その中からゆっくりと音源に向け手を伸ばす。その中から覗く髪は、朝日を受けて鈍銀に輝いている。

「うっ、あともう少し……って!!」

勢いよく意識を覚醒させ、飛び跳ねるように立ち上がる。同時に跳ね上がった毛布が、軽い音をたてて床に落下した。着込んだネグリジェはズレ、肩口までの長さのアッシュブロンドが、所々寝癖で跳ねている。

「拙い、まずい、マズイ!!」

驚掴んだその据え置きの時計が示した時刻は、朝食の終了まで残り十五分。その事実には、彼女は必死に寝起きの頭脳を回転させた。着替えを高速で済ませ、寝癖を手製の道具で直し、校章をつける。ここまでおよそ三分。

「食堂まで、たぶん、十分……間に合ええええ!!」

年頃の少女らしからぬ雄たけびをあげながら、誰も居ない寮を後にする。

色の抑えられたステンドグラスから、角度の浅い朝の日差しが差し込んでいます。硬質な質感の垂直様式の廊下に、わずかに柔らかさが演出された。その中に、黒い髪が揺れている。

「ラステイハルト・ジーン……………」

その少女ティアマトは、昨日であった青年の名を呟いた。何の偶然があつてか、彼女は彼と同じクラスとなっていたのだ。

人が集まる前に手早く朝食を済ませた彼女は、人気の無い自身のクラス……………一年四組に向かった。それが彼女に割り当てられた居場所だった。

学級エリアに近づくにつれ、建築様式が変化してくる。足音が変化したことに気付くまで彼女はそのことに意識が向くことは無かったが、その音が変わった瞬間、彼女は足元に目を向けた。

「木？」

その建造物には木材が使われていた。普通、ここまでの規模の建造物は金属や石材でつくられる。扉などは話は別だが、このような大規模の建築では木材が使われることは有り得なかった。普通は強度に限界が来てしまうからである。

彼女の乏しい知識ではその問題への解答を導き出すことは出来なかった。保留することにした。もとより関係の無いことだからと。

ごく普通（中央エリアに比べだが）の内装の教室には、五席一列で十列の机たちが並んでいる。横長の空間の部屋の前方には、教壇と思われるものがあり、その後ろには濃緑色の壁が広がっている。

そこには大きく白い文字が書かれていた。

「来た奴から自由に席に座っている~~~~~BY担任」

その文字を見て、ティアマツトは若干憂鬱な気分になる。

??
??

結論からいくと、間に合わなかった。もてる体力の全てを尽くし、アークに記憶させた見取り図から最短ルートを割り出し、果てには少々魔術の恩恵にもあずかっておきながら、三人は間に合うことがなかった。

彼らの教室となるとその前には、彼らの前に立ちふさがるように男性が立ちふさがっていた。恐らく担任教師だと思われる。

「ほう……………お前等……………初日から遅刻とはいい度胸しているじゃないか。」

焦げた赤茶の髪を後ろに流し、その力の籠った視線とローブを纏った上からでも分かる鍛え上げられた肉体が、彼らを威圧した。その威圧に耐えかねたように、ハイスが弁明を試みる。

「ち、違うんです、先生！！ 緑のクソあ」

その言葉は最後まで続かなかった。突如飛来した銀色の何かが、彼の後頭部に直撃したからである。

そのまま崩れ落ちるハイス。周囲の三人は何が起こったのか理解できず、言葉を失う。

「い、一体何が……………」

その時アークから、視覚共有のアクセスがラスティにはいった。その脳内には、彼らの隣の教室の扉が、少しだけ開いている映像が映っていた。アークが興奮気味に解説する。

「席から立つことなく、風の精密制御・計算により風に乗せたシルバースピットを視認していない対象に直撃させる……………これをできるのが精霊にでもどれだけいることか……………」

どうやら、ハイスの近くに転がっている銀色の物体は、ポラリスによって放たれたものようだった。ラスティが隣を見てみると、ゲルトの引きつった笑いが見える。どうやら彼は犯人はわかっているらしい。……………なるほど、ハイスが彼女を苦手にしているのも分かる。クソアマと言いかけた果てにこうなったことには同情しないが。

むしろ、このことで話が有耶無耶になったことに感謝をしたいくらいであった。

??
??

教師が一時不在になったからだろう、教室内に居た生徒たちは思いにおしゃべりを始めていた。その方が遅れたことに注目されすぎないからいいかなと、ラスティは内心想う。そして教師に連れられて、彼らは教室の後ろから入った。そして内装をみたラスティが、何かに気付いたように壁に手を一瞬あてた。

「へえ……………これはすごいな」

そう、ラステイはそう呟いた。その明るい色目の木の壁を興味深そうに見るラステイの様子に気付いた教師が、彼に話しかける。183cmある彼の身長より大分高い位置から、その視線は見下ろしていた。

「お、ラステイハルト。お前はこれがわかるのか？」

「はい。針葉樹の木材で、表層に薬品が塗られず簡単な魔法処理のみでこの明るい色を保つということは、高濃度の空气中魔力で育ったマツの類だと……………それもここまで白が強いということは北方王^{ルヘイム}領樹林からの輸送品ですね。いくら対魔力の強い木材だからって、ここまで使うと経費は馬鹿にならなかつたでしょうに……………」

そう言う彼の様子を、教師は感心した様子で、ゲルトとハイスは啞然として、ティアマツトにだけ見えていたアークは誇らしげにそれぞれみていた。そんな彼らの様子には構わず、彼は続ける。その様子から、何か解析をしている風だとは見て取れてはいた。

「……………それに、分かりにくいけど何か奇妙な工程がある……………六角形？ ああ、‘ハニカム構造’か！ 一つ一つにルーンが……………十二の二乗、百四十四文字周期で同じ文字列で刻まれていますね、これは。最初の六文字で分かります。有名な硬化刻印ですね……………あたってます……………か？」

振り返ったラステイの視界には、彼を見つめて啞然としている生徒たちの姿が広がっていた。いつの間にか喧騒も止んでいる。

やってしまったたというような表情をする彼に、面白いモノを見た
というような教師が沈黙を破った。

「正解だ、ラストイハルト・ジーン。驚いたな。まさか初見でこの
構造を見抜くなんてな……大抵のやつはここに木材が使われる理
由すら分からずに聞きに来るやつまで居るんだぞ？」

その言葉に、困ったよう、恥ずかしさを隠すように彼は苦笑いで
返す。まあとりあえず、席に座りましようと言ってその場を誤魔化
す。どうも、意外と恥ずかしがりやな面があるようだった。

そしてそこから逃げるように空いている席に向かって歩き、四席
空いていた席の内の一つに腰を落ち着ける。そんな彼の行動にも、
周囲の人間は驚いていたようだった。

それは、窓側から二番目の列の一番後ろ。最後まで空くものと思
われていた席だった。

第七小節「空くはずだったそこは」

自身の隣に座った‘彼’のことが気になってしまふ。視線を外そうにもついつい視線を向けてしまふ………そんな状態にティアマツト・マキナは陥っていた。

????????

ティアマツトは教室に来るなり最も後ろの窓側の席に座り、何かをする事もなく、外の景色に眼を向けていた。碧の葉で遠くの視界を埋め尽くす木々と、やや風のあるせいか流れが速く見える雲が、何となく春を感じさせる。

後から少しづつ来る生徒たちは、各々好きな場所に席をとり、以前からの友人と思われる相手や、ルームメイト等と話始める。ティアマツトに意識を向ける者は居なかった。

それを寂しいなどとは思わない。寧ろ感心を向けなくてくれとさえ思う。自身に向けられる、恐怖と侮蔑の視線よりならば、無視であつたほうがよほど気が楽だと思えた。

だからだろうか。ラストイハルトと名乗った彼のことが一瞬頭を過ぎた。今まで生きてきて、この眼のことを悪く言わないで接してきた人間は居ないといえばそうではない。だが‘綺麗’などと言つた人物は一人も居なかった。

眼を気にするなという事はあつても、あえて意図的にその話題を避けたのもある意味新鮮だった。打算も下心も無く、ただ知り合っ

たからと、そんな理由で話しかけてきた。
そして何故なのか、そんな彼の行動を疑う気持ちには、なれなかつた。

唯一、興味が持てたとと言っても過言ではない。

私の眼のことに気付いた人たちは、意図的に視線をそむけて来る。私の近くの席だって、しぶしぶといった感じで、恐る恐るといったようすで、そうして不必要なほどに恐れながら席に着くのだ。

未だ、私の席の隣には誰も居ない。

あの人だったら、ここに座ってくれるのかな？

何でも無い風なようすで、よろしくと、そう言ってくれるのかな？

「ううん、止めておこう……………」

そうして、そんな思考を断ち切った。

そうでなかった時に、悲しさで潰れてしまいそうだから。

??
????????????

そう、期待していなかったと言えば嘘になる。だから余計、そのことが現実になって彼女は動揺していた。

「よ、同じクラスみたいだな。よろしく」

「え……………うん」

そういつて極当たり前のように私の隣に座り、先ほど饒舌に木材について解説していたことを後悔しているように頭を抱え始めた彼

に、素っ気無い返事しか返せなかった自身を少し悔やんだ。そのことで気を悪くする人では無いことは昨日のことでわかっていたが、どうしてか、気になってしまった。返事を気にしたことなど初めてだった。

「くううう……………おい、ゲルト、ハイス、何してるんだ。こっち来いよ」

そう言われたゲルトとハイスは、ラストイに促されるように、それぞれ彼の前と隣に座った。残り一つ、ティアマットの前の席を残して埋まった。それを見て、教師が口を開く。

「あ？　なんだ、まだ誰かきて」

その時勢いよく、前の方の扉が開いた。

「すみません！！　おくれましたあ！！！！」

そこに勢いよく、銀髪青眼????このあたりでは比較的少ない?????で、快活な印象を与える浅黒い肌の少女が飛び込んで来た。

??
????????????

ひとまず収まった朝の騒動。教師の男性が教団に立ち、皆が静まる。この時ようやく彼は、周辺に気を配る余裕ができた。

「やっぱ木はいいよなあ。前を思い出す」

木材で囲まれたその空間、その色合いに、ラストイは郷愁を感じていた。彼が知っている‘ソレ’よりははるかに広いが、それでも思い出さずには居られなかったようだ。

そんな感傷に浸っているうちに、教壇にたった教師は黒板に文字を書き出していた。

A l b a ・ A r c h i n a m

「そういえばまだ、オレの名前を話してなかったな。 オレの名前はアルバ、アルバ・アーキナムだ」

名前を書き終えた教師????アルバ先生は、身を翻す。先ほどは分からなかったが、少々タレ気味の眼が可愛げに見えてしまう、が、少々強面の先生だった。

面倒くさいという心情が伺えるその表情に変わらず、名前だけの自己紹介で終わらせる。とつととやることやっちまおうと、そう意気込んで生徒達の方に向き直った。そして……

「さて、まず最初にやることだが……大体のやつは察していると思う。まずは委員長を決めるぞ！」

その瞬間。静かだったクラスがざわめきはじめる。まだお互いの自己紹介すらしていないこの状況下で委員長を決めようというアルバ先生の発言に、否定的にはないが驚いた。

「(まで、普通……こんな早いっけ? まず教科説明とかじゃないのか? 自己紹介とかは無しか?)」

そう、妙に動揺し始めたラスティを置いていくように、委員長を決定する話し合いが行われた。そんな空気に、どこと無く良くないことが訪れるような気配を感じた。

「自薦、他薦、どっちでもいいぞ？ オレとしては、早く決まるなら誰でもいい」

そうアルバ先生が言い放つと同時に、ハイスが勢いよく手を挙げる。そんな彼の行動に方眉を吊り上げた先生だったが、気にする事無く指名した。

発言権の与えられた彼は、よく通る声でこう発言。

「オレはラスティハルトを推薦します！！」

「いや、なんでさあ！？」

そんな本人の講義の声も軽く流され、その理由をハイスは問われる。

「彼は、この中の誰もが気付かなかったこの建物のすごさを見抜いてました。魔術だけではありませんが、ここがそうだったものを中心に学ぶ以上、その実力の一部を披露した彼を推薦したいと思いません。またこのクラスは、それぞれの人間性を考慮できるほどに相互いをよく知っているということもないので、実力の面からの判断とさせていただきました」

その不良ともとれる容姿からは思いもよらないまともな発言。やはり貴族という事でそれなりの教育を受けてきたのだろう。普段もそうしていれば両親に怒られることも無いでしょうにというゲルトの呟きが聞こえる。

そんな彼の自信に満ちた発言に、何故か周囲も納得したかのよう

な雰囲気を見せ始めた。やはり、先ほどのラスティの行動が原因の一つでもあるのだろう。

そうして、彼の発言が終わる。彼は、何かをやり遂げたかのような清々しい笑顔を浮かべていた。そんなさわやかな雰囲気のまま、ラスティに向かって小さな声で告げる。これから起こることが楽しみで仕方が無いという風な様子だ。

「いやあ、アンタが委員長の方が面白いって思ってたよお」

発言が終了するなり小さな声でそう言ってくる彼は、周囲の空気も、ラスティが委員長の方向で纏まってきているようでもあった。

やはり、彼が先ほど披露した知識の断片と、その後のハイスの発言が彼らを納得させたそうだ。

もう逃れようがなさそうな事態に陥ったことに、机に突っ伏すラスティ。そんな彼に、アークは嬉しそうな声色で念話をつなげて来た。

「（凄いじゃないですか、マスター！ クラスのリーダーですよ！）」

そんなアークに一言言う気力も、この時のラスティには残されていなかった・・・ただ突っ伏したまま呻くだけである。

第八小節「こころふくらませ」

短い十分の休憩の時間。

教室の窓側から二列目の一番後ろの席、ラストイハルトの席となつたそこには、本人が突つ伏していた。その体勢のまま、呻くように呟く。

「くそ、何故だ、何故こんなことに……………」

結局のところ、彼の必死の抵抗もむなしく、彼は満場一致で委員長にされてしまった。半ば無理矢理の形で引き受けさせられたが、とりあえず諦めてその職をこなすことにしたようだ。

彼の前の席に座っているゲルトが、後ろに振り返って恨めしげに彼を見ている。

「だからって僕を巻き込むことは無いと思います。」

その次に決めることになった副委員長の役職は、選抜の権限を与えられたラストイが即座にゲルトを推薦していた。何でハイスじゃないのかとゲルトに問われたが、働いてくれそうにないからと一蹴、否応なしにさせられることとなった。

そんな彼らに、ラストイの右隣に座るハイスはまるで自分にはまったく関係の無いことのように発言をした。

「ま、諦めるや、やばくなったらオレも手伝ってやるからよ？」

「……………お願いしますよ？」

だが元はいえれば彼が発端なのだと、そう恨めしげな視線をハイ

スに移したのをラスティはちらりと見ながら思った。

謀らずとも委員長と副委員長となった生徒は同じ寮室の生徒同士である。これなら都合がいいときもあるのだろうなと……………今更と
いうものではあったが……………。

そんな他愛も無い会話をしているうちに、鐘がなり、アルバ先生が入ってきた。授業の時間である。

「起立！」

号令をするのは、ここでは委員長の仕事であった。鐘が鳴ると同時に起き上がったラスティが、元気良く声を上げるとそれにあわせて皆は立ち上がった。

「礼！！ 着席」

??
?????????

「さて、今日やることだが、本格的な授業はまだやらない。まあ知
ってる奴が大半だと思いが、今日はここでお前等がこれから勉強し
ていくこと……………その中の魔術についてから話させてもらおう。」

そうアルバ先生が告げると、赤褐色のローブの懐から四色の鉱物
を取り出し、皆に掲げて見せた。透き通ったその色合いは、どこか
宝石を思わせる。

「魔石……………まあ皆まで言わんでもわかるだろうが、コイツは
魔術の使用に欠かせない重要な触媒だな」

そしてわずかに唇を動かし、何事かを告げる、すると教壇の上に、

魔方阵らしき図形が現れた。その上に、手から離れた四色の、魔石達が下方から力をつけたかのように浮かびあがる。

「赤」

「青」

「黄」

「緑」

告げた言葉の順に、それぞれの魔石たちが光を放った。それを見つめる生徒達に、先生は説明を続けた。

「これらはそれぞれ、火、水、土、風を象徴すると言われている。魔術はこれら魔石なしには発現できない。まあ、例外はあるんだがな。」

「これら魔術………が生み出す、幻想………これは様々な用途で使われているな。魔術は才能に左右されることはあっても、誰にも使用は可能な力だ。だがこれは、それなりに学が無ければならない。お前らには、地理歴史といったもののほかに、こういった魔術のことについても学んでもらう。」

ゆくゆくは国を支える人材としてな、と最後に先生は付け足した。それと同時に、教壇の上の陣は消え、魔石が先生の手のひらの上に落ちる。

「（お、アルバ先生、手袋してるぜ）」

魔石が落ちた手のひらには、手袋がはめられていることに今更ながらラスティは気付いた。そしてそのことに気が付くと同時に、目だけで左に視線を向ける。

その視線の先には、頬杖を着きながらもしつかりと話を聞いているティアマットの姿があった。そしてその彼女の手に、黒い手袋がはめられている。

「（そっぴいえば、ティアマットも手袋してたんだもんな。……………なんでだろう？）」

そんな一瞬の疑問をとりあえず保留させておき、視線を教壇に戻した。

「魔術において大切な要素として、魔石・式・詠語の三つが代表的なものとして挙げられるな。」

魔石は、それ自体が魔術の力の根源となっているが、こいつは石のカットの仕方や加工の手順の違いで違った性質を見せることもある。同じ魔術でも、魔石の加工によっては違ったものとなることもあるぐらいだ。こういった事柄を、‘魔石工学’として学んでもらう。」

「式、A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z。これらの文字と図形の組み合わせで魔術の骨組みにもなる部分だ。これらのことを、‘式学’として学んでもらう。」

「詠語、精霊たちの言葉とされるオレたちとはまるで毛色が違う言葉で、魔術の詠唱はこいつ無しには出来ない。そのまま、‘詠語学’」

「あと、魔術実践については、一年生の内は基本的なものを全属性……………二年後半と三年では、選択制でどれか1、2つ学んでもらうことにもなってる。」

「あと、選択制で強制では無い教科もあるが……面倒だな……」

そう呟きながらも、しつかりと説明をするアルバ先生だった。それを聞いているうちに、気分が徐々に高揚してくるようにラスティは思えた。未知の生活に心を膨らませ、彼は鐘が鳴るまで熱心に聞き入っていた。

・ ・ ・ ・ ・

まだ初日の彼らの日程は、まだそれほど大変だとは言えない。各教科については簡単すぎる説明があっただけで、課題すらまだ出されていない。

午後からは校内見学の時間として、生徒一人一人にパンフレットのようなものが渡され、学院内を自主的に見学することとなっている。自分たちのクラブ活動の宣伝が許されていることもあり、上級生たちはこぞって下級生たちの勧誘に乗り出している。

アークに校内の構造を全て記録させているため、既に構造の把握をする必要のないラスティは、どう行動をしようか決めかねていた。

「どうすっかなあ……勧誘の先輩たちに絡まれてあんま色々見て回れなさそうだし……」

「どうするのですか？ 確かに構造自体は問題ないでしょうが、そ

れだけでは分からない情報というものもあるのですよ?」

すでに皆が教室を出払っていたため、教室には彼らのほかには誰も居ない。そのためアークは姿を現すことはしないまでも、肉声(?)で会話をしていた。退屈そうに頬杖をつき、パンフレットを眠そうな目で見ているラスティにアークは進言する。今のアークは少年の姿でいるようだ。声に若干の変化が見られる。

アークの進言にも興味なさ気な彼は、探索などよりもしたいことがあった。

「なあ、アークよお……………そういえば俺、昨日ずっとノート読んであんまり寝てなかったんだよな……………さっきまでは興奮アドレナリンでどうにかなってたが……………流石に眠くなってきた。何処か昼寝によさそうなどころないか?」

どうやら睡眠欲が最優先らしい。仕方なくアークは、言われたとおり場所を提案する。

「本棟の屋上などはどうでしょう? あそこなら人は来ないのでと思います」

「お、そいつはいい。確かにあそこなら人は来ないな……………よし、直行するぞ」

先ほどまでの無気力な様子とは打って変わって意気込んだ表情を見せた彼は、意気揚々と歩き出す。姿を現さないアークの、そんなに元気があるのならば……………という呟きは、先にすすんでしまった主には聞こえていなかった。

??

本棟屋上。敷地内の建造物の中で最も高い本棟の屋上は、それに広い空間となっている。なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなものなのだろうかと思われる。

乾燥した気候の空気は春先の強めの風と相まって肌に冷たい感触をもたらす。防風にと簡易結界をわざわざ張ってくれるアークのような存在が居なければ、誰も好き好んでこのような場所には来ないだろう。

そんな睡眠には持って来いの環境に気を良くしたラスティは、それに適した寝場所を探し始める。

「それにしてもマスター。こんなに食事を買い込んで何をするつもりなのですか？」

誰も来ることは無いだろうということで、アークは実体化している。少年の姿のその精霊の手には、大きく膨らんだ袋がさげられていた。

ここに来るということで、後で夕食はゲルトとハイスでも呼んでここで食おうと思いついたらしいラスティが、あらかじめ買い込んだものだった。

「何って………あいつ等呼んで此処で飯食おうってただけって言うたろ？ まあ、どうも貴族っぽいあの微妙に堅苦しい雰囲気ではなんか飯が味わえなくて………」というのが本音だ」

今朝のあの慌しい食事に堅苦しいも何もあつたものでは無いのはと、つい突っ込みかけたアークだったが、あれが普通に食事を取っていたならばそう（堅苦しく）なったのかと思ひ至り、言う事を変えた。

「あのお二人が断るとは思わなかったのですか？」

「その時はその時、俺とお前で食い尽くすのさ」

「確かに私は、必要が無いといえど食べる事はできますが……………」

とほど堅苦しい会話の少ない貴族然とした食事が嫌いらしい。暇を見ては念話で交信してきていた今日一日の主の様子を見て思ったが、どうやら彼は話すという事が好きなようだった。

そうこうしているうちに、ラストイは寢床に最適な場所を探し出す。そこに寝そべると、結界を維持してくれているアークに向けて言った。その視線は流れる雲を見ている。

「頃合になったら起こしてくれ」

そういつてすぐに目を閉じる。睡眠を欲していたその意識は、了解の返事をするアークの声を遠くに聞き届けると、すぐに夢の世界に落ちていった。

Ark's memo「登場人物」

傍らで寝ている自身の主を柔らかな視線で見守りながら、アークはその隣に腰をおろしていた。その髪の色は空と重なるようで、アークの精霊としての性質を物語っているようでもあった。

ラスティを見つめたまま、優しい声が発せられる。

「全く……マスターにも困ったものです。本当に自身に正直なのですから」

そっぴいながらも、表情は微笑んだままであった。そんなアークの様子は、主に寄せる愛情にも近い忠誠を伺わせるのに十分だった。主から視線を外し、主が直前まで見上げていた空を見る。その心は、彼と出会った時に飛んでいた。

まだ彼と契約してからの期間は二日でしか無い。

長い付き合いのように話し、慣れたようにアークを使役するラスティであったが、その関係はまだつながれたばかりでしか無い。

ティアマツトと別れ町に向かい歩んでいた彼の前に姿を現し、契約を求めたのだ。その時の台詞を、イントネーションも完璧に覚えている。

『……………貴方は、もしか……………?』

『俺か? ……………俺の名前は^{ラスティハルト}Lastiehalt・Xeen

（「ジーン」）だ』

出会い頭の短い質問と、答えられた名前を聞いて化身の身が震わされたのは今でもはっきりと覚えていた。

‘記録’する必要性を感じないほどに、その時の情景は鮮明に‘記憶’に残っている。

直後に求められた契約に、戸惑いながらも何の疑問を口にするこ
と無く答えるように差し出された手。

震えそうな化身の身を抑え、その手を握った自分。

触れるだけで流れ込むその存在の有り様。

存在規模は人の範疇でありながら、微細なソレを全く感じさせない。
い。

精霊の我が身が直感的に感じた、その甘美な有り様に…………

……………惚れ、憧れ、敬い……………気付けば完全な主従契約を結んで
いた。

それが済んだ時に、少し驚いた表情をしていた主となった彼。

そんな回想に浸っているうちに、自身の口元が笑っているのを感じた。

だがそれを可笑しいとは思わない。

世界種と呼ばれる精霊のその中でも上位に位置する自身が、実際にその存在に触れ、感じ、認めた主を想い、仕えることを可笑しいとは思わない。

「そつえば……………メモ’なるものをマスターは書いていましたね」

回想に浸っていたアークが記憶の中で気になったのが、主が書い

ていた自身に起こった出来事やちよつとした事を書き込むだけのメモ。何を書いているかはアークは見ていない（見せて欲しいと言えば見せてくれそうなのだが）が、何かを書き記すという行為を真似してみたいともアークは思った。

「ですが……………何を書きましようか……………」

何処から取り出したか、手帳サイズのノートと筆記用具をいつの間にか手に握っていたアークだったが、いざ書こうというときに何を書こうか思い浮かばない。

「……………そうだ、今までマスターが出会った方々で、これから色々関わってくるでしょう人物の‘メモ’を書くことにしましょう！」

そう意気込んだアークは、なれない手書きに必死になりながらメモを書き始めた。

『アークのメモ・人物』

「ラストイハルト Lastiehalt・ジーンXeen」

・敬愛する私のマスター。黒い髪に黒い目で、細身で背の高い自慢の主です！！

・誰かと会話するのが好きなようで、暇になれば私に念話をよく繋いでくれます。クラスの委員長に推薦されたそうですが、マスターならば出来るかと信じています、頑張ってください！

・まだであって二日目なので、まだマスターのことは詳しく知りませんが、その人生一生御仕えするでしょう私は、少しずつマスターの事を知って行きたいと思います。

・片方が紅い眼のティアマトという少女のことを気にかけているようですが、何故なのかはまだ分かりません。恋愛感情では無いようですが、気になる次第です。

・XEENを名乗っていらつしやるのですが、これでは世界種たちに自分のことをばらしているようなものだとは理解しているのでしょうか？ ひよっとすると分かってないかもしれません。

・この書き方は箇条書きというそうです（あれ？ ひよっとするとこれは書かなくても良かったかも知れませんが）

・名前の意味は教えていただけませんでした

「ティアマトTiamat・マキナMaxina」

・ここに来たマスターが一番最初に出会った少女だそうです。羨ましいです。黒い髪はマスターとおそろいです。羨ましいです。私ももう少し化身が上手ければ、マスターとおそろいの髪色に出来たのかもしれない・・・今ほどこれを恨んだことはありません。もう一度言います……いや書きます、羨ましいです。

・ 紅い眼は魔石のように輝く時があるのですが、これは何故なのでしょう？ マスターは知っているようですが、まだ私には教えて下さいません。

・ どうやら他の皆様には避けられているようです。マスター以外の方と言葉を交わしているのを見たことはありません。眼と関係があるようです。

・ 私が化身していないのにも関わらず存在に気付きました。かなりのつわものなのでしょうか。あるいは特殊な事情があるのでしょうか。

・ 名前は、どうやらどこかの神話に出てくる女神さんのものと同じらしいです。きっとそれに意味があるのでしょうか。

「ゲルト Geild・アルカシアス Arcasius・フィンニエンス Finniens」

・ マスターと一緒にルームになった（消された跡があるが、よく見ると、虐め甲斐が、と書かれている）可愛げのある少年です。

・ 武家貴族の出なそうなのですが、とてもそうには思えません。（消された跡があるが、よく見ると、弱、と書かれている）優しそうな方です。

・ 双子の妹がいるのですが、似ていません。

・ 地味です（消されかかった跡があるが、どうやら消すのを途中でやめたらしい）きっと他の皆様方の中に埋もれてしまっただけです。

・名前の意味は‘おカネ’だそうです……………巻上げましょうか？

「Hais・Guillity・Schenesvetter」
ハイス ギイリテイ シェーネスウエッター

・ゲルトさんとお知り合いであつたらしい方です。ご自分の髪を脱色されているようです。

・荒々しくて馬鹿っぽい発言が目立つときが多いのですが、本当はそれなりに頭が回りそうな方です。

・ゲルトさんの妹さんが苦手なようです。その妹さんのようすからは恥ずかしさを隠しているというふうでも無く、純粹に彼のことと気に食わないようです。残念です。世に聞くツンデレというものに期待していたのですが……ちなみにこのことをマスターに報告すると、私と同じように残念そうな様子でした。

・名前の意味は‘熱’だそうです……………マスターは凄いです。

私たちは、自分の名前の意味など知らずに死ぬことが普通ですのに……………

「Stella・Ernia・Winnings」
ステラ エルミア ウィニングス

・マスターのクラスメイトで、左前に座っている方です。元気がよさそうです。

・まだマスターとはあまり会話を交わしていませんが、テイアマットさんに声をかけているとちらちらとマスターに視線を傾けています。

・これは確証かどうか分かりませんが、これからよく関わって

きそつな気がします。

・今度、彼女の名前の意味を聞いてみたいと思います。教会の洗礼でつけられた加護のある名前は、きつとなにか意味があるはず
です。

「Poralis・Iiria・Finienis」
ポラリス イイリア フィニエニス

・ゲルトさんの双子の妹さんです。緑の髪が可愛いです。ゲルトさんより、彼女が一緒のルームの方が・・・そっいえば人は性別の問題がありましたね。

・ゲルトさんと違って強そうな雰囲気があります。

・ハイスさんには生理的嫌悪を抱いているようです。きっと脱色された髪がダメなのでしょう。彼の頭を見る度にイライラし始めるのが分かります。

・彼女も、ティアマツトさんと同じように私の存在に気づきました。本当に兄とは大違いです。

・北極星だそうです。

「Alba・Archinam」
アルバ アーキナム

・マスターのクラスの学級担任です。マスターより大きいです。

・少し話し方がマスターに似ているような気がします。マスターの方が全然いいですが。

・右腕に違和感を感じます。

・ 暁らしいですね、髪の色が暁ですね、はい。

第九小節「夕日の歌」

「~~~~~あ……………」

慣れない手書きでメモを書くことに夢中になってしまっているうちに、既に陽は傾いてしまっていた。書いては消してを繰り返していたメモ帳が、夕日の柔らかな赤を受けて同じような色をしていたというのに、アークは書き終わるまで全く気がつかなかった。

ようやく時間が過ぎていた事に気付いたアークは、下の様子を見ている。どうやら生徒たちは食堂に向かい始めた頃だ……………早くしなくてはゲルトとハイスを呼ぶことが出来なくなってしまう。

「こ、こうしてはいられません！ 早くマスターを起こさなくては！」

慌てて自分の主、ラスティを起こそうとした時、アークの知覚範囲に人の気配を捉える。それは、アークが判別できるぐらいにここ二日で見慣れた気配であった。

??
「……………い……………お……………だ……………さい……………た……………」

夢うつつの意識の中、遠くから聞こえてくる声がしてくる。今まで自分を起こしてきた目覚ましの無機質な騒音では無く、新鮮な有機的な音だった。

「って、アークか……………」

その声が、自身が昨日契約した精霊であるアークである事に気付

いたラスティは、ゆっくりと意識と姿勢を起こす。まだ寝ぼけ眼まなこのその目が、アークの姿を捉えると、その表情は何やら焦っているように見えた。そこで意識をようやくはつきりさせた彼は、アークに話しかけ・・・いや、アークが話しかけていたようだ。

「……って、聞いているのですか？ マスター」

「ん？ ……ああ、聞いていない。」

どうやらアークは、ラスティが意識を完全に覚醒させる前に、何かを話していたようだった。だがそれは肝心のマスターの耳には届いてはいなかった。肩を落として見せたアークはもう一度ラスティに状況を説明しだす。

「……ではもう一度言います。どうやらここに、誰かが来るようですよ。恐らくあと一分程で到着するでしょう」

「……ここに何しに来るんだ？ もう夕食だろう？」

自分がここで夕食をとろうとしている事を棚に上げての発言。だが、その次に発せられたアークの発言で、その疑問に少しだけ答えが出たような気がした。

「それで、恐らくなのですが、此処に来るのは……？」
「……」
「……？」
「……？」
「……？」

??

人気の無い屋上への廊下を一人歩いているのは、長く黒い髪に、修道服に似た意匠の濃紺の衣服に身を包んだ少女?????ティアマツト・マキナであった。廊下の石床に打ち付けられるブーツの底が、廊下に残響をもたらしている。

たどり着いた屋上への扉は、金属で作られドアノブがあるだけの簡素な創り。そのノブを掴んだ手に、革手袋ごしに冷たさが伝わる。開いたドアの隙間から流れる風は、冷たい。開いたドアの向こうに見える夕日の色だけが暖かく感じられた。彼女は「赤」が嫌いだが、この色だけは嫌いになれないでいた。

資材置き場か物置のようなその屋上は、階下の内装の様子とはかなり違った様子を見せる。初めて来るはずなのに、そこに懐かしさを感じた。

「こつやって、「屋上」に来るのは何回目かな……………」

初めて来る場であるにも関わらず、もう何度も来ているように感じられた。歩く彼女を、冷たさを持つ風が撫でる。その風に目をつぶり、呟いた。

「今日「も」何時もより寒い……………かな」

その声は、人に聞かれている事を想定してはいない。

??
?????

入ってきた彼女の死角になる位置に、ラスティは居た。元々寝ていた場所が小高い場所であったため、隠れるのにわざわざ場所を移すようなことはしなかった。そんな彼に、ティアマツトの呟きが聞こえる。

「今日、も、何時もより寒い……………かな」

そんな独り言が耳に届き、その言葉に眉をひそめてしまう。今日、も」とはどういう意味なのだろうと、そんなことが頭を巡った。思考に沈んでいるうちに、足音が止まる。静まり返った音と風に、ラスティは気付き、そして何故か安堵してしまっていた。

何をするのだろうか?????そんなことを思考の中で口にするよりも先に、何処からとも無く鈴の音のようなものが聞こえた。ただそれは例えるものに一番近かったのが鈴というだけだ。その音はとも澄んでいて、それでだからか儂さを含んでいた。

直後、オーロラが地上に出来たのではないかと錯覚してしまうかのような光が、辺りを満たした。赤、青、黄の三色が、思い思いに折り重なっている。実物は見たことが無いが、オーロラよりも美しいのではないかと確信したものがあった。

「……………これは……………」

主人の言葉を代弁するかのように、隣に座るアークが驚きの声を漏らした。その光景に見覚えは無くとも、知識に該当する現象があ

ったのも大きい。

そして言葉が歌われた。直後に押し寄せる旋律に、何の心構えもないままに

「Tu fe mi rie sier nor ur , fi gha
a qu l si di ri em (遠く向こう空の下、日は赤く
沈んでく)」

誰に聞かせるともなく、ティアマツトは歌っていた。結界のように音を内にとどめるベルが、その声に深い響きを持たせている。その歌に………まだ最初の一節でしかないにも関わらず、ラストの心は瞬時に最高潮にまで震え出した。

「K o l i d i a z o i e r o l k e r , h i a a i x a
s i e r q i u (小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を
見る)」

音が心に共振する。反響する音に未だ震わせられている中に次の音が飛び込んでくる。そんな既知で未知の歌に息を止めた。

「F o u k a c i n e r v i w l i m o l n , t i u n u
a s u k i a s i e r q i u (何処か違う別の場所、違う人
が空を見る)
T i m i a , o l n i a , n e l m i a , w e i x i a . . . w
o r k a t i g u r i e k i l u k e r u m u (時や場所や
名前や歳や・・みんな違ってはいるけども)」

自身の潜められた息や衣服の擦れるささやかな音、果ては心音までもが邪魔に思えてくるようで仕方が無い。

そんな主の精神の状態が流れ込んでくるアークは、その情報を整

理するだけで精一杯だった。音を聞いて連想される情景が、走馬灯のように次々に流れ込む。

「soufia asiwenna quekilia (それでも同じ夕日を眺めてる)」

紡がれるその言葉は詠語によるもの。そしてそのメロディは、どこか聞き覚えがあるもの。だがその覚えは面影だけで、はっきりしたものは浮かんでこない。そのようなことを記憶と照らし合わせることもさえも、ラスティは放棄していた。

「Owl nexia fum riie (いつも隣に誰か居て)」
「nokt hopiumu siekilia (そう願いはしな
いけど)」

その歌から寄せられる寂しげのあるイメージに心を軋ませる。それは幻聴となって耳元で鳴っているように感じられた。

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n (せめて同じ景色を眺めて欲しい)」

「softa lewriessa hopiens (そんなささやかな願っだけ。)」

これは「彼女の」歌なのだろうか？ 既存の歌に、ここまで心を乗せきつて歌うことが出来るのだろうか？ そんな疑問さえも、押し寄せる感情の流れに押され跡形も無くなる。

ただ音を受け止めるだけの思考をもって、ラスティはずっとその歌に聞き入っていた。

「……………」

一曲を終え、屋上に静寂が戻った。静まり返った空気とは逆に、ラスティの心は様々な音をあげる。音が過ぎ去ったというのに、その心中はまだ激情の渦中の中に居た。

その余韻ともいえる音に耳を澄ませ、ゆっくりと開かれた彼の目には、ようやく冷静さを取り戻した色が見える。次の瞬間、意を決したように勢いよく立ち上がる。

「よつとー!!」

今まで身を隠していた物陰から勢いよく身を乗り出す。そんな行動でたつた物音に反応し振り返ったティアマツトは、突然現れた人影に驚きの表情を浮かべている。そんな彼女の表情を見て笑うラスティは、先手と言わんばかりに挨拶した。

「よつ!!ティアマツト」

ラスティから発せられた簡単な挨拶の言葉さえも上手く飲み込めていないうちに、その場からラスティは飛び降りる。立つ場の高さが同じになった。

「いい歌だな。」

それは、心の底からの賞賛だった。

第十小節「それは一番訊きたかったこと」

「……………」

歌い終えた彼女は、深くゆっくりと、残りの息を吐き出す。周囲を彩っていた光は既に止み、それが歌の終わりを示しているようだった。

またもう一曲歌い出そうとしたその時、背後から物音がした。

「！」

勢いよく、何かに身構えるように、彼女は振り返った。その先には、こちらに笑顔を向けている男子生徒？？？？ラスティの姿があった。突然現れた彼の姿に動揺した彼女は、思考がフリーズする。

「よ！！ティアマツト。いい歌だな。」

呆然とする彼女に、そう笑いかけるラスティ。ここに来てようやく、盗み聞きされていたという事実には彼女は思い至った。見る見るうちに顔が紅潮していく。顔が火照る感覚は、一気に彼女の冷静さを奪おうとしていた。

「もも、もしかして……………きいてた？」

「おう！」

余りにも爽やかすぎるその返事に、ティアマツトは怒鳴り出す。それはラスティには初めての表情で、彼女にとっても久しぶりなも

のであった。

「って、おう、じゃないでしょう!! だい」

「ほい」

「たい何で……え？」

怒鳴り始めたティアマツトの勢いを削ぐように差し出されたのは、大きく膨らんだ袋。いぶかしむように、その袋を見つめる。怒る夕イミングを、完全に失ってしまった。

「まだ飯食ってないだろう？折角だから食おうぜ。」

どうやらそれには、購買部から買ってきた食糧が詰め込まれているようだった。ラスティの、拍子抜けするその提案に、急に力が抜けたように大きく溜め息をつく。

「はあ………」

「溜め息なんてついてたら、幸せが逃げちまうぜ？」

その様子に茶化すようにラスティが言う。対するティアマツトは、もうどうでもいいという風に返した。

言ってしまったから、その事を後悔した。

「そんなの、どうせ元々無いよ。」

その返事に、ラスティの表情が一瞬……固まったことを見逃しはしなかった。何気ない、そんな一言だったが、その言葉にラスティ

イは今までとは違った反応を見せていたのだ。

「……………ごめん……………」

こちらが視線を外したと見せかけたときに彼が唇で呟いた言葉に、何故か申し訳ない気分になってしまう。

そして、彼女はこの時確信を持った。

ラスティは、この紅い眼に伝わる云われを理解している、と。

??

屋上でも、吹く風が弱い場所に、二人は並んで座り込む。

屋上の外郭近くに、並んで夕日を臨むようなかたちだった。

そして、アークがかけた簡易結界に気付いたティアマットは眉を吊り上げる。が、アークによるものだと思い至り、その表情を元に戻した。そんな表情の変化を隣でラスティがニヤニヤと笑いながら見ていたのに気がつき、勢いよく顔を背ける。ラスティから見えるその耳は、すこし赤かった。

二人の間にラスティが買ってきた食糧を置くと、彼がティアマットに話しかける。

「購買のもんだが、俺からの奢りだ。半分までなら持っていっていいぞ。」

そう言われて覗き込んだ袋の中には、明らかに一食分とは思えないほどの食べ物が詰め込まれていた。

(これだけあれば、私だったらどれだけでもつかない……?)

恐らく二日三日ぶんはあるだろうと、彼女は検討をつける。ソレと同時に、これだけの量を一人で食べるつもりだったのかと疑問に思った。その事を口に出す事は無かったが。

「半分も食べれない。……これでいい。」

そうぶっきらぼうに言い放ったティアマットは、牛乳とパンを二つほど貰う事にした。それからラステイは、自分が食べるものを選び出す。取り出したサラダのラベルには、パインサラダと書かれていた。

「はは、コイツは何か作為性すら感じるぜ。」

そう言いながら、そのサラダの名前に笑う様子に、ティアマットは訝しむと同時に、どこか彼が子供っぽいと思う。そこまで考えて、自分がラステイをじっと見つめていたことに思い至り、慌てて顔を背ける。その先には、地平に沈む陽が淡く輝いていた。

始めのうちは無言で食べていた二人だったが、唐突に、ラステイが口を開いた。

「ほんと、吃驚したぜ。屋上で何やるんだらうって思ったら。まさかティアマットが歌を歌うなんてな。」

「う……………ら、ラステイこそここで何してたの?」

「ああ俺か? 昼寝、さ」

あっけからんとしたその答え、彼は本当に何を考えているのだろうと、彼女は疑問に思った。

「……………呆れた」

「まあまあ、いいじゃねえか。学院の中そのものはアークが俺の代わりに全部覚えてるんだからさ。」

そんなことより……………本当、上手かったぜ、歌。」

「そう……………かな」

ここにきて突然の賞賛。辛うじて答えるその声には、自信がこもっていない。

そうだよと、微笑んで励まされて彼女は更に顔を赤らめる。それでも、そうかなと、まったく同じ言葉を返すだけだった。だがそこには、今まで見受けられた少し張り詰めた印象が感じられなかった。

「今まで誰かから、歌について何か言われたこともなかったから……………」

そう語るティアマットの表情は、少し寂しさを垣間見せるも、嬉しげなものだった。

そんな彼女の表情を見たラスティは、安心したように言った。それは、今までに無い優しげな声色だった。

「そっか……………じゃあ俺は、ティアマットの歌を評価した最初の人間ってわけだ。」

そう言って何故か嬉しそうに笑うラスティ。そんな彼に、彼女は

子供っぽい印象を抱く。

人と殆ど接することの無い彼女は、こんな彼の反応に戸惑いつつも、思わずくすぐったくなる。

新鮮だった。

そうして時を過ごす。特に会話をする訳では無いが、並んで夕日をみて食事をとることが、彼女には新鮮だった。

こんな時間が続けばいいと思っっている自分からしくないと感じたが、不満ではなかった。

夕日を臨み、並んで食事をとる。その食事は購買で購入したもので、味は食堂の物には劣る。だがそれは、‘肴’次第で単なる食事以上の何かに昇華する。

決して会話の数は多くは無い。ラスティが話し、ティアマツトが受け答える・・・そんな会話が途切れ途切れでありながら何度も繰り返された。

歌の話題などで上機嫌に、返る言葉が少なかるうとも積極的に話すラスティ。恥ずかしそうに言葉数少なくではあるが、いつも見せていた他者を寄せ付けない表情に親しみを浮かばせながら答えるティアマツト。それは、少女が心の中で憧れていた日常だった。

時間にして、一日の二十四分の一と少しでしかない僅かな時間。そんな時間であっても、ティアマツトには二十三倍のソレよりも価値があった。

何か思惑があるのかもしれない、なぜ‘そう’してくれるのか分からない。だがそれでも、自分を‘紅い眼を持つもの’では無く、‘ティアマツト・マキナ’として扱っていていることがそんな疑問をどうでもいいものに思えさせてしまうほどに、彼女は嬉しかった。

会話が無く、ただ夕日を前に沈黙を重ねるだけの時間にさえも意味があった。ただ過ぎ去っていけばいいと思っただ時間とは違う。引き止めていたい何かがあった。

「……………こうして夕日を見るのってのもいいな。」

今までよりも短く、しみじみと同意を求めるような声。ティアマツトの方を見ずに、空の向こうに沈みかけたそれを見ながらもらずあれだけあつた大量の食べ物をすべてその胃に収め、後方の積み上げられた木材の壁に背を預けてその体を休めていた。

そんな彼に、ティアマツトは自身の髪を吹く弱い風を感じながら答えた。彼女は彼の隣で、膝を抱え込むようにして座っている。

「うん、そうだね……………赤は嫌いだけど、夕日は嫌いじゃない」

それは以前から抱いていた感情だった。誰にでも同じく、優しく照らしてくれる夕日。昼間空高く上がっているそれとは違い、直に見ても目を焼く事がないそんな光。赤は嫌いであつたが、そんな光をだす夕日のこんな赤だけは、彼女は嫌いではなかつた。

「……………赤は嫌いかな？」

ラスティから返されたその言葉は、質問の内容の割りに長い時間をかけて発せられたものだった。そんな僅かではない時間の間の変化に、自身が感じた確信をより確かにさせる、そんな証拠のようなものを見つけたような気がした。

「うん……………やっぱり、私、‘こう’だから」

そう言ってラスティの方に振り返る。同じように彼女を見つめているその目に、自身の紅く淡く光る眼を焼き付けようとするかのように見える。質問と行動の意味を何となく分かっているラスティは、彼女が視線を外すまでしつかりとその眼を見続けていた。

‘人々に嫌われる原因であるこの眼の色を好きになれる訳が無い’

その眼はそう言っているようにラスティは感じた。きっとソレは間違っではないだろう。

伝え終えたようにティアマツトが視線をそむけた後、その場には先ほどとは違った沈黙が訪れていた。ただお互いに並んで、風に吹かれ、沈む陽を見て・・・同じようで少し違うそんな状況の中で、ティアマツトはこの日初めて自分から話題を振った。

それは……………普通、人には大した話題ではないだろう陳腐なものだった。

「ねえ、神様って……………居ると思う？」

息こそ飲みはしないが、その予想だにしていなかった質問に表情を固めるラスティ。ティアマツトが夕日を見つめたままでさえなければ、その様子の変化に何か察したであろう。彼は、自身の動揺が気付かれないように答えた。

「さあ……………どうだろうな」

らしくも無く素っ気無くなってしまった対応に、内心で舌打ちをする。だがそんなラスティの状態に気がつかないかののように、彼女はその言葉を受けて話した。

一瞬、風が少しだけ強くなる。それは、主人の感情の起伏をうけたアークが一瞬だけ出してしまった、結界の綻びによるものだった。

「もし、神様が居たらね？ 何を思って、この世界を創ったんだろ
うって……………そう、思うんだ」

質問ではなく、ただ、自分は疑問であると。世界を創った神たる存在が、一体何を思っこの世界を形作っただろうと……………

…それは、彼女が抱く疑問としてはある意味当然といえるものであ

った。

夕日を見たままの彼女の横顔を、ラスティは見つめる。既に結界のほころびは収束され、座ると地面につく程であった彼女の長い髪は、風が収まると再び地面にその黒を横たえる。

その一瞬舞い上がった髪の毛の奥で垣間見たティアマットの表情に、ラスティは疑問を投げかけずには居られなかった。

「……………なあティアマット……………君は、その神を恨むか？」

その質問の中に、答えを求める渴望を滲ませる。彼女はその質問には答えず、ただその口元を緩めるだけだった。

無言のまま、今まで座っていた小高い場所から地面に向かって飛び降りるティアマット。二メートル近くはあるだろうその高さからの衝撃を微塵も感じさせないやわらかい音で着地した彼女は、衝撃を逃がしたその足でクルリと振り返る。遠心力で舞った濃紺の服と漆黒の髪が、彼女の眼がラスティを捉えると同時に舞い降りる。

「さあ……………どうでしょうね」

先ほどのラスティの発言に対するあてつけのような物言い。その口調と、陽が沈みきったせいで少し見えにくくなってしまったその表情からは、感情を読み取ることは出来なかった。

第十一小節「それは話すことのできないこと」

「ラスティ、明日もまた此処に来るの？」

「歌を聞かせてくれるというのなら、来ようかな」

そんなからかったようなラスティに、肯定ととれる短い返事を返して、彼女は屋上から去っていく。時間はそれなりに遅かった。

ティアマットが去っていったのを見届けて、ラスティは飲み干したパックの飲料の空を、袋の中に投げ入れる。それは少しだけ狙いが外れて、中に納まることなく傍らに転がった。

「一番聞きたいことだったんだけどな……………これが」

沈んでしまった夕日の跡を見つめるようにして、そう、呟いた。

ティアマットが居なくなってしまうてしばらくしてから、ラスティはそこから立つ気配を見せなかった。アークは少しづつ冷えていく気温を和らげようと、無言のままに結界を強める。

話相手を求めるような主の雰囲気、アークはその姿を現す。そこは、先ほどまでティアマットが居た場所だった。

「……………物語を書くときにな、俺は身の回りの色んな物事を参考にして、とにかく多くの事象を、設定として取り入れた」

それは、ただ物書きが自身の執筆についてのことを語るようにしか聞こえない語り。だが、その語りが持つ意味を、傍らで耳を傾けているアークは理解していた。

今は少女の姿をしているアークが、その長い髪も相まってティアマットに重なって見える。こちらを見つめるその表情に、背格好な

ど色々な点で相違があるが、なぜかラスティはそう思ってしまった。

「アルビノって、知ってるか？」

傍らに居る自身の使い魔たる精霊に、質問を投げかけるラスティ。その視線は未だ中空に向けられて、その心情を読み取ることは出来ない。

僅かに首を傾げさせたアークが、少々自信なさ気にその質問に答える。

「確か、生まれつき色が異常に白い個体……でしたでしょうか？」

その答えを受けたラスティは、それに詳しく説明を付け加える。

「ああ、遣伝子の異常のせいで色素が作られないおかげでそうなるんだ。そしてな、アーク。その眼は網膜の血液の色を反映すること……」

そしてゆっくりと眼を閉じる。それは祈りをささげるような表情で、懺悔を重ねるようであった。

「紅く見えるそうだ」

まあ、ティアマットのソレとは違うんだけどなと、あとに続いたその言葉は消え入るように小さい。だがそれを、しっかりとアークは聞き取っていた。無言で聞いているアークの様子を受けて更に語る。それは「ココ」ではアーク以外に話せないことで、そうすることが今のラスティの精神を安定させているともいえた。

「ソレを知ったのは、インターネットっていつて、まあ………要は

色々と情報を集められる端末だと思ってくれ……………その時はネタ探しに夢中だった」

「そんな時に見つけてな……………そのアルビノの動物は、世界では神聖と崇められるか、不吉だと恐れられるかどちらかだった……………」

そこまで言われては、何故自分の主がこれほどに苦しそうな表情をしているのか、その事を容易に察する事が出来た。事情を理解し始めたアークが、その表情を揺らがせる。不気味なほどに無表情な自身のマスターにかけたその声は、酷く震えていた。

「ではマスター……………貴方は……………」

アークの言わんとするところを察し、ラスティは自嘲気味に微笑む。とても笑っているようには、アークには見えなかった。

「ああ……………俺が選んだのは後者だった」

そう無機質的に告げる主の声が、アークにはつらかった。「そう、思わないで下さいと、出来るのなら言ってしまう良かった。だが、感情を表に出そうとしない主の表情が、それを許さない。」

「そう、俺はこの世界を、そうしたんだ」

もう、やめて下さいと……………そう……………言いたかった。だが、主のその懺悔にも似た告白を、アークにはもう止めることは出来なかった。自分に悟られまいとしても、自然に流れてくる感情に、そうする事を躊躇させられた。服の上に乗せられた手が、薄青色のスパートを強く握り締める。

「俺が、彼女を独りにしたんだ」

声を荒げる訳でもない。涙を流す訳でもない。

「偶然に過ぎないのは分かっている……だが、こう、思うんだよ、もっところさ、平和な世界を創ってやれたらなとかさ……」

「何を思っこの世界を創ったんだろう……」

この言葉が、彼にとってどれだけ辛いものであつただろう？

主との繋がりから感じられるその感情を直接的に理解してしまうから、アークはラスティのそれが痛々しくて仕方が無かった。

ただ無言で、彼の言葉を受け止めることしか出来ない。彼の心を癒す手段が、精霊たるアークには分からない……そのことが、ひどく胸を締め付ける。

「なあ、アーク……俺は……アイツに何をしてやれる？」

そんな質問に、アークは何も答えることが出来なかった。ただ黙って主の手を握り、化身の肌がそのぬくもりを感じる……

私は、マスターに何をしてあげられるのでしょうか？？？そんな言葉投げかけることのできる相手が、アークには居なかった。

その翌日の昼休みのことだった。非常に混み合う学院の食堂に行きたがらないラスティは、購買で購入した弁当をゲルトとハイスと食べていた。ラスティの机の位置に集まるようにして、ゲルトが向かい合わせ、ハイスがその横につけるように机を動かしている。ラスティの提案したこのようなことが新鮮だったのだらう、机を移動させてくっつけるというただそれだけの行為に、二人は目を輝かせ

ていた。

それを見ていた他のクラスメイトたちも、彼らと同じように机を動かし始める。貴族出身の生徒たちも、全員ではないがその貴族らしからぬ行動にゲルトたちと同じような表情を浮かべていて、そんな彼らを見る平民出身の生徒たちもどこか楽しげだ。

こうして見ていると、この学院に入学している貴族出身の生徒たちはその立場を洩にかけることなく、平民出身の生徒達とこの二日でかなり仲良くなれているように思える。

平民からしてみれば、装飾こそ豪華だが、そこには貴族特有の堅苦しさや陰湿さを感じず……

貴族からしてみれば、空気こそ緩いが、そこに安っぽさを感じない。

きつと、そうほうに配慮した校風にしようという側面もあるのだろう。だがそれ以上に、ここ七年間で行われたという貴族たちの意識改革なるものが功を奏しているという。何が行われたかはわからないが、そのおかげで、貴族たちの平民に対する態度がかなり変わったという。まだ完全にといいわけでは無いらしいが、この教室を見てみるに、大分効果はあるのだろう。

「いやあ、やっぱこう、堅っ苦しくない生活っていいわなあおい」

「ハイスさんに堅苦しさというものが、今までにあったかどうか分かりませんが、どうなのでしょう?」

こうして、食事をしつつ雑談する貴族の光景は、この学院では珍しくなくなりつつあったらしい。もちろん、'礼節科'なる選択教科で貴族の生活上必要な要素を学ぶ機会はあるらしいが、普段のうちは気にしない。

そんな貴族の様子は、育ちの良いだけの友人という認識を平民出身の生徒に植えつけるには十分だったようだ。

「（思っでいらっしやっただよりも、貴族と平民は仲がよろしいのですね）」

「（時代の流れが、そういう風になってたってことだ、これがな）」

嬉しそうに教室の光景を見ているラスティの様子をうけて、アークが話しかけて来た。その陽気な声色に、念話で同意の返事を返す。そんな食事も終わり、残りの時間を談話でつぶしていると、そこに一人、介入してくる女生徒の姿があつた。灰銀の髪を短く切りそろえ、ティアマットの左眼のように濃くはないが青い眼をしている。

「ねえいいんちょ？　ちょっといいいかな？」

そう言ったのは、ステラ・E・ウィングス。貴族出身の生徒だが、その元気の満ち溢れた気性と言動で、平民出身の生徒達にかなり親しみを持たれている子である。

かといって貴族出身の生徒たちに受けが悪い訳でもなく、このクラスで貴族と平民の関係の橋渡しにもなっている。そんな存在だった。このクラスの仲がいいのも、彼女の存在によるものが大きいのだろうとラスティは考えている。それと同時に、ゲルトではなく彼女を副委員長にすればよかつたとも考えていた。

「え、俺？」

座った姿勢から、見上げるようにして反応するラスティ。その隣では、ゲルトとハイスも同じような反応をしている。色気のあるような話題では無いようだが、どこか言いにくそうにやや小さめな声で、用件を言った。

「うん……ちょっと相談ごとなんだけどさ……それが……アイマツトちゃんについてなの」

「アイツの？」

だれかれ構わず愛称や‘さん’‘君’果ては‘ちゃん’づけで呼ぶような彼女だったが、その口から出てきた名前に驚きを含めてラストイは眉をひそめる。

彼女はラストイの左前に座っていたので、椅子をラストイの机まで持ってくる、話が長くなるというように、その白桃色のスカートを丁寧に扱って座った。言動とはちぐはぐなその所作は、やはり貴族出身なのだろうかかわせる。

何故自分なのだろうと考えていると、そんな表情を見て取ったステラが答えた。

「うん……ほら、いいinchよってあの子と仲いいでしょ？」

「そついやそつだわな。オレとしては、すこしばかり気になんぜ」

「確かにそつですね」

その言葉は、ラストイを置き去りにしたまま、他二名を納得させる。初めは納得のいかない様子ではあったラストイだが、彼女に話しかけるのは自分しかいないという点に思い至ると、少々ではあるが納得した。

「それでね？　ここからが本題なんだ……あのね？　わたし、あの子と……話したいんだ」

恥ずかしげに、気まずそうに言うその様子は、何か思いつめたよ

うでさえあった。

自分から話しかければいいだろうという言葉を追いついて、
て、どうしてという言葉が、先に口を飛び出していた。

そして彼女の口から、入学式の日にあった話が語られた。

第十二小節「二人の心、鈴音に」

「はあゝ。紅い眼の人かあ……」

入学式の日、ステラ・E・ウィニングスの寮に向かうあしどりは重かった。ソレは、彼女が耳に挟んだことが原因である。それは、彼女の情報通の先輩からもたらされた。

曰く

「今年の入学生には、紅い眼の女性とが居るらしい」
「名前はティアマットというらしい」

そして見た部屋割りの表の中で、同じ番号の四角の中に囲まれた、自分の名前とティアマット・マキナという名前。自分が思っているほど、自身の運は強く無いらしいと、その時の彼女は思った。

どうやら自分のルームメイトは、そのうわさの紅い眼の持ち主であるらしいとわかった彼女の、その足取りは重い。式後のパーティーからは早々に出てきた彼女は、その紅い眼についてのことはかりを考えていた。

紅い眼は災厄の象徴というのは、この国……いや、この大陸の人間には共通の認識だった。紅い眼の吸血鬼の伝説、魔獣と呼ばれる存在の眼？？？？？そして七年前に現れた異常な存在たちの存在も、それに拍車をかけていた。

突然現れ、隣国を巻き込んで国中に恐怖をばら撒いたその存在は、みな総じて眼が赤かったという。血濡れの眼の悪魔たちと、当時は言われたものであった。その傷跡が完全には癒えていない今の世の中は、その紅い眼を恐れている。

勿論、その紅い眼の持ち主がその存在たちと同じということは無いだろう。それなら学院に入学など出来ない。

だがそうは言っても、不安にならずには居られない。

そうして悩んでいるうちに、いつのまにか、気付くと彼女は既に部屋の前まで到達していた。

その扉の前に立ち止まり、彼女は扉を開けることを躊躇する。

「（ええい！！らしくもない。こうなりや覚悟を決めるんだよ、わたし！）」

そう奮い立たせるようにしてドアを開けた彼女を出迎えたのは、明かりの付いていない暗い部屋だった。その様子に、ステラは軽く口をあけたままで固まっている。

「おろろ？ これってもしかして、未だ来てないって……………ん？」

再起動し、まだ相手は来ていないという判断を下した彼女を下そうとした彼女の耳に、ゆつくりとした金属音が聞こえる。それは、ドアの鍵を閉める音だった。

どうやら、ステラが到着する僅かに前に、ここにはその人物が到着していたらしい。鍵を閉めるのにどれほどゆつくりなのだろうと思うほどに緩やかでちいさなその音が、その存在を告げていた。

布の擦れる音の後、部屋からは物音が消えた。

部屋に明かりを灯そうとした姿勢のまま、彼女の動きは固まっていた。

ゆつくりとドアを閉めた彼女は、物音を立てないように部屋に入り、そして紅い眼の少女が入っていったであろう部屋の前で立ち止まると、自らが尊敬している学者を真似して額に指を押し当てて思案した。

何故鍵をかけて、早々に寝室に入ってしまうのか。

扉の向こうで何をしているのか。

だが、どう悩もうとも、そんな曖昧な疑問には、思いつくコトな

どいくらでもある。

そしてそれはどれも想像でしかなし、確実性など論外だ。そこで彼女は……

「（こうなったら、確かめてやるうじゃないの）」

……貴族らしからぬ気合の入れ方でガッツポーズをとると、最新の注意を払いながら扉に近付いた。その真剣な表情は、まるで建物に忍び込んだ盗人の様。つまり、盗み聞きでもしようというのだ。そして、眼と鼻の先までドアに近付いたところで、部屋の中からはすすり泣きが聞こえてきた。

「え……………」

耳を近付けようとしたその動作がとまる。眼は驚きに見開かれ、肺は一瞬その役割を忘れる。彼女の思考は混乱した。

それは、彼女が予想だにしていなかったことだから……………

……災厄の眼を持つという少女が、薄い扉の向こうでしていることは、すすり泣くということだから……………

怖い????????まだ顔を合わせてもいない少女に抱いていたはずのその感情は、いつの間にか消えていた。

だが、代わりになる感情が、彼女には浮かんでこない。混乱した彼女の脳は、抱くべき感情をたたき出せない。

わたしは何に怯えてたの？ 彼女はどのようにして泣いてるの？

そうしてそのまま立ちすくむステラは、その泣き声が止んでしまったあとと暫くそこを動くことが出来なかった。その手は知らず知らずのうちに、お気に入りの色のスカートに強く皺を作っている。その手からは、何時までも力が抜ける兆しは無い。

そして……………その部屋に、その日明かりがともることは無かった。

今日も屋上で、空を眺めながら仰向けになっている。徐々に色付きつつある空が、時計に代わり時を告げている。

大きなあくびをする。その行為は、これから来るであろう人物を待っているが故のもの。

「やっぱり今日も来たんだ、ラスティ」

その声は、待ち望んでいた‘彼女’のものだった。振り向いて彼女の姿を、彼はその視界にとらえる。同時に、昼にステラが呟いていた言葉を、思い出す。

『わたし、あの子のルームメイトなんだけど……まだ、話したことはないんだ』

まだ部屋で顔を合わせたことも無いと言うその発言を思い出して、普段は何をしているのだろうと、そうラスティは質問したくなった。

そんな彼の心中は知らず、彼女は昨日座っていた位置に立った。その右腕に、包みが握られているところを見ると、彼女は今日は食料持参で来たらしい。

「えっと……待ってたの？」

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ。それでね、近づいてみて分かったんだけど……あ

の子、泣いてたんだ』

そう尋ねてくる彼女は、きつと不安だったのだろう。寝室が分かれてるとはいえ、同じ部屋で暮らすことになる相手に、拒絶されてしまうのが怖かったのだ。

そして、そう思えば思うほど、ラスティの中の罪の意識は大きくなる。

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言われて、軽くではあるが嬉しそうに微笑を垣間見せる彼女は、何を思っているのだろうか？

『君は、その神を恨むか？』

昨日聞いたかった疑問が、どうしても頭から離れない。

『放課後、屋上に来てくれ。ついでに弁当も』

そうラスティにいわれて屋上に行き、指示を受けて隠れるように物陰に隠れていたステラは、入学式の日のことを思い出していた。

彼女と話したいと言ったのはいい、だが何を話せばいいのだろう。どう接すればいいのだろう。冷たい風が奪っていくものは、体温だけではないうような気がした。

「(ステラさん。どうやら彼女が来たようですよ)」

思案に沈むステラに声をかけたのが、半ば無理矢理連れてこられ隣に座っているゲルト。そしてその一つ奥には、半ば無理矢理連れてきた張本人のハイス。二人は今回の件に便乗したようにこの場に居た。

やっとかよ、そう呟くハイスと同じ心境で、彼女は耳を澄ませた。ティアマットの方から声をかけているのが分かる。これは少々意外だった。

「えつと……待ってたの？」

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言葉を交わす二人の様子は、傍から見ると待ち合わせをする恋人の様。そんな二人の???特にティアマットが放つ言葉のその声色は、クラスに居た時よりも明るいのが容易に分かる。それほど彼女はラスティに心を開いているのだろうか。

「(会話だけ聞いてつとカップルみてえだな、おい)」

「(そんなこと本人に言ったら多分怒りますよ?)」

「(二人とも静かにしなさいよ。聞こえちゃうよ)」

確かにハイスが言ったことは他二人も思っていたことだが、少なくとも、ラスティが彼女に持っている感情は少し違うような気がするとも思っていた。

それにしても、歌とは何だろう？

その疑問を誰が口にするよりも早く、聞こえてきたのは鈴のような澄んだ音。見えたのは赤・青・黄三色の光のベール。

そんな異様な光景に、意外にも心当たりがあったのはハイス。彼

の口からは、二人には聞きなれない言葉が聞こえてきた。

「鈴唱、……………マジかよ」

「(え、何？ ハイス君しって……………)」

その疑問をさえぎるように、直後その場を歌が満たした。それは、開けた空間で歌っていることが信じられない程に響きを持っていた。反響する音が、その場に居た全ての心に染み渡る。

それは、詠語の歌。神秘の宿る言葉の歌だった。

「Tufe mirie sier nor ur, figha
aquq siudriem)遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kolidia zoier olker, hia aixa
sier qiu)小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Fouka ciner viwlim oln, tiunu
asukia sier qiu)何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

「Timia, olnia, nelmia, weixia…wo
rkati gurie kilukerumu)時や場所や名前
や歳や…みんな違っているけども)」

「soufia asiewenna quekilia)それ
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexia fum riie（いつも隣に誰か居て）」
「nokt hopiumu siekilia（そう願いはしないけど）」

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n（せめて同じ景色を眺めて欲しい）」
「softa lewriessa hopiens（そんなささやかな願っただけ。）」

その歌が終わるまで、誰も何も言葉を発しなかった。いや、発せなかった。その残響は空気を震わせなくなってもいまだ意識の中に残り、感傷を与える。

「すごい……こんな歌があるなんて……」

賞賛の言葉を捜すには、あまりにもその心は震えすぎている。感動で紅潮しているその顔は、寒さに凍えていたことなど忘れていくかのよう。隣のゲルトも同じような表情を浮かべていて……

「あれ？……ハイスさん？」

……さらにその隣のハイスは、以前からの知り合いのゲルトさえ見たことも無いような表情で、歓喜に打ち震えていた。

それは歓喜を通り越して驚愕になり、ハイスの顔を蒼白にさせていった。

第十三小節「歌を聴いて」

「……………ふう……………」

歌い終えたティアマットが、肺に残った息を最後まで吐き出す。三色の光の中で映えていた彼女の黒髪は、つい先ほどまでは光に喚起されたかのように重力を無視して軽く風に吹かれていた。

眼を閉じていたラステイが眼を開く。視界からの情報を遮断することにより鮮明に音に聞き入ろうとしていた彼は。眼を開いた時に目の前に広がっていた空をはっきりと認識するまでに僅かなタイムラグを感じたような気がした。それほどに聴覚に自分は集中していたのだろうか、そう自覚して笑う。

「ああ……………昨日も聞いたが、やっぱりいいなあ」

そう呟いて恍惚の表情を浮かべる彼は、本当にここに歌を聴きに来てくれているだけなのかもしれないと彼女に思わせる。そこまで評価されているは余りにも恥ずかしいもののだが、自分の歌が賞賛されるのは悪くない気分ではあった。

ラステイを覗き込むように移動する。彼の相当に色の濃い眼は、確かにティアマットの眼を正面から見つめている。

ティアマットに語りかけるといふ風でもなく、独り言のように呟くラステイにティアマットは、上から覗き込むようにその近くに立つ。髪が重力に引かれ、手を伸ばせば届きそうな位置にあった。

「どっするっ？」

それは、まだ歌ってくれるという意味なのだろうか。それともま

た別の意味だろうか……ラステイとしては、もう一、二曲歌ってもらいたかったのだが、‘用事’があったことを思い出し、それはまた次の機会にとっておくことにした。

仰向けの姿勢から上半身のみを起こし、彼女の眼を見据える。ただかすかに光を放ち続けているそれと、光を引き込むように在る深青のもう片方を見つめて、言葉を告げた。

「ああ………そういえば、言い忘れてた、んだが、今日はまだ‘お客さん’がいるんだ」

その言葉の意味が理解できなかった彼女は、彼がその‘お客さん’を呼ぶまで固まってしまっていた。いや、呼ばれてなおさら固まることになってしまふ。

「おーい！ そろそろ出てきてくれ！」

??
??

「さて、今日は観客同席で飯を食おうってな、これが」

夕日側から見て右から、半円を作るようにステラ、ティアマツト、ラステイ、ハイス、ゲルトの順で並んでいる。丁度その中央になるように座ったラステイが、その食事を進行(?)した。

弁当を持って来いという彼の指示は、こういうことだったのだ。同じ釜の飯を食うとも言いたいのだろうか……ラステイの作り出

した流れに半ば巻き込まれるようにして、今のかたちを作っていた。せめて何か言ってくれてもよかったのに……そんな恨めしげなラスティへ向けた視線は、今回は効果があったと見える。視線に気付くと気まずそうに後頭部を掻いた。

「なあ？ どうだった？」

そんな視線から逃げるように皆に質問を投げかけるラスティ。彼は一体何がしたいのだろう……そう思ったティアマットは、直後に発せられた回答の主に視線を投げかけた。

「ああ、すげえいい。マジで、ホントに……ああ、アレが鈴唱かあ」

即座に回答したのは、脱色された薄い色の金髪に暗めの赤の細身のライダーズジャケットを着ていたハイス。ティアマットが見ていた限り、普段はもっと気合の入らない表情で、ガラの悪いという印象の強かった彼だが、今このときのその眼は子供じみて輝いていた。

「すつげえよなあ！ あんな大規模に制御された力場んなかで、あんなに綺麗に歌えるんだぜ！？ それにあの旋律……原曲が、アウス・デア・ノイエン・ヴァルト」の第二番だっただけのはわかるが、まさかあんないい歌にしちまうなんてなあ！！」

今まで黙り込んで難しい表情をしていた彼が一変、決壊したかのように饒舌になり始める。それにつられたように、その話題にラスティが介入していった。

「アウス・デア・ノイエン・ヴァルト。……ああ！ そうか、あの旋律だったのか！」

「お！ ラステイはわかんのか!？」

どうやら話題が一致したらしい彼らは、途端に歌について話し始めた。驚いたようにその二人を見つめていたティアマットに、話しかけたのはゲルトだった。困ったように苦笑を浮かべている。

「すみませんティアマットさん。こう見えてハイスさんは音楽好きなんです」

どうやらラステイさんもそうみたいですけどね、と後に付け加えた。困ったようにしているティアマットに、視界の外から、今度はステラが声をかけてくる。

「バカは放っておこう？ バカは」

そういい捨てて同意を求める彼女の表情は明るい。そこには、以前まであった恐怖の色はすっかり抜け落ちていた。

そしてこの時、彼女はようやく、ラステイ以外の人間と会話をした。

「うん。……そうしたほうが、いいかもしれない」

ただ受け答えるだけの反応だが、こうして会話できたのは、双方にとって大きな進歩。簡単なことで、何気ない日常の一コマになりそうですらない小さなこの一言は、ティアマットにとっては希望を象徴しているようにさえ思えた。

歌について語ってばかりのラステイとハイス。時々からまれ巻き込まれるゲルト。怒鳴り、人が困ティアマットっていると彼らに怒鳴るステラ。

そして、そんな彼らを見て笑うティアマット。それは、今までに

見せた事の無い、晴れやかなものだった。

「あ、もうこんな時間です。今日は課題やっておかないと拙いですよ」

そんなゲルトの一言に、日が完全に落ちかかっていることに気付いた一同。この集まりは、もう終わろうとしていた。

自分で作ってきた弁当を纏めるステラ。広げていた包みに全てを包み終え、背後に人が立っていることに気付く。

「ん？」

それは、何か言いにくそうにこちらを見ていたティアマットだった。まるでなにか期待して、でも期待が持てなくてといった、そんな様子。

クスリ、そう笑って、彼女の意図を察する。立ち上がって、彼女は少女に向き合った。ティアマットよりも一回り大きいステラの視線は、少し高い。

「一緒に帰ろう？」

「うん……………そうする」

素っ気無い言葉でそう返事をした彼女のその表情を、沈みかけた夕日の光が最後に明るく照らし出していた。

そしてこの日初めて、彼女たちの部屋では、‘おやすみ’の挨拶が交わされた。

明るくなつた?????????入学から三日間のティアマツト・Mのことを見ていた者であれば、四日目の彼女を見れば誰しもが驚くことだろう。

彼女は、誰とも言葉を交わすことは無かつた。まるで自分の方から避けるように、教室の窓側の後席にすわり、休み時間中もずっと空を眺めているだけだつた。彼女が声を発する時と言えば、隣の席のラスティハルト・ジーンが挨拶をしてきたのに返すぐらいであつた。

だが、きょうはどうだろう? クラスの中でも中心的存在になりつつあつたステラ・E・Wが彼女と一緒にクラスに入ってきたのだ。クラスは騒ぎ出すことは無いが、皆その光景に視線を引き寄せられている。

彼女たちが向かつた席の隣では、何時にもまして笑顔を見せているこのクラスの委員長、ラスティハルト・Xの姿がある。その周囲には、隣国の有力貴族でもあるハイス・G・Sとゲルト・A・Fの二人。

彼らと交わす彼女の返事は、言葉そのものはいままでとかわらないが、その声色は喜色を帯びている。

‘何が起きたのだろう?’

それはこの日から暫く、クラス中で話題になつた。

第十四小節「魔術って何だろう」

「ねえ？ 魔術ってなんなのかな？」

ある日の夕、ステラの口から発せられたその疑問は、その日の授業から来るものであった。

その日の式学の授業、同一魔術においての個々人ごとの違い、という題で行われた。場所は競技場、教師は担任のアルバ先生である。

「魔術は未だ謎が多い。魔石と式と詠唱の三つで行われるところまではわかっているが、同じ現象を起こすものでもその組み合わせは大きく異なる」

そうして彼は、生徒たちに三人以上でグループを組み、何かしら特定の魔術を決定させ、ソレをグループ内で相互に観察。レポートを提出するというものだった。

勿論、ラステイはゲルト、ハイス、ティアマツト、ステラの五人放課後に屋上に集まるメンバーでグループを作った。彼らが設定した魔術は、‘赤’の初歩の初歩：一般に‘ファイア・ツイボール火炎球’と呼ばれるものである。

標的として立てられた案山子を前に、彼らは集まっていた。順番を決めるためである。その決定方法は、古来世界で己が身一つで出来る運の勝負とされる‘ジャンケン’?????勝った順に魔術を

行うことになっている。五人は等間隔に並び輪を作り、真剣な表情でお互いを見ている。

「よし、いいか？」

ラスティのその呼びかけに答えるように静かに頷く四人。それを見て、ジャンケンの音頭をラスティがとる。

「最初はグー！ ジャンケンポン！！」

その掛け声と共に、五人は己が運を託した手を繰り出した。そしてその勝敗は??????

「くそお！ 何故だ！？ 何故俺は!?!」

そういつて膝から崩れ落ちるラスティ。その悲愴に満ちた表情が、ジャンケンの勝敗の結果を物語っていた。ラスティが繰り出したのはグー、そして他のメンバーが繰り出したのはパー。一回目のジャンケンは、ラスティ一人のみが敗北する結果となった。その確立は八十一分の一、百分率にして約1%。そんなある意味幸運とも取れる確立の低い状況を、ラスティは引き寄せた。その運の低さは一般的なソレを凌駕している。

輪の外で肩を落とすラスティを、アークが慰める光景を（ティアマットだけが）見ながら、残る最後以外の順番を決めた。

そして、その最終的な順番はステラ、ゲルト、ティアマット、ハイス、ラスティの順となった。

「よし！ それじゃあ行つくよお！」

その元気を表すような灰銀のショートヘアの輝きを携えて、ステラが詠唱に入る。魔石を握った左腕を、案山子に向かって突き出す。詠唱と共に、小さな赤の石片は浮かび、輝き、小さな魔法円を形作る。

「saktie, velke som hailt orten）
描こう、熱いその心のままに）」

呼びかけるような文面で詠唱された詠語コトバに答えるように、その魔法円の前に直径二十センチほどの火球が現れた。その火球は目標たる案山子を僅かにそれて、右腕に当たる部分を焼いて通過した。その結果に、悔しそうに口を曲げるステラ。

「うう……。外したあ！」

「これなら、案山子の交換は要りませんね。では、次は僕が行きます」

励ますのでも無く、ある種の薄情ささえうかがわせるようにゲルトは言い放ち、自身の詠唱に入った。その様子を恨めしげにステラは睨んでいるが、彼にそんな悪意が全く無い以上、責めることは出来ない。励ましの声をかけるべきなのか、ルームメイトのティアマトトは少しなやんだ？？が、結局言わなかった。

ゲルトは、魔石を持った右手を何か透明な球状物体を持つように形作り、目を半眼にして詠唱した。

「Varte, iio ante zio setue（焼け、汝その熱を以って）」

曲がりなりにも武家貴族なのだろう。普段の温和なゲルトとはかなり印象がことなる印象を受ける詠唱だった。恐らくこのような文面で世界種たちと会話をしたら、彼らはゲルトを堅苦しい人間だと思っただろう。

右手の中に、直径十センチ弱の火球が現れる。ステラのものより規模こそ小さいが、その密度は高い。まるでハンドボールのように振りかぶると、その火球を案山子に向け投擲した。放物線を描いて案山子に直撃したそれは、瞬時に案山子を火達磨に包む。その様子を、ゲルトは満足げに見ていた。

「うん！ こんな感じかな」

そうして燃え尽きた案山子の跡に、新たな案山子を立てる。次はティアマットの順。

「次は…私」

そう言った彼女は紅い石を見つめ、強く握りその姿を掌の中に覆い隠し、胸の前に両の手で連れてくる。それを胸に押し付けるような体勢で瞳を閉じて、告げた。

「Soie amt hopicutatimusuta Yue
ekolk cokitaisoialcorkutdax
iamaxuwiofurashhe(その祈りと願いは、
何時しかアナタを請い焦がし…その尽くを塵と灰に帰すでしょう)」

彼女らしいと思える、そんな文面の詠唱。眼前には、今までの二人より複雑で大きな魔法円が出現する。その中心からは、直径にして一メートルはあるのかという火球が作り出されていた。ゆっくりと目を見開き、その火球を見つめる。

「a u i r e , a n h e (お願い、行って)」

その言葉に答えるように、火球は加速を伴って案山子を焼き尽くす。案山子の背後数メートルの地面にまで、余波の炎は焦げ跡を作っていた。

「な、なんちゅう火力だ……」

周囲の声を代弁するようなハイスの呟きに、振り返ったティアマットは照れたように頬を掻く。視線をななめにずらして言った。

「…えつと……うん」

そんな反応に力の抜けた一同は、気を取り直して新たに案山子を立てた。先ほどの地点は、アルバ先生が苦笑いで錬金処置で焦げ跡を丁寧に消していつている。その行動を、チラチラと申し訳なさそうにティアマットは見ていた。

「さあて」

自分の番になったハイスは、魔石をペンに見立てたかのように空中に線を描いた。紅い光は、その軌跡を残し文字を作っている。くの字のようなそれは、ルーンだった。

「K a n o c c i o (燃えな)」

メンバーの中で最短の詠唱で行われたそれは、数発の火の弾丸を生み出し、案山子を焼く。局所的に焼き落とされ、案山子が崩れ落ちる。ティアマットとは違い、技量をうかがわせるその魔術に、自

慢げにハイスは胸をはる。確かにその技量はなかなかのものだった。

そして出番はラスティに回る。立てられた案山子を見据え、ラスティは左手に魔石を握る。腕を力なく落とした体勢から、彼は詠唱した。

「O a l e x i o r a s s e (その意志は紅く)」

人差し指を案山子に向け、標準をつける。その指先に、三つの魔法円が球をつくるように描かれる。それは異質な式だった。異常に濃い色の赤い光が、球状に生成されている。

「a m u r h a l t a e r l a i e s i l f e n t (私の心は在らぬ軌跡^{みち}を駆け抜けよう)」

瞬間、熱量が収束された光球が打ち出される。それは案山子に当たると、其処を中心にするように球が膨張した。時間が経ち徐々に消えていった光の跡には、灰すら残さず案山子が消えた空間だけがあった。

驚く皆に振り返り、先ほどのハイス以上に誇らしげにしている。

「ま、こんな感じだろうな、これは」

「…魔術、かあ」

「魔術って何だろう？」ステラが言った、根本的な様で普段誰も気にする事のないような疑問。魔術一つにしても個々人というだけでアレほどまでに差が出るというその日の授業であったことに、彼ら…ラスティ以外は疑問に似た何かを抱いていた。

ステラから発せられた質問に、まずはハイスがパンをほおばったまま答える。

「式と詠語コトバで紡がれた世界の理、だっけか？」

「ごく一般にはそうですね」

そうゲルトが付け足す。そう言った‘人側の解釈’を聞いて、次はアークが発言した。此処最近、アークも一人として話すことが多くなってきている。この日は少女の姿で化身していて、服装は薄い空色の長い髪に、ゴシッククロリータ調の服装？？？少女すがたの時のアークのお気に入り（？）だ。

「世界と自己の存在のつながりとそれをもたらす心の力」と、私たち精霊は魔術コレをそのように考えます。ですが、私たちのものと皆様方人間のものとは、大分様式は異なるようですね」

「一応私も、それに近い感じで教わった」

教会を中心とした‘世界主義’と呼ばれる魔術に対する考え方のものだと、ティアマットの言葉にラスティは付け足すように言った。…ここまで来ると、言っていないのは自分だけ。皆からラスティに向けられる言葉は、容易に予想がついた。

「じゃあ、ラスティくんのところはどつたの？　どんな考え方をしたの？」

その日見せた異様な術式が、その記憶に残っているのだろう。きっと彼の故郷は特殊な考えをしているに違いない？？？？そんなステラの声が聞こえてきそうな表情だった。

ため息をついてから、降参だというように両手をあげて、正直に、いうことにラスティはした。

「正直、俺の故郷でどんな考え方をしたかは知らんぞ？　でもまあ、俺はこう考えた、」

その言葉に、皆は興味深そうな視線をラスティに送る…ただ、アークだけはその表情を強張らせ、緊張の面持ちでいた。それに皆は気付かない。

「あくまでも俺個人の、考え、だからな？　深く考えないでくれよ？」

その言葉の、本当の意味を理解しているのは、彼の使い魔であるアークだけ。アークがその姿勢を正すのを見て、息を吸いなおして…告げた。

「実現された夢。空に描かれた理想。魔術の根本はそうである、と、俺は考えている」

「なんだそりゃ？　それじゃあまるで、この世界が神の夢ん中みてえじゃねえか」

そう言つてのけて馬鹿馬鹿しいと言うハイスに、ラスティはただ

苦笑いを浮かべるだけだった。

第十五小節「事の前の事」

「あれ、から意外と経ってないんだよな、これが」

「そうですね……」

数日が経ち、もう日課のように放課後の屋上に集合するようになっていたラステイ、ティアマツト、ゲルト、ハイス、ステラの五人ここに集まっているときだけは、アークも実体化するようになっていた。最初に実体化させたときのハイスとステラの驚いた表情は、まだ記憶に新しい。

「お、今日も早えなあ」

「ハイスさんが遅いんですよ」

そう言い合いながら、二人並んで屋上にハイスとゲルトが姿を現した。今日は神学の授業のあったゲルトは、魔術師然としたローブのままでは来ていて、ハイスは何時もの格好であった。その口ぶりから、ハイスのことを待ってゲルトは遅くなったのだろう。そして、そのすぐ後ろにはティアマツトとステラの姿も見えている。

「お、やっと皆揃ったみた……ステラ？　ソレ、なんだ？」

今日のステラの手には、夕食以外にも別の……何やら筒状にまとめた紙を持っていた。皆が弧を描くように座ると、待ってましたと言わんばかりに仰々しく話し出した。

「ふっふっふ……良くぞ聞いてくれましたラステイ君！」

そうして勢いよく見せたのは、‘新聞’????この世界は、個人の移動手段なんかはまだ馬に頼っていたりするのに、妙なところで技術が発達していたりする????その一面には…

「あ？　なんだ？　‘遺跡’？」

「そう！　そう！　この学院から結構近いとこにね？　遺跡が見つかったらしいの！」

そう嬉々として顔を紅潮させて話すステラは、将来学者になるのが目標らしい。なんでも尊敬する学者が居るらしい。

「それでねそれでね！　どうやらその遺跡にねあの‘アルナ・アマルティア’が来るらしいの！」

「へえ、あの最年少で導師号を持つあのアルナ博ですか。確か僕たちと同じ年でしたよね」

突然出てきた未知の人名に、ラスティとアーク、ティアマツトは首をかしげている。どうやら他三人の様子を見る限り、その人物は有名であるようだ。それに気付いたステラが、驚いたようにまくし立て始めた。

「ええ！　三人ともアルナ導師を知らないんですか！？　超有名人ですよ！？」

「俺は最近此処に来た人間だ」

「精霊にそれを求めないでください」

「えっと……」

三者三様の反応で答える三人。そして、ラスティとアークは、そう言ったことを後悔した。

二日ほど前、‘七年前以降の常識的な歴史の流れを知らない’ということを教えた時に、それから日が沈みきつても延々と説明された時があったのだ。彼女の眼には、その時と同じ光が宿っている。

そして彼らに、ここぞといわんばかりにステラは説明を始めようとした???

「あれ？ この日って確かクラス合同での体技指導の日じゃありませんでしたっけ？」

????その時、（空気の読めない子の）救いの手が差し伸べられた。

この（話を聞かなくて済む）好機を掴もうとするラスティとアークは、ここぞとばかりに話題を転換しようとした。ティアマットは置いていかれ気味である。

「体技指導？（アーク、お前はカリキュラムを全て記録していた筈だ。速攻でこの質問に答えろ。だが程よく不十分にだ）」

「（イエス・マスター）えっと、そうですね。三クラスほど合同で、競技場の方で護身術レベルで体技指導があるそうです（どうでしょう、マスター）」

「（上出来だ）あれ？ 俺は体技とってるからいいが…クラス全員なのか？」

「はい。これは、最近はどんな職種でも、護身術レベルの体術は必要だろうという学院側の教育方針があるからだそうです。過去の戦乱での教訓が生かされているようですね」

その場の雰囲気を読み込んだ二人のやりとり。先ほどの話題からこの話題に転換することに、ラスティとアークは成功していた。

「げ！ マジかよ！ オレ体術なんてやだぜ？」

意外にも一番難色を示したのはハイス。印象的にスポーツ万能そうな彼ではあったが、意外なことに体術には自信が無いらしい。そんなハイスに、あきらめましょうとゲルトは言う。やはり一応は武家貴族の出ということなのだろうか。きっとそれなりにできるのだらう。

「あゝあ、雨でも降んねえかなあ…。」

そんな希望的観測を打ち砕いたのはゲルトの一言。

「ドームを覆うように雨避け用の結界式が土地にはられているのでどっちにしろ中止はありませんね」

そう言われて沈むハイスをからかいつつ、この日も五人は夕日が沈むまでこの屋上で語らっていた。

彼らは気付いて無かったが、この日話題が変わるまで、ティアマツトは会話に入ってくることは無かった。

????????????????????

どこか、少しだけ遠くの場所で。

曇天の暗がりの下で、全身黒で身を包んだ男と二メートル半はあろうかというヒトガタが対峙している。その周囲は土肌が見え、草木がえぐられている。ところどころにある砕かれた石が、これまでに行われていたことの次第を語っていた。

「オ a i r e ファイネ f e e n e ジーン x e e n ?」

そうつぶやいた男の左手には、陽炎を纏う剣が握られている。その鏢は楕円状で、やや長めの刀身は細く、そしてやや歪曲している。この大陸では全く見られない意匠だ。

男が駆ける。踏み切られた地面は深く抉れ、その踏み込みの強さをうかがわせる。その加速度は人が可能なそれを凌駕している。それに呼応するように、ヒトガタに握られた巨大な得物が男を迎撃に奔る。

「甘いんだよな、これが」

頭上から重力加速を伴って振るわれるそれは、人が受けようものなら一撃で骨身を粉碎するであろう。だが、男はその軌道の真横に進路を取ること容易くかわしてしまう。ただ無駄に地面に全運動エネルギーを注ぎ込んだだけのそれは、余りに致命的な隙になっていた。

男とヒトガタの影が交差し、ヒトガタの左腕が肩との結合を失い、地に落ちる。男は反撃を警戒してすぐさま横に跳ねた。その空間を横なぎに暴力が通過する。

距離を開けての着地。地面を削るように停止した彼は、その口元に笑みを浮かべて告げた。

「アルゴリズムの単純なお前なんか、負けるわけなんざ無いだろ

うが！」

それは、事の前日のことだった。

「もう、分かっていると思うけど、私前は教会に居たんだ」

いつものように屋上に来ていて、この日はラスティとティアマットが早く来ていた。アークは実体化せずに主人の後ろに控えている。その日は珍しくティアマットから話が始まった。だがそれは、世間話などではなく過去の告白。

「私は孤児だったの。でも、教会の騎士の人に拾われた」

まるで大きな独り言のように夕日を見つめたままで話す彼女に、ラスティはただ相槌を打つ。仰向けになり流れる雲を見ていた。

「歌は、そのときに覚えたの。ミサの歌が、好きだった」

「じゃあ、聖歌隊に居たのか？」

体を起こしてそう質問を返したラスティに、ティアマットは首を軽く横に振ることで答える。何時もよりもひざを抱え寄せて座っている彼女の横顔を、彼女の髪は隠している。

「うっん。入、れな、かった」

その答えは本人の意思とは関係なくそうだったことを示している。いつもと同じ濃紺の服に、皮手袋の指が少しだけ食い込む。うっむき加減の彼女の視線は、夕日を捉えてはいない。

「騎士見習いだったの。剣騎士セイバだった。養父の騎士の下で、そうしてきたの」

そう告げた彼女は、片腕を…その手にはめられた皮手袋がよく見えるようにラステイ側に手を伸ばす。使い込まれたであろうそれは、特に小指の部分が擦り切れている。

「私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだつて義理の兄に言われてた」

肉刺まめと傷跡のついた手を、普通今の年頃の少女ならば持たない。

そんな違いに、彼女は劣等感を感じていたのだろうか。

夕日の光であっても、感情を押し殺したその声に温かみの取り戻させることはできていない。

「訓練が終わってからは、人気の無い時間にその聖堂に居たんだ。その歌唱指導のシスターは、いつもその時間帯は聖堂を空けてたの。戻ってくるころまで、そこで歌ってた」

紅い目を持った彼女に、本来教会に居場所などあるわけが無い。拾われた時点で殺されてもおかしくは無かったのだ。それが分かってたからこそ、彼女はそうしていたのだろう。

「時間になってからは、聖堂の上に隠れて、こうやって座りながら

ずっと歌を聴いてた」

聖堂内で聖歌を聴くことさえ許されない。そうして隠れて聴くほどに聴きたくても、それは紅目ディアマント・マキナには許されなかった。

「だからかな？ 赤は嫌いなのに、どうしても夕日は嫌いになれな
いんだ」
あのアカ

そう言う彼女の視線は、いつの間にか夕日に向かっていった。

結局その日、ゲルトたちが来てから、彼女は何も話すことは無かった。

第十六小節「事は突然に訪れて」

三クラス合同による体技指導の日、この日の天候は、乾燥気味のこのあたりとしては珍しく雨であった。いつもは蒼い天に暗灰色が漂っていると気分も同じようになってくる……それはおそらく皆が思っていることだろう。

ラステイたち四組の生徒たちは、三組と五組と合同で体技指導が行われる。午後に各自で本棟から北西にある競技場に集合することになっていて、現地で各クラスごとに委員長が点呼をとり、担任に報告することになっていた。

全体が整形された黄土色の石材で構成されておりそこには目立たないように素材と同色の‘式’が刻まれている。これは落ちてくる雨を逸らし、雨天時にも問題なくそこがしようできるようとされたものだった。故に式を編むためその全体的な構造は円筒形になっていて、中央部の広場を見下ろすように観客席が囲んでいる。俗にコロッセオと呼ばれていた。

その競技場の中では、百五十人ほどの生徒たちと二人の教員が居る。広い競技場の半分も埋め尽くされていないが、それは各クラスが集まるのに障害なりえるものでもあった。各クラスは集合に手間取っている。広くてどこに集合すればいいのか分からないのだ。

「おおおおおおおおい！ 一年四組はここだあああああ！」

そんな中、その人ごみに向かって叫んでいるのは、ラステイハルト。彼らのクラスは、他のクラスに比べて集合は早かった。彼の髪の色は黒、これは全く居ないというわけでも無いが珍しい色で、百八十二という身長もありクラスの目印になるには十分だった。だが、単に目立つというのであれば、一年三組の委員長ポラリスの方が上だった。宝石光沢に近い輝きを放つエメラルドグリーンという人の

色素を無視したその色は、ラスティ以上に目立っていた。四組の集合が早かったのは、ラスティが大声で叫んでいたことも大きかった。

「ら、ラスティさん。こんな近距離で大声を張り上げないでいただけないでしょうか…」

三組を整列させているポラリスは、耳が痛むかのようなそぶりを見せながら上目遣いでそう抗議する。ラスティが彼女と顔を合わせるのはいずれ二回目のことであったが、双子の兄のルームメイトということもあってか、（彼女にしては）それなりに親しく話しかけてくる。

対するラスティは、同じ年であるならば誰だろうと親しく接する。ポラリスのような隣国の上位の貴族であっても物怖じしないため、その口調は親しい友人と話すときのようなものだ。

「ああいや、すまない。だがこうでもしないと早く集まんないだろう？」

確かに彼の行っていることは効果を発揮している。だがポラリスは貴族ということもあって、そのような行動をとるのは流石に躊躇せざるをえない。彼の言い分はもっともだと思いつつも、肩を少し落とすような仕草をみせ言うことをあきらめた。

それから少し経ち、ようやく全員の集合が完了する。時刻を少し過ぎていた。

「よーし！　ようやく集まったな？　あまり喋っていると時間が無くなるが、次からはもう少し早く集合するようにな！」

整列した生徒たちの前に立ち、そう叫ぶ四組の担任教師でもあるアルバ・アーキナム。そしてそれに続いて、その隣にたっていた男

性から説明があつた。

「この合同指導の中で体技指導の模範演技を担当するゲイルだ。これから皆には……………」

その時、競技場内にあわただしく飛び込んでくる鳥が現れた。教員用の連絡用の使い魔である。足にくくりつけられた紙を、アルバが読む。その間にももう一人の教師は生徒たちに説明を続けていたが、連絡の紙を呼び終えたアルバが、もう一人の方に駆け寄る。その顔は、血の気を失っていた。

『何故俺にだけ言つたんだらう?』

整列し、先生の話が始まると、彼は昨日のことを思い返しはじめた。結局あれから、ゲルトたちが来ると口をつぐんでしまったティアマット。いつものように談笑に笑うその姿に、直前まで纏っていた雰囲気は残っていなかった。

『何か、俺は大切なことを忘れてる?』

そんな調子でラスティは、整列してからは先生の話を全く聞いていない。視線が完全に空の彼方だ。そうして集中を全くしていないことを、アークが諫めた。

「（マスター、教師の話の話を聞かないのはどうかと思います）」

「(いいんだよ、別に。だってs????????おい、なんか来たぞ?)」

ラスティの視線の先には、鴉のような鳥型の使役獣。その足に手紙らしきものをくりつけているところを見ると、どうやら何か連絡用のものようだ。そしてくりつけられた手紙を見て血の気を引かせていくアルバ先生の様子に呼応するように、アークからはあわただしく念話がよせられた。

「(マスター。競技場周辺に複数の反応があります。敵性反応です)」

そしてその言葉の真実を裏付けるように、教師から本棟への避難の指示がだされる。あわただしいその物言いと、アークからの深刻そうな雰囲気、ただ事でないことをラスティに理解させた。だが、その直後に放たれた言葉は彼の想像を超えていた。

「今日の授業は中止！ 全員本棟に避難しろ！ 墮嚙オチガミが来るぞ！」

その言葉を待っていたかのように、軽い音が聞こえてくる。耳を澄ますと、それは確かに詠語こいばを発していることをきいてとれた。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

その骨を打ち鳴らしたような呪詛は、競技場を包み込むように幾重にも重なって聞こえた。ラスティには理解できるその呪詛は、他の生徒には不可解な奇音にしか聞こえない。

「己憂部だ！ 墮嚙に見つかったぞ！」

そう叫んだある生徒の視線の先には、皆が入ってきた入り口とは反対側の選手入場口から湧き出てくる異形たち。青白く餓死した死人のようにやせ細った人型の外見、だがその頭部は膨れ上がった風船のような形状をしており、血管らしきものが浮き出ている。その膨れ上がった頭部には、一つ目だけがついていていた。

口が無いその姿にも関わらず、それらはみな同じ呪詛を発し続けている。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …… katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) ……」

それは、己の憂う部位’????己憂部と呼ばれるもの。世に祝福されず、世界から加護のある言葉????詠語????による名を与えられなかった、否定された存在。

墮嚙が使用する使い魔のような魔物に分類される存在で、周囲の情報を親に伝える役割を持っている。

つまり、己憂部に見つかったということは、墮嚙に見つかったのと同義であった。

恐怖に駆られた生徒は、裏返りかけた声でさらに大きく叫ぶ。

「二、逃げる！！ 食われるぞ！」

体技の訓練とあって、普段装備している魔術品は最低限のもの。その普段みにつけていた武器なりえるものを持っていないという恐怖も相まって、誰かのあげた叫びに皆恐慌してしまふ。

「う、うわああああっああー！」

その反対側、己憂部コウクの侵入口とは違う方向に、生徒たちは我先に
と駆け出した。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰
らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰
らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

骨を打ち鳴らすような、乾いた‘喰らえよ喰らえ’の声。数える
のも億劫になるほどの己憂部コウクから発せられるその呪詛に、生徒達は
恐慌して我先にと逃げ出す。

三組、四組、五組の生徒達は、自分達が並んでいたエリアから最
も近い出入り口へ逃げ込む。三組は左手に見える通路へ、五組の生
徒達は反対側に見える通路へ、そして四組の生徒達は??????
?????

「(マスター! マスター!)」

何かに気付いたとみえるアークが、ラスティの脳内に盛大に警鈴
を鳴らす。クラスメイト達の後方を走っていたラスティは、その速
度を弱める事無く反応した。その直後、アークから帰ってきた答え
に、ラスティは驚愕する。

「(この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は
行き止まり)です!」

第十七小節「願いは十字にかけられて」

「（この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は行き止まりです！）」

その声を聞き、クラスメイトを呼び止めようとしたときには、もう彼らは行き止まりに行き当たるほどに突き進んでしまっていた。彼らを呼び戻し、別のルートで逃げるにはもう時間は無い。三桁に及ぶ己憂部ユウベの群れたちが、距離をのこり百メートル強ほどにして迫っている。

講ずるべき手段が思い浮かばずただ焦るだけのラステイに、担任の教師の声が届いた。ギリギリまで足止めをしていたのだろう。すぐ後ろに己憂部ユウベの群れを引き付けながらこちらに駆けてくる姿が見えた。

「ラステイハルト！ 門だ！ この門を閉めるぞ！」

「（マスター！ 先生の方角を見て左方向、あれが恐らく門の開閉の制御術式です！）」

アルバ先生の声に答えるようにアークが制御式の在処をラステイに告げる。それに返事をする時間も惜しまないといわんばかりに黙して駆けた。

その制御装置は魔術の心得の無いものでも扱えるような簡略なもの。‘閉’の文字が書かれたボタンを叩くように押し込む。そして左右から、分厚い石の壁が迫ってくる。閉じるギリギリのタイミン

グに間に合わせようと、担任教師は走る速度を引き上げる。

「おっしやあああああ!」

滑り込むように隙間に飛び込むアルバ。そしてそのすぐ背後で石の扉は重苦しく、何体かの己憂部^{コウク}を両断して閉じる。だが、こちら側にたどり着いたそれらの中には、なんの損害も無く入り込んだ個体も僅かに居た。その姿を見て盛大に舌打ちをしたアルバが叫ぶ。

「くそ、入り込みやがった! 行けるか、ラスティハルト!」

その返事を待たずにアルバは地を蹴った。一跳躍で一体の己憂部^{コウク}と開いていた距離をゼロに、そして跳躍したまま腰ダメに構えられていた右腕を打ち出す。その攻撃に反応する間も無く、その拳は膨れ上がった頭部に食い込み、己憂部^{コウク}の体からその部位を吹き飛ばす。崩れ落ちた瘦躯は体を砂にして崩壊した。

そのままヒット&アウェイの要領で襲撃と離脱を繰り返すアルバ。それを脅威に感じたかは定かでは無いが、半数ほどがラスティの方に向かつてくる。アークの補助を受けて大きく後方に跳躍した彼は、一応のためにと幾分か持ってきていた魔石をジャージのポケットから取り出す。皮肉げに叫び、先の質問に回答した。

「こちらら実戦経験は無いですがね!」

そう叫んだ時、背後から誰か駆けてくる音が聞こえ、ラスティに向かつて叫ぶ声が聞こえた。その声がティアマツトのものであったことに驚き、思わず詠唱を忘れて振り返ってしまふ。

「???????ラスティ、手伝う!」

そうして彼の隣で止まった彼女は、肩で息をしている。恐らくここまで全力で走ってきたのだらう??その彼女の視線は何時に無く鋭く、紅い右目の眼光は冷たく己憂部コラクを見据えている。いきなりの登場で驚くラスティの隣で、彼女は自身の胸元から、今までも首に掛けていたであろう十字のネックレスを取り出し、それを勢い良く引きちぎった。チェーンのパーツが目標の足元に飛び散る。

そして、教会騎士団特有の武装の開放詞が彼女の口から告げられた。

「E-l-o-a-u-s a-h-s-i-um-t d-e-s-t (アナタたちは灰と塵に還りなさい)」

歌う時のものとは違う冷たい声に、十字架は光り輝いて反応する。その光は伸びるように拡張し、‘剣’の姿をとった。

長めの柄に、彼女の身長近い刀身。一少女が用いるには不釣り合いな、ハーフアンドハーフソード片手半剣が、その右手に握られていた。その剣をゆっくりと正眼に構え敵を見据えたティアマツトは、ラスティに手短に作戦を傳達した。

「私が壁になる。ラスティは狙撃系の魔術で援護して」

それが出来るかという問いも無く、その小さな背中からは飛び出す。瞬時に接敵し、両の手で得物を水平に振りぬく。それは先頭の敵を捉え、吹き飛んだソレは壁に叩きつけられた。未だ勢いの残る剣を、ベクトルを変更して頭上まで持ち上げる。すでに捉えられていた次

の標的に、それは叩きおろされた。

その剣閃には、いまだ未熟さが伺える。だが、瞬時に二体の敵を葬って見せたその小さな背中には、騎士を彷彿させるには十分であった。

「通さない」

彼女らしい短く告げられたその言葉には、背に命を庇う騎士の精神が見えた。

????????????????????

突然現れ、突然告げ、突然駆け出す。狙撃魔術が可能かどうかを聞きもせずに駆け出したそのそっかしい行動は、一応信頼されているのだろうか。ラスティに苦笑いをもたらす。アークに指示を出すその表情は、始終緩みつぱなだった。

「はは……たく。何なんだかなあ、アイツは。(アーク、索敵と戦況把握を最優先。俺のサポートは二の次でいい)」

「(了解しました。マスター)」

指示を出したラスティは、左手を突き出し半身に構える。右手は小さな魔石の粒が握られ、力なく降ろされている。半眼に標的をにらみつつ、小さな声で詠唱を始めた。

r Fantaxia, sept redint. Soie me i
m zia... Qeisi xeeni vini je cok
isuta (幻想式、構築開始。素は記憶に準ぜ…鳴弦は空に響か

せよつ」

それは、異質な詠唱：いや、詠唱^{うた}と呼べるべきかも怪しい、そんな暗号^{コード}だった。静かに直立するラスティの口から紡がれるその詩には旋律も韻律も存在せず、ただ作業のように告げられるコトバが在るだけである。

告げられたその瞬間、突き出された左腕の中に青い光が現れる。それは上下方向に伸び、大きな和弓の形を作り上げた。右手に持つ魔石を実体の無い弓に番えると、そこから同質の光が発せられ、光の矢を生み出した。

それら光の弓矢の非実体を証明するかのように滑らか過ぎる会^{フルドロ}。その引き絞られた鏃の先では、既にティアマツトが三体目の己憂部^{コウベ}の頭部を砕いていた。

その防ぐ腕^{アタマ}諸共急所を薙ぎ払うその一撃は、小さな体軀からは想像も出来ないほど重い。だがその大振りな一撃は、他の敵との距離が近い中で行うには余りにも拙かった。振りぬくフォロースルーの硬直で動けない彼女の側面から一体が迫る。その振り上げられた腕に、ラスティは慌てて標準をあわせた。

「(あんの馬鹿……) Terxentis・Balfesipp
emem・Olixexe(目標補足。射線設定完了。貫け)」

弓の形をした圧縮術式から放たれた矢は、寸分の狂いも無く標的の腕部に命中。その部位を奪い去っていく。突如失った自身の腕に困惑したのか??動きを止めた己憂部^{コウベ}に、ティアマツトは振り返りざま引き戻した剣を叩き付けた。そこで僅かに距離をとり、視界に全ての敵を収め直す。

「お願い。背中、任せる」

そう告げて再度攻撃を仕掛ける。ラスティは彼女に言われる前から既に次の矢を番えつが終えていたラスティは、集中を途切れさせないため、第二射を以って回答とした。

「Next baren levoir. Terxentis. O
lxeexe (次弾装填。目標補足。貫け)」

ティアマツトの一撃必殺志向の攻撃が生む隙の、その間を縫うように閃光が援護する。彼女はただ力任せに薙ぎ払い、彼はただ近い順に打ち抜く。ただそれだけの二つのワンマンプレーが、傍から見ると連携しているように見える。ヒットアンドアウェイを繰り返しているうちに、全部で二十数体居た己憂部コウベ達はそのことごとくを塵に帰されていた。

戦闘が終わり剣を収め、式の弓を消したラスティとティアマツトの二人の元に、担任のアルバ先生が歩み寄る。疲れを感じさせないその表情は、どこか無理をしているように感じさせた。

「ふう〜、助かったぜ、ラスティハルト、ティアマツト」

グローブを嵌め直し、全身を覆う傷一つ無い赤褐色のローブのままで、その教師は現れる。今も浮かべている、普段のやる気なさげの彼からは想像も出来なかったが、短詠唱の魔術と体術のみで効率よく己憂部コウベを葬っていくその姿は、若いながらも教師として職に就いていることを不自然に思わせないものだった。

「そんな事無いですよ。きっと先生だけでもやれました。」

「阿呆。オレが疲れるだろうが」

ぶつきら棒に言つてのけた彼は、すぐに顔を険しいものにさせる。そして声色を落として告げた。

「あの場に居た教師で、礼装を『装備して』いたのはオレだけだった。救援を呼びに行かせたが、ヤツラが現れたのは北西側から……本棟や寮の方も恐らく襲撃を受けているはずだ。ここに救援が来るには幾分か時間がかかる」

そして二人の方に顔を向ける。その碧色の視線が二人に緊張感を生む。ゆっくりと、彼は口を開いた。

「……そして此処には一番最初に己憂部「トウどもが襲撃してきたらしい???遠見係の職員から届けられたあの手紙は、ここに向かつてくるヤツラの群れの存在を警告するものだった???そしてオレらは此処に居る……この意味が分かるか?」

「墮嚙オチガミに一番最初に獲物認定されたのは???じゃあ!」

「そうだ、恐らくヤツは此処に来る。そして此処の石扉はヤツの膂力リキに耐えられないだろう……オレらはヤツと闘ヤりあわなくちゃならん」

出来るか? そう、言葉に出さずに問うてくる。
だが……

その言葉に回答する暇も与えられることは無く……オチガミ……突如、壁に金属塊を叩きつける音が響いてきた????????墮嚙オチガミがとうとうたどり着いてしまったのだ。

第十八小節「囓むことを墮ちたもの」

「おい！ どういうことだよ！」

「他に、他に道は無いのか!？」

「まだ、まだ死にたくない！」

一年四組の生徒達が逃げ込んだ道???それが地下に向かっているという事実気付くことなく進み続け、到着点が逃げ場の無い行き止まり（闘技場の地下）に気付いた彼らは、恐怖に混乱していた。胆の据わっている生徒も居るが、混乱の中に巻き込まれ皆自分がすべきことを見失っている。

そんな中、傍観者オブザーバーのように遠目に見つめている少女の姿がある??ティアマツト・マキナだった。彼女は、その場に居た人数を数えている。

「……五十人中…私も入れて四十九人」

足りない、内心でティアマツトは焦っていた。誰か逃げ遅れたのだろうか？ あるいは他のクラスに混ざったのか…誰が足りないのかを照らし合わせるため、必死で心許無い記憶の名簿を照らし合わせる。

誰アフレイトが居ないのかは直ぐに分かった。クラスで最も彼女と交友が深い生徒が居なかったのである。

「ラストティが居ない…」

「なに？ おいマジかよ」

その言葉に反応したのはハイスだった。数少ない胆の据わった生徒の一人で、ゲルトを引き摺って人の輪から抜け出していた。密集した人の空気の中に居て気分が悪くなったらしい彼を看病しながら、見上げてそう聞いてきた。ティアマットは首肯で答える。

「きつと、足止めに残ってるのかもしれない」

そう答えるなり、今まで来た道を駆け戻り始めるティアマット。焦りがありありと見て取れるその背中を、ニヤニヤしながらハイスは見守っていた。

「全く、ずいぶんとお熱じゃあねえか」

そして振り返り、この事態にどう収集をつけようか思索し始めた。そしてそれは、ハイスが考える必要も無く……自分達が来た道から響く轟音によって成された。

その音に、皆が総じて総身を強張らせる。

ヤツが来た。

そんな言葉を発することさえ出来ず、ただただ震えていた。

????????????????????????????????

一つ音が鳴り響くことに、壁の亀裂が大きくなっていく。硬化刻

印を全体に刻まれたソレを、魔術を用いずに物理的力のみでねじ伏せる…その想像を絶する運動エネルギー量に、その場に居た三人は戦慄した。冷や汗を流しながら、アルバは黒髪の生徒達に問う。

「…お前ら、オチガミ墮嚙オチガミについての知識は？」

「（この世のどんな）人より持っている自身はあります」

「それなりに」

そう答えた二人に頷き、再度確かめるように問いかける。

「じゃあ、何故オレがお前ら以外に援軍を呼びに行かせないか分かるな？」

その問いに、首肯だけで二人は答える。もう、あと二、三撃で崩壊するであろうところにまで亀裂は広がっていた。アルバが拳を握り、ティアマツトが剣を構え、ラストイは魔石を握る。アルバが、壁の崩壊の直前に叫んだ。響く打撃音が、耳の感覚を少し弱めていたのだ。

「いいか！ 気をしっかり保て！ 今のオレ一人じゃ絶対倒せねえし、守ってやる余裕なんざ無いんだからな！！」

その言葉が言い終わると同時に、石の扉は砕けた。

「????????????????????????????????!!!!!!!!!!!!」

空気とは違うモノを媒体に、その叫び声が彼らを襲った。

????????????????????????????????????

砂塵の奥から、巨大な人影が姿を現す。その体長はおよそ二メートル半。

生きたままで、材料' になった人間の形をとどめているが、その手足の筋肉組織は異常な肥大化を見せており、先ほどの轟音がその腕に握る得物である^{テツノカタマリ}ことを裏付ける。それは一本の腕で握られていた。

かつては剣であつたであろうソレは、幾度も石の壁に打ち付けられたことで刃が完全に潰れ、剣としての機能は既に持つていない。だが、その筋力から予想される一撃の重さの前には、そもそも武器に刃をつける必要性があつたのかどうかさえ怪しい。

そして頭があるべき場所には、複雑な幾何模様が刻まれ鈍い金属光沢を放つ、拘束具^{ノロイ}が付けられている。首の無い像のようなシルエツトだつた。

これが、墮嚙^{オチガミ}、??? 噛むことを堕ちた者??? かつて七年前の戦乱で使用され、国中の人々を恐怖に陥れた人口魔獣。人を殺す兵器という、その目的は知られているが、いったい誰が創つたのかは、設定されて^{知ひれて}おらず、未だ謎に包まれたままである。ただ隠された研究所に資料が残されているだけであつた。

????????????????????????????

「katuke katuke, kittichetto」喰らえよ喰

らえ、我等を満たせ)……katuke katuke kiti
chet o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)∴katuke k
atuke, kiti chet o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)
……katuke katuke, kiti chet o (喰らえよ
喰らえ、我等を満たせ)……」

オチガミ 墮嚙の後ろから、己憂部たちが入り込んでくる。だがそれは、決して彼らに襲い掛かってくる事は無く、爪を食い込ませ壁を這い天井に付き、その膨れ上がった頭部の目で監視する。オチガミ 墮嚙の使役獣に過ぎない彼らは、本体の狩の時にはこうして周囲を取り巻くだけ。オチガミ 三対一というこの状況は、墮嚙にとって数で押し切る必要が無いのだ。

妙に新しい薄赤い肉色の左腕を見て、アルバが憎々しげに言った。

「くそ！ 左手一本切り落としただけで、どっかの馬鹿が逃がしやがったな！」

そういうアルバの顔には冷や汗が流れ、その表情はどう見ても強がりにはしか見えない。いや、強がれるだけでも流石といえた。その斜め後ろに居る二人は、逃げ出さないようにするだけで精一杯でしかなかった。

「(マスター！ お気をしっかり！ 飲み込まれてはダメです！)」

戦闘経験があるティアマツトですら、その「現象」キョウゾウ に対してそうなのだ。後方支援するだけの実戦経験を積んだだけのラストィは、アークの必死の呼びかけでかろうじて保っているだけである。

「これが……、共振現象、か……流石にきついんだな……コレが」

共振現象。ただ肉体的に異常に強化された‘だけ’の墮嚙オチガミが、幾人もの戦士と人々を狩ることが出来た最大の要因。

強すぎる感情が、外向きに発せられた異常な感情の震えが、空气中の魔力を震わせ対象にその感情の猛りをぶつけるもの。古くは殺気とも呼ばれていた。

「……………」

叩きつけられるのは飢餓感タベタイ。拘束具ノロイでむき出しにされた本能と、喰らっても喰らっても満たされる事の無い空腹。肥大化され、魔術的に増幅されたそれはいかなる戦士も動きを鈍らせ、ことごとく狩られていった。

これが曲がりなりにも実戦を経験した者でなければ、戦力になるどころか失神していたかもしれない。

足竦む彼らに、墮嚙オチガミが一步を踏み出した。

第十九小節「墮ちたカミは神秘を纏うか」

「ティアマツト、オレと一緒に前衛だ！ ラステイハルトは下がって援護しろ！」

一步踏み出した墮^{オチガミ}嚙に反応し、アルバが叫ぶ。散開した彼らの中央には、鉄塊の一撃が振り下ろされた。衝撃で飛び散る石片が、その衝撃を物語っている???直撃しようものなら容赦なく挽肉にされるだろう。

左右挟み込むように移動した二人とその中央の墮^{オチガミ}嚙を視界に収め、ラステイは距離をとる。右手に先ほどよりも大きな魔石を持ち、先ほどの弓の魔術の構えをとった。

「（アーク、周囲の己^{コウヘ}憂部どもは無視しろ。魔術行使のサポートを頼む）……Fantaxia, sept redint.（幻想式構築開始。）」

「（了解しました、マスター）……Fantax-ear, sept fantct（幻想準式、接続開始）」

詠唱を唱えたラステイの声に、アークの声が重なる。ラステイの詠式と同じような様式で重ねられるその詩は、主の魔術を直接支援するものだった。憑依に限りなく近いその行動は、高位の精霊だからこそ出来るもの。ラステイの姿に、僅かに陽炎が重なる。

「Soie meim ziaa… Qeisi xeeni v
inije cokisuta（素は記憶に準ぜ…鳴弦は空に響かせよう）」

先ほどのものよりも澄んだ輝きを見せる弓状圧縮術式‘蒼穹’。青空の名を冠するにふさわしいその色に、矢が番えられる。

赤（火）、青（水）、黄（土）、緑（風）：そのいずれにも属さない非実体の概念のカタマリ。薄い青は水かと思われたが、そこに液体は存在しない。

「Terxentis（目標補足）」

静かに告げるラスティの網膜の裏には、鏃から標的を結ぶ線が見えている。実際には見える事の無い魔術的な光学照準は、射撃の心得の無い彼を一流の狙撃手に変えていた。手が、離される。

「Olxexe（貫け）」

そう命令を与えられた矢は、線の上を寸分も違ふことなく疾走する。胸を狙ったその一撃は?????その肉体に到達すること無く霧散した。細かく砕かれえた硝子のように光り、砕け、その矢はことごとく幻想に還された。

「!?!」

「……まさか……」

目の前で起きた現象に、ティアマツトは息を呑む。肉体が強化されただけであるはずの墮嚙。魔術に対する抵抗力こそあれ、魔術を霧散させてしまうなど考えられなかったのだ。

だがラスティは、その原因が分かっていた。故にそれほど驚くこ

となく、また別の矢を番える行動を取り始めている。動揺を見せる
ティアマツトには、叫び声でアルバが回答した。

「あの体表にこびり付いてるのは魔石だ！ ヤツは神秘層ペイルを纏って
やがる！ 中途半端な強度の魔術じゃ、ダメージなしで消されるぞ
！！」

堕嚙オチガミの体表には、濁った白色の結晶が覆うようにこびり付いてい
る。恐らく今まで活動してきた範囲で、自然に体表に魔石が結晶化
するようなことがあったのだろう。普通人間なら死に至るものだが、
相手は魔獣化された元人間。それを神秘の層ペイルとして纏うことが出来
ている。体に纏わり付いた濃密度の魔力が、強度の無い幻想を打ち
壊すのだ。

故に求められるのは規模（量）ではなく強度（質）。大掛かりな
魔術だろうが、そこに強度が伴わなくては星の数ほど撃とうとも堕
嚙ガミに届くことは無い。

「…………ふざけんじゃねえぞ、魔術きかねえ奴をどうやれってんだよ
…………」

周囲に聞こえないように、アルバがそのように小さく悪態をつく。
通常、魔術による攻撃が有効かつ最も被害の出ないものとされて
いる魔獣であるが故に、魔術が効かないという事態は想定外であっ
たのだ。

堕嚙オチガミがゆっくりとティアマツトの方に向きを変える。
拘束具の中央が?? 紅い光を放った。

「?????????!」

強い共振波が、ティアマツトを襲う。その突然の感情の密度の変

化に一瞬反応が鈍ってしまった彼女を潰そうと、巨大な鉄塊が襲い掛かる。辛うじて後方に強く飛ぶ事で事無きをえたが、無理な跳躍がその体勢を乱す。致命的な隙になっていた。

「阿呆！ ヤツは攻撃対象決めたときにそいつに更に強い感情ぶつけるんだ！」

その振り下ろした姿勢の墮^{オチガミ}に、アルバが後方から接近する。体勢を崩したティアマットに追撃を仕掛けようとしていた墮^{オチガミ}は、後方から迫るアルバが見えているかのように、床にめり込んだ鉄塊を持ち上げ、振り返りざまそれを振り下ろす。

後方が見えているかのようなその行動を予期していたように、持ち上げる動作を始めた段階でアルバは詠唱を始めていた。

「Waiootsa（唸れ！）」

短く叫ぶと共に急停止、左手を前に、右手を腰溜めに…腰を下ろして正拳突きの構えをとる。三つの魔方陣が右腕を軸にするように現われた。

振り下ろされる鉄塊。肥大化し頑強になった筋肉組織がもたらす力が、数十キロもの鉄の塊を片腕で軽々と振り下ろされる。自分の攻撃範囲内にその重量物が侵入する直前、絶妙なタイミングをもってアルバが叫び、右腕を繰り出す。

「Varllen（爆ぜろ）！」

鉄塊の側面をアルバの右腕が捉え、閃光。爆発音と共に左方向に逸らされたその一撃は、アルバから十センチも離れていない場所に落下した。

その隙を好機と、アルバが右腕を突き出しつつ跳躍。その一撃は

鳩尾に食い込む……だがそれは致命にはほど遠い。

「つて、クソ!!」

次の瞬間、後方に飛び去るアルバ。その彼を、太く隆起した右足が襲う。その一撃に吹き飛ばされた彼は壁に打ち付けられたものの、未だ戦意を失わずに立ち上がった。そのロープは今の攻防で破れ、その意味を成していない。ソレを理解したアルバは、ロープを地に捨て去った???その下もまた赤褐色のシャツで、その下には鍛えられた肉体と…金属で構成された右腕が見て取れた。

「っコノ! 地味に高えんだぞこのロープ!」

冗談半分そんな悪態をつく彼は、ややふらつきながらも戦意を失っていない。彼は二人に呼びかけた。

「ラストイハルトはヤツの足元の床を狙え! デカイ魔石は温存している! ティアマットはオレとアイツで作った隙を突いて斬れ! 魔術主体のオレらじゃ致命傷を与えられん! さっきので少しは慣れただろ???いや慣れる! 攻勢に出んとやられるぞ!」

「っっはい!」

アルバの渴に返事を返す二人。
そこから本格的な戦闘だった。

????????????????

地下の用具庫の中、四十八人の生徒達が身を寄せ合うようにして

一塊になり座り込んでいる。先ほどから内部を照らしてい魔石灯が、やや湿ったその空間を満たしている。そこに居る生徒達は、皆恐怖に体を竦めていて…その集団を包み込むように薄膜のようなドーム状の結界が存在していた。

ステラが知識として知っていた‘共振現象’。その効果範囲は非常に広く、一度発し始めたらモノによつては町ひとつを包み込んでしまうこともあったそうだ。それを聞いたゲルトとハイスが、皆から急いで魔石をかき集め、内部と外部の魔力共振を阻害する結界を張った。これもステラの案によるものである。

だがそれでも、薄膜のような結界の外から伝わる病的なまでの激^{タイ}情は生徒達に動揺を広げている。七年前、彼らがまだ十にも満たない年齢であつたときにその感情を受けた事がある生徒が大半で、そしてそれと同数の生徒がトラウマに似たものを持ってしまつていた。この結界が無ければどのようなことになつていたか、それは想像に難くない。

ソレとは別に、床に重い物質を叩きつける音と、何か爆発する音も通路の向こう???上のエリアから伝わってきていた。それが何によるものかは分かつている。いつものような服装と違う動きやすいシャツとズボン…主に暖色で纏められたその薄い生地を握り締め、ステラは小さく呟いた。

「戦つてる…のかな？」

ここに居るのは四十八人。クラスの人数は、担任の先生を含めて五十一人。アルバ・アーキナム、ラステイハルト・ジーン、ティアマット・マキナ、この三人がこの場に居ない。その声には、ゲルトが答えた。

「そうだと…思います。きっとあの三人が、今、墮^{オチ}噛^{ガミ}と戦ってるんだと…そう…思います。」

影響の大部分をそぎ落としているはずのこの結界。僅かなその影響でさえも棘みあがってしまっている彼らには、この外で実際に墮^{オチ}噛^{ガミ}と対峙するなど想像もつかない。

「私達、どうなるのかな？」

その言葉に答える者は、誰も居なかった。

第二十小節「非常食」

「Terxentis・(目標補足)Varlen(爆ぜる)！」

貫通力では無く固体の破壊能力を重視した矢が、ラスティの「蒼穹」から放たれる。その着弾先は、今まさに踏み込まんとしていた^{オチガミ}墮嚙の足元。足元が破砕し、その体勢が崩れる。

「OKだラスティハルト！ 上出来だ！ Oltliens t
puel kulueruein(其は三度^{みたひ}積み重ねん)」

右腕の義手、アルバの魔術礼装たる金属で構成されたその技手は、シルエツトだけならば完全に人の腕だ。だが彼の詠唱と共に腕の装甲が浮かび、その間から紅い光りが漏れ出した。どうやら内部に魔石を大量に仕込んでいるらしい。

魔術式が腕を包む腕甲のように浮かび上がる。「三度」の言葉によるように、それは三重に重なっていた。

「Ine kureia kurtpul ainetse fu
ta(そしてその^{ひとたひ}尽くを一度で打ち出そう)」

^{ドリエーネンアイン}古式三重一層と呼ばれる技法。三つの同一の術式を同時に発動させ、それを同じタイミングで同じ座標に発現させるというもの。ただの出力式を重ねているだけだが、その制御は困難を極める。針に糸を通すよりも緻密な制御を要求されるこの技法を、この精神的負担の大きい状況下で、それも生徒を褒める余裕を見せつつやってくるアルバの技量は高い。

だがそんな技巧も、^{オチガミ}墮嚙には決定打とはならない。幻想????魔

「居た！！ 墮嚙の上！」

「（こちらでも確認しました！ 墮嚙の直上から門の方向へ約四メートル。あの頭部が紅い固体です！）」

その声に、他二人も上を見上げた。天井を伝うようにして、頭の紅い己憂部コウクが墮嚙オチガミの直上を目指して移動している。それを射落とそうと、ラストイが蒼穹を構える…その時だった。

「ラストイ！！ 避けて！」 「マスター！ 避けてください！」

「あ？」

二人の声が聞こえたと思った直後、ラストイの頭部に激痛が奔る。

「（マスター！ 避けてください！）」

それは、ラストイが墮嚙オチガミの‘非常食’を打ち落とそうとしたときだった。その攻撃の気配に気付いたのでだろう。今まで沈黙を守っていた墮嚙オチガミが、その獲物で地面を打ち付け、将に矢を射んとしていたラストイに石片が襲い掛かったのだ。いくつも飛来する石片は、そのうちの一つがラストイの頭部を捉える。

「マスター！！」

アークは人目も気にせず実体化し、倒れようとした自らの主を寸でのところで受け止める。アルバはその様子を目を見開いて見ていたが、アークの方はそんな事を全く気にしていないようだ。ティアマツトも慌オチガミてて駆け寄り、介抱する。

どうせ墮オチガミ嚙の食事をコレ以上邪魔すると、無数の己憂部ユウベが襲い掛かってくる事は目に見えている。そうなってしまつては、二人で補給を止める事は不可能になる。その上再び狩の続行になるまでソレらの相手をしていたのでは、割りに合わないというものではない。それに食べ終わる（全回復してしまう）まではこちらに危害を加えはしない?????????何においても食が最優先であるその行動原理を理解していたアルバは、その処置を手伝うために走った。

「マスター！ マスター！ マスター！」

ラスティを抱きかかえ、ひたすらそう呼びかけるアーク。精霊であるアークには、こういうときに何をしていいのか分からない。走り寄ってきたティアマツトにすぎるように、アークは半ば半狂乱して言った。

「ティアマツトさん！ マスターが……マスターが！」

「落ち着いて！ あなたがそうでは、傷に響いてしまう」

焦っているのはティアマツトも同様だったのだが、以前居た場所の性質上、こういうときに落ち着きを無くしてしまっていたはいけないということも知っていた。ラスティを仰向けに寝かせ、傷の具

合を確かめる。

頭部の傷は深くない。今は布を巻きつけるだけでいいだろう。だが、他の部位に当たった石片の中に、体内に入り込んだものが無いかを探さなくてはならない。見るだけでは、それを判断する事はティアマツトには出来なかった。

アークに向き直り、手短に質問した。

「アーク、さっき飛んできた石片がラスティの中に食い込んでないか調べられる？」

「え？……あ、はい！」

答えたアークは、目を瞑り何事かを呟き始めた。契約のラインを通じて、ラスティの体内を探っているのだろう。その間に、駆け寄ってきたアルバ先生に何か汚れてない布が無いか質問をした。一瞬なにやら思案した彼は、ポケットの中からこれまた赤褐色の巻物らしきものを取り出す。それを放り投げて、有無を言わさぬ口調で言った。

それと同時に、アークの解析も終了する。この時すでに、オチガミ墮嚙は非常食に手を掛けていた。

「コレを使え、幾分か切ったら腕や胴の包帯代わりに也使え。」

「右前腕と、左太ももにありました！ ティアマツトさん！」

アークが指摘した箇所は、確かにティアマツトはソレを確認した。アルバ先生が、自分で改良した魔術があるからと、摘出を代わり、その間にティアマツトはラスティに包帯（代わりの布）を巻いていた。

その時、今まで染められた布だと思っていたそれが、微細にルー

ン文字が敷き詰められた術符であるということに、ティアマツトは気付いた。

「ティアマツト、何してやがる！ とつとと巻け！」

止まったその行動を咎めるように、その術符を渡した本人は怒鳴る。慌てて彼女は、出血箇所^{クイタイ}に布を巻いた。巻き終わるか巻き終わらないか、その微妙なタイミングで、またあの激情が襲い掛かってきた。

「????????????????!!!!!!」

「ちー！ とうとう食い終わっちまった！ おい、その青いの！ お前の主人叩き起せ！」

「は、はいー！」

墮嚙^{オチガミ}が、既に空になった己^{コトス}憂部の頭をうち捨てる。濡れたタオルを壁に投げたときと全く同じ音を上げて壁に張り付いたそれは、紅い染みをつくっていた。

床に置いていた鉄塊を拾い上げる。どうやら、狩の再開のようだった。拘束具の光と、共振現象の効果が、先ほどよりも強いように思える。

「つくそ、奴め食事直後で気が立ってやがる！」

いざとなったらティアマツトに担がせて避難させる…そう考えた時だった。

「マスター！ 起きて下さい、マスターー！ー！」

「あー…く…か？」

ラストイが、目を覚ましたようだった。

「とっとう起きる…！ ヤシのシマミの時間は終わったぞ…！」

第二十一小節「硝子の箱舟」

自分のことを呼ぶ声がしたような気がした。その呼び声に答えるように少しだけ目を開くと、蒼い色が最初に目に入る。

「あー…く…か？」

覚醒しかけたその意識は、確かに自身の精霊の化身姿を確認していた。だが、それ以外の情報を整理することが出来ない。

何故俺は倒れている？

何故アークはなみだ目でいる？

何故ティアマットは安心している？

何故アルバ先生は焦っている？

まだ意識の半分も覚醒し切れていない思考は、タペスタイ激情の中でも半ばまどろんだままにいる。

叫びあう声が聞こえ、体が地面から浮く感覚を覚える。

誰かが自分を抱えているようだ。

視界に入る青が空を連想させるようで……

「？」

そこでようやく意識が覚醒しきる。

何故俺は倒れていた？ それは墮嚙にやられたから。

何故アークはなみだ目になっていた？ それはきつと俺を心配してくれたから。

何故ティアマットは安心していた？ それはきつと俺を介抱してくれていたから。
何故先生は焦っていた？ それはきつとまだ墮嚙オチガミがまだそこにいるから。

さつき叫んでいたことはなんだった？ ‘アークはラスティを連れて……’ では無かったか？
では俺を今運んでいるのは……

目を見開くと、其処にはポリゴン状の輪郭をしたあのアークの姿があった。

大きな手で俺の体を支えている。

アークが俺を運んでいる……

その事実^{オチガミ}に、墮嚙オチガミの襲撃を知った時異常の衝撃を受けた。

「おい！ アーク！ 何をしている！」

まだ体に残る痛みを耐えながら叫ぶ。アークは目の無いその顔をこちらに向ける。

聞こえた声は、雑音交じりで、まともな発音すらなされていないかった。

「ます…ター……ゴブ…z…」

アークのその声は余りにも拙過ぎる。
人型に化身する余裕すらない今のアークの状態が、‘何処まで行ってしまうているのか’をうかがわせた。

「何で『接続』しない！？　おい！　アーク！？」

もはや掠れる音しか聞こえない。今のままでは??????

「とまれ！　幾らなんでも無茶だ！　そのままじゃ構成が追いつかなくなつて?????????」

「消滅するぞ!!」

そのことに回答する代わりに、ガラスを引つかくような奇音を出して、アークの体勢が崩れた。

????????????

墮嚙オチガミの非常食、それは空腹体の空腹に耐えられなくなったときに補給する血液の塊。それは、行動に支障が出た時の回復薬のような役割も持っていた。つまり、墮嚙オチガミが非常食を食べるということは、今まで与えたダメージ体組織の再生も意味していた。

加えて墮嚙オチガミは食事の間は誰にも邪魔をされないように行動する。ラストイが紅い己憂部ユウブを狙撃しようとした意志を見せた瞬間、今までの動きとはまるで違う速さで彼に攻撃を仕掛けた。食べ物への恨みは恐ろしい……ここまで来ると、笑うことも出来なくなってしまう。

「マスター！　しっかりしてください！」

「あー……く……か？」

もう戦闘準備に墮嚙オチガミは入ってしまったというのに。自身の主は失った意識を取り戻しかけただけで、とても戦列に加われる状態ではない。彼の担任の一喝も、意識を覚醒させるには至らない。

「マスター、お許し下さい」

ポリゴンモデルのよう…そう嘗て主に形容されたと記憶している姿に戻る???これが一番負担が少ないのだ???そしてその姿で、主の体を抱きかかえる???その瞬間から、それは訪れた。

それは、存在をすり減らされることから来る痛みだった。

????????????????????????????????

「?????????????!?!?!?!」

振り払い、振り戻す。その単調でありながら、有り余る筋力で絶え間なく振るい続ける攻撃。今までのものとはまるで異なるその荒々しい暴力の前では、ティアマツトとアルバの二人は墮嚙オチガミの進撃を止める障害なりえなかった。

「つく!　なんでラスティを狙うの!?!」

普段から寡黙で、言葉数少ないはずの彼女も、答えの返らない質問を口にせずにはいられなかった。その焦りはいかほどのものだろうか。

アークに運ばれたラスティとの距離は少しずつ縮められていく。その神秘層ペイルを貫く魔術は、装備の乏しい現段階では使用できず、その膂力はたとえ長剣を軽々と振るうティアマツトであっても止める事はかなわない。

「(どうすればいい?　どうすれば…)」

墮嚙と並走しつつ、一定の距離をとることを忘れないようにしながら、懐を探るティアマット。その左腕に三個一組で連結された彼女の消費型礼装使い捨ての感触を感じる。

コレを使えば、墮嚙を止められるかもしれない。そんな確信にも似た予想がティアマットに浮かんだ。だがソレを握るための力が、左手に入らない。

彼女は躊躇していた…その礼装を使うことを。赤・青・黄それぞれの魔石が連結されただけの複合魔石でしかないその礼装は、彼女にとって…いや、世の中にとって大きな意味を持っていた。

「（コレを使っても…私は…）……え？」

その時、アークの姿勢が突如崩れた。姿勢を崩したまま、目の前の壁にラスティをかばうように激突する。

「アーク!？」

????????????

上位に初めから生まれついた精霊は、大きな力を与えられている代わりに、世界から役目と制約を与えられている。それは世界の防衛機構のような存在である精霊に感情を与えられているが故の制約だった。感情の赴くままに力を振るってしまえば、世界に甚大な被害をかえって与えてしまうことになるからだ。だが制約があってもその範囲外の行動であれば役割から外れたことでもその殆どが許容されてしまう。

????? 「グ……ガアア……っ!!」 ??????

????? 全身を、その行動を世界が否定する?????
????? 止める止めると、苦痛をもって警告する?????

だが一度制約に反する行動を取ってしまったえば、その行動を停止するまで世界から直接自身の存在への攻撃が始まる。存在そのものをすり減らすその修正力は、精霊が総じて恐怖を抱く苦痛だった。

????? だがそれでも、アークは少しでも墮嚙との距離を離そうと移動する?????

????? 墮嚙との距離が少しづつ縮まっていく事を感じる?????
???

????? それはアークの努力をあざ笑うようだった?????

アークに与えられている力は、墮ちた世界種を処理するための力。そして与えられている制約は、世界種以外の存在に対する過度の干涉の制限。故に普段は、化身している姿から考えられるよりもさらに弱々しいのではないかという程の物理的干涉しか出来ない。

????? 手元の方から声が聞こえる?????

????? 主の心配そうな声が聞こえる?????

それを破っている今のアークは、例えソレが主と認めた存在であっても世界からその存在を削られる。世界に融通という概念は存在しない。

????? その様子だけが感じ取れる?????

????? 言葉も顔も、その情報の詳細を感じれない?????

????? でもそれが、自身の身を案じているとは感じれた???

???

活動を停止させてしまつか、存在そのものを消し去るまで、その苦痛はとまらない。発せられる声は、最早言葉として聞き取れなくなっていた。

????大丈夫です。私、強いですから????

????一時的に力が減っても????

????消えてしまうことは無いでしょう????

存在としての‘階位’が高いアークは、ラストイを抱える事が出来なくなるまで消耗しても、消滅することは無いだろう。アークの心中の告白は、主には雑音にしか聞こえていない。

????ですが今の私は、余りに無力です????

????幾ら大きな力を持って、上位の精霊であつても??

??

????こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません

????

????有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です??

??

失った力を取り戻すにはそれなりに時間がかかる。それは、この場では取り戻しのつかないものであるだろう。この苦痛は、低い階位の精霊には存在しない。

力を失いきる直前、アークは今までの中で最も悲痛な軋みをあげた。それはガラスを傷付けた時と酷似していた。

????ああ、こんなことならば????

?????こんな力なんて……欲しくなかった?????

第二十二小節「其は独り守るもの」

「おい、なんか音近くねえか？」

ソレは、ハイスが一番最初に気付いた事だった。先ほどまで遠くで聞こえていた戦闘音が、徐々に近づいてきている。

「ホントだ……………え！？！？」

突然、音のする方向の壁に、何かが衝突した。突然のその物音に、クラス中の視線がそこに集中する。何やら言葉が聞こえたと思つた数瞬後には、その壁が破砕、人影が飛び出して、彼らの目の前に落ちた。

それは、血まみれの姿で呻いている、ラスティハルト・ジーンだった。

????????????????????

突然、ラスティを運んでいたアークの姿勢が崩れる。姿勢制御の

ための力すら失ったアークは、ラスティを庇うように抱きかかえ、目の前にあつた壁に衝突する。落ちるラスティ、クッションになるアーク。そのアークに寄り続ける様に呼びかける彼の姿は、先ほどの様子を逆転したかの様だった。

「アーク！ おいアーク、答えるよ！」

答えが無い事に、気を失っているだけだと判断したラスティは、アークとの契約印が刻まれている左腕を押し付ける。普段は見えない刻印が、蒼く浮かび上がって見える。

「阿呆！ 何暢気なことしてやがる、オチガミ墮嚙が来てるぞ！」

足元に投げた魔石を踏みつけるようにして行われたその行為は、アルバの体を加速させ、オチガミ墮嚙を大きく追い越しラスティの元に向かわせた。ラスティの手元では、アークの体が少しずつ透明になっていっている。実体化を強制的に解かせているようだ。

アルバがその背にラスティを庇うように立った時、墮嚙は二人を射程に収めていた。

「????????????????!!!!!!」

距離を詰めた墮嚙が、壁ごとラスティを砕こうと、両の手で鉄塊を握った。片腕でも膨大な運動エネルギーをたたき出すその膂力。それが両腕で振るわれればどれほどのものになるのか、見上げるアルバには予想もつかない。それでも、彼は右腕を腰に構え、先ほどラスティに包帯代わりに使った布と同じような布の巻物を取り出した。

「CODE el ain, soif en albinam, o
ul om albinam (私は告げよう、来る陽を迎えよう、
黎明れいめいを呼び込もう)」

右腕と共に布が光り、意志を持ったように帯の全貌を見せ付けた。アルバの手を離れたその帯は、表面に文字を浮かばせながら周囲を回っている。墮嚙は、鉄塊を振りかぶった。それは今までとは比にならない力を持って落ちてくる。

「Yioe faie tulik ke in, Yesta fo
ie velik xe in, Aiwe tiqitum coi
essatio pirim (君は遠く届く者、貴方は彼方に響くもの、私は此方に在りし者)」

右腕に巻きついたソレは、迫り来る鉄槌を捉えた。雄たけびと共に横に引くアルバ。そしてそれに同調する術布。それは、打ち下ろされた大質量の鉄塊の向きをまたもや変更してみせる。だが、変更できた軌道は僅かなもので、後方の壁と共に、その鉄の義手打ち砕かれた。もう、アルバに攻撃手段は残っていない。

「つくそ！ ラステイハルト！ 齒あ食いしばれ！！」
「え？」

行き成りのことに状況が飲み込めないラステイを、アルバは壊れた壁の方へ全力で蹴り飛ばす。その直後、振り下ろされた鉄塊が横に振り払われた。それはアルバの腹部を捉える。

吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

瞬間、そこは静寂となった。ゆっくりと振りぬいた鉄塊を降ろし、体の向きをラステイに向けなおす。

邪魔者が居なくなり、ラスティを追撃しようと歩む墮嚙。だがその前に、別の一つの人影が立ちふさがった。

「Figgha aquql siudiriem（陽は紅く沈み）」

鈴の音のような音が響く。戦場で聞くには余りに綺麗過ぎるその音。その音を前に、今まで止まることの無かった墮嚙が…とまる。

「Quoita miriea sio colnen（海はその色を映します）」

足元から立ち上るその光は三色。赤・青・黄。

「Mechhe hemfiotoixaiia（山はそれを背に抱き）」

それは次第に綿密に折り重なるようになり、絵の具のように、その色を濃くしていく。

「Andie bliodia woren）???黒く色づいているでしょう???」

それは、ティアマツト・マキナによるものだった。

????????????????

「黒く色づいているでしょう」

そこで一息ついたティアマットは、墮嚙を間の前にしているにも関わらず後ろを振り返る。そこには、彼女のクラスの面々が居た。

「(そっか…無事だったんだ)」

彼女の見つめる先には、ラスティの処置で辛うじて化身を保てるまでに回復していたアークが、自らの主を抱えあげながらこちらを見ていた。その表情は、読めない。ティアマットは、そんなアークに向かって微笑んだ。

「大丈夫だから…私が?????」

後続く言葉を言わず、再び墮嚙に向き直る。何か察知したように、たたずみ、僅かに後ずさりしているようにも見えるその巨体。

そんな墮嚙に視線を向けたまま、ティアマットはまた微笑む。ただそれは、墮嚙に向けられたものなどでは決してなかった。

赤・青・黄???色の三原色が混ざり合い、黒い光に練りあがる。その光景を、誰もが息を呑んで見ていた。

歌と共に黒く、澄んで…そうして体に剣にまとわりつく。

「Yo e e l s i e b e , s o i e k o s u t i m w i l
i a - e i a (アナタを護る、そんな盾にはなれないけれど) t o
u i w e v e i l , s o n s h v e x a w i O l a - e - a
(代わりに折れる、そんな剣にはなりません)」

「CODE：Arnon-Dait（私は、‘独り護る者’ですから）

‘闇’をまといつつ、彼女は墮嚙に足を踏み出した。

????????????????????

その瞬間のことは、酷く衝撃的だった。

墮嚙の前に、ただ独り立ちふさがったティアマット。

そしてこちらを振り向き、微笑んだ彼女。その時にはもう、彼女を包む三色の光は闇になっていた。

CODEと告げた直後にティアマットを包んだ闇。墮嚙の神秘層ペールすら容易く突破して見せたそれは、墮嚙を瞬く間に押し返した。いまやその姿は見え、剣戟の音が聞こえてくるだけである。

先ほどの光景を見ていたラスティは、僅かに回復したアークに抱きかかえられたまま、悪態をついた。

「あの、馬鹿野郎……」

それは、彼女が行った行為に思い当たるモノがあったからだ。墮嚙に匹敵するほどの戦闘力をたたき出すその術。それはラスティが知る魔術であった。そのことを察したアークが、ラスティに質問する。その声は、何処と無く力が無い。

「マスター…あれは…?」

アークに抱きかかえられたままのラスティは、アークの疑問に、苦虫を噛み潰すように重々しく答えた。

「アロン……ダイト」

アロンドイト、詠語から訳すと「独り護る者」。赤・青・黄・色の三原色を混ぜ合わせることで黒を生み出し、その色の持つ闇の力を行使する魔術。

「剣を触媒にする類の魔術で……黒の頂点に位置する魔術だ。」

だが、重要なのはそこではなかった。彼が苛立つのはそこでは無い。ラスティは周囲を見回す。周囲のクラスメイトたちは、その闇に怯えていた。

「お、おい、何だよ、アレ、」

「……こ……わい」

ティアマットが行使した力に、クラスメイトたちは恐怖を抱き始める。魔術という神秘が存在するこの世界。ラスティのところで言う「迷信」が存在するこの世界。迷信が迷信でないこの世界。紅い眼に対する恐怖も闇に対する恐怖も、彼が思っている以上に人々は強く持っている。その恐怖に、自らが護られたと思考する暇さえ無いのだ。

ソレを見るラスティの表情は???暗い。

「独り護る者、…なあ？ この意味、どう思う？」

そう訊く声は、苦々しく、低かった。アークは無言のままている。そしてアークの答えも待たずに、ラスティは語る。感情が留められないのだ。

「アイツさ……二つも持っていやがるんだよ……」

そう、ティアマツトは、伝承として伝わる恐怖の要素（紅い眼）と直接的に恐怖をもたらす要素（闇）の、二つの要素を持っていた。それが、今この場で、彼にとって何よりも重要な事だった。今自分の肉体が相当なダメージを負っていることなどとうに意識の外だ。

「偶然………か………」

その脳裏には、彼女の寂しそうな笑顔が浮かんでいた。

第二十三小節「それは俺のせいだから」

『うん。入、れな、かった』

聖歌隊に入っていたのかと聞いた時に、返ってきた答えがこれだった。

歌が好きだったにも関わらず、剣を持つしか道が無かった。意志など関係なく、そうしなければ居場所が無かった。

ソレを受け入れてしまっていたことに、何と言ってやればいいのか分からなかった。

『私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだって義理の兄に言われてた』

女らしくないからと、いつも彼女は手袋でソレを隠していた。

『うん………やっぱり、私、こ、う、だから』

赤は嫌いか???それに返ってきたのはこの言葉だった。

血まみれの眼???影でそう揶揄されてさえいる彼女。

そんな彼女が、どうして赤を好きでいれるだろう?
元凶のイロ

『神様は何を思って、この世界を創ったんだろうって。そう、思
うんだ。』

恨み言などではなく、本当にただの素朴な疑問。

一見戯言にもとれるこの質問は、俺には余りにも重かった。

どうせなら、はっきりと憎いと言って欲しかった。

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ????』

?????あの子、泣いてたんだ。』

人々に拒絶されてきたその心は、いつしか恐れを抱き…

…ルームメイトに顔を合わせることも出来ずにただ泣いていた。

そのことを聞いた時、自分が思ってた以上に彼女を理解していなかったんだと理解した。

そう……それらは、みな自分が面白半分につくった‘設定’のせいなのだ。

憧れたのだ。剣と魔法の力の世界。

己が腕で今そのときを輝くそんな‘英雄’くだらないものに、ありえないと知りながら夢物語を描かすには居られなかった。それが、始まりだったのだ。

奇麗事で世界は成り立たないと思っていた俺には、誰も傷つかないうような世界を描くことなんてできやしなかった。そもそもとして描くつもりすら無かったのだ。

そうして書き上げた世界の中で、多数の偶然が重なったとはいえあんなものを持たせてしまっている原因は自分だと、そう思うからこそ?????

????????面白半分で創った?????????

その事実は余りにも重過ぎた。

まともには無いにしろ、墮嚙の一撃を受けたラスティは、もはや立ち上がる事にすら全力で挑まなくてはならない。

「俺の……せいなんだ」

覚悟などとは間違っても呼べない意識。

自分の創った世界で傷ついた人間など、それこそ掃いて捨てるほどいるだろう。

あるいは彼女など足元にも及ばないような不幸な人間もいるだろう。

それでもと言うべきか、だからこそと言うべきかという思考の順序は、もう頭には無く…彼女に何かしてやりたい。

それが思考を占めていた。

????????????????????????????????

「……………アーク」

「……………先ほど私がここまでマスターを運んだ際、修正力により現在一割台まで存在が磨り減っています……………申し訳ありません」

先ほどの行動のことだろうが、酷く落ち込んでいる様子が見受けられた。そんなアークに、強張った表情筋で笑顔を作って笑いかける。

「そんだけありゃあ……………十分、だってな……………これが」

「!?!?……………ちょ、ラスティ!? 無茶だよ、そんな体じゃ!?!?」

幽鬼のように立ち上がるラスティの、その意図を察したステラが止める。全身が血で濡れているのだ、誰が見ても戦闘の続行など不可能だと分かる。

勿論本人さえも。

だがその言葉に耳を貸そうとはせず、懐から魔石の欠片を取り出す。ラスティは苦痛を押し殺して声を出した。無茶を通すために。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impose just the same（もしあ
なたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとし
たら。」

強さを求める意志ではなく、自らの義務と誇りを糧に、詩が体の機能を支える。ただ誤魔化しただけにすぎないが、確かにこの場では戦える余力を捻り出した。軋む様な痛さが、頭を襲っている。

「そんな！？いくら『戦詩』だって、そんなことして……………」

無事ですむなどとは思っていない。だがそんなこと今はどうでもいいのだ。

「じゃあ、誰が行くんだ？」

「え？」

それは、押し殺した低い音だった。

突然の発言に、質問の意味を分かりかねたというような反応をするステラ。今までここまで静かな怒気を持った彼を、今まで見たことが無かったのだ。

その反応は、何故かラスティを苛立たせた。

「俺が行かないで、誰があそこに向かうんだ？」

「え……それは……」

ステラは自分だとは言えない。それが出来るだけの力量が無いと
いうのもある。

だがそれ以上に、彼女は怖いのだ。あの闇が撒き散らす恐怖が。
だがそれを咎めることは出来ない。世界をそうあるように、紅い
眼を恐れるように、闇を恐れるように、そう仕向けてしまっている
のは他ならない自分なのだ。

そう、自分なのだ。それがどうしても苛立たしくて仕方が無い。

「あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！」

それを、八つ当たりだと分かっている。こんな事言っても仕方が
無いと分かっている。それでも言わずには居られない。この感情を
放たずには居られない。それでもしなければ、自分が重さで壊れて
しまし罪の意識うそうだったから。

「一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦っ
てるんだ！ 紅い眼だからって怖がられたって、血まみれだってな
んて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！」

紅い眼を持つだけなら、いつかそれを恐れないで接してくれる人
がいたかもしれない。ただ眼が赤いだけで、普通の少女なのだから。

「アロンドイト闇」を出してまで戦ってるんだ！ 今までよりももっと恐れら
れることを承知で、それでもその力を出して戦ってるんだ！」

恐怖を呼ぶ力を持つだけなら、普段も恐れずに接してくれる人が
いたかもしれない。ただ闇を操ったって、普段はただの少女なのだ

から。

「行かないやダメなんだ！今ここで行かないや、またあいつは独りなんだ！」

災厄を呼ぶと言われる紅い色の眼を持ち、尚且つ戦では敵味方に恐怖を撒き散らす。あえて言うならばその髪色は闇を彷彿とさせさえする。そんな彼女に、誰が話しかけただろう。誰が支えてやれただろう。誰が隣に立っていただろう。

誰も立たないのだ。彼女がどんな人物であるかを知る前に、恐怖の印象で埋め尽くされてしまうから。

「アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？ 違うだろ！！」

もう何のために声を張り上げているのか分からない。だが言わなくてはならない。そんな思いが先走った。止められる訳にはいかなから。今あの場に行けるのは自分だけだから。

「歌が上手くて、理論すつ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは！！」

それが、ラスティが入学してから彼女と接してきてしまったこと。彼と屋上に集まる仲間以外、誰も知らないこと。

そう一気に言い終え、肩で息をするラスティ。そんな彼に、言葉を発する者はいない。ただじつとラスティを見つめているだけだ。遠くから剣戟の音が、微かに聞こえてくる。それに耳を済ませていくうちに、心が静まるのを感じた。

荒い呼吸も、徐々に収まってくる。

「……………くそ、何言ってるんだ、俺は。」

らしくも無い、そう搾り出したラストイは身を翻す。

走り出した。

呆然とするクラスメートたちが、その場に取り残される。

間奏「女の姿だったら」

それは、ティアマツトと墮嚙オチガミを追跡する道中での会話だった。通路一帯は壁が抉れ地面が削れ柱が折れて…その戦闘の激しさが伺えた。所々に灰のようなものが積もっていたりするとところを見ると、いくらかの己憂部を巻き添えにしていたのも分かる。今まで沈黙していたラスティが、ふと気付いたかのように聞いたのだ。

「…なあ？ アークは、ティアマツトを羨ましいと思うか？」

アークは、ラスティの言葉に息を呑んだ。

「……………ですが今の私は、余りに無力です……………」

「……………幾ら大きな力を持って、上位の精霊であっても……………」

「……………」

「……………こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません……………」

「……………」

「……………有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です……………」

「……………」

独白が、その心中に甦った。隠したい心の揺らぎが、主に伝わっている事を感じた。

「何故…それを？」

今の自分が余りに無力だから、アークは先ほど見た闇の力を羨ましいと……確かにそう思っていた。だがその心中を主に明かしてない。ましてや独白の内容など伝わっているはずが無い。だが、それを見透かしたかのように、ラスティは彼女の力が羨ましいかと問うたのだ。

「はあ……やっぱりな？ ……一回止まる。アーク、一度化身しろ？？
？ああ、少年態でな」

「接続」したまま化身する余裕が無い今のアークは、主に言われたとおりに、立ち止まった彼の前で化身した。その視線は、やや下向きである。

この急を要する中、彼は何をするつもりなのだろうか？？？
そうアークが疑問に思っていると、いきなり、ラスティは右の拳を頭上に振り降ろした。だがそれは、事を咎め時のような力は籠っておらず……少しだけ痛いと感じるだけの、そんなモノだった。頭の上の握り拳を軽く捻り込むようにして彼は話した。

「阿呆」

そう、短く言い放つだけだった。

頭に押し付けられる拳は、痛いという風でもなく、ただ微弱な刺激になっているだけだった。

「余りに病むな、お前にはお前にしか出来ないことがあるだろう？
普通人と契約するような階位の精霊が、‘記録’なんて使えるか？
俺と‘接続’^{フランク}なんてできるか？」

「それは……」「出来無いだろ？」

そう、確かにそうだった。‘普通の精霊’が扱える現象など、やりようによっては人に手が届くものでしか無いのだ。

指定された情報を、記憶以外の魔術的手段で保存したり、主と精神的にリンクして直接魔術の補助をしたり……確かにそれは、アークにしか出来ない事だった。

「お前がさ、直接的に物質界に干渉出来る力が羨ましいと思うのも分かる……でもな？」

手を離し、ラスティはアークと視線を合わせる。今まで下を向いていた視線は、ようやくラスティと向き合えるまでに上向きに戻っていた。一息ついた彼が言葉を発す。

「俺の世界のことを言って聞かせてもらえたり、俺の愚痴を聞いてやったり、俺の秘密を共有したり……そういったことがさ、そんなに劣る事なのか？」

「あ……………」

「俺はこの世界で正しく、独り’なんだぞ？　お前にしか話せないんだぞ？　俺は凄く助かってるんだぞ？」

気付かされたように固まるアークに、一気に言葉を発したラスティは、拳を軽く突き出した。ソレは軽く、アークの左胸に当たる。

「もっと自分を誇れ。出来ない事を嘆くより、出来ることを喜べ。……大丈夫、俺の心は助かつてる」

そうして彼は振り返った。その視線の先は、ティアマツトと墮嚙が向かったと思われる方に向いている。

「さあつて、ここから先は強敵との戦いだ。準備は出来てるか？
お前がすっかりしてくれないと、俺やばいんだからな？」

試合に臨むようなその口調。全身が傷で痛むだろうに軽い調子。
そんな様子に、アークはようやく微笑んだ。

「はい！」

「良い返事だ。…さて！ 行くか？ 『相棒』」

残り少ない魔石を再び取り出し、左腕に握る。アークも化身を消耗を抑えるため化身を解き、詠唱の準備に入った。二人の声が重なる。

「Fantaxia, sept redint. (幻想式、構築開始)」

「Fantax-ear, sept f a n c t (幻想準式、接続開始)」

ラスティの姿が、僅かに陽炎に包まれる。アークの力が弱まっているせいで不安定になってしまっているそれは、この時ばかりは力がみなぎっているかのように見えた。

そしてラスティは駆け出す。失った時間を取り戻そうと、移動補助の式を使いながら移動する彼の脳内に、アークの声が響いた。

「(ところでマスター。一つだけ聞いていいですか?)」

「ん？ どうした？」

このタイミングで、何か聞かなくてはならない重要なことでもできたのか…：そういぶかしんだラスティの思考は、見事に裏切られた。

「（先ほどの化身の際、少年の姿を所望されたのは何故でしょうか？）」

何かと思えばそんな事。だがその質問は、アークの気分が落ち着いていたことを象徴しているように、ラスティには思えた。先ほどから感じていた、^{フアクト}「接続」の違和感が無い。

「ははは！ 何だよおい！ 何かと思ったらそんな事か！」

ひとしきり声を上げたラスティは、高揚した気分のまま、アークにその意図を告げた。

「一喝するのに、女の姿だったらやりにくいだろうが」

に残っている。だが、そこにラスティは混ざっていないと、何故かそう確信出来た。

最後まで空いたままだろうかと思っただ席に、何とも無い風な表情????それどころか、彼女が危惧していたことは全く無縁な事に頭を抱えていた???で、ラスティが座った日を思い出した。

『よ、同じクラスみたいだな。よろしく』

あの時みたいに、気にする事が馬鹿馬鹿しいという風に接してきてくれるだろうか…今度は、少し期待してもいいだろうか…そう、思う。

生き延びたら、また皆で屋上に行きたい。また歌いたい???また聴いて貰いたい。

そんな希望があつたから、彼女はまた踏みとどまることが出来た。そんな希望を護りたいと思つたからこそ、耐えることが出来た。

もうどれだけの回数、墮嚙の鉄塊を弾いたことだろう。アロンドイトの動作補助の効果を越えた体の酷使に、全身が軋みをあげていた。

その腕を受け止め、体を浮かせる。吹き飛ばされる形でティアマツトは、落嚙と距離をとつた。

「!!!!!!……腕、が……」

いつ来てもおかしくなかった体の限界。遂に見えた限界。今の一撃で彼女の左腕が折れていた。

いくらアロンドイトでも、片腕の力では防ぐ事は出来ない…ここまでかと諦めかけた。

その時、背後から一条の閃光が落嚙に突き刺さる。
爆発音とともにその巨体は姿勢を崩す。直接的なダメージは無い
様だが、確かにその閃光は落嚙の動きを止めていた。そこにもう一
撃。さらに後退した巨体は、その衝撃に耐えられず転倒する。

「え………」

神秘層ベールがあるはずの落嚙を魔術で転倒させたことよりも、ティア
マットはその閃光の色と音に聞き覚えがあることに驚いていた。

「あれは…ラスティの」

規模に違いはあれど、空の色をした閃光を、高く響く音とともに
打ち出すそれは、間違いなくラスティの狙撃系魔術。

足音がする。そしてソレは、彼女の真横でとまり……

「あーあ、今の手持ちの中で一番でかい魔石で打ったのに、転ばさ
せただけかよ。ったく、何食えばあなるんだ。耐久性なら世界種
に届くんじゃないのか？」

なあ？ と、同意を求めるようなその表情??? そうやって、彼
女の隣には彼が立っていた。そのことに、ティアマットはただただ

言葉を失っただけだった。期待していたよりもそれは?????

そんな彼女の様子に気付いたのだろうか。ティアマツトの方に顔を向けたラスティは、いつものように笑みを浮かべ??

「どうした？　ありえないものを見るような目しやがって」

こんな状況で、まるで子馬鹿にするようにそんなことを言ってきた。だが、そんなことは露も気になることなどない。気にしないでいてくれる？　そんな口にしよつとした疑問は消えた。

「あ……………」

その表情、口調、言葉……それら全てが、彼女の疑問を無意味にする。

そのままできてくれるのだ。

変わらないでいてくれるのだ。

恐れないでいてくれるのだ。

隣に立っていてくれるのだ。

その事実だけで十分だった。期待していた通りだった。

「う……………なんでもない」

「ああ、了解した」

そう答えたラスティの口調は優しい。その視線に、自分の疑問と葛藤を見破られていたような気がして、ティアマツトは顔をそらす。恥ずかしい。非常に恥ずかしかったのだが、それ以上に彼女は安堵していた。

視線を敵に向ける。すでにソレは立ち上がり、ありもしない視線でこちらを睨んでいた。

「今の俺じゃアレにトドメを刺しきれない。手札は残ってるか？」

ティアマツトが答えるより早く、立ち上がった落嚙が咆哮をあげた。

「……………」

音としては伝わらないその叫びに乗るように、その激情が叩きつけられる。共振現象、貪欲な激情タペタイを叩きつけられても、あえて心を保とうとする必要などもう無い。折れた左腕など気にしない。今のティアマツトには、左腕以上に心強い者が居た。

「一つだけ。正式開放がある」

「アロنداイトのか？」

誰も知らないと思っていたこの魔術アロنداイトの名前を言い当てられ、本当に彼は物知りだと、驚く事もせず微笑む。

「うん」

そう短く答え、ラスティの前に立とうとして?????彼も前に踏み出した。この事には驚いた。あわてて墮嚙から視線を外してラスティに向く。

「ラスティ！下がって、近接武器の無いあなたじゃ……」

「大丈夫、武器はある」

徒手空拳でたたずみながら、そんな事を言つてのける。何も持つてないと言つより先に、両の手に大き目の魔石を握つて答えた。

「さつきからずっと護られてばつかだから……心配すんなって、ティアマツトも左腕折れてるんだらう？」

「……確かにそうだけど、でも??？」

墮嚙が足を踏み出す。もう時間が無い。

「俺を信じる」

そう言われて、ティアマツトの動きが止まった。信じる……先ほどまでコレを抛り所に戦っていた彼女は、そのワードに急に反論出来なくなつてしまった。そんな彼女に、ラスティは言い残して駆ける。

「は！ たまには俺にも、格好つけさせてくれってな、これが！」

「ラスティ!!!」

詠唱を始めながら、彼はティアマツトを置いて駆けてしまった。残された彼女は、そんな彼を信じて止めの一撃の準備に入るしかなかった。

「……御武運を……」

目を閉じて、剣で十字を切る。

「散々格好つけて飛び出したからな！ 失敗なんて出来ないぜ？」

両の手で握り締めた魔石、直径五センチほどの球状のそれを広げるように持ち、立ち止まる。詠唱の構えを取って、アークに念話で問う。墮嚙との距離には未だ余裕がある。

「（用意はいいかアーク？ 結構長めの詠唱行くぞ？）」

「（はい！）」

共振現象を叩きつけられたにしては、余りに力の抜けた両者のやりとり。迫る墮嚙をモノともせず、両の手を前にかざして詠唱を始める。

それは、ラスティが良く使うものとは違い。どこかティアマツトのものに似ていた。

「Arfe arfe infertia（強く強く、お願い）」

両の手を中心に、薄青い光りを放つ‘線’が現われる。

「Tufetufethowviel tioliariolem-issasa（遠く遠く、ただ雲居を追いかける）」

それは半球状にラスティを覆う。瞬く間に、ドームを形作った。

「Alcurimnowkia Lastimurma（憧れに伸ばした私の腕は）」

その魔法陣と言ふべきか迷つそのドームには、幾重にも重なるように文字が描かれている。

「Kattiam soltierretymous（鏡にその手を合わすだけ）」

脈動するかのようには、収縮、膨張を繰り返すそのドーム。

「Carie livia Lastum wessa（駆けて生きた私の道は）」

それは、詠唱が進むと共に、周囲の魔力すらも励起させる。

「Irrell-arem olwona（夢物語の海の中）」

空気中にスターダストのように現われたそれは

「Venoum armatum Xeesa（私を覆う硝子の空には）」

周囲を優しげな光りで包んだ。

「Zioe ioe jelnik wein（爪が突き立てられるでしょう）」

気付いた時には共振現象の影響が消えていて、

「Xienolfillie Lasow halt（霞に浮かぶ私の心は）」

体が軽くなったように、ティアマットは感じた。

「Om keina cai Fer fel fatum (遠き日の名を探すでしょう)」

墮嚙との距離は徐々に詰まる。

「Xoxe:lem on ain sof (空を見て謡うこの音は)」

双方の距離が十メートルを切るうとした。

「Calsie-essa (果たして)」

その時、詠唱は修了する。空が、謡った。

「O aire feene Xeen? (世界を感じているか?)」

ドーム状の式が、その形状を保ったままで拡大する。それは何物にも被害を与えることなく、徐々に薄まりながら、やがて見えなくなった。空気は静まり返っている。

それは誰の目から見ても失敗では‘なかった’。静まった空気は、何かが違う。目を閉じていたラスティが、静かに目を見開いた。

「…さあて…行くとしますか…」

現象の中心にたたずんでいた彼の右腕には、細めの鞘に入った剣が握られている。ティアマットが持つ剣と同程度の全長だと思われ

だが、ラスティの身長が高い分短く見える。体の前に持っていった左手が柄を握った。

「カスミギリ
霞霧」

そう告げると、勢い良く両手を開いてその剣を抜く。抜き去った後の鞘は硝子となって消え、左手に残った剣を重力に任せるように降ろした。曲線を描いた刀身が、鈍く金属特有の光沢を放つ。

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

第二十五小節「海に還る」

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

彼は、地を蹴った。怪我で血を流したとは思えないその速度に、やや遅れながらも墮嚙は反応する。右上段から、袈裟に鉄塊を振り下ろした。幾度も物に打ちつけられ剣としての面影すら残っていないが、武器そのものの重量から繰り出される一撃は、か細いその剣をへし折って余りあるだろう。

「当たらなければ？つてな、これが！」

だがそれも、当たらなければ意味を成さない。走りこんだラスティが、その軌道を予測したかのようにそのすぐ左に身を入れる。右肩を前に半身になったラスティの背を、剣圧が撫でる。床に振り下ろされる鉄塊。振り下ろされた後の右腕が、ラスティの目の前にあった。

「Lain Rede（描空を辿れ）」

詠唱と思われる一言と共に、左腕を振り上げる。その隆起した太い筋肉組織、その半分をその曲剣が切り裂く。低下した筋力を補うように左手も握った墮嚙は、打ち下ろした姿勢のまま横に振り払った。アルバを襲ったものと同じである。

だがソレを、人のものとは思えない跳躍でよけるラスティ。墮嚙の頭上、上空約三メートルほどの跳躍を見せたラスティは、左手を大きく振りかぶった。

「切り裂く…」

降下と共に振り下ろされた一閃は、墮嚙の右腕を完全に切断した。

ティアマットは、その様子を驚愕した様子で見っていた。突然出現した見た事も無い意匠の剣。そして墮嚙の動きを読んだかのような動作????加えて彼女の右目（水晶眼）に見える、青い線。

「辿って…いるの？」

その線はラスティの剣閃に先駆けるように出現していた。魔術的な何かと思われるそこを、寸分の狂いも無く剣は辿っている。

見た事も無い現象に一時呆然としていた彼女だったが、自身の役割を思い出す。自分は最後の一撃を決めなくてはならないのだ。

地に剣を突き刺し、右手で左側のポケットから三色一組の魔石を取り出す。既に機能しない左腕は下げられたまま、その魔石ごと柄を握った。足りない握力を補うように、アロントライト「闇」が巻きついてそれを補強する。

「a u i r e t i a e l a m s a …（私に伝えて…）」

目を瞑り、その準備に入る。

右腕を切り落とされた墮嚙は、それでも左腕で鉄塊を振るい続ける。先ほどの奇襲にも似た一連の攻防のように行くわけもなく、振り回される鉄塊をよけるのでラステイは精一杯だった。

「つくそ…体にガタが来たたってつてもなあおい！」

満身創痍の体を無理矢理誤魔化して動かしているだけのラステイ。リーチ差の違いが大きい中、彼は隙について懐に潜り込まなくてはならない。が、絶え間なく振り回す墮嚙には、その大きな隙は無かった。一撃食い込ませることが出来たとしても、その一撃では戦闘力を奪いきることが出来ず、射程からの離脱前にやられるのがオチだ。

「(マスターいくら何でも無茶をしすぎです！一度距離を離してください！)」

アークの声が脳内に響く。確かにアークの言う通りであると思ひ、離脱を試みる。だが、墮嚙は距離を詰めようと突進してきた。

「つくそ！距離は離させないってか！？」

全力で駆ければ逃げられないことは無いが、それでは意味が無い。あまりティアマットと距離を離してはいけないのだ。

だが人の体は、そこまで長時間無酸素運動を続けられるものではない。墮嚙の肉体は、そもそもとして構造が変異しており、幻子で編まれたたんぱく質が強靱な組織を作っているのだ。通常のたんぱく質しか持ち得ない人間とは持久力そのものが違う。

「くそ！アイツの準備はまだか！？」

避ける度に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。意図的にリミッターを解除された肉体は、その組織の殆どを使い果たそうとしている。一撃を加えてから、まだ一分強しかたっていないが、それが途方も無く長く思えた。

「（マスター！ ティアマットさんの式の用意がそろそろ終わるよ
うです！）」

アークが、砂嵐交じりの映像を送ってくる。脳内に再生された映像には、剣を握る黒い人影が見えた。恐らくティアマットだろう。それを肯定するように、ティアマットの叫び声が聞こえる。

「ラスティ！」

名前を呼ぶだけの声。だがそれが、準備が出来た事を示すものと容易に理解できた。彼女の攻撃を必中させるための隙を作るため、懐から最後の魔石を取り出す。今この場での、ラスティの切り札だった。

念話ではなく声に出して、ラスティは叫んだ。強く地面を蹴り、墮嚙と距離をとる。

「ラスティ！」

ティアマットが叫ぶと、その意図に気付いたかのように後方に跳び、ティアマットと墮嚙、ラスティと一直線になるように立った。そして左手に剣、右手に魔石を持ち叫ぶ。

「突っ込め！ 俺がヤツの、視界を封じる！」

墮嚙と一定の距離を保つようにしながら詠唱に入るラスティ。その言葉を信じるように、ティアマットは駆け出した。

ハンドアンドハーフソード
片手半剣を肩口に、切っ先を墮嚙に向ける。その切っ先は墮嚙の背を捉え、このまま直進すれば墮嚙の背に突き刺さるだろう。

だが、墮嚙は背後にも目があるように行動することで知られる魔獣だ。死角など事実上存在しないといわれたその‘視界’を、ラスティはどうやって封じるといふのだろう。その答えは、すぐに現われた。ラスティの詠唱が完成する。

「Quolliwen！（静め！）」

その瞬間、墮嚙の動きが止まる。目の前にラスティが居るにも関わらず、周囲を見回すようにその体を左右に向ける。勿論、ティアマットのことなど認識していない。

「はあ！」

闇を纏った剣が、墮嚙に突き刺さる。神秘層ヘールを物ともしない強固な幻想が、その刀身を深くまで導く。一メートル以上の刀身のその大半が、埋め込まれた。その柄を押し込む腕は、まだ握り込まれている。

「D・Lacxelioren（ディラックの海にお還りなさい）」

その一言に、刀身から闇が開放される。

虚数空間に還す闇が、刀身を中心に多数の針となって現われた。肉体に埋め込まれた刀身から開放されるそれは、墮嚙の肉体を喰らう。その闇の針の貫いた跡の箇所は、その尽くを虚数空間ディラックの海に飲み込

まれていた。

崩れ落ちる墮嚙の肉体。その肉体は、既に風化し、硝子のような光沢を発する粒子となって消えていく。肉体にこびりついた魔力の結晶たちが、肉体を世界に、還して、いるのだ。結晶化現象と呼ばれるそれは、勝利を祝福するように二人を光りに包む。周囲の己憂部たちは、既に本体の絶命オチガミとともにその姿を崩していた。

「勝った……の？」

目の前の光景が信じられないかのようにティアマットは呟く。墮嚙が光りに消えていく様子を見つめる彼女の隣に、ラスティが近寄っていく。

「はは…やっちまったぜ？ 墮嚙に勝つち…まっ…た…」

力なく座り込み、そのまま仰向け寝転んだ。ティアマットもそれに習うように座り込む。お互い体を酷使しすぎて立っている事も出来ない状態に、皮肉げに笑いながらラスティは言った。

「あゝあ………疲れた………」

そう言ったきり、ラスティは何も声を発しなくなる。気を失ったのか眠ってしまったのかよく分からないが、その表情は晴れやかだ。そんな彼の表情を見て、急に意識が遠くなる。

「休んでいただいても大丈夫ですよ、ティアマットさん。私がお二人を見ていますから」

踏みとどまろうとした時、アークのそんな声が聞こえる。その声に安心したように、ティアマットも横になった。

「じゃあ…お願い…ね…」

そうして彼女も、深いどこかに沈んでいくような感覚の中、その意識を手放した。

暫くしてから来た救援の教師達が一番最初に見たのは、並ぶようにして眠るラストィとティアマツト。そして二人を見守るアークの姿だったという。

第二十六小節「ルビー・アイ」

もうこの世に残っていないと思われていた人造魔獣「墮嚙」^{オチガミ}の出現は、世間を大きく騒がせた。一般の新聞記者の取材が、学院に多数押し寄せた。

学院はその対処で一時授業が出来なくなり、その間生徒達は思いの行動を許された。とはいっても、実際に襲われた一年生？？特に四組、その中で更にラステイハルト、ティアマットの二名は事情聴取にその大半の時間をとられていた。

今回の事件で怪我を負ったラステイとティアマット（アルバ先生は義手を失っただけだった）は学院の保健室でその聴取が行われた。‘めんどくせえ、適当に誤魔化せや’と先生からの教えをうけ、聴取を任されたアルバ先生と三人でその調書を作り上げる。この時の話で、どうやらココに来る前に墮嚙が別の場所を襲っていたことが分かったらしい。近くの遺跡に調査を訪れていた一団の大部分が死亡したそうだ。

報告の調書を作り上げたそれから後は、お見舞いをうけつつ暇な日々を彼らは送っていた。

毎日異様に苦い薬を飲まされたおかげで、その怪我の治りは早い。ラステイは三日で保健室からの退室の許可を出された。退室してからも毎日屋上組と共に見舞いに訪れていた。

ラステイの退室から更に四日、今度はティアマットが保健室から退室した。

一週間ぶりに歩いた教室へ廊下を、ティアマットは懐かしく感じている。硬質の木の床にブーツの底が打ちつけられる音を聴きなが

ら、ティアマットは妙に静かな廊下を不思議に思った。今の時間は授業中だっただろうか。

教室の扉に手をかける。その扉を開いた時、ソレは訪れた。

「主役の登場だ！ クラッカー隊、つてえ！！」

ラスティの号令と共に、数人の生徒達から放たれたクラッカーの一斉掃射がティアマットの頭上に降り掛かった。突然の軽い炸裂音、降り掛かる色鮮やかな紙片。ソレを呆然として眺めていたティアマットの手を、ステラが握った。

「ははは！ ティアマットちゃん、コッチコッチ！」

「え？ え？ え？」

状況が飲み込めていないティアマットの手を握ったまま、いつもは教壇が置かれている位置まで引っ張られた。そこで何かを羽織らされ、黒板を背にして立たされる。彼女が向かされた視界には、クラスメイト達の姿が映っていた。

『退室（退院？）おめでとー！』

事の発端は、ラスティが皆に放ったあの叫びだった。

『あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！』

護っている。その事実を考えられた生徒は殆ど居なかった。

『一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦ってるんだ！』

紅い眼だからって怖がられたって、
血まみれだってなんて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！』

その事実には、何人の生徒が驚愕しただろう。護ろうとしているというそんな余りに分かりやすい彼女の行動に気付かなかったことに、何人の生徒は考えさせられただろう。

『アロント
アロント』を出してまで戦ってるんだ！』

今までよりももっと恐れられることを承知で、
それでもその力を出して戦ってるんだ！』

『行かないやダメなんだ！』

今ここで行かないや、またあいつは独りなんだ！』

そう、あの場で彼女の元に駆けつけようとしたのは彼だけだった。

『アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？』

違つだろ!!」

誰もその言葉に異を唱える事が出来なかった。それは正しい事だったから。

「歌が上手くて、理論すつ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは!!」

そのことを、果たして何人が知っていただろう。先入観に先立たれるばかりで、誰も彼女の事を理解していない。ラスティ以外に彼女と話す、ゲルト・ハイス・ステラでさえも、始めは彼女に話しかけれなかった。

事実、彼女とラスティは墮嚙を最終的に打ち倒した。彼女は皆を護つたのだ。だがそんな彼女に、自分達は何をしただろう。

彼女を恐れ、遠ざけ、陰では貶める。それだけだったのだ。

何かしてあげれないか。そういち早く言ったのは、彼女のルームメイトのステラ・E・フィニエンスだった。彼女の最初の女友達であつた自分が、ティアマツトのことを怖がつてしまったことを、本当に後悔していた。ラスティが駆けていつてしまった後に、座り込んで泣き出してしまったのは彼には知られていない。

クラスメイトを集め、怪我が早く完治して先に保健室から出てきたラスティに、彼女達は押しかけた。そんな彼女達の様子に、ラスティは嬉しそうに笑いながら言った。

「アイツの怪我が完治したら祝つてやろうぜ! パーティだパーティ! 祝勝快復その他諸々ひつくるめて、祝つてやろうぜ!」

その日からの一年四組の行動は早かつた。担任教師に直談判。彼女が快復した日に一日休みにしてもらえるように頼んだ。色々な利

害（その日が休みになる。自分は何もしなくてもいいe t c）の駆け引きで味方についたアルバ先生の協力もあり、その日を作ることに成功した。

「ふふ…でね？」

肩を優しく掴んで振り向かされた先には、赤いチョークで大きく書かれたアルファベットがあつた。

R U B Y - E Y E

ルビーアイ 紅玉眼。そうそこには書かれていた。ソレは彼女の目の色、右目の赤い色にちなんだもの。数々のこの眼にちなんだ二つ名の中で、唯一、彼女を賞賛したもの。またも呆然とその文字を見詰めるティアマット、その耳元で、ステラは言った。

「ラステイクンが考えたんだよ？ ‘アイツの眼は血まみれなんかじゃない’ っていつて?????’」

「おいステラ!!!!!! それは言うなと言っただろう!」

後方から、慌てて叫ぶラステイの声が聞こえる。それにおどけて首を竦めてみせ、彼に背を向けたままティアマットに向かい舌を出して見せた。それはどういう意味なのだろう？

そこからは、その日一日中彼らは騒いでいた。女子達が用意した昼食はまれに酷く辛いものが混ざっており、その大半をラステイが引き当て

何故か行われた腕相撲大会では、ティアマットが男子の部で優勝

するという一大事件を起こし

ハイスは（腕相撲の）トトカルチヨで荒稼ぎ（優勝予想ティアマツト）

早々に負けた人達はチエス大会を開き、そこではゲルトが優勝

その後行われたビンゴ大会では、ステラが最初の五つでビンゴをそろえてしまう

そんなお祭り騒ぎが、放課後になるまで続いた。
そしてその中に、確かにティアマツトは居た。
その笑顔は

エピソード「騎士の少女」

「え？ いいの？」

放課後になり、お祭り騒ぎの終わった一年四組はクラス総出で後片付けをしていた。ティアマツトも手伝おうとしたのだが、ステラに止められてしまう。

「いいのいいの！ ほら、今日はキミの快復祝いなんだし！」

でも、と言い留まるティアマツト。そんな彼女に、ステラは耳元で呟いた。その悪戯したときのような表情は、ティアマツトには見えていない。

「それにほら、ラスティくん。きつと屋上に居るよ？」

「え？」

何のことか分からないと、そう呆けた顔をしている彼女に、距離をとりながらステラは微笑む。

「ラスティくんもあの時は大変だったからね、だから二人には今日は休んでもらわないと！」

ほらほらと、押し出すようにしてティアマツトを屋上に向かわせる。そして、彼女が教室から出る前に、ステラは忘れていたという風に一言言った。

「あ、そーだ。その‘コート’ね？ ラステイクンが作ってくれたんだよ、ちゃんとお礼しておくんだよ？」

ティアマツトが現在来ている‘コート’??? 教室に入った時に羽織らされた??? 赤いロングのコート。カソックに似たあれが、墮嚙との戦いで駄目になってしまったから、その代わりにと渡されたコート。皆からの贈り物と言われていたが、どうやら彼女が言うにはラステイからのものようだ。

それも、ラステイには言うなと言われていたのでは??? そう思ったが、あえて追求はせず、了解の返事を言って教室を後にした。

????????????????

「お？ ティアマツトか」

一週間ぶりの屋上^{ルーフ}では、仰向けに空を見るラステイと、（少年姿の）アークの姿があった。顔だけ向けてティアマツトの方を見るラステイは、今日の感想を訊いた。

「どうだった？ 今日のパーティは」

その質問に、ティアマツトが彼の隣に座りながら喋る。すれ違いに、‘少しかっってきます’と、‘か’の音を強調してアークが立って、その姿を消した。

「うん、楽しかった????? なんだか、新鮮だった」

笑顔でそう答えるティアマツトに、満足そうに返事をする、また空を見上げ始めた。空が色付きはじめている。そのまま時間が過ぎた。腕を頭に組み仰向けに寝転ぶラステイ。膝を抱きかかえるよ

うにして座るティアマツト。特に何か会話する訳でもなかったその空気は、双方に最初の日のことを思い出させた。それを、ラスティが言う。

「何だかこうしてるとさ…最初にティアマツトの歌を聴いた日を思い出すな」

そう言ってラスティは体を起こす。足を組み、胡坐の姿勢に左手で頬杖をついた。ラスティのその言葉に、ティアマツトは首肯しながら肯定する。

「うん……そうだね…」

そこからまた、少しの沈黙。そこで、彼女はステラに言われていたことを思い出した。‘礼’を言わなくてはならなかったのだ。

「そういえば、このコート…ラスティが作ってくれたんだって？
…あ……………」

そこで彼女は思う。思い返してみれば、ラスティに礼を言うのは初めてだった。そもそも人に礼を言ったことすら彼女は思い出せない。ひよっとすると、ラスティはティアマツトが初めて礼を言う相手なのかも知れない。そう思うと、何故か恥ずかしくなる。

「……………ありがとう…」

何とか礼を口にする。だが、ラスティはそんな彼女の心情など露も知らず。全く別のことに頭を抱える。これにも、何処か既視感が抱かれた。

「!?!???!???!?つくそ! ステラか!? アイツやつぱり
言いやがったな!？」

何を恥ずかしがっているのか、頭を抱えたまま悶えるラストイ。
そんな彼の様子に、礼を言うのを恥ずかしがった自分が馬鹿であっ
たかのように思えた。ようやく心の平静を取り戻したラストイが、
体勢を起こして言う。

「つまあ…一応アークと一緒に礼装処理したものだし、材料だつて
皆から集めたり買ったたりしたやつだ。だからそんな、俺一人で作っ
たつて訳じゃないんだからな?」

まるで弁明するかのようなラストイの口調。ティアマットは、視
線を夕日に向けたままで、短く返事をするだけである。ラストイは
何か言いたげだったが、すぐにその表情を変えた。難しいものだつ
た。

その表情の意味は、すぐにわかった。

「なあ……ティアマット。やっぱ、赤は嫌いかな?」

ふと気になったその質問。彼女のコートは、赤い布で作られてい
る。嫌いにならないでほしい???そんな願いが込められたその
コートを、彼女は気に入ってくれたのだろうか?

一瞬間の間。そして、いつかのように目の前の低い地に飛び降りる。
右足を軸に、振り返る。赤いコートのすそが、翻る。

「ふふ……さあ…どうでしょうね?」

夕日の明かりに照らされたその表情は、はぐらかされた答えとは

別に、何か物語っているように見えた。

その日、久しぶりに夕日の歌を聴く。

聴衆がラストイだけなのは、最初の日以来だった。

「Tufemiriesier norurfigha
aquqlsuidriem(遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kollidiazoiervolk'er'hiaaixasier
qiu(小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Foukaciner viwlimolt,tinu
asukiasier qiu(何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

Timia,olnia,nelmia,weixia...wo
rkattiguriekillukerumu(時や場所や名前
や歳や...みんな違っているけども)」

「soufiasiewenna quekillia(それで
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexia fumriie(いつも隣に誰か居て)」
「nokthopiumusiekillia(そう願いはしな
いけど)」

「sefieoxiarkelfimquokieoul

n (せめて同じ景色を眺めて欲しい)「

「softa lewriessa hopiens)そんなときや
かな願っただけ。」

「私の主は歌が好き」

X月Y日 木曜日 はれ

私が前々から気になっていたことがありました

.....

「ラスティさんは、ホントに歌が好きなんですね？」

墮嚙の襲撃事件から初めて皆で屋上に集まったその日、ティアマツトの歌を聴いてご満悦のラスティに、ゲルトは言った。ラスティは、それがさも当然であるかのように口早に反応した。

その質問をしたゲルトさんに、少しは役に立つと賞賛の声を送ってあげようかと思いました。その…少々私では聞きにくかったので

「当然だろ？ 歌は、音楽は最高だ 人の創り上げた最高の芸術だと俺は思う」

よほど音楽が好きなのだろうと思われるその発言に、ステラが納得したように反応した。

「ゲルトくん、そんなこと聴かなくても判るじゃん！ ラステイクんってばいっつもいっつも、ティアマツトちゃんの歌が聴きたい！ っとな感じでそわそわしてるもの」

「お、俺ってそんな感じなのか？」

私としては、彼女のことを気にするのに考えられる要因がもう一つ思い当たるので、中々聞きにくかったのですが…なるほど、やはりそうでしたか

周囲からの風評に、引きつった笑みを浮かべるラステイ。その隣では、膝を抱えた何時もの姿勢で、恥ずかしそうに頬を掻くティアマツトの姿があった。

そういえば、彼女は何時も膝を抱…：タイイクスワリなるものをしているのでしょうか？

「おうおう、そうだぜ？ オレらが早く来れば、アイツ（ティアマツト）は？」って何時も言ってくるじゃねえか」

マスターの次に彼女の登場を待っている音楽好きが何を

（消された跡がある。よく見ると、'言ってるやがる'と書かれていますよ） 言うのでしょうか？

そんなハイスの発言に、二人は揃って顔を赤らめる。ラスティは胡坐に頭を抱え込んで呻き、ティアマットは膝に顔を埋める。二人の座る位置が並んでいこともあって、（アークを除く）周囲は声を上げずに笑った。

「ううううううううううおおおおおおおおおお！！！！」

急に叫んで立ち上がったラスティが、恥ずかしさを紛らわそうとしてかその場から走り去っていった。しばらくそのあたりを走り回っていれば、そのうち戻って来るだろう。そのことを皆にアークが告げた。

お一人にしていた方がよろしいでしょうから、私は後を追いませんでした

「あれ？ ラスティさん？」

そんなマスターを見て、唯一その行動の理由が分かっていたゲル……鈍金（鈍い金^{ゲルト}さんが首をかしげていました

た。ラスティのその行動で空気が誤魔化された皆は、少々話題を変えた。

「そついやよ、教会の魔術にある『聖唱術』って見たことあるか？」

ハイスが言ったその聞きなれない単語に、ステラやゲルトは首を傾げる。元は教会に居たティアマットが、それに回答した。

「詠唱に旋律をつけて行う魔術……だったと思う。一応、私は少しだ

「使える」

「お！ マジでか！？ すげえな！？」

彼女の回答に、心底驚いてみせるハイス。事情の分からない（アーク含む）三人は、ゲルトを代表にさせ？？して質問した。

「その聖唱術ってなんなんですか？」

「あ、わりいわりい。聖唱術ってのはな、さつきティアマツトが言った通り、‘詠唱に旋律をつけて行う魔術’だ。教会連中は、‘魔’の文字を入れたがん無いんでそう言ってる」

「旋律がある分、おっそろしく詠唱は遅いんだけどよ、その幻想の規模とか強度とかハンパねえんだ。まあ、術式に制御基盤が少ないらしいから、すっげえ精神力使うみてえだけどな？」

「たまに発揮されるハイスのトリビア。そのことに妙に感心したように、ゲルトはうなずく。」

「そういえば、精霊の方にも似たようなものはありましたね」

「なんでその技法が強い幻想を生み出せるかはわかってねえんだけどよ。何でも教会が言うには、‘歌は神への供物’だって言うてよ」

「その会話は、マスターがお戻りになるまで続けられました」

‘歌は神への供物’、言いえで妙だと思ひます

「私の主は左利き」

今日は、様々な魔術礼装の様式の授業がありました

「ねえねえ、みんなの礼装って何？」

そんな、ステラの言葉から始まった。その場のノリというもので、放課後に皆の礼装を持ち寄ろうという話になった。

学院内に居る間は自身の専用礼装を持ち歩かないような生徒も多い（サイズなどの点から）ので、自然に魔術実技の授業でもなければ持ち寄らないようになっていた。そのためお互いの礼装を見たことが無かったのである。

普通はこのような事などしないでしょうとは思いますが

放課後、礼装を持ち寄ろうという話になり、ラスティは自分の寝室の中で悩んでいた。ベッドの上に仰向けになり、ベッドの端に少女（アークが座っている）

礼装が無い…そもそもとして作ってすらないのである。

「いや、むしろ何時俺にそんなもん作る時間があったかつては思うんだけどな、これが」

いくら学生の身とは言え、自身の礼装を持っていないというのはあまりに不自然である。

礼装とは、この世界において何らかの神秘が込められた物を指すのだが、この場合は、魔術を行使する時に、自分が最も強い幻想を生み出せるものを指す。

それは杖であったり、剣であったり等様々だが、共通して言えることは、その使用者が最も丹精込めて作り上げたもの…ということころだろうか。

マスターは、いつも魔石のみで魔術を行使していましたから

…

魔術を行使する際に必ず必要となるのが‘魔石’。人の意思の力に反応し、幻想を作り上げる力の源。人々は、ただ魔方阵を生成するのに必要としか考えていない。が、それは魔石が人の意思を受けて、幻想を形にするのに必要な形態をとっているだけに過ぎない。云わば幻想の設計図、器。そこに自身の幻想を注ぎ込むことで、魔術は完成する。

そしてその器の生成を補助するのが礼装。自身をより深い瞑想状態に導いたり、幻想の‘存在の保証’に用いられたりする。

意識をコントロールするための式を初め、様々な式や言葉が刻まれている。それをを用いることで、人はより強力な幻想を創り出すことが出来るのだ。

私の補助で、マスターは礼装無しでもそれなりの魔術を行使できますからね

それを持っていないということは、余りにも不自然過ぎた。だからこそラスティは悩んでいた。

「アークが礼装っていうのも拙いしなあ…」

実際は殆どそうなのであったが、魔術士がそのように他の存在に頼りきつているという話も拙いのであった。集合までには、あまり時間が無い。

私はそれでいいと思います……私がマスターの礼装……

「なあ、アーク……何かいい案無いか？」

「（やはりそれでは駄目なんですか……）そうですね……あの、オチガミ墮嚙と戦った時に用いた剣などはどうでしょう？」

「それだー!!」

アークの一言に、ベッドから勢い良く姿勢を起こすと、世話しく何かの準備を始めた。ストックしている魔石を、各色を三個ずつ持ち出し、ベッドの上に転がす。何やらノートも取り出したラストイは、急いでそれをめくっていき……やがて止まる。目的のページを探し出したようだ。

「ふっふっふ……よし！ アーク、ファンクト接続、だ！」

もうすっかり回復しきっていたと思っていた私でしたが……あれは辛かったです

????????????????????????????????

「ラストイくん遅いね……。いつもなら一番最初に来てるのに」

ラストイたちを除くメンバーは、もう既に屋上にそろっていた。みな、それぞれの腕に何かしらを抱えている。

「そっだね……ラストイ、遅いね」

ティアマツトがステラの発言に同意する。その彼女の発言に、それだからかおうとハイスがある提案をした。意地の悪そうな笑みをしている。

「そんならティアマツト。あんたがラスティ迎えにいきゃあ良いじやねえか」

「え!?! な、なんで私!?!」

妙に狼狽をしてみせるティアマツト。『じゃあ僕が…』と言おうとしたゲルトがハイスの手で沈黙させられ、彼の脇に抱えられた。空気の読めない子ティアマツトの様子に、更に笑みを強めるハイス。ティアマツトの背後では、ステラがハイスに親指を突き上げて賞賛のハンドサインを送っている。

「そりゃあ、だって…なあ?」

「ねえ?」

異様なまでにハイスとステラの息が合っている。二人に挟まれて、その行動への反応に混乱し始めた彼女に、救いの声が聞こえた。

「すまない、待たせた」

皆が振り返ってみると、入り口の方からラスティと何故かやつれた(少年)アークの姿があった。今話題になっていた本人が来てしまったことに、ハイスとステラは残念そうな表情を見せる。

「あゝあ、来ちゃった…折角ティアマツトを迎えに行かせようと思ってたのによお」

「ははは、なんでそこでダイヤモンドなんだよ」

何ら動揺もせずを受け答えるラスティ、そして何時もの位置…テイアマットとハイスの間に座った。何故か今日はアークがうつ伏せになってラスティの後ろに居る。それに視線を向けた一同が、同じような質問をした。

「…アーク（ちゃん）、どうした（のorんですか）？」

「いえ…何でも、無いです。どうぞお気になさらずに…」

うつ伏せのまま答えるアーク。苦笑いしながら後頭部を掻くラスティ。

とりあえず、皆はそのことを聞かないことにした。

その御心遣いだけでも受け取ります…うう、マスターの馬鹿

????????????????

「えっと、今日は私から？」

その日はまたジャンケンで順番を決めた。今回は負けた順に発表するということになっていた。

「（何故だ…何故こうなるのだ…）」

今日は何故か、何を間違つてかラスティが勝利を収めた。

「私の礼装はね？ 一応、これなんだ」

あれからよく着用している赤いコートの懐から取り出したのは、以前まで彼女のネックレスだった十字架状の物。それを見て、ラスティが やはり と反応した。

「教会の礼装の一種……」クロスウエポン「十字兵装」だな」

「やっぱり……ラスティは知ってたんだね」

ラスティの出した名詞に、少し淋しげに微笑むティアマット。その名詞には、皆が驚いたように反応した。いや、ハイスはそれほど驚いていないようだった。ステラが身を乗り出して言う。

「え！？！？」クロスウエポン「十字兵装」って……教会の騎士が持つあの！？」

十字兵装：クロスウエポン。教会（正式な名称は別にあるのだが、この世界最大の宗教であるため、普通に教会と言えばその宗教の教会を指す）の保有する兵力、クルセイターズ教会騎士団。そこに所属する騎士たちの標準の主力武装が、この十字兵装である。

その精製方法は門外不出で、持ち主の意思に応じて、武器を象る礼装。

半実体でなく、れっきとした実体を持った武器になるものであるが、その質量保存の法則を完全に無視した現象は、幾人の魔術士がその解析に挑んだ。が、その全貌を解析出来た者は居ない。そもそも理論自体は教会自身ですら把握していないのではないかというのが通説である。

持ち主に適した武装の形をとり、また武器としての性能も優秀。

尚且つ魔術礼装としての性質も持ち合わせるそれは、教会騎士がその特異性をあらわす要因にもなっている。

だがこれは、教会の騎士しか持ち得ない。教会に属していなければ所有できず、また第三者が発動させることも出来ないのだ。

「そうか…やっぱアンタは教会に居たんだな」

ハイスが重々しく口を開く。

「いつも歌ってる『鈴唱』、あれ教会のもんだもんな。教会に籍を置いてたことはあるんだろうって思ってたけどよ…まさか騎士だったあな」

ハイスの発言に、皆は押し黙る。教会に居た…それが彼女にとってどういう環境だったかは容易に想像できてしまったからだ。

少々暗い空気になってしまったので、話題を切り上げて次の礼装の紹介に移ることにした（彼女は他にも、黒黒を行使するための色の三原色の魔石を連結させた使い捨て礼装もあるのだが、紹介はしなかった）。二番手はゲルト。以前のジャンケンで決めた順番と同じである。

このタイミングで、ようやく疲れが取れてきました

起き上がってきたアークに少しだけびっくりしてから、ゲルトは自身の礼装を紹介した。

「僕の礼装は…これですね」

そういつてゲルトが取り出したのは、チェスの駒の形をした黄色の魔石。黄（地）の魔石で作られたそれは、使い捨て型の礼装だと

思われた。

主に魔石のみで作られることの多い使い捨て型の礼装。使い捨てというコストのかかる仕様は、大抵がそれ相応の力を秘めている場合がある。かなり上位の術者にもなれば、あらかじめ魔術を封じ込めておき短いスペルでその魔術を発動させる者も居る。

ゲルトが取り出したそれに、ハイスが反応した。何やら懐かしそうな表情をしている。

「お、ゲルトまだコイツ使ってたのか？」

どうやら彼には見覚えが見覚えがあるらしい。ゲルトは困ったように返事をして、説明した。

「この礼装は、歩兵^{ポーン}これが騎兵^{ナイト}、僧侶^{ビショップ}、城壁^{ルーク}、女王^{クイーン}」

「あれ？ ゲルトくん、キングが無いよ？」

ゲルトの手に置かれた駒型礼装の種類は五種類。名称からチエスの駒をもじったものであることは容易に想像できたが、ステラの言うとおり、確かにキングにあたる駒が無かった。ゲルトは、白いシヤツをまくり、腕につけられた腕輪を見せる。

「一応、これらを‘制御’するためのものです。これが王権^{キング}になります。

この加工された魔石を核に、即座にゴーレムを作り上げる礼装です」

やや誇らしげにそう解説するゲルト。彼が言うには、それぞれが特定の役目に特化させたゴーレムらしい。今ここで使ったら大変だから、いつか機会があったら見せると、彼は言って終わった。

流石はお金の名を関する子です。使い捨ての魔石製礼装が主力とは……

次に紹介となったのはハイスの礼装だった。何やら大きな横長の箱が彼の隣に置かれていて…ハイスがそれを開け放った。それは

「ぎ、ギター？」

ギターだった。クラシックギターのような形状のものでは無く、エレキのように刺々しいフォルムを持っている。朱色を基調に炎のようなペイントがなされている。ボディ下部は大きく、ネックには十二本の弦が張られており、ピックアップには弦の真下に来るように四色の魔石が交互に納められている。

「おお！ 凄い！ 十二弦ギターだ、初めて見たぜ」

「お！ 分かるか！？」

本当にマスターは音楽がお好きなようです

音楽という共通の趣味を持つ二人の間に、何やら熱い…むしろ暑い空気が出来上がるうとしている。放っておくと後が面倒だと思っただステラが二人を止めた。

「ハイスくん！ ほら、説明説明！」

「お、おおう。わりいわりい…コイツはな、ギターを元に作った礼装だよ???？」

脱色し乱雑に逆立てられた髪、引き締まった細身のパンツにジャケットというその出で立ちに、そのギターのフォームは似合っていた。

確かろつくのぎたりすと　っばいと、マスターはおっしやつていたような気がします

「まあ、コイツの説明は苦手だかなあ…とりあえず、見て…いや、聞いてくれや」

そういつて彼は、ポケットから取り出した魔石を、ヘッドにあるジョイントに括り付ける。ベルトを肩にかけ、弾き始めた。

コードを鳴らした途端、ジョイントに括り付けられた魔石が弾け、粒子になる。やや早めのメロディーにあわせるように、それはハイスの周辺に魔方陣を作り出した。

「x a o r r a m , x a o r r a m (響け、響け…)」

通常の二倍の弦から生み出されるメロディーは、不思議な奥行きを持っている。弦が震える度に、真下につけられた魔石は光り、それを触媒に空気を震わせる。

徐々にテンポが早まる。それに呼応するように、魔方陣が光を強め、皆の上空に舞い上がった。

「Yeah!!」

その掛け声とともに、陣が弾ける。弾けた後の光が、何も燃やさない炎となって舞い降りた。皆はそれに見とれる。

「綺麗……」

ティアマットが漏らした呟きに、少し恥ずかしそうにハイスは答えた。

「アンタにゃあ及ばねえよ」

そんなことは無いと、私は思いましたけども……今回は、ハイスさんの評価はアップだともうのです、はい

「うわぁ……なんだかハイスくんの次にやるって不安だなぁ……」

「別に何か演技でもするわけじゃねえだろうが」

ハイスの突っ込みを受けながら、ステラは一度その場から飛び降りた。どうやら下の方に置いていたようで、しばらく待っていることになった。

「みんな！ おつまたせ……！」

アレは……礼装だったのでしょうか？

下の方から出現したその姿に、皆が絶句した。

腕を覆うゴツイ装甲。それに支えられた身の丈程の物騒な杖状の金属。黒く怪しく光るボディが、夕日を受けていっそう雰囲気のみを増している。

灰銀の髪にやや褐色の肌を持つ彼女は、まるで戦乙女とでも形容しようかという、そんな雰囲気身を纏っていた。

「対魔獣用 大型多機能重礼装：TYPE - B ばーじょんつー、スレイゲミル、だよ！」

TYPE：Aなるものが過去に存在していたのでしょうか

魔獣討伐
どう考えても特定の目的にしか使えない物騒すぎる装備。その姿を見て、彼らは彼女にまつわるある噂を思い出していた。

「基本的には常識人、ただし礼装作りが趣味(?)で、素晴らしい才能を持っている。だが、時折物騒すぎるものを作り上げることがある。彼女のその才能が、別のものに向かうことを切に願おう」

これが、あるクラブの部室の研究室から出てきた三年生の（気を失う前の）最期の言葉でした

ニコニコと輝くような満面の笑みが、無骨すぎる装甲に囲まれている光景は、かなりシニールなものであった。

「さつてと、ようやく俺の番だな」

衝撃の光景から立ち直ったラスティが、待つてましたとばかりに立ち上がる。皆の顔が期待に満ちているのを見ると、眉をしかめて言った。

「言つとくがな、あんまり、濃い、代物は出せんぞ？」

たまになる古風っぽい言い回しで、ラスティはジャケットとハオチガミとの戦いで、所有していたジャージは駄目になってしまい、新たに服を買うまではハイスのものを借りていたりする（ラスティ1

82cm ハイスイ178cm)のポケットから薄い青色の結晶を取り出した。

結構似合っていると思います

「Xie nol filie Las ow halt (霞に浮かぶ私の心は)
Om keina cai Fer fel fatum (遠き日の名を探すでしょう)」

それは、墮嚙との戦いで詠った詠唱の一節だった。それが分かったティアマットは、現れるものの姿を予想する。

結晶が、光る糸のような姿になり解ける。その糸は棒状にまとまっていき、次第に確固とした形をとり始めた。薄く青づいた銀色の刀身、それはゆるやかなカーブを描く細身のもので、不規則な波紋が刃に見て取れた。鏝が楕円状のそれは、ラスティのみが知る種類の剣だった。

「うちがたな」と、マスターはおっしゃっていましたね

「カスミギリ
霞霧」

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

そのように以前はおっしゃられていました

「ほお、ラスティ…剣士だったんだな」

その刀身に見入るようにしてハイスが言った。そして、その出現方法にある疑問がわいたステラが、彼に質問した。

ど、やっぱり、そうだったんだ」

「おいおい、ティアマットはラスティが左利きって知ってたのか？」

「えっと、一応ラスティって…その、左腕の方が一回り大きいからそうかなって…」

何故か恥ずかしそうに言いよどむティアマット。ラスティとは反対側の彼女の隣に座っていたステラが、彼女の耳元に顔を近づけて呟いた。その声は、彼女たちの他にアークも聞き取っていた。

「（さっすがティアマットちゃん！ちゃんと観察してたんだね！）」

「！?!?!? う、ち違っつて！」

この日一番の狼狽を見せたティアマット。首をかしげるラスティを他所に、ハイスと二人で散々からかわれる羽目になった。

真っ赤にはなりませんでしたが、

涙目でハイスさんの腹部に強烈なブローが入れたのはお見事の一言に尽きました

地に臥せたハイスを、ゲルトが突っついて無事の確認をしている。ティアマットはまだステラにからかわれていて、場は少々混沌としていた。

霞霧を結晶の姿に戻して、ラスティはアークに言った。

『なあ？ 何故俺が左利きという話題からこうなるんだ？』

『それはマスターが左利きだからです』

アークが以前書いたメモに、
'私の主は左利き'
が追加された。

「私の主は長い髪が好き？」

X月Q日 水曜日 雨のち やや晴れ

私の存在が始まってこの方、これほどの恐怖があったでしょうか

墮嚙オチガミの一件でアークの存在がバレ、ラスティが精霊と契約しているという話は瞬く間に広がった。だが事件直後のことであまり大きな噂も無かった。ので、開き直って学校内に居る間も実体化している内に、いつの間にかアークは一年四組のマスコットになっていた。

少女姿って、ある意味便利だと思います。ちやほやされるのは、あまり悪い気がしません

昼休みや授業中では、ラスティからは自由に行動していてもいいという時があり。ラスティの側に居たい気持ちはあったが、アークは沸き立つ好奇心を抑えきれず校内を散策することがあった。

購買のおばちゃんからもらった（少年姿の時は多めにもらえる）売れ残りのパンを（食べる必要は無いが、折角くれるので）ほおばり、その日は食堂内を散策していた。その時だった。

「あ！ アークちゃんだ！ ねえねえアークちゃん！ ちょっと来て来て！」

突然現れたステラが、アークの許可を取ることもせず、その腕をつかむと、引きずるように連行された。その先は食堂の一角、一年四組の女子が固まっているエリアだった。

女子の皆さんは私をちゃんづけで呼ぶのです。なんだか少し恥ずかしいのです

行き着いた先では、ティアマットが囲まれ、苦笑いを浮かべていた。

????????????????????

よく一年四組の女子は、昼休みに食堂の一角を占k y…席をとり、皆で食事をとるらしい。墮^{オチガミ}嚙の事件以降、ティアマットもその輪に加わるようになっていた。

「やっぱりティアマットちゃんは委員長狙い？」

「何言ってるのよ、当たり前じゃないの」

「いいよねえ、そんなやつなんだよ、アイツは！」って。そういってもらえて、ピンチに駆けつけてもらえるなんて物語みたい！」

「でもまずは彼女が委員長落とさなくちゃ駄目なのよ？」

ここ最近の話題は、専ら「ティアマツトが委員長をどう落とすか」であった。墮嚙オチガミの事件のことは、クラス中にラブロマンスであるかのように広まり、こうして何故かまだ付き合っていないのにも関わらず「黒髪のカップル」なるものが彼女たちの脳内で形成されていた。

顔色こそあまり変わらない（でも時折真っ赤になる）ティアマツトであったが、彼女たちが始終展開するその話題には困ったような苦笑いを浮かべていた。最も、皆から見ればまんざらでも無いようであったが。

そんな中、ティアマツトがふと呟いたことが事の発端だったらしい。

『この髪…切ろうかな…』

この発言にクラスの子は戦慄した。学院でも少ない黒髪…しかも学年唯一の艶やかな黒髪は、多くの（特に一年四組の）女子の羨望を集めていたのだ。

それを切るうという、彼女たちには冒険にも等しいその行動を予言するその言動は、すぐさま問い詰められた。

『え？ いや…だって、意外と邪魔になること多いし、手入れもたいへん…だし…その…』

言葉を進める度になじり寄って来るクラスメイトたちを前に言葉が尻すぼみになっていくティアマツト。そんな状況の時、彼女たちの視界にパンを頬張るアークの姿が見えた。

彼女の脳に何が閃いたかは分からない。だが、その姿を視認するや、人ごみの中を抜け、遠ざかっていくアークの腕を捕らえた。そ

の間ジャスト三秒。異常な速度であった。

????????????????????????????????

「ふふふふふふふふふふふふふふ…アークちゃんにはネ？　ちよつつつと聞きたいことがあるの」

「笑顔が怖いと思ったら覚悟を決めた方がいい」マスターのそんなことばが思い出されました

「は、はい！　なんですか？」

「それはね？　アークちゃんの長い髪って、キミのマスターの好みカナ？」

答えなくてはいけない、そう私の精霊としての本能が訴えま
した

何故その質問になるのか分からない。長い髪がマスターの好みであるかなど知る訳も無い。

だが、アークは答えを出さなくてはならない。分からないという

回答を口にした時、何が起こるのかアークには恐ろしく不安であった。世界種以外を相手取る場合には無力でしかない己の存在が、この時ばかりは恨めしくてしょうがない。

「そ、それはですね……………」

アークはチラリとティアマットを見る。実のところ最もその答えが気になっているようである彼女の、その右目は普段よりも強く輝いていた。それが、アークが口にする答えを導き出すきっかけになった。

一度話し始めると、こういうものは止まらないのですね

「わ、私は一応、マスターとのリンクがありますので、恐らくこの化身の姿はマスターの思考の影響を受けていると思われます。ただ、幼い姿なのは私が普段は力が出せないからです」

真っ赤な嘘だった。この姿は完全にアークの好みなだけであったのだ。状況が状況であるため、マスターに念話で聞くという選択肢が無いので、このような賭けに似た行動に出たのだ。

「長い髪はマスターの好みであるかは不明ですが、恐らく好ましいものであるとは思っているでしょう」

「…切るの、止めようかな…」

アークの（嘘の）答えを聞いて、ティアマットは一瞬の思考のうちにもそのような決断を下した。それは、アークには無罪判決を告げる声のようだった。

ティアマットを除く、二十四名の女子の安堵のため息が一斉に漏

れる。

アークは、無事開放されたのだった。

その日の夜

「マスター、私のこの髪って長い方と短い方どちらがいいでしょうか？」

「なんだいきなり？ …… まあ、そうだな …… やっぱり短いより長いほうがいいわな」

どうやら、私の行動は間違いでは無かったようです

「私の主はライスが好き」

X月K日 土曜日 あめ

今日は乾燥気味のこの地域では珍しい、雨模様の天気でした

「（マスター、今聞いたところによりますと、どうやら食堂に珍しい食材が入ってきたようですよ）」

それはアークの念話からもたらされた情報だった。妙に人脈の広くなったアークはこうして、時折こうした情報を寄せてくる。昼時にラスティに寄せられたその情報は、彼の興味を惹いた。

「（へえ…どんなやつなんだ？）」

「（はい、それなんですが???)」

その食材の名前を告げた時のマスターの様子は異様でした

「（‘ライス’なるものらしき）」

「なにい!?!?!? （アーク!! それはメニューに並んでいるか!?!?!）」

教室に居て、いきなり声を上げてラスティは立ち上がった。直前の様子から、アークと念話していたことが側に居たゲルトとハイス

には分かっていた。が、そのただならぬ様子には流石に驚いていた。

「（えつと…この料理長が見聞きした調理法だとかで、水に浸して圧力をかけて熱　　）」

「すまない、二人とも、少々急用が出来た。（それだ！！　アーク、今すぐそれを確保しろ！　量を聞かれたらとにかく多めにだ！　具体的に聞かれたら六百グラムと答える！！）」

そうして全力疾走で、ラスティは教室から去っていった。

「何だったんだ？」　「何だったんでしょう？」

二人の言葉は、教室に残っていた生徒たちの総意をあらわしていた。

????????????????????????????????

「！！！！！！」

珍しい食堂があると、食堂に顔を見せていたアークが突然飛び上がった。その光景を見ていた一年四組の女子一同は、その様子に首をかしげる。突然アークが「ライス」を頼み始めたのだ。

「あれ？　アークちゃん、おニューのメニュー頼んでるよ？」

「あの奇妙な白いツブツブの？　何ででしょうか？」

「多分ラスティが念話で頼んだんだと思う」

一年四組の女生徒の中で、（本人は気付いてないが）唯一ラストイを呼び捨てで呼んでいるティアマツトが、クラスメイトたちの疑問に答えた。ちなみに、彼女以外の女子の間では、ラストイのことを「委員長orくん、さん付け」で呼ぶということが徹底されている。

「委員長が？ …あれのことを知っているのでしょうか？」

首をかしげる女生徒に、ステラが答えた。

「この料理長がどつかで仕入れてきたらしいよね。ラストイくんも多分外国の人っぽいから、もしかしたら故郷のものなのかもしれないよ？」

その答えは、正しかった。

????????????

「こんなにマスターは食べるつもりなのでしょうっか？」

お盆を持ったアークの目の前には、大皿に入った六百グラムのライスなるものが存在していた。それを運ぶアークに、声をかける男子生徒の姿があった。

「なあなあアークさんよ。そんなにライスを食べるのか？」

左胸につけられた校章の色（一年生 赤、二年生 黄、三年生 緑 去年の卒業生 青）から、二年生だと判断できた。

赤茶の硬質の髪を持ち、切れ目の中は翡翠色の瞳。アークの主よりも一回り大きな身長で、常にシャツの腕を捲くっているその男子

生徒は、ここに来た時に度々世話になっていた人物だ。アークは気付いたように言う。

「あ、アクセルさん！」

アクセル・アーキナム、主のクラスの担任教師であるアルバ先生の甥っ子で、ここに来たアークに色々と食堂の使い方について説明してくれた生徒だった。こうしてアークを見かけた時には、声をかけてくれる。

「いえいえ、違つんですよアクセルさん。これはマスターに頼まれて」

「アーク！ 確保したか！？」

丁度いいタイミングで、アークの主人が現れた。肩で息をしており、どれだけ急いできたかを物語っている。アークの姿を見つめるや駆け寄り、そしてアクセルの姿に気付いた。

「（アーク、その先輩は誰？）」

ラストイはアークに念話で質問する。アークは、その質問を口にして答えた。念話が聞こえないアクセルのための配慮である。

こういったことは、良くマスターには気を使うように言われていました

「あ、マスター！ こちらの方は二年生のアクセル・アーキナムさん。アルバ先生の甥の方です。ここで何度かお世話になったんです」

「そつか。…始めまして、アクセル先輩。アークのマスターのラスティハルト・ジーンです」

「おう！ 噂はちょいと聞いてるぜ、精霊使いの一年生ってな」

魔術師全体で見ても少ない精霊との契約者。その中でも、完全な主従関係、というのは更に珍しく、その噂はすぐさま学院全体に広まった。

「いえいえ、そんな大層なことでもないですよ」

謙遜して受け答えるラスティ。アクセルの方は、折角だから一緒に座るか、とラスティを誘い、小さめの円卓テーブルに腰を下ろした。アークから盆を受け取ったラスティも快く返事をして向かいに座る。

「あれ？ 先輩も、ライス、を食べるんですか？」

ラスティの視線の先には、ラスティと殆ど同量のライスがあった。その問いに、アクセルは笑う。

「おうよ！ 昔オヤジに勧められて食ったコイツの味が忘れられなくてな、こうして偶に登場しては食ってるんだわな、これが」

ラスティの口癖と同じようなこと（〜〜〜これが）を言って、アクセルはそう答えた。

「そうなんですか、俺の方は故郷の味が忘れられなくて、アークからこのことを聞いて居ても立ってもいられなかつたんです」

故郷の、のくだりにアクセルは興味を示したようだ。そのことを

聞いたそうではあったが、折角のライスが冷めてしまつてはもつた
いないので食事を始めることにした。ちなみに、ラスティの盆には
おかずは何も乗っていない。

ラスティが、懐に手を入れ何事かを呟く。そして引き抜かれた左
手に握られていたものは、細い二本の棒?????箸だった。

「頂きます」

????????????????

その頃、食堂の一角の一年四組女子集団。彼女たちは興味しんし
んに、ライスを食べるラスティに視線を向けている。

「すごい、委員長あんなに食べるんだ」

「凄い美味しそうに食べてる」

「アクセル先輩も負けてないですよ」

白いライスを口に含み、途端にラスティの表情が至福に緩む。互
いにライスのこの食事法をつくりあげた偉人に賛辞を送り、何時し
か奇妙な友情を、彼らは作り上げていた。

その光景を見ていた女子は、すぐさま作戦会議(?)に移る。肝
心のティアマットを完全に置き去りにしたそれは、非常に真剣な空
気の下行われた。

「発見よ発見!! 委員長の大好物発見よ!!」

「これはやるしかないわ、ティアマットさんには是非ともあれの調
理法を学んで頂きませんか...」

「え? え?」

状況の飲み込めていない彼女に、クラスメイトたちは熱く語りかける。「黒髪のカップル」を成立させるための彼女たちの気合は尋常なものではない。

「何迷ってるのよ！ 彼の大好物よ！」

「貴女が手料理を送るに最もふさわしい食事です！」

「安心してください」

「私たちも共に学びましょう」

「どうぞやってやります？」

「調理クラブの部員に姉が居ます！」

「ナイス○○○○！」

「基本を元に、応用したバリエーションも学ばなくてはなりませんね」

「いや、料理長に教えを請うのもいいんじゃない？」

その日の昼休み、ティアマツト手料理作戦会議は昼休みの予鈴がなるまで延々と続けられた。

????????????????

「いやあ、ラスティ！ いい食いつぶりじゃねえかおい！」

「いえいえ先輩こそ！」

あの量のライスを、お二人は本当に食べつくしてしまいました
た

キログラムに達する量のライスを食い尽くした頃には、二人は妙

な友情を築きあげていた。同志を見つけた二人は、互いの情熱を称え合い、拳を合わせる。満面の笑みを浮かべたままで、アクセルはラスティに告げた。

「オレのほうに、叔父（アルバ先生）の方から次は何時ごろ来るのか知らせがあるんだ。また来たらアークに教えてやるよ」

「ホントですか!?!? 有り難う御座いますアクセル先輩!」

同じく満面の笑みで受け答えたラスティは、その同志たる先輩と握手を交わすのだった。

マスターは、ホントにライスが好きなようです

彼女たちがあの場を見ていた以上、恐らくティアマットさんは皆に作り方を叩き込まれることになるでしょう……ご愁傷さまでです。ですが、私も微力ながら応援させて頂きますので、どうか頑張ってください

登場人物

名前：Lastiehalt・Xeen
（ラステイハルト・ジーン）

身長：183?

体重：70kg

髪色：黒

瞳色：黒

名前の意味：?????

トレードカラー：空色・黒

特技：?????

好きな物：御飯・乳製品・ライス

嫌いなもの：魚以外の魚介類・多くの果物

趣味：音楽鑑賞・運動・読書

苦手なこと：運動

得意科目：式学・詠語学

「どんな人？」

本編の主人公。日本人。‘世界’に迷い込んでしまった少年。世界に対して創造神のような立ち位置に存在する人物だが、その力のごくごく普通の一般人。だが魔術を扱うことに慣れていないため、他者の手助けがなければその行使は困難であるため、むしろ一般人に劣るのかもしれない。

実技こそ苦手であるものの、その知識は非常に豊富で、世界種が知らないようなことさえも知る。だが逆に、一般知識とは乖離している部分も多い。

‘事情’により、ティアマットのことを気にかけており、彼女の最初の友人となる。音楽好きということもあり、彼女の歌が気に入る。

る。

名前：Ark (アーク)

身長：????

体重：????

髪色：蒼

瞳色：蒼

名前の意味：箱舟

トレードカラー：蒼

特技：同族殺し

好きな物：????

嫌いなもの：????

趣味：主人の観察。世界の観察

苦手なこと：????

得意科目：????

「どんな人？」

ラスティハルトの使い魔で、精霊。世界種と呼ばれる、世界そのものに属しその均衡を保つことを使命とする存在の一種。ラスティの出現を運よく察知し、彼にいち早く仕えた。

その力は特定の条件下においてでしか発揮できないもので、日常では多大な能力制限を受ける。よって普段はラスティのサポートに回っている。

ラスティに対し絶対の忠誠を誓っており、今のアークの行動原理はほぼ全てが彼に根差すものである場合が殆ど。ただ、物理干渉の制限により力及ばない部分があることに思うこともあるようだ。

名前：T i a m a t t ・ M a x i n a （ティアマツト・マキナ）

身長：152？

体重：???？

髪色：？

瞳色：青・赤

名前の意味：メソポタミア神話の女神「ティアマツト」

トレードカラー：赤

特技：歌（本人は認めないが・力仕事）

好きな物：???？

嫌いなもの：???？

趣味：歌うこと

苦手なこと：勉強・細かいこと

得意科目：音楽・実技系科目

「どんな人？」

本編のヒロイン。水晶眼と呼ばれる不思議な瞳を持つ少女。赤の瞳を持つが故に人々に恐れられ迫害に近い状況にあってきた。

教会の出身で元々は騎士見習いのだが、事情により学園へ入学する。生徒の中では数少ない実戦経験者でもあった。それ故実技に關しては成績はいい。ただし筆記系の科目はほぼ全滅と言っているほどに成績は悪い。

歌が好きで、人目のつかないところを探し出しては結界を張り一人歌う。学院に入学してからはラステイ等少数の生徒が聴衆となることが多くなった。自分の歌を評価してくれることに關しては、初めは恥ずかしく思っていたものの、嬉しく感じている。

尚、彼女は季節感關係なく厚着である傾向が強い。

名前：Gelt・Arcadius・Finien (ゲルト・アルカシアス・フィンエンス)

身長：160?

体重：47?

髪色：金髪

瞳色：碧

名前の意味：お金

トレードカラー：黄・茶

特技：チエス

好きな物：???

嫌いなもの：???

趣味：チエス・貯金・資産運用

苦手なこと：荒事

得意科目：歴史・地理等

「どんな人？」

ラスティのルームメイトの貴族。武家の家系の出身なのだが、その気性は非常に穏やかで、得意な分野も文官のようなものである。ただし、資産運用の腕前には天性のものがあるようで、実家（特に母親）から受ける期待は大きいらしい。

チエスの腕前は相当なものであるようで、その筋の人には結構有名だったりする。

双子の妹であるポリスとは仲がよく、（似ていないため）時折恋人に間違われることもあったそうだ。

他の面子に比べて影が薄い。

名前：Hais・Gulitie・Shenesveter (

ハイス・グリティ・シェーネスヴェッター)

身長：176?

体重：63?

髪色：脱色された金

瞳色：薄い茶

名前の意味：熱

トレードカラー：朱

特技：楽器演奏

好きな物：辛いモノ

嫌いなもの：???

趣味：十二弦ギター

苦手なこと：???

得意科目：どれもそこそこ

「どんな人？」

ラスティたちのクラスメイトで、ゲルトとは幼馴染。高い位の貴族の出身だが、両親との仲はあまり良好ではない様子。放蕩息子と自分で行っている限りはそういう自覚を持っているのだろうが、そうであるうとする部分も垣間見える。

音楽に精通しており、その手の話でラスティと非常によく合う。

ただしラスティは楽器を演奏できないのに対し、ハイスはギター等の楽器を演奏できる。

名前：Stella・Elmia・Winings (ステラ・エ

ルミア・ウイニングス)

身長：170?

体重：???

髪色：灰銀

瞳色：青

名前の意味：星

トレードカラー：白

特技：モノづくり（礼装的なソレ）

好きな物：甘いモノ

嫌いなもの：辛いモノ

趣味：研究、料理

苦手なこと：???

得意科目：魔術関連の教科全般

「どんな人？」

ラスティ達のクラスメイトで、ティアマットのルームメイト。ラスティの次にティアマットと仲良くなった人物で、本人は「彼女の親友」を自認する。

その明るい人格から、男女問わず人望がある。特にクラスの子の中心的な存在であり、ティアマットがクラスに馴染めるようになるのも彼女の存在の影響が大きい。

アルナ・アマルティアという名の最年少導師を尊敬しており、彼女が白い色の衣服を好むのは彼女の影響でもある。

名前：Porallis・Iria・Finienis（ポラリス・

イイリア・フィニエンス）

身長：160？

体重：???

髪色：緑

瞳色：碧

名前の意味：北極星・北辰

トレードカラー：緑

特技：武技

好きな物：?????

嫌いなもの：?????

趣味：?????

苦手なこと：?????

得意科目：?????

「どんな人？」

ゲルトの双子の妹で、ラスティ達の隣のクラスの生徒。生物学的な法則をまるつきり無視したかのような髪色が最大の特徴で、彼女のことを知らない人間でも、その姿を見たことがあるというものは多い。

ティアマットと同じように、何らかの特異な現象が起きているようである。

名前：Alba・Archinam（アルバ・アーキナム）

身長：190?

体重：90?

髪色：朱

瞳色：碧

名前の意味：夕日

トレードカラー：赤銅

特技：?????

好きな物：?????

嫌いなもの：？？？

趣味：？？？

苦手なこと：？？？

得意科目：？？？

「どんな人？」

ラスティ達の担任教師。粗野な印象を与える風貌と口調の人物だが、面倒見がよく生徒たちからの人気は高い。元々は有名なある一族の出の人間で、その筋では非常に有名な人物であるが、負傷が原因で現在は一線を退いている。

全身を覆い隠すローブの裏地には多数の礼装が仕込まれており、見た目以上に重い。また、右腕は金属と魔石で作られた義手となっており、それが一つの礼装にもなっている。墮嚙との戦闘により粉々に砕け散ったため、製作主の元に修理に出したらしい。

世界観基本設定

「世界」

・ 剣、魔法。そんなファンタジーな要素を内包する世界。人種的には西洋と見受けられる部分が多く、黄色人種が非常に少ない。
・ 所々に日本的文化に酷似したものが存在する。ただしその成り立ちは異なるものである。

「公用語」

・ こちらの世界で言う日本語。精霊たち世界に近い存在からは、^{かりな}仮名の言葉、^いともしょうさされている。人の世のなかに広く浸透しているため言葉としての神聖は無く、魔術的に使用されることは無い。

「詠語」

・ こちらの世界で言う英語・独語・仏語・羅語 e t c …… それらを全てひっくるめてそう呼ばれている。魔術的神秘性に富み、式の表記や詠唱文などには全てこの言語が用いられている。

・ 尚、魔術的に神秘性を持つこの言語は、人の名前としての言語の側面もあり、公用言語で名前をつけられる人は居ない。これは、詠語でなければ世界から加護が得られないからである。逆に他者から忌み嫌われるような存在たちには詠語の名前が付けられない場合が多く。漢字名となる。

「幻想」

・魔術の根幹を成す概念。その力の源は想いや信仰など心から導き出される。いわば‘実現する夢’である。これにより実現される事象が‘燃え盛る炎’であったり‘力の強い自分’であったりする。ただこれは想像すれば良いという物でもなく、必要な手順が存在する。

「修正力」

・世界が幻想に満たされないようにするために、ソレを排除する力‘修正力’が世界には備わっている。幻想は、この修正力により減衰・否定されていく。起こす事象が現実から引き離されていればいるほど、その修正力は強く働く。それが魔術が万能では無い原因となっている。

「幻子」

・この世界に存在する特有の物質。一般には魔力と呼ばれている（幻子と呼ぶのは学術的に魔術を語るときが殆ど）。「原子」を元にした改良複製といえるもので、通常存在しえないはずの物質。意味・意思などの媒体となり魔術を魔術たらしめている存在。幻子の存在そのものは現段階では確認されている。

・幻子核は、‘謡子’^{よつし}と‘宙醒子’^{ちゅうせいし}で構成されており。その構

造しだいで通常の原子のように振る舞うこともある。世界種などは全てが、幻想種は一部が幻子で構成されている。また、幻子核の周囲には伝子が周回している。

・純粹に謡子のみで構成された幻子の結晶は‘魔石’と呼ばれ、人の意思が通りやすく魔術の媒体として利用される。不純物の構成により性質と色を変える。現在確認されているのは四種。

「幻想種」

・本来神話・物語の中でのみに存在していた筈の生命体。人々のイメージに模られた影響を、体の一部を構成している幻子原素が、本来の生命体にはありえない生態活動を助けている。

・空気中の幻子（魔力）濃度が濃い場所であるほど、同じ種の幻想種であつても大型に強力に育つ。また、体を構成する幻子の割合が多ければ多いほど、幻子が濃い所でしか生息できない。

「世界種」

・精霊、高位龍種など、世界とつながりを持つ存在。体の構成が全て原始であるのが特徴。

・生命体では無く。物理的な世界の防衛機構たる存在。種の数を調節したり、‘世界’に害を成す存在を消すなどをするために存在する。そのため、与えられたスペックは常軌を逸している。

・存在年数が短くまだ世界とのつながりを持っていない精霊は、世で自身が認めた存在と契約することがある。その事例は少なく、また完全に世界種として覚醒していない世界種であつてもその力は大きい。彼らと契約することは人々の夢でもある。

「結晶体質」
けつしょうたいしつ

・高魔力濃度の空気の中などに居て、血液中の幻子の濃度が余りにも濃くなりすぎると、人は死に至る。だがそうならず自身の一部が魔石で構成されるようになったのが結晶体質。だがこのことは、発症率の極端な低さ故にまだ学会ですら存在が知られていない。この現象を知っているのは、精霊王などの極少数。

「水晶眼」
すいしょうがん

・結晶体質の発祥部位のパターンの一つで、発祥部位が眼球・網膜である場合の呼び方。（大抵は両目だが、ティアマツトは片方のみであるようだ。）効果はランダム性が高く、固定された恩恵は無い。

・ティアマツトの場合、現在確認できているうちでは感覚器官の視覚が強化されているようで、可視化していないアークの存在をうっすらと視認できていたようだ。

・意思が通りやすいためか、感情の起伏や魔術の行使で右目の水晶体が発光するようだ。

「鈴唱」
れいしょう

すずね

・鈴音の歌ともいわれる特殊な歌の技法。魔石を砕いた粒子をドーム状に展開し、その内部で音を反響させるもの。魔術士としてのある程度の力量も必要となるが、それ以上に世界に対しどれだけ干渉し、心を描けるかというものが大きい。才能ではなく、資質に影響される部分が多い。

・元は教会で使われていて、儀式歌の一つとして用いられている。だが、この歌を歌う事のできる人物は相当少なく。大きな教会でさえ、鈴唱の歌い手が居ないほどである。

・通常、赤・青・緑の三色の魔石を砕いて発動させられる。

作中で使用された魔術・礼装

名前「火炎球」

属性色：赤

概念：燃・球

赤の属性色の火を扱った魔術ではオーソドックスなもの。火の玉を飛ばす、ということがこの魔術の定義であるため、魔術の個人差が非常にしやすい魔術でもある。アルバはこれを授業で取扱い、生徒たちに個々人ごとの差を自分なりにレポートを書かせて提出させた。

名前「鈴唱」

属性色：赤・青・緑（ティアマツトのものは、緑の代わりに黄を用いている）

概念：反響・満・音

教会に伝わる特殊な魔術。一定範囲内にドーム状の結界を張り、その内部で音声を反響、展開させるというもの。魔術士としてのある程度の力量も必要となるが、それ以上に世界に対しどれだけ干渉し、心を描けるかというものが大きい。才能ではなく、資質に影響される部分が多い。

儀式歌の一つとして用いられている。だが、この歌を歌う事のできる人物は相当少なく、大きな教会でさえ、中々鈴唱の歌い手が居ないほどである。

名前「蒼弓」

属性色：不明

概念：弓・空・穹

ラスティが使用した狙撃用魔術。和弓のシルエットをした射出式を生み出し、魔石の矢を番えて撃ち放つ。通常の魔術の詠唱とは違い機械的・手順的な詠唱によって行使されるのも特徴。

規模と強度さえあれば非常に分厚かった墮嚙の神秘層を抜き、打撃ダメージを与えるほどの威力となる。貫通力重視であるらしく、攻撃力が高いわけでは無いらしい。

名前「符術・拳槍」

属性色：赤・緑

概念：拳・槍・布・ルーン

アルバが使用した長い符を用いた魔術。魔石による文字が書かれた符を触媒に、硬質化させた符を操る。墮嚙の一撃を逸らすためだけに使用されたが、本来は攻撃的に使用されるもの。

名前「火葬する火槍」

属性色：赤

概念：槍・火・火葬・浄化

ティアマツトが墮嚙に対して使用した教会仕様の魔術。アンデッド系の魔物に非常に有効なのだが、墮嚙は定義的に死んではいないので、浄化概念を含んだこの魔術の効果が存分に生かされることは無かった。だがそれでも、墮嚙に有効打を与えることはできていた。

名前「戦歌・赴く者」

属性色：なし

概念：誇り・戦

ラスティが使用した、古い魔術。ラスティが元の世界において好きであった詩の一節をそのまま用いている。身体能力に關係する効果があるようだ。

名前「独り護る者 アロンダイト」

属性色：黒（赤・青・黄の混合）

概念：湖・騎士・闇

ティアマットが使用した、秘文と分類される特殊な魔術。

元々はアーサー王伝説の円卓の騎士の一人、湖の騎士と呼ばれたサー・ランスロットが所有していた剣^{アロンダイト}Alonedite。だが、

この世界にはアーサー王の物語は存在しない。

彼の有名な^{エクスカリバー}Excaliburの兄弟剣で、それゆえに世界では光と対の闇を用いた力として扱われている。尚、エクスカリバーの詠語表記はE c s - X a r i v e rとなっている。

アーサー王に領土を攻め込まれた時、守りに入っただけで攻勢を取らなかつたという話を元に、その能力は防御能力に特化したものになっている。精神力が保てるのであれば、龍種の一撃をまともに受け止めることも可能。

・幾つかの発動条件が存在する。

- 1・剣を触媒とし色の三原色（赤・青・黄）を用いて発動する事。
- 2・術者の名前が、水に由来を持つものであること（これは、ランスロットが「湖の騎士」と呼ばれていたためである。）
- 3・術者が、精霊からの祝福をうけるか何かで、最低でも階位三以上の権威を持つていること。

以上、三つの条件を満たした上で定型文を唱えることで発動とする。

・発動後の効果（仮）

- 1・深層意識を媒体とした影を常に召喚。自動防壁に転用可能。
- 2・正式開放で虚数界を開く事が出来る。
- 3・動作補助。擬似節の生成。
- 4・単式で対物理または対幻想の結界を発動可能。

名前「ディラックの海虚数世界」

属性色：黒（赤・青・黄の混合）

概念：虚数・海

ティアマットが墮嚙に止めを刺す際に使用した魔術。発生部位から出てきた闇が、触れた物質を虚数世界へと取り込む。物理攻撃力としては、最高峰に位置する魔術でもある。

ただし、使用までの隙が大きく、発生する闇も遅く、また簡単な障壁に防がれてしまう等、使い勝手がいいものではない。

礼装

「クロスウエボン十字兵装」

ティアマットが使用する、教会製の礼装。騎士団に所属するものはほぼ例外なくこれを装備している。詠唱を以て武器の姿をとる。個々人によりその形状には差異が存在する。ティアマットの場合は、

ハンドアンドハーフソード

片手半剣という、持ち手の長い長剣の形をとる。

礼装としての役割もあり、教会系の攻撃魔術は大抵がこれを触媒にして使用される。

小さな十字架型から剣になる等、質量保存の法則を完全に無視しており、また、損傷をその場で随時復元していくなど不可思議な特性を持つ。幻子が深くかかわっているらしい。

「黒鋼の腕」

アルバの右腕である義手。魔石によって動いているらしく、ただ動かすだけでも精神力が必要とされる。だがその膂力は生身の腕よりも遥かに強い。

魔石が仕込まれているため、そのまま魔術を行使することも可能。強度が非常に高いが、流石に墮喙の一撃を受けきることはできなかった。現在修理中。

カスミギリ

「霞霧」

ラスティの礼装となった打刀。アークの補助によりラスティの想像を結晶化したもの。「一番斬れると思いきめる」と本人が言うように、切断概念が込められている。

姿かたちは日本刀そのもの。だが製法や性質が全く異なるため、刀とはとても呼ぶことのできない代物である。魔術的に創造されたものであるため、その強度は精神力に比例する。つまるところ、その時々々の精神状態によって性能が大きく左右される礼装である。

断章「英雄」

「英雄」

その卓越した能力をもって、常人には真似できないことを成し遂げる存在。多くの人々が、その幻想に憧れたものだろう。ある男は、その夢を実現することが出来ないことを知っていたが故に、自らの手で英雄譚を描こうとした。

普段と変わらぬ日常を送り、その合間に非日常を思い描く。自らの憧れを追い、夢を詰め込んだその物語を、男は愛した。思い描く物語の中の英雄を自らに重ね、己の世界を参考にさらに世界に愛を注ぐ。

世界の存在を肯定したのか、世界がその存在を肯定したのか。卵が先か生み手が先か、それは定かになることはない。ただ確かに存在しているだけである。

世界がその存在を、自己を絶対とするならば、そこに住まう者は世界に名をつけることは無い。

命名されない世界は、ただその親の愛を求めた。

????????????????

英雄、そう呼ばれる男が居る。金紗とは言えないものの、光を反射する色の薄い髪を持ち、琥珀色の目は何時も何処か遠くを見ている。タートルネック乳白色の衣服の上に、明るい灰色のコートを纏

う。

草原の上で目を閉じたその男性は、風の音に耳を澄ませている。その右手には、曲がった鞘に入った剣が握られていた。

「もう、あれから七年経ったんだよなあ、これが」

その鞘を強く握り、風の収まった草原で目を開き、流れていく雲を眺める。

「…もうすぐ、貴方に会いに行くことができます…その時、貴方は僕の　　ますか？」

他に誰も居ないその草原では、風に吞まれたその問いに答えるものは居ない。

オープニング「虹の少年・弧虹の剣士」(前書き)

シード編は別に連載、ということになりました。

オープニング「虹の少年・弧虹の剣士」

ティアマット・マキナ。彼女の朝は早い。授業に間に合うように起きる彼女のルームメイトよりもゆうに二時間ほど早い。

寝返りをした様子も無く寝続ける彼女は、指定された時間に鳴り響く目覚まし時計で即座に覚醒する。ルームメイト　ステラ・エルミア・ウイニングスから譲り受けた、轟音を発する金属製の時計を止める。目を瞬かせ起き上がると、寝巻き代わりに着ている薄手のシャツを脱ぎ捨てる。女性らしい曲線を窺わせながらも、引き締まった体が、彼女の姿勢を正しく綺麗に仕立て上げる。

黒に近い濃紺のシャツとズボンを履いて、ブーツに足を入れる。使い込まれた様子のあるそれに、打ち鳴らすようにして奥まで足を入れた彼女は、髪を手櫛で梳いて立ち上がる。丁寧に手入れされたであろうそれは、たったそれだけの動作で艶やかな艶と統合性を取り戻した。

部屋を出る前に彼女は、部屋の一角に置かれた掛け具に向かい、そこに掛けられた紅いコートを手にとった。以前墮嚙オチガミが襲来してきた際に怪我を負い、保健室からの退院室の際に皆から祝いの品として贈られたコート。製作はラステイを中心に行われたというそれは、いつの間にか彼女のトレードマークとも言えるものになっていた。

「行つて来ます」

まだ夢の中のステラに届かない、小さな声でそう言うと、ティアマットは寮室を後にした。

??????????

墮嚙事件と称されるようになった事件の後、彼女は毎日朝早く起き、‘いつもの場所’で剣の鍛錬をしていた。もう自分は教会騎士団に所属する身ではないが、それでも有事の際に誰かを護れるように、自分を強くしたいと感じたのだった。それは、彼女だけでは無い。

いつもの場所　　本塔屋上に向かう階段を登っていると、屋上の出入り口の前に緑の姿が見えた。ここで鍛錬をしているもう一人である。

「あれ？　ポラリス、どうしたの？」

彼女は、いつも屋上に集まるメンバーの一人ゲルト・アルカシアス・フィニエンスの双子の妹ポラリス・イイリア・フィニエンス。墮嚙事件の折に自分の無力さを痛感した、武家貴族出身の女生徒。隣の五組のクラス委員長でもある。どこかいい練習場所が無いか兄に問うたところ、屋上を紹介されたそうだ。

普段はやや離れた場所で素振りなどをするだけだったが、ティアマットが元教会騎士（見習いだが）であることを知ってからは、時折手合わせすることもあった。槍を扱う彼女は、ティアマットに対して武の技量で勝り、魔の技量では劣る。互いに互いが参考になる彼女たちは、いつしか好敵手ライバルとも言える間柄になっていた。ティアマットは、密かにそのことを喜んでいる。

さてそんな彼女は、何故か僅かに開いたドアの前で固まっていた。ティアマットの声に少し飛び上がって驚くと、振り返って人差し指を唇にあてた。どうやら静かに、とのことらしい。

「ティアマットさん、おはよう御座います」

兄と同じように同い年の学友にも丁寧な口調で、ポラリスは小さ

く挨拶をする。ティアマツトもそれにならって挨拶を返した。曰く、挨拶は対人関係を滑らかにする潤滑油である。

小さな声でポラリスは、引き続き事の次第を語った。

「それがですね…どうやら今日は先客が居るようなのです」

「先客？ 誰？」

この風の強く、寒い屋上。好き好んでこのような朝早くに來るといふのだろうか。検討のつかなかった彼女はポラリスに問う。すると何故か彼女は、少し頬を緩めて言った。

「それは、貴女のクラスの委員長　　ラスティさんですよ」

笑顔の意味と、何故彼がいるのか分からなかったティアマツトは、その言葉に首を傾げた。

????????????????

黒髪と緑髪の少女二人が、僅かに開かれたドアの隙間から、屋上の様子を覗いている。その視線の先には、黒い短髪に、全身黒系統で纏めた服を着た長身の男子生徒、ラスティハルト・ジーンの様子があつた。

「鍛錬…かな？」

「多分そうではないでしょうか」

ラスティの右手には鞘に収められた細身の曲剣、カスミギ霞霧が握られている。左利きの彼は、両の手を重力に任せ、目を瞑り何やら小さな

声で詠唱らしきものをしている。その姿が、墮嚙と二人で戦った時のことを思い出させた。

暫く観察していると、彼の目がゆっくりと開かれる。今まで見たことが無かった、非常に濃い色の虹彩が、遠く空を見つめている。彼の口が、質問を課した。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

」

瞬間、人並み以上に敏感な体質らしいティアマットとポラリスの両名が、空気の変わりように身を震わせる。

「何なのですかいまのは？ あれは戦歌とでもいうのですか？」

初めてそれを見たポラリスの驚愕が、ティアマットの耳に伝わる。彼女も、初めて見た時は、驚きで彼に問いただしいと思ったものだった。

戦歌とは、自分に幻想を??理想を重ねる術。現実とのすれ違いが存在を壊してしまうまで、自らをその理想の中に置ける技法。ただ、それは体内の血中の魔力に働きかけた強化よりも効果は薄いとされ、また、危険と常に隣り合わせであるため使い手は少ない。だが、ラスティのそれはどちらとも違うように感じられた。

戦歌も強化も、自らの内界に働きかけるもの。故に表立った変化は見えない??筈だった。ラスティの詠唱は、ティアマットの右目には周辺の空間に広がっているように見えたのである。

そんな驚く二人のことになど気付かず、彼は静かに音をたてて剣を引き抜いた。右手に残された鞘が、空に溶けて行く。

「L a i n - R e d e (描空を辿れ)」

ライン

レーデ

二人の視線は、その演舞に囚われた。

描空：その言葉が表すように、蒼く光る細い線が描かれる。それはティアマツトの右目にしか映ってなかったが、ポラリスも何か感じ取っていたようだ。ラインを辿り、陽炎を残して左腕が振るわれる。振りぬかれると同時に、新たな線が生み出され、剣は運動を続ける。それは幾重にも重なって振るわれる刃の踊りだった。

剣が意思を持つかのように動き、ラスティの体がそれを邪魔すまいとしているかのよう。線に導かれるままに、銀閃は空に軌跡の芸術を生み出し続ける。

それが果たして何分の間続けられたことだろう。思うが俣に振るわれる剣の前に、息を潜めるといふ目的と関係なく、呼吸が最低限に抑えられる。

何時しか唇の動きで聞き取った、ラスティにかけられた最初の言葉のように、ティアマツトの口からは言葉が漏れ出した。

「綺麗な……剣」

その演舞は、唐突に途切れた。左肩口からの袈裟の振り下ろしを最後に、ラスティを包んでいた空気の違和感が消え去ったのだ。振り切った姿勢のまま、彼は呼吸を荒げている。

「……こりゃあ……きついんかな……これが」

そうして大きく息を吐き出すと、その場に尻餅をついて座り込んだ。直後に化身した少年姿のアークが、置いておいたであろう水分の入ったボトルを彼に手渡す。受け取るなり、一気にそれをのどに流し込んだ。

「つくう〜！ やっぱ体を動かした後の水は美味いんだよな、これが！」

「体が求めるものは、やはり美味しく感じるのでしょうか」

タオルも彼に手渡しながら、アークは微笑んで言う。タオルを受け取ったラスティは、流れる汗を拭き、再び立ち上がろうとした

時に、ドアの隙間から緑の光と紅の光が見えた。むしろ何故今の今まで気付かなかったのだろう。ラスティは、首にタオルを巻きつけたままで、少女たちに呼びかけた。

「お〜い！ 覗きは駄目だぜ？」

「え？ …！?!? ……ひゃああ!?!?」「ううう!?!?!?」

驚いた二色の光が、急に音を出して位置を低くした。どうやら驚いて足を滑らせたポリリスが、ティアマットを巻き込んで転んでしまったらしい。思いがけず驚かせてしまったことに苦笑しつつ、ラスティはドアの方に向かって歩いていった。

第一小節「北辰の槍・蒼穹の剣」

何時もは夕日を臨んで座る場所で、三人が朝日を背に座っている。ポラリスとティアマツトが並んで座り、その様子を後方からラスティとアークが観察していた。ポラリスは、黒地に緑のラインの入ったジャージに近い服装だ。

転んだ際に、ティアマツトを下敷きにしてしまったポラリスは、心配そうに声をかける。

「ほ、本当に大丈夫ですか？ ティアマツトさん」

「大丈夫。一応、それなりに丈夫だから」

平謝りしつつティアマツトの様子を伺うポラリスに、笑いかけて大事無いと言うティアマツト。その様子を面白そうにラスティは見つめていて、何時もと違う組み合わせと時間に、アークが色々と思案しているような仕草を見せている。

このままではポラリスが謝り続けそうだと判断したラスティが、二人に声をかける。二人は同時に後ろを向いた。

「なあなあ、もしかして二人とも、いつもここで朝練してたのか？」

その言い方では、クラブ活動の練習のように聞こえるが、二人はそのことは突っ込まなかった？？というよりもアーク以外そうは思わなかった。ラスティの質問に、ティアマツトが受け答える。

「うん。いつも朝早くにここに来て、ポラリスと一緒に素振りをするか、手合わせをした」

「その後は、（全十二階層中）第十階層のルームにあるシャワー室でシャワーを浴びてから、朝食に向かっていました」

ポラリスがティアマットの答えを引き継いだ。ここでの鍛錬の後、自室に戻ってシャワーを浴びようと思っていたラスティは、その行動を採用させてもらおうと考えた。勿論シャワーを浴びている間に、アークには着替えを持ってきてもらう。

そう思案するラスティに、あることに気付いたアークが、ティアマットとポラリスに質問をする。

「ですがそこは、教職員用のシャワールームではなかったでしょうか？」

学院の全構造を「記録」しているアークが、その問題点を告げると、ポラリスが自らの髪をかきあげながら言った。妖しく微笑むさまは、ゲルトの双子の妹だとは思いにくい。

「ふふふ…それは大丈夫ですよ。だってティアマットさんも一緒なんですもの。きっとラスティさんも以て一緒されても大丈夫だと思いますよ？」

「は？　なんでさ？」

ポラリスの言ったことが理解できなかったラスティが、その詳細を問う。何故「ラスティないしティアマット」ならば許されるのだろうか。それはすぐに、彼女の答えで解消された。

「貴方と彼女は、先日の事件の際、墮嚙を下してみせたのですよ？　貴方方のクラスの方達にとっても学院側にとっても、お二人は被害を最小限に…しかも死者を一人も出さなかった英雄のようなもの

なのですよ？ たかがシャワー室を早朝鍛錬の帰りに使うことを黙認してもらうくらいは、造作もないことです」

そして私はそれに便乗させていただいています　そう言っ
て言を結んだ。‘英雄’という言葉をくすぐったく感じたラステイが、
恥ずかしそうに後頭部を搔く。ティアマットの方も、何時もの体育
座りで口元を膝で隠していた。

「まあ、いつか……そんなら俺も、そこでシャワー浴びさせてもら
おうかな？」

「殿方は更に別室ですよ？」

「はははははは！　おいおいおい、俺が覗きなんてする訳無
いだろう？　見たら最期、剣と槍に火葬させられちまうよ」

ポラリスのからかいを、笑い飛ばして答える。もう少し慌ててく
れるかと思つたらしいポラリスは、小さくため息をついた。アーク
は土葬が無いですが、と大分どうでもいいことを突っ込んでいる。

再起動したティアマットが、気付いたように残り時間を気にし始
めた。アークが確認したところでは、あと時間は四十分ほど残って
いるそうだ。それを聞いたポラリスが、置いていた槍を持ち上げ、
ティアマットに何やら耳打ちをする。暫くして二人は頷きあい、ポ
ラリスがラステイに手合わせを申し込んだ。

「折角まだ時間もあるようですので、よろしかったらラステイさん、
お手合わせお願いできませんでしょうか？」

「俺でいいのなら、是非」

彼女の提案に答えたラスティは、立ち上がって背筋を伸ばす。アークが「^{ファンクト}接続」の為に姿を消し、ポラリスは広いエリアに降り立った。どうやらティアマットが審判のようなことをしてくれらしい。墮嚙を相手取って生き残るというラスティ。その彼と手合わせできるとうれしそうに笑うポラリスには、本当にゲルトとは違う性格なのだと思うされた。

ラスティが降り立ち、^{カスミギリ}霞霧を抜いたところで、ティアマットが何時もより大きな声をあげる。

「双方共に、刃には緩衝結界を張り殺傷性をなくすこと。魔術の行使は補助以外は基本無し。私が有効打と判断した一撃を先に入れたほうが勝ち、でいい？」

その言葉に、二人は首肯して同意した。

「Fantaxia, sept redint. (幻想式、構築開始)」

「Fantax-ear, sept f nct (幻想準式、接続開始)」

ラスティとアークが^{ファンクト}接続する。主の魔術行使を助け負荷の大部分を肩代わりするその行動は、高位精霊として授かった高い能力がなせる業である。数少ない精霊との契約者でも、これを行えるのはおそらく彼らしか居ないだろう。そのようなことは彼女たちは夢にも思っていないが、雰囲気の変化を感じ取る。

二メートル前後ほどの槍を構えるポラリス。彼女は既に臨戦態勢を済ませたようで、彼らの詠唱を待っていた。

「では、よろしいでしょうか？」

「あ、一ついいか？ 一つだけ、魔術使っていいか？ それが無きゃ、俺素人同然なんだよ、これが」

ラスティが、何か思い出したかのように告げたことは、ポラリスとティアマツト、二人の首を傾げさせた。何故魔術が剣の実力に関係しているのか、それが彼女たちには見当がつかなかったのだ。

だがきつと、自分が知らないだけなのだと：（筆記では最下層地帯の）二人は自分の知識不足だと結論付け、ポラリスはラスティの言葉に首肯した。それを見て取ったラスティは、術式の生まれない詠唱を行った。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

ラスティの鍛錬を除き見ていた時に感じた違和感を、その場に居た二人はもう一度感じた。ティアマツトは、その右目にラスティを包む靄もやのようなものを捉え、ポラリスは、自身が何か軽いものに包まれるかのような感覚に襲われる。

そうして、ポラリスの要望により始まったこの試合が開始した。

感じる違和感に表情を険しくさせながらも、ポラリスは力なく佇むラスティ目掛けて駆け出す。刃先をラスティにあわせ、水平を保ったままで身軽な彼女は疾走する。ラスティの対応は、やや遅かった。

「（アーク、槍のターゲットイングを。）先手必勝ってか!？」

「やあ!!--」

やや初動に遅れをとったラスティに、鳩尾に向かう刺突が放たれた。身軽な動作から、姿勢を低く打ち出されるそれは、身長のあるラスティには下方から迫るように見える。

「つく！」

左手に握られた刀が、その切っ先を跳ね上げる。直前で遮られた刺突はすぐに引き戻され、ポラリスはヒットアンドアウェイの要領で距離を離す。辛うじて刺突をラスティが受け止めるという、今しがたの攻防では、明らかにポラリスに優位だったのだが、彼女はラスティの剣に違和感を感じていた。

「（今のは何です！？ あんなに不安定な体勢だというのに、なぜあのように剣が鋭いのですか！？）」

やや仰け反る体勢で振るわれたラスティの剣は、万全の体勢で放たれたポラリスの刺突を容易に弾き、反らしたのだ。感じた衝撃は、万全に放たれた時のように思われる。重い訳では無いが、速く、鋭い。それはあまりに異様な事態だった。

「（……もう一度、確かめてみるべきでしょうか……）はあ！ やあ！ せい！！」

先ほどよりは遅いが、十分に速度の乗った刺突が二撃と、振り払いが一撃。幼少から教えを受けてきたであろうその一撃一撃の完成度は、未だ若いながらも高い。対するラスティは、その全てに反応がやや遅れ、対応が全てギリギリである。だというのに、その目は確かに動作を捉えている。まるで目だけが熟練した武闘家のように、左肩を狙った一撃目は横に逸らされ、ついで放たれた右胸への刺

突も振り戻す剣に遮られ、丹田を通すように振るわれた三撃目は

「おおおお！！！！」

雄たけびと共に振るわれた逆袈裟に大きく弾かれた。姿勢を崩されたポラリスに、ラスティが切り込む。首目掛けて放たれた斬撃は、上に弾かれていた槍を縦にすることで防ぐ。そのままポラリスは、鏑迫り合いのように自身を押し付けた。ラスティがよろめく。

「……ラスティさん、中々やりますね……今のは本当に危なかったです。判断力はともかくとして、その剣速は素晴らしいと思います」

「そんなことよりも、俺は小さい少女に力が拮抗されているのが悲しいな、これが」

小柄でありながら、武家貴族として鍛錬を積んだその肉体は、ラスティと拮抗しているようだった。どうやら僅かに、ラスティが押されている。そのまま暫くその体勢が続くと思われたが、ポラリスが行動に出た。

「ティアマツトさんとこれをやろうとしますと、私では鏑迫り合いに持ち込むことすらできませんっよ！！！！」

右足が放った蹴りが、ラスティの腹部を捉えた。予期したラスティが、後方に飛び去ろうとするが、殺せた威力は少ない。蹴り上げた体勢のまま、ポラリスは唇を吊り上げて笑った。ラスティは悔しげにそれを見つめている。

「なるほど、ティアマツトは馬鹿力ということか」

「らすてい？」

どうでもいいことを口走った直後に背後に感じた殺気に対し、誤魔化すためにラスティは駆け出した。左手一本で握られた刀が、地すれすれの位置からわきの下に食い込むように振り上げられる。それは、ラスティのターンを告げる狼煙だった。

「!!! 速い！」

弾いても、殆ど間を置かずに次の斬撃が飛んでくる。弾かれることを前提にしているせいか、防いだ剣は異様に軽く、だがすぐに曲線を描いて次の動作につなげる。

曲線が彼女を包囲するかのように襲い掛かる。長く剣閃の跡に残る薄蒼い光が、徐々に球を作り出すようだった。出来上がっていく球は、ポラリスを飲み込もうと迫る。

「うっうっうっうっうっおおおお!!!」

「っっ!!!」

体の中央を横断する一閃。その時に出来た僅かな隙に、彼女は後方に跳ぶ。ギリギリまで追い詰められていた彼女はしかし、最後の最後まで剣撃を防ぎきったのだ。

振り下ろした姿勢のまま、息の上があったラスティは、最期まで追い詰められなかったことを悔やみ

「はあ……はあ……」

「やあ！」

容赦なく放たれたポラリスの殴打を頭部に受けて、その場に沈み込んだ。

第二小節「それは解らないことだから」

「お、おいおい、何があつたつてんだあおい……」

「ら、ラスティさん？ ど、どうしたんですか？」

「ああ、これがな、今日の朝練の時に不幸な事故があつたんだ」

朝食を既に食べ始めていた級友のもとに姿を現したラスティは、額に包帯を巻いていた。苦笑いを浮かべる彼の後ろでは、アーク（少女）が心配そうに見上げていて、更に後ろにはポラリスとティアマツトが並んで立っていた。

その面子を見て、双子の妹の性格を把握戦闘狂していたゲルトが、事の次第を察した。遅れてハイスも理解したようである。

「ああ、ラスティさん。ポラリスに試合を申し込まれましたね？」

「ああなるほどなあ。お前の妹戦闘ky????????」

ハイスの顔面がスープの中に沈んだ。後方に回り込むように制御された銀の飛礫つぶてが、彼の後頭部を捉えたのだ。ラスティが記憶していたところでは、これはゲルトの双子の妹が得意としていると聞いている。

そのハイスを意図的に無視した、髪染め嫌いで有名なポラリスが話を続ける。

「ラスティさんが動けなくなっているところに、思いっきり槍を打ち込んでしまったのです」

「うん。槍を突きつければ終わったのに……」

「まあまあまあ、俺が負けちまったのは確かだし、緩衝結界（衝撃を和らげるために武器に纏わせる結界）のおかげで大事はなかったし……な？」

意気消沈するポラリスに、ティアマツトが追い打つ。ラスティの方は笑い飛ばしているが、ポラリスは大分気にしているようだ。そしてそれ以上に、気にしている者が居た。

「それでもマスターは怪我人でいらっしやいます。朝食は私が運びますので、マスターは席にお座りになってお待ちになっていてください」

体の小さいアークが、ラスティの背中を押すようにして席に座らせると、小走りで朝食を受け取りに向かった。本当は持ってきてもらってもいいのだが、いつもラスティは自分で持ってきていたのだ。

朝食を受け取りに行くアークの後姿を見ながら、いつもしていた労力を払わなかったラスティが呟く。

「いつもこうだと、楽かもなあ……」

それが翌日から実現されるということが、ラスティ以外の人間には容易に想像できた。今の言葉がアークに聞こえていたようであるからである。一瞬立ち止まるアークの姿が見られたことから、そのことは容易に判断できた。

??????????

「ラスティの剣って、やっぱり速いと思う」

早く朝食を食べ終わったゲルトたちは、自室に授業用の道具をとりに向かった。朝練組の三人はというと、結構ギリギリまで鍛錬するつもりだったようで、授業の道具はすでに準備している。ラスティが気絶・怪我をしたことで早く切り上げられたことで出来た時間は、本日の反省会のようなものに費やされることになっていた。

「私もそう思います。あれほど速い斬撃は受けたことがありません」

ティアマットの評価に、簡素なドレススカートに着替えていたポラリスが同意する。だが結局は負けてしまったと、ややラスティは落ち込んでいる。そんな彼を見ていて、あることに気付いた彼女が、ラスティに向き直った。その視線は何故かやや非難するような雰囲気である。

「そういえば今までずっと思っていたのですが、授業の際、なぜ貴方は剣を使わないのですか？」

選択性の教科として盛り込まれているものに、‘体技・武技’という科目が存在する。ラスティ・ティアマット・ポラリスの三人ともがとっているのだが、生徒の中で受けるものの割合が少ないために、複数のクラスが合同となって受けている。

その際のラスティは、剣術ではなく徒手空拳の体術を専攻して習っていた。他の武器系統には一切見向きもなく、ただその鍛錬を積んでいたラスティを、彼女は不思議に思っていたのだ。それはティアマットも疑問に思っていたことだったが、その理由の一端を彼女は察していた。恐る恐る口を開く。

「これはちょっとした予想なんだけどね？ ラステイの剣って、もしかして魔術に頼って振ってる？」

「それはどういうことですか？」

魔術に頼る、というニュアンスにポラリスは首を捻り、ラステイとアークは大きく目を見開いた。その様子から、自分の予想が正しそうだと思ったティアマットが、直前よりも自身を持って自分の見解を語った。

「私の右目が、魔術の気配を捉えるんだけどね？ ラステイが剣を振るう直前に、‘線’が見えるの。はじめは錯覚かなって思ったんだけど、右目を閉じると見えなくなるから、多分何かの魔術だと思う。その上にラステイは……えっと……こう、なぞるように振ってたから、そう思った」

ティアマットが何を言っているかさっぱり分かっていないポラリスと、更に驚きを強めている主従が、なんとも対照的に見えた。少しの間があってから大きく息を吐いたラステイは、その言葉を肯定する。

「そっか、ラインも見えるのか……そうだよ、ティアマット。確かに俺は、剣術の殆ど全てを魔術に頼っている。詳細は秘密だけどな、これが。……まあだから、使っても身体強化系か移動補助系の魔術しか使えない授業では、そもそもとして体の使い方を学んだ方がいいんだよ、俺は」

ラステイはそれを軽いことのように言っているが、もし今この場にステラがいれば大騒ぎしていただろう発言だった。魔術に頼って体を動かす?? 魔術とは幻想?? 実在しないもの?? それを動作に用いるといっているということは、幻想を己が身に重ねる?? 自

分自身を幻想にしまいかねないということなのだ。

「そうだったのですか。ですから先ほどは、一つだけ魔術の行使を求めたのですね？」

異常さに全く気付いていない二人は、そういうものなのだと納得してしまう。誰かに漏らされたら面倒なことになると感じたラスティが、二人に頼む。

「まあ、そういうことだ。ああ後、俺のこの魔術って、結構珍しいや、正直知られるとあまり良くない類のものだから、誰かに言うなんてことはしないでくれないか？」

ラスティの頼みの理由を、秘伝（一子相伝の類の魔術の俗称。魔術師にとって切り札に近いもので、他人に知られていいものではないもの）に通ずる何かだと解釈した武闘派二人は、特に何も考へることなく頷いた。

その話のあと、周囲に誰も居なくなつた時を見計らつたアークは、ラスティに一つ質問をする。

「（もしかしてマスターは、お二人ならば異常さを理解できないと思つてお話になつたのですか？）」

その問いを、ラスティは内心苦笑いして黙殺するのだった。

第三小節「夏休みを前に」

現在、七月中旬。

中間テストも終わり、もうすぐ生徒たちが待ちに待った夏休みが始まるころになっていた。墮嚙事件の関係で、今年は体育祭が無くなってしまった代わり、どうやら今年は例年よりも期間が長い。そのため何をしようかと、周囲では、夏休みの計画を立てる生徒たちの姿も見える。ラスティたちも、屋上での話題は夏休みの時期にどのように過ごすかという話題になっていた。

「ねえねえみんな！ みんなは夏休みに入ったら、実家に帰る？」

帰ってきたテストの成績がそれなりに良かったらしいステラが、隣のティアマットとは正反対の調子で質問する。夏になり気温が高くなったためか、服装はかなり薄手のワンピースである。他のみなも半そでやノースリーブを着ていたが、ティアマットだけはコートを着ていた??その中は薄着だが。

「オレは帰んねえだろうなあ。アシもねえしどうせ帰ったって何もすることねえしよ」

「僕は帰りますね。帰るなら本当はポラリスも一緒なのですが、どうやらクラブ活動（武術系のクラブ。ティアマットはよくポラリスに誘われている）の夏季合宿練習に参加するみたいなので、彼女は帰らないようですが」

「……やっぱオレ、帰ろうかな」

「俺は帰らん（帰れない）」

三人は次々に答えるが、何故かティアマットがうつむいたまま答えない。今日は誰よりも早く屋上に来て黄昏ており、先ほどから異様にテンションが低い。気になったステラは、彼女の顔を下から覗き込むような姿勢をとって聞く。

「ティアマットちゃん、どうしたの？」

心配そうに聞くルームメイトを見る彼女の視線は、焦点があまり合っていない。やや間があって、重々しく彼女は口を開いた。その彼女の事情に、皆が驚く。

「私、補習受けなきゃ……ダメなんだ……」

????????????????

詠語（リーディングとライティング）、式理論学（?・A）、魔術実技、魔石工学、歴史、公用語^{コタゴ}、生物生態学 全七教科九百点満点だった今回の前期中間テスト。余りに成績の悪い生徒は夏休み期間中補習授業があるというその宣告の下、生徒たちは必死に勉強していた。それ故か、平均点は合計で五百九十点（約65パーセント）ほどとなっているらしい。

ティアマットの点数は、

リーディング：二十三（23）（補習対象）

ライティング：四十（40）
式理論（？）：十五（15）（補習対象）
式理論（A）：二十（20）（補習対象）
魔術実技：八十六（86）
魔石工学：八（8）（補習対象）
歴史：三十四（34）（補習対象）
公用語：六十一（61）
生物生態：五十（50）

合計：三百三十七（337） 平均得点率37パーセント

「……………うん……………ドンマイ、ティアマット」

なんともいえない静けさが屋上を包む。膝に頭をうずくめるティアマットは、絶望に打ちひしがれていた。どう励ましてやればいいのかと皆が考えていると、ティアマットが口を開く。

「夏休みが始まるのが（七月）二十五日からで、補修はそこから三週間だって言われた」

「ということとは八月の十五日までですね？ 夏休みは、今年は九月五日を始業式としているので、後半半分は夏休みを過ごすことができるのでは？」

六週間ほどの夏休み。その半分は補修で潰れてしまっが、逆に考えると、もう半分は自由なのだ。その事実気付いたティアマットは、少しだけ元気を取り戻す。

「じゃあみんながみんな、夏休み中はここに居るわけじゃ無いんだ？」

ステラの言葉に、ゲルトとハイスが首肯する。ステラはどうやら残るようなので、ラスティとティアマツトに、夏休み中もここに集まろうと提案した。二人は首肯する。

男性陣が居なくなるって、どういうことなのだろう。そんな問いを、ラスティは口にするとはなかった。

それからは、皆終始夏休みをどのように過ごすのかという話題になる。

その翌日の昼休み、一年四組女子生徒たちは、緊急放課後会議を後日開くことを決定したという。

『アークのメモ』（夏休み開始一週目記）

「ゲルト&ハイス」

・夏休み中につき、実家に帰省中だそうです。ゲルトさんがいなくて本当に助かりましたね。おかげで さんの部屋を確保する

ことができました。本当、ゲルトさんは??（消された跡がある。良く見ると、普段は全く役に立たないですが、と書かれている）? ? タイミングがいい人です。

「ティアマツト・マキナ」

・ 酷く憔悴した様子でした。マスターに相当心配していただいていた。羨ましいです。

・ 毎日補修の日々だそうです。生徒数が極端に少なくなったおかげで、徹底的に叩き込まれているだとか。

・ 彼女とマスターをくっ付けようとする背後の組織に、何やら動きが見られます。面白そうです。今度ステラさんに聞いてみようと思います。

「ステラ・エルミア・ウィニングス」

・ 元気にクラブ活動をしているそうです。時折轟音と煙が西側の実習棟からあがってきますが、彼女ががんばっている証拠でしょう。

・ そういえば、中間テストの成績はマスターの次に良かったそうです。ふっふっふ、甘いのですよ。教科書を全て「記録」する私の仕えるマスターに、貴女が勝利できるはずなどないのです。本当はオール満点も可能だったのですが、マスターに止められてしまいました。残念です。おかげでマスターが学年トップになることが出来ませんでした……はあ。

「ポラリス・イイリア・フィニエンス」

・彼女も補修対象でした。補修期間中はクラブ活動が禁止されているようで、酷くストレスが溜まっているようでした。昼の休憩時間にティアマツトさんを連れ出して、競技場に駆けていく姿が今日は目撃できました。ティアマツトさん、大変でしたら断つても大丈夫だと思いますよ？ どうせそこら辺の男子生徒が代わりに……はっ、いえいえいえいえいえ、ダメです！ もしそうなのはマスターが餌食になってしまう可能性が非常に高くなってしまいます！

ティアマツトさん、大変でしょうと思われるですが、私のマスターのために頑張ってください。

「アルバ・アーキナム」

・先生は夏休み中も忙しいようです。今日は、教室から脱走しようとした女生徒を追跡する姿を目撃しました。私が見た瞬間、追いかけているらしい人影が廊下の角を曲がっていきました。一瞬だけ、緑が見えました。

第四小節「虹の少年、録視の目」

「僕は強くなりたい」

「貴方は何故それを願いますか？」

「僕は僕を極めたい」

「その道を何に願いますか？」

「もし求めるなら、僕は神にでもなんにでも祈る」

「そうですね、分かりました」

「え？」

「貴方は神に祈りをささげるのでしょうか？」

????????????????

「あれ？　ここはどこ？」

風の強いどこか高い場所で、少年は目覚めた。見知らぬ場所だということだけはすぐに察した。

色の薄い金の髪を持ち、黄や銅色の混じる狼に多く見られる色の目をしている。褐色がかったシャツを着ている彼の年齢は、十と幾つかだろうか。まだかなり幼いその少年は、状況を把握しようと周囲を見回す。

なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなもの

なのだろうか思われる。どこかの施設の屋上、そうとだけは認識できた。

見回しているうちに、一人の男の姿が目に入る。どうやら、剣の鍛錬をしているらしい。

短く刈りそろえられた黒髪、高い身長。黒を基調とした動きやすさを重視した服装。左手に握られた曲がった細身の剣。

今すぐ声をかけ、ここがどこか聞くのが普通だったのかもしれない。だが彼は、これから行われるものを見逃してはいけないう直感的に感じた。男が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。それは詠語と呼ばれる神秘のこもった言葉。この言語を使った詠唱ということは、男は魔術師だろうか。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

その言葉の意味は、少年には分からなかった。ただ、何かを尋ねていることだけは分かった。そしてそれを理解すると同時に、少年の目は彼の姿を焼き付けた。

一閃。それは曲線を描いて大きく振るわれる。

二閃。剣の動きは止まることなく翻る。

三閃。減速せずまたも翻る。むしろ剣速は軌道変更の中でさらに加速している。

そこから先は、数えるのをやめた。

その鍛錬 いや、剣舞。そう、剣舞。剣による舞。それが最もしつくりとくる。

自らを中心とするかのように絶え間なく左腕の剣は振るわれる。銀色の残像が網膜に光の名残をのこしていき、上塗りするように新たな銀が走って来る。刺突動作の全く無い、斬撃動作のみで構成さ

れた曲線美。その全てを逃すまいと、目が乾くことも厭わずに焼き付け続けた。

「はぁ！」

声と共に、最後の一太刀が振るわれた。総計六十四撃。数えていなかったはずであるにも関わらず、少年はそれを確かに認識していた。

直後、沸き起こる衝動に駆られ、少年は駆け出す。

????????????????

夏休みに入り、多くの生徒たちは実家に一時帰省した。顔見知りの大部分は校内におらず、居るものはクラブか補修で忙しい。そんな中ラスティは、アークと共同で書き上げた術式を刻み、鍛錬の場でそれを試していた。今、最後の斬撃が完遂される。

「（太極、両儀、四方、八卦、六十四象、固定動作式ライン式、工程を終了します）」

魔術式を終了したことが、アークから念話で告げられる。任意でラインを描くのではなく、計算された動作で六十四のラインを次々に描き出すその術式は、思いのほか感触がよかったと感じた。

「（どうだ？ 意外といいと思ったんだが）」

「（そうですね。同じ動作を通常の‘ライン’で行っても、恐らく全体的な要素は変わりありませんでしょう。ですが体力の消耗は半分抑えられています）」

「そう」

ラスティがアークに答えようとしたその瞬間、居るはずの無い、人の気配を感じた。振り返ると、そこには少年がたっている。

明らかに学院の生徒とは思えない。学院の生徒であるにしては幼すぎる。ここに来るまでに誰にも見咎められなかったのだろうか。だがそれよりも疑問に感じることもある。

今の今まで、精霊のアークですらその存在に気付かなかったのだ。

「なあ？ 君はだ」

素性を問おうとしたラスティの言葉は、少年の懇願でさえぎられる。その余りの予想外の出来事に、しばらく固まってしまふ。

「お願いします！！ 僕を弟子にしてください！！」

そしてさらに予想外の出来事が重なって、再起動するまでに相当の時間がかかった。

????????????????

『僕を弟子にしてください！』

その言葉を理解するまでに、大分時間がかかってしまふ。剣を握り、腕を降ろした体勢で呆然と少年を見詰めるラスティと、その目の前で土下座さえ初めて懇願する金髪の少年。傍から見れば誤解を招いてしまいそうなのだが、困っているのはラスティの方だった。

「ちよつと待て、話の流れが掴めん。何でだ？ どうして？ W^{ホウ}H
Y? O^{オーフェ}f e? いやちよつと待て、その前に君誰？」

少々混乱気味で、矢継ぎ早に少年に問う。気が動転したせいで、彼に素性を聞くということをすっかり忘れてしまいかけた。声をかけられ顔を上げた少年が、アンバーの目でラスティを見つめる。そして自らの名を告げようとした。

「僕の名前はア　　っ、え!?!?!」

自らの名前を声に出そうとするが、それが音にならない。何度も何度もそれを繰り返すその少年は、その奇怪な現象を前に、次第に顔を青ざめさせる。だがラスティには、その現象に、身に覚えがあった。アークに相談しつつ、困惑する少年に話しかける。

「（アーク、彼に何か‘呪’の類がかかってないか調べてくれ）も
しかして、名前が言えないか？」

「（‘呪’ですか？ ……!! ……そういうことですか……はい、
了解しました。マスター）」

少年が、涙目がちにラスティの方を向く。名前をしゃべれないということは、それほどにこの少年にとって恐怖だったようだ。

「……そ、そうみたいなんです………ど、どうしましょう?」

「まあまあ、それは大事ではないだろうな、これが。最初の方だけは何と無く聞き取れたからな。確かアの後はR音だった筈だから…
…うん、君の事はアル坊と呼ばせてもらう!」

驚いて飛び跳ねる。そんな彼をなだめ、前のほうからシャツをあげさせて見せた。そこには、胸部を中心に黒い刻印が渦巻いている。それを険しい目で見るラスティに、アークから念話が寄せられた。

「（もうお気づきでしょうが……マスター、彼はどうやら、タイムパラ逆説の呪ドックス」
「タイムパラがかけられています……それも刻印付き、行動制限
基点は数年以上前の　過去です」

アークの報告をかみ締めるように聞く。刻印を見つめたままで黙り込んでしまったので、アルは不安げにラスティを見つめたままである。そうしている内に、ラスティが刻印から目を離さずに口を開いた。

「お前、ノルニラム運命と未来に魅入られたな？」

「のるにらむ？」

幼い少年が、首をかしげて問う。ラスティは、説明するからと言いつつも放課後に夕日を臨みながら座る場所に腰を下ろす。アルもその隣に座った。不思議そうにラスティを見つめる彼は、師事を懇願しているのが一時頭から抜け落ちているのか、答えを求めラスティの言葉を待っている。

「語源は北欧神話の　いや、なんでもない、忘れてくれ。……
ノルニラム：Nor niramってのは、時と運命を司る高位の精霊だとも
思ってくれ。選別し、選んだ者を彼女（ノルニラムは女性人格）なりに幫助する。条件付でな？」

「条件、ですか？」

条件と言われ、アルは姿勢を正す。それを見て取るラスティは、そう硬くならんでもいいと力を抜けさせた。そんな微笑ましい様子を見せる彼に声を殺して笑い、ラスティは説明を続けた。

「ああ、条件だ。それも拒否権は無し。ノルニラムに魅入られた時点でそうなること決定の、な？ まあ、それが何かは俺にも分からんが、とりあえず、一つ言える事がある」

軽い調子で言っていたラスティだが、そこまで言う口調を改めた。アル少年もその言葉を聞き逃すまいとする、正座で。

「ここはお前が居た時代よりも未来、だ」

「はい？」

ここは未来。そう言われても彼は首を傾げるだけ。状況を理解できない。認識できない。受け入れられない。思考が凍結してしまったその少年に、ラスティは畳み掛けるかのように話した。混乱するかしないかなど関係ないかのようだ。

「お前の体に刻まれたのは、タイムパラドックスの呪。時間の異なる場所に存在するものが、ノルニラムの力で飛ばされる際に、世界から直々にかけられる極上の呪だ」

そういったラスティは、人差し指でアルの左胸？呪の刻印の中心部、心臓の真上？？を突いた。少年は未だ放心状態のようにしてラスティの言葉に耳を傾けている。

「この呪は、時間移動の矛盾が引き起こす要因になることを認識させなかつたりしなかつたりする効果がある。さっきお前が自分の名

前を言えなかったのも、それを言ってしまうことで歴史が変化してしまう可能性があるからだ。だからお前が「ここ」^{未来}に居る限り、お前は自分の名前を名乗ることが出来ない」

心が抜け出していた状態が、ようやく治りつつあるようだ。だがラスティの言葉を聞いていくうちにその表情は青ざめていく。だが取り乱して騒がないのは流石だと、ラスティは内心でアルのことを賞賛した。

「その刻印に、多分どこかに時計状の刻印があるはずだ。その針が一周したとき、お前はもとの時代に強制送還される。一分一秒と違えずきっかり同じ時間に戻るぞ?」

「そ、そうですか……」

一応ラスティが言っていることは喜ばしいことではあるのだろう。だが困惑するその幼い心は、素直には喜べないようだ。そんな彼に励ますようにしてラスティは言う。

「まあ、そんな困ったことでもないんだぞ? ここはそんな危険なところでもない(筈)だし、(無事に)暫く生きてりゃ元の場所に戻る。まあ、お前の事情を知っちゃまったしな、さっき言ってた「弟子」の件、受けてもいいぞ?」

「ほ、本当ですか?!?!?」

「ああ、本当だ。だが、あまり期待するなよ? 剣なんざ教えられる自信なんて、ないんだからな?」

そこはやはり幼いが故だろうか。先ほどの話を受けてくれると聞

かされて、途端に表情が明るくなる。彼が過去から来たという事情を知ってしまったラスティが、放り出す訳にもいかなくなってしまったからなのだが、言ってしまった以上、それなりにやって見せると心に誓う。

大喜びするアルは、暫く飛び跳ねて喜びを表現した後、深々と頭を下げ、元気のいい声で言った。

「ありがとうございます！　これからよろしくおねがいます、
師匠、！！」

そう呼ばれて、思わず緩んでしまった頬をアル少年に見られずに済んだのは、恐らく僥倖だったのだろう。

第五小節「戦乙女の伝説」

その日の夕、誰にも見つからないようにアークに先行偵察させながら（この時、アルは精霊と契約しているラスティに尊敬のまなざしを向けていた）自分の寮にたどり着いたラスティは、ここで待っているように言うと、購買パンを彼に与えて屋上に向かった。その日の夕は、疲れ果てたティアマツトをラスティとステラが元氣付けるといふことに費やされ、特に何かあつたといふこともなかった。

今日は夏休みの宿題をやるかと言って早く解散することにし、怪しまれないほどに急ぎ足で寮に戻る。そこでは、パンの袋をきちんとゴミ箱に捨てていたアルが、はしゃいだ様子で室内を観察していた。

「はは、こういう部屋は初めてか？」

「はい！ 僕の?????、うう……いたところは、これほど豪華ではありませんでしたから」

呪のせいでも、自分の出自につながることを話せないことに戸惑いながらも、アルはしっかりと答える。状況への適応が早いと言うべきか、若い好奇心がなせる業か、どういふべきか迷うものだったが、とりあえず混乱は少なくて済んだようだった。大きく息を吐き出して、ラスティが安堵する。

「（アーク、ゲルトの部屋の鍵開けたりするか？）一応ここに、暫く???多分お前の呪刻の針が一周するまでだろうな??寝泊りしてもらうぞ? 人の部屋だし、お前が居ることは秘密なんだからあまり騒いでも駄目だぞ?」

「は〜い!」

「（お任せください、マスター。ただの物理的な鍵など、私の前では意味を成さないことを証明いたしました!）ではアルさん、こちらにおいでください。部屋にご案内いたします」

何故か張り切った様子でアルをゲルトの部屋の前に連れて行ったアーク（少女）。その後ろを着いて行く少年の前でアークは、ドアノブに手をかける。かなり小さな声で何らかの力を行使したらしく、まるで初めから鍵がかかっていなかったかのようにあっさりとドアが開く。案内されるがままに、いや、案内を追い越してアルは部屋に駆け込んだ。

「いやっほおおおおい!」

勢い良くベッドに飛び込み、その布団の感触を堪能する。

「あまり騒ぐなと言ったばかりだろう? ……まあ、いつか。とりあえず、今日はもう夜だ、寝る。話は明日からだぞ?」

「はい! わかりました! 師匠!」

??????????

元気のいい弟子を部屋に残し、ラスティはゲルトの部屋を後にする。夏休みが終わったら、何かゲルトに奢ろうかなと、そんなことを考えていた。

静まった寮の居間で、ラスティはソファの上に腰を降ろし、寝そべる。その彼を、テーブル横の椅子に腰掛けたアーク（少年）が見

守っていた。ラスティが、疲れたように言う。

「それにしても、よりによってノルニラムかよ………冗談キツすぎやしないか？」

腕でアイマスクをするように言うラスティに、アークが椅子の背もたれによりかかり、椅子の前足を浮かせながら言う。その絶妙なバランス感覚はどこからくるのだろうか。

「別名ヴァルキュリウス、でしたでしょうか。私たち精霊の間でも殆ど伝説化している世界種でしたが、まさかその存在の証をこの目で見る事が出来るとは思いませんでした」

ラスティがアルにノルニラムのことを説明する際に、「精霊」と称していたが、これは嘘である。説明するのにそれが最良だと判断したが故なのだが、ノルニラムは精霊ですら伝説上の存在ではとうほどの希少存在であった。

「世界が英雄を求める時に現れる戦乙女。光を感じない目で、ふさわしい存在を探し出すために人知れず現れる世界種だ」

寝そべった体勢のまま、ラスティはアークに説明する。アルには説明できないような部分まで、ラスティはなるべく詳細に説明した。

「北欧神話というものがあってな、そこに出てくる、英雄ザアルを探し出す戦乙女キリーを基にした存在だ。存在たましいを感じてその対象を選別する」

「確かにあの少年は、不思議な気配があります。マスターほどではありませんが、そばに居て心地の良いものです」

ラスティの言葉にアークはそう答える。‘マスターほどではない’ということを少々問いただしてみたくもあつたが、話をそらすはいけないと判断したラスティは、そのことを心に留めておくだけにする。

「まあ、それでだ……きっとアルは、七年前の戦乱’に関わる事になる」

「！！！！！」

アークは息を呑み、バランスを崩して椅子から転げ落ちてしまう。盛大に鈍い音を打ち鳴らして後頭部から見事着地したアークは、流石に痛いらしく頭を抱えて呻き出す。音に驚いたラスティは、勢い良く飛び起きてアークの方を見た。倒れた椅子の様子から事の次第を理解したラスティは、笑ってアークの様子をうかがう。

「おいおいおい、何やってるんだよ？ その手のネタ、中学以来だぜ？」

「うううう………中学なるものがなにかは存じませんが、笑うのはヒドイと思います」

頭を押さえ、恨めしげな上目遣いで気迫の無い眼光を出すアーク。ひとしきり笑ったラスティは、ソファの上から飛び降りて、自分の寝室に向かった。その後を、アークも椅子を立て直してから追う。

「まあとりあえず言えることは、何故か知らんがノルニラムは俺のところアルを送つたらしいということ、俺がどうにかしてアルを鍛えなきゃいけないということ……まあ、そういうことだ」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、三段アイスクリームが鎮座している。ゲルトを卒倒させたときよりも一つだけ多い。

「うう… すいません」

ことの次第はこうだった。起床時間近くになり、自らの主を起そうとしたとき、アークの思考にゲルトの姿が浮かんだ。初日に驚かせた時の反応が面白かったので、同じく一人称が僕であるアルにイタズラしてみようかと考えたのだ。騒ぐな（騒がせるな）ということをすっかり頭から抜け落としていたアークは、少女の姿になってアルの上に覆いかぶさり。双方の顔の距離が五センチほどになるまで接近する。その効果は靦面で、目の前に居た少女に驚いたアルは、朝っぱらから悲鳴をあげてしまった。

そして今に至るのである。

「え、えつと師匠、そこまで怒らなくても…」

ゲルトと殆ど同じことを言い、ラスティを抑えようとするアル少年。元々拳骨だけで済まそうと考えていたラスティは、周囲の部屋の住人が皆帰省中であることに感謝して、その場を収めることにした。

「なんだかデジャブを感じるような気がするんだよな、これが」

あの時は拳骨は二発でしたと、アークが言った、その時だった。寮のドアを叩く音がする。

第六小節「貴女にとっての」

「ねえねえ実のところ、ティアマットちゃんはラステイクんのこと
どう思ってるの?」

それは、前日の会話だった。その日はラステイがやや早く姿を消
して、ティアマットもそれに倣おうとしたのだが、ステラに止めら
れたのだ。そうして座りなおして一番の言葉がそれだった。

「え? ラステイのこと?」

「うん! そうそう! やっぱティアマットちゃんは、ラステイク
んのこと好きなのかな? って!」

そうストレートに言われて、ティアマットの顔色がほんの少しだ
け色づく。そうして少しだけ思索した後に、彼女はこう答えた。

「どうなの……かな? 私、ラステイのこと、どう思ってるんだろ
う?」

出てきたのは曖昧な答え。そんな彼女の答えを予期していたとス
テラは言い、彼女に対しての質問を少しだけ変える。

「ふふふ、やっぱりそうくるかなって思ってたよ? じゃあ、ティア
マットちゃんにとって、ラステイクんってどんな人?」

その質問には、比較的早くティアマットは答えた。アークが居な
くなったことで風が先ほどよりも強くなり、彼女の長い黒髪が風に

なびく。

「……私の目を、初めて、綺麗、って言ってくれた人、かな」

ステラはその言葉に対して黙ったままでいる。まるでもつとあるだろう、まだ思うところがあるだろうと、そう促すかのようなステラの様子を受けてか、ティアマットは続けて話した。今度は風が後方から優しく吹いてくる。

「私と一番話した人、初めて私の歌を聴いてくれた人、私が初めて背中を任せた人、私がこうして皆と話せるきっかけを作ってくれた人　そして、私の始めてのともだち」

思いのほか多く、容易く出てくると、ティアマットは自分で言うてそう感じていた。それを聞いていたステラは、姉が妹に送る視線に似た眼差しを送る。夕日を見つめるティアマットにはそれが見えず、小さく笑った彼女の声を耳にして振り返った。

ティアマットが視線を向ける中、答えに満足した様子でステラは立ち上がる。そこで話題は終わったと、それで十分だよと言い聞かせ、次に放った言葉はこうだった。

????????????????

『ねえ？　明日、ラスティくんのもとに朝食作って行って皆で食べよー！』

そう言った彼女の勢いに押され、ティアマットは彼女と一緒に朝食を作った。料理長が（新たな食材を開拓してくると言って、数人の見習いと料理クラブの生徒たちと共に）不在である今、残った人員のみで稼動する食堂は朝早くは開いていない。夏休み中は購買で

販売されているものか、自炊するかなどで生活する生徒が殆どだったのだ。

ラスティ（とアーク）が料理出来ないこと（と起床時間）はアークからステラは聞いている。毎朝六時起きという規則正しい生活を送っているらしかったので、それにあわせて彼女たちは料理を作った。

鍋と器を持ち、ラスティが愛してやまないというライスを携えて向かった。力持ちのティアマットが重いものを持っていたので、片手を空けてステラがドアを叩く。

「ラスティくん！！ おっきてる〜〜？」

そうして耳を澄ませると、中で物音がしていた。どうやら起きているらしい。ステラは、勢い良くドアを開け放った。

「おっはよー！ ご飯作ってきてあげ……たよ？」

固まるステラと、その背中から顔を覗かせるようにして彼女たちが見たのは、

寝巻き姿のままのラスティと、少女姿のアーク、

そして、見知らぬ金髪の少年だった。

「その子ダレ？ ラスティくんの隠し子？」

その途端、ラスティとその謎の少年から全く同じタイミングで突込みが入るのだった。

「へえ〜、お弟子さんねえ〜？」

一悶着あったが、ラスティたちは二人に状況を何とか説明した。何故ここにそんな少年が居るのかという話はまだ分からなかったが、何とか話を誤魔化して、持って来てくれたという朝食を食べることにした。

ちょうど四人がけの四角テーブルに、ラスティとアル少年。向かいにティアマットとステラが座る。アークの分にと思っけて持ってきた分は、（アークに食事は無くても問題ないので）アルと名乗った少年に回る。皿の上には、一年四組の女生徒が聞いたというライスに合う、塩焼き素朴な調理法の魚？？焼き鮭が乗っていた。ラスティがそれを見て興奮しだす。

「おおおおお！！！！こ、これは……………」

「ふっふっふ、料理長に教えてもらって、私とティアマットちゃんで作ったの！あと、これもね？」

そうしてテーブル中央に置かれた鍋のふたの下から見えたのは、大豆を塩と麹で発酵させたペーパースト状の調味料で作られたスープ、味噌汁だった。ラスティは驚きに言葉が出ないようだ。ティアマットが、料理長がかつて聞いたという話を（ステラに肘で促されて）ラスティに教える。

「ライスに最も合うというスープだって言われたらしくて、昔ある人に料理長が、味噌ってという調味料の製造法の概念を言われただけで数年間研究して作ったっていった」

その日本食のことを知っている人物が居るといふ矛盾点に何も気付くことなく、ラスティは目の前の日本食に言葉を奪われる。その様子を、アル少年はずっと興味深そうに見つめていた。ここでようやく、彼が口を開く。

「師匠、これは何ですか？」

質問されたラスティは、ティアマツトがよそっている間にアルの方に向き説明を始めた。真剣に。

「まずこれはだな、神聖な炭水化物、我が故郷の主要食、ライス、と呼ばれるものだ。ごはんと言えば時には直接これを指すことがあるほどに」

ラスティの御飯への愛情を感じさせる余分に詳しい説明を、少年は聞かされていた。引きつった表情に気付かないままに説明を続けるラスティの横顔を見て、ティアマツトが微笑む。それを見て、ステラとアークが視線を合わせて口を大きくゆがませて笑う。

「マスター、盛り付けが終了しましたよ。早く召し上がりませんと、折角の御飯が冷めてしまいますよ？」

「で、アル坊、それでだな　む？　そうだな、解説はここまでにしておこう。まずは腹ごしらえだ」

アークの進言で、ラスティがテーブルに向き直る。アル少年は視線でアークに感謝を告げると、同じく向き直った。ラスティが懐から　常備でもしているのだろうか　箸を取り出した。その見たことが無い用具に、アーク以外の視線が集中する。

「師匠、それは何ですか？」

「ラスティくん、ソレ何？」

「そういえば、前にライス食べてた時にも、それ、持ってた」

皆の言葉に反応し、何やら思案したラスティは、もう一度懐に手を入れた。すると何故か、新たに三組の箸がその手の中に出現する。軽く啞然とする皆にそれを配りながら、ラスティは説明する。

「こいつは、箸^{はし}、俺の故郷で使われてた、料理を食べるための器具なんだ」

こうやって使ったとラスティが手本を見せ、教える。それに入る彼らを見て、どこか不思議な郷愁の念が浮かんだが、振り払った。

即興で教え込まれた皆は、食事をしながら、四苦八苦しつつ日本の朝食の代表格たちを食べた。意外なことに一番箸の扱いが上手いのはティアマットで、ステラが最も下手であった。ピンセットのほうがいいなどと評し、スプーンに切り替える彼女に苦笑しながら、ラスティも自分の分の食事もとりはじめた。

少しだけ、味噌汁の味が濃かったような気がした。

????????????

「さつて、飯も食い終わつたし、皿洗いでもしますか！」

彼女たちが作り上げてきた食事を、御代わりの分も全て食らい尽くしたラスティが、腕を捲くりながら立ち上がる。寮室におかれた

少々小規模のキッチンの水洗い場に食器を持って行き、洗いはじめる。他の皆の食器を持ってきたティアマットが、それを手伝い始めた。

「師匠、僕もっ　　！」

「さあ〜て、ボクはわたしと一緒にテーブルその他を綺麗にしまし
ようね〜」（あの二人を邪魔しちゃ、ダメ　ダ　ヨ？）

アル少年がナニカを言おうとしたようだが、それはステラの行動で遮られる。振り返ったラスティが見たのは、耳打ちされ顔を青ざめ、激しく顔を上下させる、どこか哀れな弟子の姿だった。

洗淨した食器を、ティアマットが布巾で拭いて並べる。やや身長差のある二人だが、同じ色の髪色は、後方から二人のことを観察するステラとアークの頬を緩ませた。二人の間では、余計なことを口走らないように口元を封印されたアル少年の姿がある。

話しかけるラスティと、言葉数少ないながらもどこか楽しげに受け答えるティアマットが、印象的だった。

第七小節「意思ある箱舟・録視の蓮華・虹の原点」

「ああ、アル坊」

朝食の後片付けが終了した後、アル少年はラスティに声をかけられた。振り返ると、ラスティの方から何かを投げ渡される。落としそうになりながらも受け取り、それを見てみた。

「そいつは練習用の模擬刀だ。俺は彼女たちの部屋に食器類持っていくから、先に屋上に行つてくれ（アーク、送つてくれ。くれぐれも見つかるんじゃないぞ？）」

「（了解しました、マスター）では、行きましょうか、アルさん？」

先に行つてくれと言つたラスティが、ティアマツトたちが持ってきた食器類を全て持ち、二人の後について出て行つた。取り残されたかたちになったアル少年に、アークが声をかける。返事をして、アークがやや先行し屋上に向かつた。

石造りの廊下、本塔にたどり着くと、そこには人氣が殆ど存在しない。補修授業を行う先生たちはすでに教室棟に向かい、生徒たちも少ないため、殆ど隠れることなしに彼らは進んだ。

アルは模擬刀を抱きかかえて、前を歩くアーク（少女）を見る。軽い音を響かせて、まるで始めて来たところであるかのように見回しながら歩くその姿は、アルの目から見ても微笑ましく見える。だがそれを見て、アークが自身の師に向ける視線が少しだけ気になつたような気がしたアル少年は、アークに質問した。

「アークさんは、師匠のこと、好きなんですか？」

ティアマツトをくっ付けようとするような行動が見られるが、だが自身も彼を愛しむような視線を送っていたことを気になっていたアルが言葉にしたのは、ある意味彼らしいストレートな聞き方。無機質な音ばかり響いていた中で、その言葉に反応したアークは、振り向いてアル少年に笑いかけながら語る。歩みは後ろ向きで止まらない。曲がり角もしっかりと曲がる。

「ふふふ、それを私に聞いたのは、貴方が初めてです。

……そうですね……恐らくアルさんが考えているものとは少々違った意味で、私はマスターのことを愛しています」

「?……どうということですか?」

アークの言う言葉の意味を察することの出来なかったアルが、首を傾げて再度質問する。アークは再び振り返り、前に向き直る。アルが首を再度傾げていると、突然仰々しく手を広げながらアークは語った。次第にその手は、ゆっくりと自らの体を抱きしめる。

「私の名はARK^{アーク}。世界の力よりあの御方をお守りする、意思ある方舟^{ARK}」

その声音は今までアークが発してきたものと違う響きを持つ。広く冷たい石の印象を持つ廊下に声は緩やかに響いていき、意味を正確に伝えられないながらも、アルの心に言葉を染み込ませる。

「空と海の揺り籠たることを誓い、あの御方に仕えると決めた精霊???それが私

私はあの御方の隣に立つ者足りえず、ただ空を抱き仕えるのです」

体を抱きしめる腕を解き、再度振り返ってアルに向き直る。目の前はすでに屋上への扉があり、その前でアークは立ち止まって見ていた。大きく見下ろす形となった構図で、アルも立ち止まってアークの目を見つめる。

「私は世界種で、性別の概念が存在しません。それにマスターには、すでにお似合いの女性もいらっしやるのです。ですから私は、貴方が言うような、人における『愛』とは違った形で、マスターをお慕い申し上げるのです」

口調の戻ったアークが、呆けるアルをおいて行くように屋上への扉の向こうに消えていった。かけられた言葉を反芻するが、その意味を捉えきれないアルは、自分なりの解釈でよしとすることにした。

「要するに師匠は、モテモテということですね」

何も分かっていなかった。

????????????????

「今日はありがとな」

ティアマツトとステラの寮に食器類を持っていく道中、ラスティは彼女たちにそう礼を言う。お礼なんていいと言う二人に、それはいけないとラスティは続けた。

「だってこの食事だって、俺がライス好きなの知って作ってくれたんだろ？ 朝食作ってくれただけでも有り難いの、俺の故郷の飯を作ろうとしてくれてたってんじゃ、有り難味は大きすぎるってな、これが」

流石にバレたかと反応する二人に、バレ無いと思っただのかと返すラスティ。せめてもの礼をと食器類を運ぶ中で、ラスティは別のことについても礼を言った。

「それと……事情、深く聞かないでくれてありがとうな」

アル少年のことだった。明らかに部外者の少年が、何故学院内に居るのかということを書かないで、軽く事情を聞くのみにおさめてくれたことは、ラスティにとって日本食を作ってくれたのと同じくらい有り難いことだった。照れ笑いを隠しながら、ティアマットがラスティに言う。

「なんだか、理由があるみたいだったから???それに、ラスティが何か悪いことしてるって訳じゃないのは、みれば分かったから」

やや小さな声でそういったティアマットに、ステラが大きく首を上下させて同意する。そんな彼女たちに

「そっか……ありがとうな」

やはりラスティは礼を繰り返すのだった。

アークとアルが屋上に到着してから程なくして、ラスティもそこに到着した。ラスティが現れたところに、何処からとも無くアーク（少年）が小走りで駆け寄ってくる。お疲れ???そう労いの言葉を送られたアークは、同じような言葉をうれしげに返した後、アルに

ついで言った。

「どうやらアルさんは、マスターが待ちきれなかったみたいのようで、剣を振り始めようとあちらに向かいました」

そう言ってアークが指差した方向を、ラスティは見る。やや離れた方角に、剣を構えるアル少年の姿が見える。彼に気付かれないようにそっと移動したラスティは、角材の積み上げられた場所に腰を降ろした。頬杖をつき、アル少年のことを観察する。

「（俺、そもそも人に剣を教える自信が無いんだが、どうすればいいかな、アーク）」

「（マスターの場合、剣術ではなく魔術ですものね、あれは）」

念話で会話する主従の前で、アルが動作を始めた。それは、大きな曲線を描いて振るわれた。

「（おい……）」

ラスティが驚愕に声を出してしまいそうになるのをこらえた。アークは呆然としている。

その剣筋は素人目にも直感的に分かるほどに未だ未熟すぎる。だが彼が行っている剣の‘型’は、突きの動作の無い曲線の軌道で構成されたもの。それはあまりに見覚えがありすぎた。

しばらくの時間がたち、掛け声と共に最後の一太刀が振るわれた。その数六十四。それを数えていたアークが、ラスティに念話で報告する。

「（マスター、あれはどうやら‘録視の蓮華’⁶⁴を模倣しようとしたものと見て間違いありません。どうやら彼は、全ての軌道を正確

に記憶している、ようです」

その驚愕とも言える事実にも、更に言葉を失うラステイ。目の前に起こったことは、彼には到底信じられるものでは無かったのだ。

最初の一太刀目の逆袈裟の一振り、その次の翻った横の太刀、大きく軌道変更し打ち込まれる利き腕の肩口からの袈裟？？？全ての軌道の大まかなライン、翻る方向、振る目標？？それらあらゆる要素が、かなり未熟ながらも完全にアルには記憶されていたのだ。

「っはあ、はあ、はあ……」

確かに後半になるにつれ体力はきれるし、体裁きも鈍く、剣閃も棒切れを振り回しているに過ぎないもの。だが六十四の太刀、それも一度も止まることなく放たれるそれを覚えているのは異常極まらない。彼は一度しかそれを目にしていないのだ。

一連の動きを終えたアルが、ラステイが来ていた事に気付いた。今の動作を見られていたことを知り、恥ずかしいらしく、誤魔化すような笑いをしながら口を開いた。

「あ……み、見られちゃい……ましたか？」

切れる息を整えようとしつつ、彼はそう言葉を発する。六十四の無酸素運動をやり続けたのだ、今彼の体は全身が悲鳴をあげ、酸素を欲していることだろう。驚きを悟られないように、表情を元に戻したラステイはその場から飛び降り、用意した濡れタオルをその顔に軽く投げつけて言った。

「おう、しっかり見てたぞ？ それにしても最初から無茶するな、阿呆。力みすぎでそんな振ってればすぐにへたれるに決まっているだろう？」

つい先日それで痛い思いをしたラスティが、遠くを見ながらその声をかける。模擬刀を置き顔を拭いたアルは、自らの師の顔を見上げて言った。

「りきみすぎ、ですか？」

「ああ、そつだ。まあ、俺の剣は特殊すぎるんだが……」

そつ言つて一度言葉を切り、アルの方を見つめる。その無垢な輝きを抱く瞳は、どんな困難でもやり遂げてみせますと語っていた。自分が魔術で行っていることを真似しようとするその精神には敬意を示したいが、正直彼はやめた方がいいのではと思っていた。だが不可能と決め付けるのは早々過ぎると思い、ラスティは自分なりのアドバイスを告げる。

「いいか。腕が剣を振るんじゃない。剣の動きを極限まで邪魔しないんだ。剣の軌道を導け、そして、自分でいう一つの、世界を感じる、」

そうしてラスティは、百聞は一見に如かずと、自らの剣を取り出す。アークも、^{フランク}接続し、アルから距離とつて、録視の蓮華の術式を発動させた。それは自らの体の内に走る式で、良く目を凝らすと皮膚の下に薄らと式の文様が見て取れる。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

理想を、幻想を自身の身に重ねる、魔術としても剣術としても異常なそれ。アルにはその異常性を知ることが皆無だが、そうである

故に純粹にその美しさに見惚れた。

全六十四の太刀は、淀み無く流麗で、曲線でありながら時に直線。劍の握りには余裕があり、腕に遅れて繰り出される刃先は空気を撫で斬る。一点で交わる全軌道は球を描き、その銀色の光を再び焼き付けさせた。

唾を飲む音が、アルから発せられる。その理想の高みを再認識し、それでも追い求めると瞳には強い意志が注ぎ込まれる。

左利きのラスティの姿を、鏡映しに映った姿と見立てて、アルはその動きを眺めていた。

六十四の太刀を終え、予告無く追加の動作を開始する。通常の「ライン」で行われるそれは、先ほどほどの連続性は失われているが、鋭さは増している。アルを正面に見据え、間合いのほんの少しだけ外から放たれる斬撃は、アルの顔に剣圧を感じさせる。だがそれに目を閉じることは無く、しかとその全てを焼き付けた。

しばらくしてその動作が止まる。剣を収め、アークから水を受け取ってそれをあおると、少しだけあがった息でアルに話す。

「他には……俺は細かいことを言える自信は無い。自分の体を信じてみな、最良の動きは体が知ってるはずだ」

そうしてアルは、その言葉を心に刻み、向かい合って鍛錬を続けた。手本を見せるように、時折ゆっくりと動いてみせるラスティ、それを鏡写しのように真似るアル。そんな光景が、長時間にわたって見られた。

アルが疲労で動けなくなるころには、日は高く昇りきっていた。

第八小節「あるもの含めの夕日の眺めに」

「やつほ〜！ おつまませ！」

何時もの夕日を臨む時間。大好きな研究活動に没頭することです。トレスの解消されたステラと、頭脳労働のせいでストレスの溜まりきったティアマットが姿を現した。二人が用意してくれた夕食が、その手に提げられている。

ラスティとアルは、細かく休憩を挟みつつも一日中屋上で鍛錬していた。アルの表情には生気が少なく、疲れがありありと見て取れる。ラスティは声を上げて答える。

「おう！ 待ちくたびれたぜ！ 早く食おうぜ！」

仲間内で屈指の食好きのラスティのそんな台詞に皆が苦笑を漏らす。ステラ、ティアマット、ラスティ（後ろにアーク）、アルと並んだ。

八月に入り気温が高くなり、皆の服装は薄いものになっている。ラスティは濃紺の七分丈のズボンに黒の半そでのシャツ、アルはアークが何処からとも無く調達してきた何故か極彩色の半袖短パン。アーク（少女）は何時ものゴシッククロリータ調のドレスで、ステラは白いワンピース。ティアマットだけは、紅いコートに黒い皮手袋というまるで冬のような出で立ち。暑くないのだろうか、皆の視線が集中する。汗一つかかないティアマットは、皆の視線の意味が分ならず首を傾げるだけである。

「なあ、ティアマット……暑く、無いのか？」

ラスティがついに言葉を発した。自ら製作に携わったそのコートには、精霊の魔術技術を盛り込んだ環境調整機能がついているが、それにしても季節感が無さ過ぎるのだ。

「うん。暑くない」

当然のように頷く。そんな彼女の様子に、その話題はこれ以上追求すべきではないと言う意見が暗黙の了解として取り交わされた。ステラは持ってきた夕食を広げる。

流石に朝食のときのように日本料理では無く、サンドイッチなどの手で掴んで食べれるもので構成された食事だった。ラスティは沢山食べたいと言うので、彼のために量は多目である。

「いったただつきまゝあむ！」

最後まで言い切らずにアルがサンドイッチを食む。西洋っぽい文化なのに、中途半端なところで日本文化が混ざることにはラスティは苦笑しつつ、同じように食べ始めた。二つ重ねて。

「アル坊！ 沢山食わんと俺みたいに背が高くなれんぞ！」

「ふあひ！」

ラスティの発破にアルが呼応、二人は勢い良く食らっていく。そんな二人の様子に微笑みながら、ティアマツトとステラはゆっくりと食べていた。

夕日が少しだけ沈み始めたころ、皆が食べ終わる。ラスティは満足げな表情で、限界近くまで食べさせられたアルは顔をやや青ざめさせている。

「うう〜、食べ過ぎました……」

「マスターと同じ量を食べようとするからそうなるのです」

アルのそんな呟きに、何故かアークが誇らしげに胸を張って答える。そんな年少（片方は姿だけ）の二人のやりとりには、心和まされた。

「ラスティたちは、ずっと今日はここに居たの？」

ポラリスにつき合わされ、この時間になるまでここに来ることの出来なかったティアマツトが問う。一度様子を見に来ていたステラが首肯して、ラスティは笑って答える。どうもアルの中途の音の上がりようが面白かったらしい。

「ああ、今日はずっとここに居たぜ？ まあアル坊はちょっと休みすぎだな」

「師匠と同列にしないでください……そもそも歳が違います」

「はは、違うないな、これが」

アークがこまめに水分補給やミネラル補給の管理をし、間食もはさみつつずっと続けていたようだ。まだ幼いアルは体力が追いついていかず、ラスティの鍛錬を見ている時間が長かったらしい。

「わたしはクラブ活動だったよ！ 新しい魔具が出来そうなんだ！」

今日一日だけで三回の原因不明の爆発現象を引き起こしているステラが、にこやかにのたまう。事情の知らないアル以外の三人は顔

を引きつらせて笑う。理解できていないアルに、ラステイはにこやかに笑いかける。

「ステラが魔具を作ってきたら、お前に試させてやるよ」

「え、ほんとですか！」

その言葉の意味を全く知らないアルが、心の底から喜んでみせる。心の中で合掌しつつ、そんな純粹なアルの様子に皆は微笑む。今日はどうしていたという話題において、ティアマットが最も低い調子で語る。どうやら大分参ってきているようだ。

「私は……ずっと、補修だった」

体育座りのまま膝に顔を埋める彼女の声は暗い。一応頑張っているようだが、連日の長時間の勉強は確実に彼女の精神を蝕んでいるようだ。ステラが彼女の背中を軽く叩いて励ます。

何時もとは一風変わったやり取りに新鮮さを感じつつ、彼らは思いいに話を募らせた。夕日が半分以上沈んだ頃、アルの首が断続的に重力に負けそうになる。どうやら疲れのせいで睡魔が襲ってきているようだ。

「アーク、アルを部屋に送ってきてくれ。寝かせたら戻ってきてくれよ?」

「了解しました」

ラステイの言葉に反応して、アークが立ち上がる。瞼が閉じかかっているアルを何とか立たせ、背を押すようにして連れて行った。その姿を見届けた後、ステラがラステイに問う。

「どう？ アルくんは」

どういう意味で言われたのか定かでは無いが、才能かそのあたりだろうと解釈したラスティが言う。二人が出て行った扉を見つめたままで言うそれは、ティアマツトも含めて二人を驚かせた。

「凄く努力家ですか　　そこで、それが霞む位に　　天才だ」

「天才？」

ティアマツトが、ラスティの言葉に反応する。それはただ天才と言う言葉に反応したのではなく、まるで恐れるかのようなラスティの口調に疑問を持ったというのが大きかった。二人の方に向き直ったラスティが、声色を抑えて言う。夕日は半分以上沈み、辺りは次第に暗くなっていく。

「ああ、天才だ……………ティアマツトは、前ポラリスにやってみせたあの連続攻撃、流れだけでも再現できるか？」

急なラスティの話題の変換をいぶかしむも、ティアマツトは首を横に振って答える。

「無理。形と軌道が複雑すぎる。それに、一太刀の再現だって、直線的な騎士の剣が染み付いた私じゃ、難しい」

ラスティの剣閃の異様性をうかがわせるようなティアマツトの発言。苦笑しつつさうだろうと答えるラスティは、彼女にとって驚くことを言った。

「でもアル坊はよ、やってのけたんだ、これが。まだ一つ一つは雑すぎるが、六十四の連続した軌道を完全に覚えてたんだ」

「わお、凄いんだね」

ステラはラスティの剣舞を未だ見ていなかった故に驚きは薄いですが、ティアマツトはあいた口が塞がらないといった様子だ。

ラスティの剣術？いや、剣を振るための魔術は、傍から見ると異様な曲線を描いているように見える。ラスティの想像の中で空間に引かれた路線ラインの上をすべる剣は、時折不可能に近い剣閃を繰り出すことさえある。故に彼は、ラインさえ引ければどのような体勢からでも十全の剣撃を繰り出してみせる。

彼に編まれた‘録視の蓮華’と名づけられた式は、あらかじめ設定しておいたラインを引くものである。軌道は常に連続性を保ち、ただ運動エネルギーの損失を抑えて斬り続けることを目的としたそれは、ただ六十四種の型を連続して繰り出すなどよりも遥かに複雑怪奇な軌道を描く。

それを、アルは一度で記憶してみせたのだ。

「完全記憶能力？」

ステラがそのように予想を言う。だがそのことを、ラスティは否定した。

「いや、それは無いだろう。何か別質の異能か何かかもしれない」

だがラスティの記憶のなかで、該当しそうなものは無かった。見たものを完成度高く再現してみせる異能は存在するが、未熟過ぎるアルの剣を見る限りそれは違うと確信する。記憶にも、NOTEにも無い能力かもしれないと思われた。それは僅かにラスティを

混乱させている。

「まあだからって、何か問題あるわけでもないんだがな、これが」

そう言っただけで表情を緩ませる。大きく息を吐いて仰向けに寝転がり、星の見え始めた空を眺める。

雲は少しだけ多い。

??????????

アークが戻ってきた頃には、すでに日は沈みきってしまった。途中で立ったまま寝てしまっただけで大変だったとアークは言う。

今日はこの辺りで解散しようということになって、帰るといった時だった。

「あれ？ ラステイ、帰らないのかな？」

屋上を後にしようとしたところで、ラステイが未だ動き出さないことに気付く。ラステイはあれから、少し言葉数が少なくなっていて、ティアマットはそのことが気になっていた。ラステイの方を向いた彼女の耳元で、ステラが囁いた。

「ほらほら、いってきなつて。ラステイクンの様子、心配でしょ？ わたし、部屋でまってるから、ほら！」

「え！?!? いや、ちょっと」

ティアマツトの背中を強く押し出すステラは、そのまま屋上を出て行ってしまった。行きがけにがんばってねと、ウィンクしていく。

「うづうづ……はぁ……行こうかな、やっぱ」

その彼女の行動に頬を若干染め恥ずかしながらも、結局ティアマツトはラストイの方に向かって歩いていった。心配だったのは凶星だったらしい。

????????????????

「お願い！ あの二人の会話、これで録音してちょうだい！」

アークに向かって頭をおろしているステラの手に握られているのは、彼女特性の小型録音魔具。二人の間で交わされる会話を、これで録音してもらおうと言う魂胆のようだ。ソレを見るアークの視線は酷く冷ややかだ。

「そうすることで、私になんのメリットがあるというのです？」

言外にメリットさえあれば受けようという姿勢が垣間見える気がしないでもないアークの言動。そんな精霊に、どうしてもと懇願する。

「……ダメ？」

「駄目です」

一切の考慮も無く切り捨てられたことに肩を落とすが、表情を改めると、腰の辺りにつけられていたポーチを漁り始める。そこから出てきたのは、複数枚の写真だった。

「むむう〜……じゃあ、これと引き換えならどう?」

「こ、これは!?!?!?」

それには全て、ラスティの姿が映っていた。その予想外の光景に、アークの目は釘付けになる。ステラが写真を揺らして見せると、それを追うように眼球が動く。ステラは獲物を吊り上げたと、不敵に笑みを浮かべる。

「ふっふっふ、アークちゃんがラスティくん大好きなのはわかってるのだ! クラスの写真部の子が盗s?? 写したこのラスティくんの写真十枚セット……それに今なら……」

「っ……い、いまなら?」

のどを鳴らす音が、無音の廊下で妙に響く。心が揺れ動くアークに対し、交渉の最後の切り札をステラは切った。

「このラスティくんの居眠り写真もつけちゃうよ! 授業中で、先生が忘れ物をとりに行くのとラスティくんが居眠りするのが重ならなくては撮れないというレア物だよ! さあ、どうする!?!」

「この仕事、よろこんで引き受けさせていただきますでしょう!」

それでアークは落ちた。嬉々とした表情で写真を受け取り、二人は強く握手を交わしたのだった。

第九小節「それは心の剣だから」

「ラスティ？ 起きてるの？」

仰向けになるラスティの顔を、ティアマットが覗き込む。彼の目は見開かれていて、それは彼女と視線を交差させた。ゆっくりと、ラスティが口を開く。

「ティアマット？ 帰ってなかったのか？」

「うん。ラスティ、なんだか元気なかったし、帰ろうとしなかったから気になったの……」

そう言ってティアマットはラスティのそばに腰を降ろす。冷たい夜風が間を通り抜ける中、二人は並んで夜空を見た。ラスティは、仰向けのままでティアマットに言う。

「心配かけちゃったか……はは、らしくないな、これが」

自嘲気味にそういうラスティの声は力なく、何か考え事があるとうことが容易に見て取れる。そんな彼に話しかけるティアマットの声色は優しく静かで、それでいて少し不安げに聞こえる。

「一人の方が、よかった？」

「いいや、そんなことは無い。ありがとな、ティアマット」

礼を言うラスティは、勢いをつけて姿勢を起こす。背筋を伸ばし、

夕日が落ちた方を眺めた。ティアマツトもそれに倣うように見る。雲が、その方角に抜けていく。

しばらく二人の間に会話は無く、微かに遠くからの生徒たちの声や動物の鳴き声だけが聞こえていた。そうしているうちに、もう一度らしくないとつぶやいたラスティが、ティアマツトに向かってこんな質問をした。

「ティアマツトにとって、‘剣’ってなんだ？」

正直、質問の意図があやふやだった。何故このタイミングでそのようなことを言うのだろうか?? 恐らく彼の様子の変化に関係があるのだろう、そうティアマツトは思案する。

「私にとっての……剣……」

そう考えたところで、ティアマツトにはラスティの問いに対して満足な答えを用意できなかった。彼女にとっての剣、それは彼女本人ですら考えたことが無かったのだ。

「なんなんだろう……私は、剣を握るしかあそこ教会に居場所がなかったから、必要だったから……だから……ごめん、なんだかよく分からない」

「いや、いいんだよ。いきなり悪かった」

答えを上手く返せず落胆するティアマツトを、ラスティが励ます。大きく息を吐いたラスティは、アルのことについて言った。

「アルにとってはさ、強い剣士って憧れだったらしい。‘己を極める’って言葉知ってるか? 何年か前騎士の間で流行った言葉らし

いが、あいつは未だそれに憧れるやつなんだとさ……誰の言葉だったっけな……えっと……」

「前の教会騎士総団長。前の戦乱で無くなった人の口癖みたいなもの……私もよく、昔は聞いてた」

記憶が定かでないラステイに、ティアマツトが助け舟を出した。かつて教会の見習い騎士だったティアマツトの言うことに、ラステイは大きく首を上下させた。

「ああ、そうそう、そうだったそうだった。まあ、それは良いとして……要は、アイツも、憧れただけなんだよなって話だ。……それで、俺はさ、剣の道を歩むつてのに、憧れたんだ」

口調が一変して、ラステイは言う。強い剣士に憧れるのではなく、剣を握る者そのものに憧れたと、彼は言う。ティアマツトには、理解しにくい憧れだった。遠くを見て、ラステイが腕を突き出す。その手の甲には、アークとの契約の刻印が刻まれていた。

「夢追いかけて、鍛えて、鍛えて……天才に追いつかなくなつてそれでも諦めないで、鍛え続けて??そんな人間に……憧れた」

憧れた??その一言に込められた感情は、声色、表情、動作???ありとあらゆるものが物語っていた。音楽以外のことで、ここまですみで夢見るような彼の表情を見たことが無かつたティアマツトには、それは非常に新鮮に見えた。

「時と努力と心で鍛え上げた技、それって格好よく無いか?」

同意を求めてくるように顔を向けてくるラスティに、ティアマトは同意するように頷く。内心では、本当に子供っぽい彼の言動に対し生暖かい微笑を送っている。

だがそうしているうちに、ラスティの表情は沈みこんだ。

「でもさ、俺出来なかったんだ。血中魔力が殆ど無くて、強化式で
きないんだ」

その事実には驚いたティアマトは、大きく瞳を開かせる。通常人間は、魔獣や魔物でないが、生まれた時から周囲に魔力が存在するので、血液中には微量に魔力が溶けている。魔術師や戦士はそれを利用することで、筋肉組織や神経組織の結合を強め、高い身体能力を得るのである。

つまりラスティは、才能があるかないか以前の問題として、戦士として話にならなかったのだ。

「だから俺は、戦歌と魔術を併用して使うんだ。俺の剣は技じゃない、剣の形をした魔具を振ってるだけの魔術なんだよ……だからさ、アル坊のこと、羨ましいって思うんだぜ、俺。
あゝあ、俺にも才能ぐらいあればなあ……」

自分には出来ない、努力して辿り着く余地を持つということ。しかも弟子としてとった少年は類まれな才能の持ち主。羨ましがらるのも、無理は無いのだろう。剣の肉刺の出来ない手を見つめて、ゆっくりとその手を握り締めるラスティの表情は、剣士に憧れながらも本当の意味でそうなれない自分を責めているようで

ティアマトは、そんなラスティには納得できないでいた。

「ラスティは、剣士なの？」

紡ごうとしたラスティの言葉を、ティアマツトが遮った。唐突なことで、ラスティは半ば驚いた様子で彼女の顔を見てみると、その左手を握られた。握られた手は、薄い黒皮の生地で覆われていて、それを隔てて硬い感触が伝わってくる。

「これがね、剣士の手。小さいころから握らされて、硬くなっちゃった私の手。」

これは騎士だった私の証。でも、私の手は皆と違いすぎるの。皆は魔術師で、私は今まで騎士だったから」

大きく息を吸う。どう伝えていいか分からない。だが言葉は伝えたいと、そう思った。

「剣士の努力は、体に苦行を課すこと。魔術師の努力は、精神に苦行を課すこと。前騎士総団長は、そう言ってた。ねえ？　ラスティのしたい努力って、それじゃダメなのかな？」

そう問われるラスティは、ティアマツトの言葉に答えを返せない。彼女は更に言う。

「ラスティが剣を振るのって、魔術師としての努力じゃないの？　何時間も同じ魔術を繰り返すのって、努力じゃないの？」

そう言って、彼女はラスティの手を離した。後に残った感触を確かめるように、互いの手は握りもせず開けられもせず、中途半端な形で止まっている。

「ラスティは、私の歌を心の歌って言った。じゃあきくと、ラスティの剣は心の剣。きくとラスティの心が、それを綺麗って思うから、ラスティの剣はきつとあんなに綺麗なんだと思う。私も、歌は綺麗

だって、思うから……」

そこから先に、言葉が続かなくなってしまった。伝えたいと思うことは多くあるのに、それを上手く言うことの出来ない自分が、これほどもどかしいと思ったことは無い。そんな色の混ざりきらない感情を抱えているうちに、ふと、ラスティは笑った。

「……だよな、そうだよな」

ティアマツトが見ている前で、突然立ち上がりだしたラスティ。その表情には、いつものような前向きで楽天的なそれが戻っていて、どこか吹っ切れたことをティアマツトに悟らせた。

「そうだよ、俺は憧れたんだ。こんな風に剣を振れたら綺麗だろうなって、そう考えていつつもいつつも想像してたんだもんな俺は剣士じゃない、ああ、そうだよな。確かにそうだ。強い剣士になりたいって言うアル坊のこと見ててすっかり忘れてたぜ。」

俺は魔術師だ。幻想だけの剣を持つ魔術師だ。ああ、阿呆だ、ホントに阿呆だ。なんで俺はこんな簡単なこと忘れてたんだ？」

ひとしきり言い切ると、大きく息を吸って、ゆっくりと息を吐いた。

「あゝあ、何だか最近、ティアマツトに助けられっぱなしだな。格好悪いや、俺」

また別なことで落ち込み始めたかと思うと、ティアマツトの方を向いて、何時もの表情でラスティは言う。

「ありがとな、ティアマツト」

そう、今日は彼の口から良く聞く言葉に微笑みで返しながら、ティアマツトは小さな声で言う。それはラスティに聞こえることは無く、ただ自身のみみに届くだけで消えていった。

「（大丈夫、私は、今まで貴方に沢山助けられたから）」

そんな彼女の心の声は当然、彼の耳に入ることはなかった。

「はっはー！！ どうしたどうした！ ついて来い、アル坊！」

「ま、待ってくだ
」

ティアマツトと話した一件があつてからというもの、ラスティはこれまで以上にアル少年と共に鍛錬に打ち込むようになった。そんな彼らの光景を、ステラが怪しすぎる笑みを浮かべながら眺めていて、アークは何やらメモ帳ではなく一回り大きなファイルを手にとりしている。何を見ているのだろう。

「たゝのしそうだね」

屋上を元気に走り回るラスティとアルの姿を見て、ステラがアークに呼びかけるように言う。同じページを一心不乱に凝視しているアークは、軽く首を上下させて答える。

そんな日常が、二十日近く過ぎていった。

第十小節「問答秘文・回答は出す」

夏休みが始まって三週間、ようやくティアマットの補習授業が終了した。その日の夕食に顔を見せた彼女は、やや顔色がよろしくないものの希望と開放感で満ち溢れている。それほどに勉強が苦痛で堪らなかったのだろうか……ここ最近表情が本当に豊かになってきている彼女のそんな表情を、皆は少しだけ面白がって笑う。

「本当に……長かった、辛かった……」

何か思っているものがあるのだろう。ただし、ティアマットは補修組の中では真面目な生徒なのだ。運動したくて脱走を試みるポラリスなとに比べると、彼女はまさに優等生と言っても良かっただろう。数日に一度の割合で、ポラリスと先生たちの逃走・追跡劇が数日おきに発生していたことを、アークはしっかりと把握している。

「でだ、今日で補修は終わったわけだが、明日からはティアマットはどうするんだ？」

具の入らない塩おにぎりを手に、ラスティが問う。頬の緩みきつたその表情が、彼のその食ライスに対する愛を物語っている。ラスティの問いを受け思案するティアマットには、特に何かするということは無いようだ。ソレを見たステラが言う。

「ねえ、新しい魔g????」

「もし予定無いならば、鍛錬付き合ってくれないか？」

ステラの発言が拙い死FLAGと感じたラスティが、それを遮るように咄嗟の判断でティアマットを誘う。ラスティの意図を察したティアマットが、冷や汗をかきつつも首を激しく縦に振って同意した。ステラは若干悔しそうに頬を膨らませている。

「むう〜、ラスティに盗られた」

「ははは……わ、わりいな（俺は死亡フラグを回避させてあげただけだ）」

膨れるステラに対し、後頭部を掻きつつ謝るラスティ。人に試用されるなら、まずは出力系ばかりに熱を注いで制御系基盤をおろそかにする癖をどうにかして欲しいと、心の奥底から彼は願った。

咄嗟に出た鍛錬への誘いの件だが、近いうちに彼はティアマットに相手を申し込もうとは思っていた。それはアル少年がもとの時間に戻ってからと考えていたのだが、ちょうど良い（？）タイミングだったのでつい申し込んでしまったのだ。

「明日からは、ティアマットさんも一緒にするんですか？」

どこか嬉しそうな表情で聞いてくるアル。手本にする人間が増えることが嬉しいのだろうか。

そんな彼に、塩おにぎりを放り投げながらラスティは言う。おにぎりを受け取ったアル少年は、まだ食べなくてはならないのかと表情を歪ませた。

「まあ、ティアマットの余裕がある時間に、だ。ティアマットは夏休みの宿題も片付けなくちゃだめだから」

「……………あ……………」

宿題??そのワードを耳にしたティアマットの表情が凍りつく。次第に、補習授業の時期のような苦い表情を見せたかと思うと、膝に顔を埋めだした。禁句を言ってしまったかと、ラスティは冷や汗をかく。

「そうだった……宿題、あるんだ。私……まだ……文字を見なくちゃ駄目なんだ」

「て、ティアマットちゃん? だ、大丈夫?」

急に鬱になりだしたティアマットに心配そうに声をかけるステラ。補習授業で何かあったのだろうか、文字に対し何やら拒絶反応を起こし始めているようだ。どう声をかけてやればいいか、二人は迷ってしまふ。

「もう……やだ……」

「ほ、ほら、俺たちの鍛錬に付き合った後とかでもいいんだぞ? よく考えてみる、流石に宿題は残ってるが、一日中勉強しなきゃならない訳じゃないんだぞ?」

ラスティの言葉をうけて、ティアマットはそのことに気付いたようだ。気を少しだけとり直したようで、顔を上に上げた。ラスティとステラは胸をなでおろす。

わずかに生気の戻った目で、ティアマットはしみじみと語った。一体何が彼女をそこまで追い詰めていたのだろう。

「うん、そうだよね。もう、一日中アレを見なくてもいいんだよね……そっか……うん」

何やら自己完結したようすでうなずき始めたティアマット。ここになって、皆（アル以外）は彼女の精神が相当限界に近いことを感じ取った。

結局その日は、早く休ませてあげようという皆の総意があったこととまだ日が沈みきらないうちに解散することになった。皆がもう解散するからと言いくるめ、ステラが部屋まで彼女を連れて行く。屋上から去っていく二人を見つめ、アル少年がラスティに問う。

「師匠、ティアマットさんは、今日はどうしたのですか？」

「ああ、疲れてるんだよ、きつと」

そついう彼らに、冷たい風の音が耳に入った。

「俺がアル坊に示してやれるものってったら、やっぱり手本とかそういうのもんなんだからな」

「それで、私が相手するの？」

ラスティがティアマットも鍛錬に誘ったその翌日、朝の屋上の上でラスティとティアマットが対峙していた。やや離れたところにある角材の山の上で、アル少年が座ってその光景を見ていた。

アークとの接続を終えたラスティが、剣を左手にして言う。

「まあ本音を言うと、一度手合わせして欲しかったただけなんだけど

な、これが」

「ふふ、そっか」

それを聞くティアマットは苦笑気味で、愛用の十字兵装クロスウェポン??？片ハンドアンドハーフソード手半剣を正眼に構えた。やや腰を低く重心を落とすその構えは、重い獲物を扱うことに慣れている証拠だ。

対するラスティは、細い曲刀 打刀を重力にまかせており、切っ先は地面すれすれである。右足を一步前に踏み出した高い姿勢は、独特のものである。

ルールは以前ポラリスと行った手合わせと同じものである。一応審判とされたアル少年が、二人に合図を送った。

「えっと、じゃあ、はじめ！」

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

その言葉を合図に、動き出したのはラスティ。いつも剣を振り始める時に言う言葉を告げ、駆け出す。

速度をもって接敵、左下から右上への逆袈裟を繰り返す。だがそれは、容易にティアマットに弾かれた。弾かれた勢いを利用し、ラスティの刀は大きく弧を描いてティアマットの右から首筋を狙う。だがその動作も、予想していたかのように弾かれた。

ラスティが振るい、ティアマットが弾く。四方八方、弧を描いて襲い来る剣閃をティアマットは焦ることなくさばいていた。細い刀身に、高速の剣速、規則性の無い動作のつながった連撃。ポラリスがやっとの思いで防ぎきったそれを、ティアマットは完璧に対処できる。

一步、ティアマットは踏み込んだ。

「!? つくそ!」

「はああ!?!」

悪態をつけてラスティが後方に跳躍、直前まで居た場所を剣がなぎ払う。弾くのでは無く受け止めて一步踏み込んだティアマットは、カウンター紛いの一撃を繰り出したのだ。仕留めれなかったことに、ティアマットが眉をひそめる。

墮嚙の時は出来なかったが、これが彼女の戦法。堅い防御でしなぎ、タイミングを見計らって重い一撃を放つ。教会騎士は一般に守りが堅いとされているが、ティアマットはそれに輪をかけて防御への比重が高い。

追撃することなく、低く構えて歩み寄るその小さき剣士に、ラスティは舌打ちをする。

「つ!! 俺の線が見えてるんだもん……」

「私の目は幻想による歪みを見るから、ラスティの剣は分かりやすい」

もともと防御が得意なティアマットだったが、ラスティの剣を完璧に打ち払えたのには理由があったのだ。ラスティの剣は、あらかじめ剣閃を‘幻視’してから振るわれる。それは本来空中に現れず、見えることは無いのだが、ティアマットの右目???水晶眼は違つた。

彼女の二つ名になりつつある‘紅晶眼’^{ルビーアイ}の通り、ルビーの輝きを放つその目は、特異な体質により魔力が水晶体内に結晶したものの。幻想をこの世に顕現する鍵たる魔石と同質の目を持つ彼女は、人に見えない様々なものを見ることが出来るのだ。彼女の前では、とあ

る幻想種の持つ光学迷彩ですら意味を成さない。

こうやって斬ろう　　そう思い立った段階でティアマツトにそれを気付かれることになっていてというのは、武器同士の戦闘では余りにも致命的である。一太刀目の段階でラスティが反撃を受けなかったのは、彼の止まらない連撃によるものであったのだ。

「ラスティの剣は、私と相性が悪い」

ラスティの剣の本質と、ティアマツトの目の情報があれば、誰にでも分かる結論。実力云々ではなく、致命的なまでに相性が悪すぎるのだ。

だがその言葉を受けてラスティは、笑うだけである。

「だったら、もつと疾くつてな、これが！！」

再度の交差。お互いの相性を、先ほどの攻防で悟った両者は、だがしかし、その主戦法を変えることは無かった。

ただ疾く、防がれることを前提に次を次をと振るい続けるラスティ。

レイピアよりも手数が多い斬撃を、力にものを言わせた斬撃で振り払うティアマツト。

ラスティの弧はティアマツトまで届くことは無く、また彼女の暴風はラスティを捕らえるには至らない。

ついては離れ、接しては弾かれ、飛び込んでは飛び退かれる。その戦いはまだ稚拙で、技術も未熟で、だがそれでも人を惹きつけるアルは、その光景から目を離すことが出来なかった。

「まだまだ、まだまだまだまだまだまだだ！！」

初めて見たときも、今まで見てきたときも感じたその美しさ。戦

いに扱われる剣だというのに、師の左腕に握られるその剣は少年の目にはあまりに美しく、それが描く弧は一瞬の瞬きをいつまでも心に残した。

「!!! そこ!」

幾度と無くそれは掻き消される。戦いの場に居ることを否定されたかのようにあっさりと散っていく銀閃たちは、それでもまた違うものと描き続ける。

描いて、壊されて、また描いて、また壊される。二人の戦いは、アルの目にはそう映っていた。それは彼が夢見てきた戦士の戦いとはかけ離れていて、だが言い尽くせない、誘い込まれそうになる何かが存在した。

しかと目に焼き付ける。自分がいつかその背に追いつけるように、いつか彼の相手として自分も立てるように、いつか彼のようになるために。

「オー アイレ ファイネ ジーン……」

知らず、その言葉を呟っていた。

第十一小節「それは災難なこと」

アル少年が見守る中、二人の試合は様相を変えることなく続けられていた。ラスティは幾数もの斬撃を繰り出す、全てをティアマットに弾かれる。ティアマットはチャンスを見て必殺の一撃を繰り出す、それはラスティを捉えない。膠着状態が続いていた……その時だった。

「っ!!」

歯を噛み締め、放たれた逆袈裟の一撃。ラスティの放つそれは、今まで彼が放ってきたものとは一線を画すほどに遅い。動作のキレも無く、素人の放つようなそれ。ティアマットは反応することが出来なかった。

「え……………?」

何が起こったのか理解できていない彼女の首筋に、冷たく金属光沢を放つ刀が添えられる。寸で止められたそれは、ラスティの勝利を表していた。

呆然と、ティアマットが首筋に当てられた刀に見入っていると、その表情を見たラスティが笑って言う。

「^{ライン}線、ばっか見てるからだ。そっちはっかに気向してるからそうなるんだよ」

それが、ラスティの使った手段だった。ティアマットは、その水

晶眼の能力のおかげで、ラスティの攻撃を事前に予測することが出来ていた。だがそれは、ラスティの魔術を利用した攻撃に限るものだった。

同じような展開が長引き、ティアマツトが機械的にラスティの剣を捌き始めたころ、彼は自身の身体能力だけで一撃を打ち込むという手段に出たのだ。線ラインに重なるように剣を用意し続けていたティアマツトは、本来防げるはずの素人丸出しの一撃を見切ることが出来なかったのだ。

速度を上げてくることで押し切ろうとティアマツトに思い込ませたラスティの勝利である。

「ううう~~~~……」

低く唸りながら、剣を降ろすティアマツト。それに合わせて、ラスティも刀カスミギリを仕舞った。負けたことがよほど悔しいのだろうか、ティアマツトは下を向いて呟いた。

「……………もう、いつかい」

「はい？」

うまく聞き取れなかったラスティが、ティアマツトに聞き返す。すると彼女は、勢い良く顔を上げたかと思うと、再び剣を構えだした。何やら闘志が溢れている。

「もう一回、やる」

「て、お、おい待て、やるにしても剣構えさせ」

大きく、彼女は得物を振りかぶった。

ステラが昼ごはんを届けに来たときには、疲れ果てて地に倒れ付すラスティと、何か大きなことをやり遂げた後のような清々しい表情をしたティアマットが、真っ先に視界に入ったと言う。

????????????????

「何故、何故俺は災難なのだ……」

妙に古めかしい言い方で、ラスティがサンドイッチを食べる。栄養が偏らないように、大量の野菜が挟み込まれたそれにかぶりつく、みずみずしい野菜を食む爽快な音が響いた。それにならうように食べるアル少年は、歳相応に輝かしい笑顔を放っている。

「師匠はやっぱり凄いです！」

最早ラスティの剣術魔術の信望者になってしまっているのではと危惧させられてしまうほどに、彼のラスティに向ける視線は熱い。結局あれから、激しい動きをするラスティが体力を尽きさせるまで行われた試合は、ラスティの勝ち越しになっていた。どうもティアマットには、単調な展開になってしまふ癖があるようで、裏をかかれることが多々あったのだ。

「はあ……私のほうが長く剣握ってきたはずなんだけどな……」

ラスティを最後に昏倒させたことで表情が緩んでいたティアマットだったが、総計でいくと負け越していたことに気付き落ち込んだ。

そんな彼女に、ラスティは励ますように声をかける。

「いやでも、素の剣術でいったら一瞬で殺られるって。俺のこれは、剣術つつうよりも、むしろ魔術だからな」

それでも彼女は、剣を握って日の浅いラスティに負けてしまったということをやみやみ続けている。何時もの体育座りが、今日は縮こまってしまっている。

日の昇る太陽の下でコートを着込む彼女は、膝に顎を寄せながら呟いた。

「はあ……ポラリスの言ってたあれ、行ってみようかな……」

「ポラリスちゃんに、何か誘われたの？」

すかさずステラが質問する。膝に顔を寄せたままの状態でステラの方に向いたティアマトは、少し拗ねた様に答えた。彼女の長い黒髪が、その表情を少し隠している。

「うん。何だか、夏休みが終わる少し前に、武術倶楽部系の主催で、強い人たち集めて指導してもらったのがあるんだって。毎年学校の伝手で人集めてきてるみたいで、有名な人とかも来たりするって言ってた。参加は自由で、毎年武術倶楽部系じゃない人達も多く来るみたいで、一緒に行こうってポラリスに誘われてるの」

「ほえ……」

良く分からない声をあげてステラは反応する。彼女が言うには、陣痛が来るまでしばらく剣を握っていなかったことで鈍ってしまった分を取り戻したいのだそうだ。彼女としては、それほど剣に思い入れがあるわけ

でもないので断ろうかと思っていたようだが、ラスティに負け越してしまったことを重く受け止めたらしい。体技の授業の時に、同輩たちを軽々と吹き飛ばしている彼女も、本格的な鍛錬の必要性を感じたようだ。

「それは、師匠よりも強い人が沢山来るんですか？」

「そうだぞ？ どうするアル坊、そいつらに師事してみるか？」

アル少年の言った言葉に反応し、ラスティが悪戯っぽく笑ってみせる。その笑いの意図を察することの無かったアルだったが、彼は頭振ってそれを否定した。

「いえ、僕は師匠の剣がいいです！」

満面の笑みで言っただけのける彼に少し驚き、それを照れの表情に変えながら、ラスティはアル少年の頭を掴み、髪を掌で掻き乱しながら軽く押し付ける。その行動に恨めしげな視線を送って見せたが、ラスティは軽く流した。気分を変えようとしたところで、アル少年がラスティに質問をする。その質問は他の二人 特にステラも惹き付けた。

「そういえば、師匠がいつつもいつてる、オー アイレ フィーネ ジーン、ってなんなんですか？ 呪文ですか？」

思いもよらなかったその質問に、ラスティが驚く。食いついてきたステラが、彼の質問に続けた。

「そういえば、魔術実技の授業の時にたまに使ってるよね？ オォで始まる疑問文型って見たこと無いんだけども、それって何か特別

な用法なの？　っていうか何て意味なの？」

学者志望の彼女としては興味そそる話題だったのだろう。ラスティとステラの間にはティアマツトが座り込んでいるが、彼女はどこか居心地が悪そうだ。勉強関係の話になると思ってたの表情だろう。

「ああ、それな。まあ、定型文系（慣用句みたいな使用法のこと）の一種だ。意味は……」

そこで彼はいったん言葉を区切った。意味を教えてもいいものだろうかと考えていたのだが、どうせ深くは勘繰られないだろうと思いい、彼は意味を教えた。本来、魔術師が知る定型文型の詠唱は人に教えるなどということは無いのだが（それを訊こうとすることももちろん無い）、ラスティはあまり深く考えていなかった。なおかつ、普通は意味が無いのだ。

「世界を感じているか？」だ

その答えを受けて、余り深く考えずに頷くステラ。だがその隣のアル少年は、やや思案顔になっていた。それは、師より受けたアドバースの中で、最も語調を強く言われたものに近かったからである。歳不相応に、気難しく考え込むアル少年は、その意味を反芻して頭の中で唱えた。

「せかいを……感じているか？」

それは、どういう意味なんだろうと、彼は考え込んだ。

第十二小節「夏休み、湖の守護精霊」

夏休みも残り二週間。その日も皆は屋上に集まっていた。日照時間の長いこのごろは、皆が集まる時間帯ではまだ空が紅く色づかず、遠くからは活動に励む運動部の生徒たちの声が聞こえてくる。

思えば今まで夏休みの殆どを、青春というには余りに鈍色過ぎる送り方をしてきたと、アル少年以外は思っていた。最も、ティアマットには特に何かしようということはなく、ラスティもまたその生活サイクルになんら不満があるわけでもなかった。ティアマットはそれほど遊びを知らず、ラスティは結構体育会系の人間だったのである。

だが、ステラは違った。

「ねえ！ 皆でどっか行こうよ！！」

皆が集まっていきなりの発言だった。何ら文脈の無い提案だった故に、他の皆は驚いて回答するのにやや間ができた。だが皆からの回答がある前に、ステラが一気にまくし立てはじめる。何かあったのだろうか？

「この夏休み、わたしたちは学生らしからぬ（？）日々を送って来た！ もう夏休みは二週間しか無いのに、わたしたちは何処にも遊びに行っていないんだよ！？ ダメだよ駄目！ というわけで、みんなでどっか行こう！！」

彼女の所属する???魔工学、錬金etc何れかの倶楽部で何かあったのだろう。妙に使命感に満ち溢れた表情で力説するステラ。

その気迫に気圧されながらも、ティアマツトは恐る恐る彼女に尋ねてみる。爆発物を取り扱うかのような表情だ。

「えっと……どこに、行くの？」

「むっふっふっふ……」

不敵に笑い始めるステラ。どうやら候補地はすでに決まっているようで、何やらどこかに置いてあったらしいバッグの中身を漁り始めた。その中から出てきたのは、水中ゴーグルと思しきものと、マスク状の魔具だった。受け取ったラステイがそのマスクを見てみると、異様なまでに細密に書き込まれた術式があった。

「目的地はズバリ！　ここから北西の山中の湖なのだ！！」

「で、こいつを使って潜ろう……って？」

ラステイの問いに、満面の笑みで彼女は大きく首を縦に振る。

ラステイの手元のマスクは、装備しただけで魔石部分が皮膚に接するようになっていて、また術式は、呼吸しようと思っただけで空気を供給するように異常なまでに起動部に力が注ぎ込まれていた。これを作るのにいくらかかるのだろうということと、バッグから見える人数分のマスクを見てラステイは計算した。式を構築するための良質の魔石や加工費を考えると、どう安く見積もっても合計三百万円以上はかけられている。貴族とはこうも金遣いが荒いものなのだろうか。

手元のマスクを、アーク（少年）が覗き込む。その出来の素晴らしさに、アークは息を深く漏らした。

「なるほど……これなら確かに付けるだけで呼吸が出来るでしょう

ね……流石です、ステラさん」

精霊のアークが保障するその品質は、普段の彼女の作品の危険性から考えると驚きものだった。流石にこの手の魔具は、細心の注意を払って作ったのだろうか??それが普段から出来ていれば、保健室の先生はもう少し楽になるはずだ。

「そしてこのマスクを使って、湖底探索なのだ!」

効果音がつきそうな切れのある動作で拳を上突き出す。彼女だけが異様にテンションが高いのだが、本当に何があったというのだろうか。

それを問う勇氣こそ無かったラスティだが、一つ気になることがあった。それは、その湖のことだった。

「なあ、そういえばさ、その湖って土地守護精霊が居なかったっけ? 確か霊地だぞ?」

それも常にミストが発生している正直危険地帯に指定されそうな場所だった。頭のいい彼女のこと、それを忘れていたということは無いだろう。すると、答えたのはステラではなくアークだった。

「あ、だからステラさんはこの前、私に他の精霊と交渉できるかと、ミストを被えないか訊いたのですね?」

どうやら問題はアークにより解決していたようだった。確かに超の付く高位精霊のアークなら、地霊と交渉してその場所で遊ばせてもらうことは可能だろうか??そうラスティは納得した。だが同時に、何がそこまで彼女を惹き付けるのか気になった。

「なあステラ、どうしてそこまで行きたがるんだ？」

その答えは、案外簡単なものだった。

「何言ってるのラスティくん！？ 普通だったら人が入れないような精霊が守護してる場所で遊べるかもしれないんだよ！？ 楽しいよ、きつとー！」

知的好奇心と快楽的欲求を満たそうというその行動原理に、ラスティは苦笑しつつも納得した。そんな未知の場所と言っても間違っているような場所に行けるとあって、アル少年の目も好奇心に輝いてきていて、どうやら目的地はそこで決定ということになりそうだった。

そして彼らは、何を持っていくのかということを話し合う。

御飯命のラスティは、弁当におにぎりは必須だと声高に主張し、そもそも友人たちと遊びに行くこと自体が初めてのティアマトは、言葉少なく会話に参加し、言いだしっぺのステラはレジャーグッズ一式を持っていくと言い出し、アル少年は練習用の模擬刀を持って行きたいといい、アークは候補にあがったものを一つ残らずメモしていた。

そうしているうちに日は沈み、解散の時刻が近づく。その頃には皆思い思いの候補を上げ終わり、選択することも完了していた。

最後にアークが、持っていく物を書き込みながら言った。

「では後は、アルさんを大きなバッグに詰めて隠しつつ、校外まで持ち運べば、準備は万全ですね！」

その言葉を受けてアル少年が顔を青ざめさせたのは、仕方の無いことだろう。

話し合いがあつてから二日後の早朝、ラスティとアーク、アル少年、ティアマツト、ステラは目的地たる湖に出発することにした。外出届けにステラは「四人」と書いて、事務の人に問い詰められるというハプニングがあつたが、アークを人数に入れてしまったと誤魔化すことでどうにかなつた（普通使い魔はカウントしない）。

この学院に来てから、学院領の外に出たことの無かつた彼らは、緑と青が大部分を占める景色を前に、深呼吸をする。南側にある正門から抜け、領を時計回りに迂回するように歩いていると、山側の方向に一本道が見えてきた。霊地となつている湖へ向かうための道である。幅一メートルほどの土肌の見えた道は、緩やかに坂をつくつて続いていた。

朝日を受ける森の木々たちは風に揺れ、心地の良いざわめきを耳に届けてくる。傾きの浅い日差しは、ラスティたちをななめ後方から照らし、山から吹き降ろす向かい風を緩めてくれているように感じた。

妙に大きなバッグの中からアル少年を出し、アーク（少女）を含めた五人が道を進んでいく。これから待ち受けるだろう霊地の湖が、余程楽しみなのだろう、ステラは荷物を詰め込んだバッグをもつてもしていなかつた。

「ふふっふふっふふ〜、どんなっかな？　きれ〜いつかな？　た〜のしみだな」

山道ということ、薄手ながらも長袖の白っぽい上下をステラは

着込んでいた。スカート類の多い彼女も今回はズボンで、その全身は白を基調としている。やや濃い肌色のステラに、その色は似合っているように思えた。これは彼女の尊敬するアルナ導師という人物の好む色らしい。

「す、ステラ、もう少しゆっくり歩かないとアル君がついてこれないよ」

先行気味のステラの足を遅くさせようとするのはティアマツト。

最早彼女の標準装備になった紅いコートは、実は数着ストックされていて、何らかの要因があつて汚れてしまつても翌日には別の同型コートを着てくる。今回も彼女は二着ほど予備のコートを用意していて、背負うバッグからは紅い布が見えている。コートの下は半そでの灰色のシャツで、ステラが言うには、下には水着を着込んでいるそつだ。前日にティアマツトを町に連れ出して買ってきたらしい。

「し、ししよ〜〜」

一人遅れ気味のアル少年は、シャツの上に若草色のベストを羽織っている。彼の荷物は一番軽いのだが（アークを除き）、足を速めるにはきついようだ。少なくとも疲れていないのは、きつと日々の運動によるものだろう。一ヶ月ほどの鍛錬だったが、彼の体は歳不相応に引き締まりつつあつた。生真面目な正確なのか、鍛錬は休むまいと模擬刀がバッグから突き出ている。

「ほらほら、頑張れよアル坊。案外道のりはあるんだぜ？ まあ、疲れてない分には大丈夫みたいだろうけどな」

総計二十キロ強ほどの荷物を背負っているラスティは、アル少年の歩調に合わせつつ応援している。黒い上下に黒のジャケットとい

う黒尽くめの彼の装備は、今回も発揮されていた。短距離走では遅いらしいラスティだが、体力そのものは自信があるようで、最も多くの荷物を持っている。

「あの、マスター、少しお持ちいたしましょうか？」

戦士としてはそうでもないだろうが、学生としては重装備のラスティを、アークは心配そうに見つめている。世界に課せられた干涉制限のせいで、少女ほどの力しか出せないアークは、メンバーの中で最も荷物が少なかった。すでに制限の七割の力を発揮しているアークだったが、精霊である以上体力は誰よりもある。そのため十割近くまで持とうと自身の主に問いかけたのだった。

日も昇り、時刻は十一時半。出発したのは五時前で、休憩の時間を除くとすでに六時間ほど彼らは歩いている。湖から流れ出す大きな河を望んで歩行しているが、彼らには疲れの色の見えている。帰りは筏いかだでもつくって河を下ろうというラスティの提案には、皆が無言で頷いた。

一行の進行方向に、何やら気配を感じたらしいアーク。ふと視線を遠くにやると、皆に断って駆け出した。

「どうやら、先に湖があるみたいですね。私は先行して精霊と話を
つ　　交渉してきますので、皆さんは少々歩調を緩めて歩いてきてください」

人と違う体構成のアークが、疲れの色など微塵も見せない様子で姿を消していく。その背を見守りながら、ラスティは誰にも聞かえないように呟いた。

「頼むから、その精霊を消すなんて真似はしないでくれよ……お

前だと、なんだか殺つちまいそうで怖いんだ」

妙なところで信用されていないアークだった。

????????????????????

ラストイ達より先行しアークがたどり着いた場合は、神聖な空気を醸し出す場だった。そこは青いミストが漂い、視界を遮るものではないが存在感を持って存在している。アークから対岸にあたる部分は、山の岩肌が見え、周囲は取り囲まれるかのように木々が生い茂っていた。それはミストの発生する場特有の植物なのか、太く大きく、広がるように枝を伸ばしている。隣の木々とつながるように成長したソレは、空中から見ると一つの大きな木に見えることだろう。透明度の高い湖水は、水中の様子を容易に知ることが出来て、空色の水晶をのぞいているようだった。水は洗練されていると容易に想像できて、水中を除くと魚たちが泳いでいるのが見て取れる。

中の様子をしばらく見つめて、アークはその場からゆっくりと離れる。すると湖底から何かが姿を現した。固定化した実体にならないっでいるそれは、この霊地を守護する精霊だった。水を表す深い青色の光が収束し、ゆったりとした衣を羽織った成人した女性の姿をかたどった。アークより人の姿への化身が得意なようで、髪の色は人にあっても不自然ではない銀髪だった。もともと、身長以上に長く伸ばされたそれは、人には理想に過ぎないものであるう。

アークが精霊に、自己紹介をした。

「初めまして、ですね。私の固体名は‘アーク’です。階位は、まあ、察してください」

「はい、承知しました。」

私の固体名は‘ウンディーネ’です。階位は？で、この地の守護

に当たっています。……あの、つかぬ事をお伺いしますが、何故、アーク様のような上位階位の方がこちらにおいでになったのでしょうか？」

容姿的にはその精霊のほうが年長に見えるが、それは所詮化身でしかない。精霊は自身とアークとの階位の差を感じ取り、敬意を表した態度で接する。どこかその声は震えているようにすら聞こえた。対するアークは堂々とした雰囲気、口調こそいつものように丁寧なものだったが、上位の者の威厳を感じさせていた。

「あら？ 一応察してくれると思ったのですが……まだマスターたちは貴女の知覚範囲に入っていないようですね」

マスター。その単語に精霊は動揺の表情をあらわにした。アークほどの上位精霊が人に仕えるなどということは精霊にとって常識外れどころではなかったのだ。無礼承知で訊こうとしたのだが、その時、丁度知覚範囲内に進入してくる四つの気配があった。そのうちの一つが、精霊に更なる動揺と、少しの納得をもたらす。

「も、もしかアナタ様はひとに
!??!?!? っこ、これは
一体!?!」

「貴女にはわかるでしょう？ そっ……っ……っ……」

そうしてしばらく間をおくアーク。精霊が、どうしてアークが人に仕えているか、を理解したところで、本題を切り出す。

「それで、貴女にお願いがあるのですが……ここ二、三日かその間、この地の滞在とこの地域で遊ぶことを了承してもらおうと思うので、すよ」

「あ、遊ぶ……のですか？」

妙齡の女性の姿が、緊張が抜けたかのように姿勢が一瞬ゆるんだ。精霊ですら普通は決してお目にかかれないような高位の精霊が自分のもとを尋ねてきたと思えば、その用件は遊ばせて欲しいというものだったのだ、拍子抜けもするだろう。その一言で、人々の中にある精霊のイメージが瓦解してしまいそうになる空気が、二人の間に流れ始めた。

「いやあ、そうなんですよ。マスターのご友人がこの地に興味を示したようで、マスターも大分乗り気だったので……拍子抜けでしょうが、そういうことなんですよ。あ、マスターたちの前に現れることがあれば、口調は通常通りのものでいいですよ。私が、エックスナンバー、なのは秘密なので、その時は下位階位の者に話す時の口調で結構ですので」

「…了解いたしました。ですがアーク様はつねに丁寧な口調でいらつしやるようですが」

そこは気にしないのです。そう言ってアークは人差し指を唇にあててウインクを送った。送られた精霊は苦笑して、どう反応しているか決めかねているように見受けられる。

そしてマスターたちの距離が近づいてきた頃、報告すると振り返り、道を引き返そうとするアークに、ウンディーネが引き止めるように声をかけた。アークは上半身を捻って振り返る。

「あ、あの……私も、あの御方にご挨拶申し上げたいのですが、よろしいものなのでしょうか？」

緊張故なのか、体のサイズが小さくなったウンディーネが、上目遣いでアークに尋ねる。アークはそんな彼女に微笑むと、満面の笑みで答えた。

「それは恐らく大丈夫でしょう。私の方から、マスターに申し上げておくので、他の方にはれないようなタイミングでお願いしますよ？」

「あ、ありがとうございます！」

表情が一転し、飛び跳ねんばかりの勢いで喜びだしたウンディーネ。そんな彼女に、気がついたようにアークは付け足して言った。その台詞に、ウンディーネの笑顔は凍りついた。

「あ、ですがくれぐれも、無礼の無いようにお願いしますよ？　そうでなければ、塵芥一つ残さず　もとい、お仕置きですよ？」

固まり、青ざめるウンディーネを残し、アークはその場から去っていった。

第十三小節「それは初めての光景で」

話をつけて来た（交渉ではなくなっていた）アークが報告に戻り、一向は湖に、目的地向けて足を速める。守護精霊ウンディーネが気を利かせたらしくて、アークの代わりにミストを被ってくれていた。これで心置きなく楽しむことができる、ステラは疲労を忘れて笑みを浮かべ始めた。

そうしていると、まもなく湖が姿を見せた。眼前に広がる光景が、ステラ以外の疲労を溶かしていく。

「おおおお〜〜、凄い、素晴らしい！！　これが、これが精霊の守護する霊地か！！」

「綺麗……」

アル少年は言葉も出ないようで、ステラは荷物を降ろすための場所をすでに探し始めていた。適当な平坦な場所を見つけたステラが、皆に手を振って叫び、呼ぶ。その声に気付いた皆は、その場所に集合し、荷物を一まとめにして置いた。

振り返ったステラが、光り輝く湖畔を見つめて目を輝かせている。今にも走り出して飛び込みそうなその様子だったが、ソレをこらえたように唇を結ぶと、再び振り返って皆に声をかけた。

「よーし！　まずは諸々の準備しちやあ！　そのあとは目一杯あそぼー！」

「「「「「おおお〜〜！！」「」「」

そう言つて勢い良く拳を突き上げるステラの動作を真似ながら、皆が声を上げる。水際から数メートルほど離れた地点に、皆が運搬してきた諸々のレジャーグッズを準備していく。あらかじめ役割は決められていたため、すぐに行動に移っていた。

大きな半球状のテントが組み立てられ、パラソル付の円形テーブルがその隣に置かれ、夕食の時に使用する予定のバーベキューの機材も設置されている。魔獣の出没する可能性の高いミスト地帯でそれなりの規模のキャンプするという、冒険者ならば卒倒するであろう光景が広がっていたが、ここは精霊の守護する霊地。害をなす魔獣幻獣が現れるようなところではない。それを考慮しての装備であった。

設置を終えた皆は、そろって湖のほうを眺める。頭上から降り注ぐ陽光が湖面に反射し、光り輝く。感極まったステラが、衣服を勢い良く脱ぎ捨てた。

「ふふふふふ……… ついに解禁だよ！ さ、ティアマツトちゃんも脱ごう！ 買ってきた水着を見せるときだよ！」

「え！？ あ、わ、す、すてら！?!？」

一思いに水着姿になったステラが、口元を大きく歪ませる怪しい笑みを浮かべながら、ティアマツトを脱がしにかかる。湖に見入っていたせいで咄嗟のことに反応できなかったティアマツトは、なすがままに脱がされていった。情操教育に悪いと、アル少年を後ろに向かせるラスティ。アークは口元を押さえて笑いながら彼女たちを見ていた。

「よーし！……おつよぐぞ………！！！」

元気良く走り出すステラと、手を引かれながら半ば引きずられる

かのように湖に引きずり込まれていったティアマツトは。おそろいなのか同デザインのビキニ。色はそれぞれ白と赤。お互いのトレードカラーとも言うべきそれは、互いの魅了を引き立てるに十二分なものである。褐色の肌に灰銀色の髪を持つステラに白の布は映えていて、濡れ羽色に輝く髪のアマツトは紅い布がそれを一層際立たせる。普段肌の露出度が皆無な服装であるせいも、その肌の色は白い。血色は無いが、か弱い印象を全く受けることの無い彼女の水着姿は、非常に新鮮に思えた。

潜水していったのだろう、やや距離のあるところで顔を出したステラが、大きく手を振ってくる。その隣にはやや遅れてティアマツトが姿を現した。

「ほらほら早く〜ってふひゃああ!?!?」

直後、彼女から二メートルも離れていない地点に、アークが着弾する。精霊の中でも更に高い身体能力をフルに使って飛び込んだアークは、十数メートルの距離を弧を描いていったのだ。弧を描いている時に確認したアークの水着は、何故かスクール水着と呼ばれる代物。知識の出所が知りたいラスティ。

巨大な水柱を上げるといふ悪戯　初めからそれを狙っていたであろうアークは、そのまま着弾地点に顔を出すと、頬を膨らませるステラから逃げるように泳いでいった。

「こらあ！　やったなあ〜!!」

追いかけてようとするステラだが、身体能力の差からか次第に差が広がられていく。追跡を諦めようとした彼女の隣を、大きく水しぶきを上げながらティアマツトが追い越していった。やられたらやり返す性質たちなのかどうなのかは分からないが、その眼差しは大分本気のようにだ。その証拠に、過ぎ去っていく瞬間に見たティアマツトの

右目は紅く輝いている。水晶眼の恩恵をフルに発動している証拠だ。

「え、はい？ て、ティアマットさん？ は、疾くないですか？
あ、貴女は本当に人間ですか！？」

後方を振り返ったアークが表情を強張らせる。水面をクロールで疾走する彼女は、巨大な音を上げながらアークに迫り来る。アークは全力で逃げようとするが、距離を引き離すことが出来ない。

「……逃がさない」

水面から、ティアマットの姿が消失した。恐らく潜水しているのだろう。息継ぎを行えない代わりにロスの無い推力を得たティアマットが、次第にアークに接近していった。彼女の手が、アークの足を捕らえる。

「え？ ティアマ 」

言葉は最後まで続かなかった。水音をたて、アークが姿を消していったのだ。まるで空気を求めるかのように手を天に突き出す腕が水中に沈んでいく様は、中々にホラーである。あとには同心円の波紋が残るだけだった。

その光景を、師弟は無表情で見っていた。とりあえず見なかったことにすると決めたようで、ラストイがアル少年に声をかける。二人とも競泳用の水着なのは、アル少年の体に刻まれた刻印に配慮してのことだった。

「……時にアル坊。お前、泳げるか？」

「……泳げます。僕の居る っ、いたところでは、たまに川に

行くこともありません」

久しぶりに発動したパラドックスの呪に動揺したが、アル少年はしっかりと答える。彼らの視線の先では、アークが空高く水中から飛び上がる光景が映っていた。射出地点にティアマットの姿が見えるのは何故だろうか。

「はは！ 僥倖僥倖ってな、これが。それじゃアル坊。競泳と行くか！ 目標は対岸！ 負けたときは、フッフッフッフ……」

「え！？ 何ですかそれ！？ あ、待つてください師匠！ 師匠年上なんですからハンデくださいよ〜！」

出遅れたアル少年が、ラストイを追って駆け出す。懇願する彼の声に、手を振るだけでこたえるラストイは、一足先に湖に飛び込む。それを追って、アル少年も水中に入ってしまった。

彼の奮闘もむなしく、結局彼はラストイに追いつくことが出来なかったのはある意味当然のことであるのだろう。

「いや〜ほんとに凄いよね、こ〜！」

三時半を少し回った頃、彼らは所謂三時のおやつタイムなるものをとっていた。半を回っているのは、遊び始める時間がやや遅かったためである。

パラソル付の白い円状のテーブルに、時計回りにステラ・ティアマット・ラスティ・アルと座り、皆の前にはそれぞれ紅茶とクッキーが置かれている。ステラが持ってきたものだった。

席に着き、紅茶を一口飲むと、ステラが湖の感想を言う。水から上がったばかりの彼女はタオルを羽織っていて、まだ水に濡れる髪は鈍く輝いている。日差しから隠れるその笑顔だが、光り輝くと言うに相応しいほどに彼女の笑みは皆に元気を与える。隣に座るティアマットにアルも感化されたように、表情が緩んでいった。

「一度こんなことしてみたかったんだ。霊地で遊べるなんて、普通じゃ考えられないからね。」

「確かにそうだよ。騎士の人達は霊地の精霊を敬ってて、同時に恐れてもいたから、昔の私は、霊地には近づくなつてよく言われた。」

しみじみと語って見せながら、両の手でカップを包み込むようにティアマットは紅茶を飲む。今回ここに居るメンバーの中で、泳ぎが一番上手いのは彼女だった。アークですら水泳では彼女に敵わず、その速度と潜水時間は圧倒的だった。そんな彼女を見ながら、やっぱり海の母神の名前だからかな？ などと思っていたりした。名前の言語に神秘性がこもっている世界である以上、恐らく間違いではないように思われた。

「あ、そういえばさ。ここの精霊に挨拶しといた方がいいよな？アークが一応話したからって言っても、やっぱりそうしたほうがいかなって思うんだが。」

思い出したかのようにラスティはそう提案する。途端、空気が凍りつくような雰囲気がラスティを襲った。アル少年に至っては、顔

が青ざめている。

重々しく、ステラが口を開いた。

「と、土地の精霊に直接会って……ら、ラスティくん、本気？」

その言葉に本気だと、ラスティは真顔で返してみせる。人に会うのと変わらないというような彼の感覚が、余程彼女には信じられないようで、呆れたようにため息をついた。ティアマットも同じような表情をしている。

「土地を守護する精霊って、人が契約できる精霊とは訳が違うんだよ？ 怒らせちゃったらひとたまりも無いんだよ？」

実際はアークはその土地守護精霊よりも相当上位の存在なのだが、事情が分からないステラは言い聞かせるように話す。ラスティは念話でアークをなだめるのに必死で、彼女の話は半分ぐらいしか聞いていなかった。

「大丈夫だって。俺、精霊には好かれる体質だから。まあ、俺だけでも挨拶に行つて来るよ。あ、マスク借りていくな？」

そう言つて紅茶を全て飲み干すと、彼女が用意してきた水中活動用のマスクを借りていく。どれだけ言い聞かそうとも止まる気配が無いと感じたステラが、再び大きくため息をつくと、気を付けてと声をかけた。ティアマットも同じことを言う。そんな中、アル少年だけが違う言葉を発したのだった。

「ししし師匠！ 僕も連れて行つて下さい！」

精霊の存在を聞いて一番動揺していたアル少年が、ラスティに同

行を願った。人々が土地守護精霊に抱く、神に近い者というイメージから、恐れ多くてこの件について挨拶に行きたがらないだろうと踏んでいたラスティは、目を見開いて振り返る。その視線の先では、すでにアル少年は紅茶とクッキーを食べつくし（ラスティは後に取っておくためクッキーは残していた）、マスクを手に走りよって来ていた。

意外な行動に固まっていたラスティだったが、彼もまた精霊には好かれる体質のようだと言いつつ、一言言った。その小さな頭の上に手をのせてから、一言言った。

「いいぞ？ お前がついてこれるならな」

そうして彼らは湖に足を進めていった。その背中を見て、残された女性二人はため息をついた。ステラが視線を向けずにティアマトに言う。

「ホント、男の子って怖いもの知らずなものかな？」

「……少し、違う気がする」

彼女たちのカップに二杯目の紅茶を注ぎながら、アークは忍び笑いをしていた。少し、紅茶を入れ過ぎそうになってしまったのは余談である。

第十四小節「魅入られたもの」

湖の中に、ラスティとアル少年は飛び込む。澄んだ水色の湖は、マスクをつけて潜ってみるとより一層幻想的な光景を彼らに披露した。生命体が澄めないほどに綺麗過ぎでないそこは、青い光が支配する空間だった。湖面より差し込む光は天使の梯子となり、白い砂の湖底に文様を描いている。時折、彼らの目の前を魚の群れが通り過ぎた。

「（少し深いところ、湖の中心を目指す。ついて来い）」

ルーンが空気中に文字を描くのと同じ現象を利用した細長いお手製のペンで、水中に文章を描くラスティ。やや扱いに癖があるため、魔術の素養の無いアル少年はそれが使えず、首肯することで答える。それを見たラスティは、水を書き分けるようにして進んでいった。その後をアル少年が追う。

程なくして湖の中央付近にたどり着いた。そこでラスティは、水深三メートルほどの場所で姿勢を直立にすると。魔石で作ったペンを勢い良く振り払った。彼を中心に、空色の波動が広がる。精霊を呼んでいるのだ。

波動が静まり数秒後、辺りは生命体の気配を失い、無機質な空間が彼らの周囲に出来ていた。視覚的に何か変化があったわけではないが、気配が静まり返っている。アル少年が不安げに周囲を見渡し始めた頃、彼らの足元に巨大な魔方陣が浮かび上がってきた。ラスティのものとは違い、濃い青色に光るそれは、青（水）を示す色重ねて緑色の中規模の魔方陣も浮かび上がり、同時に青い魔方陣を足場にするように空気のドームが出来上がった。それは、精霊の魔術により作られた空域だった。

呼吸が出来ることを察したラスティが、マスクを取る。それに習ってアル少年もとつたが、何がおきたか分からないようで、足元の魔方陣を不安げに見つめている。そんな彼の隣のラスティは至って冷静な様子で、空気のドームを眺めながらその出来を賞賛した。

「空気の精製と、流体操作による結界の応用か。流石精霊、やることの規模が人とは違う」

「お褒めに預かり、光栄であります」

その声と同時に、魔方陣の下から魔石の結晶と思しき物体が現れる。その結晶が光を放つと、ドームの周囲から集まってきた水がヒトガタを形成した。

それは、アークと会った時とは違う、この地の守護精霊の化身した姿だった。

「大丈夫かな、二人とも」

ラスティとアル少年が、精霊の水中結界に入り込んだ頃、精霊に会いに行くといった二人のことを心配するティアマットが、小さくもらした。水晶眼という、世界とつながる要素があるので、この地がどれだけ神聖というに値するべき場所で、その地を護る精霊がどれだけ強大なものなのか察することが出来ていた彼女は、残った三人の中で一番気にしていた。

「大丈夫ですよ。マスターが先ほどおっしゃったように、あの方は精霊に好かれます。湖の守護精霊がマスターを傷つけることは無い筈です」

もしそうなら、自分が跡形も無く消し去ると、心の中で付け足したアークは、ティアマトのカップに五杯目の紅茶を注ぎ込む。笑顔でそう語るアークに、何やらからかおうというのかステラが言う。

「そんなこと言って、実はアークちゃん、マスター盗られない心配なんじゃないの？」

「フフフフフフフフ、すてらさん、おもしろいことをいわれますね。土地守護精霊がそんなことする訳無いじゃないですか」

背後からかけられたその言葉に、（化身の能力で、服装も自由）ミニドレスのスカートを翻して満面の笑みでそう答えるアーク。凶星というわけではないようだが、その笑顔の裏に感じ取れる圧倒的圧力に、ステラは笑って同意しながらも、大量の冷や汗を流した。後ろに居るティアマトは、地雷を踏んだ友人に心の中で合掌する。そんなやり取りの合間に、アークはタイミングを見計らって気付かれないように周囲を見回す。遠くを見つめながら、小さく口を動かした。

「それにしても、何やら森が騒がしいような気がしますね」

呟いたアークの声は、二人の耳には入っていない。

????????????

水中に作られたドーム状の結界の中、ラスティとアル少年は湖の守護精霊を目の前に臨んでいる。水の集合体のような容姿を持つその精霊は、視線を二人のほうに向けていた。濃い青色の顔が微笑み、恭しくラスティに向かってお辞儀する。その精霊の行動に驚いたアル少年は、勢い良くラスティのほうに顔を向けた。彼は困ったように笑いながら、唇に人差し指をあてて口だけで言う。秘密だぞ、と「お初にお目にかかります。私が、この地を守護する精霊であります。固体名はウンディーネ、階位は？であります」

精霊の挨拶に反応し、向き直ったラスティが応える。後ろ手で背中に文字を隠すようにして、アル少年に向けてメッセージを送る。「俺は少し事情があつて、精霊に対してちよつと優位な人間なんだ。このことは秘密だぞ？」非常識極まりない言葉であつたが、純真なアル少年は、師匠ならばありえるのだろうと納得してしまつた。土地守護の精霊すら彼には敬意を払う。そのことが、ある意味一層アル少年をラスティの信望者に変えていることにラスティは気付かない。

「固体名と階位はアークから聞いてるよ（ウンディーネ、そのままだな。ということは、恐らく女性人格固定の精霊だな）。俺はラスティハルト・ジーン。世界から特に階位が与えられたわけじゃ無いんだが……まあ、さしずめ??といったところかな、これが」

階位という言葉と数。アル少年　いや、世界中の人間が知らないであろう単語でやり取りをする両者に、彼は首を傾げる。聞きたくはあつたが、精霊との会話に介入するなどということは余りに恐れ多く、彼は傍観しているしかなくなつていた。

世界種同士で行われる挨拶　互いの固体名と階位の情報交換

を終え、ラスティが精霊に対して礼を言う。精霊に対し砕けた口調で話すということが、アル少年には信じられなかった。

「それにしても、本当にありがとな。霊地は人が容易く足を踏み入れている場所でも無いのに、無理言って遊ばせて貰ってさ」

対する精霊　　ウンディーネの方は恐縮しているといった様子で。だが落ち着いた様子で受け答える。そこはやはり中高位精霊ということなのだろう。階級が上位の精霊ほど確固とした自我（と慮の深さ）を保有するため、それなりに高い位である？階位を保有するウンディーネは、それなりに大人の対応をすることは当然ではあった。これが下位精霊なら動揺で舌を噛むんだらうかと、その光景を想像したラスティは内心で笑ってしまふ。

「貴方様が御気になさることはありません。皆いい波動の存在の者たちです。この地に来る幻想種たちも、日が沈む前には彼らの存在に警戒を解き、訪れると思われまますよ」

「そっか。それは良かったよ。連れて来たこっちとしては、心配してたことが減ったな」

ウンディーネの発言に、言葉通りの安心した表情で微笑むラスティ。その表情を見て彼女もまた安堵したのか、若干姿が緩んだように見えた???と思うと、その視線はアル少年のもとに向かう。目の合った彼は、緊張で硬直した。自らが師と仰ぐ人物のようにいかないこと自分のことを、内心恨む。

「ここにはラスティハルト様だけがいらっしやると思っていました、どうやら小さき客人も一緒のようですね」

「ははははい。ぼ、僕はア　　っ」

緊張してしまったアル少年が、自身のフルネームを言っただけで、起こつた現象にウンディーネが動揺する。小さく阿呆と呟いたラスティが、彼女に説明した。

「今ので……分かった、よな？　一応愛称は‘アル’ってことになつてる。そう、呼んでくれ」

「ノルニラムに魅入られた者ですか……存在が始まつてからというもの、見たことはおるか耳にしたことすら無かつたのですが……そうですか」

何やら納得したらしいウンディーネが、滑るようにしてアル少年に近寄る。驚いた彼女だったが、ラスティに大丈夫だと言われたことでなんとか踏みとどまる。手が届くほどに近寄つた彼女は、その深い青の手を彼の頬に当てる。彼の頬にひんやりとした感覚が伝わる。それは人ならざるものを表す、体温の無い感触で、だがそれは、更なる同様に与えることなく、寧ろ緊張から来る振るえを解いた。

「ノルニラムに魅入られた者よ、この地はどうだ？」

「とても、綺麗だと……思います」

口から発せられたのはありきたりな感想。だが、彼に直接手を触れていた彼女は、それだけで満足する答えが得られたらしく、また滑るような動作で彼から離れていく。見て取りにくい彼女の表情だったが、笑顔であることは容易に見て取れる。

「過去から来たものよ。そなたには私の加護は必要ないだろう。そなたには空がついている故、水の存在たる私に出る幕は無い」

その口調が、本来人と接するときの彼女の口調なのだろう。アル少年の中に存在する精霊のイメージに合致するその雰囲気は、ラスティに話すときのものとは違う。人には発することの出来ない気のような、重圧にも似た存在の重みが、彼には感じる事が出来た。

そんな彼女を見て、やはり精霊は神々しいものなのだ、彼は認識を再び確かなものにする。

第十五小節「墮ちた精霊」

「？ あれ？ なんだか、周りが……」

ふとティアマツトが、周囲の異変を感じ取り、紅茶のカップを置くと周囲を見回す。何かしら気配を感じるといっわけでも無かったのだが、右目が疼く様に何かを訴えかけているかのような感覚に襲われたのだ。

ティアマツトの発言を受けてステラは首を傾げるが、アークは感心したように反応した。

「流石はティアマツトさん。世界の異変に敏感ですね」

どうやらアークの方はすでに察知していたという風で、立ち上がって水際に立ち、湖の対岸の岸壁の上の方を見ていた。隣に駆け寄ったティアマツトがその方向を見てみると、感じる違和感が一層強くなる。未だ視認出来ないが、その崖の上に何かが現れようとしているのが感じられた。少し遅れてステラも二人の隣に移動してきた。恐る恐るといった風にステラが二人に問う。

「何か……来るの？」

「まもなくこの湖の守護精霊の近く範囲内に、敵性存在が侵入します」

見向くことなく告げられたアークのその突然の宣告に、ステラが

強い動揺を示す。慌てて敵性存在というものが何なのか問いだそうとするが、それを問うよりも早く、アークが二人に向かって叫んだ。

「!?!?!? 領域内で急加速!?!? 土地守護精霊の知覚範囲ギリギリで加速…来ます!?!?」

直後、崖の上から爆発音と共に何かが飛び出し、同時に岩の破片と、風により吹き飛んできた大量の砂塵が彼女たちに降り注いだ。咄嗟に身をかばおうとする二人だったが、その破片たちが自分たちに降り注ぐ前に何かに遮られる音がした。ゆっくりと目を開けてみると、アークが手をかざしている。周囲を見てみると、自分たちを中心に、立方体状の結界が出来上がっている。今のタイミング、詠唱できたとしても一節しか唱えられないだろう時間に、三人を包んで尚薄くなりすぎないほどの結界をつくり上げたのだ。

「あ、有難う、アーク」

「いえ、この場に私が残っているのですから、お二人が怪我をしようものなら、マスターに示しがつきません。それを考えると、労力がこれだけである分には問題はありませんので……」

アークによるものだと思われたそれは、翳された手が下りることで消滅した。大したことでもないという風に佇むアークは、遠く向こうの方を見ている。その先には、緑色の異形が存在した。

巨軀に大きな翼。爬虫類を思わせる目に強靱な顎。屈強な足には鍵爪が生え、長い首と尻尾を持つ。

「ワイ……バーン?」

ティアマツトが呟く。だがその言葉をステラが否定した。

「多分違うと思う。ワイバーン種に四つ翼なんて無いし、鱗が緑の種類なんてないはずだよ」

一見すると、幻想種の一つワイバーンにも見える姿だったが、その体には四枚の翼が生えていた。羽ばたくことをせず、翼を広げ咆哮するその異形。見ると真下の水面が、何か透明なものが沈んだかのように窪んでいる。魔術的に風を送ることにより浮かんでいると、ステラは予想した。

その姿を見るアークは、いつに無く険しい表情をしている。だがその顔に焦りは無い。それは他二人も同様だった。

ここは、精霊が守護する土地であったからである。

「A r d i b e (打ち払いなさい)」

響き渡るのは女性の声。直後、異形の真下から水柱が立ち上った。急加速した異形はそれをかわすが、続けてその進路を阻むように水柱が立ち上る。上に向かう急流に、異形は大きく上方に打ち上げられた。

「凄い水柱……短命令文であそこまで規模のある魔術が出来るだなんて……」

その光景を感無量といった風に見ているステラ。非常に不謹慎と言わざるを得ないが、土地守護精霊の魔術行使を、(自分に向けられる恐れのない状況下で)目の当たりにすることが出来ることはそうそうあるものではない。精霊の実力を信じて疑わないのも奏をこらうして、二人はその戦闘に見入っていた。だが、アークの表情は依然険しいままである。

「An delfenne mio sukulla (水面に私は歌うでしょう) , umt quorieck weil aim ein radiorern (そして静まりゆく波は集い) , fe n n s u k o l u r i o e s s a (彼方に向かい降り注ぐ)」

水面に、水で構成された女性の姿が現れた。二人は、それが精霊だと直感で理解する。先ほどよりも長い詠唱で語られた魔術は、その足元に半径にして三メートルもの魔方陣を作り出す。周囲から集い来る水たちが、数十本もの水の杭を作り出した。それが一斉に、空中に打ち上げられた異形に打ち込まれる。

「……………」

言語と聞き取れないその咆哮は、どうやら詠唱であるようで、口元を中心に緑色の魔方陣を作り出した。圧縮された空気が、光を歪ませ球体状の陰りになる。水の杭がその身に届く直前、それは爆ぜた。圧縮から開放された空気は、一方向にのみ噴出し、迫り来る障害の尽くを吹き飛ばした。だがそれに飽き足らず、その奔流は精霊にも襲い掛かる。精霊が、空気の奔流を受け、姿勢が揺らいだ。圧倒的と思われた精霊の魔術行使に、相殺どころか貫通をしたのけた異形の幻想に、見ている二人は啞然とする。あれは何かと問うことも出来ないほどの衝撃を受けていた。

アークは、かけられていない問いに答える。

「堕ちた精霊……七年前の戦乱を境に見ることは殆どなくなりましたが……あの墮^{オチガミ}の共振現象に当てられて暴走でも起こしましたか……不憫なものです」

「あ、アークちゃん？ 堕ちた精霊なの？ アレ」

聞き返すステラに、首肯して答えるアーク。再び視線を送った先では、堕ちた精霊と呼ばれた者が精霊との壮絶な魔術戦を繰り広げていた。人が及びびもつかない領域にいる精霊と互角に戦うその存在は、なるほど同じ精霊であるからこそだった。

堕ちた精霊、世界の秩序を守る存在とされる世界種と呼ばれる存在の中でも、魔術的な能力に特に優れた精霊種によく起こるものがある、‘堕ちる’という現象より生まれる存在。強い感情の波や環境の急激な変化により起こるもので、感受性の異様に強い精霊だからこそ起こるものである。戦場や、災害で人が死ぬ場など、強い感情がたくさん生まれる場合に、その受ける感情に自身の自我が押しつぶされることで、ただただ暴走して回るようになってしまうのだ。ここ最近そのような場所が近辺で発生したということは、アークの知る限りでは、墮嚙があると遺跡付近の施設内で活動を再開したとき、それだけだった。それなりに多数の人間が死に、また墮嚙自身も単体で幾千人もの感情を束ねたほどの空腹の感情波を発する。恐らく近くに居合わせた精霊がそれを受けてしまったのだろうと、アークは推測した。この分では、他にも数体の固体が墮ちてしまっているかも知れない。

その問題はおいておくことにして、世界の歪みの極みとも言える存在を直視しているティアマツトに、気遣う声をかけた。

「ティアマツトさんは、アレを見て大丈夫ですか？」

「うん。見てて気持ち悪いけど、大丈夫」

心配の声をかけられるティアマツトは、そうは言いながらも顔色はあまり良くは無い。眼が集めてくる情報の多さに気分が悪くなってしまうているのだろう。アークはそう思うと振り返った。

「アレに関しては心配は要らないでしょう。いくら同じ精霊とはいえ、ウンディーネは土地守護精霊。必要とあらば世界から援護を受けることが出来るのですから。まもなく堕ちた精霊は駆逐されるでしょう。じきにマスターもお戻りになられるでしょうし、ここはテールブルの方にもどって……」

そこでアークの言葉は途切れた。振り返った時に眼に入った光景に絶句してしまっていたからである。

第十六小節「チリアクタヒトツノコサズ」

「あ、そ、そんな……………」

アークがその場に、膝をついて崩れ落ちる。何事かと思つて二人が振り返つてみると、皆で設置したキャンプ設備は、大きな石片の被害こそ受けてはいないものの、砂塵が降りかかつており、テーブルの上のお菓子たちは駄目になつてしまつていた。勿論、ラストイが手を付けずに残しておいたクッキーや、アークが彼のために用意していた紅茶などは全滅である。

その光景を見て、額を押さえるステラ。どうやら彼女は、アークがこれほどまでに絶望している原因がよく分かつているようで、元氣付けようとその肩に手を置こうとした直前、アークが激しい怒気と共に拳を地面に打ち付ける。

「赦すまじ、あの糞畜生が！！！！」

怒号と共に、周囲の魔力が励起した。オーラのように光る、励起した魔力を身に纏い、幽鬼のようにゆっくりと立ち上がる。

「オノレエ……………こうなれば、この私が直々に獅子奮迅にして四肢粉塵にし、その体躯を埋め尽くすほどに串刺しに、腐れきつたその核は抉り潰し、塵芥一つ残すことなく消し去り、果ては転生する余地すら与えずその存在概念の根本から否定しつくす！！！！」

普段のアークからは想像もつかない罵詈雑言。今にも暴発しそうなできかけの幻想を身に纏うアークに、二人は総身を震わせ、怯える。焦点の合わないその視線が振り返ろうとしたとき、彼女たちに

とって待ち望んだ存在が帰ってきた。

アークのストッパー

「みんな、無事か!？」

水辺より、ラスティとアル少年の姿が現れる。途端、怒気が消え??押し込められた。帰ってきた主を、アークは心穏やかに笑顔を返す。先ほどまでのアークを目の当たりにした二人は、とても心穏やかな状況ではなかったが。

「お帰りなさいませ、マスター。現状、お二人に怪我はございません」

「そうか、よか ? どうした、二人とも？」

顔色の悪いティマツトとステラに、ラスティが問いかける。それと同時に、ラスティの視界の外で振り返ったアークは、口元だけ微笑んで唇に人差し指を当てる。声を出さずに、唇だけで言っていた。
「イツテハイケマセンヨ？」

「ううん、何でもない。多分あの堕ちた精霊の歪みを見てあてられただけ……だから、大丈夫」

「わたしはちょっとびっくりしちゃってただけだからだいじょうぶだよ」

二人のその言葉を受けて、そうか、と安心したようにラスティは微笑んだ。とりあえず、最悪の事態は免れたのだ。

アークがラスティからやや離れ、その足元に魔方陣を展開する。自らの主のほうに振り返り、満面の笑顔を送りながらアークはこれからの行動の旨について告げた。

「それではマスター、浜辺かテーブルのほうで休憩なさって下さい。アレは私がブチこ　討伐してきますので、どうか心配なさ
らぬよう……」

「そっか。アークが行くなら大丈夫だろうな……分かった。行つて
きてくれ、頼んだぞ？」

「了解致しました」

深々とお辞儀したアークは、移動補助術式を発動させると、墮ちた精霊のもとに向かつていった。今までアークが単独で戦闘するこ
となど無かつたため、他の三人にはアークの精霊としての力量が分
からないでいたが、どうやらラスティは絶対の信頼を置いているよ
うである。振り返つたラスティは、戦闘に見入るアル少年と、固ま
つたままの少女二人に向かつて言った。

「折角のアークの仕事場なんだ。人間の俺たちは端で鑑賞でもして
ようぜ？」

??????????????

「!!!!!!!!!!!!!!」

墮ちた精霊の咆哮が、術式を作成する。撃ち放たれた圧縮空弾は、
岩すらも打ち砕くほどの密度を持っていた。それをウンディーネは、
水の壁で防御する。この場はウンディーネの得意とする水の存在す
るエリア。精霊として、青（水）の幻想の生成に長けている身とし
ては、これ以上無いまでに有利な場である筈だった。だが、両者の
戦闘力は拮抗している。その事実にも、彼女は内心で悪態をつく。

「（つく、コイツ…元はそれなりの階位の精霊だったのだろう……）
仕方ない、世界の加護を使うしか無……」

「いいえ、それには及びませんよ？」

平行線となつている両者の戦い、その状況を変えようと、ウンデイーネが負担覚悟で世界から援護を受けようとしたその時、彼女の耳にアークの声が届いた。途端、堕ちた精霊が何らかの衝撃に横殴りにされる。

驚くウンデイーネに背を向けるようにして、アークは水面に降り立つ。水面と足裏の間には小さな魔方陣が見受けられ、それを足場に行っていると理解できた。降り立ったその場所で、アークはウンデイーネに振り向く。笑顔の裏に感じられる黒い感情に、ウンデイーネはたじろぐ。

「獲物を横取りするようですいませんが、アレは私がブチコロシてもいいですか？」

「は、はい！……で、ですが、アナタ様のお手を煩わせるほどの者でも無いと思われませんが……」

「気にしなくて良いのです。そう、少しだけアレを粉々にしてやりたい気分なだけなんですよ……ええ、ですから貴女は、‘核’に結界でも張って聖域を保護してください。最後に本気の魔術を打ち込むので」

アークの言葉をかき消すように、その地点に圧縮空弾が打ち込まれた。体勢を立て直した堕ちた精霊が、やや長めの詠唱をもって打ち込んだのである。巨大な水柱が立つが、その内側から発せられる

怒気に、巻き込まれる気配を感じたウンディーネは水中に潜っている。直後、アークを中心に衝撃波が放たれた。

水しぶきが降り注ぐ中、アークは眼を閉じて佇んでいる。風が吹いているわけでもないのに靡く髪とミニドレスは、一切水に濡れていなかった。

アークが、自身の周辺に防音結界を張る。

自らの主に、自らの声が聞こえないようにする細工が済むと、アークはその表情を怒気に歪める。理性など無いはずの精霊がたじろぐ……いや、根本の本能で感じ取っているのだろう。「コロサレル」と。

「私が話している最中でしょうか？ もう少し待とうとは思わないのですか？ ああ、もう言葉を発せられないぐらいに堕ちているのでしたね…… ああ……雑魚の分際でええ！！」

翼を持つ敵以上の速度で、アークは突貫する。反応の遅れた堕ちた精霊は、その首根っこをアークに捕らえられた。大きく振りかぶり、水面に勢い良く叩き付ける。速度をもって打ち付けられたその衝撃は、液体にと言えど人体であれば容易く破壊してみせるほどの衝撃を持っている。質量差をもともせずに行われるそれは、精霊に対しアークが発揮できる力の一片でしかない。

「私がどれほど今日という日を待ち望んだか貴様に分かるか！？ 夏休み開始直前からステラさんと共に計画し、あたかも短期間で作った計画と見せかける為にした苦勞が！！ その為に費やした費

用と時と（資金を援助してもらったために）ステラさんに提供した情報が！！」

振り返りざまに、もう一度打ち付ける。

「この午後のティータイムの為に、マスターの眼を盗んではクッキーの作り方と紅茶の淹れ方を学び……一月以上に渡って準備してきたのだぞ！？」

そして更にもう一度　それを数十回に渡って繰り返した。

「この日に間に合わせるために全精力を傾けた！！」

夜は成人男性に化身しわざわざその度に髪を染め、全速力でマイスターの元に通い詰めた！！

深夜を過ぎては、睡眠時間をとる必要も無い故に夜通し紅茶を淹れ続けた！！

記録も併用して、ありとあらゆる紅茶を調べに調べつくした！！

その地に赴いて度重なる交渉を重ね、

ようやく手にすることの出来た茶葉を受け取った時の喜びが分かるか！？

マイスターにもステラさんにも免許皆伝を得るほどに、技術を磨き上げた時の達成感が分かるか！？

それをマスターに褒めてもらうために、

わざわざステラさんには最初の一杯をあえて失敗していれてもらったのだぞ！？

そこまで計画は完璧だった！

だというのに、だというのに貴様が…キサマがああ！！」

万感の思いを注ぎ込んだ叫びと共に、アークは堕ちた精霊を水平に投擲する。水切りのように水面を跳ねて飛んでいくその巨軀から、

なればこそ我は時を破却する) . Txime xin kao (時は僅かに) , senta Xei nqent p is x a x i x u (砕けた空は硝子に還り) a i o n s i n v o x a m i r e n x a o (その歌は鏡にうつる) 」

アークが天に腕を突き出す。同時に、空間が粉々に砕け散った。硝子の破砕音を出しながら割れる空は、歪な修復音と共に直っていく。だが割れた空は次元を一つ落とし存在し、硝子の破片となってアークの周囲に浮かぶ。その手をゆつくりと前にかざし、開く掌を握った。

瞬間、硝子の欠片たちが殺到する。最早動くこともままならない墮ちた精霊に、体を埋め尽くさんほどの欠片が飛来し、その全てが体を貫く。全ての破片が射出し終わる頃には、敵は白い剣山になっていた。

ゆつくりと、足場を作り出しながら歩むアーク。最早視覚すら確保できない敵の眼前に立ち、心臓部に腕を突きたてた。肉を抉る低音と空の硝子が擦れ合う高音が、アークの耳に入る。何かを掴んだようすのアークは、勢い良く腕を引いた。

少女姿のその右腕が握るのは、大きな結晶体。核晶スピリットコアと呼ばれる。

精霊の中枢たる、言わば心臓と脳を兼ねた部位である。核晶を取り除かれた巨体の動作が、止まった。

「還りなさい、世界の礎に」

その言葉と共に、空の硝子が爆ぜた。化身体が光の粒子と消え、手の中の結晶も砕け散る。

白色閃光が収まり、ラステイたちの視界にアークの姿が再び見えたときには、墮ちた精霊はその存在の痕跡すら残さずに消えていた。

第十七小節「考えられたこと」

「うう〜、折角、折角マスターに褒めてもらいたくてあそこまで準備したのに……」

「ほらほら、アークちゃん。また作れば良いじゃない」

アークの憂さ晴らしが済み、ラスティたちは機材やテントにかかった粉塵を払った。砂まみれになり最早食べることの出来なくなってしまうクツキーを見てラスティは落ち込み、それを見たアークが更に落ち込んだ。ステラがそんなアークを励まし、ラスティはその二人を見て首を傾げている。

「それにしても、堕ちた精霊か……堕嚙の影響を受けた固体なんだろうな、あれは」

ラスティが呟いた。その視線の先には、岸壁にある、大きく岩の抉れた部分??? 堕ちた精霊が打ち付けられた場所があった。基本、世界種にしか発揮できないその攻撃力は、大規模な魔術行使にもかかわらず周囲に全く戦闘の余波を出していない。打ち付けられた衝撃だけであの規模の跡が出来るなら、もし物質界への干渉制限が無ければどうなっていたらうと想像すると、ラスティは青ざめた。恐らくあの岸壁は崩壊し、自分たちは湖もろとも埋まっていただろうと思っただからである。

そうして遠くを見ているラスティの背後で、アル少年がアークに駆け寄った。

「凄いですアークさん!! あの精霊をいとも簡単に倒すなんて!」

アークもまたその精霊だということが完全に抜け落ちているアル少年が、そう賞賛の言葉をかける。そんな彼の言葉に、光のともらない目で礼を告げるアーク。本当、一体何があったのだらうとラスティは思うが、追求しないことにし??とりあえず労いの言葉をかけてやることにした。アークの機嫌が直った。

「にしても、みんな和んでるな……」

皆の様子は、戦闘直後とは思えない、なんとも緊張感の無い様子だが、精霊に護られているという感覚がそれをもたらすのだろう。この世界の人々の精霊へのそういった信頼感はかなり高い。人と契約するような精霊とは一線を画す個体能力を誇る守護位級（ヴィーナンバー以上の精霊を総括して人はそう呼ぶ。階位のことには人に知られていない）の精霊は、魔術師の導師クラスが行使する魔術をいとも簡単に退ける。秘文魔術ロストスベルや、それ相当の魔具でなくては抵抗すら出来ないと言われるその能力は、人々から恐れ敬われると同時に、守護を受けられるならば絶対の安心感をもたらすのだ。

そんな信頼に適ったかどうかは分からないが、堕ちた精霊が襲撃してきたのにも関わらず、ラスティたちが受けた被害は紅茶とラスティのクッキー（とアークの楽しみ）だけだった。

「だって、ここは精霊の領域。ここに居ることの許された者は、その場に留まるうちは精霊に守護されるって、教会に居たときから私もよく聞いてた。精霊の地に居るならば武装していることは無意味だって、前の騎士団長はいつもみんなに言ってた」

隣に来たティアマットが、そのように教えてくれた。なるほどそれならば、彼女がいつも肌身離さず持っている筈の十字の武器が姿を表さないのは納得だと思った。それと同時に、経験があるらしい

前騎士団長はいい人だったんだろうなとも思った。精霊の地に留まることの許される者は、総じて人の良い者や気性の優しいものが殆どだからである。

「へえ、てことはその人は精霊の地に留まったことがあるんだろうな。流石教会騎士の頂点の人、貴重な体験したんだな」

「うん。でもこれで、私たちも同じような経験をしたことになる」

そう言う彼女は、どこか嬉しそうに目を細めて微笑む。かなり信仰心の強い人が集まる教会騎士団にとって、神に近い地とも言える霊地は、もはや聖地に近いものなのだ。彼女の信仰心がどれほどのものかは分からないが、霊地に憧れに近いものを持つてるようであるのは、窺い知る事が出来た。

「はは、きっとゲルトとハイスが聞いたら羨ましがらるだろうな」

「来年は、皆でここに来ればいいと思う」

羽織ったタオルを両の手で押さえ、水際につま先をつけるティアマットは、そのように提案する。精霊への迷惑は考えないのかと突っ込みたかったラスティだが、自身もまたこの場所に来たいという感情は強かったのであえて言わなかった。

そうして並ぶ二人の姿を、いつまでも三人は見ていた。若干一名が口を押さえられた状態で……

????????

時刻は五時を回ろうとしている。襲撃の後とは思えない生命力のある湖の風景が、完全に戻ってきていた。この地は心を安らがせる

効果が魔術的にあるのではないかと、思わずラスティは疑ってしま
う。それほどに、静かに風は吹いていた。

今日はもう泳ぐのは止めようという意見で一致したので、ラステ
イたちは水着から着替えた。女性を先に、男女交代でテントを使用
した。

着替えが終わり、アル少年が剣舞をせがんで来たので剣を手にし
たラスティは、重要なことに気付いた。

「ん？ テントが一つしかない？」

そう、一つしか無い。それはつまり、寝るときは皆一緒のテント
で寝るということ。その事実には、彼は一瞬平静を失いそうになった。
ステラとアークが練り上げた計画の一端がこれであることに、ラス
ティは気付かない。ティアマツトもまた、気付かない。アル少年は
論外である。

「……おい、寝るときはどうするつもりなんだ？」

焦りを隠そうと抑えた声で、ラスティがステラに問う。テントが
一つしかないということを、今気付いたかのような完璧な演技をも
って、彼女は驚いた反応をした。

「あ！ そういえば急いで準備したせいですっかり忘れてた！ ……
ま、でも大丈夫だよ！ ラスティくんだったら変なことをしな
いって信じてるから！ ね、ティアマツトちゃん」

「え？ う、うん。そうだね」

ラスティの反応を待つことなく、ティアマツトに同意を呼びかけ
る。ラスティは、自分は外で寝ると言い出そうと思ったが、持って

きているのが（荷物削減のためという理由で）薄いタオルケットのみだという事実には思い当たり、口をつぐんだ。この事態を防ぐために事前に講じられた策であることに、やはりラスティは気付かない。

「……そ、そうか……うん、分かった。了解した」

ティアマットとラスティの寝るスペースが隣り合わせに、既に用意されているという事態に気付くことも無く、ラスティは後頭部を掻きながら去っていった。どうかしたのかと、ラスティが居なくなつた後にティアマットがステラに聞いた。そんな彼女に、彼女は満面の笑みで返す。

「全然気にすることないよ。ラスティくんが、女の子と同じ空間で寝るのが恥ずかしいって思っただけだから」

「？」

騎士での生活がそうさせるのか、ティアマットにはその感覚が分からない。初心っぱいティアマットの反応を見て楽しもうと思った彼女だったが、上手くはいかなかった。ティアマットは首を傾げるだけである。

なかなかどうして、どうやらラスティの方がこの手の話題には面白い反応がかえってくると、この時ステラは思ったのだった。

第十八小節「夕食の前に」

キャンプ地からやや離れた場所、そこにアル少年とラスティの二人が、それぞれ得物を手に対峙している。落ち着いた表情で力なく佇むラスティ。それを真似ようとするが、どこか力みが抜けないアル少年。両者の睨み合いは、少年の振込みにより終わりを告げた。

「は！」

アル少年の腕が、横殴りに振るわれる。小さな腕の中の得物が、その腕に引きずられるように飛来する。その起動の先は、ラスティの左腕。

そんなアル少年の動きをなぞるように、ラスティの剣が同じく横に滑る。空気を掻き乱すことの無いその剣閃が、アル少年の剣を誘導するように振るわれる。下から柔らかい力を加えられたアル少年の剣は、目標を見失って空を切った。それを前提としていてか、少々勢いをロスしながらも続けて振るわれる。それもまた、銀のレールにのせられて走り去った。

幾度となく繰り返される。振るい、逸らされ、振るい、逸らされ……右利きのアル少年と左利きのラスティのその行為は、鏡写しに動作を繰り返しているようにすら見えた。だが、鏡写しというにはまだ遠い。

アル少年が剣を振り始めて幾分かたち、彼の動きが止まった。肩を大きく上下させて倒れこんだ彼の肺は、深く大きく、それでいて早い周期で酸素を求めている。無茶に近似したその行動に、大きく息を吐きながら、彼は仰向けに倒れこんだ少年の顔を覗き込むようにしてしゃがんだ。

「……やっぱり、まだ……師匠の……ように……はいきませんね」

「阿呆。そんな容易く追いつかれたら俺の立場が無いだろうが」

悔しそうな言葉を言う少年に、ラスティはそう笑って言い返すと、その顔に濡れタオルを被せる。水音をたてて落ちたそれは、少年の顔から火照りを除いていく。だが呼吸が苦しくてすぐに取り払った。

あいも変わらず舞のような剣舞を披露する自らの師を見て、傍で休憩していたアル少年はため息をつく。技を盗む、そういうと易しく感じられるかもしれないが、とても難しいと、少年は感じている。

「やっぱり、師匠は凄いなあ」

だが、ここに来た時に感じた直感の間違っていなかったと、アル少年は思う。自身はそう強くないと言つてのける彼だったが、少年の目に映る彼はいつも強く、格好良い。憧れた英雄の姿が目の前にあるようで、そんな彼に師事している自分が誇らしいと、その幼い心は感じていた。

そしてそれと同時に、その剣は届くかどうか怪しいほどに高みにあるとも感じていた。

湿気のある空気が、いつの間にか師の剣に露をつけていたのか、剣が振るわれる度に雫のような物が飛翔する。それが本当に雫であるかは分からない。だが少年はそうのように感じていた。

剣の振るわれる跡にはその粒子が舞っている。それは木漏れ日を受けて、屈折率の違いから幾つかの色に分かれて目に飛び込んでくる。その外側が赤で、内側が紫だ。

虹だ。

そのように、アル少年には見えた。弧を描く軌道と、その七色は、

人によって作られた虹。それを見たアル少年は、腕をその虹に伸ばす。唇は、小さく動いた。

「そういえば、虹ってどんなに追いかけても近づけなかったっけ」

そうして遠くまで行ってしまい、よく母に叱られたと、彼は思い返した。それと同時に、しばらく合っていない両親と兄妹と友人の顔が、脳裏に横切った。師の言葉を信じるなら、自分はじきにもとの場所に帰れるのだ。それも、今自分が体験していることがほんの一瞬であつたかのように、もとの時間そのままに帰れるのだという。今は少し寂しくても、少し長いお泊りだと思えばいいと、少し熱くなる目頭を押さえた。

「世界を感じているか……」

数少ない師のアドバイスの中で、最も印象に残る言葉を口にする。世界を感じるとはどういうことなのだろう、自分は何を感じればいいのか。そんな、灰汁あくの残る苦々しい感情が、抜け切らない。

勿論、自分も一ヶ月かそこらで強くなれるとは思っていない。だが、それとは違う何かが自分には足りないのだと、右手に握る模擬刀を握り締めて考えた。

結局、分からないままに彼はまた剣を振り始めた。

??????????

一方その頃、ティアマットとステラは二人つきりでキャンプ地に居た。しばらくして突然、剣の鍛錬をすと言い出したティアマットの、その剣の鍛錬が気になったステラは、見せてもらうことにしたのだった。

何時ものように紅いコートを羽織ったティアマットは、懐から十

字兵装を取り出す。小柄な彼女の持つ片手半剣は、両手剣のように大きく見える。

友人が見守る中、ティアマットは一步踏み込む。

「やあ！」

剣自身の重量を生かした、限りなく縦に近い袈裟斬り。空気をなぎ払う音が唸り、引き戻される横の一闪が、仮想の敵を吹き飛ばす。力強い演武が、繰り返される。

ステラに武の知識など皆無だが、道具の知識として、片手半剣が難しい武器であるということは知っていた。片手持ちと両手持ち、どちらでも使えるようになってるのが片手半剣。だが、その片手で持つには重く両手で持つには軽いというほどの中途の重量と、長い刀身ゆえの不自然な重心は、使用に際し専用の訓練が必要とされる。

目の前の友人が、才が無いといいながらも、片手で軽々と操ってみせるのは、望まないながらも積み重ねてきた鍛錬のおかげであるだろう。そう、少しだけ悲しいような気分で、彼女はその様子を見ていた。

「少し、変える」

予告するように言った彼女の言葉の通り、次の太刀からは剣は両の手で握られた。大きく、右に両手の剣は加速距離をとる。上半身の捻り戻しが、剣を引き戻した。

「つつー！！」

右から左へ、やや斜め下方へ向かう斬撃が放たれる。今までよりも運動エネルギーの込められたそれは、剣を止めるのに相当の膂力

が要ると思われた。

だから、彼女は止めようとはしなかった。

振りぬき動作に入る直前のタイミングで、彼女は右手を柄の端まで滑らせる。丁度左に振りぬかれた剣を左利きの両手剣の持ち方になったような格好だ。

左手を軸にするかのように、右手が柄を前方に押し込む。軌道を小規模の円運動に変えられた剣は、渦巻くように頭上に振り上げられた。そのまま、重力の力にも助けられて剣が振り下ろされる。すると今度は、棒術のような動作で剣を翻させる。そんな曲芸のような剣が、披露された。

だがそれは数度繰り返された時、彼女の手から剣が滑る。

「あ」

どのような確率でそれが起こるのかは分からない。だがそれは、見事にパラソルをへし折った。ステラの眼前を風を切って飛び去った剣が、地面に落下する音が聞こえた。その直後、固まったステラに折れたパラソルが襲い掛かる。

「うひゅ!?!?!」

奇妙な声を上げて、ステラの姿がパラソルの向こうに隠れた。一歩間違えれば大惨事だったことに顔を青ざめつつ、ティアマットはステラに駆け寄る。

「だ、大丈夫!?!」

「コ、コワカッタ〜」

取り払ったパラソルの向こうでは。ステラが目を回して椅子ごと

倒れていた。

その後、夕食時になってラステイとアークとアル少年が戻ってきた時には、一生懸命謝罪するティアマットと、気にしなくていいとなだめるステラの姿が見られたという。パラソルは、少し短くなっていたらしい。

第十九小節「蛇を」

「な、なるほどな。確かにそれはぞつとするな」

午後七時を回った頃、バーベキューの準備をしながら、三人はテイアマットとステラに起こった事故(?)のことを聞いた。炭を燃やすための道具と金網を設置し終えたラスティは、引きつった笑いで反応する。ステラは特に気にしているという風でもないが、テイアマットは申し訳なさそうな様子で、視線を下ろし気味で食器類を用意していた。

そんな彼女の様子を見てみると、ふと、ラスティは彼女に違和感を感じる。やや急ぎ足で彼女に近寄ると、皮手袋をはめる彼女の手をとった。瞬間、彼女の体が強張る。それを見たラスティが大きくため息をついた。

「阿呆。そういうことな…… テイアマット、ちょっとこつち来てくれ。すまんステラ、ちょっと借りていく(アーク、これから頼むものを持ってきてくれ)」

「え?」

驚くステラとアル少年を置いて、ラスティは近くにある小さな川のほうへと、テイアマットを引つ張っていった。何かあるのか気になったが、アーク(少年)が何か箱を抱えてその後についていたので、あまり触れない方がいいと思い、追求しないことにした。アル少年にも声をかけ、準備に戻る。

ただ、アークにカメラを持たせることだけは忘れなかった。

????????????????

湖から流れる幾つかの川のうち、小規模な小さな流れのもの付近まで、ラスティはティアマットを連れて行った。それについていく彼女の表情は険しく、ラスティのほうは呆れたという風な表情だった。

「まったく、気付かれないとも思ってたのか？」

「うん……ごめん」

振り返り、腰に手を当ててラスティはティアマットに問う。気まぐすそうに目を伏せる彼女は、小さく謝罪の言葉を告げた。

追いついてきたアークから箱を受け取ると、地面に座り込んでその箱を開けた。アークに促されその前に腰を落ち着けたティアマットは、促されるままに両の手の皮手袋をとられた。すると、その皮手袋と彼女の手からは紅い液体が滴り落ちた。

「……心配、かけちゃうかなって思ったから……一応、後で自分でやることは…思ってた」

弁明する彼女のその手は、何をどうすればこうなってしまうのか、手の皮が大きく破け出血していた。それを今まで隠していた皮手袋は血に濡れてしまっていて、現在アークが川で洗っている??それがいいかは分からない。

未だ出血する彼女の手は、とても自身で処置できるもの様には思えない。阿呆、ただ一言だけ言って、ラスティはロールになった包帯と、何やら半透明のシートを取り出した。

「ほら、手出してくれ。まずは右手からだ」

そう促されるままに、彼女は自身の手を差し出す。ラスティは中位ほどのボウルを胡坐の間に乗せ、その上でティアマットの手を水ですすいだ。傷に沁みる冷たい痛みにも、彼女は顔をしかめる。すすいだ直後、手際よく彼はその手に半透明のシートをかぶせた。それは皮膚に張り付くように傷を覆い、出血を抑える。左腕にも同じ処置を行った。傷をふさいだそのシートを、彼女は興味深そうに見つめる。

「保健室の先生から教えてもらって買ったんだ。なんでも、培養の研究で生み出された、応急処置用の止血シートなんだとよ。ほら、その上から巻くのもあるから」

「あ……」

そう言ってラスティは、再びティアマットの手をとる。取り出したテープ状の包帯を、巻きつける。手の動きが邪魔にならないように包帯の巻き方を考えるのも忘れなかった。巻かれている間、ティアマットはずっと目を伏せていた。

「努力してきたんだな」

彼女の手袋の内側の、その手を見てラスティはそう呟く。度重なる皮膚への負荷で、その手の皮膚は厚みと硬さを持っていて、負荷から皮膚が破れてしまうのを防いでいる。だが今回はそれ以上の負荷が一度にかかったようで、こうなってから破れる事の無かった皮膚はことごとく裂けている。そんな自分の手を見て語るラスティの一言は、特に強い剣士になろうと思ったわけでもなかったティアマットには、気恥ずかしい。

「そんなことない。こうするしか、無かっただけ」

「そっか……でもそれもまた、努力だと思っぞ、俺は」

努力の証。これをそう語るラスティの語調は、どこか羨望すらうかがわせて、更にティアマットを複雑な気分させる。羨望を受けるほどに、彼女はこの手を誇りには思っていない。

普通の成人男性以上の膂力を発揮してしまう彼女は、剣を振り回すように扱うことが多い。そのため裂けまいとする皮膚は硬化し、戦闘要員でないシスターは勿論のこと、少数の女性騎士ですら自分ほどに手は硬くない。そう、ティアマットは思い返していた。

そうしているうちに、ラスティは処置を終え道具を仕舞った。それにタイミングを合わせたように、アークからティアマットに、皮手袋が渡される。ご丁寧なことに、乾燥までしてもらったようだ。ティアマットは二人に礼を言う。

「二人とも、ありがとう」

「どういたしまして、だな、これが」

そう言って照れを隠すように笑うと、彼は勢い良く立ち上がる。

座ったままで彼を見上げるティアマットに、少しだけあきれた様子で言った。悪戯っぽい、そしてからかうようなその口調は、少しだけ、ティアマットを元氣付けた。

「全く、どんな剣の振り方すればそんな裂け方するんだか……馬鹿力に任せて振りまくったのか？ 無茶はいかんぞ、ティアマットは皮膚の結合よりも筋肉が圧倒的なんだからな」

そう言って手を差し伸べるラスティ。その目は気にするなと物語

ついで、ついつい彼女はそんな彼の配慮に甘えてしまいそうになる。だが少しだけ恥ずかしくて、結局、少しだけ頬を膨らませて言った。

「馬鹿力って、いうな」

差し出された手を握るときに、照れ隠しに力を入れてしまう。少しだけ嫌な音がして、悶絶するラスティ。

それを見て、逆効果だったかと彼女は思い至るのだった。

一連のシーンが、後に一年四組女子生徒の間で流通することを、二人は知らない。

「あ、二人ともお帰り！」

処置を終えたラスティたちがキャンプの場に帰ると、殆ど準備を終わらせてしまっていたステラとアル少年が出迎えた。ラスティは左手を上げてそれに答え、ティアマットは頬を人差し指で掻きつつ気まずそうにはにかみ、アーク（少年）はステラに向かって親指を突き立てて笑顔を送る。ステラは視線だけで労った。アークに。

「すまん、ティアマットがさっきのやつで手から血が出てたみたいでさ。ちょっと洗って止血してきた」

隠すことなく、あったことをラスティは正直に、聞かれる前に白状した。その言葉を受けてステラは驚く。全くその様子を見せていなかっただけに、そのことに気付いていなかったのだ。慌てて駆け寄ってティアマットに大丈夫なのか尋ねる。

「し、止血って…ティアマットちゃん、大丈夫なの!？」

「う、うん。もう応急処置はしちゃったから…それに、活性化かければ明日には傷は塞がってるから、だから、大丈夫」

そう話す彼女の右目　水晶眼は普段の状態よりも強く発光している。彼女の手にかかれた包帯には、皮膚に触れていると細胞分裂を活性化させる式が発動するようになっていて治療用の魔具の一つなのだが、どうやら水晶眼も似たような働きを行使しているようだ。恐らく無意識下で発動するものだろう。この分では、傷が塞がるどころか傷跡まで無くなるのではとラスティは考える。とりあえず、明日も湖で遊ぶ分には何ら問題は無かった。

とりあえず大事は無かったということで、ステラは肩をなでおろした。とりあえず腹が減ったと言うラスティは、バーベキューを始めようと言い。皆もそれに賛同する。

????????????

「それじゃあ、はじめますか!」

ラスティがそう告げると同時に、炭に魔法を用いて火をつける。着火剤を使用せずに炭が燃え上がるその光景を見て、ラスティはどこか感慨深そうな表情を見せる。

赤熱する炭の上に金網を置き、油を染み込ませた布で拭いて油を塗りつける。そうしてしばらくして温度の高くなった金網に、皆は

一斉に串を置いて焼き始めた。水分が一気に飛んでいく音と、気化した水分に乗ってくる香りが、食欲をかきたてる。待ちきれない様子のアル少年がラスティに問う。

「これって、魔術で早く焼き上げたり出来ないんですか？」

「炭化していいならやってやるぞ？」

「……やっぱやめます」

魔術で早く焼きあがらないか質問した彼にラスティは答える。彼の答えに、しばらくの沈黙の後にアル少年は提案を取り下げた。事実、今この場に食材を焼き上げる程度に火力を調整できる術者がいないので、アル少年の提案は無理な話だったのだ。操作が繊細なハイスが居たならば可能だったであろう。

しばらく経ち、表面が焼きあがったあたりで、肉のみを刺した串をラスティは手に取った。

「ふむ、そろそろ頃合だな。んじゃ、一足先に……いただきます」

未だ肉の赤い部分が見えているが、何やら一言二言呟いた後、ラスティはそれにかぶりついた。皆は戦慄する。

「ちよちよちよちよつとラスティくん?!?!?」

「ん? どうした?」

中まで火が通っていないどころか、炙っただけというレベルの肉にかぶりつきながら、驚くステラに向けて不思議そうな視線を送るラスティ。ステラは彼の行動をとがめようとしたが、その前にア―

クが歩み出て説明をした。

「ステラさん、大丈夫です。今回持ってきた肉類は、私が殺菌処理を施し、寄生虫の有無をあらかじめ確かめておりますので」

事情を説明されたステラは、一応は納得する。だがやはりラスティの行動は納得できないという表情でいる。これが好みなんだと語る彼に、それ以上は何も言わないことにした。

次第にみなの方も焼きあがっていき、串を手にとっていく。各々思うように食べ始めた。

「うん！ おいしい！」

やや幼げな調子で言うステラは、やはり貴族出ということなのか、このようなバーベキューでも食べ方には気品が感じられる。ティアマットは無言で頷きつつ食べていて、その様子がいかにも微笑ましい。アル少年はラスティを真似てか豪快にかぶりつき、食べている。だが流石に超レアの焼き加減では食べないようだ。ラスティは二串目に突入しており、アークは次に彼が食べる分を焼いている。

「バーベキューか。俺、この食い方は初めてなんだよな、これが」

「そうなんですか？ 随分と手馴れた御様子でいらっしやいました
が……」

串にかぶりつきながら語るラスティに、超レアの焼き加減で焼き上げた肉を手渡ししながらアークが問う。隣に居たアル少年も、口いっぱいに肉と野菜を頬張りながら頷いて同意していた。本当なんだぜ、そういうラスティは苦笑気味で、だが内心では、そう思われても仕方が無いと思っていた。

ラスティがティアマツトの方を見てみると、串焼きの棒を興味深そうに見つめながら何やら考え込んだ様子で見つめていた。何か問題でもあったのか気になり、訊いてみようとしたのだが、その直前に放たれた彼女の一言がその動きを止めた。

「蛇もこれで焼いたら……おいしいかな？」

瞬間、場の空気が凍った。驚愕的なその発言を耳にして、その場の皆の視線が集まる。周囲の空気の変化に気付いたティアマツトは、あわてて周囲を見回した。

「え？ え？」

何故視線を向けられたのかわかっていない様子の彼女に、ラスティが代表して声をかける。言い聞かせるように、妙に優しい声だった。笑顔がつっているのがありありと分かってしまうのは仕方の無いことだろう。

「蛇は、焼いちゃいかんぞ？」

「う……………うん」

何故か肩を落としたティアマツト。彼女の過去に何があったかは容易に想像できる??? 野営訓練とか実戦なら、食糧確保はそういうことなのだろう。何故その考えに至ったのかは考えない・聞かないことにしたのだった。話題を変えて、会話を再開させる。

そうして、金網を囲みつつ食事をする五人は、火が沈むまで談笑しつつバーベキューを楽しんだ。また食べ過ぎたアル少年が、テントの中で一足先に行動不能になってしまったのは……仕方が無いのかどうかは、わからない。

第二十小節「水の戯れに音楽で」

バーベキューが終わる頃には日が完全に沈みきってしまった。そこで皆は焚き火を起こすことにして 薪を集めていなかったことに気付いた。あわてて薪を探しに行こうとする皆だったが、あることを思い出したアーク（少年）が引き止めた。皆がアークに振り返ると、湖の方を指差した。

「見てください。洗幻虫です」

その指差す方角から、一つ、また一つと、青い小さな光が立ち上っていった。その光の増加速度は、次第に早くなっていき、次第に辺り一体を照らし出した。日の光ほどに明るくは無いが、夜の光源としては十分すぎるその光。その光に照らされた湖は、それ自体が発光しているかのように見える。

自分たちの周囲を飛び交う、光る虫、洗幻虫を見て、それを捕らえようとするようにティアマットは手を伸ばした。数多い虫たちと広い空間は、その距離感を失わせて、手はただ空を握った。だが、それを残念とは思わない。

「綺麗……」

そう言って周囲を見渡す。満ちた青い光は、まるで自身を水の中に居るかのよう錯覚させ、息苦しさを感じさせないながらも全身を包まれる感覚を覚えた。その光に魅入っている中、ラスティが彼女に声をかける。

「なあ、洗幻虫の性質って知ってるか？」

彼の言葉を後ろに聞きながら、首を横に振った。すると、その問いにはステラが答えた。流石に学者を志望するだけあって、知識量は多いようだ。ラスティに関しては、皆は「そういうものだ」という認識で一致しているのが、少しだけ笑えるところではあった。

「体に幻子を溜め込んでいるから、その場の魔力に応じて光の色を変えるんでしょ？」

とか言ってラスティくん、ティアマットちゃんの歌、聴きたくなつたんでしょ？」

「はは、流石に分かるか」

ステラの指摘に、潔く自身の胸のうちを明かすラスティ。アークはそんな彼に微笑を送って、荷物から持ってきたのか、座るためのシートを敷き始めていた。状況を察して持ってきたのだろう。そしてその後ろからは、腹痛の治まったらしいアル少年が付いてきていた。目を輝かせ洗幻虫たちを見ている彼に、ラスティは子供は寝る時間だぞと言うが、この光景を見て寝ていられないと反論した。元々寝かせようとは思ってなかったラスティは、そんな彼の頭を掻き乱して笑っている。

そんなじゃれ合いに似た行為をしている二人に、ティアマットは不思議そうな視線を送っていた。

「どうして、洗幻虫と歌が関係あるの？」

「ふふふ、ティアマットちゃん。歌ってみれば分かるよ。ほら、しばらく聴いてなかったし、ラスティくんが聴きたがってるんだから、歌ってあげなくちゃ」

ティアマツトの疑問には答えず、ステラは彼女に歌うようにと促す。それを受けて彼女は、傾げた首を戻した。そうしてため息をつくと、軽く頷いた。気付くと、既にラステイとアル少年はシートに腰を降ろしていて、聴く体勢を整えている。そこまで聴きたいのだと主張する彼の表情は、ティアマツトの頬を少しだけ赤らめさせた。だがそれは、青い光の中のおかげで、悟られることは無い。

コートの中から、三色の魔石を取り出すティアマツト。湖を背に、ラステイたちの方に振り向いた。そして、手から色の三原色が零れ落ちる。

「Fie s i - f x i l i e u s (さあ、歌いましょう)

X i e h a i t e n f o w s a , h a l t y i e n (空に響くように、心を込めて)」

光が弾けた。粒子となった光は、ティアマツトがいつも行つようにラステイたちを取り囲もうとして 更に広がった。

「え？」

彼女に、内側から広げられていく感覚が襲う。少しの違和感ではあったが、すぐに動揺を抑える。周囲を見ると、彼女の領域が湖全体にまで広がっていた。三色の光の領域は、洗幻虫たちもその内側に取り込んでいて、すぐにその結果が現れてきた。

「綺麗」

先ほどと同じで、それでいて少しだけ感情を強く込めて、その言葉は呟かれた。周囲を飛び回る洗幻虫たちが、赤・青・黄の三色に色づいて、先ほどよりもさらに幻想的な光景を描いていた。彼女を中心に波打つように発光する洗幻虫は、心なしか彼女の周囲に集ま

つてきているかのように思えた。

それがラステイの見たかったものなのだと、この時にティアマツトは察した。振り返って見ると、やはり彼は満足げな表情をしている。自然と、彼女自身の表情も緩んだ。

足場を整え、大きく息を吸う。

目を半眼に、焦点は少し遠くの景色を見据える。

そうして、彼女は歌い始めた。

それは、初めて聴く歌だった。今までの彼女とは違う、戯れる水を歌った曲。澄んだ音はそのままに、明るいようで神秘的な静けさを持った、そんな歌だった。

詠語ではなく、人の言葉で歌われるその歌が、広がっていく。それは彼女の歌としては珍しいものだった。恐らく教会出典の曲では無いのだろう。

「（水の傍らで）

（水面を見つめ）

（水の精たちの踊りを見てる、戯れを見てる）

（手招きを見てる、私はたじろぐ）」

洗幻虫たちが、その歌に合わせてるように光りだす。一見不規則に見えるそれは、歌詞に合わせているようであることが分かる。波紋が広がるように、音と心と光が、強弱をつけてくる。鈴唱の波にゆられ、湖が彼女の場となる。本来人の心に侵されていい場では無いこの霊地も、彼女の歌で狂うことは無い。ラステイは、初めからこのことを予期していた。水晶を体内に持つことの出来る人間が、世界を犯すことなどありえはしないからだ。

「（私は君たちと違うんだ）」

（水の上では踊れないんだ）」

（でも彼らは笑いかける）」

（大丈夫、大丈夫）」

人よりも世界に近く、でも世界種よりは遠い。そんな彼女の歌う歌は、その双方に語りかける。

大丈夫、大丈夫と歌うその声は、まるで自分たちに呼びかけているようで。涼しくも暖かい安堵に包まれる。洗幻虫もそれを感じるのか、明らかに彼女の周囲には多くの洗幻虫が飛び交っていて、ティアマツトは三色の光に照らされる。それでも彼女は、自身の色をしつかりと保っていた。

「（無理だよ言う声も）」

（大丈夫の声に掻き消され）」

（遊ぼう遊ぼうと言う）」

（その声に誘われて）」

（水面に降り立つの????）」

（????共に舞踏して）」

「（あ、見て!!!）」

その時だった。彼女の後方から、人では無いものたちが姿を現し始めたのだ。それは幻想種と呼ばれるものたちで、世界種とは違う、どちらかというところと魔獣に近い存在である。だが、この水域に留まることを許される幻想種たちは皆、彼女の歌に誘われて出てきたように、近くに腰を降ろして聞き入るものまで出始めていた。詠語は世界の言葉とも言われる。だがそうではないこの言葉が、彼らには歌が分かるのだろうか。そればかりは、ラスティですら分からない

い。

「（波紋は一つ、また一つ）

（もう一つ、もっと一つ）」

「すごい……幻想種たちが聞きに来てるだなんて……」

蛇の姿のものや蛙の姿、半魚の姿　果ては一角獣すら姿を現す。

彼女を境界にするように、こちら側には人、向こう側は幻想種。そんな観客席の割り振りが、自然と出来ていた。だが鈴唱の領域は、彼らすべてに平等に、だが音を少しも衰えさせることも無くいきわたらせる。音の真の媒体が魔石になっている鈴唱は、いついかなる時でも場所でも、最高の音を届けるのだ。

「（いつしか水面は波打って）

（還る彼らは歌いだす）」

「あ、精霊さんだ」

いつの間にか鬼火のような存在たちが姿を現す。下位の精霊であろう。水の上を跳ね回るように飛んでいる精霊は、紛れも無くテイアマットの歌に惹き付けられたものたちだった。

架橋に入る歌は、さらに強い光を降り注がせる。湖の色も、光の色に色づき、その上の洗幻虫たちは、水の戯れを表現するかのよう

に飛び交っている。

「（水面の上で水と戯れ）

（波紋の下で精が戯れ）

（舞踏の中で私は歌う）」

彼女の前で人は聴き入り、彼女の後ろで幻が聴き入り、その間で彼女が歌う。恐らく彼女は後方の光景に気付いていないだろう、瞳を半開きに歌う彼女は、完全に歌の世界に入り込んでいる。

彼女のことを驚かせて歌が途切れないように、という配慮なのかどうかは分からない。だが彼女の視界に入らないような位置に、幻想種たちは集まっていた。

「（回れ 廻れ 波打て 集え）

（瞬れ 巡れ 渦巻け 弾け）

（戯れは続く。私を乗せて）」

光が渦巻いて、そして波に飲み込まれて、そうして彼女は一度歌を切った。本来はもつと長い歌。だが彼女は、一曲目はこうして一番だけで終わらせることが多い。彼女の感覚では、この規模の歌ですらウォーミングアップに過ぎないのだ。まず一曲を終え、彼女が息をつく。ラストイたちは拍手を送った。

それに合わせ、後方の幻想種たちは大歓声を彼女に送る。

「%# & \$ *!!!!!!!!!!!!!!」

「!?!?!?」

人の言葉ではない数々の声に驚き、ティアマツトは勢い良く振り向く。彼女の目の前に広がった光景は、どのようにみえたのだろう。彼女は腰を抜かす暇すらなかった。

「みんなティアマツトの歌を聴いてたんだ。ちゃんとしたオーディエンスだぞ？」
この精霊も混じってるんだから、一応挨拶でもし

「おけばいい」

ラストイの声が、背中から聞こえてきた。その言葉に従って、スカートのをそを持ち上げるかのようにコートをつまむと、恭しくお辞儀をする。フリーズした思考の中で、言われるがままに行った行動であつたが、その動作に世界種たちの歓声が強まると、次第に状況を冷静に考えることが出来るようになってきた。

頭を上げて、見渡してみる。彼女の目に映る、見渡す限りの幻想種たちは、皆総じて彼女のことを見ている。敵意など微塵も無いその眼差しを見て、ようやく彼女は彼らに向かって笑顔を送ることができた。

すると、彼女の目の前を割るように、幻想種たちが道を作り出した。その奥から何かが来るということが容易に察せられて、その方に目を向けてみる。するとそこから歩んでくるのは、水で構成されたヒトガタ??? ウンディーネだった。その後ろには、鬼火のような精霊たちが付き従っている。

その事態には、目の前の幻想種に微笑むことの出来たティアマトでも、笑顔が緊張で凍った。精霊が、それも高位の精霊が、自分からわざわざ自分のもとにその足で訪れるのだ。一国の王と謁見する以上の緊張が、今の彼女には襲い掛かっていた。

ウンディーネが、ティアマトの眼前まで歩む。彼女の姿は、ティアマトの身長に合わせられていて、それがどうしようもなく彼女には恐れ多かつた。せめて大きければ、少しでも緊張が和らいだことだろう。

「そう固まらなくてもいいのだぞ、ルビーの眼を抱く子よ」

「は、はははい」

尻すぼみになる彼女の声。はい、の一言すら満足に言えないほど

に緊張する彼女に、ウンディーネは可愛げのあるものを見たかのように微笑む。そして彼女は、その姿を変えた。それはアークと出会った時のような、衣を纏った女性の姿で、だが身長はティアマットに合わせられていた。銀に輝くその髪は、立っていながらすでに地に付いてしまっている。だがそれを、彼女は一向に気にしない。

精霊ではない、人の姿をとったのは、彼女なりに気をつかったのだろう。ティアマットの肩の力が、ほんの僅かに抜ける。

「そなたの歌。聞き届けさせてもらった。素晴らしいものよ、世界の言葉でも無しに、あれほどの鈴唱を歌ってみせるとはな……」

彼女は本心から彼女のことを賞賛していた。だからこそわざわざ自分から、相手の視線にあわせて訪れたのだろう。嘯むことこそ無かったが、彼女はその賞賛の言葉に対し、カタコトで礼を返す。見ているラスティたちが不安になるほどだった。

だがそんな彼女に、ウンディーネは気を悪くすることも無く、彼女にてを伸ばす。その腕は彼女の頬を撫でた。やはりティアマットは強張る。

そうして彼女の水晶眼の上を優しく包むように手を滑らせて、その上を覆った。だがこの行動には、ティアマットは緊張の反応を見せない。

「赤の水晶を抱いているが……成る程、そなたは青の気が強いようだ……丁度いいものだ……いい歌を聞かせてくれた礼だ、受け取ってくれ」

そう言って彼女は、三言ほど言葉を呟いた。するとティアマットを包む青い光が湧き上がる。

それは精霊の加護と祝福だった。

第二十一小節「それは叶わない」

かのように軽く浮かび上がる。それは光が収まっていくと同時に、再び囚われた。

光を浴びた自身の体の調子を確かめるかのように、彼女は自身の手を見つめ、しきりに手を握ったり開いたりしている。そんな行動がとれるあたり、どうやら彼女の緊張は抜けたのだろうと思われた。再びウンディーネの方に向かったその視線は、いつもの落ち着いた色を取り戻している。

そんな彼女の変わりようには、ウンディーネの方も少し驚くことがあったのだろう。口元を押さえて少しだけ、笑った。

「フッフ、……。繰り返しになるが、それは私からの礼だ。祝福と加護を授けた。これからの生で、役に立つこともあるう」

ウンディーネのその言葉に、ティアマットは深々と礼をする。続けて感謝の意を述べようと口を開こうとしたが、その行動は彼女に手で静止される。不思議そうな視線を送られるよりも早く、彼女はティアマットに告げた。

「礼など良い。こちらは好きでそなたに与えたのだ……。だが、礼とするならば、もう一曲、聞かせてもらえるとありがたい」

「もう一曲……ですか？」

ティアマットに聞き返されると、ウンディーネは後方の幻想種たちを指し示すように振り向いた。それにつられてティアマットが視線をやると、そこに居た幻想種たちは、総じて彼女のほうに目を向

けている。種こそ違えど、皆期待するような感情を込めているというところが容易に感じられた。

そんな幻想種たちを示して、彼女は口を開く。

「この者たちは、わざわざそなたの歌を聞こうと集まってきたのだ。人ではあらずとも、皆聴衆なのだぞ？ 期待に応えるのが歌い手であるう……もつとも、私に言われずとも歌は続いていたであろうかな」

そうして顔だけ振り向かせて笑みを送ると、彼女は湖に向かって歩いていった。その時に一瞬、彼女の視線はティアマツト越しにラストイと交差した。その時に、少しだけ念話でのやり取りが行われる。精霊同士のパスとラストイとのパス、その両方のあるアークを介して、行われた。

「（大変なもんだな、神聖視される身の上というもの）」

「（それは仕方の無いことで御座います。貴方様が我々の交流の場に赴いたならば、同じような状況になると思われますが……）」

「（……気が持たんな。まあとりあえず、お勤め（？）ご苦労様。アイツにわざわざ加護なんて与えてくれて、有難な）」

「（いえ、これは本心からのものですので、お気になさらずに……それではラストイハルト様、失礼しました。良い日の終わりを送れるよう、願っております）」

念話が途切れると同時に、彼女の姿が湖に消えていった。それと同時に、ティアマツトばかりでなくステラやアル少年、幻想種たちまでもが体の力を抜いた。その光景を人事のように見ていたラスト

イは、思わず噴出しそうになってしまふ。精霊の発する重圧に似た雰囲気は、あらゆる生物を緊張させるのだということが、よく分かるワンシーンだった。

その後、言いようも無い静けさが漂う。幻想種たちは一心にティアマツトのことを見つめ、ラスティたちは戸惑う彼女の背中に視線を投げかける。洗幻虫たちまでもが、彼女のことを急かすように飛び回る。

その奇妙な場の空気の中で、自身がとるべき行動を見失いかけているティアマツト。その姿が不憫に思えて、ラスティは助け舟を出した。

「ほらほらティアマツト。俺ら他オーディエンス多数が、お前の歌を待ってるぜ？」

あ、次は詠語の歌詞で頼む。じゃ無いと幻想種たちがわかんないかも知れないからな」

「え、あ、うん……そっか、歌えば……」

冷静さを取り戻したのか、ティアマツトが懐から再び三色の魔石を取り出した。精霊と会うという行為のせいで集中が乱れ、鈴唱の場が消えてしまっているの、再び作り直すのだ。

そうしてそれから、恐らく世界でも初であろう 人と幻想種と世界種を聴衆にコンサートが行われたのだった。度重なるアンコールに、押しに弱いらしいティアマツトは何度も何度も応える。結局、九十分の間、彼女は歌い続けたのだった。

????????????????

「疲れた…怖かった…疲れた…吃驚した…疲れた」

(多分)世界初、人外の存在相手のコンサートをようやく終えたティアマットは、最後の一曲を歌い終わると、ややフラ付きつつラストイたちのもとに移動する。シートのエリアまで辿り着くと、そのまま突っ伏して呻き始めた。彼女にしては珍しいその行動だが、流石に九十分も歌い続けるとなるとやはりこうもしたくなるのだろうと思われた。

歌が終わり、周囲の幻想種たちは各々の行動をとり始める。自身の寢床に戻るもの、どこかに飛び去っていくもの、その場に横になりだすもの、アル少年と遊び始めるもの……。様々だった。生まれたびかりと思われる幼い精霊たちが一瞬ラスティのほうに向かうような動きを見せたが、すぐさま湖の中に戻っていった。何があったのかは分からない。ウンディーネに呼ばれでもしたのだろうと、そうラスティは結論付けた。

「ううう~~~~~……」

怖かったとそれ以外の感想を交互に口に出していたティアマットは、移動を始めた幻想種たちが居なくなるところでようやく起き上がった。アークが彼女に水の入った水筒を手渡す、と彼女は一気にそれをあおる。

「お疲れさん、相変わらずいい歌だったぜ?……だが、よくもまあそこまでアンコールに応えたな」

彼女が押しに弱い部分があるということを知っていながら、ラスティは少しからかうように言う。水筒の水を一気に飲み干したティ

アマツトは、少し恨めしそうな視線を彼に送った。豊かになつてきた感情表現力を使い、やや口を尖らせて言う。

「だって、皆あんなに声出すし、こつち見てくるし……なんだか、断つたらいけないような、気分だった」

そう言つて拗ねる彼女の頭を、ステラは撫でて宥めた。実際のところは、自分のことが評価されたことについては不満が無かつたので、表面で言っているほどに不満は無かつた。だが、言つてしまつた分にはそれを保つていなければならぬ気がして、ティアマツトは撫でられることを受容しながらも唸る。

すでに時間は十時近い時間になつていた。翌朝もまた朝から遊ぶつもり満々だつた皆は、今日のところは寝ようということで見解が一致する。ラスティの手で幻想種との遊びの場から連れ去られたアル少年は、今まで遊んでいたかれらに手を振る。蛇のような姿をしたそれは、頭を擡げてそれに応えていた。その姿を見て、アレと遊べるアル少年の胆力は素晴らしいものがあるとラスティは感じる。

「あ、ラスティくん！ ごめん、さつきまで居た場所にわたし水筒忘れてきちゃつた！」

アル少年を回収するラスティより一足先にテントに戻つていた女性陣？のステラが、テントから顔だけ出してラスティに向かつて叫んでいる。水筒を忘れてきてしまったという、彼女にしては珍しいとも思える行動にため息をついて、ラスティはその声に応えた。

「了解した！ 俺が取つてくる！」

「ではアルさんは私が連れて行きますね」

そういうアークの提案に、ラスティは礼を言いつつも、今まで肩に抱えていたアル少年を下ろす。今まで遊んでいた幻想種が居た方をしきりに盗み見ていた彼だったが、アークに何やら耳打ちされると、顔を青ざめさせて、アークに手を引かれるままにテントに向かっていった。

その光景に首をかしげながらも、ラスティは頼まれた水筒を取りに向かった。

「まったく、制御式以外ならミスをしないとされるステラらしくない。あ、アル坊にとってこさせればよかつたんじゃないか……無理か」

道を引き返して水筒を回収してきたラスティは、テントに向かつて歩みを進める。飛び交う洗幻虫の青い光に見とれながらも、テントの前まで辿り着いた。

その中に入ると、すでに皆は寝てしまっているようだった。皆川の字になるように寝ていて、ラスティから見て右から順に、アル坊、ステラ、ティアマツトとなっていた。

「（つて、俺の隣はティアマツト！？ くそ、ステラ。アル坊の横空けといてくれたっていいじゃないか、……）」

彼女たちと自分の間にアル少年を挟み込むことで、精神の安定を図ろうとしていたラスティであったが、何故かラスティの寝ることの出来る出来るスペースはティアマツトの隣になるように限定されていた。ちなみにステラはいつも抱き枕を使っているのだろうか、アル少年を抱き枕に寝ている。心なしか彼の表情は苦しそうだつた。どうやら状況的に諦めるしかないと思つたラスティは、シャツだけになつてティアマツトの隣に横になった。彼女の使うシャンプーの匂いだろつか、彼の嗅覚は花のような香りをとらえる。隣に女性

が寝ているということ意識させられ、自然、鼓動が早くなった。

「俺、寝相悪いんだけどなあ、これが」

そうして彼は、上着を枕にしてタオルケットを体の上にかぶせると、その瞼を落とすのだった。

第二十二小節「聖域」

「ん……」

朝の訪れを告げる光が、テントの入り口のわずかな隙間から差し込んで来る。朝のやや冷えた空気を暖めるその色は、まずティアマットの顔を色づけた。寝たときの姿勢から微塵も身動きする事の無かった彼女が、初めて動作を行う。瞼の向こうから降り注ぐ光にまぶしさを感じ、ゆっくりと目を見開いた。

「あら？ ティアマットさん、おはよう御座います。お早い起床ですわね」

ティアマットが目覚めたのに反応して、ラスティの寝顔が覗き込める位置に座っていたアーク（少女）が彼女に挨拶をした。挨拶を返し、ゆっくりと起き上がる。そのまま上半身を起こした姿勢で周囲を見回した。

非常に荒れていた。

ステラの布団は荷物の上に掛かっていて、寝返り打つ彼女の体の下にはアル少年が下敷きになっている。苦しそうな表情でしきりにうなり声を上げている彼は、果たしてどのような夢を見ているのだろうか。

ラスティのほうは、右腕が下になるように……つまりティアマットのほうに顔を向けて寝ていた。丸めたタオルケットを胸に抱え込み、抱き枕のようにしている。これは彼が利き腕である左腕を労つての行動なのだが、それがどうも微笑ましく見えた。ティアマットに朝の挨拶を告げたアークは、そんな彼の寝顔に見入っている。

ラスティから視線を外して、ティアマットのほうを見る。少し名

残惜しそうな表情をして、アークは彼女に告げた。

「まだ起床の時刻まで、半刻（三十分）ほど残っていますが……日も昇り、ティアマツトさんも起きたことですし、皆様を起こすようにしましょうか」

アークが起こしている間に、ティアマツトはテントの外に出る。朝日と澄んだ空気が彼女を出迎えて、自然、彼女は深呼吸する。それを三度ばかり繰り返した後、彼女は黒革に包まれた自身の手を見た。

ラスティに処置してもらったその両手は、昨日は皮手袋が外されることは無かった。それなりに大きい規模で処置された自分の掌を見られて、ステラに心配をかけたくなかったのだ。自分の怪我の状態を濁して報告したラスティは、気を遣ってくれたのだろうか、そう思い返す。

ゆっくりと、その両手の皮手袋をとり、包帯を解いた。良く見ると布地と同色のインクで術式が刻まれている包帯のしたから出てきた自身の掌は、完全にその傷の跡を消していた。それを見て喜びつつ、でも少しだけ暗い声色で、彼女は呟いた。

「また、少し厚くなっちゃったかな」

皆がテントから出てくる物音が聞こえてくるまで、彼女はしきりに両手を握り、開く??その動作を繰り返していた。

????????????

朝起きてから、皆はすぐに着替えを済ませ、いつものような格好になっている。勿論、その下は水着だ。そして皆でテーブルを取り

囲むと、軽めの朝食を食べ始める。その食べ終わるころには、岩に押し潰される夢を見たらしいアル少年の顔色も戻ってきていた。

時刻が七時を回った頃、湖の浜辺を臨んで五人が並んでいる。まだやや角度の浅い日差しを受けて輝く湖面が視界を必要以上に明るくする。やや目を細めつつ、その湖面の様子を見ていた。

「よし！今日はもつづるぞ〜！！！」

「おお〜！！！」

マスクを片手に掲げて、ステラとアル少年が気合十分にポーズを決めている。ステラの号令に合わせる様に、アル少年はややぎこちなくマスクを取り付けた。顔の前面を覆う、ゴーグルと呼吸機部が一体となったマスクが、水着とは不釣合いに無骨で、どこことなく滑稽である。

「ステラ、いつもだったらまだ寝てるのに…」

「そんだけ楽しみだったんだろう、これが」

横二人の熱気とは対照的なテンションのラスティとティアマツトが、彼らの斜め後方で苦笑しつつマスクを取り付けている。厳密には肺呼吸の必要の無いアークは、マスクを取り付けず彼らの様子を見ていた。ラスティは、何故水着のチョイスがスクール水着であるのか問い質したいという気持ち在必死に落ち着ける。

皆が準備を終えると、真っ先にステラ、続いてアル少年が湖に飛び込んだ。後を追って三人が飛び込む。

飛び込んだ際についてきた外気の気泡が、視界を一瞬塞ぐ。飛び

込んだ勢いに振り払われたそれは、成すすべなく水上に昇っていく。視界を遮るものの無くなった視界には、青く色付く世界が広がっていた。

昨日も潜ったはずであるラスティにアル少年も、眼前の光景に感嘆する。視界を横切る魚たちの姿はそのままに、昨日はその姿を隠していた幻想種たちが泳いでいたのだ。人よりも大きな水棲種が多数横切っていく光景を見て、ティアマツトは綺麗と呟く。だがその音は気泡に囚われて水上に消えていく。

「すごいすごいすごい！！！！！」

目の前の光景に感極まったステラが、魔石ペンを振り回して周辺空間に凄いの文字を書きなぐる。文字を書くのではなく、ペン先から削られた魔石の粒子が、意識した文字を描き出す仕様になっているためそのような現象が起きているのだろう。半ば暴走に近かったこの地ではいくら戦闘行為が認められていないとはいえ、周囲の幻想種を刺激してしまいかねないその行動は拙いと思い、ティアマツトが彼女の腕を掴んで止める。圧倒的腕力を前に僅かにも腕が動かなくなってしまったステラは、後方を振り返る。ゴーグルの向こうから伝わる非難の視線を受けた彼女は、目を細めて気泡をふきだした。‘アハハハハ……ゴメン’そんな文字が、右手のペン先からこぼれ出している。

「それにしても、本当に凄い場所だよね！ 幻想種たちがこんなに沢山、それもこんな近くで見られるなんて！」

気を取り直して、湖観光を続けていると、先行していたステラが振り返ってそのように書き出した。背泳ぎの要領で泳ぎ続ける彼女に向けて、アークがある発言をした。水中での活動に全く問題の無いアークは、ペンを使用せずに会話が可能だった。

「この幻想種たちもそうでしょうが、この地にはもつと素晴らしい場所があるのですよ？」

その言葉を受けたステラが、獲物を捕らえにかかる大型魚ばかりにアークに食らいついた。一瞬のその行動に全く反応できなかったアークは、ステラの オシエテ の視線を受けてたじろいだ。落ちて着けと両者の間に文字を投げ込んだラスティが、アークからステラを引き剥がす。彼もまた視線にたじろぎ掛けたのだが、マスクのおかげでそのことを悟られることは無かった。

開放されたアークが、ラスティに感謝しつつ、ステラに向かってその場所を告げた。

「この湖の中央湖底に存在する領域????この霊地の中枢ですよ。どうでしょう、行ってみませんか？」

アークが告げたその場所には、ラスティですら驚愕した。

驚いていないのは、その言葉の意味を判っていないアル少年だけであった。

第二十三小節「迎える世界」

霊地。それは世界に、神に近いと言われる場所。その地には必ず守護精霊が存在し、その聖域を害する者その全てを排除するという。その守護精霊が護る場を霊地と呼ぶが、それはある意味で正しくは無い。精霊たちはその場を守護しているというよりも、その地の奥深くに存在するあるものを護っているのだ。だがそれは非常に繊細であるが故に、底を中心とした一帯を守護しているに過ぎないのだ。故に真に霊地とはその場所の中心部のことを、精霊たちの間では言う。

そんな、彼らにとっては聖地というべき場に皆を招待すると、アークは言う。その言葉に皆は驚愕で驚くばかりで、ペンを落としてしまいそうな様子でアークのことを見つめていた。不安げな視線を送るラスティにだけは、アークは念話で事情を言う。

「（昨日マスター方がお休みになっている間、ウンディーネの方には既に言っております。私やウンディーネが影響を抑えますし、世界に近いマスターやティアマトさん、それにノルニラムに魅入られたアルさんは、中枢に影響を与えることは御座いません。ステラさんの影響を抑えるだけであれば、正直私一人でどうにでもなるのです）」

「（それはいいが……なんでまた中枢だ何て……そこはお前たち

精霊には神聖な場所だろうに)」

人が精霊や神を信仰するならば、精霊たちは世界そのものを信仰すると言ってもいい。精霊たちにとって霊地とは人間が思うのと同じく神に最も近い場所で、神聖にして侵さざるべき場所であった。そのような場所に人を招き入れるというのは非常識どころの騒ぎではない。

ラスティとて見たいという気持ちはあった。だが幾ら「描き手」とはいつても人間の身、無理を言ってみせてもらうというのは余りにも凶々しいものだとも思っていた。だからこそ彼は、昨日湖の中央に来たものの湖底に赴かず、わざわざウンディーネを魔石で呼んだのだ。

だがそんな彼の考えは検討違いなのだ、アークは告げた。

「(マスター、だからこそですよ?)」

ラスティはその意味を問い質そうとするが、それはステラの感動の(アークへの)抱擁に遮られる。

「(やった〜!! ホント本当HONTOU!? あの伝説の霊地の中心伝承にしか無いって言われてその存在すら疑われて信じる人も疑う人も半々だっていつてそれで)」

右手の魔石ペンから言葉を立て続けに垂れ流しながら、ステラはアークを力いっぱい抱擁していた。乱れた念話で、言葉にならない悲鳴がラスティに直接伝わってくる。ティアマットのほうはステラとは違う方向性の喜び方をしていて、夢の世界に飛び立っていた。とりあえず彼は、落ちた魔石ペンを急いで回収したアル少年を労っておく。

二、三分のさばお

抱擁から開放されたアークは、体内で崩

壊した組織の一部を吐き出した。すぐに何処からか取り出した魔石を飲み込んで回復する（体の構成物質と魔石は同じものであるため）。吐血後に薬を飲み込んだように見えるその光景に、再びステラは苦笑交じりの謝罪をした。世界種相手でなければ力を発揮できないアークは、思いもよらない攻撃に顔を引きつらせつつも、にこやかな表情を維持しようとしながら言った。

「それでは皆様、私の後に続いてきてください。実は昨日の夜にウンディーネさんの許可はとっているのですそのあたりは心配しなくても大丈夫です　　っ!？」

まだ残っていたらしい組織が、アークの口から排出された。

??????????

アークの後ろについて皆は泳いでいる。水圧の影響を遮るための結界が、ウンディーネの手によりいつの間にか彼らの周囲には張られていた。皆は遠距離から対象の周辺に結界を展開してみせる土地守護精霊の実力に感心していて、これにはアークでさえも感心している。世界に付与された防衛のための力は、こういった面ではアークを上回っているらしかった。ちなみにアークは殲滅に特化しているという。

深度が深くなるにつれ、水中に届いてくる光の量も少なくなってくる。だがある一定の深度を過ぎたあたりで、徐々に周辺は明るくなってきた。それが分かるようになって、アークがラスティに向け念話を行う。

「（マスターは、御自身が人の身であることをお気になさっているようですが、それは私たちには杞憂というものですよ?）」

「（だが俺以外はどうかんだ？）」

「（マスターのご友人であれば、それだけで招待する理由には十分です）」

アークのそんな応答を聞いて、どうしてそこまで自身が優遇されるのだろうか、ラステイは疑問に思う。その疑問をぶつけてみると、やや呆れつつも愛おしさのこもった声音でアークから答えが返ってきた。

「（何をおっしゃるのですか。貴方様はこの世界を御造りになった方、世界の父にして母、我々の真に信ずる神そのものなのですよ？ 貴方様に我々の信仰の地を御覧に頂けるのであれば、人間が数人付いてくることなど些細なことではありません）」

そう力説するアーク。話しているうちに、次第に周囲は明るく青く色づき、水中であることを忘れてしまいそうなほどに光に満ち溢れてきた。霊地は近い。

「（ウンディーネと二人で話したのですよ？ マスターをここに連れて来るにはどうすればいいかと……普通に提案したら遠慮で断ってしまいそうでしたから、勝手ながらこのような形にしてしまいました。これに関しては、申し訳御座いませんでした）」

断らせない状況に持つてくるために、感極まるステラの存在を半ば利用させてもらったのだとアークは語る。謝罪するアークだったが、その声には後悔は無かった。彼らの真下に、空色の光が広がる。

「（ ですが貴方様には、どうしても御覧になって頂きたかったのです。」

さて、そろそろ見えてきましたね。

マスター……これが、幾多とあれど、コレを目の当たりにした人間は片手で数えられるほどの、人の世で伝説の中と歌われる地で御座います。そしてこの地に招待されたヒトは貴方様のみ　　いか
がで御座いましょう　　」

そこから先は、振り返って皆のほうを向いて言った。その地を誇るアークの心情が、言葉と表情と動作に、隠されることなくあらわれる。

「これが我々精霊の守護する霊地の正体、

ディースイクスマーキナー
是空大結晶

（我らが神よ）ようこそおいでなさいました」

球体の形をとる薄蒼い結晶体が浮かんでいる。円盤状に光る床の上に漂うようにして存在するそれは、魔石の大規模な結晶体だった。半径にして数十メートルはあろうかという光る床。足をつけて感じる感触は固く、だが有機的な暖かさを抱いている。足元を良く見ていると、ただ発光していると思われたそれは、超微細に書き込まれた膨大な量の術式で、絶えず式を更新しているのが分かる。式が生きているかのように脈動し、変容するその光景に、皆のマスクから排出される気泡が少なくなる。

その生きる術式に浮かぶ大結晶は、既存のどの属性色にも属していない。四、五メートル程の半径を持ち、その内に見た目以上に大きな空間を持つていないかと思われる摩訶不思議な様相を呈していた。

「そろそろ……来ます」

アークがそう告げたとき、水ごと空間が鳴動した。

「すごい……これは…式？」

「言葉が、泳いでる」

直後現れ、皆の周囲を泳ぎ始めたのは、アルファベットの文字の羅列。大結晶を中心に半球を描くように絶え間なく、緩やかに周回するそれは、訪れを歓迎するかのように淡く輝いている。

そんな文字列の中に、ラステイは偶然???いや、ひよつとすると意図的に見せられたものだったのかもしれない、ある文章が目に入った。眼前をゆつくりと、通過していく。

「(A i f i n e n t l i c h e y u - i n : a u f e n
f a - d a : : : : : そつか、お前が……)」

過ぎていくその文字列を、顔を動かして追うラステイ。それはラステイから離れて程なく、フェードアウトして消えていった。役目を終えた言葉は、ラステイとその傍らのアーク以外の人に見られることなく解けていったのだ。消えていった文字の跡を見つめながら、アークがラステイに言う。

「(、ようやく貴方に会うことが出来ました、我らが父よ、」

ふふ、マスターにここを訪れて欲しかったのは、どうやら私たちだけでは無かったようですね」

ここは数ある世界の力の中継点、そして精霊たち世界種が直接世界より意思を受ける場所。そのことを知識以上の要素で理解したラストイは、視線を大結晶のもとに戻した。相変わらず、淡く、輝いていた。

????????????????????

別にその存在が確定され、役割を知られたところで、世界には何の損失も無い。そうである故か、ステラがアークに投げかける様々な質問に、アークは懇切丁寧に答えていった。ステラは質問の内容に気を遣っているのか、あまり突っ込んだことは聴いてこない

ものの、その質問の量は多い。

ステラが知識欲を満たさんとしている最中、ティアマツトとアル少年は、泳ぎ回る文字列たちを追いかけようにして泳ぎ回っていた。その尽くが二人に理解のできないものであったが、文字を捉えて読もうという二人の行動は微笑ましい。いつの間にか幼い精霊たちまでもが、二人に混ざって泳ぎ回っていた。子供のような無邪気な念を送ってくる精霊たちの相手をしながら、ティアマツトは漂う言葉たちを読もうとする。

「…………全然読めない……………」

自身の学の身につかなさに、少々落胆するティアマツトだった。

第二十四小節「精霊にとっての高嶺の花」

世界がその意思を直接告げることもあるその場所は、精霊にとって、人における教会の大聖堂と同じようなものだと言える。人が神を、精霊を、龍を信仰するように、世界種たちもまた神を信仰する中でも精霊の信仰心は群を抜いて高く、そのことは人の世にすら伝わる程であった。精霊の前で彼らの神を侮辱したら、速やかに自害した方が自身の為であろう。そのようなことまでもが言われている程だった。

だからこそ、ステラには疑問があった。

ラストイは中枢部だけでない部分を見ようと周囲の観光に赴き、幼い精霊と遊んでいた二人も何処かに行ってしまう。蒼い文字のドームの中には必然的にアークとステラが残されていた。一しきり質問を終えたステラ、そして周囲を見渡し誰も居ないことを確認すると、ラストイの元に向かおうとしていたアークの腕を掴んだ。悲しげに振り返ってくるアークの表情に罪悪感を覚えながらも、ステラは文字を書き出す。

「アークちゃんって、もしかして本当は凄い偉い精霊だったりするの？」

単刀直入、そんな疑問がぶつけられる。思わなかった事態では無いが、この場でそれを問われると思わなかったアークは、ステラにも分かってしまうほどに動揺を見せる。

「それはまた、何故」

自然になのか、アークの語調と声の振動が変化する。普段のアークからは見られない、その威圧感に似た雰囲気は一瞬たじろいだス

テラだったが、それでも文字を描く。

「本当は、最初から気になってたんだ。キミは既存の属性色のどれにも属さない色をしているから……でも確信は持ててなかった」

アークは黙ってその文字を読んでいる。続きを促されたようで、ステラは一気に根拠を書き出した。

「あの時は疑問に思う暇がなかったんだけど、キミはあの墮ちた精霊を圧倒してたのが、まず一番に気になったの。だって湖の精霊とそれなりに戦闘してたんだよ？　なのにキミとの戦闘では、キミが一方的だった　湖の精霊が、弱いのかなって思っちゃうぐらい……」

そしてね、今回のココに案内してくれたこと　ティアマツトちゃんもアルくんも全然気付いて無いけど、ここに来れるって本当に異常なことなんだよ？　教会関係の情報だから中々見つかなかったんだけど　昔わたしが調べた資料じゃ、ここに‘招待’された人間なんてだれも居なかった。

アークちゃんがラスティくん大好きなのは知ってるから、彼に見せてあげたかったのかなって思ったんだけど……でももしそれだけなら、精霊使いが訪れていた記録があってもおかしくないはずだもの。だから、アークちゃんがホントはものすっごく偉くて、この精霊さんをお願いしたのかなって……」

一気に書き出して、ステラは腕を下ろした。中空に漂う文字が、世界の修正力に掻き消されるまで、アークはじつとその文字を見続けていた。文字が消え去った後、アークとステラの視線が一致する。しばしの沈黙の後、アークは観念したと大きくため息をついた。

「はあ〜」。どうやら貴女の知識量を見誤っていたようですね……

分かりました、貴女に敬意を表して幾つか、私のことについて教えて差し上げましょう。ですが、私が言ってしまったことは、マスターには言わないで下さいね？」

人差し指に手をあててそう微笑み、雰囲気をいつものものに戻したアークを見て、

勿論だよと、そう笑ってステラは頷いた。

??????????

湖底の砂浜に降り立つ。踏みしめると同時に舞い上がった白砂が、踝までを包んだ。その際に見えた蒼い光が、そこに魔石の粒子を含んでいることを教えてくれる。

霊地中央部からやや離れた位置、ラスティは湖底の砂丘を見て佇んでいた。是空大結晶からはあまり離れていないためか、彼にじやれ付くように幾つかの文章が纏わり着いている。感情など無いはずである‘世界の力’。幻想を制御し、世界を調律する存在は、大結晶を通してラスティに甘えているようにも見えた。

腕に纏わり付いた文字を見てラスティは微笑む。マスクから泡が零れ出るだけのその反応に、世界は何か感じたのだろうか　　少しだけ強く光る。

しばらくそんな光の文字を見ていると、ふと、突然それは水に消えていった。ラスティは訳が分からず首を傾げていると、背後から声をかけられた。

「ここにいらしていたのですか、ラスティハルト様」

「ん？ ウンディーネか」

その声の主はウンディーネ。水の化身のような姿ではなく、人に近い姿で彼女は現れた。水の中で軽く漂う銀髪が、蒼い光に色づいて輝いている。ラスティの前に姿を現した彼女の頬は僅かに色付いており、口調も何処と無く強張っていることから、緊張でもしているのだろうと思われた。

そんな彼女が現れたことで、文字はその姿を消したのだろうか

そうラスティは思う。世界に体面セカイのような考え方が存在するかどうかは彼に分からなかったが、設定していない「分からない」以上、もしかしたらそのようなこともあるのかもしれないと、ラスティは自然に笑みがこぼれた。

「あ、あの、ラスティハルト様？」

「いやいや済まない。なんでもないんだよ、これが」

ウンディーネは、ラスティが突然笑ったことに困惑するが、すぐに彼がなんでもないと言う。困惑が抜け切らない様子のウンディーネだったが、そんな彼女の姿を見て、思い出したという風にやや大仰な動作をラスティはとった。そしてウンディーネにあることを頼む。

「（あ、そうそう。言い忘れてたが、俺のことはラスティって呼んでくれ）」

瞬間、ウンディーネの周囲の時だけが停止した。

「!?!?!?……そ、そんな……あああなたさまをよよびすてにするなどとわわたくしには……」

その直後、途端に困惑し始めるウンディーネ。その囁みに囁みまわった言葉に、アル少年やティアマツトに話しかけるときの威厳など欠片も残っていない。恐らく最初に会った時は、彼以外の人間の前ということで精神を平静に保っていたのかもしい？？？ウンディーネの大人らしい容姿とのギャップに、思わず噴出してしまっているようなラステイだが、それを懸命に抑えて話しかけた。

「まあ、恐れ多いって言うような気持ちも分かるが、あまり気にしないでいいんだぞ？ こっちとしては、ハルトまで付いてると長いような気がするだけだからさ、これが」

「は、はい。あ、貴方様がそそう仰るのであれば……」

そうして彼女は、動悸を抑えるかのように深呼吸をする。顔初々しい恋人同士が、初めて愛称で呼び合うかのように顔を紅潮させる様な有様で、それを見て、同じ精霊でもここまで反応が異なるのかと彼は感想を持った。

アークに同じことを言った時は？？？『ではご主人様で』？？と真顔で答えてきたので、大慌てで直させたと、追想する。結局マスターという妥協案が採択され、アークは結局、ラステイ、と彼に向かつて言うことは無かった。

「ら、ららす、ててイ……」

「（……………もし難しいなら、今までどおりでいいんだぞ？」）

「うう、申し訳御座いません、ラステイハルト様」

結局ウンディーネは、彼のことを愛称で呼ぶことが出来なかった。頭を垂れて落ち込んでしまったウンディーネが妙に哀愁を感じさせて、ラスティは少し罪悪感を感じてしまう。

「（……なんだか、すまん…で、どうした？ 何かあったのか？）」

念話での会話で、ラスティはウンディーネと話す。何かあったのかという問いに、ウンディーネは何も無いと答えた。ただ何をしているのか気になったのだという。

「（まあ、そうだな……折角ここに来たんだから、少しばかり周辺も見て回ろうかなって、な）」

霊地、世界の力（主に修正力）の発信地、アンテナのような役割を果たすところが、中枢部のみで出来ている訳でないということをラスティは知っている。今までに五箇所程の、増幅用の魔晶石のタワーや、精霊たちの手で建てられたと思われる祭壇のような場所を見てきていた。

湖底だというのに、遠くまで見渡すことのできる透明度と光量の中、ラスティは周囲を見回しながら語る。

「（やっぱり凄いよな、ここは。知識として知ってて、大体どんな姿でどんな色でどんなものなのか分かってるっていうのにさ……いざ来てみると、それが現実に目の前に存在するのに驚いてばかりだ。来て良かったって、ほんと、思うよ）」

「あ、ありがとう御座います！ そう言って頂けると、この地に招いた私共としても非常に嬉しいものです！」

ラスティの感想に、目を細め笑顔になるウンディーネは、実に嬉しげに顔を赤らめる。霊地は、精霊にとって人における教会・そこを守護する守護精霊はいわば司祭。故に、自身の霊地を賞賛されるのは嬉しいものなのだろう。

「ではラスティハルト様は、残りの場所も回られるのですか？」

「ああ、そのつもりだ」

折角の招待なんだからなと、その後にはラスティは続けた。ここはもう見たと、ラスティが次の場所を探そうとすると、急にウンディーネが彼を引き止めて、何かを言おうとする。

「あ！ あ、あの、ラスティハルト様」

呼びかけられたラスティは振り向いた。だが肝心のウンディーネは、何故か急に恐縮してしまったようになり、中々言葉が出てこないという風な状態になってしまった。

「あう……いや、そのう……」

ようやく（ほんつつつつの少しだけ）戻ってきたと思った大人びた様子が、打って変わったその幼げな動作にもどってしまったことに、ラスティは思わず破顔してしまう。笑い声を出しはしなかった為、それがウンディーネに知られることは無かった。

ウンディーネのその様子に戸惑ったものの、ふとその事情に思い当たることがあった。

その予想を元に、アークなら積極的に言い出すんだろうなと、ラスティは想像した。そんな想像を振り払って、中々用件を言い出せずにいるウンディーネに、ラスティは声をかける。

「そういえばウンディーネは、ここの地形覚えてるんだよね？ 案内してくれるか？」

「はい！ 私で宜しければお供いたします！」

急に元気になったウンディーネを見て、アークだったらただ微笑んで、付いてきてくれるんだろうなと、そう思った。

「（このことをアークが知ったら、アイツ嫉妬とかするのかな？）」

試してみようとは思わないまでも、そうなったアークを想像してみても、最後は噴出してしまったラスティだった。

第二十五小節「戯れの精霊」

「（遊ぼ遊ぼう）」

「（一緒に泳ごう）」

「（ヒトと一緒に、人間と一緒に）」

何体かの、光玉のような姿の幼い精霊が、ティアマットとアル少年の周囲を泳いでいる。じゃれついて、くっついては離れくっついては離れを繰り返す様子は、精霊であるということをおぼろげに忘れてしまいうなほほどに微笑ましい。

アル少年だけでなくティアマットもそんな精霊たちの遊びに付き合っていて、いつの間にかやや離れたところまで来てしまっていた。どうしようかと一瞬悩んだティアマットであったが、いざとなれば湖面まで浮上すればいいだけだと思い、気にすることを止めた。今現在、自分の体はウンディーネの張った結界に水圧から守られているということをおぼろげに失念している。

「（ティアマットさん、この精霊さんたちは僕よりも（年齢的に）小さいこたちゃんですか？）」

彼らと遊んでいるうちに、そう疑問のわいたアル少年が言葉を口にしようとする。だが、それはマスクを被っているせいで上手く発音できず、泡の吹き出す音にしかならなかった。視線を向けられたために、何か言おうとしていたことは理解出来たティアマットだったが、如何せんその言葉が聞き取れない。首をかしげて、右腕を振るった。

「ごめんアル君。何言ってるのか、分からない」

その文章を読んだアル少年は、腕を組んで何やら思案する。そして右の手で左の掌を打つと、湖底にしゃがみこんで海中に指を使って文字を書き始めた???が、書けなかった。

「……………」

一文字書いてみて、次の文字を書こうとして生まれた水流が、文字を掻き消したのだ。きめ細かな白い砂が元の姿に戻っていく様を見て、アル少年が肩を落とした。

すると、精霊が彼の頭の上のしかかった。突然の軽い重みにつんのめり、引つ繰り返りかけた姿勢で上を睨める。何か挙動を示すわけでもないのは、恐らく念話をしている為だろう。幼い精霊は、念話以外にコミュニケーション手段を持たない。

アル少年の表情が、疑念を持ったものから、次第に喜色を帯びてくる。そして抱きつくようにして喜ぶと、彼はその幼い精霊に左手を添えて右腕を振るった。直前に、アル少年よりも幼い声が詠唱を行う。

「Fantax-ea, sept fanct (幻想準式、接続開始)」

すると湖底の砂から魔石の砂だけが浮かび上がり、文字を形成する。光が集うその様子に、ティアマトは啞然とするばかりだった。精霊が接続により、アル少年の意識を読み取って文字を描いたのである。

「見てください見てください！ 精霊さんが手伝ってくれそうです！ すごいや、まるで魔術師になったみたい！」

嬉しそつに腕を振り回す彼は、魔術の素養など無いにも関わらず幻想が行使できたと大喜び、質問のことなど頭から抜け落ちた。彼の喜びに答えるように、周囲の青い光たちも飛び掛るようにして動き回る。

「この話し面白い！」

「おもしろい面白い！」

「いつもと違う話し方！」

「有難う有難う、虹の人！」

アル少年の周囲に文字を殴り書く彼らは、いつの間にかお礼を言う立場が逆転していた。

だがそんなことよりも、アル少年は自身の呼び名が気になった。ティアマツトも同様に首をかしげている。

「虹の人、って、どういうこと？」

アル少年が、フランク接続した精霊を胸の前に抱きかかえながら聞くと、その胸の中に納まった精霊から、答えが返ってきた。

「キミからはいい匂いがする

おひさま浴びたお空の匂い

虹の匂い だからキミは虹の人」

アル少年はただ訳が分からず困惑するだけだった。だがティアマツトは、精霊のその発言に驚く。

精霊は感受性が高い。それは魔術に携わるものだけでなく、傭兵のような者にも知れ渡る話だった。その感受性は、世界と近い高尚な存在ゆえであると教会では言われ、彼らは自然、相手の本質を見抜くのだという。

彼らは世界の加護に敏感である。この世界の人々は、ある特殊な手法で名が決まるのだが、それは必ず詠語の名で世界からの加護があると云う。精霊の言う「虹の匂い」というのは、彼の名の加護から来る気配なのではないか　　ティアマツトはそう推測した。そう思案していると、アル少年に向けられていた関心はティアマツトのほうにも向いてきた。

「それでねそれでね虹の人」

「あのひとは潮の香り、海の匂い」

「命と色の混ざった匂い、いい匂い」

「へえ〜、そうなんだ」

海？　それが自身の名前に関係するのだろうかと思案し始めるティアマツト。だが彼女の思考の中では結論など出ず、オーバーヒートしかけた思考で、やはり後でラスティカステラに聴いてみようという疑問をとっておくことにした。

精霊たちは続けて、丁寧なことに訊いていない人達のことについても話し始めた。

「大きいほうの女の人」

「お星様の匂いがする」

「大きいほうの男の人」

「お空の匂い、とってもいい匂い」

「あの人の匂い、一番好き！」

「でもおっきなお舟がコワイ」

「もっと近くに行きたい」

「でもお舟のひと、コワイ」

「コワイ」

「おつきなお舟？ それってアークさんのこと？」

精霊とアル少年のやり取りを聞いて、思わずティアマツトは噴出しそうになってしまった。恐らく星の匂いとはステラのこと。そしてお空の匂いはラスティで、おつきなお舟はアーク。

昨日アークが、‘自分の主は精霊にとても好かれる’と断言していた理由が、少しだけ分かったような気がした。恐らく精霊たちはラスティの気配を察して直感的に彼のことを気に入るのだろうと結論付ける。一番好きということは、それだけ彼は精霊に好かれやすい体質なのだろう。

「（そういえば）」

思えば自身も、彼に対してそれに近い感覚を受けてはいなかっただろうかと思いついた。彼ら精霊のいうような匂いというほどのことではないが

「（ラスティは、なんだか、広い）」

大きいというよりも、広い。細身の彼に、そのような感覚を抱いていた。彼に対する、軽く薄く包み込まれるようなイメージ。それは‘空’に類するものではないかと、ふと思ったのだった。印象、それが精霊には加護の感覚として伝わるのかなと、彼女は思案していた。教会に身を置いていた時期がある分、精霊や世界や神について考えさせられることは多い。これが勉強に関係していることならば、既に思考を放棄していただろう。

考えて黙り込んでしまったティアマツトの視界に、視界を埋め尽くすほど近くに精霊が現れた。驚いて仰け反って、思わず睨んでしまう。

「おどろいたおどろいた！」

そういつた文面を撒き散らしながら、アル少年の方に逃げていった。大人気ないかなとは思いつつ、やや本気でその精霊を追いかける。そうして鬼ごっこじみたことをしながら、ウンディーネの呼び声に精霊たちが反応するまで遊んでいた。

アークのことが怖いというのは……ティアマットには思い当たる節が存在した。

流石に守護を任される程の高位の精霊も、霊地中枢への干渉と水圧から保護する結界を維持し続けるのに限界が近づいてきたという。その意を告げられたラスティはアークに念話を送り、彼らは再び中枢に集った。ティアマットとアル少年は押さない精霊たちが一緒に居る様で、ウンディーネが念話で連れて来るように言ってもらうことを忘れずに。

アークとステラはずっとその場に居たようで、そこにラスティが現れるのを迎える。大きく手を振り、出迎えてくれたステラに、ラスティも同じように振り返した。そんな彼らにウンディーネは気を遣ったのか、水の姿になり視認されにくい形態で居て、密かに移動している。ステラはその姿に気付いていないが、アークはしっかりと感知しているようだ。

「お〜い！ ラッステイク〜ん！」

「マスター、お帰りなさいませ。（ウンディーネ……羨ましいです）」

言葉でラスティを出迎えつつ、嫉妬と羨望のこもったアークの念話がウンディーネに届いた。そんなアークの視線（と念）は少し痛かったが、それを堪え、ステラに気付かれないように、核晶を上手く隠しつつ大結晶の影に身を潜めた。その様子を、何回か盗み見るようにして、アークは見ていて　視線をラスティの方に戻す。

「（……まあ、あまりピリピリしすぎるのも見つとも無いですから……）周辺の御観光を為さっていたんですね。如何でしたでしょうか？」

「（ああ、本当に綺麗だったよ……というかアーク、ずっとここに居て、何してたんだ？）」

「あ、あのねラスティくん。アークちゃんがね？」

念話で行われたラスティの問いに、アークの表情が強張った。それを見て取ったステラが、念話で何か聞かれていると察知し、ラスティに話しかけて意識を逸らす。彼女の援護に、アークは彼の影でステラに向かってお辞儀し、ステラはこっそりと親指を立てて応えた。そうしてステラも交えて会話をしていると、ティアマットとアル少年が帰って来る。

幼い精霊たちと遊んでいたらしい二人の周囲には、幼い精霊たちが、幽霊に付き従う鬼火のように漂っていて、思わずステラとラスティは苦笑いしてしまう。亡霊のようだと、同じような感想を抱いていた。

そんな彼らの感想も知らず、ティアマットとアル少年は降り立った。付いてきていた精霊たちは結晶の影のウンディーネのもとに集

まっつていって、何か言葉をかけられた後、何処かに消えていく。去り際にラステイにじゃれ付いて、アークに睨みつけられたのはご愛嬌である。

逃げるように姿を消していく幼い精霊たちを見て、全くけしからんと腕を組むアーク　君は幼児保育に向いていないと、その姿を見てラステイは思っただった。

最後になって、わざわざ水晶の影から現れたウンディーネに見送られて、ラステイたちは水上に向かう。ラステイは当然として、加護を受けてからというものティアマトはウンディーネに対する恐怖心が無くなったようで、彼女が姿を現しても平然としていた。アール少年はそこそこに、ステラは間接の数が減ったのではと思われるほどに終始緊張していた。

ラステイが泳ぎつつ後方を振り返ると、水の姿をしたウンディーネが彼に向かって御辞儀をしていた。勿論他の皆が見ていないが故の行動である。

そんなことを初め、ラステイ以外の人間の前に姿を現すときは毅然としている彼女が面白くて、噴出してしまいそうになるのを何度も必死にラステイは堪えていた。その様子を察知していたウンディーネは、もし人に近い方の姿であれば羞恥で顔を紅潮させていたことだろう。水の姿で現れたのは正解だったといえる。

第二十六小節「虹のその名は」

時刻は十二時過ぎ、昼食を食べ終えた皆は、思い思いの自由行動をしていた。彼らの昼食の場での話題は尽きず、終始霊地の話題だった。そうして昼食を終えた彼らは、興奮が冷め遣ったせいで少し怠惰感を感じており、休み意味合いを込めて自由時間となっていたのである。

「はあくく、凄かったなあくく」

興奮冷めやらない様子のステラは、円形のテーブルの上で夢見心地の表情ですつと中空を眺めていて、延々と感傷に浸っている。学者志望であるゆえか、貴重な体験が出来たことが余程嬉しいのだろう。彼女の周囲には幸福に満ち溢れた空間が形成されており、だがその中には彼女しか居ない。他の皆は砂浜に居た。

「ZZZZZZZZ……うう、お……い」

疲れが出たのか、アル少年は昼食を食べ終えた後、深い眠りについてしまい、砂浜で仰向けになって寝ている。深く寝入っているのだが、その表情はともではないが安らかであるとは言えない。原因はその両隣で土木作業を行う二名が原因だった。

「（いいかアーク、そつとだぞ？ まあ、アル坊は寝入り深いみた

いだから大丈夫そうだが）」

「（了解です、マスター）」

ラストイとアークの主従は、寝ているアル少年の埋め立て工事を

行っていた。騒音を考慮してか、会話はすべて念話で行われている???が、若干一名の安らかな眠りを妨げていた。

少し離れた位置では、ティアマットがその光景を体育座りで眺めている。水着の上に大きなタオルを羽織って、敷いたシートの上、砂浜に突き刺したパラソルの下で涼んでいる。それなりに長さのあったパラソルの柄は、地面の上に見える部分の高さは何故かそれほどでもない。

座った姿勢のままティアマットが観察を続けていると、砂を大きな芋虫状に盛り上げるといふ小規模工事の終わったラスティが、ティアマットの方に歩いてきた。砂の両端には、蠢く金色の頭と白い肌の足が見えていた。それを見てティアマットは何も言わない。完全にスルーする方針である。

「よ、土木作業終了につき俺も休憩つてな、これが……隣、いいか?」

「うん」

パラソルの下で涼むことを選択したラスティは、ティアマットの許しを得て、上着を枕に横になった。その視線はカラフルなパラソルの布地に向いている。

「ん? 何だかパラソル低くないか?」

「え? そ、そうかな」

パラソルと、寝転んだ自身との距離が思ったよりも近かったことに、ラスティは素朴な疑問を告げる。パラソルを立てた張本人のティアマットは、そんな彼の感想が思い違いではないか??といった態度でいる。あまり気にしていなかったラスティは、気のせいだろ

うかと思ひ、その疑問について考えないことにした。

もしこの時ラスティが、地面の下のパラソルの柄の長さを見たならば、深く突き刺さるその長さに驚愕したことであろう。

勢い良く突き刺したほうが良いというステラのアドバイスに従って、パラソルを立てていたティアマットは、彼が追求してこなかったことに内心安堵する。

そうしていると、遠くのほうから小走りに走り寄る足音が聞こえた。

砂を蹴って小走りに走り寄る足音、それはアークであった。両手に何か抱えているようで、覗き込むようにして顔を出す。一瞬だけ思案顔になったが、特に何も言うことなく、抱えたものをラスティに差し出した。

「（？）なんだか深く刺さりすぎているような気が……」マスター、枕のほうをお持ちいたしました。ティアマットさんの分も持つてきましたが、お使いになられますか？」

アークが両手に抱えてきたのは、ラスティとティアマット両者の枕。ラスティが昼寝をすと言い出したので、走って持つてきたらしい。ご丁寧なことに、ティアマットの分も持つてきてくれた。気の利いたその行動に、二人は揃って礼を言う。

「お、気が利くな……ありがとな、アーク」

「ありがとう」

「いえ、これぐらいはどうということはありません。では、失礼します」

二人に枕を渡したアークは、お辞儀をするとテントの方に駆けて

いった。砂を蹴る細かな音が遠ざかっていく。

元々昼寝を始めるつもりだったラスティは勿論、ティアアマットも彼と同様に横になった。パラソルの柄が二人の間に入り、それが棒でありながら仕切であるかのような感覚を受ける。

吹き降ろしの風が弱くなる。アークが結界を張ってくれたのだから。水着の上にタオルを羽織っただけのティアアマットとジャージの上を着ているだけ（下は水着）のラスティには有り難いものだった。内心で二人は礼を言う。

瞳を閉じる。風に吹かれる木々が葉をこすり合わせ、どこかで跳ねた魚が湖面の水を打ち、何かの嘶き、周囲の自然を感じ取れるような気がした。視界に割く神経が無くなり、その分がその他の五感に割り振られる。少しずつ少しずつ眠りに向かう脳は、それでも鮮明に周囲の情報を拾っていた。

そうしてラスティが自然に耳を傾けていると、近い位置から声が聞こえる。直前に、頭を動かす音が聞こえた。

「ねえラスティ、まだ起きてる？」

その問いに、瞳を閉じたまま首肯してラスティは答えた。既に癖になっている、右腕を下にして眠る姿勢をとっているため、ティアアマットには背が向けられている。そのラスティの首肯を見たティアアマットが、少し話してもいいかと問う。もう一度、ラスティは首肯した。今度は「おう」と返事が加えられている。

「あのね、さつき湖の底に行ったときなんだけどね？ 私とアル君が、生まれたばかりの精霊と一緒に遊んでいたの。その時にね、海の匂い」って、言われたんだ」

「……………!？」

投げかけられたその言葉に、ラスティは思わず表情を強張らせ息を飲み込む。ティアマツトには背を向けている体勢であった為、その動揺は知られることは無かった。ただラスティは、少しだけ驚いたように反応の返事をしただけである。

ラスティの動揺に気付かないまま、ティアマツトは言葉を続けた。

「あと、命と色の混ざり合ったつても言われた。精霊って相手のことを見抜くから、きつと、私の名前のことに関係あるのかなって……どう思う？」

「多分そうだと思うぞ？ 幼くたって精霊だ、その言葉は覚えていたほうがいいと思うぞ」

人に付けられる詠語の名前は意味を持つ 教会ではそれをよ

くよく教え込まれ、名を騙ることを絶対禁忌として教えられる

教会の出身者である彼女だからこそ、精霊に言われたことに、名前が関係があるのだと思ったのだろう。ラスティは彼女の問いに、同意して、覚えておくと良いとアドバイスする。

ティアマツト。それはラスティの世界での古代メソポタミア文明の女神、神々たちの母にして海を象徴する女神。故に精霊は、彼女に海を感じたのだろう。色の混ざり合う 色の三原色、青、

青、黄、この三色を混ぜると、黒、になる それは混沌でも

あったティアマツトだからなのだろう。彼女が緑の系統が苦手なのだが、その理由を、この時ラスティは理解した。

覚えていたほうが良いと言われたティアマツトは、その意見に同意して頷いた。シートが擦れる音で、そのことがラスティに伝わる。ティアマツトは更に続けた。

「あと、アル君は、虹、って言われてた。ステラが、星、で、ラスティが、空、で、アークは、おっきなお舟、」

「ぷっ！！　おいおいおい、なんでアークだけ表現が幼稚なんだよ」

ティアマツトが、アークに関しては精霊が言ったことをそのままで言ったため、思わずラスティは噴出してしまふ。震える背を見て、ティアマツトが事情を言っつて弁明した。そんなことだろうと一応は思っていたラスティは、分かったと言っつて後ろ手に手を振っつて返す。少しだけ、ティアマツトの類は膨れた。

他愛の無い応答を繰り返している間、ラスティはアル少年の‘虹’について考えていた。同時に、アークに早いうちに聞いておけばよかったと後悔する。

虹。恐らくそれがアル少年の本名に係るワードなのだろう。そしてその頭文字二つはAr。ラスティは頭の中で、Arで始まる虹に関連のある言葉を探していた。同時に、次第に瞼が重くなる。

「（ん？　そういえば　）……………」

「？　ラスティ？」

急に黙り込んでしまったラスティに、ティアマツトは声をかける。だがその背は何の反応も示さず、ただ呼吸していることを表す音が聞こえるだけだった。

要は、寝てしまっていた。

「……………」

予告無く寝入ってしまったラスティに、少しだけ恨めしげな視線を、ティアマツトは送る。だがそのようなことをしたところで、ラスティが再び目を覚ますことは無い。

仕方なく、彼女もまた昼寝とすることにした。

第二十七小節「叶ったこと」

「マスター、ティアマットさん。もう三時を回りましたよ？」

「んあ……あーくか」

「……おはよう？」

アーク（少年）の声に、重い瞼を開けてラスティとティアマットは半覚醒した。時刻を聞いてとったラスティは、今現在ステラが用意しているであろう、お茶とお菓子'を食べる為に起き上がる。パラソルの影から出、南中から過ぎた少しだけ西よりの日差しを浴びる。硬直した筋肉を解す為に、大きく伸び上がった。涼しげな空気が肺に満ちて、脳の覚醒を促す。

そうして深呼吸しつつストレッチをしていると、パラソルの影からティアマットの声がする。

「ラスティ、すこしさがって。パラソルぬくから」

「ん？ 応、了解した」

まだ少しだけ眠そうなティアマットの声を受けて、ラスティは言われたとおり少し??一歩だけ離れた。それを確認したかは知れないが、直後にティアマットは行動を起こす。

シートを踏みしめ、強く皺を作り出す音がまずラスティの耳に入り、続いて柄の素材が変形の悲鳴を上げる。明らかに強度の限界近い力が加えられていることが直感的に分かった。

そして数秒の後、ラスティの鳩尾ほどの高さにあったパラソルに

変化が起こる。合図はティアマットの気合の声だった。

「っはああああ!!!」

「うお!?!?」

明らかに状況とは不釣合いの声。それと同時に、パラソルはラスティの頭上遥か高くまで上昇した。突然のことに、ラスティは飛びし去り尻餅をつきかける。

見ると、ティアマットがパラソルを掲げるような格好で立っていた。背を向けて立つ彼女の足元??地面から二十センチほどの高さの地点にパラソルの柄の先が見えていた。ラスティは驚愕しつつ、全長三メートルほどもあるうかというパラソルを見ている。

脳内ですばやく彼が計算したところ、どうやら彼女は一メートルも、地面にパラソルの柄を突き刺していたらしい。アル少年の埋め立て工事を行っている最中に背中越しに彼が聞いたパラソルを刺す音は、僅かに一回。つまりティアマットは、一度の動作で、柄を一メートルも差し込んだということなのだ。ソレを成し遂げる為の運動量は計り知れない。少なくとも、ラスティにはどうあがいても不可能な所業だった。

感嘆したラスティは、(彼なりに)賞賛の言葉を告げる。

「さ、流石馬鹿力???」

直後、ティアマットがパラソルを折りたたむために倒した先にラスティが居たことは、恐らく偶然であろう………きつと。

????????????

「なあ、俺がやっぱ悪いのか?」

「ダメだよラスティくん。女の子に馬鹿力なんて言っちゃ」

「そうなんですか？」

「アルくんも気をつけないとダメだよ。女の子にソレは禁句なんだから」

一悶着あったものの、皆は白い円形のテーブルに腰を落ち着けた。女性陣は水着から着替え、男性陣は既に乾いてしまっていた水着の上から衣類を着ている。ラスティの額が、何故か赤く腫れていたが、皆は苦笑いで彼に声をかけている。ただティアマットだけが、どこか申し訳なさそうに俯いてラスティの様子を盗み見ていた。

先ほどのラスティのティアマットの発言に対する会話が交わされる中、アークが皆にお菓子を持って来た。昨日クツキーを口にする事の出来なかったラスティは、一番心待ちにしている表情だ。そして、視界の端に映った青い姿に、ラスティは視線を向ける。

「お？ 今日アークが紅茶淹れるのか？ …… っっていうか、出来たのか」

それはティーポットを手に現れたアークだった。アークの後方では、恐らくステラ製であるう魔石コンロと、茶を淹れるための道具一式が置かれていた。それを横目に見つつ、ラスティは、それが昨日の時点では存在していなかったものだとは気付かない。

アークは、そんな驚いた様子の主の言葉にはにかなりて心え、真っ先に彼のティーカップに紅茶を注ぐ。瞬間、鼻腔にかつてない香りが飛び込んできた。その感動に、思わずラスティは感嘆の声を上げる。

「おお、素晴らしい……」

アークが死に物狂いで収集した知識を元に厳選された茶葉（風味を損なうことを恐れ、わざわざ専用の保管用魔具まで作り上げたここまで持つてきてある）。汲みたての新鮮な硬水で淹れられたそれは、濃い暗い？？だか鮮やかで綺麗な色をしている。ラステイの故郷の水は軟水であるため、このような色合いの紅茶を見るのは初めてだった。英語で紅茶のことを「ブラックティー」と呼ぶ理由がそこにあった。

一口、紅茶を口にする。寝起きで水分量の少なくなっていた口内に、ストレートティーが広がった。色が濃いにも関わらず、渋みが見た目より少ないのは、やはり硬水ゆえに渋みの成分が少ない故である。緑茶を主に飲む文化で育ってきたラステイだが、その香りと旨みが、並大抵の技量ではなされないということを経験に察することが出来た。それほどに、アークの淹れた紅茶は素晴らしいと言うに値するべきものだった。

「あの……マスター、いかがでしたでしょうか？」

皆に注ぎ終えたアークが、空になったポットを手に、少しだけ不安そうに、だが期待に満ちた目でラステイの表情を覗き込む。それが何を期待しているか悟ったラステイは、ティーカップを置きアークに笑顔を向けた。

「俺は紅茶に関しててんで素人だが、それでもコレが凄い美味いってのが分かる……凄いなアーク、まさかここまで凄いだなんて」

「！ 有難う御座います！！」

飛び跳ねんばかりの？？いや飛びたたんばかりに喜ぶアーク。

見るとステラがアークに向かって親指を上げていた。ソレを見たラスティは、ステラが絡んでいたのかなと、推測する???だが折角のことなので、追及しないことにした。紅茶が美味しかったからというのが最大の理由ではあったが。

「それにしても、みんな飲み方違うもんだなあ、これが」

ラスティが皆を見ると、紅茶の飲み方にしても、それぞれに個性が見られた。ラスティはやはり文化の影響かストレート。それを真似しようとしたアル少年だが、やはりまだお子様なのだろう。ストレートで飲むのはキツかったようで、一口飲んですぐにミルクと砂糖を混ぜた。ティアマットはミルク大目の砂糖込み、そしてステラが砂糖大目のミルク込みといった具合だった。

「ラスティ、ストレートなんだ」

ラスティが紅茶に何も加えないのを見て、ティアマットがそう漏らす。甘党の自分にはストレートは無理だと、ステラが続けた。アル少年は、真似しようと思って飲んだストレートの苦味に顔を顰める。アークは、さりげない事前調査でそのことは既に知っており、故にアークはストレートで飲むのに適しているという茶葉を選択してきたのだった。だからか、何故か誇らしげな表情をしている。

「まあ、俺の故郷じゃ緑茶が主流でな、紅茶を飲んだとしてもストレートなんだよ、これが」

「師匠、りよくちゃって何ですか?」

「茶葉の発酵を防ぐために、蒸すか釜炒り等を行い、揉んだ後乾燥させて作られるものですよ」

いつの間にかお茶の知識を増やしていたアークが、アル少年の疑問に即座に答えた。最も、それがアル少年に理解できているかは謎だ。

「緑茶つて、飲んだことはないけどストレートで飲むのが普通だつて、聞いた事がある」

「何？　じゃあ飲んだことがないのか？」

飲んだことが無い。ティアマットは、そのように言った。それはステラも同様のようで、どうやらこの場で緑茶を飲んだことがあるのがラスティだけであったことが判明する。それにはラスティ、すかさず緑茶について語り始めて??????

そうして、昨日は台無しになってしまった分もあってか、彼らは長い間お茶の時間を楽しんでいた。

第二十八小節「絶対王政の気分は」

「うう~~~~…つかれた」

その翌朝、朝食の席でティアマツトはテーブルに臥して疲労にうめいている。皆は彼女のことを心配そうに見、その状態を尋ねた。突つ伏した状態から顔を上げたティアマツトが、言う。

「だつて昨日あんなに」

????????????????

「ん? ……つて、なんだなんだ!？」

それは、その日の夕食を終えたときのことだった。その日も前日と同じくバーベキューの夕食で、食べ終わった後の後片付けの時間。ちょうど片づけが終わるといふ時、ラスティが突然湖の方向を向いて叫び始めた。その声に反応した皆は、ラスティと同じ方向に視線をやる。するとそこには

「わあ~~~~!! 昨日のみんなだ!!」

「え? え?」

「ふっふっふっふっふ……ほらほらティアマツトちゃん! お客さんお客さん!」

「マスター。いかがなさいますか?」

多数の幻想種たちが居た。恐らく彼らは、昨日の歌をまた聴きにやってきたのであろう。心なしかその規模が大きくなってきているような気が、ラスティにはしていたが、それは間違いではない。

様々な（気性の荒いものを除く）種の幻想種たちが、森から湖から空から、次から次へと集っている。もし仮に、今現在目の前に居る幻想種たち全てが暴れだしたとしたら、一つの城が陥落するのではないかという数が集っていた。それを見たラスティが、一言。

「……なんか、昨日より多くなってないか？」

幻想種たちの鳴き声中で彼の呟きが届いた者は少なく、アークだけがその言葉に首肯して答えた。多数の幻想種たちは、砂浜のある場所???ちょうど昨日ティアマットが歌を歌った場所を取り囲むように集まり、座るものや寝そべるもの、やただ佇むもの等という風に分かれた。ラスティたちの席の分の幅は、一応きちんと確保されている。

直立するティアマットの隣に、ラスティが立った。ただただ啞然とするばかりで、幻想種たちの方から目を背くことが出来ないティアマットは、ラスティに視線を向けずに言った。

「……片付け、終わったね」

「……ああ……どうする？」

最早現実逃避に近い両者の会話。だがティアマットは、すぐに現実に戻ってきた。

「歌っしか、無いよね」

「ああ、そつだな」

「……また、沢山アンコールしなきゃいけないのかな……」

視線の先に居る幻想種たちは皆、昨日に比べ一層輝きを増した目でディアマツトを見つめている。この場にバジリスク種が居ないことは幸いだっただろう。いや寧ろ、バジリスクの石化の呪いは解呪可能なので、この場では石化歌唱不能していたほうが良かったかもしれない???そう、重い足取りで歩いていくディアマツトの背を見つめてラスティは考えていた。

??????????

「で、あれからどの位歌ったんだっけ？」

「約二時間ほどであります。マスター」

ラスティの疑問に答えたアークの言うとおり、度重なるアンコールにより、ディアマツトは昨日よりも更に歌わされることになった。二日連続、しかも水泳などをした後でのソレは、体力的にかなり厳しい。教会騎士団で鍛えられた過去が無ければ、途中で倒れてしまっていただろう。

用事を出かけていたウンディーネが帰ってきて止めてくれなければ、そうでなくても倒れていたことだろう。

「ほんと、ウンディーネさんが来なかったらちよつとやばかったよね……」

「だって止めれない……あんなに幻想種が集まったら、流石に怖すぎる……」

??????????

「(貴様等!!) その人間がが疲労困憊なのが分からぬか!! 人間は私たちのような存在とは違うのだぞ!!)」

そんな、ウンディーネの(幻想種に向けた念話による)怒号で、ようやく幕を閉じることの出来たコンサート。疲労が溜まりに溜まってしまったティアマットを介抱しつつ、ラスティ以外がテントに入って行った。(後で聞いた話によると、ティアマットは横になった途端に気を失うようにして寝てしまったらしい。)

ラスティも、皆が置いていってしまった荷物を回収してテントに向かおうとした時、アークが彼を引き止めた。

「(マスター。あちらの方で、ウンディーネが待っているようですよ。どうやら今回の件について謝罪したいそうです)」

「(ああ……なるほどな……)」

アークの指し示した方向は、ラスティとアル少年が剣の鍛錬に使っていた広場がある場所の方向だった。何やら、いろんな意味でよからぬことが起きそうな気配を感じながら、ラスティは歩いて行く。

広場の地点につくと、そこにはウンディーネ(人の姿)と一匹の水竜亜種の幻想種が居た。その姿は、ラスティの印象に深く残っており、今回の度重なるアンコールでもっとも大きな声を上げていた姿が、記憶に残っている。青い鱗に、典型的な西洋竜の形をしている。だが、空を飛ぶための翼は無く、代わりに水かきらしい部位を持つ強靱な足が存在した。その顔つきは、決して凶暴なものではないが、尊大な態度をうかがわせた。

ウンディーネがラスティの姿を認めると、途端に緊張の面持ちに

なる。そして、いきなり膝をついて懇願するかのように言い始めた。

「ラストイハルト様!!! この度はこのような事態を招いてしまいまk????ええい! 貴様も頭を下げるのだ!!! 頭が高い!!!

この御方をどなたと心得る!!!

ごほん 真に申し訳御座いませんでした!!!」

そうして彼女は、文字通り地に顔を擦り付けて土下座の姿勢をとった????の隣に、重苦しい衝撃音と唸り声と共に亜竜の頭が叩きつけられた。地面に文字通り減り込む亜竜の頭を見て、ラストイハは絶句した。だがアークの方は「未だ足りない」といった風である。

「今回の事態は、私が注意を払っていれば未然に防げた事態でした!!! 幾ら精霊の仕事といえども今日という日に終えなくてはならないものでも無く??? (略)??」

「あ……いや、おい……」

鬼気迫る表情でしきりに土下座と謝罪の言葉を繰り返すウンディナ。そしてその度に、頭の角を水の腕で掴まれた亜竜が土下座させられる。深い穴が、竜の頭部で掘削されているかのようなその光景にラストイハはただただ言葉を失ってしまっただけで。現実についていけない思考の中、ただただ激しい上下運動を繰り返す亜竜の頭を見ていた。

「そしてこの者は、今回の主犯格とも言える存在で、数多の眷属と共にしきりに????ええい呻くな!!!?? (中略)??この者を差し出すことで、私の不始末が消えるものではありませんが?? (中略)??黙れというのが分からのか!!!?? (中略)??どうかお許しを!!!」

最早血の涙を流すのではないかという程の表情のウンディーネ、その横の、別の意味で血の涙が出てきそうな状態の亜竜。

その光景の前に、ラスティはしばらくの間言葉を発することが出来なかった。

地に額を擦り付け許しを請うウンディーネ。虫の息で力なくラスティを見つめる水の亜竜。謝罪があるといって、テントからやや離れた広場に向かったラスティ。その眼前に展開された光景に、付いていけてなかった彼だが。

「どうか、どうかお許しを！」

そう言うウンディーネの土下座する姿。の横で頭蓋が悲鳴を上げ始めている亜竜の姿を見て、ラスティは現実に帰ってきた。あわててウンディーネの行動を止めにかかる。最早お詫びに自身の核晶を差し出し（武士で言うところの切腹。尚、精霊の核晶は触媒としては最高級品。階位？ともあれば大国一つが買える）てしまいかねないし、隣の亜竜は生命の危機に瀕していたからだ。

「と、とりあえず落ち着いて、な？ 十分謝罪の気持ちは伝わったから、な？」

「ほ、本当でありますか……………？」

顔を上げたウンディーネの表情は、既に涙に濡れ始めている。そ

んな彼女が顔を上げると同時に、亜流の頭蓋の悲鳴が聞こえなくなつた。

「ああ、本当だ。だが今回本当に大変だったのはティアマツトだったんだから、謝罪はアイツにも言わなきゃ駄目だぞ？」

「あ、有難う御座います！！……それではラストイハルト様、この者の処分は如何様に致しましょう？　おい貴様、何をしている、誰が頭を上げて良いと言った！？この者は主犯格であります故、お咎め無しというには　（中略）　」

許されると思って立ち上がるうとした亜竜が、再びその頭を穴に沈める。亜竜にむけた鬼の形相を、ラストイの方向に向ける瞬間には柔らかな微笑みに変えて、ウンディーネは主犯の処分をどうするか問う。どうやら彼女の中で、先ほどの許すという言葉は亜竜には適応されていないようだ。

彼女がラストイに言葉を矢継ぎ早に語っている間。彼の斜め後方に立っていたアーク（少年）は、腕を組み不気味なまでの無表情で亜竜を見つめていた。この時ラストイが後方に意識を向けていたならば、『もう殺すしか無いでしょう』という明らかに理不尽な発言が聞こえていたことだろう。ウンディーネもまた、言外にその意を滲ませている。

ラストイは何もそこまで怒っている訳でもなく、また王の前を横切ったらそれだけで首を落とされるような王政の時代に生まれた訳でもない。故に彼は、謝罪の品のみで許すことにした。その直前にアークから注意が入ったが。

「じゃあさ、ソイツのう（マスター、鱗を貰う程度で終わるなどということは御座いませぬよう　それでは謝罪になりません。ウンディーネの体面をお考え頂けるのでしたら、せめて角の一本は相

手に償わせなくては　　（もとい？？角を一本貰うことにする）」

そう言うなり、ウンディーネは畏まりましたと答え、後ろに振り返る。ラスティの方からは見えていない、その冷えに冷え切った視線が亜竜に突き刺さる。亜竜は、緊張に体を強張らせた。

「貴様、何をしている？　あの御方が貴様の角一本で許すと仰っているのだ。本来であれば命で償うべき大罪（？）をその角一つで許されるとあらば、疾くその角を押し折るのが礼儀であろう。それともなんだ、出来ぬのであれば私が引き抜　　折ってやろうか？」

聞いているラスティが震え上がってしまう程の声を直接向けられた亜竜は、即座に行動に移った。器用に首を捻り、前足でその角を竜の誇り掴み、一気に押し折る。根元付近で折られたそれを、ウンディーネは水の腕で奪い取り、すぐさまラスティに献上した。

「どうか、御納め下さいませ」

色々突つ込みたい衝動を抑え、ラスティはその角を受け取るのだった。

??????????

「師匠師匠！！　これは何ですか？」

そう言ってアル少年が指差すのは、青白色の細長い円錐状の物体。
一・ニメートルほどのその物体は、金属のような硬度と陶器のよう

な手触りを持っていた。それはテーブルの上、ティアマットの目の前に置かれている。

「ああ、これか？　これはな????????えつと……??ほら、昨日一番叫んでた水の亜竜が居ただろ？　アイツが謝罪の意を込めてだつてさ」

詳細な状況説明を端折ったラスティ。周囲の皆は、彼の笑いが若干固いの気付かず、初めて目の当たりにする高級魔術触媒に見入っていた。一応これは、ティアマットのもの　の筈である。流石にウンディーネも、直接被害を受けたわけで無いラスティにこのような物を贈らせるつもりでは無かった筈だと、ラスティは思う

が、確証が持てない。

それを一番物欲しそうに見ているのはステラ。

「うわ~~~~!!　すっごいすごい！　竜の角だなんて初めて見た！」

彼女のその角を見る視線は、獲物を狙うようなソレ。だがティアマットは、幾ら知識が普通の学院生より下とはいえ竜の角の貴重さは分かっている。それも自身の得意な青の魔術の触媒だ。手放さないとばかりに角を握った????相変わらずテーブルに伏したままで

「貰おうとしちゃいかんぞ？　それは昨日のコンサートの給料なんだからな」

ステラの言葉を聞くラスティが、ステラをたしなめる。流石にそれが不味いのは彼女も理解している風で、冗談半分に頬を膨らませて反応するだけだった。

そんなやり取りをしている内に、ステラがあることを思い出す。

「あ、そう言えば、今日学院に帰る日だけど、どうする？ ホントに筏作っちゃう？」

「あ、そっぴや今日だったけな……前々からの予定じゃなかったから、二泊分のものしか持てなかったんだっけ？」

ステラの言う、今日が帰る日だという言葉。それは皆に二日前の道のりを思い出させる???特にティアマットが鬱になりかけていた、がそれはアークの言葉ですぐに解消された。

「あ、それに関しては問題ありません。ウンディーネさんとも話して、帰る際には昨日迷惑をかけた水竜と眷属さんたちが送ってくれるそうです」

「……有り難い話だな、それは」

一瞬の間をおいてラスティが言う。彼の脳裏には、有無を言わずその仕事をさせられることになった水竜の姿が浮かんでいた。

そうして言いよつた無気分に浸っていると、ステラがならば時間に来るまで遊ぼうと声を上げた。デフォルトで体力がレッドゲージのティアマットは、自分は少しテントで休んでから行くと言い、それを聞いた皆は彼女をテーブルの上に残してテントに向かった。一言、ラスティはティアマットに声をかける。

「突っ伏してるよりだったら、テントで横になっての方が良いんじゃないか？」

「……うごきたくない」

ならばテントからこのテーブルまで来たのは最後の力だったのか

と、そう内心で突っ込みつつ、ラスティもまた着替えにテントに向かった。その先では、テントの中から吹き飛んできたアル少年の姿が見える。

そんな光景に驚くことの無いラスティは、感慨を込めてこのキャンプを思い返した。

「……地味に濃いキャンプだったな」

紅潮しつつ頭を抑えるアル少年を介抱しながら、ステラの着替えを待つラスティだった。

第二十九小節「精霊は優しいか、そうでないか」

「さつてと、荷物まとめたか？」

時刻は午後四時を回る。キャンプ最後の湖での遊泳を終え、彼らは午後一時近くから昼食を取り始めた。食事の後、学院への帰路のために皆は荷物を纏め、出発の準備を整える。

バックパック状のバッグに、容量限界付近まで詰め込んでラスティは背負う。振り返って皆の準備が出来たかを問うと、皆はすでにバッグを背負っていた。

「うん。大丈夫」

「オッケーだよ！」

「僕も大丈夫です！」

午前中の大部分を体力回復に費やしたティアマットは、既に血色のいい顔色を取り戻しており、メンバーの中で最もサイズの大きいバッグを背負っていた。反対に午前中一杯泳ぎ続けていたステラは、健康的な疲労感を醸し出しつつ、三番目に大きなバッグを背負っている。非力なアル少年とアーク（少年）はランドセルほどのサイズだ。

準備が完了しているのを受けて、アークがラスティに問う。

「マスター、それでは宜しいでしょうか？」

ラスティは大きく頷いた。

精霊の守護するここの湖は、豊かな水源でもあり、ここから流れ

出る河が幾つか存在する。その中でも深く大きな河川、学院の比較的近くを流れるものの辺に、彼らは向かった。

兩岸に深い森の見られるその河は、ラスティの故郷で見られる流れの急なものではない。川幅が広く、その流れは穏やか。気泡が立つことなく静かに流れていく河は、底の砂の色を反映してかやや白く見える。

そしてその河の浜辺に、それは居た。

「おお……近くで見るとほんとおつきいね……」

ステラが感嘆の息を漏らして視線を送る先には、青い鱗の巨躯を持つ、幻想種の中でも最高峰の種、龍種????水竜の亜種が待っていた。

亜竜は彼らの姿を認めると立ち上がり、ラスティとアークの姿を認めると途端に緊張した様子を見せる。だがそのことは、感受性の強いアークと、精神状態により竜種がどのような行動をとるかということを知っているラスティのみが分かった。亜竜は尻尾の先のみを丸めている。

昨日、半ば脅迫に近い形でティアマットを歌い続けさせてしまったその亜竜は、その地の守護精霊ウンディーネの怒りを買って、こうして彼らをその背に乗せて運ぶ仕事をさせられることになった。頭の二本あった角のうち一本が、謝罪の一環として今はティアマットの所有物になっている。

ラスティとアークの口から、事情(の一部)を聞いていた皆は、竜の背に乗ることが出来るとあって興奮気味の様子である。特にステラは、どさくさにまぎれて痛覚の少ない部位から鱗を盗んでいきそうな勢いだ。

皆がその亜竜に近づいていくと、その傍らの水が盛り上がる。それは徐々にヒトガタを形成し、水で出来たヒトをつくりだした??ウンディーネである。心なしか、亜竜の尾の丸まり具合が強くなっ

た。

「昨日はすまなかつたな、客人よ」

「そんなことはありません。ウンディーネ様のおかげで私は助かりました」

「そう言ってもらえると、有り難いものだ」

仰々しい口調のウンディーネが、彼らに向かって話しかける。それは謝罪の意を示す言葉で、声は尊大ながらもその意はしかと感じることが出来た。皆は礼と返答で答える。ウンディーネは亜竜の体に触れ、皆のほうを向いた。

「既に聞いているかとは思うが、この亜竜がそなたらを運んぶ手筈になっている。荷物はそこらの眷属にでも預けたまえ。遠慮はせずともよいぞ？ コレはこの者共の罰則なのだからな」

ウンディーネの言葉に従って、皆はやや小柄な亜竜の眷属たちに荷物を預けた。荷物を尻尾で受け取ったそのトカゲ姿の眷属は、河につくられたマット状のエリアにそれを置いた。良く見てみると、密集した眷属たちがそれを作っているようだ。ティアマットの荷物が置かれた際、一瞬その場所が沈みかける。

荷物を預けた彼らは、亜竜の背に飛び乗った。亜水竜の背は、水の抵抗を抑えるためか鱗があっても大分滑らかな肌触りをしていて、少し冷たい。

後方から、ステラ、ティアマット、ラスティ、ラスティに背を支えられる形でアル少年、亜竜の頭の上にアークと座り、出発の用意が完了した。亜水竜がその巨軀を、ラスティたちが水に濡れない程度に水に沈める。出発の直前に、ウンディーネが亜竜の頭に近寄る。

「では客人よ、もしまた訪れることがあらば、私はそなたらを歓迎しよう、では、さらばだ。」

(そして貴様、くれぐれも粗相などしてくれるなよ?)」

亜竜の耳元で何やらウンディーネが囁くと、亜竜は下流に進みだした。後方に流れていくウンディーネの姿に合わせて、ラスティが腕を振る。その行動に他の皆も習って手を振り出した。湖の景色と共に遠ざかっていくウンディーネは、その行為に、慎ましく手を振って答える。

少しずつ遠ざかっていくその姿を見て、ティアマツトやステラは感慨深げに言った。

「私、精霊って……もっと怖いって、思ってた」

「あ、それわたしも！でも意外と優しい感じだったよね……。……でもやっぱりちょっと怖いかも」

そうして、ウンディーネに対する様々な感想を交わしつつ、姿が見えなくなるまで手を振り続けた。その青い姿が見えなくなると、自然、視界に入っていた亜竜の尾の丸まりが緩む。

「(フッフ、ウンディーネの姿が見えなくなったからといって安心してはいけませんよ？私がいることをお忘れなく……ネ?)」

再び強く丸まった尾を見て、ラスティは首を傾げるのだった。

第三十小節「黎槍のアルバ」

私立ハルバルト学院。貴族と平民との生徒数非が一對一という、従来存在していた‘貴族学校’、‘平民学校’などとは毛色の異なる学院で知られている。

その学院の敷地中央に聳える本棟。全十二階層のその建造物の最上階の一室、二人の男性が対峙していた。

教室の半分ほどの広さの部屋、焦げ茶のフローリングはワックスで磨き上げられ光沢を放ち、壁紙の白は弱く光を反射する。室内のもの的大部分??とはいつても、執務に必要な最低限のものしかそろっていない??が木彫りの調度品で構成されており、部屋は落ち着いた様相を呈していた。

「うむ、で、このことなのだが……………」

腕を組み黒革の椅子に座り、唸るように低い声を出す男性は、この学院の学院長アルベリオス・ヴァイル・レーベンヴァルト。正装に身を包み、丁寧に切りそろえられた口ひげと、年季をうかがわせるやや険しい表情が、威厳を漂わせている。

その男性の机の前には、若い男性が立っている。

「今年の夏季休業中魔獣討伐に、私も参加しろというのですか、学院長?」

まだ歴史の浅い学院の中で、新任になってから三年目のアルバ・アーキナムだった。その垂れ目はどこか眠気が残っているように感じさせ、だが佇むその姿にはそれを感じない。全身を覆い隠すほどの赤茶のローブの下からも分かる鍛えられた肉体。それが教師でな

く歴戦の戦士を彷彿とさせた。

今回アルバが依頼されているのは、この学院で夏休みに行われる魔獣討伐の訓練のようなものの護衛・引率だった。ここ学院には、将来騎士や軍人などの職に就こうと考えている生徒たちも存在する。そんな彼らに魔獣との実戦を経験させるといふ企画が、この夏季休業中魔獣討伐だった。勿論事前に契約書を書いてもらい、親のほうにも了承をとっている（怪我に関する責任は問わないというもの。だが流石に死亡してしまった場合はそうはいかない）。

アルバの質問に頷いたアルベリオスは、神妙な面持ちのまま喋った。

「うむ。毎年希望を募って比較的安全な地帯に連れて行っておつたが、今年は墮嚙が出おつた。アレは土地を汚す。現に隣国では墮ちた精霊も確認されておるのでな　魔獣どもが凶暴化しているおそれもある。故にお前にも子供達の御守をしてもらいたいのだよ、
『レイソウ黎槍』」

「その名は昔の話です、学院長。この腕ではもう槍は握れません」

黎槍、そういわれたアルバは、器用に方眉をあげつつ自身の右腕金属製の義手を振りながら答えた。だがそんな言葉も、アルベリオスは一蹴する。

「ふそれでもココの教員にお前に勝てる者など居らんだろうが」

「???はあ、まあ確かにそうなんですけどもね…これが。了解しました。参加しますよ」

そんな言葉に、確かにそうだと答えたアルバは、少し肩を降ろして観念する。元々あまり抵抗するつもりではなかったようで、短い

やり取りでアルバは抵抗を諦めた。本来はこういった戦闘関係のことを教える職にいるわけではないのだが、学院長の依頼とあっては断りきれない部分があったようだった。

アルバが護衛・引率を引き受けることに観念したことを受けて、アルベリオスも姿勢を緩める。同時にアルバも姿勢をやや崩した。その姿を受けてアルベリオスは、口元を歪める。

「ふむ、やはり堅苦しい雰囲気は苦手か？ アルバ」

「そりゃ当たり前だっつもの。というかアルベロの旦那、仕事の話で緊張感のある空気出すの止めようぜ？ 疲れるんだが、オレ。それに、私’の一人称はいかん、自分で言つてて気味がわりい」

急に親しげな口調になったアルベリオスに、アルバは彼の愛称をいって答えた。親しい友人と話すときのような口ぶりである。アルバのそんな言動に、自分も聞いてて気味が悪かったと答えたアルベリオスは、座った椅子の上で姿勢をかえて、親しげな視線を送つてアルバに問う。

「止めて欲しくばその、旦那’を止めるんだな」

「小さい頃からそう呼んでたからな、今更抜けるもんでもないだろ。恨むなら自分をそう呼ばせていた過去の旦那を恨んでくれ」

アルベリオスの言葉をそう言って返すアルバ。アルベリオスは少し肩を下げて軽いため息を吐き、彼のせいで影で自分が、旦那’と呼ばれるのだと言う。言われた本人は何処吹く風といった風だ。色々と諦めたアルベリオスは、アルバのほうに向き直る。

「して、腕の調子はどうだ？ 墮嚙とやりあった時、壊れたのだから」

う？」

「これはスペアに作ってもらっていたやつだ、前のは粉々になっちまった……あれ、すっげえ値張るんだがなあ……メンテナンスぐらいならオレにも出来るが、作り直すのは流石に無理なんでね」

「確か……それはアルナ導師の作品だったな。まだ彼女が無名だったころの作品と聞く」

アルベリオスが言う。対するアルバは、彼に視線を向けずに、後頭部を左腕で掻いた。いつからかするようになった癖だと、ソレを見てアルベリオスは思う。しばらくの間の後、彼は答えた。

「……知り合いに、将来有望な天才が居ると聞いたんだよ」

そう、ぶっきらぼうに答えるアルバは、自身の右腕　金属で構成された義手を、ローブの上から撫でる。金属光沢を隠すため嵌められた手袋が、赤茶の布地の上をなぞった。

二往復、右腕の固い感触を感じたアルバは、再びアルベリオスに向き直る。

「まあとりあえず、引率の話は了解した」

そう告げると、彼はその部屋????学院長室を後にした。

学院北東の競技場（一部生徒からはコロッセオとも）。そこでは

本日行われる夏季休業中魔獣討伐に参加する生徒たちが集まっていた。

剣・槍・弓・杖を始めとした様々な獲物を携えた少年少女が集っている。防具の装備は基本軽装で、重装備の者は殆どいない。目的地までは馬車での移動であり、また魔術を併用する者が殆どだからである。魔石やその他補助具を持つのに、鎧は余りにも不適切だからだ。

そんな中、ひときわ目立つ緑色の髪を持つ少女　ポラリスが槍を担いで佇んでいる。動きやすい細身の上下の衣服は、黒地に緑のラインが走っており、髪留めで纏められた彼女の髪色を際立たせている。腰の後ろに付けられたポーチには、彼女が得意とする緑の魔術を使うための魔石群が詰め込まれている。その他の色の魔石は、小さなポケットに分割して数個ほどしか装備されていない。

その彼女に、背後から声をかけるものが居た。

「ほんとポラリスは目立つなあ　アタイ、遠くから見すぎてすぐにはわかったよ。よっ！　ポラリス！」

声をかけられてポラリスが後ろを振り返ると、そこには彼女より一回り背の高い少女が立っていた。やや男っぽい口調を反映してか、彼女の髪は短く切りそろえられている。ポラリスのように動きやすい仕様の上下は、茶や黄が主な色となっている。だがそこに地味さを感じられず、元気のいいその表情がその色が明るいものであるかのように錯覚させる。日に焼けた肌が、彼女の姉御という雰囲気を一層濃くする。

軽鎧の胸当てを装備するポラリスとは異なりベストを羽織る彼女の姿を見て、ポラリスは微笑んだ。彼女の発言に、その少女はやや固まる。

「あら？　ティグ、珍しいですね、貴女が時間に間に合って集合す

るなんて」

「え？ いや……そ……なあ？」

ティグと呼ばれたその少女は、ポラリスの言葉にはに cand で誤魔化した。ポラリスは槍を右手に持ち腕を降ろした姿勢でやや大きく息を吐く。二人の間で、何やら通じ合う事情があるようだ。

彼女の名前は、ティグリス・アルクイナ。ポラリスのルームメイトで、彼女と同じ武術系クラブに所属している。ポラリスの言動から、普段の彼女は時間通りに行動しない性格の人間であるということがうかがい知れる。

その二人の輪に、もう一人の人影が現れた。

「お、オレらのとこの一年生はお前ら二人だけが参加か……まあそれが妥当なんだろうな…準備はできてるか？ 二人とも……って！？ ティグが間に合ってるだど！？」

二人の側面から現れたのは、赤茶の髪を逆立てた長身の男子生徒、アクセル・アーキナム。ポラリスとティグリスの一つ上の先輩で、面倒見のいい先輩として慕われている。ラストイたちの担任アルバ・アーキナムとは親戚で、叔父と甥の間柄である。

アクセルが二人に声をかけ、ティグリスが間に合っていたことに驚く。ポラリスよりも大げさな対応をされたためか、彼女は顔を赤らめて怒った。

「アタイがたまに間に合っちゃだめなんかよ！」

「落ち着きましょうティグ、先輩が驚くのも無理ないでしょう？」

ポラリスになだめられ、ティグリスが落ち着きを取り戻す。アク

セルは困ったように後頭部を掻いて、小さく一言謝った。一応の許しをもらったアクセルは、急に表情を改めて二人に向き直る。

「っとまあそれはいいとして、だ。オレらの乗る馬車はあっちだ」

そうして彼が背中越しに後方を指差す。彼の指差す方向には一台の馬車が鎮座しており、中からは彼女たちの先輩が手を振っている。ポラリスとティグリスは先輩たちに手を振り返し、アクセルの後について馬車に乗り込んだ。

??????????

競技場から出た馬車は、校庭内に存在する道を通り、校門を抜けて目的地に向かう。外見こそ質素であるものの様々な工夫のなされた馬車は、振動が少なく乗り心地がいい。あくまで従来のものに比べてだが。

直方体状の馬車の中から、ポラリスは外を眺める。自身の（強化式の恩恵を受けた）全力疾走よりは遅いが、停滞する風を伴って景色が後ろに流れていく。戦乱後になって整備された道の上をすすむ馬車の車輪の音が心地よい。

風を感じながら景色を眺めるポラリスの耳に、彼女にとって非常に興味深い言葉が飛び込んだ。

「なあ知ってるか？ 今回のイベントの引率の先生に、今回はうちのところの叔父も混ざってるんだってよ」

「へえ、あの先生が……」

自身の後方で、アクセルとティグリスが今回の引率にアルバ先生が加わっているという会話を交わしていた。本来このようなイベン

トに関わることの少ない、魔術理論関係を指導する先生が関わっているということにポラリスは疑問を持った。二人の会話に耳を傾けていると、その会話は期待していたものとは違う話題になる。

「そういえばポラリス、補修授業の間、いつつもアルバ先生におっかけられてたよな！ほんと、すごい形相だったぜ、アタイ腹抱えて笑っちまったよ！」

思わぬ発言に、ポラリスがこけるような反応を起こす。外を眺めている姿勢から後方に振り返ると、アクセルとティグリスが仲良くニヤけていた。ポラリスはため息をついて弁明。

「だって朝からずっと文字漬けなのよ？ 体動かせないのよ？ ストレス溜まるじゃないの」

「……前々から思ってたけどさ、ポラリスってアタイより落ち着きないよな……」

ポラリスの発言に、彼女の容姿と口調からは想像も付かない運動への欲求を感じたティグリスは、苦笑いで感想を述べた。アクセルのほうは噴出してしまいそうになるのを必死に堪えている。

ポラリスはそんな二人の反応を受けて、拗ねたように口を尖らせた。ティグリスになだめられ、一応は機嫌を直す。

そこからしばらくは、三年生の先輩から今回の討伐の概要と注意点などが告げられた。前もってその殆どをすでに覚えていたメンバーたちは話半分と言った様子で、その先輩もそれを容認している。思いのほか規律にはうるさいわけでは無い様だった。

そうして説明が終わると、三人は先ほどのアルバ先生に関する話題を再開させる。

「そういえばアルバ先生、足物凄く速いですよね？ 私速さには自信があつたのですが、あの先生を振り切ることが出来ませんでした」

「（お前、振り切つた後どうするつもりだったんだよ…）まあポラリスは部内でも足はトップクラスだもんな？？自信があるのは分かるが、叔父から逃げれるとは思わないほうが良いだろうな…あの人は凄すぎる」

ポラリスの、アルバ先生の足の速さについての発言に、アクセルは感慨深げに語る。そんな彼の姿を見て、ティグリスが質問をした。自分の腕甲と、魔石の位置を確認しながら彼女は言う。

「そういえばアクセルも、アーキナム」だったよな。じゃあやつばあの先生も槍とか符術すごいのか？」

アーキナム一族。貴族でこそ無いが、国内に存在する一族ではその手の方面では有名で、多数の槍の使い手や、長い布にルーンを刻んだ特徴的な礼装を用いた符術を用いることで有名である。アクセルもその例に漏れず、槍の技量は三年生を抜いてダントツで、ポラリスも彼には一度も勝利したことが無い。

そのアーキナム一族であるから、アルバ先生もまた槍の名手だと考えたティグリスの質問に、アクセルは後頭部を掻いて唸る。

「あ〜〜、そうだな…：…凄いつていうか、一族最強だった。現一族党首の俺の親父よりも強かったよ」

アクセルから告げられたその言葉に、ポラリスとティグリスはおろか周囲の部員たちまでもが静まり返った。アクセルはやや焦り気味で周囲を見渡す。

「？ お、おい皆どうしたよ……………」

周囲のみなの表情は驚愕、そして次の瞬間には強い好奇心。槍の名家アーキナムの党首すら上回るアルバ先生の情報を聞き出そうとしてか、皆は一斉にアクセルを問い質した。

「おい！ それは本当かね！？」

「詳しく教えていただきたいですわ！」

「早く言えよバカセル！」

「本当にあの党首よりも強いの！？」

「なんでそんな人がここで教師なんてしてるんだよ！？」

「早く言えよ加速度的馬鹿！」

三つに一つ質問とはまるで無関係（だと思われる）な言葉が浴びせられる中、アクセルの悲鳴が馬車の外まで響き渡った。

「何やってんだ？」

馬車の一団の先頭まで鳴り響くアクセルの悲鳴に、アルバは首を傾げるのだった。

第三十一小節「カゲロウ」

「……………どうしてこうなっている」

目的地付近にたどり着き、各自が休憩と昼食を済ませた頃だった。やや広めの空き地に馬車たちを停め、三年生を担当する教師が今回の討伐の流れを説明する。そしてその説明が終わり指定されたエリア内での討伐が始まると、アルバのもとに一部の生徒が殺到し始めたのだ。

「先生、アーキナム一族が一番強いって本当ですか!？」

「アクセルから聞きました!」

「え!?! マジかよ!?!」

その一部の生徒の声を聞きつけて、更に多数の生徒たちが集まってくる。特に彼が去年担当していた現三年生の生徒たちの勢いが激しい。何が起こっているのか状況の飲み込めなかったアルバだが、皆から浴びせかけられる声の中に「アクセルから聞いた」というものを聞き取った彼は、即座に周囲を見渡し、百九十センチ以上の長身の視界は生徒たちの波の上を見渡し、即座に騒ぎの根源を捕捉する。彼は大声で叫んだ。

「おいアクセル! てめえ何処に行くつもりだ!?!」

見つからないうちに場を離脱しようとしていたアクセルは、その叫び声に驚くと、駆け足で森に入り込もうとし始めた。アルバはそれを捕まえようと行動に移る。

「ほらお前ら！ 今は課外授業だぞとつと森に入りやがれ！！
んでもってアクセル???? 逃がすかあ!!!!」

押し寄せる生徒たちの波を追い払い、アルバは足元に赤の魔石を打ち付ける。足場となる魔方陣が赤い光と共に展開され、その上でアルバは膝を深く折り前傾する。

「待てやおい!!!!」

赤???? 火の爆発的なイメージを持って発動された‘踏脚’は、彼にそのままの爆発的加速度をもたらし、アクセルとの距離を瞬時に縮める。アクセルが後方を振り返りその姿を確認した時には、彼の左腕はアクセルの襟を捕らえていた。全く笑っていない目で微笑む自身の叔父に、アクセルは冷や汗を他者が視認できるほどに流した。

「お、叔父さん、どうしたんですか？」

恐る恐る声を出した彼に答えたアルバは、空いている右腕を持ち上げながら言った。

「……………いや何、入学するときにお前に言った‘オレのことを口外するな’という約束、お前が忘れていないか確かめようと思ってな？」

????????????????

そう深くは無い森の中を、ポラリスとティグリスの二人組みが歩

いている。木漏れ日の量は多く、地面に生い茂る草たちの背は低い。十分に視界と逃げ場を確保できるその場を、足が草を踏みしめる柔らかい音を聴きながら歩いていった。

歩き始めてしばらくして、ポラリスがふと後方を振り返る。

「ねえティグ？ 今叫び声が聞こえませんでした？」

「いや、ポラリスの聴力であやふやな音を、アタイが聞き分けられる訳ないだろ……」

（ティグリスは知らないが）水晶髪による緑？ 風の恩恵を受けているポラリスは、遠くの音を聞き分けることが出来る。人間の可能な範囲を容易に凌駕しているその聴力は、ティアマツトの腕力と並び、一年生の七不思議’に数えられているそうだ。その七不思議が本当に七つあるのかは定かではない。

ポラリスの聴力で定かではない音など、聴力を補助する魔術を展開していないティグリスに聞き取れる筈も無く、鳥の鳴き声しか聞こえないと思いつつ、彼女はやや呆れ顔で言ったのだった。

気を取り直して先にすすむ。森に入って三十分が経過したところ、ポラリスがふとティグリスに話題を振った。

「そういえばティグは、今回の討伐私とペアでよかったのですか？」

突然の言葉に、ティグリスは首を傾げる。何を言ってるのか分からないままに、当たり前だと答えた。その言葉を受けてポラリスは、悪戯っぽく笑う。その表情を見てティグリスは、彼女が何を言いたいのか理解して、頬が紅潮し始めた。

「あらあら、折角アクセル先輩と二人つきりになれるチャンスでしたのに」

「！！いや、おま」

テイギリスがあたふたし始める。その様子を受けてポラリスは笑みを更に強くし、からかう言葉を更に続ける。

「折角お付き合いなさっているのですし、中々デートも出来ないのですから、こういうときぐらいは甘えても良かったのではないですか？ そう、森の中で二人つきりですよ？ 木の陰に隠れてしまえば、巡回の使い魔から姿を」

「だぁー！ー！！ 止めてくれポラリス！ アタイそういうの苦手なんだって！！」

日に焼けた顔を真っ赤に染めて懇願するテイギリス。アクセルとテイギリスが付き合っているということをはからなかったポラリスは、やりすぎたかなと思いつつも、あわてる彼女の様子を見て微笑む。自然、彼女がアクセルに告白したときの、噛みに噛みまくった台詞が頭に浮かんできて、また、笑った。

表面上の謝罪をしたあと、テイギリスの頬が赤いままにまた歩みを進めた。そうしていると、上空から飛行する物体が現れる。それは二人の目の前にとまった。

「？ 使い魔？」

「《ゴーレムだ、ポラリス》」

赤茶の素在で出来た鳥形の物体に首を傾げると、額の赤い魔石が振動して音声を発した。アルバのものである。

上空を巡回する使い魔やゴーレムが生徒たちの上空を飛び索敵し、

それを生徒たちにつたえるためのものであった。符術で編まれたゴーレムが、彼女たちに魔獣の存在を告げる。

「《進行方向右に一体。距離は約百メートルだ。注意しろよ一年生。あとポラリス、これを使い魔というならばもう一度みっちり補修をつけてやるがどうする?》」

「すみませんほんとうにやめてくださいだいじょうぶですいまのはほんのじょうだんですはい了解」

「……………了解」

報告を終えた赤茶のゴーレムは飛び去っていく。その姿を見つめるポラリスが、青ざめていたのは仕方が無いのかもしれない??? ? 筈である。

このゴーレムが告げなくても、ポラリスはすでに獣の唸り声を感じていたため必要なものでは無かったのだが、全員が全員そのような技能を持っている訳ではない。尚、生徒たちが危険な状態と判断されたならば、ゴーレムが特攻し使い魔が足止めし、教師が駆けつけることになっている。

その報告を受けて、ティグリスの表情は緊張感を持つ。両の手に嵌めた腕甲の具合を確かめ、魔石が取り出しやすい位置にあるかどうかを確認する。ポラリスも同様に準備をし、前方を警戒しつつ槍を両手に構えた。顔色は二人とも正常に戻っている。

「相手にもよるけど、アタイが突っ込む。ポラリスは止めを」

ティグリスの言葉にポラリスは頷いて、ポラリスを先頭に足音を忍ばせて歩みを進めた。

アルバから魔獣の存在を告げられてからしばらく、ティグリスとポラリスの前にその魔獣が姿を現した。その前触れを、聴力のいいポラリスが告げる。その声は強張っていて、緊張の程が伺えた。

「こっちに近づいてくる。もうこっちに気付いてるわ！ 散開して！！」

予想以上の速度で足音が接近してくることに焦りを見せたポラリスが、ティグリスにそう指示を出す。彼女の聴力を信じてティグリスは大きく横に飛び跳ね、ポラリスはその反対に跳躍。そして直後、獣の影がその位置を通り過ぎた。緑の残光を引いて跳躍したその影は、着地の勢いを爪で殺して停止。抉られた草が、その爪の威力を物語っている。

現れた魔獣の姿は大型の狼のシルエットをしている。元は灰色の毛色の狼が変貌したものだとは分かり、属性色のくすんだ緑の毛に灰色の毛が混じっているのが見て取れた。その体高1メートル弱ほどの四足歩行獣を見て、ポラリスは小さく言う。

「禍外狼カゲロウですか……狼の魔獣なら私たちの匂いで存在を察してもおかしくありませんものね……」

魔獣禍外狼カゲロウ。狼がミスト（空气中に高濃度の魔力が霧になって視認される現象を言う）に侵されて変質した存在。幻想種のような

人のイメージの中に存在するもの」とは違う魔獣は、その存在に意味が与えられず漢字表記の名前が付けられている。そのカゲロウを体現する霧が、その体躯から立ち上っていた。

威嚇するその禍外狼カゲロウの姿を見たティギリスは、刺激しないようにゆっくりとポラリスに近寄る。聴力のいい彼女に聞こえるぐらいの小さな声で話した。

「せんせー達の言ってた通りだ。なんだか気性激しくなってる。自衛以外で警戒行動をめつたにとらない禍外狼が、アタイらに唸ってるぜい？」

この場に来る時に渡された資料には、こちらから戦闘行為をしかなければ、（余程の飢餓でもなければ）基本人を襲わないとされる魔獣であると書かれていた。だが今現在禍外狼がとっているのは、タイミングを見計らい姿勢を低くするという積極的な戦闘行動。それは魔獣の知識のあるものにとっては異様なことと言えた。

だがそんな光景を目にしても二人は一向に冷静さを保つたままである。凶暴化したといえど能力そのものに変動があるわけではないという事実と、危機とあらば援護してくれる存在が居ることに安堵をどこか覚えているからだ。突然の強襲に驚きこそしたものの、彼女達は冷静さをすぐに取り戻していた。そしてその冷静な口調のままで、ポラリスは静かに合図する。

「やはり墮嚙の気にあてられたのでしょうか。とりあえずティグ、行きますよ？」

「あいよ！」

そのポラリスの言葉に元気良く答えたティギリスは、拳を構えて駆け出した。声に反応して、同時に禍外狼も駆け出す。ティギリス

はすぐに走る速度を落とし、ジャケットの裏から黄の魔石を取り出して右の拳に握りこんだ。身を引き絞って大きく構え、詠唱を行う。

「Dig eis, rein diva foie ln（唸れ、その鼓動を指し示して）！」

接敵まで三メートルという地点で、ティグリスは姿勢を低くし地に拳を打ちつけた。同時に拳の先に張り付いていた魔方陣が地に刻まれる。

その瞬間、あと数瞬でティグリスに攻撃が届くであろう距離であったにも関わらず、禍外狼は側面に飛びのいた。そこにはいつの間にか地に亀裂が入っており、直後数本の土の棘が現れる。地面の「隆起」を縮小して顕現させた、地形を利用する魔術であった。だが森の中ということとで地面は濡れており、硬度のある棘を出すまで時間がかかってしまった。最も、それを計算した上で魔術は行使されており、決してタイミングが悪かったわけではない。

「ムダに勘よくないか!？」

「禍外狼は警戒心と感覚がするどいのですよ？」

悔しがるティグリスに言い放ち、飛びのいた着地の間隙を縫うためにポラリスは疾走する。踏脚とは異なる移動補助術式を足元に展開するポラリスは、緑の風となって禍外狼に迫った。

かわす際に大きく跳びすぎたため、着地の勢いを殺すため、地に爪をつきたて踏ん張る禍外狼。だがその隙は大きく、ポラリスの接近に対応しきれない。体勢を整えられないままに、ポラリスの槍が、その身に襲い掛かる。

「やあ！」

速力と彼女自身の瞬発力を以て放たれた槍は、一直線にカゲロウに向かつていった。

第三十二小節「フインの一撃」

「……………拙いな、これは……………」

上空を旋回するゴーレムから送られてくる映像を、瞼の裏で見ながら、アルバはそう呟いた。現在魔獣との戦闘が行われているのはアルバの受け持つ範囲ではポラリス・ティグリスペアのみであったため、彼はその様子を観戦している。

「ん？ 叔父さん、何かあったのか？」

そのアルバに、その隣で痛みを耐えるみだ目をし、正座させられているアクセルが声をかけた。アルバとの間の個人的な約束をうっかり破ってしまったために正座させられているアクセル（彼と組む予定だった生徒は、他の部で奇数だった部員であまってしまった子が居たため事なきを得た）なのだが、会話までは禁止されていないようで、アルバはその言葉に答える。

「……………禍外狼が、自分から人に襲い掛かった」

「……………狩行動じゃなくてか？」

アルバは頷く。彼らは、禍外狼と二人の一年生が戦闘していることを問題視している訳ではない。ココに居る禍外狼は存在年数が短いためそれほど強くは無い。一年生の中で相当強い部類に入る二人が組むならば若い禍外狼に敗北することなど無いのだ。最も、緑の属性色の禍外狼は勳が鋭く、回避に長けるといふ獣らしくない性質を持つため、戦いなれない二人は仕留めきるのに時間はかかるだろ

う。

だが問題はソレとは別にあつた。

「……つまりココは墮嚙の通つた後だ。しかも未浄化だ」

墮嚙は、人の怨念をつれて干渉現象と共にそれを撒き散らしつつ移動する。事件後に判明した隣国の遺跡でそれが目覚めたということと、非常食を作り出していたということ。つまりその通り道に負の念を残していた可能性があるということだつた。学院長の懸念が当たっていたことになる。

あたつて欲しくは無かつた懸念にやや頭を抱えつつ、アルバは閉じた目を開いて立ち上がった。

「……もしかしたら死霊種の魔物が出るかもしれんな。アクセル、罰は後だお前も準備しろ」

「いや叔父さん、オレ死霊種だなんて戦つたことないんだけど」

「四の五の言うな。人手が足りないんだよ人手が。幸いお前はオレが小さい頃から稽古つけてるからな、事の次第によつてはオレと組んで出てもらうぞ？ ……ここに残ってる二、三年にも言つておかんなとな」

そう言つてアルバは、他の教員たちと待機している生徒達に周囲の警戒の強化を呼びかけるため、その場を去つていった。残されたアクセルは脚の痺れをとりつつ、仰向けになつて呟く。

「いや叔父さん、あんた槍使えば一人で大丈夫だろ？」

どうか出てきませんようにと心の中で祈りつつ、起き上がったア

クセルはもしものためにの準備を始めるのだった。

アルバが待機中の人員に警戒を呼びかけているころ、ポラリス、ティグリス二人と禍外狼との戦闘は未だ続いていていた。ポラリスの槍の一初撃が掠るだけで終わってしまうという結果となってから、禍外狼は警戒を強めヒット&アウェイの戦法を取り始め、戦闘は長期化していた。

「いい加減に　　！」

苛立ちの声と共に、幾度目となるか分からない突きを放つポラリス。走る禍外狼の体を捉えたかと思われたそれは、その体から立ち上る陽炎を掠るだけで直撃することは無い。再度禍外狼に、距離を離された。

「S i v e n r u a w i o e m d e i n q e r t (七つ槍は包め穿つ)」

そこにティグリスの追い討ちがかかる。着地点を取り囲むように展開された魔方陣が、幻想の土槍を放つ。だが先ほどとは違い、無理な回避を行わなかった禍外狼は、着地の直後槍の間を縫って交わしきる。七つの槍全てが禍外狼の陽炎を貫通するが、だがその霧の内側の本体には届かない。

警戒を強めた禍外狼は、身にまとう霧を濃くしていて、その体のシルエツトすらおぼろげにしか分からないほどになっている。この霧に魔術的效果こそ無いものの、視覚を惑わし攻撃を当たりにくくするという効果を出していた。

土槍を交わした禍外狼が木々の間を旋回して走り回るのを見て、ポラリスは息をつく。

「……本当、呆れるほどに素早いですね…」

「……このままじゃジリ貧だぜ？ どうすつかポラリス」

その隣で構えてティグリスは問う。既に二人合わせて放った魔術の数は二十を超えていて、武器による攻撃はその倍以上。だがそれらは尽くを禍外狼にかわされている。

ポラリスとティグリスも、禍外狼からの攻撃を受けていない。だが体力は確実に削られてきており、このままでは疲労の隙を突かれてしまうのが明白であった。

この事態にどう対処するか問われたポラリス。やや荒れてきた息を整えて、即席の作戦の内容を伝えた。

「銀の飛礫を使います。すいませんティグ、時間稼ぎをお願いします」

「アタイが一人で抑えろって？ いいよやってやろうじゃんか！ その代わりなんか奢ってくれよな！」

ティグリスに負担をかけることを内心謝ろうと思ったポラリスであったが、直後のティグリスの要求でその気持ちを訂正した。これはギブアンドテイクだと。ポラリスは肩を落としてつつ、地面に愛用の槍を突き刺した。

「……兄さんがお金をくれたら大丈夫です」

「やりにー！」

腰につけたポーチから、指の間に挟んで銀色の光を放つ弾と、幾つかの魔石を取り出す。その腕を前に掲げ、足元にポラリスは詠唱を始めた。砕け粒子になった魔石が、ポラリスを中心に魔方陣を描き、彼女の髪がその光にあわせて淡く発光する。

「Diece qein（舞い踊り）,?????????」

ポラリスが詠唱を始めた途端、禍外狼が行動を起こした。恐らく詠唱を阻害する目的で、ポラリスに向かって攻撃を開始した。彼女に向かつて一直線に走る禍外狼。だがその前にティグリスが立ち上がった。

「あんたの相手はアタイだ！ Devil gandr（呪い撃て）！！」

振りかぶったこぶしの上に、一文字のルーンが浮かび上がる。赤紫に発光した文字を、ティグリスは勢い良く突き出した。同時、弾丸となり禍外狼に向かい放たれる。ガンドと呼ばれる、ルーン魔術特有の間接魔術。だがその速い一撃も、呼び動作ありの直線的な単発の攻撃。容易に回避されるに終わった。回避行動後、再度突撃を試みる禍外狼。だがティグリスのもう片方の腕に浮かび上がる文字を感じ取り、即座に回避行動をとった。横に跳躍した禍外狼の居た場所には、呪の一撃が打ち込まれている。

「だから言ったろ？ あんたの相手はアタイだってな！！」

再度立ちふさがるティグリスの両の手には、再びルーン文字が顕現している。魔方陣を用いる魔術の体系とは異なり、一文字で行った場合のルーン魔術は式のイメージも工程も非常に簡易。戦闘にお

いて速射性を発揮できるといふ利点が存在する。錬度次第では剣を振りながらも唱えられるといふ点から、ルーン魔術は戦士の魔術とも度々言われることがある。

一撃繰り出しては、もう片方のガンドを打ち出す。その間に空いた腕は魔石を取り出して、ルーンを展開。魔石の消費を考えない立って続けの間接攻撃が、禍外狼をポラリスに近づかせないことを成功させていた。

「Deil , deil , deil , deil , deil , deil ,
deil」

そうして射撃を重ねていると、後方から甲高い音が響く。魔術の詠唱を終える直前であることを表すためにポラリスが槍を蹴ったのだ。その合図を聞き届けたティグリスは、一つルーンを残したまま後退する。

禍外狼の視界に、風を纏う少女の姿が現れた。

「Af wiben vor（そして風と共に）」

詠唱を終えると共に、ポラリスが両の手の銀弾を一齐に投擲する。その銀の飛礫はばら撒かれるように放たれる。風を纏い貫通力・殺傷力を与えられた飛礫。弾幕を意図して放たれたそれを視認し、禍外狼はその間を縫うように行動し始める。高々八つの飛礫は、禍外狼にとって穴だらけの弾幕でしかないのだ。

そしてその弾幕をすり抜けて禍外狼が走り抜ける。その瞬間??
??ポラリスが差し出した右掌を握り締める。

「Sarken（廻れ）」

その言葉と共に、鈍い打撃音が響き、禍外狼が纏う靄の一部が弾

けた。よろめくその体躯。そこに打撃音は再び響き、禍外狼を仰け反らせる。周囲には、銀閃が走っていた。

物体操作。風を纏わせた物質の運動ベクトルを変更させる荒業、それがその正体だった。大きく外れるかに見えた銀色の飛礫は、八つ全てをポラリスの支配下に置かれその軌道をめまぐるしく変化させていた。さしもの禍外狼もその攻撃には反応できず、八つ全てを、その身に食い込ませた。

だが体高一メートル近くある狼状の魔獣。急所に当たったわけでもない飛礫を八つ受けたところで、致命には程遠い。よろめいた体勢を、四つの脚で地を踏みしめることで耐え、再び顔を前方に？？眼前に迫る拳に向けた。

「Gandr deine（呪い指せ）」

迫るのは腕甲をはめ拳にルーンを浮かび上がらせる少女ティグリス。ポラリスが作り出した隙を信じ跳躍しつつの拳撃が、回避もしようのないほどに迫っていた。赤紫に光るルーンが、一層その輝きを強くする。

「Fin ede（フィンの一撃よ）！！」

フィンの一撃。概念を収束したのみの攻撃であるガンドを、物理現象に直接影響させるほどに収束させた一撃。それは拳と共に禍外狼の頭部を殴打した。

甲の当たる金属音と、何かの裏で硬いものが砕ける不快音、そしてフィンのもたらす乾いた音が重なって響いた。

「って、おわあ！？」

跳躍の勢いを余し、禍外狼を乗り越えて地面に投げ出されるティ

グリス。拳を受けた禍外狼は身動きせず、そしてゆっくりとその体軀を横たえた。草地に倒れこむ肉体の音と共に、禍外狼の名を現すその陽炎が晴れていく。生命活動を停止させた証拠だった。

「よつやく一体かあ……」

投げ出された体勢のまましみじみと呟いた声が、静けさを取り戻した場に行き渡った。ポラリスは槍を引き抜いて、ティグリスを起こしに歩き始める。

「あら？ 私は本当のことを言ったままでですよ？ いいじゃないですか、」

そんな光景がしばらく続いていると、上空から羽ばたきの音が聞こえてきた。

二人はそろって上を見上げると、赤い鳥状のゴーレムが舞い降りてくるのが見えた。符術の布で作られたアルバのものであることが見て取れた。二人は姿勢を正してそのゴーレムを前にする。二人の前に降り立ったゴーレムは、低い男性の声を、二人に向けて発した。

「随分と時間が掛かったんじゃないか？」

何故か楽しげな口調で言うアルバの声に、二人は苦笑して同意の言葉を発した。その言葉を受けたアルバは、一つ言っておくことがあると言い、口調を改めた。

「では質問だ。お前らは禍外狼の習性 今回の戦闘に関係のある習性だぞ 知ってるか？」

その質問に、二人はそろって首を横に振る。その答えを受けたアルバが、ため息を発する。ご丁寧なことに、鳥形のゴーレムもため息をつくようなポーズをとった。そしてゴーレムが、その翼で額を押さえ、アルバがやや呆れた様子で答えを告げる。

「はあ、だよなあ、知ってりゃあんなことはせんだろうしな……
答えは、禍外狼は攻撃を避ける時に横に跳躍する習性がある、だ」

「あ……」

アルバに告げられた言葉を受けて、二人は衝撃を受ける。思い返すと、確かに禍外狼の回避行動は全て横っ飛びの回避だったのだ。そしてそれを分かっているだけで、禍外狼の回避能力がいかに高くとも、それを捉える方法が思いつく。

「タイミングを合わせて、先読みの攻撃とかな。跳躍速度が速かろうと、タイミングさえ合えば空中に居る間に普通に当てれるぞ？あと補足的に言っておくが、横っ飛びの癖は、元の狼とは骨格が異なるからだ」

「そんな……」

「じゃあアタイの魔石は……無駄遣い？」

禍外狼の跳躍速度は速い。視認してからでは狙いなどともつけられたものではない。だが、必ず横に跳躍する、ということさえ分かっていたら、片方が攻撃するタイミングにあわせて、逃げ場を塞ぐように魔術を撃つことで確実に早くしとめられたのだ。

十倍以上も必要以上に魔石を使う羽目になってしまった彼女たちの授業料は高い。魔石とてただで手に入る訳でもなく、学院生は購買で購入（相場よりは安く手に入る）しなくてはならないからだ。二人はそのことを思うと落胆せずには居られず、ゴーレム（アルバ）から視線を外し足元を見つめる。

「どうしよ……アタイ、今日もう魔石無いんだ……」

「……兄さんにどう説明しよう……」

元々平民のティグリスに金銭的余裕はあまり無く、浪費癖があるらしいポラリスは兄に財布の紐を握られている。そんな二人の懐事情は厳しいようだった。

戦闘中に教えれば良かったらどうかと、そんなことを考えたアルバだったが、とりあえずその考えを振り払い、彼女たちに別の用件を伝えた。

「つと、まあ落ち込むな。とりあえず二人とも、一回馬車のところに戻ってきてくれ、事情があつてグループ編成を増やすことにする」

その言葉に二人は気を取り直して顔を上げた。二人とも??特にガンドを乱射していたティグリス??は体力と装備の消耗が激しく、元々この戦闘の後馬車の止めてある方に向かうつもりだった。だが教師の口から告げられた‘編成を増やす’という言葉に違和感を覚えたのだ。

事情を聞こうと、ポラリスが口を開く

その時、全身に悪寒が走った

「それは一体どう　え!?!?!?!?　な、何!?!?」

急にポラリスが周囲に視線を向け始める。視界には何の姿も見取れない。だがポラリスは何かを感じているらしく、次第に顔色が引いていく様がティグリスとアルバには分かった。せわしなく周囲を見やる彼女の耳に、アルバのやや焦った声が、辛うじて入る。

「おい、どうしたポラリス?」

「何か…居ます…なにか…きます…なに?　なんなのですかコレは……」

ポラリスの顔色が、一層青ざめる。その豹変の様子に、ティグリスは狼狽し、アルバはいよいよ悪い予感的中したと確信した。槍

を抱きしめ怯えるポラリスに、アルバのゴーレムが大音量で怒鳴る。

「お前ら！！ 今すぐ帰還しろ！！ ここは墮嚙の通った道、恐らくポラリスが感じてるのは死霊の気配だ！！ 今から援護に行く！ とにかくこつちに向かつて走れ！！」

「！？！？りよ、了解！！
ポラリス、しっかりしてくれ！！」

アルバの怒声を受けて事の次第を理解したティグリスは、怯え続けえるポラリスの肩を揺らす。外的衝撃を受けたポラリスは、意識を現実に戻す。だがその表情は未だ怯えに満ちていて、ティグリスに向かつていう声は、いつもの優雅さを失って弱々しい。

「ティグ……声が……こえが……」

その言葉を聞いて、ティグリスは彼女が死霊の念の声を耳にしているのだと直感的に理解する。触れた肩からは体の震えが感じられ、それが彼女に死霊の存在を実感させる。彼女の今の様子では、恐らくアルバの声は届いていない。それほどまでに彼女は死霊の声を聞き取ってしまったのだろう。

「しっかりしてくれ！！ 走るよポラリス！ 落ちつい……………」
「…っああもう！！」

動き出さないポラリスの腕を、ティグリスが引く。ポラリスは彼女に引つ張られる形で走り始めた。教師や先輩たちが集まる方角に向け、ティグリスが全力で彼女を引つ張っていると、しばらくしてポラリスが抵抗を始めた。そんな彼女の行動に怒るティグリスが、振り返って怒鳴る。

「ポラリス！！ あんた状況がわかってるのか！？」

「ティグ…違うの…そっちは…！！ イヤアア！！ 来ないでえ
！…！」

急にポラリスが、耳を塞いで悲鳴を上げ始める。それが、音源が近づいている、ということだと理解する余裕の無いティグリスは、対処に困り果ててしまう。

必死にポラリスを落ち着かせようとするティグリスの耳に、ついに声が届いた。

『 d e d d a (死) d e d d a (死) d e d d a (死) 』

ティグリスは、身を強張らせ後方を振り返った。

鬼火、青い色を放つ炎が、ティグリスの目の前に現れる。まだ日が昇っているというのに、その冷たい色が周囲を暗くさせているかのように感じさせる。その姿を目にしたティグリスが息を呑み、呼吸を潜める間にそれは彼女の前方十数メートルにまで接近してきた。そこで動きを停止した鬼火に、変化が現れる。

「こいつが…死霊種…！」

周囲から霧が集うように、歪みはその鬼火を中心に集まる。それは燃え尽きた灰が時間をさかのぼるように骨格を形作っていき、瞬く間に人の全身骨格となった。その霧の軀を作る青い炉心が、肋骨に護られるように輝いていて、不釣り合いな美しさを醸し出している。

霧軀炉^{ムクロ}。それがその死霊種の魔物の名称だった。人の念が魔力に宿り、時を重ねて集い人を襲うようになった存在。歪んでしまった念が、死者の思いを魔力に託し生み出された負の存在。先ほどアル

バ先生が言っていた情報から考えると、この霧軀炉ムクロを形成している念たちは墮嚙に殺された者たちのもの。その犠牲者『騎士達』の念が反映されているからか、その白骨の腕が握るのは槍だった。鈍い錆色の獲物が、構えられた。

霧軀炉の存在強み規模は存在年数の長さとなつた念の量と質による。目の前の霧軀炉は大規模な存在では無いため、若く戦闘経験の少ないティギリスでも十二分に倒すことが出来る。だが霧軀炉は一体居ると、それに引き寄せられて新たに死霊が現れてくる。それが問題だった。

退路がある今、本来であれば逃げるのが最良の選択。だが彼女の背後には、錯乱し座り込み恐怖にすすり泣くポラリスの姿があった。彼女を連れての逃走は不可能。見捨てるという選択肢は始めから存在しない。故に

「アタイがやってやるうじゃないか!!」

彼女は霧軀路に殴りかかった。

「
」

掠れる不快音を発し、反応した霧軀炉がその手の槍を振るう。横殴りに迫り来るソレは、だがポラリスやアクセルのそれには遙かに及ばず稚拙。思わず笑みを浮かべてしまいそうになりながら、腕甲でその槍を上方に弾く。筋肉ではない何か別の力で動く霧軀炉は、槍が殴り飛ばされた衝撃によるめき、大きな隙を作り出した。

「せい!!」

腕を振り払うように動かし槍を弾いたティギリスは、その振り払った動作を利用し上体の捻りを作り出す。必要以上に加速距離を作

り出されたその右腕は、飛び込むような踏み込みのもと霧軀路の右肩に突き刺さる。

軽めの衝撃と共に、白骨は不完全燃焼の灰のように散る。右腕全体が、黒い灰となり砕け散った。

だがそれで終わりではなかった。黒を撒き散らして霧散していく霧軀炉の体が、時を逆走する様にして再び再構成される。弾いた槍が振り戻される前兆を感じ、ティグリスは大きく後退する。風圧を感じさせる距離を、穂先が横切った。

「ああもう！ こいつらすり減らさなきゃ駄目なんだった！」

辛うじて槍をかわしたティグリスが悪態をつく。霧軀炉のような死霊種の中には、その体軀を半実体の幻想とするものが存在し、彼らを消滅させるには存在をすり減らし切るまで攻撃を仕掛けなければいけないのだ。

再度、ティグリスが接敵を試みる。反応する霧軀炉が放つ攻撃はやはり稚拙で、容易に弾きその懐に潜ることが出来た。

「と、つと、と…消えるおおお！！！」

一撃、再度右腕を吹き飛ばす。二撃、上体を捻り戻す要領で頭蓋を砕き、三撃、左腕を蹴り飛ばす。

再構成されていくたびにその部位を殴り飛ばし、霧軀炉に反撃を行わせない。時折胴を薙ぎ払う様に蹴撃も加え、その内で輝く炉心にも攻撃を加える。それを繰り返し、総計十七撃、ようやく霧軀炉が、その鬼火を消した。

「っはあ……はあ……」

必要以上の緊迫感が、ティグリスから必要以上に体力を奪う。膝

に手をあて呼吸を整える彼女の周囲には、一つ、また一つと鬼火達が浮かび上がってきていた。ポラリスが、小さく悲鳴を上げて頭を抱え込む。

周囲に現れる、鬼火を抱く全身骨格を見回し、息を整えたティグリスが構えをとる。そして一步踏み出そうとしたところで、上空から声が響いた。

「ティグリス！！　ポラリスの近くに跳べ！　結界を展開する！」

一步踏み出そうとした足を、逆に地を蹴る足に変え、ティグリスは後方に跳躍する。同時に上を見上げると、赤茶の鳥のシルエツト

アルバ先生のゴーレムが降下してくるのが見えた。

重力加速に身を任せたゴーレムが、地上二、三メートルのあたりでその身を解放する。その身を形作っていたと思われる術符が、彼女達を包み込むように半球状に展開した。明らかに見た目以上の術符が出現しているように思われたそれは、ルーン文字が連なった帯で、それが仮想の半球に巻きつく。その布地の間から、周囲の様子が僅かにだが見えていた。

「あゝあ、この符作んの結構金かかるんだがな……………まあどうでもいい。一応霧軀炉ごときに破られる防壁じゃねえから安心しな。今救援を向かわせたから、着くまで待機している」

結界直上、音を伝える赤い魔石から聞こえるアルバの声は、場にそぐわない話題も混じるが、それがかえってティグリスに安心感をもたらず。

自身を取り囲むルーンの結界を見て？？問題が発生した場合の対処法として、結界で護られ救援を待つという状況がある？？というのを耳にしていたことを思い出すティグリス。まさか自分が世話になるとも思っていなかっただけに苦笑を漏らしてしまった。

「……………てい……………ぐ……………?」

ポラリスが自身を呼ぶ声に反応して、ティグリスは忘れかけていた彼女のことを思い出し振り向いた。振り向いた先の彼女は涙に目を腫らし地に力なく座り込んでいる。そんな彼女を見て、安心したばかりに一時忘れてしまったことを申し訳なく思ったが、会話が成立するまでに平静を取り戻した様子を見て安心もした。真上から来るアルバの声は、やや驚いた様子だ。

「ポラリス…大丈夫なのか?」

「いちおう……………だいじょうぶ……………です……………」

ややぎこちない話し方ながらも、ポラリスが会話を成立させた。結界が彼女を包んだ直後に恐慌状態が治まったことを考えると、結界が遮る要素??物質干渉??に何か原因があるように感じられた。何があつたのか問い質したいアルバであつたが、流石に彼女の弱々しい状態をみてそのようなことをする気分にはなれない。彼女との会話をそれだけに留めると、これ以上話すことも無いと口をつぐんだ。

そうして彼は、彼女の状態を案じるティグリスと、座り込んで静かに頷くポラリスの様子を見守りながら、甥の到着を待ち結界を維持することに精力を注いだ。

それも、長くは続かなかつた。

第三十四小節「紛れ込む者たち」

「ん？　なんだ？」

叔父であるアルバに言われ、装備を整えて待機していたアクセルが、周囲が騒がしくなったことに気が付く。教師達がせわしなく走り回り、森からは少しずつ生徒達が帰還してきている。

一人の教師が皆の前に現れると、大きな声で話をしはじめた。どうやら懸念されていた死霊種の魔物たちが出現したため、編成を増やすということなのだそうだ。

「うわ、マジででやがったのかよ……」

非常に嫌そうに顔をしかめてみせるアクセル。予想外の存在の出現に、周囲の生徒達もやや不安の声を漏らしていたが、編成チーム一つ一つに教師がついていくという旨の決定を告げられて、その不安を和らげさせる。出現の確認されている死霊種そのものは存在規模が小さいらしく、生徒たちのレベルでも十分対応可能　むしろ一対一であるならばその死霊種たちの方が弱い　とのことらしい。数に押されることさえなければ危険度は非常に低い。

死霊種という、二・三年生たちにとっても初めての相手ということからか、生徒たちは不安に思うどころか気合に満ちた表情を浮かべている。そんな彼らの様子を見て、ふとあることに気付いたアクセルは叔父のもとに向かった。ポラリスとティグリス？？アクセルの彼女？？の姿が無かったため、現在どうしているのか気になったのである。そしてその叔父は彼女達が戦闘を行う区域の担当であった筈だからだ。

「どっこつかなああの叔父は……つと居た居た」

人で混み合い始めた周囲だったが、その叔父の姿はすぐに見つかった。教員用の馬車の中に居たのだ。険しい顔で教師と話し込んでいて、話が終わったと思うと、目を閉じて黙り込む。それが自身が遠隔操作しているゴーレムと感覚を共有するためのものであるというところがアクセルには理解できた。ゴーレムを通じて会話をしている最中らしかったので、アクセルは馬車の陰に座り込みその会話を（盗み）聞き始めた。

「だよなあ、知ってりゃあんなこと」

そう彼が口にした言葉から、彼女達がようやく禍外狼を仕留めることができたということが知れた。呆れたように禍外狼の習性を話すアルバの言葉を聞いて、向こうに居る彼女　　ティグリスの落ち込む姿が容易にアクセルには想像できた。

「あゝあ、ティグのことだから、きつと魔石使いまくったんだろかなあ。……………今度、魔石奢ってやったほうが良いかもしれないな」

アルバに聞こえない声でそう呟くアクセル。そうしてしばらく会話の様子を（盗み）聞いていると、急にアルバが焦り始めた。

「おい、どうしたポラリス？」

両の目を瞑ってゴーレムの操作に集中するアルバ。どうやらその口調から、何か予想外のことが発生したらしい。そのことを感じ取ったアクセルは、言葉を聞き逃すまいと耳を澄ませた。そしてアルバの口から発せられた言葉を聞き取り、戦慄する。

「お前ら！！ 今すぐ帰還しろ！！ ここは墮嚙の通った道？？？ 恐らくポラリスが感じてるのは死霊の気配だ！！ 今から援護に行く！ とにかくこっちに向かって走れ！！」

「！？」

その言葉を聞いたアクセルは立ち上がり、叔父に向かって駆けた。教員用の馬車の中に駆け込み、まだ瞼を閉じたままの叔父に向かって問う。

「叔父さん！？ 何があつたんだ！？ ティグは大丈夫なのか！？」

突然かけられた言葉にやや驚きつつも、声の主がアクセルであるということを理解したアルバは、状況を説明した。立ち上がり、何やら術式を行使するための魔方陣を描き始める。

「一年生ペアの二人が死霊に遭遇した。これだけなら普通は逃げおせるんだが、ポラリスが原因不明の錯乱を起こして行動不能、オレは今から結界を――」

「オレは救援に向かう！！」

「はあ！？」

説明を続けるアルバの声を遮り、アクセルが勢い良く馬車の外に飛び出した。懐から緑色の魔石を取り出し、靴にルーンを叩きつけるように刻む。魔方陣がその両足の足元に展開され、その上で踏み切るように前傾の姿勢をとった。魔術を行使しようとするアクセルに、馬車の中からアルバが叫ぶ。

「つておいアクセル！ お前方角は分かっているのか！？」

「叔父さんのゴーレムを目標にすれば探せる！！」

「いやそうじゃなくて待てアク　　ったく、アイツなら大丈夫だろうが…何考えてるんだ…ったく」

言葉を告げ終わると、アクセルは踏脚の魔術を発動させて全速力で森の中に飛び込んでしまった。アルバはアクセルの鬼気迫る様子にやや呆けてしまいが、すぐに気を取り直してゴーレムを触媒にした結界の生成にとりかかる。結界の起動式が完成し、ゴーレムを降下させようとしたとき、一瞬だけ思いもよらない人物達の姿が見えた。

「あ？　何でこいつらまで居るんだ？」

疑問を解決する前に、アルバは結界を発動させた。

????????????????

水亜竜たちに途中まで送り届けてもらい、ラストイたちは帰路の歩を進めている。人目につく恐れのあるギリギリの地点で降ろしてもらい、距離は半分ほど削ることが出来ていた。行きに四半日ほどもかけて歩いていたことを考えるとかなり得をしたものである。

人通りがそれなりにあることを窺わせる、踏み慣らされた道。周囲に広葉樹たちの森を臨みながら、談笑を交わしつつ一行は森を歩いていく。魔獣が出没することのある地帯だが、ここの魔獣たちは総じて攻撃性が低いものが多く、見通しも利き更にはリーダー代わりのアークも居るため、それらと遭遇してしまう確率は低いのだった。

「来年もまた行こう!!」

未だ精霊の湖での興奮が冷めやらないステラが、既に来年の予定を立て始める。次はゲルトとハイスも連れて行こうとラスティは答え、アル少年がその人物とは誰かと問う。その質問に答えたのはステラで、しばらく悩んだ後簡潔に説明してみせた。

「うん……一見怖いけどそうでもないあんちゃんと、地味で目立たないお坊ちゃま?かな?」

普段ステラが彼らのことをどう見ているのかという一端を、垣間見ることが出来たような気がしたラスティとティアマツト。そんな説明に納得したように頷いてみせるアル少年の横で、ラスティは苦笑いを浮かべていた。ティアマツトもステラの横で同様の表情を浮かべている。

森というよりは林に近いその地帯。木々の密度は薄いため木漏れ日の量は多く、道しるべたる歩き慣らされた道をしっかりと照らしている。その光が描く光の模様にはラスティが視線を落としていると、ふと、隣を歩いていたアークが上空を指差して言った。

「マスター、ゴーレムが飛んでいます」

アークが指し示す方角を見ると、大分遠くに赤茶の鳥形のシルエットが見て取れた。ラスティは(視力の非常に良い)アークから視覚共有で送られてくるソレの鮮明な映像を見て、ゴーレムが彼らの良く知る人物のものであることに思い至る。

「あれ、アルバ先生のゴーレム?」

「え？ ティアマットちゃんあの距離でそんなこと分かるの？」

ラスティが思い至った人物の名を、ティアマットが先に告げた。そのことにアークまでもが驚いて振り返る。何故驚きの表情を向けられるのか分からないティアマットは、ややたじろぎながら、ステラの質問に答えた。

「だって、ルーン文字が刻んである布を使う人、アルバ先生しか思いつかなかったから……もしかして、違う？」

「……いや、正解だ。アークから（視覚共有で）見せてもらった情報で、確かにそれだと断定できる。…つうか良く見えるな」

恐らく彼女の水晶眼の恩恵なのだろう。ラスティの知る狩猟民族に匹敵すると思われるその驚異的視力に感嘆しつつ、皆は何故ここに教師のゴーレムが飛んでいるのかという疑問に対して考え始めた。その疑問は、学院の行事などを全て記録しているアークの言葉で解決した。

「どうやら今日は、武術系部活動の部員で有志を募って行われる『夏季休業中魔獣討伐』というものだそうです。この周辺は群れる魔獣も居らず退路も確保しやすいので、恐らくそういった事情から実習訓練の場にこの辺りが選ばれているものと思われます」

そうアークが説明を終えると、アルバ先生のゴーレムと思しきものが急降下を始めた。その様子を、遠めに見つめていると、不意にアークが異質な気配を感じ取った。先ほどとは打って変わって、ラスティに向かって緊迫した様子の声が念話が放たれた。

「（！）？ マスター、嫌な気配がします。魔獣のものとは違う適性

存在を知覚範囲内に確認、敵性、アクティブです！！ゴーレムが
降下していった方向から来ます、視認可能距離　　入りました！
！）
」

その報告と共に、彼らの視界に青い火の塊が姿を現す。それは死
霊種と呼ばれる存在だった。

第三十五小節「遭遇戦闘」

「ねえ？ アレ……………なに？」

ステラが、アルバ先生の（ものと思われる）ゴーレムの効果地点の方角に指を向ける。既に皆はその方向に視線を向けていたが、彼女の呼びかけで更に目を凝らした。

暗くは無い森の奥から、青白い光が、一定のリズムで近づいてくのが見える。距離が近づいてくると、それが骸骨の肋骨に包まれて輝いていることが視認出来た。最も視力のいいティアマットが、その存在の名を告げる。

「霧^{ムクロ}躯^ク炉……………どうしてここに？ ううん、それよりも……………」

「戦闘形態で来てやがる……………どこかで交戦してたのが、俺らの気配を感じて寄ってきやがったな……………」

ティアマットの言葉を、ラスティが引き継いだ。霧^{ムクロ}躯^ク炉は通常、鬼火の状態のまま移動し、獲物（生きた人間）を見つけ接近すると、鬼火が骸骨の体躯と武器を作り出す。今現在向こう側から歩いてくるのはすでに剣や槍を握った骸骨たち。つまりそれは

「え？ じゃあ向こうで誰か襲われてるってということ！？」

ということだった。教会での生活のうちで既に交戦経験のあるティアマットが頷き、既に知識を持っているラスティも同様の動作で応える。まだ霧^{ムクロ}躯^ク炉とラスティたちとの距離は開いており、交戦距離には程遠い。ラスティはバッグを地面に下ろし、懐から結

晶体（カスミギリ霞霧の待機状態）を取り出した。

「死霊種、特に霧軀炉は、生きている人間を察知することに長けており、私の知覚範囲を超えた範囲で存在を察知してきます。幸い向こうは弱小固体で構成されているようですので、今ここで迎撃してしまうことを推奨します」

既に戦闘の準備に入っているラスティの隣で、アークは皆に向かつてそのように言う。戦闘行為ということで、ステラは少々不安げな様子を見せた。魔獣の出現可能性のある区域を通るために、元々戦闘行為を行う可能性自体は考えていたが、やはり実際にその状況におかれてみると不安になるのだろう。だがそんな彼女にかけられた、アレだけだったら自分ひとりでも大丈夫」というティアアマットの言葉、それがステラを励ました。皆の状況把握に一段階ついたところで、ラスティが声をかける。

「よし、これより戦闘体勢に入る！！つてな、これが」

ラスティの、やや恥ずかしさを隠すような掛け声を合図に、事前に取り決められていた、魔獣（この場合魔物）に襲われた際の対応どおりに、皆は行動する。

バッグを投げ捨てるようにおろし一箇所にまとめ、後でとりにこれるように道しるべになる魔具を置く。メンバー中最も近接戦闘に長けるティアマットが先頭に立ち、踏脚魔術などを生かした機動力のラスティがその後ろ。砲台役のステラがどこからか取り出した妙にゴツイ杖状の礼装を持ち後衛になる。戦闘で役に立たないアル少年は、予備の魔石や救急道具を持ってステラのすぐ後ろに待機した。

「Fantaxia, sept redint.（幻想式、構築開始）」
If you can meet with t

triumph and disaster and treat,
those two impostors just the same
(もしあなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされる
ことがないとしたら)「

「Fantax-ea, sept fanct (幻想準式、接続開
始)「

「El-o-aus ahsiumt dest (アナタたちは
灰と塵に還りなさい)「

ラストイがアークと接続^{ファンクト}を行い、ティアマツトが十字兵装を展開
する。ステラは杖を構え、アル少年はこれから繰り広げられる光景
にやや期待感を抱きながら軽い荷物を背負う。

歩み来る霧軀炉たちの姿が、細部まで見て取れる距離まで縮まる。
それを合図にしてか、最も戦闘経験のあるティアマツトが、一番に
駆け出した。やや遅れてラストイも駆け出す。

「Requiem ? ternam (永遠の安息を)「

小さな体には不釣り合いな片手半剣^{ハンドアンドハーフソード}が、大きく横に振り払われる。
鎮魂歌の一節と共に振り払われたそれは、目の前の霧軀炉の鬼火を、
胴体ごと粉々に粉碎した。浄化の概念を元々保有している十字兵装
が、その死霊の鬼火を一撃で掻き消す。振り向きざまに振り戻され
た剣が、もう一体の霧軀炉を葬った。

「流石教会の武器……死霊種を一撃必殺だなんてな!「

周囲の二体を一瞬にして葬ったティアマツトに、賞賛の言葉を送
りラストイが前に出る。左手に握られた打刀^{カスミギリ}? 霞霧が、霧軀炉の

瘦軀を袈裟に両断する。教会の武器のように浄化の概念を含まない彼の刀は、霧軀炉の存在をすり減らし切ることが出来ず、敵の体は急速に再生する。

「その分俺は手数なんでね、これが!!」

袈裟に振りぬかれた刀が翻る。上下逆の放物線を描いて急上昇したそれは、刃を返して再度霧軀炉の炉心を切り裂いた。高密度概念体がその正体である霞霧は、浄化概念を持たないながらも対象の存在を急速に削っていく。三撃という少ない攻撃回数で、その霧軀炉は青白い火を掻き消した。

幻想を練っていたステラが、魔術の行使直前に二人に向かって叫び声を上げた。彼女の目の前には杖が掲げられ、その先を中心にやや簡素な魔方陣が展開されている。中央部が黄の光を放ち、それ以外は緑の光を放っている。そこに収束される風は、横に螺旋を描いている。

「二人ともいつくよ!! 当たらないでね!! W i d a s 、 v a i n r a d e e i f e n t (風の道を辿りなさい 駆ける)!!!」

「つて!! 危なっ!?!」

旋回し加速していく気流が、(辛うじて射線から退避出来た)ラスティと(水晶眼の恩恵で事前に効果範囲が見えていた)ティアマツトの間を駆け抜け抜け霧軀炉の体を粉碎していく。再生しようとする傍から粉碎されていき、急速に存在をすり減らした鬼火が、風の螺旋に巻き込まれ次々に消え去っていく。火力を重視するという彼女の尊敬する導師を見習ってか分からないが、明らかに必要以上の魔術行使は、射線上に居た十数体の霧軀炉を瞬時に消滅させてしまっ

た。

決れる地面を見ながら、砲台役の魔術師が居るということがどれほど頼もしいことであるかを、ラスティは実感する。自分が巻き込まれかけたことに関して話は別であるが。

「……………（アーク、ステラの攻撃魔術の射線割り出しも頼む）」

「（了解しました。彼女は狙いが甘いので、その分を範囲で算出しておきます）」

ティアマットのやや心配そうな視線を受けながら、ラスティは再び霧軀炉に切りかかった。

手数で霧軀炉を消していくラスティと、一振りごとに葬っていくティアマット、そして一定の周期で放たれるステラの（やや狙いの甘い）攻撃魔術で、霧軀炉たちは少しずつ数を減らしていく。霧軀炉たちの個体能力では以前戦った己憂部ユウベにすら劣る。正直一対一ならばアークの補助を受けないラスティでもらくらくと倒せるであろうほどに弱いため、さして危なげもなく戦闘を進めていった。

だが戦闘の最中、アークが急速に接近してくる存在を感知する。

「っ？ マスター、右後方から、高速で接近してくる存在を確認しました。お」

「そこか！ Anfrict（起動しろ）！！」

アークの報告を受けたラスティが、靴裏に仕込んだ踏脚魔術を発動させる。勢い良く振り返った彼は、アークから送られてくる位置情報を元に狙いを定めて

「恐らくアクセルさんだと思われます」

「え？」

勢い良く飛び出してきた赤い人影に向けて、跳躍し　そう
になったところで魔術行使をキャンセルした。飛び出してきた人物
は、ラステイとは食事の好みに関して交流がある、見知った先輩だ
ったからだった。

第三十六小節「つかの間の」

「あ、アクセル先輩？」

「マスター！ 左後方から来ます！」

突然登場した顔見知りの先輩に、ラステイは驚いた。すぐにアークから警告が告げられ、自身が戦闘中であることを思い出す。振り向いて、剣ごと頭蓋を切り裂いた。

一方アクセルは、目の前で戦闘している後輩達（一人幼すぎるのが混ざっているが）の姿を見て、ラステイと同じように口が塞がらない様子で驚く。やや呆けていたが、すぐに視界の端から敵の接近を感じ取った。

「あ？ ラステイじゃないか。何でこんなところってそんなこととは後だ！」

視界の端から、剣を振りかざし駆ける霧軀炉に対し、アクセルは片腕で槍を突き出した。赤塗りの槍は頭蓋を貫通し、その動きを一瞬止める。空いた左腕が、豆粒ほどの赤の魔石を握りこんだ。瞬時に碎け、小さな文字が手に平に現れる。

「Ashieil（灰になれ）」

掌底が、ルーンを鬼火に押し付けた。瞬間、発火したその体が詠唱通りに灰に還って行く。浄化概念ほど効果的ではない焼却概念だが、その一撃は瞬く間に鬼火を掻き消す。強い幻想が、霧軀炉の存在概念を大きく上回ってしまったのだらう。魔術の運用の上手さがかがいが知れた。

「クソッ、こつちは急いでるつてのによぉ！」

何やら急ぐ様子の彼は、灰と散った霧軀炉を一瞥もせず、槍を構える。得物を水平に持ち、肩の位置まで上げる。重心を下ろし、足の筋肉を収縮させ、彼は低く唸った。

「邪魔なんだよ、手前らは　　！！！」

アクセル・アーキナム。学院の二年生であり、槍の名門アーキナム一族の次期党首。その名に恥じず、彼は未だ二年生でありながら、既にその槍技はプロの傭兵に匹敵する。その槍はルーンを穂先に描いて刺し貫き、円軌道を描けば複数の霧軀炉を巻き込む。時に棍術に似た動作で攻撃をいなし、蹴撃を叩き込む。余裕があれば、すばやくルーン魔術を行使し一撃で葬り去る。黒ずんで散っていく灰の中を駆けることに何の躊躇を示すことも無く、次の獲物に飛び掛る。

「オラオラア！！　退けよ手前らぁ！！！」

技の質を落とすこと無く、だが荒々しく、彼は突き進む。一年生ですら軽くあしらえる霧軀炉に、幼い頃から槍を握るアクセルの進撃を止めることは出来ない。

正面からの戦闘ならば、既に教師陣とも渡り合えるといわれる彼は、瞬く間に付近の霧軀炉を殲滅させていった。

突然のアクセルの登場から、殲滅のペースが一気に速まったラスティたちは、数十体の霧軀炉を片付け終える。実戦経験の少ないステラは、初の実戦が死霊であったためかどうか分からないがやや涙目である。一方アル少年の方は、戦闘に見とれていただけのようで特に何かあった様子でもない。ティアマツトの方は、心配すること

は何もなさそうだった。

黒ずんだ灰が幻想に還って行く中、ラスティはアクセルに向き直った。ティアマットが後ろから駆け寄る音が聞こえたが、それには振り返らず、今すぐにも走り出していきそうな先輩に向け声をかけようとする。

「アクセル先輩、一体何があったん

彼の声を遮り、木霊して悲鳴が聞こえてきた。先ほどアルバ先生のものと思われる（ゴーレムが降下していった方向から聞こえてくる。その悲鳴を聞いた途端、アクセルの顔から血の気が引く。一瞬の硬直の後、すぐに懐から魔石を引っ張り出した。誤って幾つか落としてしまったことに、何ら意識を向けることは無い。

「!?!?!? テイグ!」

「って! 待ってくださいよ!?(追うぞアーク!) アクセル先輩
!」

瞬間、魔石を地に打ち付けて踏脚魔術を展開する。反応したラスティが、つま先を軽く打ち付けて同じ色の踏脚を展開した。同時に彼らは、悲鳴の方向に跳躍し、後にはティアマットとステラ、アル少年が取り残される。

赤い足場の上を跳躍しつつ、二人は併走して行く。もう姿が小さくなってしまっている二人を見て、ティアマットが途方にくれた様子で呟いた。後に続いて、ステラがかなりどうでもいいことを質問する。

「私達……………踏脚使えない……………」

「?????ねえねえティアマツトちゃん。今の先輩、ラスティクんと前に御飯食べてた先輩だよね?」

とりあえず、ティアマツトは頷くことにした。

????????????????

結界の中で救援を待つ彼女達。そこに突如、強く何かを叩きつける音が響いた。

「!?!? 今度はなんなのさ!?!」

結界に包まれて安堵に思っていたティグリスが、突然の轟音に身をすくめる。ポラリスは、今にもまた‘声’が聞こえてくるのではないかと不安になり、強くその手を耳に押し付けた。

衝撃音が、結界内に木霊する。度重なるその轟音は、一定のリズムで何かを打ち付けているようで、黒い影が障壁の隙間から伺えた。

「!?!? つくそ、なんだコイツは!?!」

突然加えられた予想外の力に、アルバが動揺の声を漏らしてしまう。その声が、結界が破られてしまう可能性を知らせているようで、一層彼女達の心を不安にさせる。

アルバのゴーレムの魔石は結界の内側に張り付いており、外の様子をつかがい知ることが出来ない。だが霧軀炉とは違う何かを外に現れたということは分かる。

衝撃が加えられるごとに、結界に歪みが生じ始める。始めは術者のアルバのみに分かる歪み。だが次第に、内部に居る少女たちにもその歪みを感じ取れるほどにそれは拡大していった。

「……ああ……いや……うああ……」

ソレに伴い、ポラリスの耳に、声’が届き始める。空気から幻想を感じ取ってしまう彼女は、人の鼓膜が捉えられない音を聞く。それは死者の念がもたらす断末魔。脳に直接木霊するように響いてくるそれは、耳を防いだ程度では遮ることが叶わない。ティグリスは慌てて彼女の肩に手を乗せ揺するが、彼女の意識は既に、声’の恐怖に飲み込まれていた。

「！ポラリス！？」

「こないで……こないで……こな……いやあああああああああああああ
あ……！！！！！！！！」

彼女の叫びと共に、結界に刃が突き刺さった。赤茶の障壁に、黒ずんだ金属光を放つ太い刃が現れる。今まで結界に遮られていた、声’はそこから入り込み、今までよりも強い念を少女に注ぎ込む。布が破れていく音を聞き届けたティグリスは、ゆっくりと後方に振り返る。掠れた声で、力なく彼女は声を漏らした。

「……なんだよ、ソレ……」

ゆっくりと、引き裂いていくように刃が下に引き降ろされていくその先に、黒い骸骨の姿があったのだ。

第三十七小節「登場は思いのほか演出的で」

霧軀炉^{ムクロ}。それは人の思念から生まれた魔物。存在する期間が長く、多くの人の思念が集合するほど、そして死んでいった人々の信心^{しん}深さが深いほどに、その能力は上昇する。

そうして存在規模が高まった霧軀炉の中でも、特殊な幻想を身に纏うものを、俗に‘死神’という。

人々の死神のイメージが元となった存在で、細部は固体ごとに異なる。だが総じて、骨は煤けたように黒付き、漆黒のローブを纏い死神の鎌を携えている。人の技術ではない戦闘技法を駆使し、その名に恥じず鎌の一閃は人の命を容易に刈り取るその姿は、七年前の戦乱時には多くのものを恐怖させた。

そして今、その死神が、アルバの張った結界を引きちぎろうとしている。半球の赤茶のドームに突き刺さった大鎌の刃は、力任せに斜め後方に引かれ、膨大な張力を働かせ術符を引き千切ろうとしていた。先ほどまでアルバとつながっていた魔石は、その光を失っている。

「こないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないで」

ただ狂ったように拒絶の言葉を繰り返すポラリスを背に、ティグリスは破れかけた結界の間から覗く黒い頭蓋から目を離すことが出来ないでいる。明らかに自身の実力とは不釣り合いな程に強力な存在。ローブの間から覗く鬼火の色は、多くの色が混じり黒ずんだ光を放

っている。

「……………」

「ああ……………う……………あ……………」

声帯の無い筈のその体から、不快な雑音が発せられる。世界の歪みに敏感ではないティグリスですら死霊の念の一端を感じ取ることが出来た。気を失うことすら出来ないでいるポラリスの精神にかかる負担は尋常ではないだろう。

千切れかけた結界に最後の一撃を加えるため、死神は大きく得物を振りかぶる。眼球のない落ち窪んだその眼は、ローブのフードの中から確かに彼女達を捉えていた。

「……………Elrande gazel af ein（地の歌は何処に）」

ティグリスは、懐から最後の魔石を取り出す。物理攻撃の効果が薄い死霊種であるため、有効打を与え時間を稼ぐには魔術を行使するしかないのだ。体力に余裕がありポラリスも満足に動いている状態であれば話は別だが……………。最後の魔石が、散って魔方陣とならずに、彼女の手の中で黄に光り輝く。

振りかぶられた大鎌。結界の傷口に叩き込まれた黒い刃は、先ほどまで力をこめて引き千切ろうとしていたのが嘘のように切り裂かれた。役目を終え、術符は魔石と共に虚空に還って行く。死神の全身が見え、その禍々しい黒に、ただでさえ引きつる全身の筋肉を更に引きつらせた。

「owe en myne dio zinn-essio（それを知りたいと願うから）」

怖い　　そう思う自身から逃避したいから、彼女は目を閉じて詠唱を続ける。不慣れなうる覚えの浄化詠唱。教会の式のような威力こそ望めないが、下手な攻撃魔術よりも効果はあるはずだと、そう信じて彼女は詠唱する。

近寄った死神は、首を薙ぐために水平に鎌を引く。

「wendio-essio ximendiva el
wait h（地に耳を伏せ、私は耳を澄ますのです）」

死神の足元に、魔石を投げつけた。詠唱と幻想の発現をこめたその魔石は、今まさに鎌を振ろうという死神の足元に魔方陣を展開し、地を隆起させ多数の土槍で死神を刺し貫く。

浄化式‘土葬’。‘葬’の概念をもたらすための言葉と式を覚えていなかった為、うる覚えだった‘祈祷’で代用された不完全な対霊種魔術。その威力は死神を葬り去るには至らないが、刺し貫かれた体躯は土槍に固定され動きを止めている。

動きを止めた死神を見て、ティグリスは勢い良く後方に振り返った。

「こんちくしょおお！！」

悲鳴になつてしまひそうな声を、必死に奮い立たせるための咆哮に変え、振り向いた彼女はポラリスを抱きかかえる。抱きかかえられたポラリスは、そんな皮膚感覚すら気にしていられないほどに錯乱しているのか、ただ‘こないで’という言葉を繰り返し呟いている。

抱きかかえ、死神に背を向け走り出そうとする先には、数対の霧軀炉たち。固体の力こそ所謂雑魚だが、ポラリスを抱えまともな戦闘行為を望めない以上、あれらの間を駆け抜けて逃走しなければな

らない。絶望、というほどに無謀な試みではないが、死神が拘束を解き追いつかれたならば、生存の望みは潰えるだろう。そんな考えを振り払い、彼女は一步踏み出す。

その時、彼女の耳に、大きな金属音と、しばらくして遠くに何かが落下する音が届いた。走り出そうとしたティグリスはよろめき、突然の音に、微かな期待を込めて振り返る。

そこには、赤茶の髪を逆立て槍を担ぎ、自身に向かって笑顔で手を振ってくるアクセルの姿があった。

「よっ！ 大丈夫か？ 助けに来たぜ？」

「え？ …あ、アクセル！！」

彼が浮かべる笑顔は、いつもどんなときでも彼女に見せていた笑顔。戦場で向けるには相応しくない、だが今は必要だった笑顔。学院内の生徒で最強の呼び声高い先輩にして愛しい人、その登場に、彼女は力なく座り込んでしまう。ポラリスのことは無造作に落としてしまわないようにするだけの気遣いは残っていた。

そこに、また別の男性の声が届く。

「アクセル先輩！ 格好よく登場したのはいいですから、速く鎌持った霧軀炉殺^やつて下さい！ ポラリスは俺が何とかしますから！！」

そう言っつて、アクセルが来た方角からティグリスとポラリスの近くに降り立ったのは、彼女も見覚えのある男子生徒。

それは、世界でも超のつく少数派の黒髪を持ち、精霊を従え、とある女生徒と共に墮嚙を打ち破り、一年生たちの間では、学院の英雄、とまで密かに囁かれている生徒？？ラスティハルト・ジーンだった。

悲鳴の声を聞き、ティグリスとポラリス両名に危機が迫っているということを感じたアクセルは、踏脚魔術をフル活用して突き進む。走る速度では到底まねの出来ないその速度、その彼の横に、張り付くように併走する黒い人影の姿があった。

木々を避けつつ、その横を併走するのは、ラストイハルト・ジン。一つ下の後輩で、入学から間もない頃に発生した‘墮嚙襲撃事件’で墮嚙を葬った二人組みの片方で、アクセルとは食事の趣味を通じて交友のある生徒だった。

「アクセル先輩！！　今の悲鳴は学院の生徒のものですか！？」

使用するのに非常に繊細な式制御を要求される踏脚を使い、尚且つ自身に話しかけてくるまでの余裕があると見えるその後輩の姿に、アクセルは内心嘆息する。墮嚙を打ち倒したという話を聞いたとき、どのようにしてあの怪力の猛攻を凌いだのかと彼は気になったものだが、成る程踏脚を扱えるならば、一撃加え攻撃範囲外に即座に逃げるヒットアンドアウェイの戦術が取れるのだ。

「ああ、そつだ！！（後は、攻撃力だが……ああ、そついえばもう片方は元教会騎士（見習いだが）出身だって叔父さん言ってたっけな。きつと手段の一つや二つあるだろ）」

ラスティの質問に同じく叫んで答えながら、アクセルは納得する。正直今はそれどころではない筈なのだが、強者と思われる者を見ると分析せずには居られない性分のような。現在自分がなくてはならないことに集中するために、ここまでを考えてアクセルは思考を切り替えた。

尚、彼はそのもう一人???ティアマツトが、墮嚙の攻撃を真正面から弾いていたという驚愕の事実を知らない。最も、それは彼女の切り札、アロンドライト「独り護る者」があつて可能なことなのだが……

「一年生の二人が、何故か多数の霧軀炉に囲まれた!! 片方が原因不明の錯乱を起こし行動不能。今は叔父が結界を張って待機してた筈だ!!」

「一年生二人……集まる……引き寄せられた? いやだが……
武術系で……」

アクセルの話聞いて、ラスティは何やら思案を始める。風を切る音の所為で何を呟いているかはアクセルには聞こえなかったが、しばらくして彼が質問を発したことで、何を考えていたか理解した。

「先輩!! その二人の片方って、ポラリス・E・フィニエンスだったりしませんか!？」

「そうだ!! っていうか何で分かったんだ?」

その言葉に、アクセルは叫んで肯定する。何故その行動不能に陥っているのがポラリスなのかを予想できたのか、それを問われたラスティは口籠る。アクセルは無理に聞き出そうとはせず、答えられないならばいらなと言った。 救援に向かう上で必要な情報だとは思えなかつたからだ。

それから幾分もせず、ラスティの口から重要な情報が告げられる。ラスティには精霊アークが居るので、その精霊が察知したのだろうと、アクセルは予想する。

「!? アクセル先輩！ もうすぐ視界に彼女達が見えます！ あともう一つ、霧軀炉たちの中に一体、‘死神’が混ざってます！」

「はあ!? マジかよ!?!」

驚愕するアクセルの反応にラスティが答える暇もなく、視界に黒い姿が映った。鎌を振りかぶった状態で地面から生えた槍に刺し貫かれ、動きを止めている。その目の前で、日に焼けた茶髪の少女が、緑髪の少女を抱きかかえようとしている姿が見えた。

恐怖を誤魔化すためだと誰にでも分かかってしまうような叫び声を上げて、彼女は少女を持ち上げて逃げ出そうとする。そんな彼女を見て、ラスティが何やら呟いた。何故か聞きたくなって、密かに耳を澄ませる。

「良いやつだな……自分一人だったら逃げ切れるだろうに……」

オレの自慢の彼女だけ、そう思わず言ってしまったかったアクセルだが、堪える。言ってしまうと、後で怖いような気がしたからだ。この時には、すでにラスティがこの演習とは無関係の生徒だということを見失っていて、そして彼に指示を出す。懐から、魔石を二個出した。

「オレは奴の相手をする！ ラスティは二人の安全を確保してくれ
!?!」

そう告げたアクセルは、更に踏脚の加速性を強める。普通はここ

まで連続で行使するはずのない踏脚魔術だが、精神力の消耗が気にならない。アクセルは、ラストイを置き去りにして跳躍した。

着地目標点は、死神の目の前。タイミングを見計らって、槍を大剣のように構えて大きく身を捻る。着地と同時に、死神の体を大きく向こうに吹き飛ばした。今までは霧散していた骸骨の体躯は、碎けずにその姿を保って吹き飛んでいく。今まで足止めしていた土槍は、衝撃と共に還って行った。

「よっ！ 大丈夫か？ 助けに来たぜ？」

「え？ …… あ、アクセル！！！」

吹き飛ばした死神に背を向け、アクセルは陽気に挨拶する。安堵したらしい彼女は、脱力して地面に座り込んでしまった。無意識かどうか分からないが地に優しく横たわされたポラリスは、すぐに横向きになり体を丸める。助けが来たことすら認識する余裕のないポラリスの様子に、アクセルは危うさを感じた。

「アクセル先輩！ 格好よく登場したのはいいですから、速く鎌持った霧^ヤ軀炉殺つて下さい！ ポラリスは俺が何とかしますから！！！」

彼の思考を感じ取ったのか、後から追いついてきたラストイがそのように声をかける。多少演出っぽく狙ったのは否定しない彼だったが、そのあたりの空気は読んでくれてもいいのではと思ってしまふ。とりあえず二人のことはその黒髪の後輩に任せることにして、アクセルは振り返った。その先では、霧軀炉の中の上位固体、通称‘死神’が立ち上がっている。存在強度に裏打ちされた霧の体の強度は、容易く倒れてはくれないらしい。

「あゝあ、死霊種とやりあうだなんて初めてだったのに、雑魚のお

次は親玉ってか？」

気だるそうに言いながらも、意識はすでに戦闘態勢。周囲の雑魚のことは意識から排除する。アクセルは穂先を水平に、槍の先と霧軀炉の鬼火を重ねて、駆け出した。

第三十八小節「北辰は夜空に遠くて」

アクセルが死神に駆け出すのを見届けて、ティグリスは視線をポラリスの元に戻す。彼のことなら大丈夫、今は彼女が問題。一抹の不安を押し付けて、聞こえてくる金属音を背に彼女の表情を覗き込んだ。

「こないでこないでこないでこないでこないでこないで」

「

普段の高貴の中に見える活気など見る目もなく、ただ体を締めひたすりに同じ言葉を繰り返す。何か音を聞いているらしく、耳を強く押し付けていた。それでも彼女を苛ませる音は聞こえ続けているようで、アルバ先生の結界に包まれていなかった間はこちらからの声すら届かない。

ポラリスのことを、その顔に浮かび上がる血管すら観察できるまで見つめ続けるティグリス。そこに草を踏み潰す音が聞こえる。どうやら周囲の霧軀炉たちは、待っていてはくれないようだ。

「！霧軀炉が……」

周囲からにじり寄ってくる霧軀炉を追い払おうと、ティグリスが立ち上がるようにする。その行動を、ラストイは引き止めた。その行動の理由を問い質そうと口を開きかけるティグリスだったが、彼女が声を出そうとする前に、詠唱の声で遮られる。

「Veld kiwen oiel folfensa, umt
mir-vel haten en el folfensa」

境界に背中を合わせ、鏡界に諸手を合わせ)」

周囲にばら撒くように、黒髪の彼は様々な色の魔石を投げつける。すると着弾と同時に魔石は光の粒子になり、だがそれは魔方陣を形作らずに宙に漂う。何をしているのかと目を見張るティグリスだったが、よく周囲を見回してみると、何故か霧軀炉たちはその魔石の濃霧を前に前進を躊躇っていた。啞然とする彼女の耳には、学院の英雄の詠唱と、金属音だけが届く。

「（なんなんだろう…不思議な魔術だ…あんまし成績よくないアタイでも、変わってるって分かる…）」

その霧のドームの断面を印すように、地面に魔方陣が浮かび上がる。式の回路の上を動く光の色は、絶えずグラデーションを伴って巡回していた。興味津々のティグリスが、足元や周囲にせわしなく視線をまわす。

「Followen awin xien za, qiu levis
axin（映る姿の向こう側に、ただ返る空を見る）」

四色入り混じる霧のドームは、反時計回りに高速に回転していく。それはいつしか色は混じりあわせ、無色に近い薄青色へと変わっていく。見た目の上では霧は薄くなっているように感じられるが、それは密度を高めただけのことであった。霧軀炉たちはその弱々しいともとれる結界に対し、なんの行動を起こすこともしない。

「xien owl haten kio en rau, mie
l rafis haten fisa（向こうに側に伸ばしたその手は、同じく伸ばされた手に止められて）」

ポラリスの様子にも変化が現れ始めた。耳に強く押し付けているせいで白くなっていた手の肌色が、徐々に血色を取り戻してきたのだ。体の震えも収まる兆候を見せ始め、強く閉じられた瞼が緩んでいく。

「Alem ol wis a en di o s e u s u（ただ夢見ることしか叶わない）」

その韻が、詠唱の完了を示した。周囲の霧のドームはその座標に固着し、式が完了される。ポラリスは、ゆっくりとその瞼を開いた。開いた眼の前に居たのは、ラスティ。

「らす……てい……さん？」

「！？ポラリス、意識が」

横になった姿勢のままで、ポラリスが恐る恐る確かめるように訊く。体の震えはまだ止まらないが、血色が戻り意識がはつきりしてきたようだ。ティグリスもラスティも、共に安堵し、表情を緩ませる。

だがラスティは、すぐに表情を緊張状態に戻した。

「俺はアクセル先輩の援護に向かう、君は彼女を介抱していてくれ。一応この結界内なら霧躯体は襲ってこないが、死神は別なんぞね！」

「あ、ああ分かったよ」

結界を形成し、ポラリスの意識が戻ったと分かるとすぐに行動に移るラスティ。ティグリスは急に声をかけられたことでやや反応に遅れて返事をする。ポラリスはまだ状況を正確に把握しきれないな

いようで、ラスティの横になった姿勢のままラスティのことを見つめている。

得物を手に、立ち上がるラスティ。その姿を認めたポラリスが、弱々しく声をあげた。

「あ……………」

何か言葉を続けようとした訳でもない、ただの一母音。胸の前に抱きかかえた腕が、少しだけ彼のほうに伸びたように見え、だがやはり抱えられたままになる。そんな彼女の様子に、ラスティは気付かない。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same（もしあなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとしたら。）」

右手を胸に、詠唱を呟きなおした魔術を残し、ラスティは結界の外に走り出していった。術者を妨げないように動いた霧が、一瞬だけ穴を作り、すぐに閉じる。

半透明の霧の結界が、彼との距離をより大きく隔てたように感じさせる。

ゆっくりと姿勢を起き上がらせるポラリスの隣で、ティグリスは小さく呟いた。

「学院の英雄……………かあ」

dedda (死を)

酷く濁った発音のその言葉は、余りにも安易な呪詛でありながら、だがそれ故に直接的に呼びかけて来る。

死者の念と共に直接脳に響いてくるかのような、擦れた音。言葉そのものに不快感などなくとも、共に伝えられてくるものにこそ意味があつた。声が頭の中で反響し、知りもしない映像と音を送りつけてくる。

腕が潰れていく音、死が降りかかってくる光景、自身の頭蓋が悲鳴を上げる音、目の前で人が引き千切られる光景、大量の血が地面にばら撒かれる音、自分の足が喰われて行く光景、助けを求める叫びの音、いつの間にか無くなった腕を見ている光景、骨を擦り合わせる空虚な音、あばらの見えた骸の光景、痩せこけたヒトガタの光景、喰らえよ喰らえと喚く音、自らの顔を握りつぶしてあまるほどの掌が

『こないでこないでこないでこないでこないで
』

ネタマシイウラメシイと、知りもしない顔の無い亡骸が、周囲を取り囲んで喚きたてる。

声は頭に響くから、耳から入る音が聞こえない。瞼を強く閉ざしているから、眼は外のことを何も映さない。何かが縋り付く感覚しか分からないから、肌は何も感じない。

『こないでこないでこないでこないでこないで
』

『 d e d d a d e d d a d e d d a d e d d a d e d d a
d e d d a d e d d a d e d d a d e d d a d e d d a
d e d d a d e d d a d e d d a d e d d a 』

五感は外のことを何も教えてはくれないから、彼女は一人イメージの中に取り残される。音から世界を感じすぎるから、音が濁ると世界が濁ってしまう。瞼を閉じてもみたくない映像は映り、耳を塞ぐことは何ら意味を成さない。

私は知らない知っていない。だから来ないで私を帰して。

平静だったはずの心も音に容易く塗りつぶされて、彼らを感じた恐怖を痛みを光景を音を、主観で見せ付けられる。知らない感情を知らされる、怖いことだけ知らされる。私はそんなこと知りたくない、教えて欲しくない、だから

『 こないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないでこないで？？？？ 』

それだけしか考えれない、考えることが無い。ただ過ぎ去ってしまつて欲しい、ただ元の世界現実に帰して欲しい。それを願っていることすら忘れ、ただひたすらに、こないで、と繰り返す。

『 F o l w e n a w i n x i e n z a , q i u l e v i s
a x i n (映る姿の向こう側に、ただ返る空を見る) 』

そこに聞こえた声は、どれだけ久しいものだろう。こないでと死という言葉そのものが機械的に、意味を磨り減らしてしまいそうな世界の中、久方ぶりに聞かされた言葉はだが未だしかとは耳に入っていないかった。

『 x i e n o w l h a t e n k i o e n r a u , m i e

l r a f i s h a t e n f i s a (向こうに側に伸ばしたその手は、同じく伸ばされた手に止められて)』

突然、聞こえていた音が弱まった、見えていた映像が砂嵐を含み始めた、肌を乾いた風が撫でた。

抱きとめられるような、そんな感覚。大きく広く、包まれて、でもそこに重さは無い。何時も隣に近くに居てくれていたような、そんな安心感。

聞こえた音は、優しいと、そう感じた。

「A l e m o l w i s a e n d i o s e u s u (ただ夢見ることしか叶わない)」

感覚が日常に戻ってくる。耳が風の音を捉える、肌が草の感触を感じる、目に光が入ってくる。

夢の中にいたかのような感覚、閉じ込められ取り残された空虚感から解放された五感、まだちゃんとした働きを見せない。

眩しさをこらえて開いた先には、黒髪い人影が座っていた。

「らす……てい……さん？」

声を出す自分の喉も、長い間活動を停止していたかのように感じる。震える唇ははつきりした音を紡ぐには危うすぎて、途切れ途切れに言葉を確かめる。生まれて初めて話した言葉ですら、もう少し自信を持って口にしたことだろう。

「！？ポラリス、意識が」

久しぶりに捉えた現実の音は後ろから??覚えているよりも少しだけ元気が無いように感じたが、友人のティグリスのものであると

分かる。その表情は見えないが。

目の前の人影　　ラストイの姿に焦点が合う。次第にはつきりしてくる視界の中で浮かび上がる輪郭は、安堵の色が伺えて、自然、自身も安堵するように感じた。

「俺はアクセル先輩の援護に向かう、君は彼女を介抱していてくれ。一応この結界内なら霧躯体は襲ってこないが、死神は別なんぞね！」

だからだろうか、声をかけられることなく立ち上がるその姿に、思わず手を伸ばしてしまう。彼が立った分視界が開けるが、それは今の彼女には過剰の広さでしかなかった。近い場所に居たから感じた心地よい狭さが、行ってしまう

「あ……………」

自分が一体何を言おうとしたのか、自分でも分からない。少しだけ伸ばそうとした腕が、何を掴もうとしたのか分からない。まだ上手く働かない頭のまま、何も分からないままに取り止める。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same (もし
あなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないと
したら。)」

それが気付かれなかったことに、何故か寂しさを感じた。その感情の意味も、彼女には何も分からない。

ただ、霧の膜に隔てられて、彼が行ってしまったということだけは理解できた。

起き上がる体が感じる重力は強い。体を起き上がらせる腕は弱い。

起こした視線の先を見て、隣から聞こえるティグリスの言葉。

「学院の英雄……かあ」

聞かなければ良かったと思う彼女の脳裏に、別の人影が浮かんだ。

第三十九小節「死神」

朱槍が、地と水平に奔る。疾い踏み込みと全身のバネを使って放たれた刺突の一撃は、死神の頭蓋を突き刺す。だが貫通には至らず、少ない損傷を与えただけで彼は即座に後方に踏脚を併用して跳躍した。一瞬後に、そこを死鎌が薙ぐ。

「はっ！！ 無駄に硬いなあおい！！」

毒づくアクセル。跳躍の勢いを殺すのに、その靴底が地面の草を蹴散らしていく。アクセルの槍よりも長い死神の攻撃範囲故に、無茶な回避方法になってしまった。鎌という武装の形状上、武器による防御は無謀と言わざるを得ないからというのも原因にあった。

「？　？　？　？　！！」

空気が齒の間から抜けていくような、だがそれよりも不快な音をあげ、死神が鎌を振りかざし踊りかかる。着地したばかりで態勢の整わないアクセルは、大きく横に跳ぶ。その箇所、鎌の刃が突き刺さった。

深く突き刺さった刃、これを大きな隙とみたアクセルが石突（簡単に言うと、槍の刃の付いていない方のこと）に嵌められた魔石を死神に向ける。くの字に軌道を描いた。

「アイウス Ai u s - ケエン K e n（松明かりの火よ）！！」

一文字のルーン。その神秘を、意味を宿すその文字が赤く光り、火球を打ち出して死神に襲い掛かる。

「? ? ? ? ?」

刃を抜き出した死神に、火炎が着弾する。小規模の爆発を上げて、その骨の一部を焼いた。少しだけ存在を削る死神により、その焦げ目は元の黒ずんだ骨に戻っていく。正直あまり変わりはない。

魔術は見事命中したが、与えた損害は非常に軽微。自身が思っていたよりも爆発の規模があまりに小規模であったが故に、アクセルは歯を強くかみ締める。

「死神の衣か……地味に厄介だなおい」

死者の信仰心を悪性に反映させたその衣は、神秘層のような効果はないが魔術を阻害する効果がある。高強度が大規模であれば無効化できる防御であるのだが、近接戦闘を行いながら強力な魔術を使用するのは困難すぎる。減衰させられるのを覚悟の上で挑まなくてはならない。威力が満身に望めないまでも、浄化概念を含んだ魔術を覚えておくべきだったと、アクセルは後悔した。

そこに丁度、後輩の叫び声が聞こえる。

「アクセル先輩！」

丁度、死神を挟み込むようにして、ラスティが駆けて来た。見慣れない形状の剣を持つその姿を認めたアクセルは、一瞬ティグリスたちの方に視線を向ける。構えを解かず、視線だけを向けてだ。

「(ティグたちは無事みたいだな……) なんだありゃ?」

思わず声を出してしまうアクセルは、慌てて視線を死神に戻す。彼の視界に映ったどう見ても希薄すぎる結界に護られた彼女達と、

それに全く攻撃を加えない霧軀炉たちの姿が、あまりに信じがたい光景だったからだ。

とりあえず言及は後　　そう意識を切り替えたアクセルは、ラストイに向かって叫ぶ。

「コイツ、無駄に堅えから気をつける！！　鎌の攻撃範囲内じゃじつとするなよ！」

「了解！」

アクセルの叫びに、ラストイが威勢良く呼応する。呼応と同時に、ラストイが駆け出した。

????????????????????

アクセルとラストイが、悲鳴の上がった方向に跳び去ってしまった直後、置いていかれてしまった三人は、走って彼らの後を追いかけていた。足の遅いアル少年は、ティアマットの背に乗せられている。地を強く踏みしめる音にあわせて、アル少年の背に揺れるが小気味良くぶつかると、背負われたアル少年の顔には彼女の豊かな黒髪が攪るかのようにかかり、くしゃみをしてしまいそうになるのを必死に抑えている。

「ティアマットちゃん！　待ってよ〜！」

走るティアマットのやや後方から、ステラの悲痛な声が聞こえてくる。非常に活発で女子（の貴族）にしてはかなり体力のある彼女でも、不慣れな強化式では体力を維持できないようだった。肉体の

性能を高めるための簡易的な魔術でも、慣れなければ精神力を非常に食う。

近接戦闘力が皆無のステラを置いていくのは不安が残るティアマットは、走る速度を少し緩める。追いついたステラは、少しだけ申し訳なさそうに視線をティアマットに送ったが、彼女は気にすることなく視線を前に向けたままである。彼女もまた、悲鳴の主が気になつて仕方がないのだろう。

「歪んでる　多分、あと少しで見えてくる。必要だつたら援護に入るから、詠唱準備お願い」

その水晶眼の恩恵で空間の歪み、霧軀炉の存在を感じ取ったティアマットが、ステラにそう促す。両手の塞がった彼女にかわり、ステラは魔石をウエストポーチから取り出した。

「見えた！」

ティアマットが言うと同時に、彼女達の視界には、黒い衣を纏い大きな鎌を携えた霧軀炉と交戦するアクセルとラスティの姿が見えた。二人とも踏脚を駆使して高速で振り回される鎌から逃れているが、決定打を与えられていない。

「死神まで出てる……どういうこと？」

認めた死神の姿に、ティアマットは首を傾げる。通常であれば数年単位で念を留め続けるか、数千人単位で人が死ななくては生まれないような霧軀炉の上位種が、こんなそれなりに人里に近い森に出現している状況が信じがたかったのだ。

「ティアマットちゃん！ あっち見て！」

ステラが指差す方に視線をずらすと、霧のドームに包まれたポラリスとそのルームメイト　　ティグリスだと、ティアマットは記憶している　　の姿が目に入った。周囲は霧軀炉に囲まれているが、一向にその結界に危害が加えられる気配が無い。攻撃をためらっているように見えた。

アル少年はすでにティアマットの背から降りている。後衛であるステラの影に隠れるようにして、ラストイとアクセルの戦いを見つめ始めていた。

「もしかしてさっきの悲鳴は……ポラリスの？　あ……ステラ、霧軀炉がこっちに気付いた」

「ふえ！？　いやティアマットちゃんそんな軽く言わないでよわたし慣れてないんだって」

急に緊張しだすステラをよそに、ティアマットが剣を正眼に構える。その先では、新たな獲物が出現したことを察知したのか、霧軀炉がティアマットたちの方向を向きはじめていた。今まで執拗につけ狙っていたのが嘘であるかのように、それらは彼女達の方に向かってくる。霧軀炉たちの移動を見て、結界内の少女達もティアマットたちの登場に気付いたようだった。

ここに来て、ティアマットには様々な疑問が浮かぶ。どうしてこのような雑魚の霧軀炉に対しポラリスが行動不能に陥っているのか、そもそも何故ここまで霧軀炉が群がってくるのか、何故死神クラスまで居るのか

「うっん……まずは倒さないと……私は前が出るから、ステラはポラリスたちを巻き込まないように援護して」

ひとまずその疑問を振り払って、目の前の霧軀炉たちに意識を集中する。恐らく目の前の一群で最後??そのように検討をつけたティアマツトは、取り囲まれないように注意しつつ敵に切り込んでいった。両の手で片手半剣ハンドアンドハーフソードを握り、一太刀ごとに霧軀炉の鬼火を打ち消していく。

「うう〜…だから狙いつけるのは苦手なんだって〜」

次々に灰に還って行く霧軀炉たちを見ながら、細心の注意を払いつつステラは魔術の詠唱に入っていた。一度ラスティの張った結界を消しかけた際にティアマツトに向けられた視線は、それなりに鋭かった。

第四十小節「霞を切り裂く者」

「墮嚙とは違う意味で近づきにくい……」

死神との戦闘の最中、ラスティが小さくもらす。自身の刀のリーチの、ゆうに二倍の攻撃範囲を誇る死神の大鎌は、高速で振り回されるが故に接近が難しい。ラスティに攻撃を放った隙をつき、度々アクセルが攻撃を仕掛けるが、その槍は僅かな損傷を与えるだけで有効打にはなっていない。肉を切らせて骨を断つの戦法も考えられるが、鎌が刈り取っていく肉はあまりに多く、骨を折ったところですぐに修復されてしまうのがおちで、ラスティは切りかかることが出来ないでいる。

このままではジリ貧だと感じたラスティは、横振りの一閃を後方に飛び跳ねてかわしつつ、魔石を手にした。

「Soie meim ziea… Qeisi xeeni v
inije cokisuta（素は記憶に準ぜ…鳴弦は空に響かせよう）」

剣を右に逆手に持ち替えたラスティが、死神から距離を離して蒼穹を構える。蒼く光り輝く和弓を手に、半身に構え右腕を真っ直ぐ突き出した。矢と共に持たれた刀が、地面すれすれにまで切っ先を近づける。

「Terxentis・Balfesiptemem・Olx
exe（目標補足。射線設定完了。貫け）」

その網膜の内に描かれた線を辿り、矢の形をとった閃光が死神に放たれる。闇色のローブを翻し防ごうとする死神だが、蒼穹により放たれた矢はその体ごとローブを貫通した。よろめく態勢、そこにアクセルが追撃の一撃を放ち、槍で大きく殴り飛ばした。

「ナイスだラスティー!!」

「先輩もナイスです！（アーク、奴の消耗はどのくらいだ？）」

タイミングを合わせてくれたアクセルが、ラスティに声をかけ、彼もまた呼応する。即席のペアの二人は、吹き飛ばされた死神に再び視線を合わせた。見た目の上では外傷のない骸骨が立ち上がる。その肋骨の内側で輝いている炎はローブに隠れているせいで見え難く、どれだけ存在を削れたのかは分かり難い。与えたダメージを、アークが報告した。

「（損害軽微。貫通光のため、破壊できた部位が少なくあまり存在を削れていません。これでは死神を消す前にこちらの魔石が底をつきます!!）」

その報告を受け、ラスティは表情を曇らせ弓を投棄する。捨てられた弓は地面に落ちる前に光に還っていった。

剣技の術式ばかり研究し続けて、攻撃魔術のレパトリーを増やしていなかった自分を、ラスティは恨む。勿論手持ちの術式には高火力のものもあるが、それらは火を扱う故に森では使用できなかったり、詠唱が完了する前に殺られるなどの問題があったりなどで、

現状では全く役に立たない。

「…アークが言うには、大してダメージを与えられていないようです」

「あゝ、マジかよ……」

アクセルは残念そうに肩を落とすが、予想のうちだったのかそれほど気を落としていないように見える。気を取り直す二人の前で立ち上がる死神は、鎌を構えなおし、深く膝を沈めた。

「
」

大きく跳躍しつつ、担ぐように鎌を振りかぶる。やや顔を青ざめて見上げる二人は、着地点を中心に左右に飛びのいた。着地と共に一周して振るわれる刃が、風音を裂いて通り過ぎる。着地したラスティは、黒塗りの鎌を睨んで毒づいた。

「あの形が防ぎにくいから厄介なんだよな、これが」

鎌という武器の形状上、武器を防いだぐらいでは刃が迫るのを止めることが出来ない。また重量もあるので、ラスティの刀では重量差がありすぎて軌道を逸らすなどという真似も困難だ。そもそも線^{ライン}をそのように扱えるほどに、ラスティは熟達しているわけではない。アクセルもまた同じことで、回避以外にとる防御行動が存在しない。ティアマツトほどの膂力があれば話は別なのだが、当の本人は後方で多数の霧軀炉たちを掃討している。ここに援護に来るだけの余裕は無いだろう。

着地し鎌を振り切った死神を睨め、ラスティが隙を誘い出そうと一歩踏み込む。そこに、アークの警報が鳴り響いた。

「（マスター！！ 跳躍、来ます！！）」

前傾気味に体重を傾けるラスティの前で、死神がタイミングを合わせたかのようにこちらに急接近を仕掛けた。攻撃パターンがルーティーン化してしまっていたことで、読まれてしまっていたのだ。拙いと、ラスティは直感する。

既に前進する態勢に入ってしまったラスティは、後方に跳躍することが出来ない。緊急で踏脚を発動させるにも時間が無く、最早死神の懐に飛び込むしか選択肢はなくなっていた。

「ううううううおおおおおお！！！！」

射程内に入ると同時に、死神の鎌が振るわれる。全力で前進したために刃の内側に入り込めたが、人外の臂力で振るわれる鎌の柄も十二分に殺傷力を保有する。一種の殺傷領域キリングゾーンに入り込んだラスティは、一か八かで、両の手で握り締めた刀を鎌に向けて振り上げた。

「斬れ　　お??？」

「はあ!??」

雄たけびと共に振り上げようとしたそれは、余りに軽い力感を伴って振りぬかれた。何の抵抗も無しに切り裂かれていく大鎌は、黒い霧となって霧散する。余りのあつけなさに、ラスティは勢い余り大きく体勢を崩した。

「いや、これ　　チャンスなんだ…ろ!!!」

倒れそうになる姿勢を、足を蹴るように踏みしめて支えるラスティ

イ。強く打ち付けた足がやや痛むが、それに構わず左手一本で水平に振り戻す。アクセルの槍で殆ど損害を受けないほどの強度を持つはずの死神は、弱小の霧軀炉と同じように切り裂かれた。

ラスティの霞霧で破壊された大鎌は、すぐに再生される。再びそれが振られる前に、ラスティは踏脚を発動させて真横に跳躍した。不安定な姿勢のまま跳躍したため、背中から着地する羽目になる。転がることで衝撃を逃がした。

「大丈夫か！？ つつつか何やったんだ！？」

転んだままのラスティに攻撃が行かないように、ルーン魔術を投げつけつつアクセルが叫ぶ。即座に体勢を整えたラスティも、何が何だか分からずに自身の得物？ 霞霧の刀身を見つめた。

霞霧の刀身には、霞斬りの意を表す言葉が刀身に刻まれている。霞を切り裂く。その意味から、ラスティは今回の事態について予想を打ち立てた。

「俺は大丈夫です！！（霧軀炉：霧がその体の構成だから、もしかして霞斬りが対半実体の効果があるのか？）多分ですが、俺の剣は死神？？霧軀炉に対して有効みたいですよ！！」

予想でしかないが、ラスティは自身の考えに確信があった。本当のところは、概念を物質界に影響をもたらすまでに収束したこと（現れるときに霞や霧が集まってくるように見える）から霞霧の名称をつけたのだが、刀身に刻んだ霞を斬るという言葉が思わぬ効果を発揮していたようだ。先ほどまで心細く感じていた細身の得物が、今は非常に頼もしく感じる。

大鎌を踏脚を使ってかわし、ラスティのすぐ隣に降り立ったアクセルは、やや獰猛な笑みを浮かべてラスティの肩を軽く叩く。

「そんななら、お前の攻撃を中心に連携組むぞ!! あわせる!!」

「了解!!」

アクセルの後方に付いて、ラストイは駆け出した。

第四十一小節「かつて英雄と並んだ者」

「やあー!!」

小柄な黒髪の少女　ティアマツト・マキナが、細長い片手半ハンドアンドハーフ剣を振り下ろす。コートの翻るその先には、肋骨に護られるようにして輝く鬼火。そこに剣が奔った。浄化概念を持つ一撃を叩き込まれ、矮小でしかないその鬼火は容易く掻き消される。骸骨が、黒く焼け焦げて崩れ落ちた。

「……無駄に多い」

地に食い込んだ切っ先を引き摺るようにして、一周振り回して近くの別の霧軀炉に叩き込む。見た目より遙かに脆い白骨が、鬼火と共に砕け散る。空中で骨粉は黒く色付いて、そのまま消え去った。

思い切り叩き込む必要など無い。存在も矮小であれば、握る得物は死霊種に最大の効果を発揮する十字兵装クロスウエポン。刃が鬼火を捉えれば、それだけで魔物たちは消え去っていく。取り囲んで波状攻撃を仕掛けるほどの知能も持たない魔物に対し、危ない場面を作り出すことなく彼女は霧軀炉たちを駆除していった。

危ないことといえば、ステラの援護魔術がポラリスとティギリスを護っている結界を消してしまいかけたくらいである。それから、彼女の魔術は結界から大きく離れた地点を狙うのみになった。

「はやく消えなさい」

最早作業になりつつある霧軀炉の排除に、ややイラつき始めながらも次の対象を叩き潰した。

直後、周囲の霧軀炉たちが一斉に吹き飛んだ。

「え？」

突然の他者の介入に、周囲を見回すティアマット。彼女の周囲では、飛翔する細長い布状の何かが、取り囲むように周回しつつ、側面から放たれる圧縮空弾により霧軀炉たちを消していく。ステラの魔術ではない。大火力で広域をなぎ払うようなものではなく、精密に、だが高密度で放たれるそれは、ティアマットが啞然としているうちに全ての霧軀炉を消し去ってしまった。

役目を負え空中に消えていく、細長い布状のそれは、赤茶にルーンが浮かんでいる。ソレをもつ存在に心当たりのある彼女は、その人物の名を口にした。

「アルバ先生？」

その背後を、人影が高速で通り過ぎた。

????????????

「ラストイ！」

死神の鎌を押し付けるように槍を振り下ろすアクセル。袈裟に振り切られた後の大鎌を押し付けるように当たるそれは、刃の先を地に潜り込ませ、死神の動きを阻害した。すかさず懐に入り込むラストイ。

「（再行動時間・再生時間考慮　三撃が限界です！）」

「はい！（多重ロック3、踏脚展開用意！）はあ！！」

鎌が再び振るわれる前に、ラスティの霞霧がそれを切り払う。鋼鉄をも引き裂いて見せるだろう強度を持つはずのそれは、霞霧の前では砂の城でしかない。刃の当たった鎌は瓦解した。

即座に翻る銀閃。ラスティの網膜内に描かれたルールに導かれ、黒ずんだ骸骨を一閃した。風に灰が吹き飛ばされるように散つていく構成組織は、即座に損傷箇所に戻ってくる。そこを、鬼火を含むようにして往路の一撃が加えられた。

その三度の斬撃が終わると同時に、ラスティは全力で後方？？や高度をつけて飛び退いた。攻撃速度よりも再生速度の方が上回るため、数撃ごとのチャンスしかないのだ。今まで居た場所を、死鎌の柄が薙ぐ。

「次行くぞラスティ！」

間髪入れずに、其処にアクセルの攻撃が飛び込む。ラスティが攻撃している間に穂先に刻まれたルーンが、刺突と共に死神の真後ろから襲い掛かる。脊髄にまともに食らい、前のめりになる死神。そこを、ラスティが正面から縦に両断した。

霞霧という攻撃手段を得ただけで、攻勢が逆転する。防御など望めないはずであった死鎌は、ラスティの霞霧により刃が届く前に霧散する。それはすぐに再生されるものの、その間に数回存在を削られる。

アクセルは殆ど補助の行動をとっているが、先輩としてのプライド故か、ルーンを穂先に刻んで更なる攻撃を加え、死神の存在を削るペースを更に速めていた。すでに半分以上、その存在を削られている。

それから数分 戦闘も佳境。アクセルとラスティには共に疲労が見え始めているが、死神もまた存在をすり減らし、消滅まで幾分も無いというところ。突然それは現れた。後方から聞こえる轟音と

共に、アークから念話が、ラスティに入る。

「（マスター！ 魔術の行使を確認！！ アルバさんです！！）」

「アルバ先生え！？」

アークの報告に、思わず叫ぶラスティ。その叫びにアクセルも驚き、彼の顔を見る。そんな二人に、その先生の呆れた声がかかった。

「阿呆、戦闘中によそ見するな」

跳躍した勢いそのままに、アルバは死神を右腕で殴りつけた。義手の金属音が重苦しく響き渡り、骸骨を向こうの木に叩きつける。

呆ける二人の間に降り立ち、やや遠くで体勢を立て直す死神（の鬼火）の姿を見て、アルバは首を傾げた。

「ん？ なんだお前ら、死神の存在を削れてるじゃねえか……こりやあ、オレは来なくてもよかつたかもしれんな」

「流石にきついです！」

「無理言わないでくれよ！」

あまりに緊張感の無い物言いに、両サイドから突っ込みを入れる二人。その反応が鬱陶しいといわんばかりに、肩を下げてため息をついてみせるアルバは、仕方ないと言いつつ懐から絵巻のようにされた術符を取り出した。ラスティには、以前見たものとはやや色が異なっているように見える。

その術符を目にしたアクセルは、大声を上げる。

「って！？ 叔父さんそれオレの術符じゃねえか！？ なんで持つ

てるんだよ返せよ!!」

「阿呆、お前が落としていったんだろ。つうかお前、アーキナムの人間がコレ落としてどうする!」

アルバの一喝に、言葉を詰まらせるアクセル。やはり一族十八番の得意技の触媒を落としていったとなれば、言い返せる言葉も無いのだろう。アクセルと会った際の彼の慌てようから、助けにここに向かう途中か出発点で落としていったのだろうと、ラスティは考えた。

体勢を整えた死神を見据え、アルバが術符を広げ、二人に言い放つ。

「まあ、アレが削られた後ならはやいな……後はオレが奴を消すから、お前らはあの二人組の面倒でも見てろ……いくら倒せそうつつつても、アレを生徒に任せるにはいかんのでな………つたくアクセル、お前ちゃんとやってるのか? ちよつと刻印が雑だぞ?」

「じゃあ使つなよ!?!」

「義手とローブの新調で金があまり無えんだよ」

あつさりとして、さして悪びれた風も無くそう言い放つアルバ。抗議するアクセルのことを何ら気にもかけずに、彼は三言ほど呟いた後、死神に向かって突撃していった。槍の一族最強といわれた存在の登場で、二人は仕事をとられたような気分になるが、彼の言うことが最もであったため、言われたように、後は彼に任せることにした。

「はあ………行こうぜラスティ。ティグたちが心配だ」

「ん？（ティグ？……ああ、ポラリスと組んでる娘のことか） あ、はい」

少女達のもとにかけていくアクセルを、ラスティが追う。その先では、やや驚き呆れた表情で、ティアマットが彼らを見つめて立っていた。

????????????????????

師匠は強い。それが、アル少年がラスティに持っていた感想のひとつだった。彼の前で見せられる師の姿は、いつも彼に英雄を連想させた。

彼の前では、師はいつも格好良かった。敗北の姿を見ることは無かったし、彼の剣は、知識の無い彼であっても美しく完成されていると感じることが出来た。振りを真似ることすらままならない事實は、より一層、それを扱える師を尊敬する要因につながった。

彼にとって、英雄だった。少女の悲鳴に駆けつけ敵を切り倒すシチュエーションなど、典型的過ぎるがだが、それ故にアル少年にその意識を強く刻み付ける。今目の前で繰り広げられている戦いも、小さな彼にはあまりに圧巻だった。

死を連想させるに十二分な姿の敵、黒ずんだ骸骨に黒のローブと黒塗りの大鎌。得物の質量には全くつりあわない速度で振り回すそれを、師は容易く切り裂いた。

散って行く黒灰は、特殊なエフェクトのようで、彼に現実離れのリアルを植えつける。師が得物を振るうごとに、黒が盛大に必要な以上に激しく散っていく。彼にとっても、目の前の出来事はファンタジーだった。

その隣に立ち槍を振るう青年の姿も、彼には大きな印象を残していた。師と共に立ち戦う姿に羨望を覚え、彼の振るう槍にもまた魅

力を見出す。すでに師の剣に惚れ込んでしまっている彼に、槍を覚えようなどという気は起こさせなかったものの、それでも、一つの目標のような何かを、彼に植えつけた。

熱心に、貪欲にその動作を目に焼き付けようと凝視する最中、ソレは現れた。

右方向からあがる轟音。驚いて視線を向けてみると、帯が空中を泳ぎまわり風の弾丸を打ち出している。風弾が打ち込まれることに、白骨の体と鬼火は飲み込まれて消えて行き、灰に還り空に消える。師と同じ髪色の少女が力なく佇んで、その光景を見つめている。

不意にその口が何事か呟いた時、その人影は現れた。

赤茶のコートがはためき、同色の髪が後ろに流されている。身体的特徴が師の隣で戦う青年と似ており、血縁関係をうかがわせる。全身を覆い隠すローブの上からでも分かる鍛え上げられた肉体と身にまとう雰囲気が、歴戦の戦士を伺わせた。

その姿を見た時に、アル少年は思う。

ああ……この人は

????????????

「まったく、霧軀炉ならまだしも、どうして死神クラスまで居るんだかな、おい」

甥っ子と生徒を置き去りに、アルバは急速に死神との距離を詰める。左腕??生身の方の腕に握られた術符は、アルバの後を尾を引

くようにたなびく。

それを、突き出した。

「Hail garaz en neiz（吹き荒れ、束縛する者よ！）！」

瞬間、術符はアルバを追い越して、死神にすらも通り越して飛び去った。鎌の届かないほどに逸れて行った術腑に、死神は見向きもしない。

だが、アルバはその行動を見てほくそ笑む。小さく「阿呆」、その一言と共に、翳した手のひらを死神に向けた。

「Sacum axi weil einen（巡れ帰り包み纏う）」

その手のひらが握り締められると同時に、術符は強い緑の光を放つ。全長二十数メートルの術符は、ルーンをその側面に浮かび上げらせ、そのルーンを内側に向けるようにして死神の周辺を高速で周回し始めた。時計回りに巡る術符につられるように、風が吹き始める。

今自身の周囲で起ころうとしていることを察したのか、死神がアルバへの疾走を止める。だが、それはあまりにも遅すぎる気付きだった。

腕を、一線に振り下ろす

「Isa（停止せよ）」

詠唱をキーに、刻まれた式が発動された。最後の一言が告げられる前とは打って変わった加速度で風が巡り、渦巻いてその円を徐々に縮めていく。死神は捕らえられまいと鎌を振るうが、それは密度

を伴った風に弾き飛ばされる。

風が光を屈折させ、視界を歪める。外からは中の死神の様子が伺えなくなり、時折鎌が風に弾き飛ばされる音が聞こえてくる。

「Requiem ? ternam (永遠の安息を)」

左手を風の渦に翳す間、右腕???鉄の義手は赤・青・緑の三色の魔石が握られ、別の詠唱が推し進められている。それはアーキナムが用いるルーンの詠唱とは違うものだった。

三色の光を握り締めたアルバが、その右腕を大きく後方に引き絞る。獰猛な笑みが、浮かべられた。

「さあてな……教会の知り合いに教えてもらった鎮魂詠唱の一つだ

」

詠唱が済むと同時に、風が止んだ。風圧の層の中から姿を現した死神は、術符に全身を拘束されていて、身動きが取れない状態になっている。その姿を確認したアルバは、死神に向け跳躍した。

空気抵抗をやわらげ重力加速度を遅くする気流が、アルバが描く放物線をゆるいものにする。速力と体重の乗った一撃が、放たれた。

「ありがたく受け取って成仏しろや!!」

白く輝く拳が、鬼火を捉える。教会の魔術式による正式な浄化概念が、その存在概念を浄化する。非実体であるはずの鬼火は、実体を持つかのように拳に捉えられ、固形物であるかのように砕け散っていた。後に続いて、その四肢が灰に還っていく。

「……Kyrie eleison (主よ憐れみたまえ)」

白い光が終息するころには、死神は存在の痕跡すら残さず消え去っていた。

第四十二小節「背負う二モツはそれぞれに」

「教会の、浄化式？」

アルバが放った白色の光に反応し、ラスティが振り向いて眩く。アクセルの後についてポラリスたちのもとに駆けていた彼だったが、アルバから聞き取れた詠唱が、ラテン語の鎮魂詩であったことに驚き、足を止めていた。振り向いた先ではアルバが死神の討伐を既に終えてしまっており、拳を突き出した状態で構えをとっていた。どこことなく中国拳法のようなと、ラスティは思う。後方から、アクセルに呼びかけられた。

「ラスティ、何ぼさつとしてやがる。アレはお前が張った結界だろ」

「あ、すいません（…それにしても、なんで教会の人間でもないアルバ先生が、教会の式を扱えるんだ？）」

アクセルに呼ばれラスティは踵を返したものの、アルバが扱った魔術に首を傾げる。教会の魔術は、‘特殊な処理の施された触媒’を必要にするからだ。この処理の施された触媒でなければ浄化概念をはじめとした教会ならではの概念が上手く具現化されず、脆弱な幻想になってしまふのだが、今後方で行使された魔術は明らかにその処置が施された触媒でなければありえない威力だった。

触媒となった義手に、恐らくその特殊処置、式典処置が施されているのだろうと予想し、親戚であるアクセルに質問を試みる。

「アクセル先輩、アルバ先生の義手って、教会の式典処置が施されてるんですか？」

「んあ？ ああ、あの式か……」

ラスティの質問の出所が、アルバの行使した魔術であることに思い至ったアクセルは、納得の表情で二度頷いてから、彼の質問に答えた。駆け足の速度は落ちない。

「あの義手ってな？ あのアルナ導師の作ったやつなんだ。ほら、アルナ導師って姉に教会騎士が居るだろ？ あの姉妹って、妹が姉の装備作るってでも有名だし……まあだから多分、そこら辺の関係で？？処置を施すときに式典処置が施されたんじゃないか？ あれ、物の強度も上がるらしいしな……」

「へえ……そうなんですか……有難う御座いました」

「おう、どういたしましてっな」

最近の一般常識（アルナ導師には教会騎士の姉が居る）を知らないラスティだが、納得した様子を見せてその事実を誤魔化した。とりあえずアルバの義手に式典処置が施されているということが確定し 式典処置の方法を知るらしい魔術師が居るということに少し驚いた。自分が知っ設定したている中では、処置の方法は厳しく秘匿されていたからだ。恐らく、七年間の内で変化があったのだろう。

ちなみに、アレ相当値が張るらしいぜ というアクセルの言葉に、色々な意味で苦笑しつつ、二人はラスティが張った結果に到着する。ティアマットは既にその隣に立っており、二人？？？特にラスティに呆れたような視線を送っていた。思い当たる節があるラスティは、苦笑いで誤魔化す。遠くから、ステラとアル少年が歩いてくるのが視界の端に見えた。

「あ、アクセル……終わったのか？」

結界の中、日に焼けた肌のボーイッシュな少女　　ティグリスが、ポラリスを気遣いながらアクセルに問う。アクセルはやや不安そうな顔色を残す彼女に優しく頷き、ラスティに目配せした。言いたいことを察した彼は、張られた結界の境界に指を添え、解呪する。

「A y e n , x b s i k e i l d i a f e k t a (さあ、結び目を解こうか)」

言葉と同時に、霧が溶けていく。ドームは形を失い。境界がとり払われた。一瞬、ポラリスが耳を塞ごうとしたのか腕を少し動かしただが、何も聞こえなくなっているのに気付き腕を下ろす。もう音を恐れなくていい、その事実が彼女の緊張感を解いたのだろうか、腕を下ろし終えた途端、急に彼女は意識を失ってしまう。慌ててティグリスが、倒れようとする彼女の体を支えた。

「ポラリス!？」

「大丈夫、緊張が解けただけだ。すぐに目は覚めるさ」

慌てて呼びかけようとするティグリスを、ラスティが制止する。一瞬見上げて彼の顔を見て、再びポラリスに視線を戻し、その表情が安らかであることを確認すると安堵のため息をついた。やさしく彼女を寝かせると同時に、アルバが彼らのもとに辿り着いた。

「とりあえず、周囲の死霊どもは殲滅し終えただろう。向こうに残ってた他の生徒たちは知らんが、とりあえず大丈夫だろう。……つか、なんでお前らはここに居るんだ？　そもそもその餓鬼はなんだ？」

「「あ」「

アルバの一言に、皆の視線が、金髪に琥珀色の目を持つ幼いアル少年に集中する。一斉に視線を向けられた彼は、やや動揺の色を見せた。そんな彼を視界に収めつつ、彼をここまでつれてきたのは拙かったと内心悔やみ、どのように言い訳をしようか必死に思考を回転させるラスティ。

だが、アルバの一言がその思考を停止させた。

「ああ……まあいい。話は後だ、別にそう問題でも無いだろう……とりあえずだラスティ、ポラリスを背負え」

「（どうするどうするどうする……せおう？ ぼらりす……？）はいい！？」

裏返ったラスティの音が、森に木霊する。ポラリスはその大声の中でも、安らかに寝息を立てていた。

「いやいやいやいや、何ですか！？」

ラスティの酷く狼狽した声が森に響き渡る。ポラリス？？意識の無い少女を背負って行けという指示に、猛抗議の体勢をラスティはとる。暗に、‘先生が背負えばいいじゃないですか’という思いが込められていた。

だがそんな雰囲気漂わせるラスティに、アルバは一向に構う様子を見せない。気だるそうな一言で一蹴された。

「背負わなければ移動できんだらうが」

「いやまあ確かにそうなんです……」

どうやら抵抗する余地はないと見え、ラスティは肩を落として抵抗を諦めた。その肩にアクセルの手が置かれ、気持ちのこもらない励ましの言葉が送られる。そんな行動をとるアクセルに、アルバは少し語調を強めて言った。

「アクセル、お前はこいつらの荷物を持って来い」

「はあ！？ いや何でオレが」

理不尽とも取れる発言に、先ほどのラスティのように猛抗議するアクセル。だがその抵抗も、アルバの前では無力だった。口元だけを歪めた笑みに、アクセルは嫌な気配を感じ取る。

「ほう？ これをお前への（アーキナム一族の礼装を落としていくという大失態を犯した）罰にしておこうというオレなりの配慮だったのだが……仕方ない、兄貴現当主にどうするか聞くしか」

「行つて来るぜ！！」

アルバの言葉に即座に踵を返したアクセル。踏脚魔術を発動させて、来た道？？ラスティたちの荷物の方角に跳んでいつてしまった。目印を覚えておかなくても大丈夫なのかということが、アル少年以外のキャンプメンバーの頭の中を一瞬過ぎたが、多分大丈夫だろうと思いい心強い先輩に任せることにした。ティアマツトの分の荷物を持ち上げたときのアクセルの反応が想像できて、ラスティは思わず頬が緩んでしまう。

小さくなつていくアクセルの背中を見て、ふとある疑問が浮かんできたステラが、それを口にする。

「あれ？ そういえば先生、どうしてわたし達が荷物持ってきただって分かったんですか？」

「ゴーレムからお前らの姿が一瞬みえたんだよ。あとお前らが何か背負っているのな」

相変わらず気だるそうな口調だが、質問にはしっかりと答えるアルバ。そんな彼の回答に納得したステラは、それ以上は何も聞かなかった。ただ、ティグリスが少々居心地悪そうにしているのが気になった。

とりあえず移動をして馬車のもとに行こうということで、皆は行動を開始した。ラスティは言われたとおり、ポラリスをその背に背負う。その作業を、ティグリスとティアマットが手伝った。ステラはラスティの様子を非常に楽しげに見つめている。

「ふっふっふ……どうどう、ラスティくん？ 女の子を背負った感想は？」

「とりあえず、ティアマットの荷物よりは軽　　いってえー！！」

「……………」

ステラの質問による気恥ずかしさを誤魔化そうとしたラスティが、ティアマットに軽く小突かれ、睨まれる。どうやら余計なことを言ってしまったと思ったラスティは、とりあえず謝った。気を取り直して、歩くために立ち上がる。

少女一人分の重量がかかる。多少ながらも身体機能を魔術で補助してはいるが、疲労の溜まりつつあるその体にはいささか重く感じられた。歩き出した彼の歩調に合わせて、アルバが先頭を歩く。その後ろに、ラスティに並んでティアマットとステラ、反対側をティ

グリスが歩き、彼女はラスティの背で目を覚まさないポラリスの様子を心配そうに伺っている。

左肩にもたれかかったポラリスの頭が、ラスティの視界のすぐ外に在る。彼女の豊かな緑に輝く髪が視界に紛れ込み、安らかな生暖かい呼吸が首筋にかかり、その音が自身の足音よりも鮮明に聞こえてくる。

そんな状況に陥ってラスティは、‘赴く者’を維持したままではなれば、緊張でどうにかなくなってしまっていただろうと思っていた。明らかに本来の使用用途からは離れた使い道ではある。

「あ、そういえば、君は何ていうんだ？」

「え？ アタイ？」

気持ちを落ち着かせたラスティが、ふと、隣の少女の名前を聞いていなかったことに気付き、顔を左に動かして問う。ポラリスの様子を伺い続けている彼女だが、すでに精神的には元気を取り戻しつつあるように、その表情からは予測できた。顔を向けた際、ポラリスの顔が視界に入る。

「アタイはティグリス・アルクイナ。ポラリスのルームメイトだよ」

「あ、そうなんだ！ よろしくね！ わたしは」

ティグリスの自己紹介に、ラスティは頷き、ステラも反応して自己紹介をした。ティアマツトはポラリス繋がりですでに面識があるようで、ただはにかんだだけでそれに受け答えた。アルバは会話に入り込むつもりがないのか、黙って先頭を歩き続けている。

ステラの元気の良い自己紹介から始まって、何故か女子同士での自己紹介がラスティを挟んで始まった。気分的に男性勢力が欲しい

とラスティが思う中、ステラの語調つられてかティギリスに元氣のよさが垣間見えてきている。とりあえず置いてけぼりを食う訳にはいかない、ラスティは自分の名前を告げようとした。

「あ、じゃあ俺は」

「あんたのことは知ってるよ、ラスティハルト・ジーンだろ？ あんたとティアマットの二人組みは、学年じゃ有名なんだぜ？」

遮られるような形になって、ティギリスにラスティは自身の名前を言い当てられた。そのことに意外そうな表情をうかべ、その直後に首を右に傾げて疑問を口にした。あるいているうちに背に乗るポラリスの姿勢がやや崩れてきたので、言いつつ体勢を修正する。

「有名なのか？ やっぱそれって、墮嚙の時の話が原因なのか？」

「そりゃあ当たり前、あの墮嚙を倒したって、有名にならない筈無いだろ？ 一部じゃ、学院の英雄、だなんて呼ばれてるんだぜ、知ってたか？」

英雄、そのワードに一番反応したのはアル少年だった。ラスティの後方でその単語を耳にした彼は、今までよりも更に畏敬の念をこめた視線を師に送る。空気を察せたのかどうかは分からないが、少なくとも興奮で騒ぎ立てることはしなかった。最も、後で詳しく話を聞こうと思っただけなのだ。

ティギリスの口から語られた、明らかに分不相応な二つ名に、ラスティの右隣を歩く二人も反応した。

「え……………それ、私も知らなかった……………」

「わたしは知ってたよ〜!!」

ティアマットは純粹に驚きの表情を、ステラはあえて話していいかったのだらうということがありありと分かる表情で話した。ティグリスから見ると、ラスティとティアマットの同じような表情が並んで見えたため、思わず笑ってしまう。

「英雄だなんて大げさな……なんでそんなことになってるんだかな、これが……」

‘黒髪カツプル’という、更に動揺すべき呼び名があることなど夢にも思わないだらう様子で、ラスティは眉をひそめつつ苦笑する。
接続状態のアークにだけは、それが照れ隠しであることが分かった。
ティアマットは純粹に、その呼び名に対し困った様子を見せている。

「……阿呆……」

先頭を歩くアルバが、後方の会話を耳にしている内に呆れて小さく呟いた。

そんな一言を聞き取っていたのは、アル少年だけだった。

第四十三小節「五十歩百歩な彼女たち」

「ん……………」

僅かに、ポラリスが身動きする。彼女の声がラスティの耳に入り、両肩にかかる腕が微かに動きを見せた。その動作にラスティは気付き、自らが背負う少女に呼びかける。

「ん？ 起きたか？ポラリス？」

早く降ろして心の平静を取り戻したいラスティが、彼女に呼びかける。その行動に、ラスティの隣を歩く少女達や少年は反応し、今まで黙々と先導を続けていたアルバも、歩きつつ振り返った。呼びかけられたポラリスは、寝言のような気の抜けた声を発している。

「ん……………むう……………ん……………」

意識が目覚めかけているポラリスは、何処と無く居心地の悪そうにその表情を曇らせる。自らの力で体を支えているもでなく、ただ乗せられている形で、やや不安定な場所ラスティの背中に乗っているということが、そう思わせているのだろうか。

ラスティの周囲は彼女の名前を呼びかける。だがポラリスは、まるで寝起きの悪い少女のように呻いて身動きをするだけで一向に目を開かない。気絶というよりも、本当に寝ているだけのような様子である。

そうして呼びかけている内に、まだ夢の中に居たいのである。彼女がとった行動は、ラスティの首に強く抱き付くというものだった。気が抜けていたところに来たそんな事態に、ラスティの脳機能はフ

リリースする。

「ぐお!?!」

「「ぽ、ポラリス!?!」」

「わゝお! ポラリスちゃん大胆!」

「(うわあ~~~~~)」

「……………はあ…なにやってんだかな…」

ただ肩にかけられるだけだった両腕が、ラスティの首に回される。眩しさでも感じているのか分からないが、光から隠すように動かされた顔はラスティの首筋に押し付けられる。戦闘後で緊張感を失っていたラスティは、今まで彼の心の安静を保っていた魔術を解除してしまう。

「うわ!?! おい、ちよつ、ポラリス!?!?! (アーク! お、お俺ハどうすればイイ!?! Help me!! Mayday, mayday, mayday!!)」

「(お、落ち着いてくださいマスター! えつと、えつと……………へるぷみーは分かりますが、めーどーとは何ですか!?!)」

主の動揺は、接続したままであるアークにも強く伝わってしまう。どう考えても適当でない対応をしてしまうあたり、その動揺のほどは強いのだろう。アークが今まで感じてきた中で最も強いラスティの動揺だった。

急に騒ぎ始めた周囲が、ポラリスの眠りを妨げてしまったのだろう。擦りつける様に顔を動かした後、ゆっくりと、小さく、その目を開いて見せた。

「ポラリス、目が覚めたのか?」

気が動転して顔色をめぐろしく変えているラスティのすぐ背後で、ティグリスが目を開けたポラリスに呼びかける。その声に反応して、顔を左に動かした。彼女の眼が、ルームメイトの姿を捉える。

「……ていく？ ……あ……そうだ……私は……」

ティグリスの姿を認めたことで、彼女は徐々に意識をはつきりさせていく。そしてそれに伴い、自らの状態についても次第に認識し始めた。

周囲の景色は後ろに流れて行っている。隣の友人は歩いている。でも自分は歩いていない。そもそも自分より背の高い筈のティグリスよりも目線の位置が高いのは

「よお………ポラ……リスう………起きたんなら……くび………」

耳元から聞こえた詰まった声に、ポラリスは振り向いた。

視線のすぐ先には、かなり近い位置にある（青ざめた）ラスティの顔。認識できたのは、自分は今ラスティの首に抱きついているということ。

それらを認識した瞬間、ポラリスは、瞬間沸騰おっばひびくとした。

「ら、らららあらららラスティさん！？！？！？！？」

異性に抱きついていているという事実には驚き、大慌てでラスティの首を解放するポラリス。ラスティは気道を十全に確保できるようになったため、大きく息を吐いて呼吸をした。続けてラスティにせがみ、自分はもう歩けるからと言って降ろしてもらおう。

ラスティの顔は少し、ポラリスの顔は異常に、赤く色付いていた。

????????????????????

アクセルがラスティ達に追いついた頃には、一向は既に馬車の停まっている場所まで辿り着いていた。まだ日は昇っていて、他の生徒達はまだ魔獣討伐を続けているらしく見える人影は少ない。

ラスティ達が辿り着くとほぼ同時に、アクセルは姿を現した。

「はあ……………はあ……………はあ……………な、なんなんだこの重量は……………」

「あ、アクセル先輩、着いたんですか？」

前と後ろにバッグを背負い、肩にかけるようにして持たれた槍に他の小さなバッグがかけられている。ラスティの知る軍人ですら、このような装備を持つことは無いだろうと思えるほどに重装備で身を固めたアクセルは、ラスティの言葉に応えるだけの余裕も無く、息も絶え絶えに言葉を吐き出した。

「特に……………後ろのコイツが……………」

「あ、アクセル!？」

そこまで言うと、アクセルは力尽きて前のめりに倒れこんだ。背中に背負っていたバッグの下敷きになり、アクセルは苦悶の呻き声をあげる。ティグリスは大慌てで彼の元に駆け寄った。まだ紅潮具合が治まりきってないポラリスも彼女と一緒に駆けて行く。

アクセルを助けるために、彼の上にのしかかる最も大きい???ティアマットが持っていたバッグに手をかけて引き上げようとする。

「つて、重!？」

「ティグ、手伝います」

一人では持ち上げられなかったティグリスを、ポラリスが手伝う。少女二人の奮闘によって、重量級のバッグはアクセルの上から取り除かれ、アクセルは力なくではあるが立ち上がることが出来た。

「さ、サンキュー……マジで死ぬかと思っただぜ……」

空元氣すら出せないアクセルの顔には生気が残っておらず、彼がどのような苦難重いものを乗り越えてここまで辿り着いたかを物語っている。成る程確かに、罰則としてなら有効だったのかと、ラスティは思った。彼に労いの言葉をかけるために、二人の後に続くようにしてアクセルの元に向かうラスティとステラ。

他のメンバーから少し離れたところでティアマットは、自分が普通に背負って歩いていたバッグを二人がかりで持ち上げられて、どこか納得のいかなそうな表情を浮かべていた。アル少年は、そんな彼女を心配そうに見上げている。

そんな所に、アルバ先生が現れて彼女の背中に言葉を投げかけた。

「まあお前は、筋力ならオレと同等だからな…仕方ないだろ？」

「……………はい……………」

アルバ先生の一言は、更にティアマットに追い討ちをかけていた。アル少年はどうにも居た堪れない気分になり、(何故か)気配を悟られないようにしてラスティ達のもとに向かっていった。

「今はまだ夢の中、あの日の空を夢見てる」

仰向けに寝転んでいた。石床を走る馬車に揺られ、流れていく雲を眺めて、ラスティは歌っている。彼を真似するようにアル少年はその横に寝転び、アーク（少年）はそんな彼らを見つめていて、風は弱く吹いていた。

「その中でいつまでも、ずっと空を眺めてた」

馬車のもとについた後、ラスティ達はティギリス、ポラリスたちと共に一足先に学院に帰ることになった。アクセルは（疲労しているという点以外では）健康だったのでそのまま残っていたが、疲弊し魔石を使い切ってしまったティギリスと、急に精神錯乱を起こしたポラリスは先に帰し（必要であれば後遺症が無いか検査をし）た方がいいと、教師陣は判断したのだ。当然、部外者のラスティ達も一緒に送って行かれ　もらえることになっている。

「風に撫でられ目覚めると、まだ空を見上げてる」

アルバ先生が御者となり走る馬車は、馬車の上に男性陣、中に女性陣というふうにならに自然に分かれた。まだポラリスの精神状態が（色々な意味で）安定していないので、とりあえず自分は何も出来ないだろうと判断したラスティが自主的に馬車の上に乗ったのだ。勿論アークとアル少年は付いてきただけである。

「どこから夢であったのか　　それを知ることには無理だから、ただ風の音に耳澄ます」

特にすることも無かったラスティは、寝転んで空を見始めた。アル少年も同じように隣に寝転び、アークはそれを見守る。流れていく雲を見ているうち、ラスティはひとりで歌を歌い始めた。決して上手いわけではないが、確実に下手ではない、彼の歌。

それは思わず空を見上げてしまいたくなるような、そんな雰囲気
の歌だった。

「風に運ばれるその歌は、遠い故郷の童歌」

歌が終わったあと、自然と風に耳を澄ませる。優しく吹く風が木々を揺らす音と、車輪が石の街道を転がる音が、聞こえていた。

「師匠……うたも……うたえたんですね」

寝転んでいたアル少年が、そのままの姿勢でラスティに言う。横になったことで疲れが出てきたのだろうか、眠そうに目を瞬かせ、ややるれつの回らなくなりつつある口調で言う。苦笑するラスティは、ティアマットには完敗だとおどけて言うて見せた。

「たしかに……そう……ですね」

あまりにあっさりど、肯定してしまう。同時に、緩やかに意識は浮かんでいってしまった。

????????????????

「もしかして……二人とも、寝た？」

「はい」

歌が終わって急に静かになった馬車の上に、ティアマツトが顔だけを出す。何の動きもなく横になる二人を見て、彼女は側に座るアークに問うた。彼女の質問に、アークは首を縦に振り小さな声で答え、彼らのことは自分が見ていると言う。特に用事があったわけでもなくただ様子を見に來ただけであったティアマツトは、了解の返事をする。馬車の中に入っていた。

「二人とも、寝てみたい」

窓から馬車の中に入り込んだティアマツトは、入ってすぐにステラにそう言った。椅子のようなものの無い馬車内で、ステラはシートを敷いて床に腰を下ろしており、彼女の報告を聞くと予想通りだと微笑んだ。その近くにはポラリスとティグリスの二人がステラに向かい合うように腰を下ろしている。

先ほどまで落ち込んだ様子であったポラリスだったが、彼女は他の皆の励ましによって幾分か元氣を取り戻しているようだった。外れていた髪留めをつけ、その緑に輝く髪を纏めた姿には、いつものような気丈さが伺える。

「そうでしたか……ラスティさんには礼を言っておきたかったのですが…仕方がありません、学院についてからです」

「まあそうだよな」

やや残念そうに顔を俯かせるポラリスだったが、すぐに氣を取り直して視線を前に戻した。その切り替えの早さにいつもの様子を感じ取ったティグリスが、同意して首肯する。

少女たちの輪にティアマツトも加わり、四人は向かい合って四角を描くように座り込む。先ほどまではポラリスを励ますための会話だったが、彼女の元気が戻ったため、話題は変更されることになった。その話題は、ティグリスから提示される。

「話変わるんだけどさ、アタイらを助けてくれた時にあの人張った結界つてさ、なんだか変じゃなかったか？」

「あ、それわたしも感じた！」

話題になったのは、先の戦闘の際にラスティが張った、霧がドーム状に集まった結界のことだった。見た目の上では大して強度が無いように見える半透明の結界。その強度が実際にどの程度の物であったかは分からないが、彼女たちには‘霧軀炉’が攻撃を仕掛けてこないということが不思議でならなかった。

「どうして霧軀炉たちは結界に攻撃を仕掛けなかったのでしょうか？」

ポラリスの問いが発せられ、このメンバーの中では最も学力の高いステラにティグリスとポラリスの視線が集まる。いつもであれば^{皆の知恵袋}ラスティが説明してくれたのだろうが、その肝心の本人は今馬車の上で熟睡中であり???他のメンバーが皆武闘派の面々ばかりだったので、唯一の学問派であるステラに期待が向けられるのは当然だった。彼女は人差し指を額に当てて考え込む。

「うーん……多分ミスト現象に関係があるんじゃないかなって思っただけだよ」

どうも確証が持てない様子であるステラ。彼女が分からない以上、

知る術はなくなつたかと、すっかり先生の存在を忘れていた二人が考えたその時だった。意外な人物から、その答えがもたらされる。

「私、知ってる」

「……え!?!」

ティアマットのその発言に、一同の視線が一拳に集中する。馬の手綱を握っているアルバ先生も驚きで息を呑む音が、ポラリスだけには聞こえていた。皆の反応の仕方に納得がいかないと少しむくれてみるティアマット。

「だってティアマットさん。私より点数低いのに……」

「三点しか、違わない(九百点中、ティアマット337点、ポラリス340点)」

ポラリスに指摘された、自分の夏休み前の中間テストの点数の低さに、五十歩百歩だと返してみせるティアマット。どうにも学力のことで小規模の言い争いが発生しつつあった。一応平均ギリギリを保ったティグリスと、学年トップクラスの学力のステラには、その争いの火種はあまりに低レベルのことではあったが、当事者たちは至って真剣である。

兎にも角にも話を進めるために、ステラとティグリスは、彼女たちのことを止めるということで見解が一致するのであった。

第四十四小節「納得するもの」

ティギリスとステラの尽力 「あんたらどっちも馬鹿だろうが！」
により、ひとまず両者の争いはドローに終わり、ティアマットは渋々と先の疑問の答えについて語った。

「教会で聞いた話なんだけど、霧躯炉たち死霊種は、存在規模が小さいとミストの中で存在できないみたい。ミストの中で存在できないから、死を恐れる概念から生まれた霧躯炉たちは、ミストを前にすると、動きが止まるって言った」

「（そっぴえば次の授業の予習してて、教科書にそんなこと書いてたっけ）」

ティアマットが語る言葉に、三人は感心したように頷いてみせる。最初の頃からは随分と饒舌に話せるようになったティアマットは、彼女達に説明を続ける。

「だから教会では、数に囲まれすぎたら逃げれるようになって、魔石でミストを発生させる魔術があるの。多分、あの結界はその応用。早く展開できるから、多分あれしか使えなかつたんだと思う……」

「へえ〜、そっぴやあんた教会に居たって言ってたもんな。……じゃあアレってさ、あたいとかでも出来るのか？」

知っていれば色々と便利だと、彼女は考えたのだろう。出来るのなら教えてもらいたいという考えもあつてそのように彼女は質問をした。聞かれたティアマットは、考え込むように腕を組み、少しし

て首を横に振った。

「……難しいかもしれない。使うには、魔晶石、じゃなきゃ駄目だから……金に余裕のある貴族とかじゃないと、難しいかもしれない」

「そうか……って、ましようせきい!？」

魔晶石????魔石の中でも、純度百パーセントの高級品でなくては出来ないというティアマットの言葉に、ティギリスが大声を上げた。ステラとポリスも、その言葉に驚いて息を呑む。上のほうから、アークの静かにして欲しいという要請が、満面の笑みと共にもたらされた。騒音を出した張本人であるティギリスは、恐縮した様子で再び屋上に上がっていくアークの姿を見届ける。

その姿が見えなくなった後、ティギリスは声の大きさを落として再び質問した。

「(……ち、小さいけどやっぱ精霊だな…怖え…) でさ、魔晶石じゃないと、なんで出来ないんだ?」

「え? ……ごめん、そこは、分からない」

気を取り直して発せられた質問には、流石にティアマットは答えられなくなる。そうであるということは知ってはいるが、何故そうなるかという部分までは教わらなかったようだ。

答えに詰まった彼女に助け舟を出すように、今の今まで彼女達に忘れ去られていたアルバ先生が、その問いに答える。

「ミストってのは空気中の魔力が高密度になった時発生するものだ。不純物を含む魔石で魔術的にミストを発生させようと思ってもな、魔石が意思を最大限には伝えられないから高密度の霧にならずに霧

散ってしまうんだよ。……まあ要は、魔石を霧状に固定化という制御は、ソレの構成要素が全て幻子でなきゃ無理なんだ、分かったか？」

御者をしていたアルバが、背中越しに解説する。見た目はどう見ても体育会系の教師だが、やはり魔術理論の教師であるのは伊達ではないのだろう。見た目と知識量とのギャップ故か、説明を受けた四人は感心した様子で頷いて返事をした。

「でもよ、じゃああんた等んとこの委員長、目茶目茶金使わさったと思うんだけど……」

アルバの説明を受けて、その魔術の行使には魔晶石が必要だと理解したティグリスが、他の三人に向かって言う。今まで考えてなかったその事実には、ポラリスは表情を凍りつかせる。二人は並んで冷や汗を流し始めた。

「あの結界張るとき、魔石を最低でも十個以上はばら撒いてたぜ？あれが全部魔晶石だったら、百万単位で金がかかると思う……」

「す、数百万円……ど、どうしましょうティグ……」

純度百パーセントの魔石は、非常　　むしろ異常に値が張る代物で、半径二センチの球状の代物で一個数十万など、余裕でかかる。それこそ裕福な貴族でなければ手が出せない程に高級な代物といえ、事実学院の購買部では魔石の純度は高くて九十パーセントまでのものしか置いておらず、それでも裕福な貴族の生徒しか買うことは無い。助けてもらったことに礼をしようにも、そのために使用された魔石の費用を考えると青ざめるしかなかった。どんな形で礼をすればいいのだろうということ、二人は真剣に考え始める。

「だ、大丈夫だつて二人とも。ラスティくん、魔石はアークちゃんが持って来てくれるらしいから、お金はかかってないんだよ？」

「え？ ステラ、それ私今初めて聞いた……」

二人の様子を見て居た堪れなくなったステラが、その魔石の出所を暴露する。その情報を聞いて、ステラ以外の三人は呆けた様子で口を開け、彼女に視線を向ける。

ステラのこの情報源はアークであったため、その事実を初めて知ったティアマットは、やや咎めるように目を細めてステラに視線を向ける。少しだけ、彼女の右目が強く光った。

「そ、そうだったんですか」

「よ、よかったぜ。マジでアタイ焦ったぜ……」

ステラからもたらされた情報により、金銭的には迷惑をかけることは無かったことに二人は安堵する。とはいっても、使用された魔石は最高級品であるし、何より危機を助けてもらったことには変わりがないので、何かしらの礼は必要だろう。

ステラとしては、この話は魔晶石の格安流通ルートとして他の人には知られたくなかったため、このことは他の人には教えてはいけないと、アルバ先生も含めて釘を刺しておいた。

「（広まってくれた方が、私の活動資金を集める機会が増えると思うのですが……いえ、マスターにはばれる可能性が増えることを考えると、少数のお得意様だけで十分でしょうね）」

下の方から小さく聞こえてくる会話に小さく笑いつつ、アークは

彼女達（特に貴族であるポラリス）にも魔晶石を売り込もうかと考えているのであった。

「ほら、着いたぞお前ら」

馬車が停まり、アルバが背中越しに後方の生徒達に声をかける。談笑を交わしていた少女達は、彼の呼びかけによって、学院に帰ってきたのだということを理解した。馬車の窓を見ると、寮棟の北東側に停められているのが分かる。上の方からは、アーク（少女）がラスティとアル少年を起こす声が聞こえていた。

「ふああ〜……おはよう……ついたのか？」

「ふふ、お早う御座いますマスター」

アークが起床を促す声を聞きゆっくりと上半身を起こ上がりさせて寝惚け眼のままラスティはお早うの挨拶をした。少し傾いてきた日差しを横目に盗み見てから、アークは優しく微笑み、普段よりも一層柔らかい語調で挨拶を返す。その隣では、やや遅れてアル少年が起き上がり、ラスティと同様の表情で挨拶した。まるで兄弟のようだと、隣り合う二人の様子を見てアークは思う。

「ほらさっさと降りろ。馬車を持って行けんだろっが」

目を瞬かせて眠気を払おうとする二人に、御者席を明け渡し下に降りたアルバが少し叫ぶ。彼の言葉で覚醒を早めた二人は、急いで

馬車の中に入り自身の荷物を纏め、降りた。すでに少女四人は降りてしまっている。

「済まない、寝起きだから勘弁してくれ」

「大丈夫」

彼等を待つていた少女達に、ラスティは左手の指を揃え伸ばして顔の前に立てて謝罪する。彼の後ろからはまだ足取りの覚束無いアル少年が降りてきていて、目を手で擦りながら彼の隣に並ぶ。

乗っていたメンバーが皆降り終えたということで、皆は寮の方に向かおうと歩き始めた。だがそこに、アルバの声がかかる。

「ラスティハルト、お前は少し待て」

「え？」

二歩目の足を踏み出そうという姿勢のまま、ラスティは固まる。その姿勢を維持し、苦笑いを浮かべたまま首だけを後ろに振り向かせた。ラスティを見上げて彼の視線の先には、腕組をして仁王立ちするアルバが居る。アル少年は、やや不安げにラスティのことを見上げていた。

「少し話がある。……ああ、別にお前らは行っていいぞ？ その餓鬼も連れて行って構わん。だがくれぐれも他の教師に見つかるなよ？ 見つかったもオレは庇わんからな」

どうやらアル少年に関しては見逃してもらえるようだ。危惧していた事態にならなかったということ、ラスティとアル少年、ステラ、ティアマットは内心で大きくため息をつく。了解の返事をした

ラスティは振り返り、アル少年に鍵を渡し、先に部屋で待っているように言った。ステラに促されて寮に歩いていく彼を、見送る。

「なるべく早くきてね〜!!」

軽く手を振ってラスティに話す彼女の様子に、もしかして部屋で待っているつもりなのだろうかという予想が頭を過ぎる。だがもしそうであった所で問題は無いので、追求はしないことにした。分かったと少しだけ大声を出して、手を振り返す。他の皆もラスティに向けて何らかのアクションで反応した。

彼女達が振り返り歩いていく姿を見つつ、ラスティは彼女達に聞こえないぐらいの音量でアルバ先生に話しかける。

「すみません先生、何だか見逃してもらったみたいで……」

「……夏季休業が終わるまでに何とかしてくれれば問題は無い。ソレまでには帰せよ?」

ラスティの謝罪に、問題ないと一蹴するアルバ。教師としては意味正しいとは言える行動ではないが、それが彼にはありがたかった。二度目に感謝の言葉を告げて、足元に荷物を降ろしたラスティはアルバに向き合う。

「それで先生。話ってなんですか?」

人よりは背が高いと思っっているラスティ自身よりも高いアルバを見上げながら問う。アル少年たちが歩いていった方向からラスティに視線を移し、腕組を解いて彼は答えた。遠くから、討伐の実習に加わらなかつたメンバーたちが、鍛錬の終わりの挨拶をしているのが聞こえてきた。

「…今回出てきた死神クラスの霧軀炉、不自然だとは　いや、これを生徒であるお前に話しても始まらない…まあオレが聞いたかったのは、…どうやって死神の存在を減らしたか、だ」

「どうやって…ですか？」

「当たり前だろう。あの霧軀炉は死神クラスの中では小さい存在規模だったが、普通学院の生徒の手に負えるもんじゃない。あの馬鹿^{アクセル}とてオレ等アーキナムの一族だしそこら辺の傭兵より強いが、まだまだ弱すぎる。そもそも術符を忘れた時点で有効攻撃手段が無い。ティアマツトは教会の剣を持つてるが、どうやら雑魚を相手にしていたようだしな」

つまりそれ　考えられるのがラスティハルトだった　が、その質問をするためにラスティを呼び止めた理由だと、彼は言外に語る。一体どんな手段をもって死神に対抗していたのか彼は知りた
いのだ。

「（まあ、見られても問題はないだろうな…）えっと…これを使っ
たんです」

事情が分かったラスティは、小さく詠唱して霧^{カスミキリ}を展開する。目の前で結晶体が曲剣に変化していく様子をアルバは興味深そうに眺めていた。そして形成された刀が、アルバに手渡される。

「ほう……刻印銘か…霞……斬…霧…ああ、成る程、コイツ実体
剣じゃないな？」

「!?!?!?」

まさか詳しい解析作業も無くその正体の一端　刀が概念で編まれた存在であるということ　を見破られたことに、ラスティは声を殺して驚きを顕にする。アークも表情を保ってはいるものの、動揺の程を完全には隠しきれていない。見た目や簡単な解析では、普通はただ概念がこもった剣だとしか分からないはずだからだ。

あからさまに動揺を示すラスティを、アルバは面白いものが見れたと笑う。動揺したままのラスティに刀を返しながら、アルバはやけ顔のまま話を続けた。

「そう驚くな。これでも一応、昔に似たようなのを見たことがあるんだよ。それにしても成る程、純粹に幻子で構成された武器か…それも名前に概念体への部分否定があるだなんてな」

今までになく饒舌で機嫌よく話すアルバ先生の様子に、違った意味でラスティは驚く。彼の今の表情にはいつものような気だるさもなく、年齢が近いのではと錯覚させられるほどに活気のある色が浮かんでいる。同時に、似たようなのを見たことがあると言われたことで、安堵できた部分もあった。

「???これなら確かに死神に対抗できるわな。鎌も一緒に吹き飛んでたんじゃないか？　ああ、もしそうならやっぱあのままお前等に任せておけば良かったぜ。つうかコレあんなら何で墮嚙の時に出さなかつたんだ？」

「いや、少々出せない事情があつたんです……」

あの時に自分で作り上げたなどとはとても言うことの出来ないラスティ。訊かれたくないことを訊かれ、答えに窮するが、アルバはそこを深く追求する様子は無い。彼は妙に機嫌が良い。

「まあこれ程の存在規模の武器なら、普通学生が持つてると不自然極まりないしな……入手した事情が特殊ならば、隠しておきたいというのもあるだろう。そもそも魔術師がこういったものを見せるのが普通はありえんしな……まあ、昔の話だが。だがそれにしても」

ラスティはただ相槌をうつだけで、アルバはどんどん話す。ここまで興奮した様子の彼を見たのは、ラスティには初めてで、そして意外なことでもあった。だが何がアルバの機嫌をよくしたのかは分からない。次第に日が大きく傾いていく。

結局そのままアルバが上機嫌な様子そのまま、ラスティは解放された。荷物を背負い寮に向かう途中振り返ると、アルバの後姿が目に入る。本棟に向かっていく彼の足取りは、心なしか軽くみえた。

「……なあアーク……なんだったんだろうな」

「……私には、わかりかねます……」

首を傾げる主従は、寮へと歩いていった。たまたま通りかかったクラスメートに、重装備の説明をすると妙に納得されたのが、不思議なことであった。

「ん？ そういやあいつ等が何であそこに居るのか訊くの忘れてたな………まあ構わんさ」

相変わらず、アルバの機嫌はよかった。

第四十五小節「立場は逆に」

ラスティの部屋に（袋詰めされてティアマットに担がれている）アル少年を送り届け、キャンプの荷物の整理をしなくてはならないティアマットとステラ。疲れを癒すために早々に自分たちの寮に入って体を休めたいポラリスとティギリス。双方の二人組みは、男子寮と女子寮に分かれる道で挨拶を交わしていた。

「今日は本当に、有難う御座いました」

「ほんと、助かったぜ！　ありがとな！」

今日の出来事について、ティギリスとポラリスは礼を述べる。礼を言われた彼女たちは、本当に助けたのは自分たちではないと、特にティアマットが謙虚に返した。ステラはその後ろで、アル少年のことは何もきかないで欲しいと、誰にも言わないで欲しいと告げる。それが借りだと、言外にステラは語っていた。

そんな彼女たちにポラリスとティギリスは苦笑を送りながら、ラスティにも礼を言っておいてくれと告げ、自分たちの寮室に向かう。日が傾き日陰になっている廊下に、他の生徒たちの人影は少ない。

「……………にしても、何だか今日は災難だったなあ……………」

互いの姿が見えなくなった頃、廊下には彼女たちの靴底が床を打つ音が響く。そんな中、ティギリスが今日の出来事をそう評した。彼女の言う「今日」霧駆けの出現、それは予想外の事であったとはいえ、彼女たちはリタイアした身となってしまう。そのことに、少し思うことがあるようだ。

そんな彼女の眩きを耳にしたポラリスは、少しだけ視線が伏せ気味になってしまう。

「御免なさい、ティグ。私があんなことにならなければ……」

急に気分を降下させていくポラリス。隣を歩く彼女のそんな様子に気付いたティグリスは、自分が失言してしまったことを悟り、慌てて彼女を励ましにかかった。

「そ、そんなことないぜ？ アタイだって、禍外狼をやった段階で魔石切らしちまったんだし、それに二人ともちゃんと助かったじゃんか」

「はい……有難う、ティグ」

身振りも含めて話すティグリスが自分を気遣っていることを察してか、ポラリスは視線を上げ薄っすらと微笑み、礼を言う。その様子は、危惧しているほどに落ち込んではいないようには見えなかった。どうしても気にせずには居られないようだった。

いつも見せている気丈さが伺えないことに内心焦り、このままではいけないとティグリスは話題を変える。

「……そういや、ティアマツトたちキャンプ行ってたんだってな」

「そう、言っていましたね」

数名の生徒が、彼女たちとすれ違う。会釈して挨拶を交わし、そして彼女たちの気配が後方に流れていく。少しずつ遠のいていく彼女たちの話し声を耳にしながら、ティグリスは自分たちの夏休みを思い返した。

「そついやアタイ等、この夏休みずっと部活漬けだったんじゃないか？」

「その内半分は、私は（補修授業により）勉強漬けでした……」

気を取り直して話題を変えようとしたつもりが、別な意味で彼女を落ち込ませる原因になってしまう。彼女の夏休み前半の様子を思い出して、ティグリスは引きつった笑みしか浮かばない。

「ま、まあ……とにかくさ、来年とかはアタイ等もどっかに遊びに行ってみたいもんだよな。流石に三年連続で部活漬けはやだぜ？」

「確かにそうですね。…ですが、補修を逃れられなければ私は無理かもしれません……」

ティグリスのいうことに、ポラリスは首肯しつつ賛同するが、補修から逃れる自身がないと落ち込んでしまう。そんな彼女の様子を見てティグリスは、（本人には悪いが）まるでティアマットのようだと思ってしまう。

そんな彼女を、根気良くティグリスは励ます。

「いやそこは頑張ろうぜ？ 誰かに教えてもらうとかしてさ」

「それはそうかもしれませんが……なら貴女は私に教えてくれますか？」

即座に切り替えされた質問にティグリスは答えに詰まる。補修を逃れる範囲にはあるが平均ギリギリの点数を保持する彼女に、恐らく他人に勉強を教えるだけの余裕は無い。他の人に教えてもらおう

にも、ポラリスの交友関係には他人に教えるだけの余裕があるだけの人物は居ない。

誰か適当な人物は居ないかと、ティグリスは腕を組んで思考した。

「……お、そうだそうだ、ポラリス　　あんた隣のクラスラスティハルの委員長に教えてもらえばいいじゃんか！」

悩んだ末に思いついた‘他人に教えるだけの余裕がある頭の良い知り合い’、それは今日初めてティグリスが顔見知りになったラスティだった。聞く所では、彼とポラリスはそれなりに交友はあると聞いている。

彼の名前が張り出された中間テストの上位者の中にあつたことを思い出したティグリスは、彼に教えてもらえばいいと、そう提案した。すると途端に、ポラリスは強い動揺を示す。

「な、なんでそこでラスティさんが出てくるんですか!？」

「いやだつてよ、お前それなりに仲いいんだろ？　頼めばやってくれんじゃ……ん?」

面白いほどに大きなアクションをとって驚く彼女の表情をよくよく見てみたティグリスには、その顔が僅かに紅潮しているのが分かった。そんな彼女の様子を見たティグリスは、獲物を前にした虎とでも形容すべき笑みを浮かべる。彼女の脳裏には、ポラリスがラスティの背で目覚めたときの様子が浮かんでいた。

動揺するポラリスに急接近して、その肩に腕を回して組んだ。耳元に口を寄せ、小さな声で囁く。

「もしかしてポラリス……あいつに惚れたか？」

同時に、彼女の思考は瞬間沸騰した。

驚きたくなるほどに真っ赤に染まったその顔色に、今まで散々からかわれた分のお返しだと言わんばかりにティグリスは畳み掛けた。

「ああ、だよなあ。あんな助けられ方すりやそりや惚れるよな
〜？ アクセルが居なかったら、アタイも惚れてたと思うぜ？ う
ん」

「や、やめてくださいティグ！ わ、私は」

説得力のない言い訳をしながら、ポラリスはティグリスから逃れようと抵抗する。彼女よりも一回り身長の高いティグリスから逃れることは出来なかったが、ティグリスは暫くして彼女を解放した。開放されてすぐ、紅潮した顔を見られまいとポラリスは顔を背ける。

「恥ずかしがなって！ 認めなくて、あんた絶対惚れてるって！」

「うううう……」

動揺を隠せない自分を恥じてか凶星故かどうかは分からないが、彼女は顔を俯けて弱々しく唸る。その様子を見てティグリスは確信を持つ。そして顔に浮かべる笑みの様相を変えると、彼女の手を掴んで小走りに駆け出した。

「よし！ そんなじゃ今日は作戦会議と行こうぜ！ ティアマットと取り合うつつうんだ、気合入れて行こうぜ！」

「て、ティグ！ おおお願いですから声を落としてください！！」

夏季休業中で自分たちのフロアにはどの寮室にも生徒が居ないこ

とを、この時彼女は心の底から感謝するのだった。

第四十六小節「こつこつんすてーたす」

「ふうふう、ただいまってな、これが」

自分の寮室に、ラスティが帰ってくる。キャンプの為に用意した大きなバッグを背負う彼の後ろで、アーク（少年）は静かにドアを閉めた。そこに出迎えの声がかかる。

「お帰り、ラスティ」

「おつかえり〜！ 何話してたの？」

ティアマットとステラ、二人の姿が居間にあつた。四人掛けのテーブルに向かい合つて座つて談笑でもしていたようだった。ラスティから見て向こう側に座っているティアマットは、隣の席に自身の赤いコートを掛けていて、その中の濃紺の長袖の姿だった。相変わらず皮手袋はつけたままである。

手前側に座っていたステラは上半身を捻つて手を振り、彼がアルバ先生と何を話していたのかを問う。

「ああ、死神と戦つた時にどうやってあれの存在強度を削つたかつて訊かれた。……で、アル坊は？」

ステラの質問に答えたラスティは、部屋にアル少年の姿が無いことに気付く。彼の行方を問うその言葉に、ティアマットが答えた。その答えを聞きつつ、ラスティは彼女達の元に歩いていく。

「この部屋に着いたとき、袋の中で寝てたから、ベッドに寝かせておいた」

「……マジか？」

「ホントだよ。でも凄いよね。あんな窮屈な中で寝れるなんて、一種の才能だと思うよ」

彼女達の口から告げられた言葉に思わず眉をひそめ、真偽を問うてしまうラスティ。直後にステラの気の抜けるアル少年への賞賛の言葉が入り、だがどうしてか納得してしまう。恐らく彼は将来、どんな場所でも寝れる猛者になることだろうとラスティは予想した。彼の脳裏には、大量の砂に埋め立てられながらも睡眠しているという、キャンプ中にあったアル少年の光景が浮かんでいる。

「まあ、いつか……さあて、そんじゃ荷物の仕分け、するか？」

自身が背負ってきたバッグを床に置き、テーブルに座る二人に言う。彼の視線の先にはキャンプに持っていった荷物が置かれており、置こうとしたバッグをその場所に移した。

「アーク、ここの床、綺麗にしてもらえるか？」

「了解しました、マスター」

ラスティの指示により、アークが部屋の床を浄化する。意気揚々とした様子のアークが手を掲げると同時に、床を白青色の魔方陣が埋め尽くし、床の汚れを取り除いていく。光が収まり、魔方陣が消える頃には、カーペットは新品さながらの様相を呈していた。想像以上の洗浄力（？）に、三人は感嘆する。

「アークちゃん、凄いね……これだとお掃除要らずだよ」

「だよな。俺も今初めてコレやつてもらったんだが……ここまでとは思わなかったぜ……」

「(でも、精霊の力の使い道としては…どうなんだろう?)」

詰め込まれた荷物を床に広げるためにアークに浄化させたラスティは、ステラの賞賛の言葉に同意する。二人に挟まれるように立っているティアマットは、驚くよりも先に精霊の力の使い道について疑問を持った。が、当の本人^{アーク}が褒められて喜んでいる以上、気にすることでも無いと疑問を振り払う。

ラスティは皆に指示を出した。

「さて、とまあそういうことで……靴はそっちに置いてくれ、今はここに荷物広げちまいたいから。アーク、スリッパを」

三人は靴やブーツを脱いで、部屋の片隅に置いた。靴をおいた後、アークからスリッパを受け取り、そして荷物の分別作業に移る。

「にしても、色々詰め込んだな……」

ラスティが床に胡坐をかきつつ、自分が担当していたバッグの中身を出す。ラスティの担当していたバッグの中身からは、洗顔用具や調味料、タオルケット、折りたたまれた金網、浮き輪(未使用) etc…統一性無く色々と出てくる。行きの際は、分類されて詰められていた筈だったと、ラスティから手渡された荷物を床に並べていくアークは思った。

「(食材は消費したから)行きよりは荷物少ない筈なのに……」

そう呟くティアマツトの、自分が担当したバッグから出てくるのはバーベキュー用の用具、折りたたまれたパラソルの支柱×2、ステラ特製潜水マスク、魔石ペン、着火用の魔石etc比較的重量のあるものたち。彼女に関しては、（筋力の問題で）持って行く荷物の内容はそれほど変わっていないようだった。だが行きの時よりもバッグに物が敷き詰められているような印象を受ける。物が取り出しにくい。

「あははは……ゴメン、それ多分わたしのせいかも」

苦笑いするステラの、自身が担当するバッグからは、各人の着替えのための衣類が主にでてくる。ただ、折りたたみ方はやや雑で、一つ一つが必要以上に容量をとっているように見えた。その光景を見た二人は、呆れた様子で彼女を見つめる。

「そつえばステラ……服、たためないんだっけ？」

「おいおいおい、それならそうと言ってくれよ……」

二人から非難の視線を受けるステラは、笑って誤魔化すばかりである。行きの時は、ステラの衣服もティアマツトがたたんで詰めていたという事実を知らなかったラスティは、自分とティアマツトがテント等を片付けている間に、他の荷物を詰めてもらうという仕事をステラ（とアル少年）に割り振ったことを少し後悔した。

「来年また行く時は……役割分担は適材適所にしないと……っし、これは終わりっつと」

アークに並べるのを手伝ってもらっていたラスティは、他二人よりも一足先に分別を終える。そして、座り込んだ位置から手が届く

ところにあつた、ランドセルサイズのバッグを手に取る。バッグに詰め込まれた最後の一つをラスティの言うとおりに並べ終えたアークは、何やら考え事をしている様子でラスティの隣に立っている。

「…次は家事全般を覚えてみましょうか…マスターは得意では無いですし、そうすればお役に……はっ!? あのバッグは!?」
「お、お待ち下さいマスター!」

思考の最中将来はメイド?アークが、ラスティが持っているバッグを見、そして中身を思い出す。慌ててラスティに制止をかけようとするアークだったが、解き既に遅し、彼はバッグを開いてしまっていた。

無造作にバッグに手を入れ、そして取り出された。そして彼が手に握っていたのは、複数の小さな布を縫い合わせることで微妙な半球に近い曲面を描く二つの

「み、見ないで!!!!!」

アークがフォローに入る前に、高速で放たれたティアマットの拳がラスティの顔面を直撃した。

「おうう………痛え………」

胡坐をかいた姿勢のまま、顔面を押さえ後方に倒れこむラスティ。ティアマットは、床に沈んでいく彼から高速でその手に握られたモノを奪い取り、胸元に抱え込むようにして蹲る。赤面する彼女は、強い羞恥と非難のこもった視線をラスティに向けていた。

アーク（少年）の介抱を受けている近くで、ステラはラスティがあけたバッグを回収していく。一瞬アークと視線を交差させた後、悶絶するラスティと赤面するティアマットに気付かれないように、写真部秘蔵の品バッグの中からナニカを懐の中に移した。

「ほらほらティアマットちゃん、そんな恥ずかしがらなくてもいいでしょ？ キミは着痩せするんだしね！」

「!?!?…そ、それとは関係ないと思う」

赤面の度合いを強めるティアマットから、抱え込むモノ 女
性用下着 を受け取り、ステラはバッグに入れなおす。バッグ
の中身に、二回りほどは差のある二種類の半球に近いモノが入って
いるのを見て、ステラは少しだけ落ち込んだ。

「（はぁ……どうしてだろ？ 身長はわたしの方が大きいのに……）」

「ま、マスター、今湿布をお持ちいたします」

額を押さえた状態で起き上がったラスティは少しだけ涙目で、振
るわれた拳がどれだけであったかを物語っている。それがティアマ
ットであるならば、^{腕力}衝撃の強さは推して然るべきであろう。

「なあ、この場合……俺は被害者・加害者、どちらだと思っ？」

「……申し訳ありません、マスター。私にはわかりかねます……」

既に出されていた救急箱から取り出した湿布を、アークはラスティの額に貼り付けている。その体勢のまま受け答えする主従の姿を見て、ティアマットは罪悪感を感じたのか謝罪の言葉を告げる。

「い、ごめんなさい、ラスティ」

「いや、俺も無用心だった……と思う。だが流石に殴るのは勘弁してくれ」

痛む額をさすって、ラスティはそれでも微笑んで受け答える。この話はこれで終わりだと切り替える彼の言葉を聞いて、彼女達は自分の作業を再開した。ティアマットの顔色が正常に戻る頃に、全ての荷物が床に並べ終えられる。

「さうって、ようやく分別し終えた……が……」

ラスティ（アル少年含む）のもの、ティアマットのもの、ステラのもの、共同出資で購入したものに分けて並べられた荷物たち。それを見渡して、皆は共同購入の荷物たちに視線を向ける。

「そういえばさ……キャンプ終わった後、これどうするか決めてなかったな……」

「うん……どうしよう」

テントを始めとしたキャンプのための道具達、皆でお金を出し合って（貴族だからと、ステラはやや多めに出して）購入したそれらを管理する役割を決めていないのに思い至る。頭を悩ます二人に、ステラは提案した。

「ジャンケンする？」

「……うん、そうする」

「お、おう（拙い不味いまずいまずい）」

こういつた物事を決める時に重宝されるジャンケン。ステラが提案するそれを、ティアマツトはすぐに承諾する。一方ラスティは、ジャンケンの勝率（の低さに）多大なる自信を持っているため、少々乗り気ではない様子だ。代わりにアークにジャンケンをしてもらおうかと、本気で考えている。

そんなことを提案する前に、すでに状況は詰んでいた。正三角形を描くように、ラスティ以外の二人は場所を移動している。自らの立ち位置を認識したラスティは、覚悟を決める。

「よ〜っし！　じゃあ行つくよ〜！　ジャン　ケン」

元気のいいステラの掛け声に、ティアマツトとラスティは身構える。彼女の合図と共に、ステラは振り上げた右腕を、ティアマツトは軽く引いた右腕を、ラスティは袈裟に振りかぶった左腕を、三人は自分達の命運をそれぞれの腕に託し、振り下ろした。

「ポン！！」

勝負は一振りにして一瞬だった。ステラ、ティアマツトは共に拳を握り締め、ラスティだけが人差し指と中指を伸ばしている。ラスティはその場に崩れ落ちた。

「なんで俺はこんなに弱いんだよ！？」

自らの運の無さを呪うラスティ。アークが彼の隣にかがんで励ますが、目に見える形で効果はない。とりあえず、ラスティがこれからキャンプ用品の管理を受け持つことになってしまった。

????????????????????????????????

荷物の分別も終わり、ティアマツトとステラは各々の荷物を持って自分達の寮室に帰っていった。部屋を出る際に、ティアマツトはラスティの額の腫れ具合を気にしていたが、その視線に気付いたらステイは気にしてないと言って笑いかける。彼の言葉に安心したように全身の緊張を解いたような様子を見せてはいたものの、ドアが閉まりきるまで、彼女の視線はやはりそこに向けられていた。

「気にしなくてもいいのにな」

ドアが閉まり、足音が遠のいてからラスティはそう呟く。静かに扉に錠をかけた。扉から一步引いてから、後方に振り返る。振り返った先では、アークがゲルトの寝室、アル少年が寝ている部屋から出てきていた。

「ちゃんと寝てたか？」

「はい。ですが夕食を食べていないようでしたので、翌朝は空腹で起きてくるかもしれません」

何処と無く楽しそうな、今にも鼻歌を歌いだしそうな様子で、腕を後ろに組みながらそう答えるアーク。その言葉を聞いて、ラスティは自分もまだ夕食を食べていないことを思い出した。時刻は午後八時半にさしかかる頃。いつもであればとっくに夕食を食べ終えている時間だった。

「そっぴや俺も、まだ何も食ってなかったな……」

まだ食事を取っていないという事実を認識したラスティは、そこで自身の空腹も認識する。急に空腹になった彼の様子を見て、アー

クは少しだけ悲しそうに、首を傾げた。

「申し訳ありません、マスター。私に技量があれば、簡単に夕食でもご用意できたのですが……（これは早急に、家事全般の技能を修得する必要がありますね）」

「いや、アークが謝ることもないだろ。まあ兎に角、少しだけでも何か入れておきたいんだが……もう購買は開いてないよな……うわ、何も無いんじゃない……」

自分で食事を作ることの出来ないラスティは、あらかじめなにか食材を買っておくなどということをしていない。購買のものを買いだめするなどということもしないため、ラスティには何も食べるものが無かった？？？と思っていた。

アークが思い出したと、ラスティに少しだけ待つように言って高速で走り去る。十数秒たって戻って来たアークの手には、お盆とそこに乗せられたクッキー等のお菓子類があった。何故か、戻ってきたアークは少女の姿になっている。

盆に乗ったお菓子を差し出すような姿勢で、低い場所からやや上目遣いで言うアーク。

「キャンプに持っていくことの出来なかったお菓子類でしたら、これほど御座いますが……」

「お！ ナイスだアーク！ これで俺は飢餓しなくて済むぜ！！」

お菓子といえども、何かしら食べるものがあることにラスティは喜ぶ。主のお褒めをもらえたアークはラスティ以上に上機嫌になり、ラスティをテーブルまで誘導する。腰を落ち着けた彼の前に、アークは音を立てずに盆を置くと、しばらくしていつのまにか火にかけ

ていたポットを手にティーカップも持つてくる。

まるで初めから、ラステイが差し出されたお菓子たちを食べることを予測していたかの様だった。

「はは、準備いいな。もしかして俺がコレ食うのを予想してたみたいじゃないか」

「はい」

悪戯が成功した時のように軽く舌を出して見せながら、アークはラステイの言葉に答えるのだった。その手から、紅茶がティーカップに注がれる。

第四十七小節「断章と最後の」

『虹の麓を目指して』

自分の目指しているものは、まさしく虹のようなものだと思う。その美しさに心奪われ、麓にあるという財宝夢を求めて、追いかけている。

『そこに求めるものがあると信じて、ひたすらに』

それを追いかけるようになったのは何時からなのか、それはもう覚えていない。ただ、以前はもう少し別なものを追いかけているような気がしていた。

『誰もが夢物語と言う』

自分の目指すものを、誰もが夢物語と馬鹿にした。目指せる道ではないと、行き着くことなど有り得ないと。

『それでもいつかと夢に見て、近づく度に遠のいても、それでもまだと駆け続く』

そんな言葉を頑なに否定して、まだ近づく気配さえも無いのに、いつかきつとたどり着けると言い聞かせて走っている。

『架かる虹は何時も在り、夢に手翳し握り締め、道は見えねど突き進む』

自分にだけは、見えていた。誰も知らないけれど、でも自分は確かに一度それを目にしていた。それを、今でも鮮明に脳裏に描き出すことが出来る。でも見えているのに、そこに行き着くまでの道も何も分からない。ただ見えている方向に進んでいる。

『あの目を胸に、走り抜け』

真っ直ぐなのか回り道をしているのか、それは分からない。訊こうにも、その相手は誰も居ない。でもいつか聞かされた言葉だけは、歌だけは、その影を示してくれているような気がした。

『かども、は』

そして自分は今、その道を辿ってきて、その場所に

八月 日。その日は毎年行われているらしいイベント???生徒達の参加を募って、有名な戦士や魔術師を呼んで実技指導してもらうというもの。武術系倶楽部の主催だが、このイベントはそうでもない生徒達も多い。戦闘とは関係のないものを指導してもらう生徒も中には居る。が催される日だった。アークが仕入れた情報で

は、例年よりも数日早いという。

前々からポラリスに誘われていたティアマツトは参加し、ミーハ
ーな部分のあるステラは、有名人のサイン目当てでそのイベントに
参加する。ラスティはアル少年のことがあるので参加を見送った。

「師匠は、行かなくてもよかったですか？」

何時もの屋上で剣を持ち、アル少年は作業に取り掛かっているラ
スティに問う。学院内で最も高い場所にあるこの屋上からは、競技
場《コロッセオ?》に多数の人が集まるのが見て取れた。この日に
合わせて故郷から学院に帰ってきた生徒が多いようで、眼下からは
期待に心振るわせる生徒達の喧騒が聞こえてくる。

アル少年に問われたラスティは、屋上の床に何か書き込んでいた。
まだ角度の浅い朝日の影で、書いた模様が隠れてしまわないように、
日を向いて移動している。魔石をペンにした魔具で描かれた模様は、
そこに書かれていることを知った上で凝視しなくては何も見えない。
アークにも同様の作業をさせているラスティは、作業を止めるこ
となくアル少年の問いに答えた。

「いいんだよ、俺はな。ソレよりもアル坊、向こう見てないで振っ
てる」

「あ、はい」

そっけなく答えるラスティ。アル少年は彼に鍛錬を促され、慌て
て剣を振り始める。まだ剣を彼から学び始めて一ヶ月程、その剣閃
は拙い。

剣を振り続けるアル少年の横で、ラスティとアークは作業を続け
たままだった。剣が風を切る音を聞きながら、二人は十分ほどで
作業を終える。何か魔術関連のことだと推測でき、好奇心を抑え切

れなかったアル少年は、自分のもとに歩いてくるラスティに質問した。

「師匠、さっきまで何をしていたんですか？」

剣を振るのを一旦休め、殆ど何も代わり映えしない屋上の床を見ながら、アル少年は質問した。歩いてきながらアークと接続するラスティは、顕現させた霞霧カスミギを肩に担ぐ。空いた右腕を腰に当てて、笑って答えた。

「秘密なんだよな、これが。まあ気にするな、多分後で分かるさ」

答えをはぐらかしたラスティは、そんなことはどうでもいいと告げ、担いだ刀の切っ先をアル少年に向ける。

「何時もより早いが……来い」

「あ……はい。お願いします！」

一瞬呆けたアル少年であったが、ラスティが手合わせしてくれと聞いてすぐに剣を構える。不恰好ながらも、鏡写しのようにラスティの構えを真似た。しばらくの間をおいて、逆袈裟から切りかかる。

「Lain - Rede (描空を辿れ)」

アル少年の振った剣は、側面から振り上げられた持ち上げられるように振るわれた刀に逸らされて、ラスティの体を捉えることなく空を斬る。当たる気がしない。そうアル少年は直感的に思う。だが故に、何も気にかけることなく振るい続けることが出来る。

一定のリズムで、アル少年が剣を振るう。それに合わせて、似たような、でも明らかに完成された形でラスティが剣を振るう。何度振っても、アル少年の剣はラスティの体を掠る気配すら見せない。そんな彼の剣に、ラスティは何も言うことをしない。師が弟子に何かアドバイスをすることは少ない。ただ手本を示すように振り、こうして時折向かい合って剣をあわせるだけである。

「（もし僕が、ちゃんとできるようになったら）」

アル少年は、剣を振りながらただそうとだけ思う。自分が振った剣の、その完成形を目の前で見せられて、逸らされて行く弧を目にしてその先を想像する。

思い浮かべるのは、師と対等に斬り結ぶ自分の姿

「阿呆、ぼさつとするなよ？」

「は、はい!!」

ラスティの言葉を受けて、アル少年は思考を近くに戻す。遠い向こうを見ているも仕方が無い。今は前を見続けなくてはいけない。拙い鏡写しは、それからしばらく続いた。

??
??

それからしばらく経った。向き合う二人はすでに切り結ぶことを止め、剣をそれぞれの利き腕に握り向き合っている。アル少年は肩で息をしていて、ラスティはいたって涼しい顔のままである。

「さて……アル坊……」

ラスティはアル少年を見つめて、少しだけ目を閉じる。息を落ち着かせつつあるアル少年は、そんな彼の様子を不思議に思うも、言葉を待つて佇んだ。遠くの喧騒が、心なしか遠くなり、その他の音たちが近くなる。

「O a i r e f e e n e X e e n ?」

「え？」

突然呟いた言葉、‘世界を感じているか？’という、師がよく口にする言葉。何故今このタイミングでその言葉が出てくるのか。それを理解できない故に、アル少年はただ首をかしげて聞き返すように反応する。そんな彼の様子に反応せず、ラスティはゆっくりと目を開き、言った。

「俺が言うのは……いや、言うことが出来るのはここまでだ。覚えておけよ、アル坊？」

そこまで言うと同時に、周囲の空間が揺らいだ。

「来たか……流石アーク、秒単位で誤差が無いなんてな……」

アル少年から視線を外したラスティは、周囲を見渡しながら呟く。状況の推移についていくことの出来ないアル少年は、混乱した思考のままに周辺を見渡した。

屋上を取り囲むように、目に見えない壁が形成されているのが見て取れた。その壁は光を歪めて、景色を所々二次元に捻じ曲げている。立方体状に発生した空間の歪みは、屋上の床にまで及び、歪み

の箱の中に二人を閉じ込めた。

第四十八小節「別れと再会」

「え？ ええ！？」

「慌てるなよ？ お前のお迎えが来たただけだ」

困惑するアル少年に、ラスティは動揺を見せることなくそう告げる。自らの隣に居る人物の冷静さに感化されてか、不可解極まりない状況の中、アル少年は辛うじて平静を保つことが出来た。

ガラスが割れる音が、反響して聞こえてくる。辺りには何も割れた様子を見せていないが、一度、もう一度とそのガラスの音が聞こえてくるたびに、何処が割れているのかアル少年にも認識できた。空間に、亀裂が出来ている。

「（これが、ノルニラムの力……こんな……馬鹿げてます……）」

ラスティの脳に、アークの驚く声が響く。ラスティとアル少年の目の前では、ガラスの破砕音が響くたびに、空間への亀裂が拡大していった。幾度と無く響くごとに、割れた景色が剥がれ落ちて、地面に落ちて砕けていく。その剥がれ落ちた景色が消え去ると同時に、その空間は完全に破砕した。

「ノルニラム……ほう……まんまヴァルキリーみたいだな、おい」

砕けたガラスが、落下を低速再生したかのように緩やかに落ちて行く。景色が張り付いたままのガラスたちは、破砕の中から現れた戦乙女の姿を映えさせていた。

細い金紗の光を放つ長い髪が、ヘルムの間から流れ出て、半重力

に舞っている。光を受けて艶やかな金属光を放つ鎧は青く、女性らしい曲線的なフォルムで金のラインが装飾している。音も無く地に降り立ったその存在は、眠りから覚めるようにその瞼を押し上げた。中から覗く深い青が、二人を見据える。

ノルニラムが一番最初に視線を向けたのは、ラスティ。

「お初にお目にかかります。世界種第??階位、ノルニラム。虹の少年をお迎えにあがりました。固体名の存在しない身である故、名乗らぬ無礼をお許し下さい」

恭しく一礼するノルニラム。世界によりその役割の時のみに創られるその場限りの存在??故に名無し??彼女は自身が名を告げられないことを謝罪する。世界種同士での挨拶は、固体名と階位を交換するのが礼儀で、名乗らないことは無礼であるとされている。そんな杞憂に対し、ラスティは気恥ずかしいと後頭部を掻いてはにかみ、心配する必要は無いと告げる。

「ラスティハルト・ジーン。階位は??、ただの人間だ。気にしなくてもいい。そっちの事情は分かっている。だが、少しだけ待って貰えるか? 最後にコイツに渡しておきたいものがある」

「かしこまりました」

ラスティの念話混じりの言葉に機械的に答えたノルニラムは、姿勢を起き上がらせるとその場に直立不動の体勢をとる。有機的な容姿でありながら、その表情は酷く無機的で機械的だ。感情こそ感じられないが、この‘隔離された空間’を保つには多大な労力が要するため、本当のところは辛いかもれない。彼女に少々無理を言ったかなと思いつつも、ラスティはアル少年に向き直った。当の本人は、ノルニラムの方を見つめて口を軽くあけたまま、呆けている。

「アル坊……アル坊！」

「ふぁ、はひ！！」

ラスティの大声の呼びかけに身を強張らせ反応したアル少年は、勢い良く彼のほうに向き直った。ノルニラムが見守る中、ラスティは腰の辺りに挿していた細長い棒状のものをアル少年に差し出す。

「お前には前もって言ってなかったが、今日で、一応のお別れだ」

「あ……」

その刻印に、多分どこかに時計状の刻印があるはずだ。その針が一周したとき、お前はもとの時代に強制送還される。一分一秒と違えずきっかり同じ時間に戻るぞ？」

師が以前言っていた言葉が思い出され、アル少年は慌てて自分の服の中を覗き込む。視界の中に見えたのは、体を覆う黒く渦巻く刻印？？？その中の、心臓の真上に当たる部分に、他の刻印より一層黒い刻印が浮かび上がっていた。書かれている文字は「??」。

「ほら、さっさと受け取れ」

「え？ あ、はい」

帰らなければいけないということ、しっかりと認識しきる前に、ラスティは畳み掛けるように行動する。状況に流されるようにして、アル少年はラスティから差し出されたものを受け取った。

受け取ったのは、「柄」。ラスティが使う霞霧のものと同意匠の「柄」。鏢と刀身の無いだけのそれを受け取り、どう反応していい

が分からないといわんばかりに、アル少年はラスティを見上げる。

「虹渡^{ニジワタリ}……その銘だ。家に帰ったら隠れて告げてみる、刀身が出てくるからな。それ作るの、苦労したんだぜ？」

あえて本題を言わないようにしているかのような、ラスティの口調。そんな彼の様子に、いまだ困惑したままのアル少年はただ頷いて答えるだけ。ラスティが話していることの半分も、彼は理解していない。

「え？ あ、はい……師匠？」

アル少年が状況を理解しきる前に、ラスティは彼をノルニラムの前に押しやる。

「うあ!？」

軽く小突かれるような形で、ノルニラムのほうに押し出されたアル少年。体勢を前のめりに崩しかけるも、数歩足を前に大きく踏み出すことで体勢を整えた。そして視線を上げた先に、蒼く輝く甲冑がある。

後方を振り向いた。視線の先に佇んでいるのは自らが師と仰いだ人物。一ヶ月程と言う短い時間でありながらも確かに「剣」を彼に示した人物。彼は今、腕を組み少しだけ強く唇を結んで少年を見つめていた。

今日はどこか様子が違うと感じ取れながらも、何が違うのかを理解できなかったアル少年。ここに来て彼は、ようやくこの次第を理解した。自分の時代に帰る時が来たのだ。

「アル坊……俺の剣が、お前にはどう映ったのか分からないし、

俺はお前に剣を教えられたとも思っていない。それに……俺が言うのもなんだが、お前はまだ若い。色々な道も見つかるさ……」

そこで一旦、言葉を切る。目を閉じ深呼吸し、また言葉を紡ぐとする。アル少年は何か答えようとするが、状況を理解したばかりの頭は、何を言っているかわからなくなる。彼の体を、薄く光が包み始めた。

「お前がココに来たんだったら、多分お前は出来るようになるんだろうな、正直信じられないんだけどな、これが」

ラストイは、一瞬だけ視線をノルニラムに移す。人形のように佇む、‘運命’を存在概念に保有する存在を見据えて、すぐにアル少年に視線を戻した。彼の目の前で、少年の足元からは落ちていたガラスたちが浮かび上がってきている。

「……まあ、兎にも角にも、お前がやりたいって言うなら否定しない。だが中途半端は認めない。やり続けるか、無理と悟ったなら捨てるか、どちらかは絶対に選べ」

有無を言わせない言葉に、アル少年はしかと頷く。浮かび上がったガラスたちは薄蒼く発光し、視界を埋め始めた。目に見えているお互いの姿が、徐々に臃けになっていく。

「それは、一応仮免許だ。もしお前がこの先諦めないで続けられたなら、取りに來い」

「????????はい」

ようやく、アル少年の口が言葉を発することが出来るようになる。

何をとは告げられることは無いが、指示語は必要ないと、アル少年は力強く頷いて答える。いい返事だと、今までで一番優しげな声色で彼は言った。

ノルニラムが、動き出す。

「?????じゃあな、アル坊」

「……はい」

少しだけ、声が上手く出てこないような感覚を覚える。光が強くなり、目を開けているのが少しだけ強くなる。どうしてか歪んでいく視界が、その姿を上手く捉えさせてくれない。ラスティは、声色の暗くなる彼に、おどけるように言ってみせた。

「おいおい、黙ってたのは悪かったが、俺は辛気臭いのがあまり好きじゃないんだ。こういうときは笑顔でいこうぜ?」

ラスティのその言葉に、アル少年はゆっくりと頷いて、ぎこちないながらも笑顔を作ってみせる。何故か、自然と気分が前向きになるような気が、彼にはした。

「はい……師匠……」

もう、目が開いていれなくなる。それを感じた時、アル少年は最後に言うておかなければならないことがあることを思い出した。ここ一ヶ月ほどで、習慣になっているはずの、ある意味かれには自然で当たり前のことだった。姿勢をただし、勢い良く一礼する。

「師匠……ありがとうございました!!」

??
?????

鍛錬の終わりの挨拶をして、そのままの姿勢で目を強く引き絞る。瞼の裏からも強い光が感じられ、瞬間、音が何も聞こえなくなる。少し、背中に何かが触れた気がした。

その光は、次期に引いていく。目を閉じてそこに暗さしか感じられなくなると、アル少年はゆっくりと状態を引き起こし、そして目を見開いた。

森の、中だった。

「久しぶり……なのかな？」

そこは自分が遊んでいた森、未来に飛ばされる直前まで立っていたはずの場所。目の前や背後に居たはずの者の存在は気配も無く失せ、木々の間から降り注いでくる光が、彼に白昼夢を見ているかのような錯覚をもたらした。別な服装であった筈が、元の服装に戻っていたことが、その感覚に拍車をかける。

「でも……夢じゃ、ないんだよね……師匠……」

それでも、右手に感じられる感覚が、彼の見聞きしたものが夢では無いということを見せてくれた。細長い、鍔も刃も無い、柄だけの、剣。それを持っているということだけが、彼の一ヶ月の生活を証明する必要十分条件だった。虹渡ニジワタリ、その名前はそうだったと、彼は思い返す。

「お……い……アル……」

「そっちで何か光ってなかったか……!!」

遠くの方で、同い年ほどの少年少女の声、‘一ヶ月前’に共に遊んでいた子供達の声が、自分を呼んでいるのを聞き取る。妙に懐かしいと、幼いながらに思ってしまう。懐かしさから出てくるのは涙ではなく、笑顔。

「お〜い!! こっちこっち〜!!」

先ほどまで持っていなかった細長い棒を、ズボンの腰に差し込む。上から見えないように、上着でも隠した。反対の方の手で、見える友達に向けて手を大きく振る。

こちらの姿を、友人達は確認した。それと同時に、アル少年は彼等に向かって走り出した。

????????????????????

『ありがとうございます!!』

そう言ってお辞儀をしたアル少年は、ガラスの光の中に消えていった。アル少年の後方で、同じようにとはいかないまでも礼をして消えていくノルニラムが、妙に印象に残る。

ノルニラムが出てきた穴に、砕けたガラスがかき集められてはめられていく。はめられていった瞬間から、割れていく音と丁度逆の音を立てて輝が修復されていった。それが完了すると同時に、立方体状の歪みの箱が消えていく。

後には何も変わらない景色だけが残った。

「行ったか……………」

そう零すと同時、後方で屋上の扉を開ける音がする。軽めの靴音

を響かせて、三步。入ってきた人物はゆっくりと扉を閉めた。金属の扉が閉まる音が、風に流されてラスティの耳に鮮明に入っていく。ラスティは、振り向かない。アークは何も言わない。‘彼’も何も話さない。ただ一定のリズムで靴音を響かせて、それなりに離れたところで、その足音を止めた。

振り向かないままで、ラスティは後方の人物に言う。

「ったく、そそっかしいなあおい。もう少し余韻に浸らせてくれないんじゃないのか？ さよならの直後一分も経たないで再会シーンじゃ、感動は少ないぜ？」

わざとらしいため息をつきながら、ゆっくりと振り返る。後方に立っていた人影と、視線が交差した。

そこに立っていたのは、一人の男性　金紗とは言えないものの、光を反射する色の薄い髪を持ち、琥珀色の目は何処か遠くを見ている。タートルネック乳白色の衣服の上に、明るい灰色のコートを纏い、そしてその右手には、軽く歪曲した鞘に入った剣が握られていた。

その姿を認めたラスティは、肩の力を抜く。同時に出てきた二度目のため息を止めて、呼びかけた。

「まあとりあえず、‘久しぶり’だな、‘アル坊’」

「はい……お久しぶりです……‘師匠’」

アル坊　　アルクス・レインズ。弧虹の剣士の二つ名を持ち、稀代の天才と呼ばれ、七年前の戦乱では‘英雄’と呼ばれた男。

ラテン語で、虹、^{ARCUS}を意味する名を持つ、成長した弟子の姿が、そこにあった。

第四十九小節「録視の剣技」

「随分身長が伸びたんじゃないか？　もしかして俺と同じぐらいか？」

「今は181cmです。残念ながら、師匠には負けますよ」

師と弟子、かつての年齢差が逆転している両者は、だがそれでも互いの立場を変えることなく言葉を交わす。一定の距離を保ったままで交わす言葉は、特に何か目的があつてのものではない。だが、そうでなくとも人は言葉を交わしたいと思うのだ。

「身長だけ勝つても、仕方が無いだろうが」

アルクスの返答に、大きく笑い飛ばしてラスティは答える。それに釣られてか、アルクスもまた少し声を出して笑った。時期にそれは風に流されて聞こえなくなっていく。今日はアークは結界を張っていないかった。

笑いが収まり、言葉無く、距離を保ったままで見詰め合う両者。風と遠くの喧騒の音だけが、聴覚の情報として提示されるばかりである。

数分だけ見つめあい、ラスティはアルクスに告げる。ただ開始のタイミングを問う言葉だった。今この場に置いて、用件を問うのは愚である。

「じゃあ、やるか？」

「はい。よろしく願います」

ラスティの言葉に、様になった一礼と共に答えるアルクス。上体を起こした彼は、右手に握っていた剣を正手に握りなおし、刀身を包んだままでの鞘を、左腕が掴む。胸の前に掲げた状態から、開くように抜き出した。

軽く歪曲した黒塗りの鞘、が引き抜かれる。中から姿を現す刀身は、ラスティが持つ霞霧と同じ意匠で、一見か弱い印象を受けるほどに細い。日の光を受けて白銀に輝くソレからは、普通のものとは違う何か素人目でも感じ取れる。

対するラスティもまた、眩きと共に左腕の中に得物を顕現させる。蒼く光る糸が絡まりあい、光のシルエツトを作り上げてその存在を結ぶ。おぼろげなシルエツトのそれを振るい、霞を切り払うと、中からは薄蒼く色づいた刀身が姿を現した。同時にラスティは、その精神を目の前のことに赴かせる。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same (もし
あなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないと
したら。)」

右足を一步だけ前に出し、自然体に立ち、両の手を力なく重力に任せる。やや後方に来る左腕に握られた刀は、その切っ先が地面すれすれになるほどに低い。それが、ラスティの構え。

左足を一步だけ前に出し、自然体に立ち、両の手を力なく重量に任せる。やや後方に来る右腕に握られた刀は、その切っ先が地面すれすれになるほどに低い。それが、アルクスの構え。

鏡写しに構える両者。体格もほぼ同等であるためか、酷く似通いすぎている。互いの構えを隅々まで観察するように、彼等は視線を交し合った。

唐突に、一步踏み出す。それはどちらからということなく、ほぼ

同時に行われた。

「付いて来いよアル坊!!!」

「俺はアルクスです!!!」

最初の一太刀目、逆袈裟の一振り。接敵と共に振るわれた両者の同起動の剣閃は、両者の間で壁に阻まれる様に弾け合う。その次の翻った横一闪の太刀。歪みの無い曲線を描いて振るわれるその一太刀は、同じ場所に架空の壁を想定してその上をなぞっていく。次の大きく軌道変更し打ち込まれる利き腕の肩口からの袈裟も同様だった。

互いに一步も引かず一步も押せず、ただ向かい合って剣を振るいあう。全く同じ手を同時に選択し続ける両者の間では、丁度中間に火花の線が幾度も描かれ、消えていつていた。金属がぶつかり合う音はただ衝撃音を発するばかりではなく、長く擦れ合う音をも響かせる。

数十回、それを繰り返した。両者に言葉を交し合う余裕は無く、ただただお互いの剣をぶつけ合う。そして六十四撃目、彼等はやはり同じ手を同じタイミングで選択した。

垂直に近似した軌道をとる、利き腕肩口からの振り下ろし。それは今までの剣撃の中で最も疾く、最も洗練された一刀だった。だがそれは振り下ろしの軌道の最中、やはり両者の中間地点で両者共に停止する。

「お前……本当に人間か？」

互いの刃を合わせたままで、ラストイはアルクスに問う。普通は冗談で言っているように感じられるだろう台詞だが、それを問うラストイの表情は、極真剣なものである。彼の眼前では、二人の刃は

重ね合わされて停止していた???それも、互いの剣同士が平行の状態で。

「俺……一応これでも、人間です!!」

苦笑して受け答えたアルクスは、ラスティの刀を弾いて後方に跳躍する。跳躍後の場所に残る小さな魔方陣を見る限り、彼もまた、靴の裏に小規模ではあるが、踏脚を仕込んでいるようだった。

仕切りなおしの状態となる両者は、共に息を整える。

丁度六十四の太刀を交わして、両者の表情は対照的である。師であるラスティは、驚愕故に無表情で、弟子であるアルクスは、歡喜故にその口元を歪ませていた。

インターバルをとるように、両者のあいだには静寂が通り過ぎる。金属同士の衝撃音に慣れ始めた耳が、風の音を詳細に聞き取れるようになった頃、ラスティは言った。

「尋常じゃないな、ほんと……俺の録視の蓮華と寸分変わらず同じ動作をするなんてな……」

「もう十数年、一人での鍛錬はそれしかしていませんでしたから」

寸分変わらず同じ動作をすると言われたことに、アルクスは謙遜した様子で答える。ただそれでも喜びの感情は強いようで、はにかみながら彼は左手で後頭部を掻く。そんな、自分より年上になってしまった弟子の子供っぽい仕草に、ラスティは少しだけ呆れて肩を落とす。得ていた情報で、アルクスは自分よりも九歳年上の二十五歳だということを出し、更に少しだけ肩を落とす。

「それでもだ、正確すぎるんだよ」

「それを言つたら師匠ですよ」

そう言つてのけるアルクスに、俺の場合は魔術だと言つて返すラストイ。更に言い返したいものの、言葉が見つからなかったアルクスは回答に詰まった。そうして、暗黙の了解と言わんばかりに六十四の回数で切り結んだ両者は、開始前の様子を再現するかのよう
に言葉を交わす。

風が、弱まった。

「さて　　済まんな、アル坊。準備が出来た」

唐突に、ラストイが会話を切つて構えをとつた。その行動に対しアルクスは、少しだけ首を傾げながらも再度構えを取る。ラストイの背後では、微かに景色が揺らいでいて、準備というものがそこに
関係するものだと、彼には推測することが出来た。

「俺はアルクスです」

ラストイのつけた過去の愛称を訂正して、アルクスは駆ける。対するラストイは迎撃の姿勢をとりその場からは動かない。

右腕が得物を引いて加速する。筋肉の弾性エネルギーを利用したその一刀は、録視の蓮華の第十三撃目と酷似していて、肩のローテーションと共に振り伸ばされた。

楕円を描くようにして迫る刀に、ラストイは左腕を跳ね上げた。先ほどとは違つて対応に、アルクスの刀は軌跡を歪めて打ちあがる。そして即座に翻る。歪み無い軌道が、ラストイの頸動脈めがけ振られるが、それもまたラストイに打ち落とされた。

「Lain-Rede (描空を辿れ)」

アルクスの剣を打ち落としたラスティの刀は右下から切り上げる。寸瞬の時もかけずに奔った剣閃だが、打ち落とされた直後に地を蹴っていたアルクスの体を捉えることは出来ない。

「流石って言った方がいいか？」

「コレぐらいで言われてはこっちが困りますって！」

後方に飛び退いたアルクスに、ラスティが近接する。薄蒼の弧閃がその左肩を中心に幾度も連続して生成されようとする????がそれは道半ば、か細く響く金属音と共に歪まされて完成することは無い。次いで描く白銀の弧閃もまた遮られる。

攻防の移り変わりはグラデーション、継ぎ目を見出すことは出来ない。互いに防がれ往なされを目まぐるしく繰り返し、決定打は出ることは無い。

「強いですね、師匠!!」

「(運動予測：視覚投影します!!)」

「つつ!? ……は……俺にも意地はあるんだよ!!」

攻防こそ対等であるものの、ラスティの浮かべる表情は芳しくない。対するアルクスは未だ余裕すら見せて剣撃を繰り返す。コンマ刻みのレベルで剣撃の間隔が縮まっていき、その度にラスティの周囲の揺らぎは大きくなっていく。

魔術の幻想をその身に課し斬るラスティ。多くの剣士が身につけるべき修練を置き去りにして組み上げた剣は、数多の剣士を圧倒して余りある剣速を誇る。だがそれは体に刻まれていない‘幻想’でしかない剣技。体は反射的に剣を振るうことを覚えておらず、その

全制御は脳が一身に担う。

「まだまだあ！！」

視覚に写した情報を元に、脳が迫る剣閃の道筋を予測してみせる。自らに課した幻想が無理矢理に脳を動かして、ありもしない‘線’をその目に描き出して、ラスティはそれに従ってなぞる。互いの得物同士がぶつかり合うタイミングが短くなる度に、脳が悲鳴を上げ始める。エンジンオーバーヒート

ある一定の地点から、揺らぎの拡大が無くなった。

「俺だって…何時までも仮免許じゃいられないんです！」

飛び退いては再度接近し、飛び野かれては接近し、アルクスは一向に退く気配を見せない。ただただ、己の剣を誇示するためだけに振るい続ける。

「覚えてん…のかよ！！」

「取りに來い」と言って……たじゃないですか！！」

切り結ぶ合間に、言葉も交える両者。まだ剣撃が遅かった頃よりも交わす言葉が多く、それがより一層両者にとって負担になる。どちらかが飛び退いた際に短く言葉を発するだけだが、交わされた言葉が多くなる毎に、剣閃は少しずつ速度を増していく。

「違いねえ！！」

距離を離れたラスティが、迫るアルクスの剣を受け止めた。即座に次の一閃を放とうとするアルクスだったが、ラスティに罅迫り合

いに持ち込まれたことで動きを阻害される。ラスティは今まで片腕で握っていた刀を、両の手で握りなおして自身の体を押し付けた。剣に鏢が無いアルクスは、ラスティの剣が下に滑ることの無いように左手を潜り込ませた。布地の裏から、金属音が聞こえる。

「はあ……はあ……強く、なったな。アル坊」

「師匠は相変わらず強いですね……学生の力量じゃないですよ、ほんと。あと、俺はアルクスです」

「阿呆……本気で殺りに来ない奴が何を言う。それにな……コレにはちゃんとタネがあるんだよ。対アル坊ってのがな、これが!!」

アルクスの賞賛を鼻で笑いのけるラスティは、一步足を前に踏み出す。アルクスの刀の刃が近づくのも気にせず、体を前傾させた。アルクスよりもだいぶ低い位置になった彼の口元が、晒う。

「まずは飛んでけよ!!」

そのまま前方に向けて、踏脚魔術を発動させる。足元に輝いた魔方陣が展開されるのを見て、アルクスがラスティの意図を悟り飛び退こうとする。だが鏢迫り合いの体勢がそれを許さない。

「がつ!?!」

密着状態からの踏脚???それも加速の方向ベクトルは真横。零距离からの体当たりを受ける形になってしまったアルクスは、その体を浮かせ、後方に大きく弾き飛ばされる。空中で体勢を立て直したアルクスは、靴底を磨り減らしながら着地する。ラスティとの距離が大きく離された。

「稀代の天才、か……アークに完璧に予測してもらってるのに、追いつくので精一杯だぜ、これが……」

遠くの方で呼吸を整えているラスティ。アルクスに比べて大きく消耗している彼、その表情は自嘲的な笑みを浮かべていて、だが妙に清々しさを感じさせる。やや俯き加減の状態でそう呟いたラスティは、アルクスのほうに視線を向けて、挑戦的に笑ってみせる。

「じゃあさ、お互いに手札、出そうぜ？」

自らの真横に、自身の得物を突き刺した。

【虹の断章】

『ありがとございました！！』

自分が立つ扉の向こうから、幼き日の自身の声が聞こえてくる。十数年前の自身の声を聞いて、胸には言い知れない感慨が浮かんでくる。ノルニラムの作った歪みの箱の中に自分も巻き込まれていたが、呪いのせいで扉を開けようとする事が出来ない。この分では、向こうの師匠と師に仕える精霊は俺の事を感じてなどいないだろう。

強い閃光が、扉の間から漏れ出してきた。硝子が擦れ合う音が響き、それが小さくなっていくと共に光も弱くなっていく。扉の前に立っていた時と何ら変わらない様子に戻ると、不意に、体から何かが抜けていく感覚が感じられた。

右腕が、思わず自らの心臓の上を押さえる。その動作に特に意味など無いが、そうせずにはいられない自分があった。

直接確認しなくても理解できる　　今、時の逆説の呪は解かれた。

先ほどまでは掴む事すら出来なかった扉のドアノブを握る。扉を開いた。その先に見えた景色は、大部分が師匠の好きな空で埋め尽くされた景色。十数年ぶりの光景に、思わず涙腺が熱くなる。

三步だけ歩いて、扉を静かに閉める。感じられる風は、記憶にあったものよりも強い。振り返り、何も言わずに師に向かって歩みを進めた。靴音から、こちらの存在には気付いているだろう。だが師は何も言わずに、俺のいる方向とは正反対の空を見つめたままでいる。ある程度の距離を保って、俺は立ち止まった。ココに来たのは、ただ師に会いたかったというだけではない。

『まったく、そそっかしいなあおい。もう少し余韻に浸らせてくれてもいいんじゃないのか？』

数年ぶりに耳にしたその声は、呆れた様子で、少しだけ調子が暗い。急ぎすぎているという自覚はあるが、もう少しかけてくれる言葉を選んでくれても良かったのではないかと思ってしまう。

『さよならの直後一分も経たないで再会シーンじゃ、感動は少ないぜ？』

それは否定できなかった。

師が盛大に溜め息をつきながら振り返ってくる。

『まあとりあえず、久しぶりだな、‘アル坊’』

『はい……お久しぶりです……、師匠’』

憧れだった師の姿が、そこにあった。もう今では俺のほうが九つも年上だが、いざ対峙してみると年の差など関係ないように思えた。

『随分身長が伸びたんじゃないか？　もしかして俺と同じぐらいか？』

『今は181cmです。残念ながら、師匠には負けますよ』

師の身長を超えようとして、躍起になって大量の食事を取り続けた記憶が不意によみがえる。小さい頃は周囲より低めだった自分だが、いつの間にか百八十センチを超えていた事が、少しばかり誇らしかつたが、師の身長を知った時、少しだけ落ち込んだのを覚えている。負けたといっても、一センチだけだが。

『身長だけ勝っても、仕方が無いだろうが』

そう言っただけのけられて、違くないと思う。

それからしばらくの間、黙した状態で見詰め合った。濃い色の髪色と瞳の色は、俺の何を見ていたのだろうか？

『じゃあ、やるか？』

そう、一言。俺ココに来た理由を理解してくれていることを、その一言が示していた。待ち望んだ対峙、試合、稽古?????。ようやく立てた師匠と同じ舞台に歓喜して、久しくしていなかった、忘れかけた言葉を言った。

『はい。よろしくお願いします』

一礼して、剣を……師より貰った仮免許。銘の刻まれている銘無し、だが名はある打刀、虹渡にじわたを鞘から引き抜いた。昔はこの刀身が柄から生成されると怪しまれたため、こうして刃を出したままにして鞘に入れている。

鏢の無い細身の刀身。ソレの柄を握らない日は無かった俺の、最も信頼する得物にして半身、腕の延長ともいえる刀。俺が剣を引き抜いて、師も自らの得物を顕現させた。霞の中から出てきたそれは薄蒼く色付いていて、金属光さえなければ空に溶け込んでしまいうに見える。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same (もし
あなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないと

したら。」

詠唱した師に合わせて、構えを取る。過去から十数年が立とうとも擦り切れる事を知らなかった師の姿。鏡を何度も見て脳裏に再生した映像と照らし合わせ続けたそれは、寸分の狂い無く同じであった。自らの記憶の内と目の前の師の姿、そして鏡に映った俺の姿が、完璧に一致する。

『付いて来いよアル坊!!』

そう叫ぶと同時に、師と俺は同時に踏み出した。駆け出す際に、俺の名前を告げておく???恐らく師は俺の名前を知って尚アル坊と呼んでいるのだろうか。

『俺の名前はアルクスです!!』

俺たちが振るったのは、録視の蓮華。俺が初めて目にした‘型’にして、唯一真似続けた、俺にとっての至高。ある一点を中心に六十四本の線が等間隔に通るように振るわれるそれ。まず初めは利き腕側の袈裟の方向から振り上げるように斬った。

記憶にある師の剣閃。幾万幾億幾兆と再生し続けた鏡写しの型に、師の姿を重ねる。そこに真っ向からぶつかるように、俺は‘点’を確かに重ねた。

結果は、極細の切っ先同士が正面衝突して互いの進路を阻害しあうというものだった。師が振るう刀と共に、丁度鏡がその向こうにいけないのと同じように、合わさりながら点を過ぎ去っていく。

二太刀目三太刀目と、俺は同じように剣閃を重ねた。余りにも不可解な剣同士のぶつかり合いに違和感を覚えるも、師の振るう蓮華に俺は食らい付く。

動作ではない。描く弧を俺は模倣した。俺の体が付いていかない

ところでは動かし方を少しだけアレンジして、だが刃が辿る軌跡だけは完璧に模倣しきってみせる。規則正しすぎる火花のラインが、一点を集中して通り、俺の網膜にその地点を焼き付ける。

全六十四撃。俺はその全てをなぞって見せた。最後の一撃は、刃を向かい合わせたままで競り合う。

『お前……本当に人間か？』

競り合った体勢のまま、師は俺に本気で聞いてくる。流石に訊かれて少しばかり悲しくなるが、昔もいわれたと、言って返した。俺はそこまで自分を異常だとは思っていないのだが……

『俺……一応これでも、人間です!!』

あわせた刃を意図的にずらして、師の剣を弾く。同時に俺が唯一使っている虹渡以外の魔具??靴裏の踏脚を使って後退した。

『尋常じゃないな、ほんと……俺の録視の蓮華と寸分変わらず同じ動作をするなんてな……』

第五十小節「空の奏者と到達者」

霞霧を逆手に、床に軽く突き刺す。石床であるはずのその床に、カスミキリ霞霧は容易くその切っ先を潜り込ませる。抵抗を感じさせぬその切っ先は、数センチほど埋まったところでその動きを停止させた。直後、波紋が奔る。

「一応、お前の師匠ではあるんだがな、一学生でしかないんだぜ？ アークが俺とお前の動作を元に立てた運動予測を使ってようやく渡り合える」

波紋が過ぎて、アルクスの足元も過ぎ去っていく。屋上の床全域に広がっていった波紋は、密かに刻まれていた魔方陣を浮かび上げらせる。見慣れない空色の魔方陣が、床を埋め尽くさんばかりに浮かび上がってくる。

「ついでに、俺はそもそも剣士じゃないんだよ。魔術と剣技の両方をつかう魔剣士の類でもない」

天候は快晴。雲の姿は天の一割も満たしておらず、ただ澄んだ青だけが広がって、その下に同色の光が浮かんでいる。アルクスは、コートの中に左手を差し込んだ。どちらも、互いに攻撃を加えることなどしない。

「俺は魔術師だ。世界の力たる魔術しか使えない。人に由来する道は、俺に無い」

「師匠の剣は特殊だと……それはそういう意味なのですか？」

アルクスの問いに、ラスティは短く笑うだけで答える。それを肯定だと、アルクスは受け取った。

魔方陣の輝きが一定になる。自らの舞台を作り上げたラスティは、得物を床から抜くが、光る床は輝きを維持したままである。

抜いた刀を手元で遊び、その刀身を見つめながらラスティは言う。

「正直さ、俺はお前が羨ましかっただんだけぜ？ まあだから、少しばかり意地張らせて貰っただけどさ、これが」

魔方陣になんの効果があるかどうかは不明。だがラスティの顔に見られていた疲労の色はなりを潜め、アルクスの記憶の中にあった彼の表情に戻っている。周辺の空間に変化はみられず、アルクスに何か影響を与えることは無い、ただただラスティの戦闘を補助するためだけに敷かれた式であるようだった。

魔術で相手アルクスは、コートの中から左腕を静かに抜き出した。その手に握られたものを見て、ラスティがその目をやや細める。

「……四色の魔石……それが、お前の弧虹の剣士二つ名の由来か？」

「師匠、流石ですね……殆どの人が、コレを見ても首を傾げるだけだったのに」

指の間に挟みこむように握られていたのは、四色の魔石。親指側から青、緑、黄、赤の順で握られていた。可視光線の波長順に並んで握られているそれを見て、ラスティはそれが‘虹’に由来する何かを行うためのものであると推測する。

アルクスが自らの手札を開示しようとした直前、何か思い出したような表情になる。咄嗟に視線を上げて、ラスティに問うた。

「そういえば師匠、あの『世界を感じて』が入った詠唱、歌つてくれませんか？」

「あ？ 何で いや……わかった。詠唱はいいが、少しだけ長いぞ？」

突然の要望に疑問を持ったラスティだが、少しばかり考え込んで霞霧を一時的に結晶体に戻す。アルクスの意図は知れなかったが、アレを最後まで詠唱しきるとなると少しだけであるが時間が掛かると断ると、彼は問題ないと答える。

「どちらも待つことにはなりませんよ」

そう言つて笑つてみせるアルクス。相変わらず首を傾げるしかなかったラスティだが、何か言うというのではなく、詠唱が行われた。収まっていた風が、強くなる。

「Arfe arfe infertia（強く強く、お願い）」

「虹の麓を目指してる」

結晶体を胸に当てて詠唱するラスティ。四色を刃に添えて呟くアルクス。ラスティの詠唱にあわせて床を覆う魔方陣が脈動し、生きているかのように動き出す。左胸の前に構えられた結晶は、体の表に出てきた心臓のように思えた。

「そこに求めるものがあると信じて、ひたすらに」

「Tufestufethowviel tioliariolem-issa（遠く遠く、ただ雲居を追いかける）」

アルクスの詠語ではない眩きに、四色の魔石たちは仄かに光を放ち始める。砕け魔方陣こそ生成されることは無いが、強い自己暗示によりもたらされる心の震えに、魔石たちは反応する。

「Alcurim nowkia Lastim urma（憧れに伸ばした私の腕は）」

「誰もが夢物語と言う」

光は強まっていく。周囲が空色に染まっていく中でアルクスの手元だけは、色付いて輝いていた。式も詠語も無しに、何の加工もされていない魔石を輝かせるのは並大抵のことではない。

「それでもいつかと夢に見て」

「Kattiam soltierreymous（鏡にその手を合わすだけ）」

ラストイの詠唱の後や前に、滑り込ませるようにアルクスは詠唱自己暗示を滑り込ませる。一つの独立した詠唱でありながら、それは連なったもう一つの詠唱であるかのように思えた。

「Carie livia Lastum wessa（駆けて生きた私の道は）」

「近づく度に遠のいても」

「Irrel-arem olwona（夢物語の海の中）」

「それでもまだと駆け続く」

緩やかに、魔石の表面から削り出されるかのように各色の光が重力に引かれて零れ始めた。空気より重い霧が、彼の足元を覆い隠していく。ラストイの胸に抱く結晶もまた、握られた手の中から光の糸が漏れ出している。

「Venoum armatum Xeesa（私を覆う硝子の空には）」

「架かる虹は何時も在り」

アルクスの足元に溜まっていく色鮮やかな霧たちは、風に流されることは無い。そして魔方陣の光は、決して外に出て行くことは無い。

一定の空間、その内側を空色に塗りつぶした。

「夢に手翳し握り締め」

「Zioe ioe jelnik wein（爪が突き立てられるでしょう）」

アルクスの刀が、少しずつ少しずつ、持ち上げられていく。左手に握りこまれた魔石たちは強く握りこまれて、少しばかり掌の中にその姿を埋めていく。

「Xienolfiliasowhalt（霞に浮かぶ私の心は）」

「道は見えねど突き進む」

静かに目を閉じたアルクスの表情は穏やかで、喜色に彩られている。持ち上げられた多色の光が、その顔を照らし出す。

「あの目を胸に、走り抜け」

「Om keina cai Fer fel fatum」(遠き日の名を探すでしょう)「

虹渡にじわたが僅かに煌く。霞霧かすみぎりが再び構築される。

「Xoxe:lem on ain sof」(空を見て謡うこの音は?????)「

「幾年か過ぎれども」

言葉に込める幻想こそ希薄であるものの、そこに宿る幻想は強く輝いた。

「Calsie-essa」(果たして???)「

ラストイは肩の調子を確かめるように縦に振り払い。アルクスは刃の上に手を滑らせた。

「O aire feene Xeen?」(世界を感じているか?)

「Aus dia ire esse」(私はまだ其処に至る事は叶わない)「

本来であれば最後の一節だけで用が足りた両者の詠唱は、幾重にも塗り重ねた上で完成を告げられた。

ラスティの詠う言葉は、その領域を取り囲むように広がって行き、一帯を自らの領域に仕立て上げる。アルクスに促されるままに詠唱を長くした効力で、領域化はラスティが想定していたものよりも更に確固たるものになる。

アルクスの詠う言葉は、掌と共に刃の上を滑っていき、その刀身を七色に染め上げる。虹色に染まり上がった虹渡を以って、頭上を弧を描いて振り払った。

「いつか師匠は言っていましたよね……世界を感じているかと……」

虹渡の過ぎ去った空間に、七色の光が残って虹を形成した。空色の光に満たされた空間にかかった幻想の虹、確かすぎる残像は数秒の間をおいて消え去った。ラスティはその不可思議な魔術設定に無いに目を見開く。

「今の最後の言葉が、僕なりに考えた答えです」

師から言われた言葉。世界を感じる???そこに自分はまだ至れていないという、それが自分の回答だと、アルクスはラスティに言ってみせる。ソレだけを告げて、アルクスは構えを取った。

幾度と無く繰り返し身に刻みつけたその構え。他者から見ればただ立っているだけに見えぬそれが、英雄といわれる彼の構えだった。詠唱している時に見せていた喜色も安らかな色も失せ、赴く者の表情をしている。どの方向にも動けるように、筋肉には最低限の力しか込められておらず、ぶら下がる虹渡は少しばかり風に揺れてるように見えた。

「そうか……でき、一つ訊いていいか? 俺」

ラストイが、アルクスの言葉に頷いて同じように構えを取る。僅かにその身を沈めた。

「お前にこの詠唱聞かせたことあったっけ？」

「流石にそこまでは、覚えて無いですよ！！」

両者の足元に、同時に踏脚の魔方陣が展開された。

第五十一小節「師の意地と」

足が跳躍に備えて畳まれる。体を支える筋肉組織が張り詰めて、それらが動けと意識を急かす。

「（アーク！ 領域知覚その他諸々全て俺のサポートに回せ！ 本試験だ！）」

「（了解：対個人戦闘に必要な器官全てを機能停止。演算領域を全て譲渡します）」

ラストイとアルクス、両者の距離が一瞬で詰まる。双方とも同時に踏脚を発動させ、大きく開いていた距離を二歩で詰めきる。

網膜に、線が奔る。自らが辿るべき剣閃の道筋を示すそのレールに、ラストイは正しさを疑うことなく霞霧を走らせた。金属光の抑えられた蒼い刃が、水平にアルクスに迫る。

「ふっ！！」

その線は、七色の光に断ち切られた。途中で斬られたラインを再構築することはせずに、俺は剣を引く。彼の網膜には、アルクスの初動と同時に算出された、攻撃予測の線が描かれていた。その行き先が、右わき腹を抉るように示されている。

「ええい！！ 見えにくい！！」

迫る虹を打ち払う。打ち払った直後に反対側に出現した予測線に向けて、横殴りに剣を振るった。視界の外で金属がかち合う音が聞こえる。

絶え間なく振るわれる七色の剣閃は、ラスティの視界を埋め尽くして必要も無い情報を送りつけてくる。虹の先に見える切っ先を認識するのに、僅かに時間がかかる。そのせいで脳に余計な負荷がかかっていた。焦げ付くように訴えてくる頭痛を、彼は完全に無視する。

脇腹眉間左肩と続く運動予測に、ラスティは迎撃の思考をとる。

「その言葉、そっくりそのまま返させて貰いますよ!!」

虹の合間を潜り抜け、蒼の閃光が奔る。人が色を認識するまでに、最も長い時間がかかる色‘青’。それは体感速度を速め、実際以上の速度を相手に感じさせる。そんな認識しづらい色に、アルクスもまた苦戦していた。

だが、英雄と呼ばれた剣士はその程度では敗北に至らない。ラスティの描く線は全て切り払われ、その上で反撃すら繰り出してくる。ラスティもまた反撃を行うが、アルクスにすぐに切り返される。

「つく!? 強いなあおい! ほんと、羨ましいぐらいになあ!!」

脳の演算を早める。必要以上に稼動する回路は熱を持ち、更なる苦痛を感じさせる。

迫る虹を一つ残らず打ち払い。再び線を引く。早く速く、奴より疾く。ただそれだけを念頭に、ついてはなれはなれてついてを繰り返す。ひたすらに線を引き続ける。

急に速度を上げたラスティの剣に、少しばかり押される。

「まだです!! まだいけます!!」

だがそれにも、アルクスは即座に拮抗してみせた。拮抗するだけでなく、そこから更にギアを上げようとするアルクス

だが、

先に行つたのはラステイ。

「まだまだ！！ 早く、もつと疾く！！」

脳のギアを上げる。演算を早める。更に速度の高みに上るラステイ、だがアルクスは置いていかれるどころか追い越さんとはかりに追従する。追いつかれまいと、ラステイは更に速度をあげる。そんな両者の速度の追走を表すかのように、いつしか二人の剣撃は同調を始めていた。

鏡写しのように剣を交し合う両者、先行する方の剣を、同調して振るう剣が逸らす。幾度と無く先行する方は入れ替わり、受け流すほうと流される方は交代を続ける。

「（マスター！ これ以上は！！）」

アークの補助による演算領域などとうに使い果たし、残っているのはラステイ自身の脳のみ。演算回路際限なく上がり続ける速度に、二次関数的に上昇を続ける脳の負荷。そのままではラステイの身が危険だと、アークがラステイの脳内に向けたたましく警告を鳴り響かせる。

「まだまだ！！ まだまだまだまだまだまだまだ！！」

「つつ、僕だつて、僕だつてまだいけます！！」

「（マスター！！ これ以上は危険です！！ おやめ下さい、マスター！！）」

うわ言の様にまだと言い続けるラステイ。今までよりも更に、危険なほどに速度を上げる。幻子により強化された筋肉組織魔力でもなければ、行きつくことの出来ない速度。刺突であれば、拮抗できない

速度では無いだろう　だが曲線を描く斬撃においては、その連撃は人の身では最速領域といえる。

拮抗する。一太刀ごとに攻撃と防御が入れ替わる。距離を離すこともせず、足を止めて真つ向から切り結ぶ。だがそこでも、ラスティの意識はまだ速度の高みに至ろうとする。

朦朧とする意識、ただ先を求める、負けたくないというだけのさやかな意地。それがラスティの剣速を更に上げようとして

唐突に、鏢迫り合いで停止した。

「はあ……はあ……（アー……ク？）」

「（ゲンゴキノウ、フツキウウヲカイシシマス……申し訳ありません、マスター。言語機能の一部を停止させ、演算に割り込ませていただきました）」

「はあ……（そうか……濟まん、アーク。迷惑かけた……）はあ……アル坊……お前、人間か？」

アークが自身の言語機能の一部を一時的にラスティの演算の分に回し、彼に正気を取り戻させたのだ。正気を取り戻したラスティは、そのままアルクスに鏢迫り合いを持ち込む。

正面にアルクスを見据えたラスティは、この相手がティアマットだったら吹き飛ばされてたな　ふと、そんなことを思う。

「はあ……はあ……だか……ら……にんげん……ですって」

先ほどのまでの切り結びとは違い、アルクスもまた息が上がっている。

押し合うことも無くただ互いの刀を合わせているだけで、二人は

視線を交し合う。

「まあ、いっか……とりあえず、俺、疲れた……お前は？」

「ははは……流石に俺も……無理しすぎました」

空は失せ、虹は消えた。

第五十一小節「師の意地と」(後書き)

「ラスティの詠唱」

強く強く、お願い

遠く遠く、ただ雲居を追いかける

憧れに伸ばした私の腕は
鏡にその手を合わすだけ

駆けて生きた私の道は

夢物語の海の中

私を覆う硝子の空には

爪が突き立てられるでしょう

霞に浮かぶ私の心は

遠き日の名を探すでしょう

空を見て謡うこの音は

果たして世界を感じているか？

????????

「アルクスの詠唱」

虹の麓を目指してる。

そこに求めるものがあると信じて、ひたすらに。

誰もが夢物語と言う。

それでもいつかと夢に見て、
近づく度に遠のいても、
それでもまだと駆け続く。

架かる虹は何時も在り、
夢に手翳し握り締め、
道は見えねど突き進む。

あの日を胸に、走り抜け、
幾年か過ぎれども???

私はまだ、其処に至る事は叶わない。

??????????

「二人の詠唱」

強く強く、お願い、虹の麓を目指して。

そこに求めるものがあると信じて、ひたすらに遠く遠く、
ただ雲居を追いかける。

憧れに伸ばした私の腕は、誰もが夢物語と言う。

それでもいつかと夢に見て、鏡にその手を合わすだけ。

駆けて生きた私の道は近づくたびに遠のいても、

夢物語の海の中、それでもまだと駆け続く。

私を覆う硝子の空には、架かる虹は何時も在り。

夢に手翳し握り締め、爪が突き立てられるでしょう。

霞に浮かぶ私の心は、道見えねども突き進む。

あの日を胸に、走り抜け、遠き日の名を探すでしょう。

空を見て謡うこの音は、幾年か過ぎれども

果たして???

世界を感じているか????? 私はまだ、そこに至ることが出来ません。

・ラスティの歌とアルクスの歌が何故つながるようになっていかは現状では不明。ただこの歌があるためアルクスはラスティにせがんだものと思われる。

エピローグ「虹の少年・弧虹の剣士」

「あゝあ、勝ちたかつたな……」

「馬鹿言つな、俺にだって一応意地があるんだよ意地が」

夕時に集まっていた場所で、ラスティとアルクスは並んで腰を降ろしている。決着が付かず引き分けとなった試験??? 試合の結果に、アルクスは大きく溜め息を吐いた。そんな彼を、ラスティがたしなめる。

たしなめられたアルクスは、軽く息を吐き出しつつ無言で空を見詰めた。そのまましばらくして、ゆっくりと口を開く。

「やっぱり師匠は強いですね……今から傭兵稼業とか始められるんじゃないですか? 冒険者とかフリーのトレジャーハンターなんかとかも……」

「阿呆、俺はお前と相性が良すぎただけだ」

不意に荒事の稼業を勧めてきたアルクスに、阿呆と一蹴して素っ気無く言い返す。言われたアルクスは、何故か軽く息を吐き出して肩を落とした。

それから二人は、何か言葉を交わすということもなく空を眺め続けた。風が吹いていき雲が向こうに流れていく。それを眺めているうちに、自分達もまた流されていくかのような感覚に陥った。そうしている中、風の向こうから声が届く。

方向は本棟から見て北西の方向、コロッセオ?競技場。その方向から聞こえてくる喧騒を、久しぶりに彼等は認識する。それと同時に、大事な用

事をアルクスは思い出した。ラスティも感付いたようである。

「……なあ、お前…あのイベントに呼ばれて今日ココに来たんだよな？」

「……はい」

受け答えるアルクスの顔色は優れない。激しい運動ゆえにかいていた汗が、次第に別の事情で汗をかきはじめる。もしかすると切り結んでいた時よりもその量は多いかもしれない。

「一応、十二時までには戻るって……」

懐から取り出したのは懐中時計。そしてそこに示された時刻を見てアルクスは固まった。よくこんな高価なもの持つてるなど、ラスティは言おうとしたが、それよりも早くアルクスは慌て始める。

「やばいやバイヤヴァイ！！ も、もう一時過ぎてる！？」

取り出した懐中時計を再び懐に収め、虹渡を引つ掴んで立ち上がるアルクス。彼は屋上の出入り口に体を向けて、前かがみに踏み切りの体勢をとった。

「すみません師匠！！ 俺時間がヤバイんで行かなきゃなんないです！！」

おう??? そう言うラスティの言葉も耳に入らないで駆け出したアルクス。踏脚までも使用して、屋上を駆けていき、瞬く間のうちに扉の前まで辿り着いた。一瞬呆然としてしまったラスティだったが、彼もまた大事なコトを思い出し、慌ててアルクスを引き止める。

「ちよつと待て!!」

ノブを掴んだ姿勢のまま、アルクスはその動きを止めた。振り返った先ではラステイが立ち上がっており、何か掴んでその右腕を大きく振りかぶっている。

「そら!!」

投げ放たれた何かが、綺麗に弧を描いてアルクスに向かって行く。ドアノブを掴んでいた方の手で慌ててそれを受け止めた。妙に軽い手ごたえが、掌に伝わる。

受け取ったアルクスは、ゆっくりとその掌の中の物を覗き込んだ。

「忘れ物だ。お前、ソレ貰いに来たんだろ？」

「あ……………」

楕円状の円に、中央に空いた穴。切り口には七色の魔石の色が見えるが、概観は総じて黒い。その表面には、小さな文字で文章が刻まれていて???免許皆伝：これでお前は弟子卒業だ???読むと文字は消え去って、元々刻まれていた別の文字が浮かび上がってきた。

楕円を取り囲むように刻まれていたのは、アルファベットの文字列。今まで自分の剣に与えられていなかった、詠語の名前。この剣が正式に「認められた」ことを示す、証。

Archeth-Alreibow。その意味は「虹を渡る者」。

「刀身を一回消してからつけてみな」

短くそういうだけのラスティ。行ってからすぐ座り込んで振り向いて、また空の方向に視線を向け始める。その遙か後ろで、固まっているアルクス。

「……師匠、ありがとうございました!!」

扉の前で、ラスティに向かって一礼するアルクス???数秒たつて体を起こし、振り向いて扉に手をかけた。

最後に一言、ラスティは大きな声で告げる。

「今度会ったら、もう少しゆっくり話そうぜ。じゃあな、アルクス!!」

「あ……………うん……………じゃあね、ラスティ!!」

最後に別れの言葉を交わし合い、互いの名前を呼び合って???少しだけ慌しく、扉は閉められていった。

??
??

「……………ようやく…終わったか。……………アーク、もう解除するぞ?」

扉が閉められて、聞こえるのは喧騒と風の音だけになる。その音に耳を澄ませて、ラスティはゆっくりと目を細め、アークとの接続フアクトをようやく解除した。そして、倒れ掛かる。

「!? マスター!?」

倒れていくラスティを、アークは即座に実体化して受け止める。座った体勢から後方に倒れこみ、その頭を支える形となった。ラスティはアークに受け止められた状態で、軽く苦笑いをして告げる。

「ふう……きつつかつたあ……ちょっと、無理しすぎ……たかな……?」

ファンクト

接続を始めとして様々な魔術の恩恵も解呪したラスティは、疲労が一気に押し寄せて気を失う寸前だった。

アルクスが居なくなるまで魔術を使っていたラスティに、アークは溜め息をついた。ゆっくりとラスティの頭の位置を下げていく

自分の膝の上に。頭に感じた柔らかい感触に、ラスティは一瞬だけ体を強張らせる。

そんな彼の様子を無視して、アークはラスティのことをたしなめた。少しだけ、頬を膨らましている。

「ちよつとどころではありません、やりすぎです」

「ははは……済まん。こうさ……格好悪いの見せたくないなって……思ってたさ」

無理をした理由がそんなものであることに、アークは更に溜め息を重ねた。呆れられたその様子に、ラスティは力なく笑って、細くなっていた目を閉じる。大きく深呼吸した。

「あのさ……膝枕するぐらいなら……俺のこと……愛称で……呼べるん……じゃないのか?」

「わ私達精霊にそれは難しいかと……」

ラスティの不意打ちとも言える発言に、今度はアークが体を強張らせた。顔色が変わらないあたりは、ウンディーネよりは動揺を抑えられている、が言葉の始めを噛んでしまつて隠し切れなかった。動揺が露呈したことで、ラスティが少しだけ笑う。アークは先ほどよりも大きめに頬を膨らませる。

「まあ…いつか……とりあえず、俺…限界だわ…」

「はい。私が居りますので、マスターはご安心してお休みになつてください」

「ああ……そうするよ」

アークに見守られる中、ラスティはゆっくりと意識を手放した。直前に、アークが彼に向かって微笑む。

お休みなさいませの後に、こう、続けた。

「　　どうか良い夢を」

その言葉に返事を返せていたかは、ラスティの記憶には無かった。

広く開けた空の下で、主従は空が色付くまで

「飲み交わす英雄」

学院の本棟第十階層。教師たちの職員寮。夜中のことだった。

ある一室の前に、一人の男性が立つ。暗がりの中でも少しばかり輝く金髪に、狼の眼とも称される琥珀色の眼、その手にやや歪曲した鞘とそれに入った剣を持ち、灰色のローブを纏う。

その男性????アルクス・レインズは、扉を軽くノックした。中に向かって、自分の名を告げる。

「やっと来たか。鍵は開いてるから、入ってきてくれ」

中からは男性の声、その声に従って、アルクスは部屋の中に入っていた。

中に入ってまず目に入ったのは、長身の男性。ここの教師にしてかつては名の知れた槍の使い手、そして英雄の好敵手、アルバ・アーキナム。普段彼が着込んでいる赤茶のローブは部屋の片隅にかけられて、今はその鍛え上げられた肉体のラインが分かる細身の黒い半そでのシャツを着込んでいた。左手には二つのグラス、黒光りする右手にはボトル。

「よお、アルクス。遅かったじゃねえか」

??
??

「とりあえず、こうして酒飲むのは久しぶりだなあおい」

「ははは……こじばらくは、こっちに来れなかつたからね」

アルクスの言葉に苦笑した部屋の主??? アルバ・アーキナムは、外を臨む事の出来る窓辺に置かれた小さなテーブルに二人分のグラスを置き、そこにワインを注いだ。そしてテーブルに向かい合って座り、それを合図にして二人はグラスを少しばかり掲げた。口元を歪めて、二人は笑いあう。

「まあとりあえずは、な」

「ああ」

「乾杯」

軽くグラスの口を打ち付け合って、互いにその赤い液体を喉に流し込んだ。三分の一程量の減ったグラスをテーブルに置くアルクス。

「……ふう……それにしても、結構広いんだね、ここの部屋って」

「あの旦那がやることだぜ？　むしろよくこれ以上のスペースにしなかつたって思っぜ？」

答えるアルバの声に生返事を返しながら、アルクスは周囲を見渡す。生徒の部屋よりも二回りほどは広い床面積。木目の美しさを生かした家具の数々は、アルバの趣味なのだろう。石造りの建物の中で、少しばかり自然を感じる事が出来るような光景だった。

「確かにそうだね。あの人がいたらもつと大きなものを作ってたんだ」

「だろ？」

共通の知人を話題にして、二人は笑いあう。広い部屋の中で、二人の笑い声は少しばかり寂しく感じられる。二人の笑いはずぐに収まり、話題は変わって本日行われた‘イベント’についてになる。

「そっぴやアルクス。今日はまた随分と張り切つてたじゃないか。申し込まれた手合わせ全部受けて　最終的に二百人ぐらいはノしたんじゃないか？」

残りの量半分を切つた自身のグラスを見つめながら、アルクスのほうをチラリと見る。その視線を受けるアルクスは苦笑気味で、せわしなく視線を泳がせた。後頭部を掻きながら、言う。

「いやだつて、俺の剣つて参考にならないし教えられないから、出来ることつていつたら手合わせぐらいだろ？　というか、ノしたつて表現はないだろ？」

「ん？　ああ、そつだな……まあだが、嬉々とした表情で次々と挑戦者を下していくのはどうかと思つけどな、これが」

「……………は、ははは……………」

そんな一言に、アルクスは答えに詰まる。視線を合わせずに誤魔化して笑うしかなかった彼に、アルバはただ一言阿呆と言つてみせた。少し、落ち込んだ。

少々子供っぽいかつての好敵手ライバルに溜め息をつきながら、アルバはアルクスの椅子に寄りかけてたてられた彼の得物　虹渡を見た。今まで付いていなかったモノ罫が付いているのを見て、肩眉をあげる。

「そっぴや、昼間の時も思つたんだが……………お前、何時からその剣

に鍰なんてつけたんだ？」

アルバの質問に、アルクスは落ち込んだ状態から帰還する。彼の質問を受けて、急にその表情は安らいだものになって、自らの得物にして最も信頼している相棒に向けて視線を落とす。

「今日……からだよ」

隠すことなく、正直に答える。その答えにただそうかと告げたアルバは、ワイングラスを揺らして何やら思案に入り込む。その様子を、アルクスは困ったように笑って見ていた。

しばらくの沈黙。窓の硝子越しに聞こえる動物達の鳴き声が、妙にはつきりと聞こえる。そして何匹目かの獣の遠吠えを耳にした後、アルバは静かに告げた。

「……ラストイハルト・ジーンか？」

「やっぱり、知ってたんだ……」

アルバの口から告げられた‘アルクスの師の名前’。本来であれば誰も知りえず予想し得ないその情報、そのことをアルバが知っていたことに、だがアルクスは驚かない。むしろやはりと口にして、知っていて当然だという風に振舞った。

そんな彼の反応を、鼻で笑い飛ばす。

「ハッ 分かったのは何日か前だったんだがな？ アイツの剣を見せてもらったんだよ。見てすぐに分かった……あの剣は、この世の何処にも無い意匠’だからな。つつかお前のと似てたし、気付くの
に労力は要らんかったさ」

「まあ、そつだよな。俺の虹渡は、霞霧　　あ、あの人の剣の名前だよ　　のコピーみたいなやつだつて、言つてたからね、これが」

アルクスの物言いに、アルバは今度は驚き呆れて溜め息をついた。グラスに残っていたワインを一気に飲み干して、言う。

「っはあ……まさかガチで、お前が未来に跳んでた、だなんてな……」

「おいアルバ、信じてくれたんじゃ無かつたのかよ」

「そりゃああの刻印を見りゃ信じざるを得んよ。だがその光景を実際に見てみると、これまた違った衝撃があるんだよ、分かるだろ？」

アルクスの少しとげとげしい口調を、アルバは軽々といなす。今度はアルクスが、大きく溜め息を吐く番だった。まだ少しばかりアルクスのグラスにはワインが残っている。

アルバは自分でグラスにワインを注ぎなおし、あらかじめ用意してあった肴にも手をつけた。夜空に見える月を眺め、チーズのようなものを口に放り込む。

彼はアルクスに視線を移してから、更に質問した。

「そついやよ、お前今日遅かつたのは、ラストイハルトのところに رفتたからだろ？　どうだったよ、久しぶりの再会は」

少しばかり身を乗り出すようにして、アルバはアルクスに訊く。ワインを注ぎなおそうとしていたアルクスは、彼の質問にやや恥ずかしげに笑い、後頭部を掻いてから、恐る恐るといった風に答えた。

「いやあそれがさ、俺、虹、まで使ったんだけど、勝てなかっただ」

アルクスのその言葉に、アルバが硬直し、場にはなんとも言えないような雰囲気が出る。ワインを注ぎ直そうとしたアルクスの動きは止まり、アルバは瞬きすらせずに凍りつく。

「あ、はは、ははは………」

冷や汗を流しつつ笑うアルクスの声に、アルバは少しずつ再起動を始める。そして、今の発言を無かったものにするかのように再度質問した。眉間を押さえて少しばかり呻く。

「すまんアルクス。どうやらオレは耳がおかしくなったのかもしれない……もう一度、言ってくれないか？」

「いやだから勝てなかったんだって。厳密には引き分けだけど」

「

彼の耳が二度捉えた言葉は、確かに、アルクス「英雄と一学生」ラスティハルトが引き分けたというものだった。その言葉に、アルバは流石に現実逃避を決め込むわけにもいなくなる。グラスを置き、椅子にもたれかかったアルバは、頭痛を押さえるように頭を抱えて言った。

「いやおかしすぎるだろおい。いくらアイツがお前の師匠って言ったって、戦闘経験は愚か剣を握ってきた時間だって数十、いや数百倍は違うはずだ。何よりもお前の実力はオレが知ってる。分かるか？ オレがまだこの腕を無くす前、お前はオレと互角だったんだぞ？ それが一生徒と互角だと？ どんな天才だそれ」

「十五歳で黎槍レイソウの二つ名を持つてる天才アルバが言うって説得力無いよ？
後、師しよ　　ラスティが言うには、精霊アークのおかげだつてさ」

アルバが矢継ぎ早に、詰め寄るようにしてアルクスに言う。彼の
その静かな気迫引き分けた理由のようなものに気圧されかかったアルクスだったが、
冷静に事情をアルバに告げることが出来た。それを聞いたアルバは、
途端に拍子抜けした表情になる。

「ああああ成る程なあおい。あの幼だか少だか付け難い化身になる
あの青い精霊か。……確か接続ファンクトだっけか？」

「ああ。それで俺の剣が全部予測できてたんだつてさ」

アルクスの説明に、アルバはようやく引き分けたという状況に納
得する。ラスティハルトが一介の学生に過ぎないとしても、アルク
スの剣が完全に読めていて、精霊の力を借りてというならば、確か
に互角の戦いをしてもおかしくは無いと思っただからだった。

きつと彼が、戦いの舞台は魔術師ラスティの陣地の上、だったというこ
とが分かっていれば、今度はアルクスに呆れていたことであろうが
……。

「そういえばアルバ、アークさんのこと知ってたんだ」

アルバがアークを知っていたことに、意外だという風にアルクス
は話題を振った。その言葉に対して少しだけ笑った彼は、アルクス
の空になったグラスにワインを注ぎなおしてから言った。

「ココじゃ結構有名なんだぜ？　大抵は契約者にベツタリだが、暇
があれば校内を散歩してるし、その時に見れるメモに何か書き込む
姿だとか、幼い外見とギャップのある話し方をするとことかが人気

なんだとよ。教師の間でも、無性別の希少固体だとか、契約者に完全服従だとか、自我が妙にしっかりしてるとかでたまに話題にもなるしな」

「そっか……今は昔ほどに隠そうとしなくても問題は少ないんだっ
たっけ」

少しばかり自嘲的な笑みをするアルクスに、そういうことだと返すアルバ。そしてその精霊の話題をしたことで、アルバは昔の事を思い出す。

何か思い出したということがありありと伝わってくる彼の表情に、アルクスは浮かべていた笑みを引きつらせる。

「そっいやアルクスよお、お前も精霊にモテてたよなあ？ 懐かし
いぜ、お前が女の精霊にくっつかれた時がな……あの狼狽振り
は傑作だったぜ？」

「俺は気が気じゃなかったよ……あの後大変だったんだよなあ、こ
れが」

昔を思い出して、当時の事をからかうアルバとからかわれるアル
クス。

「でも、それならラスティの方がモテると思うよ？ 仮の話だけ
ど アークさんなんて、いざとなれば自分達の神よりラスティ
の方を優先しちやいそいな感じだよ？」

「阿呆。あの種族精霊全員狂信者の連中が、自らの信ずる神を裏切るな
どありえんだろっが。そんなこと本人の前で言ってみろ、殺されは
せんだろっが、腕の一つぐらいいは持っていかれるぞ？」

ラスティこそが、精霊たちにとっては自身の信ずる神にあたるということを知らない彼等は、そう言葉を交わしあう。アルクスもまた、彼の意見に苦笑しながら同意した。最も、今の発言を本人の前で言ったとしても、アークは怒ることなど無いだろうが。

「そういえば、妙に詳しいみたいだけど……もしかしてラスティってアルバのクラス？」

ラスティに関係する話題に話が続くことに、アルクスはそう疑問を持ち、質問した。訊かれたアルバの方は、何を今更という雰囲気でありありと漂わせて、その事実について肯定した。ついでに彼が委員長であることも教えておく。

そのことを聞いたアルクスは、納得の表情を浮かべて三度ほどゆっくりと頷いて、それから少しばかり眉をひそめて言った。

「ははは……流石ラスティ。委員長だなんて、俺絶対できないや」

まだ彼の頭の中には目標としてのラスティの姿があるのか、そのように言う。そもそもしてお前学校通ってなかっただろうが、というアルバの言葉に、少しばかり落ち込んだ。

「それになあ、魔術の知識も中々のもんなんだぜ？ 例えばよ

」

「ま、待ってくれアルバ、俺そっちの方面は全然

」

そうして彼等は、共通の人物を話題に夜がふけるまで語り合った。

「魔具のトラウマ」

〳〳数年前のアルクスを特集した取材記事より抜粋〳〳

Q：アルクスさんは、その剣と踏脚を刻んだ靴以外の魔具を殆ど使用されないそうですが、それは何故ですか？

A：あ、いや……別に何か拘りとかがある訳じゃないんです。ただ、少々魔具にトラウマがありました…

Q：トラウマ、ですか？

A：はい。俺の師匠の友人に魔具を作られる方が居たんですが、その人に魔具を使ってみないかと言われたんです。

Q：はい

A：それで当時の俺は喜び勇んでそれを使わせてもらったんですが

??

それは、夏休みのある日のことだった。ラスティが用事のため席を外していて、屋上ではアル少年だけが剣を振っている。弱い風が吹く屋上に、弱く荒い風切り音が響く。

昼も近くなってきた頃、屋上に少女が姿を現した。扉を勢い良く開け放つと同時に彼女は元気良く挨拶をする。

「おつつかれさま〜！！ 二人ともげんk……あれ？ ラスティくんは？」

灰銀のショートヘアに褐色の肌、白の袖なしのワンピースにその身を包んだステラは、彼女らしい活気に満ちた表情で挨拶をすると、そこにラスティが居ないことに気付く。首をかしげて、アル少年に話しかけた。素振りを止めて、彼女の質問に答える。

「師匠でしたら、用事があるとかでどこかに行きました」

「あ、そうなんだ」

アル少年の答えに納得したステラ。その手に大きめの袋をぶら下げて、軽い足取りでアル少年に歩み寄る。満面の微笑を向けながら歩み寄ってくる彼女に、アル少年は不思議そうに首を傾げてみせた。

「？ ステラさん、何かあつたんですか？」

「ふっふっふ〜。ねえねえアルくん！ 魔具、使ってみない？」

不敵な笑いを挙げて袋を掲げてみせるステラ。アル少年は、ステラの「魔具」という言葉に興味を示し、小走りに彼女に駆け寄った。

「ステラさんステラさん！ 魔具ってなんですか？」

「んーとね〜、アルくんが分かりやすいように言つとね？ 簡単に魔術を使える様にする道具のことだよ？」

その純真な好奇の視線を寄せられて、ステラはにこやかに説明し

てみせる。その説明に、もしかしたらそれで自分も魔術を使えるのではないか、という考えに至ったアル少年は、途端に喜色を表情に浮かばせる。

「もしかして僕にも魔術が使えたりするんですか!？」

「ふっふっふ……そうだよ……。どう？ アルくん、使ってみない?」

ステラの言葉に、使ってみたいと元気のいい返事を返すアル少年。ステラもまたご機嫌の様子で、今しがた出来上がったばかりの魔具の試作品、を袋の中から取り出した。尚、一応彼女自身で使用し、みてから今回はここに持ってきている。

「じゃじゃ〜ん!! 名づけて、簡易型魔術行使補助礼装TYPE:
G・ばーじょんすりー、ヴァルベイト、!!」

仰々しい口調と共に彼女が袋の中から取り出したのは、六角柱状の黒光りする物体が三本。即座にそれを一つに連結してみせ、宙に高く掲げた。それを眼を輝かせてアル少年は見上げている。

「おおお〜!!」

今にも引つ搦んで振り回したいと訴えるような彼の視線を、ステラは制す。興奮気味の彼に向かってステラは彼女なりに冷静に説明をした。待てを食らったかのように、しきりに彼女の作品を見るアル少年は、それを聞いているかは怪しいが。

説明に際して、ステラは六角柱の杖状の礼装を捻ってみせる。すると三本が連結した六角柱の真ん中の部分が解放され、中の術式の模様が剥き出しになった。

「それじゃあねアルくん。お手本見せるからちゃんと見ててね？」

そう言っ て彼女は、口による説明を交えて説明を始める。

「まずはね？　ここの真ん中のダイヤルをこつちに捻るんだ。そうするとこう、先のほうが光ってくるから、このぐらいに光が溜まったらこの回したダイヤルを上押し出すの」

説明と共にステラが六角柱のダイヤルを上押し出すと、杖の先から光る粒子が飛び出した。励起した魔石である。それはステラがなんらイメージを送ることなしに、杖の先に緑色の小さめの魔方陣を描いた。得意げなステラを、真剣な表情のアル少年が見上げる。

「そしてこんな感じになったらね？　今度は上のダイヤルを回すの」
すると今度は、魔方陣が光り輝き始めた。ソレと共に杖の先には風が集まっ ていく。

「このぐらいになったら、今回した方向とは逆に回すの。そしたら今度は、この二つごと下にスライドして　一番下のダイヤルを押し上げると」

最後の工程をステラが終わると、魔方陣の先に集まっていた風が収束し、ほんの少しの間と共に杖が向く方向???真上に風の弾丸が打ち出された。少しだけ漏れ出した風の余波が、ステラとアル少年の顔に吹き付ける。

風の弾丸を撃ち終えたステラは、魔具の稼動が正常であることを確認すると、アル少年に向かって笑いかけた。

「どう？ 凄いでしょ？」

「わあ、凄いですね！！ 僕魔術って始めて目の前で見ました！！
いいなあかつこいいなあ！！」

感極まった様子のアル少年に笑いかけながら、ステラは六角柱の一番先のパーツを新しいものに取り替える。交換を終えたソレを、彼女はアル少年に向かって差し出した。

「やってみる？ アルくん」

「やってみたいです！！」

無邪気にはしゃいで、彼はステラから六角柱の魔具を受け取った。ステラはすかさず、自分の指示通りに動かすようにと、先走って操作しようとするアル少年を諫める。

アル少年がちゃんと上に杖の先を向けて構えたことを確認すると、彼に指示を出し始めた。

「じゃあまず、真ん中のダイヤルを回して」

「はい」

歯車が噛み合うような子気味いい音をたてて、ダイヤルは回る。軽い力で回されると、杖の先が発光し始めた。次の指示を出し、魔石の粒子を解放させる。魔方陣が形成され安定を見せると、上のダイヤルを回させる。風が杖の先を集ってきた。

「よし、こんなかん」

「わりいわりい、遅くなつた!! お、何してるんだ?」

丁度そこに、何処かに行っていたらしいラスティが戻ってきた。手に昼食と思しき袋をぶら下げて、ステラほどではないが勢い良く入ってくる。

そこにアル少年は反応して、後ろに振り返った。
ダイアルと共に。

「あ、師匠!」

軽い音を立てて、ダイアルが回る。本来回すべき方向とは間逆の方向に、大きく。

「あ!? あ、アルくん!! すず直ぐにダイアル戻して!!」

「ふえ?」

間の抜けた声と共に、アル少年が彼女の方向を振り返る。振り返った彼女は大いに慌てていて、その視線を斜め上に向けている。自分の視界の外から、吹き付ける風を、彼は感じ始めた。恐る恐る、見上げる。

「あ っ」

破裂音と風の轟音、緑の閃光、面の衝撃、それら諸々全てを一瞬にしてその身に感じながら、彼の意識はそこでブラックアウトした。

??
??

A： 爆発しました

Q：はい？

そこでこの質問に関する部分は終わっている

・ ・ ・ ・ ・

相当古い雑誌を、ベッドの上でラスティが広げていた。寝そべって頬杖をつき、アルクスを特集した記事について目を通していている。ふとアルクスの魔具のトラウマのところが目についたラスティは、隣で覗き込んでいるアーク（少年）に視線を向けた。それに応えるように、アークはラスティと視線を合わせる。

「なあアーク」

「はい」

「これって……あの時のことだよな？」

静かに、アークは首肯する。無言の返答に、なんともいえない空気が二人の間に流れる。

「これってさ……原因、俺かな？」

そんなこと無いですよ と、視線を再度記事に戻してアークは答えた。

「自由への逃走」それは彼女の黒歴史」

風が駆ける。

石造りの床を蹴る足音は軽く小刻みに、ひかれて行く風は髪を靡かせる。駆ける少女の視界の中では、景色は後方に早送りされていき、壁が迫ってくる。衝突の直前で、直角に曲がっていく。曲がり角の向こうに、緑の人影が消えていった。

その後方から間も置かずに聞こえてきた音は、力強く床を踏みしめる。布が激しくはためく音が、急速に近付いて、次の瞬間には曲がり角を曲がっていた。大きなその影は赤茶。

曲がり角を曲がった、彼、は、逃走する、彼女、の姿を捉える。

「待あてえ！！！！ポオラリスウ！！！！！！」

「来ないで下さい！！ 私はもう、文字を見たくないんです！！！」

アルバとポラリスだった。

????????????????????
????????????????????
?????

「ああ……………もう限界です……………」

夏の補習組になってしまった人たちが集まる教室。その一角でポラリスは疲労困憊の様子で俯いている。流石に机に突っ伏すような行為はしないようだ。

「だ、大丈夫、ポラリス？」

そんな彼女の隣、窓際の一番後ろの席を確保しているのはティアマツト。いつもと変わらない紅いコートの下に長袖、皮手袋という季節感の欠片も無い服装で、彼女は心配してポラリスに話しかけた。汗一つかかずに。

声をかけられたポラリスは、俯き加減の視線を彼女のほうに向ける。その彼女の髪と似たような色の碧眼は、双子の兄のゲルトとの数少ない共通点の一つだった。最も、今はそこに生気がこもっていない。

「ティアマツトさん……もう、いやです」

夏休みが始まって数日が経ち、その間彼女たちを含む数名の生徒……補修対象者は、終業式終了後も連日に渡って補習授業が課せられていた。勉強嫌いでそれなりに有名になりつつあるポラリスは、この連日の勉強漬けの毎日にストレスが限界に至ろうとしている。

彼女の隣で、そもそも補修期間中は部活動を禁止なのがあり得ない……？などと言っている分には、それは容易に感じる事が出来た。

「昼休みまで我慢すれば大丈夫だから、ね？」

「すみません……………」

昼休みになれば、ポラリスのストレス発散のためにティアマツトが付き合っ て自主稽古をすることになっていたので、そこまで行けばひとまずは大丈夫だと、ティアマツトはそう呼びかける。励まされたポラリスは、力なく頷いた。

平日とは違い、運動するつもり満々の格好をしているポラリスは、

文字を見るたびに、分からない問題を理解しようとするたびにストレスを溜めていく。

そしてそれは、唐突だった。

「ああ！！ もう限界です！！」

昼休み前の最後の授業が始まる直前だった。気のこもった声を出す割りにうつろな表情で、焦点の合わない視線で彼女は立ち上がる。隣のティアマットは、彼女の行動に驚いて軽く肩を震わせた。ゆっくりと斜め上を見上げる。

「えっと……………ポラリス？」

「もうげんかいです厭です否です嫌ですもう文字も見たくありませんん式なんて見たくありませんアルファベットなんて」

一息に立て続けに呪詛のように言葉を吐き出し始めるポラリス。そのただならぬ気配にティアマットは戸惑い始め、次第にそのクラスに集まっていた生徒たちの視線も集まりはじめる。

次の授業の教師の足音が聞こえてきたとき、それは爆発した。

「私は　　私は！！」

教室から逃げ出した。

????????????????????????????????

制止の声に耳を傾けることなく、駆けていく。誰かを呼ぶ声など置き去りに、音軽やかに疾走する。

開放　　そんな言葉が彼女の脳裏に浮かんでいた。体を動かすごとに、足りない酸素を補給していくたびに、気分が高揚していく感覚が彼女を襲う。後も先も考えることなく、彼女はただ勉強から遠ざかるためだけに駆け出した。

階段に、差し掛かる。

「ポラリス・エ・フィニエンス」

押し殺した声が、頭上からかかる。その声に引き止められて、ポラリスは一端足を止めた。階段を前にして、上に向かう階段のほうに視線を上げる。

赤褐色、赤茶のローブに身を包む長身の男性。鍛え上げられた肉体の持ち主が腕を組み、階段の上で彼女を見下ろしていた。少しばかり垂れた目が、妙に力強く感じられる。

「お前……何処に行くつもりだ？」

「くっ！？」

凄みの効いたその問いに、弾かれる様にしてポラリスは下に向かう階段に向かつて駆けた。同時にその教師？？アルバも床を蹴り追走を開始する。階段の段など度外視、双方ともに階段を跳躍することで省略した。軽い着地音の後に緑の風は駆け、少し遅れて重いう着地音、赤の暴風は走る。

体内の幻子^{魔力}に働きかけることにより結合を強められた筋肉組織は、風を切る体を力強く、だが軽く、前へ前へと押し出していく。景色は輪郭を引き伸ばされて後方に流されていく。

逃走するポラリスは、足の速さであれば学年どころか学院内でもトップクラスに位置する俊足の持ち主。彼女よりも速い足を持つ生徒は、学院ではソレを生業にする生徒、それも三年生にしか存在しない。部活の教師ですら、彼女の速度の前では鈍重と言わざるを得なくなる。

だが、アルバは違った。空気抵抗を受けやすいローブという格好でありながら、ポラリスに引き離されること無く追従する。地を踏みしめる音は力強いが、無駄な衝撃がそこにはこもっていない。一瞬彼女の頭に、彼が自分の所属する部活の先輩の親戚であるという情報が過ぎった。その先輩も俊足の持ち主であったと記憶している。

「待あてえ!!!!!! ポオラリスウ!!!!!!」

曲がり角を過ぎた直後、怒声が廊下に響き渡る。木造の教室棟に、その声は残響を残して響いていった。一瞬、ポラリスの体は強張る。

「来ないで下さい!!! 私はまだ、文字を見たくないんです!!!」

悲痛な声で叫び、振り切ろうとするポラリス。

断続的に見える人影が、過ぎ去っていく二色の風に驚き目と顔を動かしてその姿を追っていく。数秒とたたないうちに、それは角の向こうに消えていく。

「あれ? ポラ」

蒼い人影が何か声をかけようとしたが、抜き去って彼女は去っていく。

「ア バさん?」

追走する彼は、最後の方だけが耳に入る。だが彼に確認する暇など無い。

逃走と追走は続く。直進でアルバが踏脚で詰めようとするれば、それを感じ取るポラリスは踵を返して方向を変える。ポラリスが階下に逃げたならば、アルバは上の階からポラリスの目の前に直接飛び降りる。一進一退の速度の攻防が長きに渡って続いた。

「オレから逃げ切れると思うなあ……！」

「どうしてそんなに速いんですか!？」

アルバの怒声に、ポラリスは悲痛な叫びをあげる。一向に振り切ることに出来ない状況に、ポラリスは焦り始めていた。彼を撒く手段を、一心に構築しようとする。

だがそれ故に、彼女は気付くことが出来なかった。直進に差し掛かったところでアルバの右腕から異様な音が発せられたことに。

「まさか、こんなことで役に立つとはな……！」

アルバは自分の右腕、鉄の義手を一瞬だけ見下ろす。魔術的に接続された神経回路を確かめるように、ゆっくりとその手を握り締めた。

「L a f t (解ける)」

アルバの宣言と同時に、義手の肘関節のパーツの一部が開放される。むき出しになった基部のその隙間から、赤い光が漏れ始め、それは次第に強まっていった。

「対魔獣にも対人にも使えんと思っていたが……捕縛に、とはな……！」

その腕を大きく振りかぶる。体幹の捻り戻しとともに突き出して、声高に告げた。

「G e h e n（行け）！！ 飛べえ！！」

関節部から風を伴う赤い光が噴出し、その勢いをもって彼の右腕の上腕は高速に打ち出された。風を貫き、ポラリスへと迫る。

「え？」

その風切音に気付いたときには、もう全てが詰んでいた。回避しようも無いほどに迫る腕。アルバが自らの義手を射出したのだと気付いたときには、もう既にその腕は彼女の腕をしかと握り締めていた。

「はぐう！？！？！？！？！？！？」

こうして、彼女の逃走劇は幕を閉じることになる。

夏休みが終わった頃、この話が一年生どころか学院全体に広まるのに、さして時間は掛からなかった。

「特別ゲストは英雄」

「それにしても、結構人来てるよね」

昼食時、競技場の観客席の一角でステラとティアマツトは座っていた。強い日差しにあたりたくないというステラの確保した、影の出来る場所で二人は食事を取っている。

「そうだね、私も結構、意外だった」

ステラの言葉にティアマツトはうなずく。彼女たちは自分たちで作ってきた弁当を広げ、フォークを用いて食べながら、競技場の周辺に視線を向けた。

極々一部の人間からはコロッセオと渾名をつけられている競技場。非常に広い面積を持つそこは、普段授業で使用される際には広さが余っていると言えるほどののだが、今日に限っては丁度いい人口密度だった。昼食を早々に食べ終えた生徒たちや、今日のイベントのために招待された戦士や魔術師の、伊勢のいい声が響く。

「……研究者系の人たちも来てるんだ」

「あれ？ 気づかなかったの？」

ティアマツトが、競技場の片隅で錬金術師が講演をしているのを見てそう呟いた。それを聞いたステラは、いまさら気づいたのかと、少しばかり呆れ気味に言う。彼女の言葉に恥ずかしげに口元を尖らせたティアマツトは、彼女の顔を見てしまわないように周囲を見渡し続けた。

しばらくして、視界に明るい緑が飛び込む。

「あ、ポラリス」

自分たちのクラスの友人たちと共に昼食をとっているポラリスの姿だった。彼女特有の緑に輝く長い髪が、夏の日差しを受けて宝石光沢に似た光を放っている。あの一件があつてから少々気が落ち込んでいた様子の彼女であつたが、その皆と談笑する姿から、どうやら気分をそれなりに持ち直すことができているように見えた。

今までよりも髪留めがまとめる髪の毛の量が多くなりポニーテールになった彼女を、ステラもまた視界に捉える。その彼女らしい清楚な活発さが伺える表情を見て、安堵に似たため息をつく。

「あ、ホントだ。やっぱりあの子も今日参加してたんだ」

「うん、そうみたい。よかった」

二人並んでゆつくりと頷く。

喧騒が響くその表情をやわらげさせる二人の背後から、声をかけるものが居た。

「よう、二人とも」

彼女たちが振り向くと、そこに立っていたのは彼女たちの担任アルバ・アーキナム。振り返り、膝に弁当を乗せたままの姿勢で、二人は彼に対応した。高身長のを彼を見上げるために、首の角度が少しばかりきつくなる。

「あ、アルバ先生、こんにちは」

「せんせ〜こんにちは〜！ 先生も来てたんですか？」

「ああ、一応見回りみたいな感じでな」

普段と変わらない、どこと無くけだるそうな調子で受け答える彼女たちの担任教師。夏の日差し故か、いつも着込んでいるはずの赤茶のローブを脱いで脇に抱えていて、涼しげな格好をしていた。そんな彼は、夏の日差しをものともせず紅のコートを着込むティアマットに、訝しげな視線を一瞬だけ送る。

「それはそうと、ラストイハルトはどうした？ アイツなら来ると踏んでたんだが……」

その場に居ないラストイの姿を、視線を泳がせるだけで探すアルバ。そんな彼に、二人は今日はここに来ないという旨を伝える。それを聞いた彼は、少しばかり考え込んで首を傾げるも、すぐに首を上下させて頷いた。

「ああそうか、あのガキのお守りか。いや、アイツか？」

彼女たちとは違う方向に視線を向けて、アルバは独り言のように呟く。視線は僅かに上を向いて、視線は本棟に向かっていた。

彼の独り言に、彼女たちは不思議なことを聞いたという風に顔を見合わせた。そして再度、考え込む担任教師に視線を向けて声をかける。

「せんせ〜せんせ〜、せんせ〜の言うガキって誰のことですか？」

「……………は？」

思考の中から急浮上したアルバは、口を半開きに呆けた表情でステラの顔を見た。非常に珍しい彼のそんな表情に、つつい笑ってしまいそうになったステラだったが、すぐに真剣な表情に戻る。口元が引きつっているが。

「だってせんせー、ラストイは誰のお守りもしてないですよ？」

「多分、いつもみたいに、アークと二人で剣を振ってると思います」

それが当然であると、それが今日までの日常だったと、そう言っ
てのける二人。彼女たちの答えに、アルバはしばらくの間言葉を発
することが出来なかった。

「……わりい、忘れてくれ…なんでもない」

繭を潜めて、そう会話を切ろうとしたアルバだったが、ステラの
ほうは何か追求したげな視線を彼に送っていた。今現在の状況から
逃げ出すために、アルバは話題を変える。

「そついやお前ら、今日来る来賓連中の中で一番の有名人、知って
るか？」

悪戯つぼく口元を歪ませて笑顔を作るアルバが、彼女たちに問い
かける。あからさまな話題の変更に難色を表情で示すステラだった
が、ティアマツトのほうは食いついてきた。興味深そうに、弁当を
食べる手が止まってしまっている状態で、少しばかり身を乗り出す。
笑いを強めて、小さめの声で言う。

「お前らも知ってるはずだ。今は来てないが、午後から来ることにな
ってるやつでな………今回は特別ゲストで、‘弧虹の剣士’が

沸き起こる。アルバの周囲の生徒たちは、その声の方向にいつせいに振り向いた。

競技場の入り口のほうから入ってくる人影。やや暗い少しばかり癖のある金髪に、狼の目を思わせるアンバーの瞳、乳白色のハイネックに灰色のコート。手に握られるのは、やや曲がった鞘に入った細身の剣。

弧虹の剣士、戦乱の英雄、稀代の天才剣士
アルクス・レイ
ンズが満を持して登場した。

日も南中を過ぎていき、石造りの床は日差しを受けて熱を持つ。

その日の競技場では、その高気温以上に高い熱気に包まれていた。

競技場で最も目立つ中央。そこには中央を取り囲んで多くの生徒たちが人垣を作っていて、会場の大部分の視線を独り占めにしていく。招待された外部の人間すらも、その中央で行われているイベントに注目している。

中央では、二人の男性が向き合っていて、試合前の挨拶を交わしていた。

「二年のアクセル・アーキナムです！ 宜しくお願いします!!」

元気のいい声で相手に礼をするのは、学院の生徒のアクセル・アーキナム。愛用の槍を持つ手には少しばかり余分に力がこもり、姿勢を戻した彼の目は輝いている。

彼の眼前に立つのは、全体的に灰色の色の装束に身を包んだ金髪

の剣士。手にやや曲がった鞘入りの剣を持つ彼は、相手の礼に、少しばかり苦笑気味に礼を返す。

「もう知ってると思うけど　　アルクス・レインズ。アクセル君だね、こちらこそよろしく」

はにかんだ彼の挨拶に、一層周囲の歓声が強くなる。黄色い歓声が強いのにご愛嬌???周囲はアルクスかアクセルを応援する声が四方八方から飛び交う。これから行われるのは、英雄と名高いアルクスと生徒たちとの交流試合。いの一参加を表明したアクセルが、最初の試合相手だった。

挨拶が交わされたことを確認すると、審判役の教員が双方にルールの確認をする。

「使用可能魔術は補助の類までで、相手や物質界に干渉する魔術は禁止です。勝敗はこちらが有効打と認めるか、降参するかのどちらかを基本とします。よろしいですね」

「ああ」

「うん」

「ありがとうございます。それでは双方、ご自身の得物に緩衝境界を張って下さい」

指示に従って、アルクスが刀を鞘から抜き、アクセルが槍を構えて、双方共に刃に境界を張る。境界を張り終えた両者は、各々の構えを取る。その姿を確認して、審判は試合の合図をした。

「では、試合　　始め!!」

????????????????????????????????

「（アルクス・レインズ。虹弧の剣士。英雄。天才。そして、叔父のライバル）」

槍の穂先を構えながら、アクセルは心中で繰り返すようにしてキードを並べる。彼の心の中では、英雄たる彼を賞賛する言葉よりも、彼が叔父の好敵手であったという事実が強い輝きを放っていた。自然、槍を握る手が白くなる。

「（叔父から今年は凄いゲストが来るとは聞いてたが……まさかこの人だなんてな……やべえ、燃えてくる……）」

緊張気味の体とは裏腹に、彼の表情は抑えきれない喜色かにじみ出てくる。自分が憧れる槍の使い手、一族の歴史の中でも早熟かつ最高峰とまで言われたその人物、その全盛期の本人と対等に渡り合えたという相手と手合わせが出来るという事実が、アクセルを高揚させる。

そんな彼の表情に気づいてか、正面に立つアルクスは微笑まじげな顔で剣を構えた。細身でやや歪曲した片刃の剣。十数年間同じ得物を使い続けているという彼の剣は、その話が本当であるか疑わしく思えるほどに強い輝きを放っている。

「（あれ？ あの剣、ラスティの持つてる剣に似てないか？）」

自分の槍の穂先に緩衝結界を張りながら、アクセルはそんな疑問が頭に浮かんだ。細部に違いが見られるが、アルクスの握る剣とラスティの持つ剣は酷似している。むしろ剣の持つ存在の強さは、ラスティのものの方が強いのではないかと思えた。

だがそんなことは今考えることではないと、頭の中から疑問を振り払う。

「（まあどうでもいいさ、剣で本人の実力が決まるわけじゃないんだからな……）」

今重要なのは、英雄が手合わせをしてくれるということ、そこだけを念頭において、アクセルは槍を再度構えなおした。審判役の先生が、開始の合図を告げる。

「始め！！」

「ふっ　　！！」

合図と共に、アクセルは駆け出した。実力差は相当向こうが上だという以上、様子見の時間など必要なく、これは殺し合いではなく稽古に近いものなのだ。そう考えて彼は自分から攻撃を仕掛けた。穂先を水平に、目標に一直線に向ける。

対するアルクスは、彼の行動を予期していたのか、無表情に力なく剣を持つ腕を下ろしている。構え無き構え。そう呼ばれる有名な構えで、アルクスは迎え撃つ姿勢を見せていた。

「せい！！」

一直線に踏み込んで、一撃。アクセルの槍が心臓めがけて放たれる。二年生でありながら学院でトップクラスの槍の使い手であるアクセルの、最高速の刺突。

だがそれは、あまりにもあっけなく目標を失った。アルクスの体の脇に構えられた刃が、曲線を描いて槍の穂先を持ち上げる。円の上をすべるようにして、直線はベクトルを変更させられた。

直後、槍をそらした剣が軌道を曲げて、アクセルの右下から迫る。慌ててアクセルは、槍を横にして剣を防いだ。

軽い金属音と、予想以上に軽い衝撃。少しの力で弾き返せそうな一撃だったが、アクセルはそれを選ばずに即座に後方に飛び退いた。直後に、首筋に風を感じる。

「うっわ、はや!? (っーかいきなり急所狙いかよ!!!)」

「いい判断だね。流石に俺のことは知られてるかな?」

アルクスのカウンターに、肝を冷やすアクセル。アクセルのთვისの行動に賞賛を送るアルクス。

バランスを崩して着地したアクセルに、アルクスからの追撃は無い。彼はただ肅然と半眼に、一步一步と歩み寄る。ソレが一層、威圧感を醸し出す。

「(流石は英雄。余裕さがダンチだぜおい)」

見逃してもらったという感を拭えないままに、アクセルは槍を低く構える。腰を低く、重心を落として上体を捻る。その構えを見せたタイミングで、アルクスは歩みを止めた。‘来い’と、その視線が告げている。

「(そのお言葉に甘えさせてもらっぜ (おおおおお!!!)」

雄たけびを上げて、再度アクセルは踏み込んだ。

「英雄は誰に似る」

「うわゝ、凄いね」

中央にある人垣の外、観客席の最前列まで下りてきていたステラとティアマツト。彼女たちは眼前で繰り広げられているアルクスとアクセルの試合を見ていた。その試合の激しさに、ステラは感嘆の声を上げる。

一方のティアマツトは、無言でただひたすらにその試合を観察していた。

「あ、ここに居たんですか」

その二人に、後方から声をかけるものが居た。振り返ると、日差しで逆光で姿が見えにくく、二人は目を細める。だが彼女の特徴的な緑の髪の色から、声をかけてきたのがポラリスであることが分かった。

「貴女の髪の色はあまり無いので、探しやすかったです」

ティアマツトの隣に飛び降りたポラリスは、そう言ってティアマツトに微笑みかける。彼女の表情から、髪色が目立つのは自分のほうだと理解している様子が見て取れたため、ティアマツトは苦笑するだけで返事とした。ステラは彼女に軽く挨拶をすると、すぐに視線を試合に向けてしまう。

「ポラリス……ティギリスは？」

試合の様子を見ながら、ティアマツトはポラリスに問う。隣の彼女からの返答には、しばらくの間があつて、ゆっくりと腕を伸ばしてある方向を指差した。

「あそこに居ます」

「あ????うん…やっぱ、そうだよね…」

ポラリスの指差す方向、中央の人垣の輪の中に、試合を見????アクセルを応援するティグリスの姿があつた。熱心に応援する彼女の姿に、二人は自然と無言になる。少し離れた場所でアルバ先生が腕を組み無言で観戦しているのも見えた。彼なりに心配しているのだろう、眉をひそめ唇を強めに結んでいる。

しばらくして、彼女たちの視線は試合へと移つていった。学院内でも屈指の実力者のアクセルだが、アルクスにはまるで歯が立たないようで、有効打どころか掠らせてさえもらえない。全ての攻撃が、彼の剣によつていなされていく。

「ティアマツトさん…貴女は、どう思います?」

その試合の様子を見て、唐突に、ポラリスは小さな声でティアマツトに質問した。指示語の無い質問だったが、その言葉を聞いた彼女の視線は、自然とアルクスへと向けられる。彼女が此処ティアマツトの隣に来た時点で、これを訊かれる事を予想していた。

彼の描く剣閃は弧を描き、直線を滑らせてその動きをそらす。彼女は剣の軌道、体の使い方、理念に見覚えがあるように感じられた。

「……似てると、思う……ラスティに。でもよく分からない。ラスティはカウンターなんて殆どしないから……」

彼女はそう呟く。その言葉にポラリスもまた頷き、彼女もまたティアマツトと同じ感想を抱いたと言う。二人は一度視線を交し合ってから、もっとよく見ようとアルクスに注目し　　そこでステラの声が集中を遮った。

「ああ！！！！」

耳元で発せられた突然の大声に、ティアマツトは思わず仰け反ってしまう。その拍子にポラリスに頭をぶつけてしまいそうになるが、耳の良い彼女はティアマツト以上に驚き飛び退くことで事なきを得た。

少しばかり口を尖らせてステラを睨んだティアマツト。だが当の本人は罪悪感など無い様子で、興奮気味に彼女に話しかける。

「ティアマツトちゃんティアマツトちゃん！！　思い出した！！！」

試合の方向に視線を向けながら、小さく跳躍して喜ぶステラ。その様子に拍子抜けした二人は、興味半分に彼女に何を思い出したのか訊いた。待つてましたとばかりに、彼女は自慢げに言う。

「ほら、わたし前ラスティくんの剣どこかで見たことあるって言ったでしょ？　それアルクスさんの剣だったんだよ！！！」

「！！！！！！？」

ステラの言葉に驚いた二人は、試合の方に同時に顔を向ける。高速で振るわれ続けるため詳細は分からなかったが、よく見てみると確かに、その形状はラスティの持つ剣と酷似している様に見えた。

「ラスティさんの剣と……同じ？」

「うっん……少し違う。多分向こうの方が曲がり方が大きい。だから少しだけ……ラスティと動きが違う」

ポラリスの言葉を、ティアマツトが部分否定する。よく見なければ分からないようなそんな情報も、視力のいいティアマツトならではのもの??？なのだが、ステラはそれを少し別な方向に解釈する。

「おゝ…さっすがティアマツトちゃん！ ラスティくんのことよく見てるねー！」

「!？ な……すステラなんでそうなるの!？」

突然の言葉に慌て、ステラに向かって説得力の無い怒り顔で言うティアマツト。そんな彼女をステラはからかい、ポラリスはなだめようとする。

「フッフッフッフ…ダメだよ…ティアマツトちゃん。もっと素直にならないとね…ね？ ポラリスさん！」

「そ、そこで私に振るのですか!？」

ステラの突然の振りに、今度はポラリスが動揺を見せる。ティアマツトよりも大分分かりやすい 赤面するという手段を以って動揺を示した彼女。

その様子に、ステラははてと首を傾げる。そしてすぐに、獲物を見つけたと言わんばかりの笑みを浮かべ、ティアマツトの後ろから回り込んでポラリスを背後から確保した。その速度に、速さに自身のあった筈のポラリスは反応できない。

耳元で小さな声で、ティアマツトに聞こえないように呟いた。

「あれあれ？　もしかしてポラリスちゃんも……………ラスティク
」

言い終わる前に、ポラリスは瞬間沸騰した。

「わわ！？」

「ぼ、ポラリス！？」

突然自分の隣で顔を真っ赤に染めたポラリスに、ティアマツトは驚く。彼女が赤面した原因を作り出した本人でさえもその反応は予想外だったようで、慌てて彼女から飛び退いた。

赤面し震えるポラリスを見て、何を言ったのかと視線を投げかけてステラに問うティアマツト。ステラのほうは人差し指で頬を掻いて、決まり悪そうに誤魔化し笑いをするだけだった。

「いやあ、その…ね？　ちよつと
」

そこに突然、今までよりも大きな歓声^{オーバーヒート}が上がる。思考沸騰状態のポラリスをよそに、二人は驚いて試合のほうに視線を向けた。

「あ……………終わっちゃった……………」

その先には、アクセルの胸に刃を添えて対峙しているアルクスの姿があった。

「その理由は知る由もなく」

「なんで……こうなったんだろっ……」

自らの得物、ハンドアンドハーフソード片手半剣の十字兵装を正眼に構え、ティアマツトは灰色の装束の青年と対峙する。

周囲の熱気はなりを潜めて静まり返り、二人の様子を見ている。小さな声で何事かを呟いているのが聞こえた。

対峙する男性　アルクス・レイنزは、刀を構え、彼女を見据える。目が合った時に僅かに、その眼を見開いた。

「ティアマツトさん、だね？」

????????????????????????????????????

「あああゝゝ!!! ……クツソゝゝ!!!」

生徒達の歓声に見送られて輪の外に退場したアクセルは、しばらく離れたところで頭を抱えて悔しがり始めた。言葉の割には清々しそうな表情をしているが、やはり悔しいものは悔しいのだろう。そこにアルバが溜め息をつきつつ歩み寄る。更に後方からは、小走りに駆け寄る足音が聞こえた。

「阿呆。負けて当たり前だろうが」

「でもさ、もうちょっとは……粘りたかったんだよ。………つつかアルクスさんで、ホント叔父さんが言ってた通りだったぜ………ずっと冗

談だと…思ってたんだけどなあ…：…ありえないだろアレ　　突き
より疾い斬撃とか」

前かがみ気味になり息を切らしながら、身にしみて感じた、英雄
の強さに落ち込むアクセル。アルバは方眉を吊り上げて、アルク
スが異様だということには同意を示した。

そんな彼の目の前にタオルと水筒が差し出される。顔を上げて横
を向くと、そこには日に焼けた肌と茶髪の少女の、優しい笑顔が
あった。

「お疲れアクセル。ほら、タオルと水」

「おう、サンキュー、ティグ」

黄のタンクトップを着込んだその少女　　ティグリスから、ア
クセルは笑顔を返しつつ、先ずは水筒を受け取る。その光景を、ア
ルバがさも面白いものを見たという風な表情で観察していた。少し
して、ティグリスはその事実気付いて、笑顔を少しばかり引きつ
らせる。

「ん？ どうし　　」

「なんでもない！」

アクセルが問おうとする。するとティグリスは、聞かないでくれ
と言わんばかりに少し過剰に反応し、視界を塞ぐように彼の顔面に
タオルを投げ当てる。それが妙に優しい衝撃だったのは彼女なりに
何か考えてのことだったのだろうか　　何処かに駆けて行ってし
まった。

数名の生徒が、彼女を囁し立てたせいで、ついに彼女は何処かに

姿を消してしまふ。顔面にかかったタオルを除けながら、何処か人の居ない所で悶えるんだろつなど、そんなことをアクセルは考えた。

「ほう……いい彼女じゃないか。お前にはもつたいない位だぞ？」

「だろ？ ……つつか、ちよつとばかり残念だぜ。折角ティグが人前でも優しいと思っただんだがな〜これが」

アルバのやや茶化すような物言いに、タオルで汗を拭きながらアクセルは笑顔でそう語る。続いたアクセルの、叔父さんは早く結婚したほうがいいぜという言葉に、アルバは阿呆と短く返した。

中央ではもう既に次の挑戦者との試合が始まっており、疲労の様子を見せないアルクスが挑戦者を 相手に合わせた手加減をしつつ???下していくのを、二人は並んで見始めた。そこに、三人ほどの足音が近寄る。

「お疲れ様です、アクセル先輩……あら？ 先輩、ティグはどうしたのですか？」

ポラリスに続いて、ティアマツト、ステラと挨拶をする。勿論居るだろうと思っていたティグリスの姿が見えないことに首をかしげたポラリスは、アクセルに彼女の行方を訊いた。

笑うアルバの隣で、苦笑してアクセルは答える。

「いやあそれがさ。人前で優しいな〜って思ってたらさ、急に恥ずかしがって消えた」

「……そうですか…なんと言いますか、彼女らしいですね」

本人が居ない場所か二人つきり（だと思っていれば）素直なのに

と、そうポラリスは一人ごちる。その言葉に、ティアマツトは納得したように少しだけ口をあけて頷き、ステラは首を傾げつつもすぐに頷いた。

そこで再度、アクセルの時ほどではないが大きな歓声が上がる。視線を向けていると、やはりアルクスが挑戦者を下したところのようで、どういう訳か相手の股間から切り上げようとする形で動きが止まっていた。

「あ、そういえばセンパイってさっきの試合どんな感じだったんですか？ わたし達途中から見逃しちゃってたんですよ〜」

その光景を見て、用件を思い出したステラはアクセルに問う。どうだった　　そう訊かれてアクセルは少し考え込んでから語った。

「あゝ……なんつつつか歯が立たないつつつか…みんな逸らされんだよ。オマケに攻撃に転じられるとまるで防ぎようがねえ

まあ最初のうちは防げるギリギリのラインを維持してくれてるっばいんだけどさ、そのうちどんどん早くなって来るんだよ。そして最終的には　　」

ああなる訳だ、そう言っただけでアクセルは中央の方を指差す。そこでは丁度、挑戦者にアルクスが剣を突きつけているところだった。

次の挑戦者が前に歩み出るのを見ながら、アルバはティアマツトとポラリスに向かっていった。

「折角アイツが来てるんだ、お前等も行ってくればいいんじゃないか？」

「え？ いや私h???」

「先生！ 私達もやっても大丈夫なんですか！？」

アルバの言葉に急に目を輝かせ始めたポラリスは、何処からとも無く槍を持ち出して、彼に歩み寄る。その様子の変貌具合に少々気圧されたアルバだったが、すぐに持ち直して頷いた。

「お、おう……あの調子じゃアルクスは頼まれた分皆受けるだろうからな……ほら、アツチに生徒を並ばせてる先生が居るだろ？ アレが（多分）挑戦者を集めてるはずだから、言ってくりゃいい」

「！！ はい！！」

元気に返事をした彼女は、いち早く並ぼうと走り出す。
ティアマットの手を掴んで。

「え？ え？ ぼらりす？」

「？ どうしたのですか、ティアマットさん。早く行かなければ順番が遠のいてしまいますよ？」

ティアマットが何故自分に対して疑問を持った風な反応をするのか理解できないポラリスは、全くもって見当違いなことを言う。そんな彼女の、妙に純朴な表情に言葉が詰まったティアマットは、顔を振り向かせ視線でステラに援護を呼びかけようとする。

ティアマットの視線に気付いた彼女は、微笑んだ。

「がんばってねティアマットちゃん！！ 応援してるよ！！」

彼女はこの状況下で断る術を知らなかった。

????????????????

「なんで……こうなったんだろう……はあ……」

そして今、アルクスと戦う番が自分に回ってきた。周囲の人の多さに視線を泳がせる。大衆の前に出るということには、彼女なりに抵抗が強いのか、前に出る彼女の足は何処と無くたどたどしい。だが歩いていくに従って、その表情は薄れて別のものに変わっていく。彼女も彼女なりに、本心では腕を試してみたいという気持ちがあるのだろう。

歩みを止めて得物の片手半剣を正眼に構え、対峙するアルクスに切っ先を合わせた。やや強張るものの、その構えには甘さを作らない。

周囲の様子は今までとはやや違った様子を見せており、先ほどに比べて歓声の音が小さくなる。声援を送る生徒達は大半が一年生や彼女の事を知る生徒であり、そうでない生徒達は小さな声で囁きあう。

その声は嫌でも聞こえた。

「……嫌い……」

その声を頭から振り払って、彼女は表情を凍らせ、アルクスと向き合う。彼はゆっくりと刀を下ろし、構え、そして彼女と視線を交差させる。一瞬、目を見開いた。

「ティアマツトさん、だね?」

「?……はい」

自分の名前を知っていたことに一瞬疑問を浮かべるティアマット。直後彼女は二度目の雑念を振り払い、すぐに気を取り直して彼と向き合う。意識の中で、音は遠のいていった。

挨拶を交わした後の始めの合図も、何処か遠くで聞こえる。

その合図と共に、彼女は今までの生徒達がしてきたように、彼に攻撃を仕掛ける???事をしなかった。

「……………」

「……………」

切っ先と自身の視線の線の延長線上に、アルクスの体の中心を置き、一歩一歩、ゆっくりと歩み寄る。今までは違う戦闘の光景に、今まで彼女を応援していた生徒達も静まり返る。彼女が石の床を歩む音が、輪の外側の観客にまで聞こえた。

ある程度の距離、一足一刀の範囲まで距離を狭めると、ティアマットはその歩みを止める。剣を握る手の間隔を広くして、柄の根元と先を持つようにして剣を持ち直した。

そして更に、一歩踏み込む。

「……………」

「…成る程ね、そう来るか」

唇だけを動かしたアルクスのその言葉を、ティアマットだけが読み取る。周囲には、双方が無言で睨み合っているようにしか見えな

い。
一足一刀の間合いから一歩踏み込んだ状態で、彼女はそれ以上動こうとしない。ただ静かに剣を構え、視線に意識を総動員して、彼

の些細な一挙動をも見逃すまいと凝視する。

自分から仕掛けるつもりは無いという彼女の意思に、アルクスは初撃を仕掛けることで応える。

「!」

踏み込む足と迫る刃。自身の左下から迫る剣は彼女の想定していたものより遥かに早く。だが予想通りの方向から切り込んでくる。

僅かな遅れと共に、剣を横に寝かせて半歩、踏み込んだ。軽い金属音と共に、鐔と刀身の間刃が衝突する。十字兵装特有とも言える大きな鐔に、刃は阻まれた。

だがアルクスの刃はやはり、衝突した部位を撫でるように、刃を擦りつける様にして通過していく。

「…っつ!」

即座に翻った剣が、反対側側面から彼女に切りかかって来る。その速度に輪郭を霞ませる刃を、だがティアマツトは僅かに反応を遅らせながらも防ぎきる。だが防いでいるだけで、そこから先に行くにはまだ足りない。ただラスティとの稽古の記憶を頼りに他の生徒より少しだけなれている程度では、及ばない。

「っつ…見え…ない、だけで…こんなに…違う…」

次々に彼女の上下左右から刃が迫り来る。予告の無い高速の剣閃に、彼女は全精力をつぎ込んで剣を合わせ続け、懸命にカウンター機を窺う。アルクスはただ正面から剣を、舞踏のように振るい続けるだけ。

振るった太刀を三十数えたところで、アルクスは剣撃の中で彼女にだけ聞こえるように呟いた。

「君は自分の動体視力に頼りすぎてる。俺の剣を追うんじゃなくて、もう少し体の動作を追ってごらん？」

「え？」

そう言ったアルクスは、彼女の剣に自分の剣を強く打ち付けると、地を蹴って後方に飛び退いた。僅かなその間の中で、ティアマットは語られた言葉を頭の中で反芻する。直後、再度アルクスはティアマットに斬りかかった。

「!?!?」

度重なる蓮華に押し込まれかかるティアマット。そんな中で彼女は、その剣の切先を目で必死に追いながら、次第にその視界を広げていく。狭まっていた景色が、一撃毎に鮮明になる。今まで見えていなかったものが見えてくる。

少し意識を外に向けるだけで、見え方がここまで違うのかと、ティアマットは驚愕さえして感じた。

切っ先ではない。その動きの基点となる腕、更にその根たる肩・胸・足???それらの動作から動きを読み取るうとする。

「分かるかな？俺の動き、予測しやすくなっただろ？」

アルクスの剣撃に対する遅れが短くなったところで、アルクスが柔らかな笑顔で問ってくる。その言葉に対しティアマットは、剣戟ごと叩き潰すような斬撃で答えた。アルクスはそれを飛び退いてかわす。

「ふう」

大きく一息ついたティアマット。軽く瞳を半眼にし、そして再度見開いた。その視線の先ではアルクスはただゆるりと佇んでいる。そしてそこで、彼女は気付いた。周囲の生徒達からの歓声がいつの間にか戻ってきていて、彼女達の試合に声援を送っていたことに。その声援の音量、感じ取れる熱気、地の振動を、ただ無心にむしろ放心の状態で受け入れる。

「人の声援を受けるって、初めてだったかな？ ティアマットさん」

「あ」

周囲の声援に軽く呆けていた彼女に、少し顔を綻ばせながら呼びかけるアルクス。試合の最中だということとをそこで思い出したティアマットは、申し訳ないという気持ちで剣を構えなおす。そんな彼女に、アルクスは優しそうな人柄が垣間見えるような表情で、微笑んだ。

……少しだけ、呼ばれた名前イントネーションに既視感のようなものを感じた。

「行くよ？」

構えなおしたティアマットの姿を認めると、アルクスは今までも速度を上げて飛び出してくる。振り払われる剣に、刀身の腹を合わせた。

「アドバイスは一人一つ。ここからは速度を上げるよ？」

その言葉と共に、体感的に倍になったのではないかと思える速度で、アルクスは剣を振るい始める。取り回しで劣るティアマットは

反撃を許されず、かといって弾き返すことも出来ない。ソレが致命的な隙になってしまいかねないから。

だがその合間に、十に一つ見つけられるかどうかの割合で、剣撃ごと叩き潰すというタイミングを見出すティアマット。縦に振り下ろされる剣に、アルクスは少しだけ肝を冷やしつつ後退する。そして再度斬りかかる。

既に斬りあつた時間は、現状では最長。ただ防御一辺倒で耐えているだけにしか見えないともいえないが、だが他の生徒ではソレすらも許されない。

守りという点だけにおいては、見習い騎士のレベルを超えていたティアマットは、その剣撃をどうにかして耐え凌ぐ。一撃を入れようと、力任せに剣ごと叩き潰すように剣を振るうが、どうしてもそれでは彼を捉えることが出来ない。

「つ　え　？」

そして、彼女の防御は唐突に崩された。

少しずつ少しずつ、速度を上げて斬撃を放っていたアルクスは、唐突に彼女に対し剣撃を加えないというテンポを生み出す。その本来であればありえる筈の無い、互いの間合いの中で攻撃を加えないという行動。それに、ティアマットは次に来ると予想されていた剣を防ぐために出していた剣を泳がせてしまう。

致命的な隙だった。直前に叩き込んだ方向と全く同じ方向から、アルクスは彼女の首筋に向けて剣を振るい、肌に触れる直前で止めた。

「少しだけサービス　かな？　ティアマットさんは、テンポに慣れすぎないようにした方がいいよ」

負け方も、どこかラスティと初めて試合した時のようだった。

????????????????????

終了の挨拶を交わし、礼を言い、彼女は人垣の輪から退場していった。過ぎていく人垣の中から、生徒達が口々に彼女に声をかける。敗北ではあったものの、今までの生徒達の中で最も長い時間彼の攻撃に耐え、尚且つ後半では少ないながらもカウンターすら試みてみせた彼女の姿に、皆は感動していた。

「すげえぞルビーアイ！」

「ティアマツトさまカツコイイですわ!!」

「あのバカセルを超えたじゃん!!」

「流石ウチのクラスの騎士様だぜ！墮嚙相手に耐えたのは伊達じゃねえな！」

中には彼女の小さな背を叩いてその健闘をたたえる言葉をかける生徒も居て、気恥ずかしさに彼女は自然と頬を少しばかり紅潮させる。だが、悪いような気はせず、むしろ出てよかったと、そう思えるようになっていた。

並び順でティアマツトの次になっていたポラリスは、どこか困ったような表情で、それでも微笑んで彼女の健闘を称えた。通り過ぎる前に、溜め息をついて言う。

「これなら、私はティアマツトさんの前に挑戦しておいた方が良かったかもしれないね……」

「えっと………頑張つてね？」

ティアマツトの試合開始前とは打って変わって、最初の時に匹敵

するような熱気に包まれた中に、ポラリスは歩いていった。

彼女の背を見送って、ようやくティアマットは人垣の外にたどり着く。気が付くとそこには外周の観客用に即席の足場が組みあがっていた。上を見上げていると、彼女の前方から駆け足が聞こえてくる。

「ティ〜〜アマットちゃ〜〜ん!!」

「? ステ はあう!？」

感動で駆け寄ってきたステラが襲　抱きついて、その感動を早口に告げる。それにつられてか、彼女の周りにはクラスメイトを中心に小さく人の輪が出来上がっていた。口々に彼女を褒め称える声がかけられる。

いきなりの抱擁に戸惑いつつも解放されたティアマットは、少しばかり恥ずかしげに笑った後、小さめの声で答えた。

「ありがとう」

その日最終的には、耐え抜いた時間においてティアマットを超えたものは居なかったらしい。

「ツララの橋渡し」

それは、夏休みに入る少し前の日のことだった。義手を失ってしばらくの間片腕での生活を余儀なくされていたアルバは、学院本棟の第三階層にある職員室???という名の仕事用個室で仕事をしていた。

学院長室程ではないが、かなり広い大理石造りの部屋は、石の乳白色の色があいまって柔らかな印象を受ける。中央奥に据えられたデスクには、それなりの量の書類たちが積み上げられており、アルバは片腕でそれらに署名を記載していた。利き腕ではない左で文字を書くことに、少しばかり慣れてしまったなど、妙な感慨に自嘲的に笑みを浮かべる。

そこで、何者かが戸を叩く。規則正しく三回、少しあけて二回この学院に雇われているものが使う合図だった。たまにどこかでコレを聞いた生徒が真似をすることがあるが、それをするとう教師に説教を食らうことになる。

「ん？　なんだ？」

今の時間帯に、自分に用事のある者が思い浮かばなかったアルバは、扉の向こうに声をかける。少しの間があつてから、答えが返ってきた。

「アルバ先生、お客様です。頼まれていたものを届けに来たということで、女性の教会騎士の方がお見えになっています」

「ん？　ああ、そういうことか。分かった、通してくれ」

アルバがその人物を通してくれということを告げると、しばらく待ってゆつくりと扉が開いた。来客をもてなすための庶務職員が、開いた扉からその女性を招き入れる。それなりに大きな箱を抱えた女性が、入ってきた。入室を確認すると、その職員は一礼して部屋を出る。

長く腰より下にまで伸びたブロンド髪を三つ編みに結び、引き締まった顔のラインと濃い目の蒼の眼が力強さを感じさせる。女性にしては大きい上背に引き締まった肉体は、濃紺のズボンと白色のシャツ、ベストに包まれていた。

職員が居なくなつて扉が閉まると、アルバはその女性に声をかける。

「久しぶりだな、ステイリア。妹さんは元気にしてるか？」

「アルバも久しぶり。あの子は元気にしてるよ、おかげさまでね」

????????????????????

アルバの仕事部屋の中にある来客用のテーブルに、アルバとステイリアは向かい合つて腰を降ろしている。木製の机の上、二人の間には、やや細長い形状の箱が置かれていた。

「わざわざ直接持つてこなくてもいいだろうに、お前の家はここから近い訳じゃないだろう？」

「いいいいの、どうせあたしもこっちの近くに仕事があったんだからね。ついでにアンタの顔も見ておきたかつたし???教師始めてから会つてなかつたからね」

アルバのやや呆れたような口調に、ステイリアはまるで気にしな

いという風に返す。その言葉に短くそうかよと答えたアルバは、机に置かれた箱を見る。彼の目の前で、ステイリアはその箱のふたを開けた。その中には二本の右腕が鎮座していた。

「注文どおり、スペアは二つ作ったってさ。前よりも擬似神経の質が上がったって言うてたけど……ま、つけて確かめてみて頂戴。あと、新機能？つけたってさ」

「ああ……（ん？ 新機能？）」

ステイリアに促されるままに、アルバはその義手を手に取り、自らのローブの右肩をめくりそこにある結合部に義手をはめ込む。鈍い金属音と共に義手ははめられ、仕込まれていた術式が神経の結合を始めた。

義手が体に馴染む間隔に神経を澄ませるアルバ。目を半眼に開ける彼に対して、ステイリアは少し表情を暗くする。

彼の右腕を見つめながら、長い沈黙の後、彼女はアルバに問うた。

「……………墮嚙と、殺りあつたんだって？」

「……………ああ」

ステイリアの問いに、短く肯定を伝えるアルバ。その返事を聞いて、彼女は表情を険しくする。

黒光りする掌をゆっくりと握り、開きを繰り返しながら、アルバはそんな彼女に声をかけた。

「誰も死んじやいねえよ。けが人は居たがな」

「????こつちは大分逝つちまつたんだ。若い子が食事中の墮嚙に

手を出しちゃってね……」

そこまで言つてステイリアは言葉を切る。視線を落としかける彼女に、他人を若いといえるぐらい年取っちゃいねえだろうかと、そう彼は声をかけた。それをつけて、自嘲的に微笑んで肯定する。

「阿呆。あまり思いつめるな。妹さんが生きてただけでも幸いだろ
うが」

「はは……まあそうなんだけどね」

この話はこれで終わりだと言う様な彼の口調に、少しばかり恥ずかしげに答えるステイリア。

少しばかり淀んでしまった場の空気をどうにかしようと、アルバが話題を探している時だった。ステイリアが、確かめるように話しかける。

「……………そういえばアルバ。少しだけ耳に挟んだんだけどね？
あの墮嚙オチガミを殺つたのはこの生徒？？それも一年生だつて聞いた
んだけど…本当なのかい？」

「……………そうだ」

本来であればありえる筈など無いと一蹴されるはずの情報を、ステイリアは何故か確信を持った様子でアルバに問う。彼女の質問に、目を大きく見開いたものの、彼は特にその疑問を否定することなく肯定した。

ステイリアの表情が驚愕に染まりつつも、どこか納得の色も帯びる。

「やっぱりね……表向きにはココの教員たちが討伐したことになるんだけど　その情報の中で極々一部に出回ってた、学院の生徒が討伐した、ってのがあってね……変だとは思ってたんだけど……まさかね」

「おいおい、そこはオレがやったって思わなかったのか？」

ステイリアの物言いに、アルバが少しばかり茶化すような口調で言う。そんな彼にステイリアは、少しばかり呆れた語調で返した。

「あんだね……槍持ってない上に義手ぶっ壊した人間が倒したってね、誰が思う？　そもそもこっちは時間割の情報も入ってるんだ、どんな教師がその場に居たかは分かってるんだよ？」

「……まあ、無えわな」

観念したアルバが、手を上げて大仰なりアクションをとる。元々彼は白を切っていた訳ではないので、その行動に意味は無いのだが、やらずには居られなかったようだ。

そして彼の言葉について、ステイリアが少々急いた様子で、アルバに質問をする。膝にひじをつけて少しばかり身を乗り出した。

「それでねアルバ、ここからがあたしがココに来た一番の理由になるんだけど……その生徒は、どうやってあの頭無しヘッドレスを殺ったんだい？」

「……………何故それを訊く？」

ステイリアの質問に、やや長い間があったから、アルバは逆に問うた。問い詰めたそうな様子のステイリアだったが、それを堪えて

理由を話す。

「あたしが、いや、教会の騎士全般に言えることだと思うんだけど、あたし達って攻撃に魔術を使うだろ？　そもそもアレの基本の対抗手段は、戦士たちの足止めに魔術師の攻撃魔術だった。だけどまたあんな神秘層つきの固体が出てきたら、現状の騎士じゃ対抗できない。あたしでも単独で足止めは出来ると思う……でも討伐までは出来ないんだよ。だから生徒がどんな方法で倒したのか気になってね」

だって生徒が出来るんなら、あたし達騎士も真似できそうでしょう？　　そう最後に続けてステイリアは言った。微笑んで言うものの、その表情はどことなく暗さを感じさせる。騎士としての彼女は、何を思っているのか、アルバには想像は出来なかった。きつと言われていても理解は出来なかっただろう。

アルバは彼女の言葉を受けて、腕を組んで考え込んだ。覗き込むようにして彼の顔を見るステイリアに。静かに語る。

「……まず始めに言うておく。これは多分漏れ出すことすらしていない情報だ。教えるのは、お前は友人であり、アルナには世話になった？　なっているからだ。だから絶対、公開するな」

強い語調、低く唸る声で、アルバは言う。神妙な顔つきで、ステイリアはうなずいた。

「そしてだ、だがこれは参考にならん」

「？　なんでだいアルバ」

参考にならない。騎士であっても真似は出来ない。そんな彼の発言に、ステイリアは顔をしかめてアルバに問う。大きくため息をつ

いた彼は、小さく一単語、告げた。

「……アロindaイト独り護る者」

「な……闇の魔術！？！？！？！？」

血相を変え表情を青白くさせ、ステイリアは驚いて席を立ち上がる。信じられないという顔をする彼女に、手をかざしてアルバは着席を促した、放心状態で、ステイリアは席に着く。

「そんな、なんで闇の魔術師がココに居る。どうしてここで普通に暮らして……いや、そもそもどうして人を」

「阿呆、落ち着けステイリア」

うわごとの様につぶやき始めた彼女を、アルバは声をかけて制止させる。視線の焦点をアルバにあわせたステイリアは、少しばかり恥ずかしげにうつむいた。そんな彼女に、声をかける。

「まあ驚くのも無理は無いよな。オレも最初は魂消たまけたさ。だが、問題は無い、その生徒はただソレを使えるだけの普通の生徒だよ、普通のな」

普通　　そんな言葉を二度繰り返して、アルバは言うて聞かせ
る。顔を上げたステイリアは、彼の言葉に納得したようにうなずいてみせ、姿勢を楽なものに戻した。視線を少しばかり上にあげて、柔らかに語る。

「はあ……アロindaイト聖剣の対の魔術か……確かにそれなら、あたし達じゃま

ねできないね。下手すると異端審問の連中に消されかねないもの……」

また考え直しかと、どこか清々しい表情で、ステイリアは背伸びをして言う。他のやつには絶対に言うなと、アルバはそんな彼女に念を押して言った。苦笑して、彼女は了承する。一連のやり取りの中で、アルバの表情は彼女に気づかれない範囲で険しいものだった。少しして、この話題はここで終わりだと、つながってきた義手の感覚を確かめながらアルバは言った。頷く彼女に対し、思い出したように顔を上げて言う。

「そつえば最近話題になってたな……妹さん、今までは導師の連中で唯一使い魔無しの魔術師だったが、ようやく使い魔持ったんだつてな」

「ん？ あ、そうそう。あの子もようやく使い魔もつてね、前衛役が出来た〜って、今は絶賛試合受付中なの。一人目をボコボコにしたおかげで誰も申し込んでこないんだけどね」

話題の変換に、ステイリアは表情をほころばせて受け答えた。その笑顔に、アルバも同調して少しばかり笑う。後に彼が詳しく調べたときには、その一人目の怪我の具合を見てそれどころではなくなつたのだが。

妹との仲がいいことで知られている姉は、彼女に関する話題で元気な笑顔を取り戻す。

「その使い魔の子がね、人間みたい……うっん、人間なの」

「ほう……人の使い魔、か」

「あら、あまり驚かないんだ？」

もう少し驚いてくれるかと思っていたステイリアは、アルバのやけに落ち着いた様子に意外そうにする。そんな彼女に対し少し考え込んでから、自分のクラスにはかなり人間っぽい精霊を使い魔にしている生徒が居るから、慣れているんだらうと、そうアルバは受け答えた。首をかしげるステイリアだったが、直後にやや安心したような表情になる。

「でも、もしそうならきつとここの生徒もそんな光景には慣れてるんでしょうね、安心安心」

「ん？ おいステイリア。安心してどうということだ？」

ステイリアの発言に、意味が分からないという風に首を傾げ、問うアルバ。そんな彼の表情を見て、知らないのかと彼に問う。知らない、彼は答える。

「あれ、アルベリオスさんから聞いてない？」

ステイリアは、アルバにそういつて再度本当に知らないかを問う。再度知らないと答えたアルバ、そこでステイリアは今度こそ驚かせようという表情を、浮かばせる。

そうでもないことなのだろうと高を括るアルバは、頬杖をついて彼女の言葉を待つ。ステイリアが、‘安心’の言葉の元となる事情を、告げた。

「今年のココの学院祭、特別ゲストにアルナが呼ばれたんだよっ。」

「……………なんだとお！？！？！？！？」

アルバの驚愕の叫びが、階下にまで伝わる勢いで、響き渡った。

登場人物

名前：Lastiehalt・Xeen（ラストイハルト・ジーン）

身長：183?

体重：70kg

髪色：黒

瞳色：黒

名前の意味：????

トレードカラー：空色・黒

特技：????

好きな物：御飯・乳製品・ライス

嫌いなもの：魚以外の魚介類・多くの果物

趣味：音楽鑑賞・運動・読書

苦手なこと：運動

得意科目：式学・詠語学

「どんな人？」

本編の主人公。日本人。アル少年を弟子に剣を教えるという、当初の予定とは全く違う夏休みを送ることになった。師匠と呼ばれるのは嬉しかったようだが。

この世界の人間ではないが故の弊害から、剣士というよりも魔術士でなければならなかったが、それでも憧れたからと無茶を言っただけで訓練を重ねる。初見の相手には滅法弱い。ただ、性質や習性を熟知している。既存の魔物や魔獣にはそれなりに強い。

最近、攻撃魔術もちゃんとバリエーションを増やそうと思いはじめた。

湖でのキャンプの再撮られた、ティアマットとのツーショット

の写真がクラス内に流通することになるが、彼は気づかない。クラスを上げて巧妙に隠されているからだ。

名前：Ark（アーク）

身長：????

体重：????

髪色：蒼

瞳色：蒼

名前の意味：箱舟

トレードカラー：蒼

特技：同族殺し

好きな物：????

嫌いなもの：????

趣味：主人の観察。世界の観察

苦手なこと：小さい子の相手（NEW）

得意科目：????

「どんな人？」

ラスティハルトの使い魔で、精霊。最近ラスティへの依存度が増してきた。

ステラと共謀し様々な計画を立てる。最近その影響で紅茶淹れスキルを身につけた。今後はラスティのメイドにでもなるのだろうかという勢いである。

アークのメモ……むしろ最近は日記になりつつある手帳は、学院内ではセットとして考えられているぐらい、学院内でメモを片手に歩き回る姿が人気を呼んでいるらしい。最近の写真サイズのファイルを持っていることが増えた。

ラスティとアルクスの試験を引き分けに持ち込むにあたっての最大の功労者。アークの主人好きが、功を奏したと言える。

名前：T i a m a t t ・ M a x i n a （ティアマツト・マキナ）

身長：152？

体重：???？

髪色：？

瞳色：青・赤

名前の意味：メソポタミア神話の女神「ティアマツト」
トレードカラー：赤

特技：歌（本人は認めないが・力仕事）

好きな物：???？

嫌いなもの：???？

趣味：歌うこと

苦手なこと：勉強・細かいこと・寒いこと（NEW）

得意科目：音楽・実技系科目

「どんな人？」

本編のヒロイン。最近人と話すことに慣れてきた。それでもクラスメイト以外と話すとなると尻込みしてしまうようである。

周囲に振り回されるがままにラスティとの距離を少しずつ縮めていつている。その本心を語ることは無いが、本人に嫌がる様子は見受けられない。

春が終わり夏が始まって、皆からもらったコートに袖を通し続ける。寒がりにしても酷い。

その名の恩恵だからだろうか、泳ぐのが非常に速い。
教会がよく相手にするような魔物には非常に強い。使用している

武装が非常に有効的というのもあるが、戦い慣れているようだ。

名前：Gelt・Arcadius・Finien（ゲルト・アルカシアス・フィンエンス）

身長：160？

体重：47？

髪色：金髪

瞳色：碧

名前の意味：お金

トレードカラー：黄・茶

特技：チエス

好きな物：？？？

嫌いなもの：？？？

趣味：チエス・貯金・資産運用

苦手なこと：荒事

得意科目：歴史・地理等

「どんな人？」

ラスティのルームメイトの貴族。今回は帰郷故に出番は殆ど無かった。

妹の財布の口を握る。彼は妹に小遣いを渡して帰郷していったそ
うだ。

名前：Hais・Gulitie・Shenesvetter（

ハイス・グリティ・シェーネスヴェッター）

身長：176？

体重：63？

髪色：脱色された金

瞳色：薄い茶

名前の意味：熱

トレードカラー：朱

特技：楽器演奏

好きな物：辛いモノ

嫌いなもの：？？？

趣味：十二弦ギター

苦手なこと：？？？

得意科目：どれもそこそこ

「どんな人？」

ラスティたちのクラスメイトで、ゲルトとは幼馴染。今回は帰郷というかフィニエンス家にお泊り故に出番は殆ど無し。

元々は帰郷するつもりは無かったようだが、天敵ポラリスが帰郷しないとということを知るとゲルトの家に行きたいと言い出した。

名前：Stella・Elmia・Winnings（ステラ・エ

ルミア・ウイニングス）

身長：170？

体重：？？？

髪色：灰銀

瞳色：青

名前の意味：星

トレードカラー：白

特技：モノづくり（礼装的なソレ）

好きな物：甘いモノ

嫌いなもの：辛いモノ

趣味：研究、料理

苦手なこと：????

得意科目：魔術関連の教科全般

「どんな人？」

ラスティ達のクラスメイトで、ティアマットのルームメイト。ティアマットの姉役。

人の恋愛事情に興味津津な様子。ラスティとティアマットの距離が縮まっていくのをニヤニヤしつつ見守っている。

魔具関係の部・サークルからは危険人物認定されつつあるらしい。英雄アルクスが魔具を持ちたがらないのも彼女が原因。

クラス女子のまとめ役は彼女であることは周知の事実。ラスティは彼女を副委員長にすればよかったとぼやいていた。

アークと共に湖へのキャンプを計画し、アークの買収に成功する。

名前：Porallis・Iria・Finiens（ポラリス・イイリア・フィニエンス）

身長：160?

体重：????

髪色：緑

瞳色：碧

名前の意味：北極星・北辰

トレードカラー：緑

特技：武技

好きな物：????

嫌いなもの：????

趣味：体を動かすこと（NEW）

苦手なこと：勉強（NEW）

得意科目：体を動かす科目全般（NEW）

「どんな人？」

ゲルトの双子の妹で、ラスティ達の隣のクラスの生徒。優等生的雰囲気であったが、最近脳筋気味であることが発覚しつつある。最近、髪型を変えた。

ティアマットとは早朝に共に鍛錬をする仲。文武両方でライバルといえる関係になりつつある。が、それが確定するまえにもう一つの要素で対立することも確定した。

名前：Alba・Archinam（アルバ・アーキナム）

身長：190？

体重：90？

髪色：朱

瞳色：碧

名前の意味：夕日

トレードカラー：赤銅

特技：????

好きな物：????

嫌いなもの：????
趣味：????
苦手なこと：????
得意科目：????

「どんな人？」

ラスティ達の担任教師。腕をなくす前は相当な槍の使い手であつたらしい。最も、それを知るのは関係者であるようで、一般には知られていない。

アルクスと交友があるようで、既にアルクスとラスティの関係に気づいている。

名前：Undine

ウンディーネ

身長：????

体重：????

髪色：銀

瞳色：????

名前の意味：水の精霊

トレードカラー：青

特技：????

好きな物：????

嫌いなもの：????

趣味：????

嫌いなこと：????

「どんな人？」

学院から頑張れば歩いていける距離にある湖を守護する精霊。実は学院長とは面識がある。

突然の訪問に驚きつつも、湖周辺への宿泊を許可してくれた。最も、ラスティやアークが居たからこそであるが。

アークとは対照的に、子守の方はできるようで、数体の若い精霊が湖で確認された。ラスティに何かしないか気が気でなかったらしいが。

非常に長い間存在していたが、アークと会ったのは初。だがアークには気に入られたようである。

名前：Axel・Archinam（アクセル・アーキナム）

身長：180？

体重：76？

髪色：赤茶

瞳色：碧

名前の意味：加速

トレードカラー：赤

特技：運動

好きな物：御飯、肉

嫌いなもの：？？？

趣味：？？？

嫌いなこと：？？？

得意科目：？？？

「どんな人？」

ラスティたちの一つ上の先輩。アルバの兄の息子（要は甥っ子）。社交的な性格で友人は多いが、特に後輩からの人気が高い。そのルックスや、成績優秀、運動神経抜群ということもあってかファン

も居る程。

ライスが一時的に食堂のメニューに追加された日の出来事がきっかけとなりラスティと知り合った。以後交友関係が続いている。

同じクラブに所属している後輩であるティグリスとは付き合っている。

名前：T i g r i s ・ A r q u i n a （ティグリス・アルクイナ）

身長：168?

体重：????

髪色：茶

瞳色：明るめの茶

名前の意味：虎

トレードカラー：黄

特技：格闘技

好きな物：????

嫌いなもの：????

趣味：????

嫌いなこと：????

得意科目：????

「どんな人？」

ポラリスのルームメイト。元々格闘技系のクラブに入るつもりだったが、ポラリスの誘いにより今の武術全般を取り扱っているクラブに落ち着いている。

ボーイッシュな性格で男言葉も多い。姐御肌系で面倒見がいい。粗野な感じに見られがちだが、家事能力は高く彼氏のために弁当を作っていたりしている。

初々しい反応ゆえによくポラリスにからかわれていたが、最近立場が逆転しつつあるようだ。

名前：Arcus・Reins（アルクス・レインズ）

身長：181？

体重：72kg

髪色：金髪に近い茶

瞳色：アンバー

名前の意味：虹

トレードカラー：灰色

特技：？？？

好きな物：？？？

嫌いなもの：？？？

趣味：剣を振ること

嫌いなこと：？？？

得意科目：？？？

「どんな人？」

フリーランスの剣士で、七年前の戦乱’において英雄と呼ばれるほどの活躍をした。現役時代のアルバと実力が近く、ライバル関係であった。

現在は結婚している。

稀代の天才剣士と称され孤虹の剣士の二つ名を持つ。決して突き技を使わず、弧を描く美しい剣閃を描くことで芸術的剣技とも称される。ただしその習得は異常に困難で、他の剣士は模倣することすらままならない。彼が独自に作り上げた剣技だと思われていたが、彼自身は師より教わったものと語る。尚彼は左・右どちらの腕でも

ほぼ同等の実力を発揮する。

その正体は、ラステイにより剣の手ほどきを受けた‘アル坊’。アル坊が過去に帰り、自分に課せられていたタイムパドックスがとけると即座に師に会いに行った。ラステイがアル少年を見送ってから一分も立たずにかれと再会している。

素直な性格で、ラステイのことを尊敬しているのは昔と変わっていない???むしろ強くなっている。未来より帰ってきた後も鍛錬をひたすら重ね、ラステイが魔術により発動している剣技を体技で成し遂げた。ラステイからは「運動神経は人外」と評される。

過去に見た師の姿を追って、いつの間にか‘英雄’から‘ラステイ’に憧れるようになっていく。彼のようになりたいと、一人称や口癖まで真似しているうちに、直らなくなってしまう???という恥ずかしい過去がある。ただし、気分が乗ってくると一人称が俺から僕に変化する。

ライバル関係のアルバも、アルクスの影響を受けてたまにその口癖が出てくることがある。

いつのまにか戦闘狂……強い者と出会うと手合わせを申し込まずには居られなくなってしまう。「あの頃の純真なアル坊はどこに消えて行っちゃったんだろっな」とは彼の師匠の弁。

新たに登場した魔術・礼装

名前「踏脚」

属性色：緑・赤

概念：足場・加速

移動に用いられる魔術。基本的に武に携わる者が覚えている場合が多い。足場として魔法陣を描き、それを踏み台にするようにして任意の方向に運動エネルギーを得るというもの。

細かい移動にはあまり向かないが、大きく距離をつめたりとったりするのに用いられる場合も多い。なお、ラストイが墮嚙戦の時に非常に高い跳躍をみせたのはこの魔術によるもの。

アークのような魔術の扱いが非常にうまいものになってくると、空中に式を展開しその上に立つという芸当も可能になってくる。

名前「撲殺概念波」

属性色：なし

概念：殴

ヤンデレ化(?)したアークが放った魔術と呼んでいいのかよくわからないもの。

名前「蒼弓(アークver)」

属性色：不明

概念：弓、空

アークが堕ちた精霊を縫い付ける時に使用した。ラスティのものとは違い和弓の形ではなく洋弓の形状をしている。射程・貫通力よりも連射性に富んでいる。最も、能力的に射程や貫通力も非常に高い。

名前「硝子の空」

属性色：不明

概念：時・硝子・次元

アークが使用した切り札とも言える魔術。展開までに多大な隙が出来るものの、実質的に防御手段が存在しない魔術。

周辺の空間の時を止め、次元を一つ落とすことにより高密度の存在概念を持つ硝子状の欠片を生成する。それを一斉に投擲することで敵を殲滅するというもの。世界そのものを受けると言っても過言では無いほどの攻撃力を持ち、これを防ぐには世界以上に強い存在でなくてはならない。いわば世界のあり方そのもの。世界の中でしか生きることのできない存在に、守る手段は存在しない。

名前「流体操作」

属性色：青

概念：液体・形状

ウンディーネが攻撃に使用した魔術。本来であれば単に水の流れを調節する程度でしかない魔術だが、ウンディーネはこれを水を水柱として打ち出すものとして使用した。人間には真似できない芸当である。同じ規模の魔術をしようしようとしたら、違う式でもっと長い詠唱をしなければならぬだろう。

名前「ガンド」

属性色：なし

概念：呪い・杖・狼

ティグリスが使用した攻撃魔術。アクセルから教わったものであるようだ。燃費の悪い使い方をしていたが、威力そのものは高かったようだ。尚、フィンの一撃と呼ばれるさらに物理的力を持ったガンドも存在する。

名前「螺旋廻弾」
らせんかいだん

属性色：緑

概念：螺旋・上昇

ステラが使用した直線状の範囲攻撃魔術。彼女の火力志向もあつてか、攻撃力が非常に高く、半ばオーバーキル気味の火力を見せつけた。ただ、狙いが甘く何度か仲間を巻き込みかけている。

名前「走索」

属性色：緑

概念：走・連・爆

アルバがアクセルの落し物を用いて行使した魔術。元々符の側面に刻まれていたルーン魔術を、中を走らせた術符から打ち込むというもの。俗にいうオールレンジ攻撃を可能にした魔術。

本来であれば意識の集中で他の行動は非常に困難になるのだが、アルバは走りながらも使用して見せた。あまりにも自然体でやってのけたため、誰も凄さに気づいていない。

名前「鎮魂詠唱」

属性色：赤・青・緑

概念：浄化

アルバが死神を葬る際に使用した魔術。死霊系の魔物に多大な効果がある。本来であれば教会以外で使い手の少ない魔術であるが、アルバは教会騎士に知り合いがいるようで、その人物から教えてもらったのだという。

名前「空の世界」

属性色：不明

概念：領域・虚・視

アルクスとの試験に用いたラスティの奥の手。屋上のほぼ全域に敷いた魔法陣により場を領域化し、ありとあらゆる能力を上昇させる。その効果は莫大だが、準備するまで時間がかかり、またお金も非常にかかる。

名前「虹奏咲」
にじそうさく

属性色：全色

概念：二次・虹

アルクスが使用した付加系の魔術。彼の代名詞でもある。刀身に七色を纏わせて、概念的攻撃力を上昇させる。また、暗示的な意味

も込められており、むしろそっちの方が主。暗示効果により、アルクスの身体能力が劇的に上昇する。

「虹渡」
にじわた

アルクスの持つ打ち刀。武器としてのスペックはラステイのものと同じだが、概念武装としてはやや劣る。

柄だけの形態で刀身は任意で出せるが、アルクスは鞘をオーダーメイドして常に刀身を出しているようである。

今までに登場したエネミ

魔獣たちの分類について。

区分：魔獣、幻想種、世界種などの区分。

界：動物界、植物界、霊体界などの区分。

類：どのような生命体であるかの区分。

素在：何が素になった存在であるかということ。

晶：どの色の結晶と相性がいいか。これは生息地にも関係してくる。

種：その種の呼び方。

『オチガミ
堕嚙』

区分：「魔獣」

界：「動物界」

類：「半死生命（人造）」

素在：「人間」

晶：「不明」

種：「オチガミ」

・七年前での戦乱時に出現した単独戦闘用の魔獣。世界各地に出現し、世界を混乱に陥れた。七年経った今尚、その存在にトラウマを持つものが多い。

・筋肉が肥大化したヒトガタのシルエットを持ち、体色に血色は無い。

・異常なまでの筋力を持ち、筋持久力も通常生命の法則を無視している。これは、体の組織が幻子（原子の模造品。魔石はこれら幻子の結晶体）によるたんぱく質で構成されている為である。

・頭部に拘束具が付けられており、封印されている。これが素体

の思考力を奪い、人間を魔獣に仕立て上げる要因ともなっている。この拘束具に血液を塗りつけることで栄養・概念のみを取り込んで生命を維持するが、コレでは満腹中枢に刺激がいかず、墮嚙の空腹が満たされることが無い。

- ・全ての行動理念が食べることに基づいており、墮嚙の食事を妨げたりすると大量の己憂部をけしかけられる。初めからそれを行わないのは、墮嚙がそのようなことを考えられないということと、獲物の鮮度上の問題である。

- ・物語中に登場した墮嚙は、体に結晶を纏っており、スキル「神秘層」を保有している。
- ・ラスティたちと対峙した際には、
に左腕を切り落とされ体液を損失していたため、ステータスがダウンしていた。

SKILL

「共振現象」：空气中の魔力を媒体に、自身の強い感情を相手に直接ぶつけるもの。墮嚙のこれに志向性は無く、強力な感情の波が周囲にはら撒かれる。

相手のステータスをダウン。攻撃判定時、相手の足をすくませる確立が大幅に上昇。

(尚、これが原因で、七年前の戦乱時には多数の精霊が暴走し、墮ちた。オチガミの名前に「墮神」が掛けられている理由でもある)

「視覚共有」：己憂部から送られてくる多数の視覚情報で周囲を認識する。己憂部が離れていても関係が殆ど無い。

ラスティ&ティアマツトとの戦闘では、最後にラスティに視覚共有を阻害され、周囲の情報が認識出来ないままにティアマツトに止めを刺された。

「捕食再生」：対象の血液を拘束具に振り掛けることにより、肉体的損失を回復させる。体力全快時には、ステータス上昇。

失った体液が戻ることがなかった為、との戦闘で体液を失った墮嚙は、活動停止まではいかなくてもステータスダウンが発生した。

「狂化」：全ステータスを上昇。理性を失うというよりも、本能（食欲）に忠実な行動をとるようになる。墮嚙が捕食できないと本能で悟った場合は、逃走する場合がある。これにより、七年前の戦乱では墮嚙の討伐が困難を要した。

「神秘層^{ベール}」：結晶を体に纏っているため、幻想に耐性を持つ。墮嚙のコレは、精霊クラスの魔術行使で無くては抜けないほどのベールだった。

通常の墮嚙には存在しないスキル。（現時点で）物語中に出てくる墮嚙のみに存在した。故に前衛が足止め、後衛が大火力の魔術でダメージ という、当時墮嚙への対処法とされていた戦法が通用しなかった。

????????????

『^{コウベ}己憂部』

区分：「ゴーレム」

界：「動物界」

類：「幻想生命（召喚創造）」

素在：「人間」

晶：「不明」

種：「コウベ」

・「katuke katuke kiticheto」喰らえ

よ喰らえ、我等を満たせ」という言葉をしきりに繰り返すことで知られる墮嚙の使い魔のようなもの。墮嚙に召喚されて使役される。

- ・ 固体ごとの能力は非常に低く。雑魚。だが異常なまでに群れをなして行動するため、七年前の戦乱では物量に押されて命を失う者が後を絶たなかった。

- ・ 餓死寸前の人間のようなシルエット。頭部は風船のように膨らんでおり、ソコが弱点となっている。

- ・ 実は墮嚙でなくともコレを召喚して使役することが出来るが、使役に当たり必要な精神力が能力の割りに高すぎるため、実質墮嚙専用の召喚ゴーレムとなっている。

- ・ 一度に大量の獲物を仕留めた際。保存食を作っておくようになっている。これにより、墮嚙の生存性・戦闘続行性が向上した。

SKILL

「視覚共有」：頭の無い墮嚙の代わりに大量の己憂部が視覚の代わりを担う。そのため墮嚙の視界に事実上死角が存在しなくなる。

ラストイ&ティアマットとの戦闘の際では、ティアマットが墮嚙に止めを刺す前に視覚共有を阻害された。

「血液保存」：獲物の血液を保存しておくことが出来る。ためた血液は保存食となる。

との戦闘時に二つ保有。逃走時に一つ消費した。そのため墮嚙の活動が停止することが無く、学院に被害が出ることになる。

??????????

『墮ちた精霊
?????』

区分：「世界種（接続切れ）」

界：「霊体界」

類：「幻想生命」

素在：「なし」

晶：「緑・疾風」

種：「精霊」

・何かしらの、異常に強い感情を受けた際に、感受性の強い精霊が精神を崩壊させた際に発生する。一応世界種の区分だが、世界の恩恵は無くなっている。

・階位の高い精霊ほど自我が強いため、堕ちることは少ない。この堕ちた精霊は墮嚙の共振現象を受けて堕ちたと思われるが、アークは墮嚙のソレをもとめていなかった。

・緑の体色のワイバーンに翼が余計に一对生えたシルエツト。ちなみにこの姿は精霊が最も力を発揮できる姿であり、理性があつたころは人に化身できていたと思われる。

・堕ちた精霊は、世界との縛りが消えるため自由な行動（暴れる）をとるようになるが、基本理性を失うため複雑な魔術が行使できなくなる。

・非常に能力が高く、ウンディーネとも互角の戦いを演じていたが、怒り狂ったアークの前に手も足も出なかった。

SKILL

「詠唱不可」：言語を失ったことにより、複雑な術式が起動できなくなる。

「狂化」：身体能力を全体的に上昇させる。そのかわり理性を損失。

カゲロウ
『禍外狼』

区分：「魔獣」

界：「動物界」

類：「変異生命」

素在：「狼」

晶：「属性四種（赤・青・黄・緑それぞれの属性色の固体が存在するということ）」

種：「禍外狼」

狼がミスト域 空气中に高濃度の魔力が霧になったもの の影響を受けて変異した魔獣。身体能力や寿命、知能が相当高まっており、存在年数の長い禍外狼は人語を解する固体すら存在するという報告がある。尚、繁殖能力は極めて低い。

シルエットそのものは狼を単に巨大化させたもの。毛皮の色は獣であったころの毛の色と、その狼が魔獣化した場所の属性職が混じっている。年齢を重ねるごとに属性色の毛が増え、最終的には全身の毛の色が属性色のものになる。

基本的に攻撃性の少ない魔獣で、人間に対しては自衛以外で戦闘行為を行わない。ただし、よほどの空腹であればその限りではない。赤の属性色の禍外狼は、高い筋力を持ち強靱な顎を持つ。

青の属性色の禍外狼は、特筆するほどの特徴は無い。あえて言うならば、希少性が高い。

黄の属性色の禍外狼は、硬い表皮を保有する。

緑の属性色の禍外狼は、高い運動能力を持ち空気の流れを感じる能力があり、回避に優れる。

S K I L L

「陽炎発生」：禍外狼の代名詞とも言える能力。全身を包むように陽炎を発生させ、相手の視覚認識を阻害する。これは禍外狼特有の能力というわけでもないが、これを保有する魔獣で最も有名なのが禍外狼であるというだけである。

回避判定に常に有利な補正がかかる。禍外狼の戦意と共に補正は上昇する。

「温度感知」：赤の属性色限定の能力。赤外線センサーのような皮膚感覚が、周囲の生命の体温を感じ取る。熱や冷を利用した魔術に対し反応速度が増加。また、幻術の類で獲物を見失うことが無くなる。変わりに、視界外に高熱源を感知した場合、思わず反応してしまふという弱点にもなっている。

「硬化」：黄の属性色限定の能力。固い皮膚が、ある程度の刃物を防ぐ。斬撃や刺突系の武器に対して、防御判定が大幅に増加。ただし、運動性はやや低下する。

「気流感知」：緑の属性色の限定の能力。その繊細な体毛の感覚が、気流の流れを感じ取る。

視界の範囲外からでの攻撃に対し、反応が可能になる。回避判定に優位に働く。

????????????

『霧軀炉（人）』

区分：「死霊種」

界：「霊体界」

類：「思念生命」

素在：「人の負の念」

晶：「なし」

種：亡霊（人）

土地の魔力に固着した人の思念が、時間をかけて集まり魔物化した存在。本体は鬼火で、そこから作り出される骸骨の体は精霊で言うところの化身に近い。損傷をうけるとすぐに再生するが、その際に自身の存在概念を削る。半実体である霧躯炉は、存在概念をすり減らしすぎると消滅してしまう。

戦場跡や遺跡によく出没する魔物だが、その思念が結晶体を持つ魔獣に憑いて行くことで戦場跡でもない場所にも出現することもある。こつこつとした霧躯炉は、基本は教会騎士団に駆除される。彼らの持つクロスウエボン十字兵装は、（十字架関連で）死霊種の弱点「浄化」概念を保有するため有効な攻撃手段になるのだ。

見習い騎士が実戦訓練を行う相手で、最も多い魔物でもある。そのため教会騎士は、皆死霊種 特に霧躯炉に対してかなり上手い立ち回りを見せる。

存在規模の短い霧躯炉は、その能力値が非常に低く、武器を持たせれば一般の村人達が倒せるのではないかというほどに弱いものすら居る。だが存在規模の大きい固体は、耐久性や身体性能が高く、武器を扱う技量すら持つようになるため、戦いなれた騎士ですら一対一での戦闘を嫌う。過去には、当時の剣豪と互角に切り結ぶ固体も確認されている。

SKILL

「生命探査（人）」：生きるものを感知する能力。霧躯炉は生きた人間を感知し襲い掛かる。体内の血液に多量の幻子含有する（含有率が高い）人ほど狙われやすい。

「死霊の声」：死霊種特有の能力。魔力を媒介にした声を周囲に放ち、死霊種以外の存在を追い払う。これは魔を音として感じることの出来る魔物や魔獣、幻想種・世界種が聞き取ることが出来、その不快感に死霊種以外の存在は逃げていき、逆に死霊はよってくる。

尚、音を聞かない存在には効果が無く、極稀に人しか狙わないはずの霧躯炉と魔獣が戦っている光景を見ることが出来る場合がある。

「身体再生」：自らの存在をすり減らし、欠損した体を修復する。

何かしらの概念を持たない攻撃では霧躯炉の本体（鬼火）に攻撃を仕掛けることが出来ないため、通常武器で戦う場合は、この身体再生で存在をすり減らしきるまで霧躯炉を攻撃し続けなければいけない。

「死神の衣」：一定以上の存在規模を持つ霧躯炉が使用する。黒い衣を纏って、弱強度の魔術を無効化する。尚、規模次第では強度が低くとも貫通可能。死んでいった人々の信心深さが強いほど、強度が増加する。

「死神の鎌」：一定以上の存在規模を持つ霧躯炉は使用する。黒い大鎌を振るう。人々の中の‘死神’のイメージが元になっているため、死んでいった人々の信心深さが強いほど、この死神の鎌は強化される。

「存在規模反映」：自身の存在規模が強大であればあるほど、身体能力が増加する。また、武器を扱う技能も増加するが、それは死んでいった人々の技を再現しているに過ぎない。

断章・影の君（前書き）

いつかどこかの俺の世界の「裏」にあたる影を連載開始

断章・影の君

「まさかハルバルト学院に行くことになるなんてね」

白を基調とした部屋の中、純白のローブを身にまとった少女が椅子に腰かけながらひとりごちる。彼女が向かう机の上には、手紙と思しきものが拡げられていて、幾度もそれと睨めっこを繰り返していた。

「まあ、それはもう諦めるしかないだろ。……というか聞きそびれてたんだが、結局何しに行くんだ？」

その部屋の片隅、一角にある本棚の前に立っていた一人の男が、少女にそう問いかけた。身長は高く、白髪に上下白い簡素な衣服を着込んでいる。その肌の色のこともあって、全身白と言ったような装いである。

男の問いかけに、少女はため息をつく。睨めていた手紙から視線を外し椅子に深く座り込むと、ゆっくりと答えた。

「講演会よ講演会……」

「お、そっか、‘マスター’は最年少導師……だもんな、これが」

妙にマスターの部分強調して、男が軽くおどけて見せる。

「でもある意味不思議なもんだよな。だって学院の生徒ってなると、同年代ばかりってことだろ？　なあ、緊張とかしないのか？」

「その質問より先に、大人相手に話すよりやりやすいと思うべきね」

「む、それは確かにそうだな」

少女の指摘するような物言いに、男の言葉はつまる。しばらくの間ができる。

すると、ドア越しに別の少女の声が聞こえてきた。どうやら何か持ってきたようである。それに反応して、本棚の前から男は扉に向かって歩き始めた。

「戻ってきたみたいだな。じゃあ俺はちょっと行ってくる」

「ええ、行ってらっしゃい」

少女に見送られるようにして、男は後ろ手に手を振りながら歩む。扉の前まで歩むと、ゆっくりと開く。

「おかえり」

「ただいま戻りました」

そういつて丁寧にお辞儀をした、扉の向こうの少女。男の視界に、淡い空のような色合いの髪が入り込む。男は先に少女を招き入れるように、ゆっくりと身を引いて、それに合わせるように少女は部屋に入り込んでくる。

「俺は別用でちょっと出かけてくる」

「はい。行ってらっしゃい、さん」

そうしてもう一人の少女に見送られるようにして、男は部屋を後

にした。彼の背中の方で、扉が閉まる。

木材特有のやさしい響きを聞き届けてから、男はつぶやいた。

「影……か……」

先ほどまでとは打って変わった声の表情。その暗さは屋内の白さに不釣り合いで、だからか周囲が少しばかり暗くなるように感じられる。

一歩、踏み出した。

「そこに、俺はいるんだろうかな、これが」

オーブニング「鏡写しになりえずに」

夏休み、それは学院に通う少年少女たちが待ち望む長期休暇。

夏休みの宿題。それは学院に通う子供たちが敬遠してやまない課題の山。それを効率よく消化できる者は夏休みを安らかに終え、それが出来ぬ者は終わり間際に必死にその山と向き合うことになる。それは、彼らにも適用されるのであった。

「ラアステイイ！！ 宿題写さしてくれ！！」

「ちよつと待て帰ってきて第一声がそれかよ!？」

夏休み終了前日、日が高く上った昼食頃にゲルトの実家から帰ってきたハイスとゲルト。ハイスは寮室に荷物を投げ入れると、全力疾走でラステイ達 というよりラステイを探した。そして食堂でいつもの面子で昼食をとっている光景を確認すると、駆け寄ってラステイに宿題を要求。当然、ラステイの突込みが入る。

「あ……宿題……」

六人掛けのテーブルにラステイと向かい合うように座っていたティアマトが、ハイスの言葉で思い出したかのように呟いた。そしてゆっくりと、首だけを隣に座っているステラに向ける。ティアマトと目が合ったステラは、眉をひそめつつ困ったように微笑んだ。

「まあ、わたしは終わってるからいいけど……丸写しじゃ駄目だから、要点を教えながらにするよ?」

「つつかハイス、ゲルトの家でやってこなかったのか?」

「いや……まあ、オレもやるうとは思ってたんだがよあ、部屋に置
きっぱで行っちまったんだよ」

「で、ゲルトは？」

「課題の内容は教えてくれたが答え見せてくんねえ」

あいつ変なところで敵しいんだよ。そう、項垂れてハイスは言った。
彼の乱雑に伸ばされた髪がそれに伴って彼の表情を隠し、なんとも
いえない不気味さを醸し出す。そんな関係のないことをラスティは
考えていた。

「あ、皆さんお久しぶりです！」

そんなハイスの後方から、非常に明るい様子でゲルトの声が響く。
そんな彼の言葉に、皆も同じように久しぶりと返す。

綺麗な金髪をなびかせて、相変わらず地味な色合いの服装に身を
包んで表れる彼は、ハイスの隣に立つとラスティに向けて言った。
にこやかないっつもどおりであるはずのその表情に、言い知れない威
圧感を、ラスティは感じた。

「早速ですがラスティさん、ハイスさんに宿題見せちゃ駄目ですよ」

「お、おおう」

「ま、待て待つんだゲルト、ラスティ！ オレにあの量の宿題を一
日でやれというのか！？」

「大丈夫ですよハイスさん。夏休み後の初回授業での提出のものを

後回しにすれば、十分間に合います。がんばってください」

必死に抗議をするハイスに対し、ゲルトの無慈悲な言葉が突き刺さる。そのにこやかな圧力を前に、普段は威勢のいいハイスも何も言うことができないでいる。だが、彼はそれでも諦めない。

「つく……ちよいと他の連中あたってくんぜ」

そして駆け足で食堂から去っていくハイス。そして彼と入れ替わるように、食堂に一人の少女が姿を現した。動きやすい、黒に緑のラインの入った服装に、彼女のトレードマークともいえる輝く緑の髪。それはゲルトの双子の妹ポラリスだった。

彼女もまた人を探していたようで、目的の人物を見つけると、ラストイ達のもとに駆け寄ってきた。

「あ、兄さん、お帰りなさい。今戻ったのですか？」

「うん、そうだよ」

髪の色の影響からか、似ても似つかない双子。この夏休み実家に帰らなかつた彼女は、ゲルトに家の様子などを訪ねていた。その様子をラストイは頬杖について眺めている。

そうして会話を交わしている最中、ゲルトが気づいたように言った。それは、ポラリスには死刑宣告に近い意味を持つ言葉だった。

「ポラリス、宿題、ちゃんと終わらせた？」

「あ……………」

瞬間、硬直した。

それで彼女の状態が理解できたのか、ゲルトは大きくため息をつく。そしてまたいつものような笑顔を浮かべて、宣告した。

「そっか……じゃあ今日は図書館に行こうか」

「……はい」

諦めたように、彼女は俯いた。心なしかその髪の毛の輝きが、僅かばかり失せたように思われて、それを見たラスティが僅かばかり首を傾げる。

そしてゲルトは、これから忙しくなるので失礼する、という旨の言葉をラスティ達に告げた後、ポラリスを連れて去っていった。

その後のテーブルには、何とも言えない沈黙が流れる。

「ゲルトさんは、思いのほか厳しい方だったんですね」

ようやく発言したアークの言葉に、ラスティたちは同時に頷く。

そして顔を見合わせると、それが無かったかのように話題を変えた。

「そういえばラスティくん、夏休み忙しかったけどちゃんと終わらせられたんだね。……って、あれ？ 何で忙しかったんだっけ？」

「ん？ ああ、まあ色々あったんだよ、これがな。とりあえず、コツコツやっとならば何とかなるってことだ。（それにアークが居れば百人力ってね）」

ステラの問いに対し、少しばかり寂しそうな声色で、そして笑いつつ返すラスティ。アークが彼の言葉にうなずいて肯定を示し、ティアマットは相変わらず迫り来る宿題地獄に緊張の面持ちを見せていた。

そんなティアマットの表情を見ながらラスティは言う。

「つつかまず、ここに来るまで宿題全くやってないティアマットが問題だろっ」

「うう……そうだけど」

「まあまあラスティくん、あんまりティアマットちゃん苛めないで」

「い、苛めてはないさ」

ラスティの言葉に縮まってしまふティアマット。そんな彼女を庇うように、だがからかうようにステラが援護を入れる。

そうしてティアマットの全く進んでいない宿題に関して会話を交わしていると、ふとステラが思い出したように椅子の下に置いていたバッグに手を伸ばした。そしてその中から手帳のようなものを取り出すと、笑みを浮かべて話し始めた。

「そうそうそうだ、すっかり忘れてた。ねえねえ、ちょっとね面白い噂聞いたんだけどね？」

「ん……どんなのだ？」

会話の話題がつきかけていた中、ステラが噂話を新たな話題として持ちかける。ラスティはそれに興味を示し、ティアマットも彼女にその視線を向けている。アークは相変わらず、観察するように三人を見回していた。

「それがね、夏休みが始まる前後ぐらいかな？ 教会騎士団のステイリア・アマルティア聖槍騎士団長が学院に来てたらしいの」

「（アーク、有名人情報よろしく）」

「（ステイリア・アマルティア、教会騎士団の一つ聖槍騎士団の騎士団長に若くして上り詰めた女性です。ステラさんが尊敬しているアルナ導師の実の姉でもあります）」

「ステイリア騎士団長が？」

「へえ、そんな有名人がなんでまた」

元々教会に居たティアマットが驚いた様子で反応し、たった今アークから教えてもらった人物をさも知っていたかのようにラスティが驚いたような反応をする。それに満足してか、ステラは調子を上げて話の先を進めた。

「なんでもアルバ先生にお届け物があつたんだって。アルバ先生の義手は、実はアルナ導師の作品でもあつてね。ほら、春の時のアレで先生義手壊れちゃったでしょ？ だから新たに依頼してみたいのよね。それで送り届けるのにわざわざ騎士団長が来たみたいなの。まあ、新聞部の友だちにあとから聞いたんだけど、騎士団長は任務でこっちの方に来てたらしくて、そのついでに来たみたい」

「すごいな新聞部」

ラスティが新聞部の情報収集能力に感心していると、何故かステラがその笑みを深める。そして前かがみになって、皆に顔を近づけるよう促すような仕草を試みさせた。それに習って、皆は顔を近づける。

「そしてね、ここからがホントに面白いとこなんだけどね？ 騎士団長を発見した新聞部の子たちが、使い魔使ってアルバ先生の部屋を覗……いてたらしいんだけどね」

「言い換える言葉見つかなかったんだな」

「なんとそこで、あのアルナ導師が学院祭にゲストで来るのがわかったの！！」

そう言う彼女の顔は上気していて、声こそ抑えられているものの十二分に興奮していることが見受けられた。

話を聞いたラスティは大きく背伸びをするようにして椅子の背もたれに体を預けると、ステラの話に呆れたように顔をしかめ、首をかしげた。

「というかよくそんなことできたな。下手すりゃあ怒られるじゃ済まないことだろうに」

「まあ、そこが新聞部のすごいところだと思うよ。うん、だからあの時はホント大変だった……」

そしてステラは、少し昔のことを懐かしむような表情を見せた。そのことに対して、ラスティとティアマットは首をかしげるだけである。二人の視界から外れたところで、アークはその事情を知っているというふうには微妙な表情を見せていた。

「ま、それはいいとして、ステラにとっては重大ニュースじゃないのか？ お前大ファンだったろ？ アルナ導師の」

ステラがアルナ導師を尊敬していることは結構有名な話で、彼女

がいつも白を基調とした衣服を身に纏うのもアルナ導師を尊敬していることだという。

そんな彼女は、ラスティの言葉に対し強く頷いた。

「もちろん！ 絶対直接会ってサインもらってみせるんだから！

あ、でももしかしたら打ち合わせとかに一回来るかもしれないからその時を狙ったほうが

」

そうしてステラは、いかにしてアルナ導師と接触しサインをもらおうかということに思考を巡らせ始めた。そんな彼女の様子を見て、苦笑しつつラスティは言う。

「本当、好きなんだなあ」

「でも、ステラらしいと思うよ」

そうしてしばらく、二人が止めるまでステラは思考に没頭しているのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137x/>

いつかどこかの俺の世界

2011年12月7日01時49分発行